

MAJORで吾郎の兄になる

灰猫ジジ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の力で漫画「MAJOR」の世界に転生させてもらうことになった依田龍一。

MAJORの世界に行くのであれば野球で二刀流を目指し、茂野吾郎の双子の兄となり、ピンチを救うことを決意する。

神様はそんな龍一にある特典を授ける。

よくある話。でもこれからどうなるかは分からない話。

題名の横に「※」と入っているときは大地のステータスを載せています。

目次

設定集

基礎能力と特殊能力

序章 MAJORの世界によるこそ

プロローグ

第一章 幼少期編

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話※

第七話

第八話

第九話

第十話

第十一話

第二章 リトルリーグ編

第十二話

第十三話※

第十四話

第十五話

第十六話

第十七話

第十八話

第十九話

76

64

49

38

26

19

11

6

1

86

99

115

130

145

154

166

178

196

207

217

226

第二十話
第二十一話
第二十二話
第二十三話※
第二十四話
第二十五話
第二十六話
第二十七話
第二十八話
第二十九話
第三十話
第三十一話
第三十二話

234
245
254
263
271
279
290
298
305
311
318
326
332

第三十三話
第三十四話
第三十五話
第三十六話※
370 間話 テーブルテニスの王子様
第三十七話
第三十八話
第三十九話
第四十話
第四十一話
第四十二話
第四十三話

340
348
355
362
379
386
392
401
407
414
422

513	間話	海堂附属中学からのスカウト	
	第五十四話※		506
	第五十三話		499
	第五十二話		493
	第五十一話		486
	第五十話		479
	第四十九話		473
	第四十八話		466
	第四十七話		460
	第四十六話		453
	第四十五話		442
	第四十四話		432

第三章 中学生編

	第六十五話		616
	第六十四話		602
	第六十三話		594
	第六十二話		584
	第六十一話※		575
	第六十話		565
	第五十九話		556
	第五十八話		545
	第五十七話		535
	第五十六話※		528
	第五十五話		522
	第六十六話		627

第六十七話※ | 642

間話 オリジナル変化球の習得

661 | 第七十七話 | 770

間話 海堂高校野球部セレクションの

裏側※ | 672

第四章 高校野球編

第六十八話 | 679

第六十九話 | 691

第七十話 | 702

第七十一話 | 712

第七十二話 | 720

第七十三話 | 730

第七十四話 | 742

第七十五話 | 751

第七十六話※ | 758

第七十七話 | 770

間話 期末テスト | 779

第七十八話 | 789

第七十九話 | 799

第八十話 | 808

第八十一話 | 816

第八十二話 | 823

第八十三話 | 832

第八十四話 | 842

第八十五話 | 850

第八十六話 | 859

第八十七話

867

第八十八話

876

間話 テーブルテニスの王子様②

883

第八十九話

892

第九十話

904

第九十一話

913

第九十二話

922

第九十三話

931

第九十四話

940

第九十五話

950

第九十六話※

965

設定集

基礎能力と特殊能力

基礎能力と特殊能力のステータスの基準です。

少しずつ変えたりもするので、こんな感じなんだねー。くらいにフワツとした受け入れ方をしてくださいと嬉しいです。

◇基礎能力の基準

S＋：メジャーリーグでトップレベル

S：メジャーリーグで活躍するレベル

S－：メジャーリーグの中の上レベル

A＋：3Aでトップレベル

A：3Aで活躍するレベル

A－：3Aで中の上レベル

B＋：2A以下でトップレベル

B：2A以下で活躍するレベル

- B | : 2 A 以下の中の上レベル
- C + : 高校野球でトップレベル
- C : 甲子園で活躍するレベル
- C | : 高校野球の中の上レベル
- D + : シニアリーグでトップレベル
- D : シニアリーグで活躍するレベル
- D | : シニアリーグの中の上レベル
- E + : リトルリーグで全国トップレベル
- E : 強豪リトルリーグチームでレギュラーレベル
- E | : 強豪リトルリーグチームのベンチレベル
- F + : 弱小リトルリーグチームでトップレベル
- F : 弱小リトルリーグチームでレギュラーレベル
- F | : 弱小リトルリーグチームでそこそこレベル
- G + : 素人でトップレベル
- G : 素人レベル
- G | : ど素人レベル

◇特殊能力の基準

・対象となる能力

共通：怪我しにくさ

投手：対ピンチ、対左打者、打たれ強さ、ノビ、クイック、回復

野手：チャンス、対左投手、キャッチャー、盗塁、走塁、送球

S：金特獲得条件達成レベル

A：かなり良い

B：良い

C：少し良い

D：平均的

E：少し悪い

F：悪い

G：かなり悪い

※何もない場合は「D」が基準となります。

※これに「+」と「-」が付くことで、多少プラスやマイナスされているかと思っ
てくださいます。

◇コツと取得条件の緩和について

パワプロ には特殊能力を取得する際にコツというものを得ることによって取得するときの必要ポイントが下がります。

コツの基準は下記です。

Lv1 : 30%減

Lv2 : 50%減

Lv3 : 60%減

Lv4 : 70%減

Lv5 : 80%減

ただ、すぐにコツを掴むのは面白くないので、それまでに取得条件を緩和する必要があると決めました。

イメージでいうと「ん？コツを掴んできたかも？いや、でもまだまだわからないなー」といった状態のことです。

多分そんなに出すつもりないので、気にしないでください（笑）

—————

日本プロ野球は基準に入れないようにしました。

理由としては、「NPBはそんなに低くないだろー！」であつたり、逆に「NPBのレベ

ルはそこまでではないだろ！」といった意見がありそうだからです。

そして例えばG+からF-のように、アルファベットが変わる部分に関してはある程度の明確な実力差があると思ってください。

この基準はちよつとしたことで簡単に変わるので、あまり批判はせずに参考レベルで受け止めてくださると本当に嬉しいです。

この小説が終わった段階で書いてあった内容が正式な基準としての採用だと思ってください（笑）

設定集の公開って思っている以上に考えたりするんですよ。

私みたいに誤字が多い作者だと、設定に矛盾が出そうで（笑）

そのときは優しく教えてもらえると嬉しいです！

序章 MAJORの世界にようこそ

プロローグ

『依田龍一さん、あなたにはこれから転生してもらおうことになりました』

龍一にはなにがなんだか分かっていなかった。

(転生?俺は死んでしまったのか? 一体どうやって?そもそも俺は何をしていたんだっけ?)

『混乱するのも無理はありません。あなたは先日56歳という寿命を全うされました。とても素敵なご家族だったのでですね。』

皆様に囲まれて見送られていましたよ。そんなあなたが転生するという機会を得たのです』

(そういうことか。全く覚えていなかったな。ところであなたはどなた様でしたでしょうか?)

『私はあなたの世界という神という存在です。今回あなたにはあなたの世界で昔流行っていた【MAJOR】という世界に転生していただきます』

(か、神様?! 大変失礼いたしました!! MAJORという漫画は私が読んだことがあ

る、あのMAJORでしようか？)

『大丈夫ですよ。むしろそうやって丁寧な話し方になるのは日本人の美德ともいえる部分ですね。MAJORに関してはその通りです』

(しかし……私は転生して何かをしなければならぬのでしょうか?)

『いいえ、あなたはあなたがしたいことに関して頑張ってもらえれば大丈夫ですよ』

(分かりました。それなら……)

龍一にはどうしてもやりたいことがあった。野球をやっていた龍一は、MAJORが本当に好きな漫画であり、アニメまで観て覚えているのであった。

そこで茂野吾郎——旧姓本田吾郎——がいつも逆境に立ち向かっていくところが好きでもあり、歯痒くもあつたのである。

俺があの世界にいたら……絶対に彼を助けるのに！と。

(私は主人公である茂野吾郎を助けたい。彼の身内となつてこれからを見守っていききたい)

『分かりました。では、転生先は茂野吾郎の双子の兄にしましょう。あといくつかあなたには特典を授けます』

(え……何個も頂いていいのでしょうか?)

『ええ。あなたは実況パワフルプロ野球というゲームはご存知でしょうか?』

龍一は知っている。人気ゲームの実況パワフルプロ野球——通称パワプロ——はやり込んでいて、サクセスと栄冠ナインがすごい好きだった。

『その成長ステータスを特典の1つとして授けます。もちろん多少のアレンジはさせてもらいますけどね。これを使えば相当のアドバンテージになるでしょう』

(ありがたいごさいます。それはぜひ欲しいです)

『他に原作知識と前世の知識は残しておきますね。もちろん余計なものはこちらで省いておきますが』

龍一は何が省かれているのかが気になったが、それを知ったとことで何も出来ないのは分かっているで聞かないでおいた。

『最後に、これだけは気付けば覚醒するような特典を渡しておきますね』

神がそう言った途端、龍一は意識が薄れて何も考えられなくなっていた。

頭の中にパワプロの成長に関する内容が刷り込まれていく。



・パワプロのステータス特典について

従来のパワプロはステータスGとSとなっており、ポイントを割り振ることで成長で

きるようになっていく。

今回はG―から始まり、S＋で終わるようになっていく。

【ステータス基準】

S＋：メジャーリーグでトップレベル

S：メジャーリーグで活躍するレベル

S―：メジャーリーグの上レベル

・
・
・

G＋：素人でトップレベル

G：素人レベル

G―：ど素人レベル

他にもパワプロで使う特殊能力——いわゆる特能——などもポイント割り振ることで習得できる。

能力の習得数やステータスの上昇具合によって習得ポイントは増えていく

ピッチャーとしてのステータスも同じである。

能力の習得に関しては野手と二刀流にする際に必要なポイントは別のため、ポイント数が増えていくことはない。

ただし、速球と肩力に関しては比例するものなので、どちらかに集中していた方がいい。

変化球に関しては、種類数や曲がる精度に応じてポイントが増えていく。

これはオールドスタイルにするか、そのときの流行に合わせるかで変わってくる。

第一章 幼少期編

第一話

「じゃあね、次は由香ちゃん！ 大人になったらどんなお仕事したいかなあ？」

「んーと、んーとお……せんせい!!」

「へえ……由香ちゃんはせんせいになりたいんだ。じゃあ吾郎くん！」

「オレ？ なんだ。せんせ、知ってるじゃん。」

おとさんと同じプロ野球選手だっていつも言ってるじゃーん!!」

吾郎は野球グローブに軟式ボールを合わせながら、笑顔で答える。

「そっか、吾郎くんは本当に野球が好きなのね」

吾郎はおとさんである本田茂治を心の底から尊敬しており、自身も野球選手になるのが当たり前だと思っていた。

そして双子の兄である本田大地も同じ気持ちで野球選手を目指していた。

「あつたりまえじゃん！」

「じゃあ、せんせいと野球はどっちが好き？」

担任である桃子先生の突然の質問に吾郎は顔を真っ赤にして俯く。

これは仕方ないことである。桃子先生は幼稚園の中でも若い先生であり、その美貌から園児だけでなくその父親までにも人気であったから。

「あ、ゴロちゃん赤くなつた。せんせの方が好きなんやー」

友達にからかわれて「ち、ちがわい!!」とムキになつて否定をして持つていた軟式ボールを投げる吾郎。

従来であれば少年に当たつて、泣く場面のはずだったのだが。

「吾郎。軟式ボールを投げるのは危ないよ」

兄である大地が咄嗟に捕つて、友達にぶつかるのを防ぐ。

吾郎は「だつてこいつがさー!」と言い訳しているが、大地には分かる。

(せんせも好きだよ。だつて死んだおかさんに似てるもん)

きつとそう考えているのであろう。大地も双子の兄として、桃子先生に対して母と似ているが故の感情は持つている。

それは転生前に何歳だったからということは関係ない。

母への愛情は何歳になつたとしても決して失われるものではないのである。



「さよなら！ せんせーっ！」

「また明日ね、よっちゃん！」

幼稚園の迎えの時間となり、みんなが帰っていく。

そんな中、最後まで吾郎と大地は残って壁当てをしている。

「ツーストライク！ いくぞ！ 大地！」

「よし来い！」

「ピッチャーふりかぶって第三球——投げました！」

ボコン！！

大地が振ったバットは空振ることになり、ボールは壁に当たる。

「ストライーク！ バッターアウトーっ！」

桃子先生が箒を左手に持ち、右手を大きく上にあげてサムズアップをする。

大地は空振りしたことが悔しくて、歯を喰いしばっているが、吾郎は納得した顔をしていない。

「ダメだよ！ 今のは大地が空振りしたけど、ど真ん中だもん！」

「へえ……ちゃんとコースにいかないといけないんだ？」

「おとさんが教えてくれたのさ。『ばーちゃんトレーニング』っていうんだ。ツーストライクからはちゃんと枠の外にある三角のところにいかないと、ヒットかホームランなん

だ」

「へえ、そうなんだ」

「でも俺を空振り三振にしたんだから良いじゃんか」

桃子先生に一生懸命に説明する吾郎に兄である大地は嗜める。

吾郎はおとさんである本田茂治の教えを素直に受け取って、空振りしてもダメだと訴える。

「でもなんでもばーちゃんトレーニングっていうかわかんないだね」という吾郎に、『バーチャルトレーニング』だし、そもそも俺がバッターで立っているんだからバーチャルではないぞと大地は思うが突っ込まない。

本田大地——前世名、依田龍一——は生まれて物心ついてからは、周りから大人っぽいと言われつつも転生者とバレないように子供の振りして過ごしている。

弟の吾郎はそんな双子の兄を尊敬しつつ、さらに上の尊敬するべき父である本田茂治のいうことを忠実に守るくらいの素直さを持って健やかに成長していた。



「たあつー！」

「くぐぞー」

吾郎と大地は公園の広い滑り台を駆け足で逆走していた。

13本の手すり付きが両端についており、2人は登り切ることを目標にしてダッシュしていた。

「ねえ、あの子たち。あれを登る気みたいよ」

「5歳くらいかしら？ まだあの子たちじゃあ登れないわよね。あの坂は」

近所のママさんたちが笑いながら見ている中、大地と吾郎はもうダッシュの末に登り切っていた。

「え、嘘でしょ？」と絶句するママさん達だが、大地が吾郎の兄として転生してからトレーニングの誘導を行っているため、原作より筋力と体力が今後の成長の妨げにならない程度に育っていた。

次は渡り棒に行く。ここはもう何回も腕のみで渡り切っているので、今日も訓練の1つとしてやっているのだ。

「ね、てつちゃん。この公園広いでしょ？ たまたま見つけたんだ！」

「おお、そだな。周りの団地に隠れていて今まで知らなかったぜ。こんないい場所。ここなら思いっきり蹴れるぜ！」

急に小学生の少年達が入ってきてサッカーを始める。

蹴ったボールが木に当たり、近くにいた子連れの女性に当たりそうになる。

「危ないでしょー」という声にも耳を貸すことないサッカーに夢中になっている少年達に対して、公園にいた主婦や小学生の女の子までが軽い恐怖や苛立ちを覚えて帰っていく。

そんな中、吾郎と大地は周りを気にせずには渡し棒を腕のみで渡る訓練をしていた。

少年達は渡し棒をPKのゴールとして使おうと目を付けたが、2人が邪魔なため退かそうと悪い顔になる。

（よし！ 今日でも渡し切るぞ！ おとさんにちゃんと出来たつて言うんだ！）

先に渡り切った大地に続いて、吾郎も渡り切る寸前まで来たところでサッカーボールが飛んでくる。

このままでは吾郎の腕に当たり、渡し棒から落ちてしまう。

（危ない！）

大地は咄嗟に持っていたグローブをサッカーボール目掛けて投げつけて、吾郎に当たらないように軌道を逸らす。

その間に吾郎も渡りきり、安心したところで、

「おいおい。俺らのサッカーボールに何してくれてるんだよ」

「お兄さん達がうちの弟にサッカーボールを当てようとするからでしょ」
「は？ 最近のクソガキは口の利き方を知らないらしいな」

少年達は大地と吾郎を囲み、今にも襲い掛かろうとしている。

流石に小学生相手に4対2では分が悪いため、逃げようとしたところで、
「ふざけんな！」

「はう……！」

吾郎が小学生のリーダー格に突っ込んで行き、急所に頭突きをする。

大地は、今がチャンスだと考え、吾郎を連れて走って逃げる。

「あー！ 逃げるぞー！ 待てええ!!」

残りの小学生達が追い掛けてくる。

公園の入り口に着くところで、小学生に捕まってしまった。

「お前ら、いい度胸してるじゃねえか」

「お返ししてやるぜ！」

そう言つて少年達が襲い掛かって来ようとしたときに、

「何やってんの！ あなたたちちー!!」

「やべー！ ……ちっ、行こーぜ！」

不意に女性の声が聞こえて、少年達は焦って逃げてしまった。

吾郎と大地は桃子先生の姿を見て安心して、座り込んでしまった。

第二話

「もう。びっくりしたわよ。大地くんと吾郎くんが小学生にいじめられているんだもん」

「い、いじめられてなんかないよ！ ケンカしてただけだよ！」

「いやいや吾郎。さすがにあればケンカしても勝てないでしょ」

桃子先生が助けてくれたおかげで2人は怪我なく帰ることが出来た。

何かあつては危ないと、桃子先生と一緒に帰ってくれて現在カレーを作っている最中である。

父である本田茂治が遠征で家にいないため、食事を心配した桃子先生がわざわざ作ってくれているのだ。

大地は料理が出来るので断ることもできたが、楽できるに越したことないと何も言わなかった。

吾郎は単純にカレーが食べたいだけである。

「ダメでしょ、ケンカしちゃ。先生、理由は何でも暴力振るう子は嫌いよ！」

大好きな桃子先生に格好を付けたが、叱られてしまい黙って俯いてしまう吾郎。

そんな吾郎の頭を撫でて、

「でも桃子先生。吾郎は俺を助けてくれたんだよ。そこだけは褒めてほしいな。吾郎がいなかったら、俺危なかったかもしれないもん」

「……そっか。お兄ちゃんを助けようとしたんだね。吾郎くん偉いね。でもなるべく暴力はやめてね。吾郎くんが怪我してしまうのは、先生が嫌だし怖いから」

「う、うん！ 分かった！」

「じゃあカレー食べよっか！」

「うん！ カレー食べたい！」

大地がうまくフオーロしたおかげで、微妙な空気になることもなく夕食を食べることが出来た。

食事中に茂治が母の千秋が亡くなったことをきっかけにして、無理な練習をしてヘルニアになり、現在二軍にいること、でもすぐに一軍に上がって三振をたくさん取るんだ！と吾郎が泣きながら話す場面もあったが、

「話してくれてありがとう。先生嬉しいわ。これからも辛いことがあったら、どんどん先生に言っしてほしいな！」

と優しく話してくれたお陰で、また明るい空気で食事を再開することが出来た。

20時半過ぎに桃子先生は帰る支度をして玄関に向かっていた。

「じゃあ先生帰るね。お風呂沸かしてあるからちゃんが入って、寝る前に歯も磨くのよ」
「はい。先生ありがとう」

「わかってるよ！」

桃子先生は心配なのか、玄関の扉を閉めるときにも、「ちゃんと鍵を閉めるのよ」と言っていたが、吾郎に「しつこい」と怒られてしまう。

吾郎も大地も父がいない生活に慣れてきているので、そこら辺はしつかりしている。吾郎はたまに忘れるが、それは大地がきちんとフロローしているので問題ないのだ。鍵を掛けて歯を磨き、お風呂に入ったあとは2人で寝る準備だ。

布団を敷いて、朝の目覚ましもしつかりとセットする。あとは寝るだけなのだが、「今日はおとさんから電話無いね。いつもなら遠征先から電話してくれるのに」

「そうだな……まあおとさんも忙しい日もあるさ」

「そっかあ。まあいいや。大地、もう寝よ」

「うん。おやすみ」

（今日のはあの日か……）

そう考えながら、大地は夢の中に入っていくのであった。



『マリンスターズ、ピッチャー森田に代わりまして——本田、背番号44』

「おとさんだー……っ!! おかさん! 出たよ、おとさん!」

「こら、立つたら後ろの人、見えないでしょ。大地と一緒に座りなさい」

「おかさん、吾郎が興奮するのは仕方ないよ。すぐ大人しくなるって」

茂治は打席に立っていた松居を空振り三振に仕留めて、ゲームセットにした。

試合後、茂治は喜ぶ家族のもとに駆けつけ、吾郎にハグしていた。

吾郎は喜んでいたが、大地は浮かない顔をしていた。

「おめでと……おとさん」

「うん……もう二軍ファームにはいかないぞ」

吾郎はそんな茂治に「プロは一軍に上がってからのが大変なのさ。そんな甘い世界じゃないぞ」とテレビでコメンテーターがよく言っているセリフを並べたてて挑発している。

茂治は「どこで覚えた、そんなセリフ」と言っているが、勝てた嬉しさの方が上らしく、苦笑いをしていた。

おかさんである千秋はその姿を大地と手を繋いで微笑んでいたが、急に頭を抑え始め

て倒れてしまった。

「おかさん……?」

「どうした千秋!？」

「……」

千秋は倒れて救急車に運ばれたが、そのまま帰らぬ人となってしまった。

大地は……大地だけはその光景を事前に知っていたが、救おうと動くことが出来なかった。

それは精神的にも肉体的にもまだ未熟な子供であるからとも言えるが、一番は歴史の修正力だ。

過程がどうあれ、人の死は結果が変わることはそうそうない。

それこそ神に微笑まれたことがある人物でない限り。

だから大地はその前に母である千秋に色々と教わっていて、千秋も死期を感じ取っていたのか、大地に色々と仕込んでいた。

——まだ幼い大地にはあまりさせてもらえてはいなかったのだが。



「おかさんー！」

吾郎と大地は同じ夢を見ていたようで、同じタイミングで目が覚めた。

2人は目を合わせたときに、お互いに泣きそうな顔をしていたが、涙を流すのだけは我慢していた。

双子として生まれたから、互いの考えがある程度分かる。

そのとき、不意に玄関のドアノブが乱暴に何回も回される音がする。

大地と吾郎は驚いてしまい、お互いに手を繋ぐが大地は誰だか分かったためすぐに冷静になり、吾郎を落ち着かせる。

「わ、悪い人かな？」

「いや、うちの鍵を持っているのは俺ら以外だと1人だけだよ」

「……………え？」

乱暴に寝室——と言っていいほど広くはないのだが——に1人の男性が入ってきた。

その男は髪もボサボサで、無精髭を生やし、ワイシャツはボタン2つまで開けてかなりだらしない格好をしていた。

何よりも臭いで大量のお酒を飲んだのがすぐに分かるくらいだった。

「お……………おとさんー！ どうしたの？ 明日まで遠征じゃなかったの!?!」

「どけー！」

吾郎と大地を押し除けて、布団に倒れ込む茂治。

「おとさん！ ど、どうかしたの……？ ヘルニアになって、お酒やめていたじゃないか！ せつかくヘルニアも良くなってこれから一軍だつて言っていたじゃん！」
「くつくつく」

吾郎の質問に対して、小馬鹿にしたような笑い方をする茂治。

「な、なんで!？」

「へへ。もういいんだよ、飲んだつて。もう俺は野球なんかやらねーんだからよ。お前らももう野球なんてやめちまえ！」

30にして嫁さんも仕事もなくしちまうような……こんなやつになりてえか？」

第三話



『左ひじ内側の^{じんたい}靱帯に異常が認められます。おそらくもう手術するしかないでしょう』

『手術!? 手術すれば治るんですか!?!』

『ええ。ただし、今までの8割ほどの速球が良いところでしょう。当然根気よくリハビリをやつての話ですがね』

『い、今から手術して、完治にはどれくらい掛かるのですか!?!』

『最低でも2年は掛かりますよ』

(30歳で2軍にいるこの俺を……球団がそこまで待つてくれるわけがない……)



(どうしてなんだ千秋。どうして神様は俺から何もかも奪っちゃうんだ。なあ千秋、天国の神様に聞いてきてくれよ。そうじゃなきゃ俺はもう……疲れ果てて一步も動けね

えよ)

茂治は医者と話した内容を思い出し出していた。

家族の写真を見ながら、ダイニングの椅子に座って項垂れる茂治。

「おはよう、おとさん」

「おとさん、おはよー!」

「大地、吾郎……」

朝起きてきた大地と吾郎に若干気まずそうな顔をする。

昨日酔っ払ってしまい、暴言を吐いてしまったことを覚えているからだ。

「これから朝ご飯作るから待っててね」

「俺も手伝うよ!」

大地はそう言つて朝食の支度をする。吾郎も最近は大地の手伝いをするようになり、パンを焼くくらいなら出来るようになっていた。

簡単に用意も終わり、3人で食卓を囲む。

「すべり台も登れるし、渡り棒も簡単に渡れるようになったんだよ!」

「へえ、すごいな」

「もつともつと運動して、おとさんみたいにすげー球を投げるんだ!」

「あんな、大地、吾郎」

「あ、そうだ！ 昨日桃子先生がうちに来てカレー作ってくれたんだよ！」

「そ、そうか」

「吾郎。おとさんが話あるみたいだ。……聞こう」

大地は吾郎を嗜めたが、吾郎も昨日の話であることは気付いていた。

気付いていて、話を聞きたくないからわざと別の話題をたくさん話していたのである。

「それでおとさん……昨日の話だよね？」

「あ、ああ。昨日は酒を飲んでいて勢いで言ってしまったが、ちゃんと聞いてほしい」

茂治は大地と吾郎に、肘を怪我してしまったこと、手術すれば治るがリハビリを2年以上しないといけないこと、球団はそれを待つてくれないから間違ひなくクビになるだろうということを伝えた。

「う……嘘だ！ おとさんがもう野球できないなんて……そんな嘘信じるもんかあ！」

「ばい、吾郎!!」

吾郎は現実を受け止めることが出来ず、家を飛び出してしまふ。

大地は冷静に食事をして、茂治のことは見る。

「おとさん。話は分かったよ。吾郎のことは任せて」

「大地……」

大地は準備をして吾郎を追いかけようと玄関に行く。

茂治はその様子を見ていることしか出来なかつたが、家を出る前に大地が、「おとさん。吾郎の気持ちも分かっているとと思うけど、俺も寂しいんだからね。……それにまだ諦めるのは早いでしょ」

「大地……それはどうい——」

「投手以外でも出来ることはたくさんあるってことだと思う。俺達はおとさんが野球をやっているのが好きだし、尊敬しているんだから」

そう言つて家を出ていく大地。

大地の言葉を聞いて、頭の中で何度も繰り返し返す茂治。

（投手以外って……俺には投げるしか出来ないだろうが。それに今更……）



「吾郎」

「……大地」

大地は先に幼稚園に来ていた吾郎の隣に座る。

お互いに何も話さない。そのまま5分くらい経つた頃に、

「大地。おとさんの話って本当なんだよね……?」

「ああ、本当だろうね」

「おとさん……もう野球出来ないんだよね?」

「少なくともピッチャーは難しいだろうね」

それを聞いて泣き顔になる吾郎。

大地も吾郎にはきちんと現実を知って欲しかったので、あえて淡々と伝えたが、吾郎の気持ちは痛いほど分かっている。

転生した元大人とはいえ、親に対しての尊敬や愛情は変わらないからだ。

「でもさ、野球ってピッチャーだけじゃないだろ? おとさんにもまだ可能性があるか

もしれないし」

「……そうなの?」

「まだ分からないさ。おとさんがどう選択するかだと思う。でもさ、何を選んでも俺らだけはおとさんの味方でいてあげようよ」

「……うん、そうだね! 俺たちだけはおとさんの味方でいよう!」

「それでさ、ちよつと相談あるんだけど」



「そうか……まあ君の方から言ってきたきてくれるのはありがたいよ。気の毒だが、ここへきて肘の故障では引退も仕方ない」

「はい……」

「今後の身の振り方についてだが、本田君は確か体育大学を出ていたよね？」

「え、ええ」

「それなら……トレーニンングコーチか、スカウト部でも考えてみるよ」

「あ、ありがとうございます！ よろしくお願いします！」

茂治は横浜マリンスターズの球団事務所で代表と管理部長に引退すると話をしていった。

球団側も仕方ないと諦めて、今後の身の振り方まで示してくれたことに感謝をしつつ、事務所を後にする。

外に出て、横断歩道を渡っているときに茂治は車に乗った男に話しかけられた。

「おーい！ 本田じゃねーか！」

「茂野……！」

偶然マリンスターズで昨年最多勝を獲得した茂野と会い、カフェに立ち寄ることになった茂治。

茂野は茂治の高校時代からの友人であり、同じ投手でもあるのだ。

当時は茂治がエースで茂野が控えだったが、今では立場は逆転している。

「久しぶりだなあ！　そういう腰の具合はどうだ？　そろそろ一軍に上がってくるって聞いたぜ？」

「それが……実は肘の靭帯じんたいを損傷しちまってな。引退することにしたんだ」

「引退!？」

茂治はもう球団は待つてくれないこと、先ほど球団に行つてきたことも話した。

途中、サインをせがんできた女性に暴言を吐いて泣かせてしまった茂野が、苦笑いでサインをするといった一幕もあったが、茂治は少し羨ましそうに「バチが当たるぞ……俺なんか誰にも覚えられずに引退しちまうんだからな」とぼやいていた。

「馬鹿野郎！　俺とお前はちよつと運があつたかなかつたかだけの違いでしかねえ！」

高校から一緒に野球やつてきた俺の前で2度とそんな卑屈なセリフを吐くな！　さすがに……怒るぜ」

「……すまん」

茂治は気を遣つて厳しくも優しい言葉を掛けてくれた友人に感謝をした。

カフエから出て、子供を迎えに行く予定のため「送つて行くかうか？」と言つてくれる茂野の提案を断り、別れる。

車を発進させる前に茂野が、

「……お前本当に野球やめちゃうのか？」

「ああ。言つたろ？ やりたくてももう物理的に不可能なんだよ……」

「……物理的か。だったら物理的に引退しない方法が1つだけあるぜ」

「なに？」

「バッターに転向して再起するんだ。野球はピッチャーが投げるだけじゃねーんだぜ」

そのとき、大地が言った言葉が茂治の頭の中で思い出される。

茂野は笑いながら冗談だと言って去っていった。

（バッターか……いくら高校で4番打っていたからといって、この年じゃな。あと5年若かったら、それも考えられただろうに）



「さあみんな起きよー！ お昼寝の時間は終わりですよー！」

桃子先生や他の先生に起こされて、どんどん起きていく子供達。

全員がちゃんとしているかチェックしていると、桃子先生が大地と吾郎がいなことに気付く。

グローブも無いため、幼稚園にはいないことがすぐに分かった。

「もし事故でも起きたら一大事よ！」

「はい！ とにかく私は心当たりを探してきます！」

園長先生に報告したあと、桃子先生は外を探す。

昨日行つた公園、2人の家、商店街など、どこを探してもおらず、途方に暮れて帰つてきた。

「あー！ 星野さん！ 2人はいた!?!」

「いえ、どこにもいませんでした……」

園長先生達も大地達が見つからないため慌てている。

警察も呼んだ方がいいのではないかと話になっているところで、後ろから声がする。

「あのお、うちの息子達を迎えにきたのですが……」



「もう帰つても良いですよ、先生。あいつらは結構しつかりしてるからちやんと帰つてきますよ」

「でも誘拐とか事故とか……」

桃子先生は心配しすぎて、悪い方向に考えてしまっている。

茂治は少しだけ苦笑しながら、

「多分俺のせいなんです。あいつらにとつては、俺が野球をやめるってことがそれだけ衝撃的だったってことなんです」

「……」

「でも俺達は全員、その現実を受け止めなきゃいけない」

「ま、腹が減ってきたら帰ってきますよ」と茂治が言ったところで玄関のチャイムがなる。

茂治は「ほらね」と笑いながら玄関のドアを開けると、そこには昼間に話をした球団職員達が大地と吾郎を背負っていた。

「か、管理部長！ どうして2人を!？」

「疲れて眠っているだけだから、心配しないで大丈夫。そりやあ疲れるのも無理はないけどね。夕方に2人で球団事務所まで来ちゃったんだから」

大地と吾郎を下ろしながら話を続ける管理部長。

「2人しておとさんをクビにしないでつて。吾郎くんの方は泣きじゃくっていたよ」

手術すれば治るから待つてほしいと泣きながら頼む姿に心を打たれたと話す管理部長。

だが、今の状態の茂治を残すわけにはいかないと優しく伝える。

「すまんなあ」

「いえ……当然です」

茂治は迷惑をかけた謝罪をし、管理部長はそのまま帰って行った。

2人を抱えて茂治と桃子先生は布団まで運ぶ。そのときに桃子先生が、

「2人とも本当にお父さんと野球が好きなんです。いつも幼稚園で早く大きくなっておとさんと一緒にマリンスターズを優勝させるんだ！ って言ってるんです」

茂治にはその言葉が離れずに、布団に入っても眠れていなかった。

妻である千秋、そして今度は野球までも奪おうとする死神に対して何も出来ないと思っていた。

（だが、それでいいのか……？ 本当にそれでいいのか……？）

そのとき、大地と茂野が言った言葉が再度頭に蘇ってくる。

『投手以外でも出来ることはたくさんあるってことだと思う。俺達はおとさんが野球をやっているのが好きだし、尊敬しているんだから』

『バッターに転向して再起するんだ。野球はピッチャーが投げるだけじゃねーんだぜ』

茂治はその言葉を頭の中で何回も繰り返した。

自身に出来ること、やりたいことを頭の中で思い出してちゃんと形にしていく。

そして布団から起き上がり、バットを手に持ち外に行く。

(俺は……俺はまだ野球をやめるわけにはいかない！ 俺がこの子達に残してやれるのは野球しかねえじゃねーか！)

第四話

吾郎と大地が朝起きると、布団が畳まれており茂治の姿はなかった。

外で何か音が聞こえる。

窓を開けて2人で見てみると、そこには茂治が素振りをしていた。

茂治が吾郎と大地に気付いて、素振りを止める。

「おう、起きたか大地、吾郎！ よーし、メシにするか！」

「……どしたの、おとさん。素振りなんかして……」

「ああ、ただ気晴らしにやっていただけだよ。球団クビになっても、身体を動かさないと気持ち悪くてな」

問い掛ける吾郎に茂治は誤魔化したかのようなことを言っていたが、大地のことを見て気まずそうに目を逸らした。

なぜなら大地が満面の笑みをしていたからだ。

（やっぱりおとさんはクビになったんだ……）

（おとさん、ついに動きだしたんだね……）

（多分大地にはバレているなあ……ちゃんとしてから背中で見せたかったんだけど）

吾郎は落ち込み、大地は全てを知っていて、茂治は新たな思いを胸に動き出していた。本田家は家族それぞれで思いは違えど、お互いを思い合っている家庭であった。

食事中、昨日先発をしていた茂野の話をしていた茂治だったが、少し難しい顔をしていた吾郎が茂治に話しかける。

「おとさん、俺はもう大丈夫だよ。俺、早く大きくなっておとさんの分までプロ野球入って頑張るから！ おとさんは気にせず次の仕事頑張つてよ！」

「吾郎……」

「おいおい、吾郎くん。俺のことも忘れないでくれたまえよ。//俺//じゃなくて、//俺たち// だろ？」

そうやって茶化す大地に茂治と吾郎は目を合わせて笑い出す。

食事後に外に遊びに行く大地と吾郎を見送って、茂治はバットを持つ。

（ちっ、大地も吾郎もまだガキのくせに氣い遣いやがって。……待つてろよ。おとさん必ず——必ずまた夢を見せてやるからな！）



「大地！ いくよ！」

「おーしー！ 来いー！」

大地と吾郎はキャッチボールをしていた。

お互いにピッチャーになり、キャッチャーになり、バッターとなつて練習に励んでいるのだ。

そしてボールを受け取つた吾郎が大地に投げ返そうとしていたときだった。

「ん？」

誰かに見られている視線を感じ、投球をやめる。

視線を感じた先の家を見ると、窓が少し開いていたのだが、吾郎に気付かれたと感じた瞬間に窓が閉まつてしまった。

「吾郎、どうしたの？」

「んー。あそこで誰かが俺らを見ていたみたいなんだ」

吾郎は見られていた家の窓の方角を指差し、首を傾げる。

（ああ、もしかして……）

大地は誰が見ていたのかを思い出して、家まで行つてみようと話す。

吾郎も新しい野球仲間が増えるかと思うとワクワクするのか、笑顔で了承する。

「じゃあ、先にグローブ持つてきてあげようよ！ もし持つていなかったら貸してあげられるしー！」

「そうだね！ 一緒に戻ろう！」

吾郎達は一度家に戻り、古くなったグローブを持ってくることにした。

事故に遭つてはいけないので、大地はきちんと注意して戻り、少し時間を置いてから覗いていた子の家に行った。

（多分、今であればお母さんもないはずだから、話も聞いてもらえるはずだ）

呼び鈴を鳴らして、少し待つと家の扉が開く。

そこで大地が話しかけようとした瞬間に、

「わっー！」

「うわっ!!」

吾郎が後ろから出てきて、眼鏡を掛けた少年を脅かす。

びつくりした少年は尻餅をついてしまう。

「あ、ごめん。びつくりした？ 実はよかつたら一緒に野球したいなって思つて。近所で野球してくれる友達がいなくてさ」

「……野球つて何？ 僕、そんな変な手袋持つていないし、興味ないよ」

「あ、これね！ グローブつていうんだけど、大丈夫！ 家から古いグローブ持ってきたから！ 面白いから行こうよ！」

「え、あ、ちよ、ちよつと僕は……」

吾郎が強引に手を引つ張つて少年を連れ出す。

(吾郎……相変わらず強引だな。まあこれくらいしなないと来てくれないもんね)

——これが吾郎と寿也、そして大地の初めての出会いとなつたのだ——



「何?! バッターに転向する!？」

「はい。もちろん何年も待つてくれなんて言いません! 今シーズン中に結果が出せな

ければ、今度こそクビにしてみらつて構いません!」

「……すまないが、今シーズンも待てないよ。打撃バッティングだけならトレードで獲得したい選手

は山ほどいるんだ。

今すぐにもテストをして、我々の前で結果を出せるくらいでないと、我々は君を選
手として在籍させておくわけにはいかない」

茂治は今すぐテストになるとは思つておらず、かなり困惑していたが、今更言葉を撤
回するわけにもいかず、「ぜひ挑戦させてほしい」と懇願する。

そしてこれから横浜スタジアムでバッテリー適正テストが始まるのであつた。

(……打つしかない！ この年齢で一旦クビになったら、もう現役復帰の道は閉ざされたも当然だ！)

頼む千秋！ 俺と子供達にもう一度夢を見させてくれ！)

茂治はグラウンドでアップをして、対戦相手の投手を待っていた。

今日この日を逃すともう2度とチャンスが無いのが分かっているので、気合十分であつた。

「ちやーすー！」

「……し、茂野?!」

そこにはユニフォーム姿の茂野が立っていた。

球団の管理部長に「昨日先発だったのになぜここにいる!？」と言われている。

「いやあ、いつも通り帰る予定だったんですけどね。本田の引退を賭けたテストって聞いたからには……俺が投げてやるしかないでしょう」

「なあ本田ア!!」と挑発気味に大きな声で茂治のことを呼ぶ茂野。

茂治は最初驚いた顔をしていたが、すぐに決意を固めた顔になる。

(誰が相手でもやるしかない！ 俺にはこれがラストチャンスなんだ！)

「勝負は3打席！ それでセンスを見せられなければ、本田君には引退してもらおうよ！」
「はい！」

「茂野！ 高校時代からの友達だからって手を抜くなよ！ 温情で球団に残してやつても本人のためにはならないからな！」

「分かっていきますよ」

監督に手を抜くなど言われて、茂野はより真剣な顔つきになる。

茂野の真剣な顔つきを見て、茂治はバットを構える。

（今のお前には俺の球を打つことは絶対にできねえ。だが、俺が見てきた高校時代からのお前の野球センスが本物なら——その片鱗を見せてみる!!!）

茂野は振りかぶってインコースいっぱいにフォーシームのストレートを投げ込む。

キャッチャーに「ギリギリ入ってますよ」と言われて、茂治はボールがミットに入ったことに気付く。

「全く見えていないな……」

「ええ……打者^{バッター}転向はそんなに甘くない」

監督と管理部長は茂治がもはや打てないと確信していた。

茂治自身も一軍である茂野の球がここまで速いことに驚き、次の球を待つ。

茂野が第2球を投げる。球は茂治の方に向かってきて、ボールが当たると思った茂治が身体を逸らすのが、ボールは曲がりキャッチャーミットに入っていく。

「あ、カ……カーブ！」

「ツーストライク！」

茂治の情けない避け方に、監督達も苦笑いを隠せない。

茂治は次に投げてくる球を外に外してくるカーブだと予測し、それが見事当たりボールとなる。

カウントはワンボール、ツーストライク。

（よし！ 読み通りだ！ 何こつちもこの前までピッチャーだったんだからな。次はおそらくボールになるフォークを投げてくるはずだ）

茂野がボールを投げ、低めにいったため、予測が当たったと茂治は見逃すが、ボールは落ちずにそのままキャッチャーミットに吸い込まれる。

「ストライク！ 低めいっぱい！」と審判も兼任しているキャッチャーが言うが、茂治は予測が外れて三振してしまったことに驚いてしまう。

「あと2打席だぞ、本田君！」

2 打席目。

茂治は自分よりも裏をかく組み立てが上手い茂野に対して、予測するのをやめた。それであれば緩いカーブに的を絞り、フルスイングをしようと考えてる。

茂野は2打席目の第1球を投げるが、茂治の顔目掛けて飛んでいく。茂治はギリギリで避けるが、尻餅をついてしまう。

「あつぶねー！ おい！ 気を付けろよ、茂野！ 危険球だぞー！」

「うるせえ！ てめえが寝ぼけたことやつてから、目え覚まさせてやったんだよー！」
「なに!？」

「ちんたらくだらねえ読みなんかしてんじゃねえ！ 読みで打てりゃあ、ピッチャーやキャッチャーはみんな3割打者なんだよ！」

本気で打者バッターになりてーんなら、てめーの反射神経で球に食らいついてきやがれ！

……思い出せ。4番本田が甲子園で打った、あのサヨナラホームランはがむしやらだったはずだ」

茂治は思い出す。甲子園の9回裏にインコース低めの難しい球を、無我夢中でスタンドに放り込んだことを。

今でもあの球をよく打てたと思っっているほどだ。

茂野はフォーシームを全力で投げ込む。茂治はがむしやらに打つが、結果はキャッチャーフライ。

「これがラストの1打席だぞ！」

管理部長から激が飛ぶが、茂治は当たったことに驚いている。

そして、自分なら打てると思ひ込む。

3打席目。

初球、茂野はカーブを投げて引つ掛けようとするが、本田は何とか食らいつきカットしてファールとなる。

2球目、3球目、4球目とファールになるが、徐々にタイミングが合っているのが誰の目から見てもわかる。

途中で見に来た他の選手や管理部長でさえも、茂野と茂治の対決を見て驚きと興奮を隠せない。

(それだよ。その手首リストの柔軟さと膝の使い方は学生時代から何も変わってねえ。

もしかしたらお前は……初めからバッターになるべきやつだったのかもしれない)

茂野は徐々に覚醒している茂治に驚きつつも、バッティングセンスに感心する。

そして、全力のフォーシームをミット目掛けて投げ込む。

カキーーーーーン!!!

ボールはバットに当たる音とともに大きな放物線を描き、横浜スタジアムの観客席上段に飛んでいく。

管理部長、監督、見に来ていた選手、茂野や茂治本人でさえも、その光景が信じられずに黙ってしまふ。

「や……やったぞ。おとさん、やったぞ。大地、吾郎……！」

「茂野から3打数1安打で……1本塁打だど!?」ホームラン

「だ、代表……こりゃあ本田は化けるかもしれませんよ」

球団代表と管理部長は予想していなかった結果に驚きと期待を持っていた。

ホームランを打たれて落ち込む茂野と打者転向が成功して喜ぶ茂治は軽口を叩きあっていたが、顔は笑っていた。

——— 本田茂治 引退を回避。30歳にして第二の野球人生が始まる。 ———

第五話

「そういえばまだ自己紹介していなかったね！ 俺は本田大地！」

「俺は本田吾郎！ 大地とは双子の兄弟なんだ！」

「ぼ……僕は佐藤寿也だよ」

自己紹介をして、寿也にグローブの付け方を教える大地。

吾郎は少し離れたところでボールを持って準備している。

「そうそう！ それでボールが来たら、よく見てこのグローブの中に入れてあげればいいんだ」

「僕に出来るかな……？」

「うん！ 大丈夫だよ！ 初めは捕れなくても気にしなくていいから、目を瞑らないようにだけ気を付けてみてよ」

そう言つて、吾郎にボールを投げるように言う大地。

吾郎は待つてましたとばかりに思いっきり振りかぶつて、ボールを投げ込む。

（あのバカ！ 本気で投げて捕れるわけないだろうが！）

すぐに寿也の前に立って、代わりにボールを受け取る。

寿也はボールが全く見えないうちに大地が自分の前に立ってしまったため、呆然としていた。

「こら吾郎！ まだ始めたばかりの寿也君が、お前の本気のボールを捕れるわけないだろ！ もっとゆっくり投げろ！」

「え……あはは！ ごめんごめん！」

少し強めにボールを返す大地。

寿也に謝り、大地は横に移動する。今度は吾郎がすごいゆっくり投げてくれたおかげで、寿也のグローブにボールが収まる。

「あ！ と……捕れた！」

「おお！ やればできるじゃん！ すごいよ！」

「そうだね！ 初めてなのに、目を瞑らずにボールを見て捕ったのは本当にすごいと思う！」

今度は大地が寿也にボールの投げ方を教える。

本当に基礎だが、投げ込むグローブを見ること、足の位置とボールを腕の振り方だけを教えた。

（と……届くかな……？）

寿也は言われたとおりに精一杯力を込めてボールを投げた。

ボールは弱々しいが、真つ直ぐに飛んでいき、吾郎の構えたグローブにほとんどズレることなく入っていった。

「す、すごいーい!! ストライクだよ! 初めてボール投げてここに投げられるなんて……俺だつて初めは投げられなかつたんだよ!」

「そ、そお?」

「うん! 本当にすごいよ! 間違ひなく才能あると思う!」

(佐藤寿也……やはり末恐ろしい才能だな。もし彼が野球をやつていなかったと思うと、野球界はどれだけの損失を被つていたんだろうか……)

大地は予測していたとはいへ、驚き、感心していた。

吾郎の才能はもう嫌というほど感じていたが、寿也は出会つて初日で才能を開花させ始めていたのだ。

大地は負けられないと思いつつ、10球くらいキャッチボールをしたところで次に起こる採めごとを回避するために動いた。

「そういえばさ、寿也君は家で何か宿題とかやることあるつてさつき言つていなかったっけ?」

「……あ! そうだった! ドリル終わらせないとお母さんに怒られちゃう!」

「えー! そんなのやらなくていいじゃん!」

大地がそんなわけにはいかないと、寿也を家に帰す。

明日もドリルを終わらせてから一緒に遊ぼうと誘うと、嬉しそうな顔をして「うん！」と言ってくれた。

「ちえー！　せつかく友達が増えたのに、何で帰しちゃうのさー！」

「寿くんもやらなきやいけないことがあるからだよ」

「別に勉強しなくなつて、おとさんみたいにプロ野球の選手になれるんだから別にしなくてもいいじゃんー！」

「吾郎……それでも寿くんには寿くんのやらなきやいけないことがあつて、それが向こうの家のやり方なんだよ。」

もし勉強していないせいで、お母さんに怒られちゃつて俺らと野球できなくなつたつて言つたらどうする？」

吾郎は寿也と野球が出来なくなるのを想像して、嫌な顔になった。

それで少しは分かつてくれたのだろう。その日以降、寿也の勉強に関して吾郎が何かを言うことはなくなつた。

(これで大きな揉め事にはならないはずだ。グローブもこつちで回収したし。あとは寿くんのお母さんに見つかつても説得出来るくらいのことはおこななきやだね)

最悪、大地が勉強を出来ることを示したうえで、教えてあげる名目で友達になれば口

を出しづらくなると考えているが、なるべく避けたいとも思っている。

小学校に合格すれば新しいグローブも買ってもらえるはずなので、今は我慢のときだと思いつつ家に帰る大地であった。

「さあ、出来たぞー！」

「わっ！ 何これ!? すごいでっかい肉ー!!!」

吾郎と大地は双子というのもあり、声を揃えて目の前に鉄板に焼かれた大きな肉を出されて喜びの声を上げていた。

「食ったことねーだろ? これがビーフステーキってんだ」と嬉しそうに話す茂治だが、流石にステーキが高いのを知っている吾郎が心配をする。

だが、茂治は「ちゃんと次の仕事を見つけてきたから、心配しないで食べ」と言い、吾郎を安心させる。

(ふふ……こいつら、俺の次の仕事場がバターボックスだと知ったら、驚くだろうな……は、早く言いてえ! でもまだ一軍に上がるまでは……)

「どうしたの、おとさん。どっか悪いの?」

「ああ、頭がちよつと……うるせえ!」

「俺、何も言っていないよー!」

天然の振りとレベルの低いノリツツコミの親子漫才を隣で見ている大地が、軽く笑った。

まだステーキに手を付けていない大地を見て茂治が、

「大地、どうした？ お前は食わないのか？」

「ううん、食べるよ。……おとさん、おめでどうの言葉はまだ取っておくね」

不意に大地に言われた茂治は少し驚いた顔をした。

茂治は——もちろん千秋も——たまに大地が大人びた言動をするのを気付いていた。

それは吾郎の兄としてしっかりとしないといけないという責任感からだと思っていたが、今回のように何かを見透かした発言が最近増えてきたため、なかなか隠し事がしづらいなと感じていた。

それでも自分の大切な息子だし、吾郎や茂治自身のことをどんなときでもフォローしてくれる大地を頼もしく思っていた。



次の日以降から、空き地でキャッチボールしている大地と吾郎に寿也が混ざっていた。

ドリルなどの課題を終わらせてからの参加になるため、寿也は少し遅れてくるが多かったが、毎日迎えに行かなくてもきちんと来てくれる寿也に吾郎と大地は嬉しく思っていた。

「でやつー！」

ある日、寿也が投げたボールを吾郎が打ち、空き地を超えて飛んでいく。

「やりにいー！ 場外ホームランー！」

「吾郎君ー！ 上に打っちゃダメだって言ったじゃない！ 今のが最後の紙ボールだったのに！ また家に帰って新聞紙丸めて作らなきゃいけないじゃん！ 笑っているけど、大地君もだよー！」

「ごー、ごめん……！」

バッティング練習もしたいという吾郎に対して、寿也が新聞紙を丸めて紙でボールを作ってきてくれたところから始まった。

上に打つちやダメというルールでやっているが、吾郎と大地は盛り上がるとすぐに思いつき打ってしまう。

いくら怒っても反省していないような態度なので、寿也は呆れてしまっている。

「でもさ、紙ボール打ったりキャッチボールしているだけだどつまないね」

「え？」

寿也は野球をゲームでもするようになっていたので、ルールはある程度分かっていた。

9人1チームでやるのが野球なので、もっと広いところで友達集めてちゃんとした野球の試合がしたいと訴える寿也に、吾郎は無理だと言う。

「幼稚園の友達だって、サッカーやドッジボールはやるけど、野球は誰も知らないもん」
「そっか……」

落ち込む吾郎と寿也。しかし、寿也が思い出したかのように「草野球チームに混ぜてもらおう」と提案する。

寿也は線路の向こうにグラウンドがあり、ユニフォームを着た子供達が野球をしているのを見たことがあった。

吾郎と寿也は先ほどとは違って、明るくなりながら混ぜてもらおうと向かう。

「え……本当に行くの!？」

「いいじゃん! 大地も行くようよ!」

大地は乗り気ではなかったのだが、吾郎に引きずられるようにして連れて行かれる。

寿也も一緒について行く。

(吾郎ってめっちゃくちや強引だよな。寿くんを初めに誘ったときもこんな感じだった



「わあ！ やってるー!!」

線路を越えて寿也があると言っていた場所に向かうと、確かに野球をやっている姿が見える。

吾郎と寿也は走って土手の階段を降りて、入り口のフェンスを開けて入る。

大地は未だに吾郎に引きずられたままだ。

「ねえねえ！ 混ぜて混ぜてー！ー！」

「なんだお前ら！ 試合中だ！ 勝手に入るな！」

監督と思われる男性に注意されるが、吾郎は構わず混ぜて欲しいとお願いをする。

その隣に座っていた小学生の男子——男性から安藤と呼ばれていた——が出てきて吾郎達を追い出そうとする。

寿也は怖くなって「帰ろう」というが、吾郎は納得いかない顔をして、挙げ句の果てに試合の邪魔をして打席に立とうとする。

「凶々しいガキだ！ そんなにチームに入りたきや、9歳になってからうちの入団テス

トを受けるんだな！」

「なんでだよー！」

安藤という少年に引きずられて摘み出されそうになっていた。

吾郎が「野球が上手ければ、年齢としなんて関係ない。そのへナチヨコピツチャーレベルなら俺にだつて投げられる」と息巻くが、嘘つき呼ばわりされてグラウンドから追いつ出される。

「ご、吾郎君、大丈夫!? もういいよ！ 帰つて3人でまた野球をやるー！」

「……やだ」

「え……!? 大地君も!?!」

寿也は吾郎に帰ろうと促すが、大地も含めて腹が立ったのか声を揃えて拒否をする。

いつもならストツプを掛けるのが大地の役割だが、自慢の弟が嘘つき呼ばわりされるのは我慢ならないようだ。

吾郎と大地は目を合わせて頷くと、土手の階段を登り、一番上まで来て少し距離を取る。

「吾郎、いつでも準備はいいぞ」

「うん、行くよ」

大地は座つてキャッチャーのように構えると、吾郎が振りかぶりボールを大地のグ

ローブに向かつて投げる。

ボールがグローブに入ると大きな音を立てる。

そうしたら今度は吾郎が座り、大地が立ち上がる。

大地は同じように吾郎に向かつてボールを投げる。

吾郎は大きな音を立てて大地のボールを捕ると、また立ち上がり大地にボールを投げる。

それをグラウンドで見っていた監督と小学生達はあまりのスピードに驚いている。

何回か交互に繰り返したあと、寿也も呼んで座らせて、吾郎の全力投球を捕ってもらう。

そのことにもグラウンドにいるメンバーは驚いていた。

「ねえ、これでも吾郎を嘘つき呼ばわりするの?」

大地は吾郎に代わって、グラウンドにいる監督達に声を掛ける。

90 km は出ているであろう球を見て、監督は思わず声を掛けてしまう。

「お、お前ら、年齢としいくつだ!」

「5つだよ」

5歳と聞いて監督は金の卵を見つけたと思った。

今のうちに硬球に慣れさせておけば、将来プロ野球選手を育てられると興奮した。

「よ、よし！ 分かった！ チームに入れてあげよう！」

「えー！ 本当!? やったー！ これで本当の野球ができるね！」

そう言つて、吾郎と寿也は喜んで土手の階段を降りようとしたが、大地が行くのを止める。

急に止められて、吾郎と寿也はびっくりするが、2人が何かを言う前に大地が口を開く。

「すみません。俺たちをチームに入れてくれるのは嬉しいんですけど、リトルリーグは9歳からじゃないんですか？」

「……本来はそうだが、君たちくらい上手いのであれば、今のうちに硬球に慣れておく成長した後にはきつと役立つぞ！」

「それは……俺たちの身体がまだ出来上がっていない状態で硬球を触れさせても問題ないということですか？」

「そうとも！ 三船うづリトルは強豪チームだからね！ 今のうちにレベルが高い野球をやると良い経験になるよ！」

監督が甘い言葉で大地達を誘惑してくるが、大地はとても冷めた目で監督を見ていた。

吾郎と寿也は早く野球をしたくて仕方がないという顔をしているが、大地の顔を見て

困惑もしていた。

「ごめんなさい。やっぱり帰ります」

「ど、どういうことだい？ 君たちがチームに入りたいと言い出したんだろう？」

「5歳の子供に硬球を持たせたらどうなるか、大人のあなたなら知っているでしょう!!
その危険性を伝えずに自分のことしか考えない人と野球は出来ません!!」

大地は自分が子供の口調をするのを忘れるくらい怒っていた。

そして、吾郎と寿也を置いて歩いて行ってしまった。

「さ、さっきの子は帰ってしまったが、君たちはやるだろうか？」

「……俺たちも帰るね」

「な！ なんでだい!？」

「大地はいつもあんなに怒ったりしないんだ。てことはおじさんが間違っているってことだよ」

そう言つて吾郎も去っていく。寿也も少しホツとした様子で吾郎について行く。

「大地……」

少し歩いたところで大地が待っていたので、吾郎が話しかける。

大地は深呼吸をしたあと、2人の方を向いて頭を下げる。

「寿くん、吾郎！ ……ごめん！」

「だ、大地君！ 謝らなくていいよ！ ちょっとびっくりはしたけど……」

「そうだよ！ 難しくて何話しているか分からなかったけど、大地は俺たちのことを考えてくれてたんでしょ？ むしろありがとうだよ！」

「寿くん、吾郎……ありがとう。俺、2人のことを考えていないあのおじさんを見ていたら、すごいムカついちゃって……」

あんまり難しいことは分かっていたが、吾郎は大地が怒ってくれたのは自分を守ろうとしてくれたことなのだということは分かっていた。

寿也は、今はびっくりしただけだが、あとで調べてみると大地の言っていることが正しかったことが分かり、感謝することとなる。

今日はこれで帰ることになり、夕食時に茂治にこのことを話したら怒られそうになったが、最後まで話したところで納得してもらった。

「だから今は吾郎や寿くんと一緒に少しずつ身体を成長させて行くことにするよ」
「……そうか」

後日、三船リトルの監督——安藤スポーツ店の主人——が本田家を訪れて茂治に謝罪をしていた。

茂治は何も無かったからと謝罪を受け入れた。

そして安藤監督は大地と吾郎に「9歳になってもしうちのチームに入ってもいいと

思ってくれたら、ぜひ来て欲しい」と頭を下げていた。

『一定の年齢、一定の身体能力に達したため、ステータスを開放します』

第六話※

それは突然のことだった。

『一定の年齢、一定の身体能力になったので、ステータスを開放します』

大地の頭の中にアナウンスのようなものが流れて、ステータスが表示された。

◇◇◇◇◇◇◇◇

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：90 km

コントロール：G+

スタミナ：G+

変化球：なし

◇野手基礎能力一覧

弾道：1

ミート：G

パワー：G+

走力：G+

肩力：G+

守備力：G

捕球：G+

◇◇◇◇◇◇◇◇

（うお！　なんだこれ!?　……つてそういうえば神様の特典としてパワプロの成長ステータスを貰っていたな。それにしても吾郎といつもトレーニングしていたからか、少しはマシなステータスなのかも……?）

『ステータスが解放されたため、習得のためのポイントも付与します』

今度は筋力などの数値が現れ、各項目にポイントが割り振られている。

大地はこれを使ってステータスを上げていくのだなと納得した。

せつかくだから少しだけ上げてみるかと思ひ、バランス良くなるようにポイントを割り振っていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覽

球速：90 km

コントロール：G+

スタミナ：G+

変化球：なし

◇野手基礎能力一覽

弾道：1

ミート：G+

パワー：G+

走力：G+

肩力：G+

守備力：G+

捕球：G+



一旦全てのステータスをG+にした。

F-に上げようか悩んだが、GからFに上げるポイントが、GからG+に上げるときよりもかなり多かったので、諦めることにしていた。

今はそれよりも特殊能力を習得してみても面白いと思っただ。

(んー、あんまり良いのがないなあ。まだ解放条件を満たしていないのかな?)

特殊能力はまだほとんど解放されておらず、何か条件が必要なのではと推測する。

それはステータスが解放されたときも、(一定の年齢)と(一定以上の身体能力)が必要だったというところ判断していた。

とりあえず大地は『ケガしにくさC-』を習得することにした。

これは『やや怪我をしにくくなる』といった特殊能力で、今後野球をやるのであれば確実に必要になってくる能力なのだ。

大地としては早めにマスター出来るようにしたいが、『ケガしにくさC』はまだ解放されていないため、当分は別の能力を上げつつ解放条件を達成するのを待つことにした。



「えっ!？」

「今日の試合が終わったら、横浜に戻れ。明日付けで一軍登録だ」

「は……はい!」

茂治は試合後、すぐに自宅に戻った。

大地と吾郎に早く一軍に上がったことを伝えたくて仕方がなかったのだ。

部屋に入つて2人を呼ぶが、風呂場で音がするのでお風呂に入っていると思い、風呂場のドアを開ける。

「大地!・ 吾郎!」

「え……ほ、本田さん!？」

そこにはTシャツに下着姿の桃子先生がお風呂を洗っていたのだった。

茂治は見ちゃいけないと思い、すぐに風呂場から出て行った。

(び、びっくりした……。まさか星野先生がいるなんて思わなかった。それにしても……白か……)

茂治も男なのである。

「さつきお風呂に入れてあげて、寝かしつけたところだったんです」

「あ……それでわざわざ風呂掃除してくれてたんすか」

桃子先生は勝手に洗っていたことを謝罪したが、大地達から茂治は二軍の遠征に同行していると聞いていたので、不思議に思っていた。

そのことを聞くと、茂治は子供達には内緒にしていたのだが、実がまだ引退していないこと、打者に転向した^{バッター}こと、そして明日から一軍に昇格が決まったことを桃子先生に話した。

桃子先生は自分のことのように喜んだが、吾郎は茂治が怪我でクビになったことに落ち込んでいた様子だったので、心配していたということ話を話した。

大地がフォローしてくれていたから吾郎はなんとか元気にやっていたが、本当は大地も同じ気持ちだろうという推測も伝えていた。

「そう……だったんですね。吾郎のことは気付いていましたが、僕も大地にいつも頼ってばかりだったので、きちんと見れていなかったのかもしれないかも」

星野先生、1つお願いがあるんですが……」



次の日、茂治が帰ってきたことに吾郎は驚くが、大地が問題ないと伝えると心配な顔をしつつも気にしないようにしていた。

茂治は寝ぼけたフリをして2人を見送ったあと、バットを持って外で素振りを開始した。

（大地……お前はもう気付いているんだろうな。でも吾郎に言わないでいてくれて助かるよ。吾郎、もう少しだけ待っていてくれ。俺に出来ることはお前達に背中を見せることだけなんだから……）

幼稚園で吾郎と大地がキャッチボールをしていると、桃子先生が2人呼び、今日の横浜―巨仁戦のチケツトを持ってきて一緒に観に行こうと誘った。

吾郎は喜んだが、大地が茂治に言わないといけなと言々と、桃子先生は茂治から貰ったチケツトだから大丈夫だと言って、3人で観戦に行くことになった。

試合は6回まで各チーム0点の投手戦となっていた。巨仁は優勝間近のため、横浜としてはこの三連戦での胴上げは阻止したいと奮闘していた。

「はい、これ飲んでね」

「あ、ありがとう」

桃子先生からジュースを貰って、大地は美味しそうに飲むが、吾郎はなかなか飲む

としない。

ルールが分からない桃子先生からすると、膠着状態はあまり面白そうではなかった。不意に吾郎が、

「ねえ、桃子先生……。おとさんはなんで今日来ないの？ チケットを俺たちに渡さないで、先生に渡したのはなんで？」

「えっ……」

吾郎の質問に桃子先生は答えられなくなっていた。

実は茂治に今日からの三連戦のチケットを預かり、茂治が出るまで連れてきて欲しいとお願いをされていたのだ。

そのことを言いたいが言えず、他に何か言うかと吾郎を傷付けてしまうのではないかと
思い、黙ってしまった。

(本田さん……)

「吾郎、黙って見てろ」

「大地……」

「おとさんが桃子先生と観に来てくれって言つたつてことは、何か意味があるんだ。それなら子供の俺たちがおとさんを信じないでどうするよ？」

大地は最初厳しく、そして後半は優しく吾郎に語りかけた。

どうなるか結果を分かっている大地だからだということもあるが、双子だから吾郎の抱く不安も痛いほどに分かっていた。

だからこそ、子供である二人が茂治を信じて待とうと伝えたのだ。

「う、うん。わかっ——」

『いったー！ 松居の24号ソロホームラン！ 宇働打たれた！』

9回の表、ついに巨仁が均衡を破る貴重な1点を取った。

吾郎達は落胆の声をあげて、試合は負けたと思つてしまつていた。

なぜなら9回の裏は下位打線のため、先発の牧原は打てないと思つたからだ。

9回裏、ワンアウト一死、ランナーなし。

「ボール！ フォア！」

フォアボールでワンアウト一死、ランナー一塁。

ここで監督が動き出す。

「主審！ ピンチヒッター代打だ！」

桃子先生はついに本田が出るか！と期待したが、出てきたのは違う打者バッターでガツクリとした。

しかもその打者バッターが三振になつてしまい、ツーアウト二死、ランナー一塁。

またもや、監督が動き出す。

「主審！ 代打だ！」
ピンチヒッター

桃子先生はベンチから出てくる選手を見て、大地と吾郎を呼ぶ。

大地も吾郎もきちんと見ていたので、とてもびつくり——実際は吾郎だけが——していた。

『9番、有働に代わりまして、バッター本田！ 背番号44！』

本田の代打アナウンスで会場内が騒然とする。

なぜなら去年まで投手をやっていた本田が打者として出てきたからだ。

（な、なんで!? なんでおとさんが出ているの?）

「吾郎、おとさんは引退なんてしていなかったんだ。多分だけど、肘を壊しても野球をやめられなかったんだよ。俺や吾郎のために、そしておとさん自身が野球を好きだから」

「……そうなの。実は大地君と吾郎君には内緒にして、一軍に上がったら話す予定だったみたい。」

もし打者転向を失敗したら、2人のことを悲しませてしまうことになるから。そんな顔を見たくないって言っていたわ」

「大地君には気付かれていたみたいだね」と少し笑いながら話す桃子先生。

吾郎は茂治を見ながら泣きそうになっていた。大地も涙が出そうになっていたのを

堪えている。

桃子先生が茂治の気持ちを代弁して話していく。

安藤監督が2人に硬球を使って野球をやらせようとしたときに本気で怒鳴り込みに行こうと思つていたこと。

硬球を小さい頃から使っていると怪我をしやすくなる。怪我をして投げられなくなる辛さは茂治が一番知つているからこそ、2人にはそんな目にだけはあつて欲しくないこと。

でも、茂治は大地と吾郎を一流の野球選手にしてやろうとは微塵も思つていないこと。

「僕は、大地と吾郎に普通に幸せになつて欲しいだけなんです。そのためなら、僕は僕の出来る全てであの子達を幸せにします。

打者バッター転向の勇気をくれたあの子達に応えるためにも——つておとさんは言つていたのよ」

吾郎は泣いていた。今まで隠していたことにはなく、茂治が自分一人で頑張つていたことが大地と吾郎のことを考えてのことだったことに。

そして大地も涙を流していた。知識としては分かつてはいたのだが、ここまで茂治茂治が自分達を大切に思つてくれていたのかということに胸を打たれてしまったのだ。

大地と吾郎は同時に席を立ち、最前列に走って行く。

ツーストライクで追い込まれている状態で、観客も元ピッチャーを使うなど野次を飛ばしている中を駆け下りて行く。

ピッチャーの牧原がウイニングショットのフォークを投げる。

「おとさん!! 打てえーろーろー!!!」

大地と吾郎の声に応えるかのように、茂治は牧原のボールに対してバットを思いつきり振る。

それは大きな放物線を描き、ライトスタンドのボールに当たる。

『は………入った! 入った!! 本田の代打逆転サヨナラホームラン!!』

『本田、野手転向の初打席でとんでもない大仕事をしましたあ!!』

アナウンサーと解説者も大興奮で実況をする。

大地と吾郎は茂治の勇姿に、涙を流しながらずっと見ていた。

(俺たちのおとさんは世界一のおとさんだ! 最高のおとさんだ!!)

第七話

「わあ！ こんなおつきく出てるう！」

吾郎は今日のスポーツ新聞の朝刊に茂治が出ていることに喜び、大地と一緒に茂治に見せに行く。

部屋に入ると茂治は神棚に手を合わせていた。

「……おかさんに？」

「ああ、ちゃんとお礼を言わないと怒るからな」

「お礼って……？」

「ん？ 打たせてくれてありがとう。これからも俺と大地、吾郎を見守ってくれ……つてな！」

大地はその言葉を聞いて、茂治の隣に行き手を合わせる。

吾郎も一緒に手を合わせていた。

茂治はその姿を見て、成長した我が子達を誇らしげに見ていた。

そのあと、新聞に出ている茂治を見たが、自身が3面にしか載っていないことを悔しがっていた。



「大したもんだ。まったくたまげたぜ。確かにお前のセンスは買っていたが……まさかあの場面でいきなりホームランを打つとは恐れ入ったぜ」

「ははっ！ たまたまフオークが落ちなかったからな。運が良かっただけさ」

「子供達も喜んだろ？ なんつったつけ？ お前んとこの双子」

「ああ。大地と吾郎と……それにお前がいなかったら今の俺は無かった。感謝してるぜ
茂野」

「……ふん。礼なら俺の投げる今日の試合でも打ってくれ」

軽口を叩き合う茂野と茂治だったが、ここで茂野が茂治に再婚について話を持ち出す。

「再婚……!?!」

「もう2年以上経ったんだ。千秋ちゃんだって許してくれるさ。子供のためにもその方がいいぜ」

（再婚かあ……でも相手がなあ……。それに、俺はまだ千秋が……）

茂治は子供達が千秋のお腹の中にいるときのことを思い出していた。

公園で千秋と子供の将来について話し合ったときのことだ。

茂治は思いやりのある優しく強い子になってくれたら嬉しいと言い、千秋は親の背中を見て育ってくれば大丈夫だと言う。

それが例え野球選手ではなくても、茂治のように夢に向かって頑張る子になるからと話していた。

そのときの幸せな気持ちを忘れられず…次に進もうとする足を止めてしまっていたのであった。

『打ったー！ー！！』 右中間真つ二つだあー！ー！』

8回裏、一死で一、二塁の場面。茂治は三塁打の逆転タイムリーを放ち、今日も活躍する。

その姿を桃子先生、大地、吾郎はスタンドで応援していた。

茂野が9回1失点の好投で、見事完投勝利で横浜が巨人に2連勝となった。

「じゃあお先！」

「お疲れー！」

茂治が我先にと控室から外に出る。

そこには疲れて眠ってしまい、桃子先生に背負われている吾郎とその隣に立っている大地がいた。

(……ち、千秋?!)

茂治は普段と違い、髪を下ろしている桃子先生を見て、千秋の面影を見てしまう。

思わず見入ってしまい、桃子先生に「どうしたんですか？」と心配されてしまうが、必死に誤魔化す。

そして帰りを送って行くといい、車の中で吾郎が茂治を褒めていたと伝える。

「吾郎君……私に言うんですよ。おとさん世界一かつこいーだろー！って……」

「いや……ははは。そんなにかっこよかったスかね……?」

「ええ……とても格好良かったですよ」

千秋に似た桃子先生に格好良かったと伝えられ、不意に胸が高鳴る茂治。

そして、以前大地と吾郎が「桃子先生なら新しいおかさんになってくれてもいいなあ」と言っていたのを思い出す。

「星野先生……1つ変なことを聞いてもいいですか?」

「……え?」

「星野先生にもし子供がいたら……その子に将来何になつてもらいたいですか?」

茂治は千秋と話したときの内容を質問にして桃子先生に聞いた。

この質問でやはり千秋とは違うと思いたかったのかもしれない。

しかし、桃子先生は少し考えた後に、

「そうですね……私は何になつても親の背中を見て育つてくれたら多分大丈夫だと思います」

その答えに茂治は驚き、この人しかいないと確信する。

そして、桃子先生の家に着いたときに意を決してデートに誘つたのである。

「あ、あの……先生……良かったら今度4人で動物園でも行きませんか……？」

「えっと、あの……そうですね！ 大地と吾郎のことをこんなに面倒見てもらっているの
でお礼です！ そう！ お礼です！」

桃子先生は少し考えて、「わかりました。今度のお休みに行きましょう」とOKをした。

その返事を聞いて、桃子先生と別れて車に乗る。

（よ、よっしやあぁー！ デートに行くのをOK貰ったぜ！ や……やったあぁ!!）
（……俺、相当空気なんですけど）

1人喜ぶ茂治と、いないことにされて少し寂しくなっている大地がそこにはいた。



「そりや、あんた狙われてるね！」

「……え？」

「当たり前じゃないの！ 相手は子持ちでもまだ30歳の色男なのよー？ あの双子ちゃんズが慕う幼稚園の先生と再婚を考えたって全然不思議じゃないわよ！」

「そつ、そんな……別に私はそんなこと……」

「あれ？何、あんたはその気もないのに動物園OKしたの？」

「そ、そうじゃないけど……私まだ本田さんのことよく分かっていないし……」

同僚と一緒に暮らしている美樹にからかわれながらも話していて、余計に茂治を意識してしまう桃子先生であった。

「あ、星野先生ちよつといい？ 昨日園児の父兄から聞いたことなんだけど……」

園長先生から本田兄弟と横浜スタジアムに行ったことを他の父兄の方に見られていたと報告を受けていた。

大地と吾郎は母親がいないことは不憫に思うが、文部科学省管轄の教育現場である幼

稚園の先生が鼻唄していると思われる行動は取つてはいけなさと注意を受けてしまう。

桃子先生はバツが悪そうにして、了承してしまうのであった。

その夜、動物園デートを断っているのを美樹に見られてしまい、

「なんだ、動物園断つちやつたんだ？ バレなきやいいと思うけどね。そりやあ園長先生は立場と言わなきやいけないんだらうけど。」

……仕事と恋愛かあ。桃子はあつきりと仕事を取つちやうのね」

「そ、そんなんじゃ……！」

「でも今の感じだと、本田さんにもそう取られても仕方ないわよ。本田さんと先の可能性を少しでも考えているなら、ちゃんと伝えた方がいいんじゃない？」

美樹の無責任ではあるが美樹自身の気持ちをはつきりと言われ、桃子は何も言えなくなつた。

そして少し考えて……決心したように顔を上げるのであった。

美樹はその様子を楽しげに見ながら、ビールを飲むのであった。

（他人の恋愛は楽しいわ！ 特に桃子は慣れていなそうだから、ここで背中を押しておかないとね！）

美樹はお節介もあるが、単純に楽しんでいただけであった。



茂治と子供達の休みの日、3人は動物園に来ていた。

「おとさん、おしつこー!」

「ほら、そこにトイレがあるから行っておいで!」

「俺も一緒に行くよ。行くぞ、吾郎!」

茂治は大地と吾郎を見送ってベンチに座って、色々と考えていた。

桃子先生に断られた理由を納得していた。確かに園児の父兄と仲良くなることは先生として良くないことだ。

それでも茂治は子供の将来について、千秋と同じことを言ってくれた桃子先生以外は考えられないと思っていた。

「本田さん……」

不意に後ろから話しかけられ驚く茂治。

そこには桃子先生がいた。

「ほつ……星野先生!? ど、どうしてここに!?!」

「今日までずっと色々と考えていたんですけど……やっぱりいてもたってもいられなくなつて……」

「でもまずいっすよ！こんなところまた誰かに見られたら……！」

桃子先生は慌てる茂治にどうしてもあつて話したいことがあつたと伝える。

茂治はそれを聞いても何がなんだか分かつていかなかったが、桃子先生の言葉を待つ。

「もし……もしこんな私なんかで、本田さんと大地君、吾郎君がいいのであれば……半年だけ待つていただけませんか!？」

「え……？」

「2人が卒園する来年の3月まで……そうしたらもう堂々と3人に会えますから……」

勇気を出して話してくれた桃子先生の気持ちを通じたのか、茂治は深呼吸を1回すると落ち着きながら桃子先生に自分の気持ちを話した。

「はい。10年でも20年でも待ちます。待つています」

「……ありがとうございます」

そのあと桃子先生は去つていき、大地と吾郎は戻つてきた。

茂治は上機嫌で嬉しそうな顔で2人にアイスを買つてやるぞと言ひ、吾郎は喜んでいたが、

「おとさん」

「ん？ どうした、大地？」

「良かったね。俺は応援してるから！」

そう言つて先に行く吾郎を追いかける大地。

茂治は見られていたのかと思つたが、一緒に吾郎と帰つてきたのを見ていたからそれはないと考へる。

(大地……お前は不思議な奴だな。まるで何でも知つているような奴に見えるよ……)
そう思いながら、吾郎に呼ばれて走つて2人の元へ行くのであつた。

第八話

今シーズン。横浜は最下位で終わってしまうが、茂治は代打成績15打数9安打3本塁打という見事な成績で、来シーズンへ向けて明るいスタートを切る。

「ほお……現役バリバリのメジャーリーガーを巨仁が獲ってきたつてよ」

「え、この人こんなにすごいのか？」

「去年メジャーで20勝もあげているピッチャーだからな。本当にすごいぞ」

メジャーという言葉を知らない吾郎は茂治に聞き、丁寧に教えてもらう。

それに対して、日本とアメリカだとどっちが強いのか質問するが、茂治はアメリカだろうと言う。

吾郎はそれにショックを受けつつも、茂治に期待を込めて話す。

「お、おとさん！ 打つてよ！」

「ん？」

「来年、このピッチャーが日本に来たら……絶対にホームランを打つてよね！」

ホームランを頑張つて打つよと言う茂治に、吾郎は絶対に打つと約束してとわがまを言う。

「ね！ 大地もそうだよね！」

「……」

「ねえ！ 大地つてば！ また勉強してるの!？」

「……ん？ ああ、ごめん。英語の勉強をした」

大地は千秋が他界する前から英語の勉強をしたいといい、教材を色々買って買ってもらっていた。

だが、実は前世で大地は4カ国語を話せていたので、この世界でも問題ないことを確かめていただけであった。

「大地は勉強もたくさんしているんだな」

「おとさん……まあね。一応外国人選手とも話せるようになっておきたいからさ」

吾郎にも英語の勉強を勧めてみたのだが、全く興味を持ってくれなかったため諦めていた大地。

（多分吾郎は追い詰められないと嫌いなことはしないタイプの人間なんだな）
そう納得してからは1人で勉強をするようになっていた。



「大地くーん！ 吾郎くーん！ あーそーそーぼーそー！」

寿也が大地達の家の前まで迎えに来てくれていた。

大地は先に寿也と外に出ていたが、トイレから出てきた吾郎が茂治に、

「あ、そだ。おとさん。今日は何月何日だっけ？」

「んー？ 11月6日だぞ？ それがどうかしたのか？」

「んーん、なんでもない。行つてきます……」

吾郎は明らかに落ち込んだ顔で外に行く。

茂治はそんな吾郎をチラリと見て、すぐに家の電話でどこかにコールする。

「あ、すみません。本田ですが……昨日お願いした件つてどうになりましたか……？」

大地は明らかに落ち込んだ顔をした吾郎に声を掛ける。

「吾郎、どうしたの？」

「おとさん、俺達の誕生日……忘れてるよね？」

「あー、そーいや昨日だったっけ？」

「え！ 大地も忘れてたの!？」

「むしろ大地君と吾郎君、昨日誕生日だったの!？ 昨日も遊んだんだから、教えてよ!？」

前世では自分の誕生日を気にする年齢でもなかったので、誕生日すらうろ覚え状態

だった大地に吾郎は驚く。

それ以上に何も聞かされていらない寿也も知らされていらないことに少しショックを受けていた。

「まあおとさんのことだから、忘れてるか何か用意してくれてるよ」

「忘れてたらだめじゃん——！」

「いや、その前に僕にも誕生日をちゃんと教えてって！」

キャッチボールをしながら、3人で誕生日について話しているが、それでも正確なキャッチボールをしているのはかなりの成長だった。

大地は能力を上げたいが、GからFに上げるときの必要ポイントが明らかに多いので、少し迷っていた。

ただ、ポイント自体はかなり貯まっているので、早めに使いたいとは思っている。

今日は軽く遊んだら、大地が「今日は疲れたから早めに帰るね」と言い出したので、吾郎達は心配しつつも早い時間に解散した。

「大地、大丈夫？ 風邪とか引いたの？」

「ううん、大丈夫だよ。今日はこのあと多分出掛けるだろうから、体力を残しておきたくって」

「え？ 出掛けるの？」

吾郎の質問はスルーして、大地は家のドアを開ける。

そこには出掛ける準備をしている茂治がいた。

「ただいま〜」

「おう、帰ったか！ ちようど良かった！ もう少ししたら出掛けるから、準備しろ！」

「え？ 大地の言ったとおりだ!! これからって……どこ行くの？」

「ん？ まだ内緒。とりあえずグローブは持って行けよ」

「えー！ でも見たいテレビがあつたのにー！」

そう駄々をこねる吾郎に大地は優しく微笑んで、茂治を見つめる。

茂治は大地の顔を見て、何か見透かされていそうな気がしたが、黙っていてくれるなら気にしなくていいかと準備を再開する。



「さあ、着いたぞー！」

茂治が車を運転してついた場所は横浜スタジアムだった。

吾郎は車を降りながら、なぜここに来たのかを茂治に尋ねるが「ついてこい」としか言わないので困惑しっぱなしだ。

そして、関係者入り口を抜けて、その先にある扉を開けると、

「わーっつ!!!」

そこには横浜スタジアムのグラウンドが目の前にあった。

いつも観客席で見ている光景ではなく、選手と同じ目線の光景のため、大地も吾郎も興奮を隠せない。

「吾郎！ あそこ！ バックスクリーンの電光掲示板を見て！」

————— H A P P Y B I R T H D A Y D A I C H I ! G O R O ! —————

そこには、『誕生日おめでとう！ 大地！ 吾郎！』と英語で書かれていた。

吾郎には英語が読めなかったので、大地が教えてあげるとものすごい嬉しそうな顔をして茂治を見た。

「ごめんな。1日遅れの誕生日で。昨日までイベントで球場を借りられなかったんだ。

でも今日は貸し切りだ。おとさん、6歳になったお前たちの球をここで捕ってみたかったんだ」

吾郎は嬉しそうな顔をして茂治に抱きつく。大地は嬉しそうな顔をして茂治に寄り

添い、頭を撫でられていた。

茂治とカクテルライトの下で交わしたキャッチボール。

この日を大地と吾郎は一生忘れることはないだろう。

く帰り道く

「ねえ、おとさん」

「ん？ 大地どうした？」

「誕生日プレゼントとか色々嬉しいんだけどさ……おとさんの打者バッター転向のときとい
い、あまり隠し事はやめてね。吾郎が毎回不安になつてるからさ」

「う……わ、分かった。気を付けるよ」

吾郎が疲れて寝入っている時に大地に窘められて、苦笑いをする茂治であった。

(言い方が千秋に似てきたんだよな……ちよつと怖かった……)

◇◇◇◇◇

2月1日、プロ野球キャンプイン。

開幕へ向け、主力組はここで心・技・体の全てを整え、そうでない者は一軍のベンチ入りやレギュラー獲りを掛けて、熾烈なサバイバルレースが始まるのである。

そして――

今年もまた活躍を義務付けられ、はるばる太平洋を渡ってくる男達がいた。

「吾郎！　そろそろ記者会見やるよ！」

「うん！　今行く！」

大地と吾郎は、メジャーリーグから日本にやってきたジョー・ギブソンの記者会見をテレビで見っていた。

超大物が日本の東京シャイアンズに来るとあって、日本中の野球ファンは大興奮していた。

「えー、では質問のある方どうぞ」

「ミスターギブソン、あなたは現役大リーガーでトップクラスの選手です。あんなあなたなぜ今日日本でプレーをしようと思ったのですか？」

あなたのような全盛期の超一流投手が日本に来たのは初めてと聞いていいのですが……」

隣にいる通訳の日下部がギブソンに英語で伝える。

ギブソンはその質問に表情を一切変えることなく、淡々と答える。

『金がいいから来たまでだ。700万ドルもくれりや、火星の草野球チームにだって行つてやるさ』

日下部は少し困惑したが、ギブソンの言葉をかなり柔らかくして「F Aを行使したフリーエージェントが、メジャーでは金額面で折り合わなかったので、一番評価してくれた東京シャイアンズに来た」と話した。

「日本のプロ野球について何か聞いていますか？ その自信のほどを、抱負を含めてお願いします」

『俺はメジャーリーガーだ。マイナーレベルと聞いているこの国のバッターに打たれる予定は入れていない』

日下部は顔面が真っ青になりながら、「と、とにかくチームのために頑張りますと言っています！」と慌てて誤魔化した。

そんな会見を見ていた大地は不満の顔を隠さなかった。

「ギブソンの今の言葉……通訳の人が内容をかなり変えてたよ」

「え、なんて言つてたの？」

大地は吾郎にギブソンが話していた内容をそのまま伝えると、吾郎は激怒していた。

ただ、こういうときのために英語を勉強しておいて良かったと実感する大地であった。

「あんなやつはおとさんが打っちゃうもん！ ギブソンなんて大したことないもん！」
「……だね！ おとさんに打ってもらおう！」

大地だけはこの世界で、茂治が今後どうなるのかを分かっていたため、複雑な気持ちでいたのだ。

しかし、ふとあることが大地の頭をよぎる。

（……あ、もしかしてだけど、ギブソンに頭にボールをぶつけられた日に病院に無理やり行ってもらえば、おとさんって助かったのでは……？）

茂治はギブソンにデッドボールを当てられたあと、病院に行かずにそのまま家で亡くなってしまうていた。

それをなんとか覆す方法があるんじゃないかとずっと考えていたのであった。



『この俺様を守るだど?! ふざけるなクソ野郎！ イメージなんかクソ食らえだ!! 俺は俺だ！』

これがメジャーのジョー・ギブソンだ！ イメージを気にしてこんな地球の裏側で野球なんかやれると思っっているのか！

次そんな真似をしてみろ！ その女の足首みたいな首をへし折ってやるからな!!」
『は、はい〜!!』

記者会見の帰り。通訳の日下部が、ギブソンの記者会見時の発言について気を付けるように窘めていた。

しかし、勝手に発言を変えられたことへ怒り出し、胸ぐらを掴んでふざけた真似を2度とするなど脅していた。

ジョー・ギブソン。未来の大スターもまだまだ若く、精神的にも未熟な人間であった。

時と場所は変わる。

オープン戦が始まり、球場で練習している茂治は、茂野に茶化されながらもギブソンについて話をしていった。

「昨日、早くもオープン戦でイーニングだけ投げたそうじゃねえか」

「ああ、テレビで観たよ。三者三振に仕留めたやつだろ」

「やつは本物だが、打てそうか？」と問い掛ける茂野に、とにかく楽しみだと言う茂治の顔は笑っていた。

茂野は茂治の余裕そうな顔を見て、こいつならなんとかしてくるのではないかと高校時代に思っていた期待を持つ。

その夜。遠征先のホテルで茂治は桃子先生に電話を掛けていた。

「もしもし。本田です」

「あ、こんばんは」

茂治は桃子先生と世間話をしつつ、大地と吾郎の様子も聞いていた。

「もうすぐ卒園式ですね。僕のキャンプも終わります。そうしたら……」

「……はい。待っています」

キャンプから戻り、家に帰る茂治。

大地と吾郎は茂治を出迎えて、コーヒーを入れたりしてのんびり過ごす。

そんな茂治を見て、大地は突然話し出す。

「おとさん……何か話があるんじゃないの？」

「……え？」

「おとさんを見ていれば分かるよ。いつもと雰囲気違うし」

「え？ 俺分からないよー？」

（大地……なんか全部見透かされてるのかな？ ……千秋と話しているときみたいだ）

茂治は千秋が生きていた頃を思い出して懐かしんでいた。

いつも何かあると千秋が促してくれたり、窘めてくれていたりしていた。

大地は千秋に似たんだろうなと思い、苦笑いをする。

「大地、吾郎。前さ、桃子先生なら新しいおかさんになってくれても良いって言ってたよな……」

「う、うん」

「もし本当にそうだったらどうする？」

「……え？」

「おとさんな、桃子先生のことを好きになっちゃったんだ。おかさんのことを忘れるわけじゃない……」

俺もお前達も……ずっと忘れることなんてできないと思うけど……おかさん、ゆるして……くれるよな……？」

茂治は涙を流して大地と吾郎に話す。

千秋を裏切ってしまったのではないかという罪悪感でずっと胸が一杯だったの
であらう。

大地も吾郎もそんな茂治を見て、母である千秋を思い出して泣いてしまっていた。

「……うん。桃子先生だったら、きつとおかさんも許してくれるよ……！」

第九話

今日は幼稚園の卒園式。

先生や友達に別れを告げて、新しいステージへ向かう大地と吾郎。

そして――

「いただきます！」

「はい、どうぞ。2人とも今日は格好良かったわよ！」

茂治と桃子は今日から正式に付き合うことになったのだ。

普段は大地がご飯を作っていたのだが、桃子が来たときは桃子が作ることになったので、大地としては大助かりだった。

（もう少しでおとさんが……これはなんとかしないとイケないんだけど、今はそれよりも……）

『卒園式を迎えたので、ボーナスポイントを付与します』

このメッセージが急に出てきて、ポイントを貰えたのだ。

何かのタイミングで貰えるポイントなのかな？と予測したが、ポイントを使うのは小學生に上がってからにしようかと決めていた。

そして——プロ野球が開幕した。

本田は代打だが、オーブン戦から要所できちんとして結果を残しており、一定の評価を貰っていた。

帰りの新幹線で明日からの巨仁戦でギブソンが先発すると新聞に書いてあり、茂治は対戦を楽しみにしていた。



「うわーん！ 目に染みるよー！」

「我慢するの！ 男の子でしょー！」

吾郎と桃子が一緒にお風呂に入っていた。

大地だけは頑なに桃子とお風呂に入るのを拒否していたが、吾郎は桃子に懐いているため嫌がることは一切しなかった。

（大地君、女性とお風呂に入るのが恥ずかしくなってきたのかな？）

そう思いながら、微笑む桃子。

そんな桃子を見ながら、吾郎は桃子に話しかける。

「ねえ、先生。おとさんといつ結婚するの？」

「え……!?!」

茂治が桃子のことを好きだと言っているが、桃子はどうなのかを聞く。

桃子も戸惑いながら、知り合つて間もないし茂治も今は大事な時期だからと言うが、

「大地がいるけど……やっぱ寂しいんだよ……。ずっと……ずっと一緒にいてよ先生。俺、先生ならきつとおかさんって呼べるもん……」

そんな吾郎を見て、茂治とのことを考えながら吾郎を抱きしめる桃子。

大地はお風呂場の外でその話を聞いていて、1人で微笑んでいた。

茂治が家に帰ってきて、桃子を家に送っていくと2人で出ていく。

「大地君と吾郎君も来週から小学生ですね」

「ええ」

「ランドセルとか買つてあげました？」

桃子の質問に茂治は忘れていたと頭を掻きながら言っていたが、桃子が明日横浜スタジアムに行く前にデパートで買つてこようかと提案する。

茂治もその提案に対して、お願いをすることにした。

「あ、危ないっすよ、先生」

話していると車が来てしまい、道の端に寄るが、茂治はまだ危ないと桃子の肩を抱き寄せて車が通り過ぎるのを待つ。

桃子は不意に抱き寄せられ、顔を赤くする。

「だ、大丈夫ですか？」

「は……はい」

桃子の肩を離して、声を掛ける茂治。

ふと目が合い顔を赤くするが：茂治はそのまま桃子を抱きしめる。

「先生……結婚してください。再婚で、子供がいて……何の保証もないまだ一軍半のプ

口野球選手ですけど……必ず幸せにします」

「……はい」

茂治と桃子は星空の下で口づけを交わすのであった。



『皆さん、こんばんは。今日は今季初、横浜スタジアムから横浜対巨人の試合をお送りします』

「あ！ 見て先生!! おとさんスタメンだよ、スタメン！」

「本当だ！すごい！」

(んー！ めじゃーのすごいピッチャーとおとさんの勝負がいつばい見れるなんてすげーっ！)

(お……おとさん……)

吾郎は興奮して落ち着かない様子だったが、大地は顔を真っ青にして落ち着かない様子であった。

桃子はそんな大地を見て、心配して声を掛ける。

「大地君、大丈夫？ 具合悪いの？」

「う、ううん。大丈夫」

今日は巨人がギブソンの先発で、茂治が野手として公式戦初のスタメンだ。

吾郎はオープン戦でギブソンの凄さが口だけではないことは分かっていたが、絶対に茂治なら打つてくれると信じていた。

1回表、横浜の先発茂野が三者凡退で調子の良さを見せつける。

『ミスターギブソン！ 1回の攻撃終わりましたよ！』

通訳の日下部がマウンドに行こうとせずに、帽子を顔に乗せて座っているギブソンに声を掛ける。

『なんだ、もう終わりかよ。しゃーねえな……。ちよつとキャッチボールでもしてくるか……』

ギブソンが日本プロ野球選手を小馬鹿にしたような言い方をして、ゆつくりと歩きながらマウンドに向かって行く。

近年、ほとんどの外国人投手がタイトル争いとは無縁で日本を去っていた。

だからこそジョー・ギブソンという超大物に誰もが注目していたのだ。

(あんなおつきい体で、一体どんな球を投げるんだろ……?)

(……)

吾郎はギブソンの身長198cm、体重105kgの大きい体格から繰り出される投球が想像出来ずにいた。

大地は顔を真っ青にして、祈るように手を合わせていた。

投球練習後、主審のプレイの声と共にギブソンがゆつくりと振りかぶる。

(見やがれ日本人ども！これがアメリカだ!!)

ギブソンは日本の選手にメジャーとの格の違いを見せ付けるように右足を大きく上げる。

その独特なフォームから凄まじいフォーシームがキャッチャーミットに投げ込まれる。

「ストライーク!!」

電光掲示板に表示されたスピード計には『158 km/h』と書いてあった。

その瞬間、横浜スタジアムがどよめき、大歓声上がる。

『な、なんだ! なんだこれは! ギブソンいきなり158 km/h! 来日してから公式戦1球目で井良部の持つ日本記録に並んだああ!!』

「な、何!? 大地君、吾郎君! 158 km/hってそんなにすごい!?」

「……」

大地と吾郎は違う意味で黙ってしまっていた。

吾郎はあまりの豪速球に。大地はその豪速球が茂治の頭に当たるのを想像して…。

ギブソンはオープン戦に調整で何試合か出てはいたのだが、いつも150 km前後のストリートを中心に投げ込んでいたので、この瞬間を目撃した人たちは同じチームメイ
ト、横浜の選手、審判、解説者、観客やファンも驚きで開いた口が塞がらなかった。

しかし驚くのはこれだけではない。ギブソンの2球目――

『ぬ、抜いたー! 159 km/h! なんと日本新記録を更新しました! 日本新

記録です!!』

「お、おい……あのスピードガン壊れてるぞ」

「んなわけねーだろ」

茂野と茂治は目の前の光景を信じられず、軽口を叩き合うが、それでもしないと雰囲気飲まれてしまいそうになっていたのだ。

このあとギブソンは三者三振で1回の裏を終えたのであった。

150 km/h後半のストリートを連発し、150 km/hのSFFを投げられると誰も手が出せなくなっていた。

『1回裏の横浜、手も足も出ません！ ギブソン、悠々と引き上げます！ これがメジャーリーガーなのか！ 恐るべし、ジョー・ギブソン！』

実況の声を聞いて、誰もがギブソンの球は打てないと確信していた。

そんな中、吾郎は1人興奮していた。

「すごいよ先生……世界には……世界にはこんなにすごい野球があるんだー！」

『ミスター！ ナイスピッチング！ あなたはすでに日本の球史に残る最速のボールを投げた男になったんですよ！』

『ふん。日本記録なんか興味ないね。俺の夢はあくまで世界記録の162.5 km/hだ』

『ひゃ……101マイル……』

ギブソンの言葉に、通訳の日下部はこの男なら達成出来るかもしれないと思う。

2回になっても両者譲らずだが、横浜が茂治のファインプレーなどもあり0点で抑え

ており、ギブソンは6者連続三振で余裕を見せていた。

そして3回裏。横浜の攻撃。

「あー！ おとさんだ！」

「頑張れー!!」

「……」

今の横浜で打てるのは茂治しかいないと解説も言っており、吾郎と桃子は期待しながら見ていた。

（おとさん……打て！）

（ふん、歯応えのねえ……3A以下じゃねーのか、この国のベースボールは）
マイナー

吾郎が応援する中、ギブソンは3A以下しかいない日本プロ野球で700万ドルという報酬にまさに『黄金の国ジパング』だと思っていた。

そして、ギブソンが振りかぶって第1球目——

『打ったー!! これは大きい！ 入るか!?』

茂治が打った球はライトのポールの右に逸れていき、ファールとなった。

距離的にはホームランでもおかしくなかったが、初球であそこまで飛ばした茂治に会場全体で期待が高まる。

「おっしー!!」

「すっげえ！ あのオヤジ155km/hを一振りで合わせやがった!!」

(ほお……この俺のファストボールをあそこまで飛ばすやつがJAPジャップにいたか!)

(来い、ギブソン！ 俺はストレートにはめっぽう強いぜ!)

茂治とギブソンはお互いに笑い合いながら2球目を迎える。

第2球目、158km/hのフォーシームを打つがキャッチャー後方に飛んでいきファール。

タイミングは合ってきているがツーストライクと追い込まれ、狙い球が絞れなくなつた茂治。

(次は……落ちる球か!? それともチェンジアップか!?)

ギブソンの第3球目。低めにボールが投げ込まれるが、茂治は手が出せずに見送る。

「ちよ、直球?!」

「ボール!」

(……そうか! やつにはメジャーのプライドがある! 自慢の速球をファールにされたら、尚更その速球で俺をねじ伏せるつもりだ! よし、それなら……!)

ワンボール、ツーストライクからの第4球。

インコースに放たれたフォーシームを茂治がバットを振り切る。

『打ったー!』

打ったと思ったが、ボールはギブソンのグローブに収まり、ピッチャーフライとなる。
「ああ〜！」

「何よお！キザな捕り方しちやつてきあー！」

「……」

茂治はバットを折られてしまい、悔しそうな顔をしている。

観客は落胆の声を上げるが、これでギブソンの連続三振がなくなったことと、茂治なら次の打席で打ってくれると期待を持つ。

（ホンダか……初顔合わせで俺のファーストボールに全て当ててくるとはな……覚えておこう。その名に恥じない優秀なメイド・イン・ジャパンだ！）

6回裏、各チームともに0点の投手戦となっており、ギブソンは現在ランナーをただの1人も出さないパーフェクトピッチングをしていた。

この回の最初の打者は茂治。吾郎は茂治にホームランを打ってほしいと話したことを思い出していた。

『7番、ファースト本田』

第1球目。アウトコース低めのフォーシームを茂治が見逃し、ワンストライク。

(あくまでストレート勝負か! ……望むところだ!)

2球目、3球目、4球目とファールになるが、茂治はボールに当てて食らいついていく。

そして第5球目——キャッチャーはギブソンに変化球のサインを出す。

(落とせギブソン! SFFなら100%三振だ!)

(バカ野郎が! ファストボールに強いやつは、そのファストボールでねじ伏せる! それが俺のベースボールだ!!)

ギブソンの渾身のフォアシームがインコースに投げ込まれるが、茂治の思いっきり振ったバットに当たる。

大地と吾郎、桃子はそのボールの行方を追っていく。

ゴン! と大きな音が鳴り、その音が鳴った電光掲示板に全員が注目したとき、全てを悟り、観客の大きな歓声が巻き起こった。

電光掲示板のスピード計には『160km/h』と表示されていた。

『は、は、入った——!!!! 音が鳴るまで誰も気付かなかった!』そして本田が! 160km/hの豪速球をバックスクリーン最上段にたたき込んだ!』

「や、やった——!!!!」

吾郎は桃子と大地に抱きつく。桃子も喜び、大地は嬉しいながらも複雑な顔をしてい

た。

(な……なんだとおお!? 俺の……)

茂治がゆつくりとベースを一周している中、ギブソンは後ろを一度も確認することなく、ただ立ち尽くしていた。

その後、ギブソンは動揺しつつもリズムを崩すことなく、後続の打者を三振で抑えて、6回の裏を終えた。

(あの、すごいピッチャーからホームランを打つなんて……やっぱおとさんはすごい！)

(……さすがおとさんだな。でも……次の打席が……)

吾郎は茂治のことを尊敬し、大地は次の茂治の出番に不安を隠せない。

『日下部、あいつは何者だ!?』

『え? 本田のことですか?』

『なぜやつは7番なんか打ってる……? 俺の160km/hを
バックスクリーン最上段まで運んだやつはメジャーにもいねえぞ!』

7回裏。2番からの好打順で、ギブソンの初球を石居が意表をつくセーフティーバントで転がす。

三塁手が捕つて一塁ファーストへ投げるが大暴投で、ランナー二塁となつてしまふ。

下手な英語で三塁手が謝るため、ギブソンをさらにイラつかせる。

その後、進塁打で一死ワンアウト、ランナー三塁。

外野フライでも1点のケースで、打者がアウトコースのフォーシームを見送り四球フォアボールとなる。

『今のがボールだとお!? このへボ審判!アッパイヤ どこに目をつけてやがんだ! この野郎!!』

コントロールに自信があつたギブソンの球をボールと判定されてしまい、どんどんヒートアップする。

一死ワンアウト、ランナー一塁、三塁。

(何? 1球ウエストしろだと? 訳のわからんサインを……出すんじゃねーよ!!)

スクイズ狙いを警戒して、キャッチャーが1球外せと指示を出す、ギブソンは指示を無視してフォーシームを投げ込む。

そのとき、3塁にいた選手が走り出し、打者がバントの構えをする。

『ここで畑山のスクイズだー!!!! 小フライになつたが、ギブソン捕れるかー!!』

ギブソンは懸命に滑り込んで捕ろうとするが、ギリギリで捕れずボールを逃してしまふ。

打者もセーフとなり、なおも一死、ランナー一塁、三塁。

(ス、スクイズだとおお!? 一死、ランナー一塁、三塁。1点リードしている7回裏に5

番打者がスクイズとは……)

日本のスモールベースボールとメジャーのギャップにギブソンは困惑し、冷静になれない。

次の6番打者も初球からスクイズをして、またまた成功し、2点目が追加される。

そして――

『7番、ファースト本田』

『さあ二死ランナー2塁の状況で、先ほどホームランを打っている本田です!!』

「いけー! おとさーん! もうメジャーなんて怖くないぞー!!」

「……ダメだ」

「え……?」

吾郎が叫んだ横で大地が否定の声を上げる。

観客は大歓声で本田コールが舞い上がる。大リーガーであるジョー・ギブソンに対して日本のプレーが通じると分かり、興奮が止まらないのだ。

ギブソンは周りの声が聞こえているのか聞こえていないのか分からないが、明らかに動揺していた。

そんな中、投げたギブソンの第1球目が――

「ダメだ!!! 避けて!!! おとさん!!!!!!」

――茂治の頭に直撃したのだった。

第十話

(ああ……何かの間違いで頭部へのデッドボールが起きなければいいと思っていたのに……)

大地は叫んだあと、泣きながら座り込んでしまった。

吾郎と桃子は現実をまだ受け止められないようだ。

「ほ……本田あ!!」

『デ、デッドボール!!ギブソンの初球が本田の頭部を直撃しましたー! これは大丈夫か!』

茂野が叫ぶが、茂治はバッターボックスに倒れていて動かない。

そしてギブソンはただただ呆然と立ち尽くしていた。

「担架だ! 担架を持ってこい!! 早くしろ!」

「てめえギブソン! バント攻めに腹立ててわざとやりやがったなあ! この野郎!」

「やめろ茂野!」

茂野が興奮をしてギブソンに殴りかかろうとするが、同じ横浜の選手に止められる。

「ギブソン退場!」

『今主審のコールが出ました！ ギブソン退場です！ 当然でしょう！ 158 km/hのストリートが頭部を直撃！ 危険球によりギブソンは退場となります！ しかし……しかし本田はまだ立てません！』

（いや……いやよ！ 立って、本田さん！）

桃子が最悪のことを考えてしまい、顔が大地と同様に真っ青になる。

吾郎も泣きながら茂治に立つよう大声で叫ぶ。

その声が届いたのか、茂治は問題なく立ち上がり、笑顔を見せていた。

（良かった……本当に良かった）

吾郎と桃子は茂治の無事を喜び、試合観戦を再開している。

しかし大地だけはまだ泣きながら、前を向くことが出来ずに俯いていた。

「大地……？ 大丈夫だよ！ ほら、おとさん立ったよ！ 元気に一塁にいるよ！」

「……」

大地がまだ泣いているのに気付いた吾郎は、必死に大地に話しかけるが反応がない。

その必死さは——双子だからこそ分かるのか——吾郎は大地の絶望を感じ取りながらも、大地から感じた絶望を否定しているようにも思えた。



『日下部』

『はい?』

『短い間だったが世話になったな。今週中にテキサス行きの航空チケットを手配しといてくれ……』

ギブソンの突然の言葉に日下部は真意を聞こうとするが、そのままベンチ裏に消えていくギブソン。

試合はそのまま再開し、本田のガッツ溢れる走塁もあり、横浜は追加点を入れていく。最後は今日の主役である茂治がボールを捕り、5対0で横浜が勝利した。

「本田さん。明日午前中に念のため精密検査しときましょう。一応当たったところが、当たったところですから」

「え、ああ大丈夫ですよ。別に……」

試合後にトレーナーから言われた精密検査を拒否する茂治に対して、茂野が自分も腰を張りがあるからついでに一緒に病院に行こうと言われ、渋々了承する。

茂治はいつものように誰よりも早く球場から出て、3人の元へ向かう。

「おとさん! お疲れさま! 今日すごかったね!」

「本田さん……怪我は大丈夫でしたか？」

「吾郎、ありがとな！ 先生、ご心配お掛けしました。この通りピンピンしてますよ！」
茂治が関係者口から出てきた際に、吾郎と桃子はすぐに駆け寄ったが、大地だけは俯いたまま立っていた。

「……ん？ 大地、どうした？」

「……………」

大地は何かを言おうとするが、すぐに俯いてしまう。

茂治は大地の珍しい行動を心配し、優しく語りかける。

「どうした？ 言いたいことがあるなら、はつきり言わないと伝わらないぞ？」

「……おとさん」

「ん？ どした？」

「今から……て」

「え？」

「今から病院に行つて！ すぐに！ お願ひ！」

突然大地が大声で叫び出すので、茂治は驚いてしまう。

吾郎と桃子も大地の変わりように驚いて口を開けてポカーンとしている。

「ど、どうしたんだ、大地？ 頭を当てたことなら、おとさんはこの通り元気だし、念の

ため明日茂野と病院に行くから大丈夫だぞ」

「……明日じゃダメなんだ」

「え？」

「明日じゃ遅いんだ！　今じゃないと……今じゃないと……ダメな……間に……合わないんだ」

大地は泣きながら茂治に訴えかける。

茂治はいつもならここまで取り乱すことのない大地に困惑している。

だが、大人として、親として愛する我が子^{大地}を抱きしめて話す。

「大地。心配してくれて本当にありがとう。そうだな。念のため病院に行こうか」

「……本当？」

「ああ、でも桃子先生を送ってからでもいいか？」

「うん！　おとさんありがとう！」

大地は泣きながらも笑顔になり、茂治を抱きしめ返す。

その後、少し落ち着いた大地は恥ずかしそうに茂治から離れ、その様子を見て苦笑いをした茂治は立ち上がり、桃子に話し掛ける。

「先生。そういうことなので先生を送った後に病院に行つてきますね」

「……はい。私も心配だったので、そのほうが嬉しいです。倒れたときは一瞬どうなる

かつて思っていましたから」

「ええ、それは僕も思いました」

車に乗り、桃子を家まで送る。

その道中は茂治、桃子、吾郎、大地と全員が本当の家族のようで、とても温かい空間が出来ていた。

「あ、そうだ。先生、来週にでもうちの親と会ってくれませんか？　そろそろ紹介したいんで……」

「は、はい！　……やだ！　何着ていこつかな……」

なんでもいと言う茂治に対して、「おとさんは裸の方がいいんじゃないの？」とボケて突っ込まれる吾郎がいた。

そして桃子を家まで送ったあとは、そのまま病院に向かう本田家。

（これで、これでおとさんは助かる……おかしさんは助けてあげることが出来なかったけど、おとさんだけは……おとさんだけは助けてみせる）

病院に着いた茂治は早速診察を受ける。

「頭を打つてから、今のところ何か目眩や立ちくらみのような症状はありましたか？」

「……いえ、特には無かったですね」

「ふーむ。それでは念のため精密検査もしておきましょうか」

そう言つて医師と茂治が移動しようとして立ち上がったところで、茂治が頭を抑えて倒れてしまう。

(な、なんだこれ……は……。だ、大地……ごろ——)

「……え!? 本田さん! 本田さん! 大丈夫ですか!? くそ、意識がない! ストレッチャーに乗せるよ! すぐに手術をする!」

診察室がざわめく中、外で待つていた大地と吾郎は何が起こったか分かっていなかった。

医師と看護師が外に出てきたとき、茂治がストレッチャーに乗せられていた。

「お、おとさん!」

「ああ、本田さんのお子さんかね!? お父さんが急に倒れてしまったので、今から緊急手術をすることになった!」

「え……お、おとさんは助かりますよね!」

大地は医師に詰め寄るように話すが、医師は「全力を尽くす」としか言わない。

そのまま手術室に運び込まれる茂治。

吾郎は真つ青な顔になって大地に「おとさんは助かるよね!」と言うが、大地は何も言えなくなつていた。

(おとさん……………これでも間に合わないのか……………? おかさんのときみたいにおとさんま
で奪うのか……………神様……………!)

大地は精一杯やっていた。彼なりに一生懸命やっているが、それでも抜け落ちている
部分が多い。

それに気付くのはもつと——そう、もつと先のことになるのだが、今の大地にはおと
さんが助かるように祈るしか出来ない。

数時間経った頃。「手術中」というランプが消え、医師が手術室から出てくる。

大地と吾郎は出てきた医師に手術の結果について詰め寄る。

「おとさんは!? おとさんは助かったの!?!」

「……………申し訳ございません。全力を尽くしたのですが……………」

「……………え?」

(……………え? ……嘘だろ? ……だつて……………原作よりも早く病院に行ったじゃんか……………。早

く行けば助かるんだろ!?! ……嘘だつて……………嘘だつて言ってくれよ!)

大地は医師の言葉を信じていることが出来ず、床に座り込んでしまう。吾郎は呆然としながら、ふらふらと茂治のところへ近付いていく。頭の中では千秋が亡くなった際の出来事がフラッシュバックしていた。



「ねえ、おとさん。おかさんはいつ起きるの?」

吾郎は茂治に抱っこされながら、千秋がいつ起きるのかを聞いている。

大地はその横で茂治に頭を撫でられているが、俯いて涙を流すだけだった。

「おかさんはもう起きないんだ、吾郎……」

「え!? どうして!」

「おかさんは死んだんだ。死んだ人はもう目を開けることもなければ、喋ることもしないんだ……」

でもな……おとさんは悲しくなんてないぞ——悲しいわけではないじゃないか……。おかさんとは、ほんのしばらくお別れするだけなんだ。

おとさんと大地、吾郎が一生懸命生きていけば——」

——いつかまた天国で必ず会えるから……

茂治は涙を流しながらも気丈に振る舞い、大地と吾郎に不安を抱かせないように優しく話す。

吾郎は「死」というものを理解してはいなかったが、千秋とこれでお別れになるということは分かったのか涙を浮かべていた。

「さ……大地、吾郎。おかさんとしばらくお別れの握手をしよう」

「おかさんの手……冷たいね」

「おかさん……また……ね」

吾郎と大地は千秋の手に触れて、最後のお別れをする。

吾郎の千秋の手が冷たいという言葉に、茂治は「天国に行った人はみんなこうなるんだ……」と話していた。



「おとさん……ねえ起きてよ……」

吾郎は手術台の上で横になっている茂治に近付き、手に触れる。

少ずつ失われていく茂治の体温に、吾郎は千秋の死の場面を鮮明に思い出してしま
い、思わず尻餅をついてしまう。

大地は吾郎に声を掛けなきやと思っているが、身体が動かず、目から溢れてくる涙を
抑えることが出来なかつた。

（俺が……こんなときこそ俺がしつかりしなきやいけないのに……。なんで身体が動か
ないんだ。なんで涙が止まらないんだ。

——俺が、兄である俺が吾郎を支えなきやいけないのに……！）



雨の降りふりしきる頻る早朝。日下部はあるマンションの呼び鈴を鳴らし、部屋の中に入ってい
た。

そこには本を読みながら寛くつろぐぐー人の男がいた。

『早朝からお邪魔して申し訳ありません』

『なんだ？ テキサス行きの手ケットは取れたのか？』

日下部に話し掛けられても振り向くこともなく淡々と話す男。しかし、日下部は自分の一存で勝手なことは出来ないと話す。

700万ドルも払った助っ人にたったの一敗で帰国されては、自身のクビが飛ぶからだ。

『今日は何が不満なのかの話を伺いに来ただけです』

男はふんと鼻を鳴らすと本を閉じて立ち上がり、雨が降る景色が見える窓へ歩いていく。

『まったく……昨日は信じがたい悪夢を見させてもらったよ……。最高に胸くそ悪い夜だったぜ。』

俺はベースボールをやりに来たんだ……だが、日本この国にはヤキユウとやらはあっても、ベースボールはなかった。……それだけのことさ』

日下部は昨日の試合を思い出し、バント攻撃のことかと男に聞く。

男は笑いながら、そんな言葉があること自体がクレイジーだと答える。

『残念ですがミスター……あれが日本のベースボールです』

点を取るために最も確率の高い方法を使って全員で協力していくこと、そのためには選手は監督の命令を拒否できないこと。

選手、監督はオーナーの駒としてチームを、会社を勝利させなければならぬと伝え

る。

『……それでファンは喜ぶのか?』

『ええ……鼻^{ひいき}頂のチームが勝てばファンは喜びます』

『……話にならない』

『ですがミスター。少なくともあなたの昨日のピッチングは、十分に日本のファンを痺れさせたはずです!』

それをたかがバント攻めに屈して帰ったら——あなたはただの160km/hを出した“腰抜け大リーガー”として日本人の記憶に残るだけですよ!』

たかが6ヶ月。プロなら報酬分の仕事はしてから帰るのが筋^{すじ}だと日下部ははっきりと伝える。

男はそれに対し怒りを滲ませるが、日下部の携帯に着信が来たため話が中断する。

「……え!? そ、それは本当ですか!」

日下部は驚き、何度も確認するが間違っていないことが分かり、絶望したような顔で電話を切る。

そして顔を青くしたまま、男に話しかける。

『ミ、ミスター……』

『なんだよ』

『き、昨日あなたがデッドボールで当てた……横浜の選手が亡くなったそうです……!』
(な……!? なん……だと……!?)

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

桃子はいつものように朝から洗濯を干していた。

電話が鳴ったため、中断し電話に出る。

「はい、星野です」

「早朝から恐れ入ります。三船救急病院ですが、星野桃子さんはいらつしやいますでしょうか?」

「はい。私ですが」

「ありがとうございます。星野さん、本田茂治さんという方はご存知でいらつしやいますでしょうか?」

「は、はい」

「じ、実は——」

桃子はあまりの出来事に話の途中で受話器を落としてしまう。

床にへたり込み、呆然としていると一緒に暮らしている美樹が何事かと声を掛ける。

「ちよつと桃子！ どうしたの!？」

「……ほ……本田さんが……」

(そ、そんなことって……本田さん……！)

第十一話

『えー、本田選手は昨夜病院を訪れ、検査中に頭を抑えて意識を失いました。その後、緊急手術になりましたが、容態が回復することなく亡くなりました。』

死因は、昨夜ギブソン投手から受けた右側頭部への死球による“とうがいなきけつしゆ頭蓋内血腫”であり
ます』

「し、信じられん……。昨日の試合ではあんなに元気だったのに」

病室にはベッドに横たわる茂治とその横で顔に何の感情もなく立つ大地と吾郎がおり、そして茂野をはじめとした球団関係者が沈痛な面持ちで3人を見ていた。

「では、葬儀の段取りはそんな感じで……」

「はい、よろしくお願いします」

球団の管理部長と茂治の兄夫婦が病室を出たところの廊下で今後について話をして
いた。

両親を失った大地と吾郎の引き取り先の話になったところで、茂治の兄が両親も年金
で細々と暮らしているため自分が引き取るしかないと話すが、妻が勝手に決めるなど反

対をする。

2人が揉めている様子を見て管理部長が困惑していたところに、桃子が現れる。

「あの……本田さんの部屋はこちらでしようか？」

「は、はい」

茂治の兄は突然現れた桃子に驚くが、お辞儀をして入っていく桃子を見送る。

桃子が病室に入ると、大地と吾郎が振り返る。その先にいる茂治を見て、呆然とする桃子に吾郎が話しかける。

「先生……おとさん、死んだんだって……。もう目を覚まさないんだって……」。

……でもね、俺ちつとも悲しくないよ……。だっておとさんが言ってたもん。

天国に行った人とは、ほんのちよつとの間だけお別れするだけだって……。俺らが一生懸命生きていけば、また天国で一緒になれるんだって……。

だから……。だから今だけ……。ほんの少しの間だけ——」

—— さよなら。おとさん。



茂治にお別れを告げた大地と吾郎、そして桃子は病室から出てきたところで茂治の兄に話し掛けられる。

「今日からうちで一緒に暮らすんだ」と告げられるが、大地と吾郎は桃子から離れようとしない。

茂治の兄は優しく2人を説得しようとするが、声を揃えて桃子と一緒にいると言つて譲らない。

そこに革靴が歩く音が廊下に響いてくる。

大地と吾郎は足音がする方向へ振り向き、歩いてくる人物に対して驚いた顔をする。遅れて桃子や茂治の兄、茂野達も振り向き、警戒心をあらわにする。

「ギ、ギブソン……この野郎お……ヌケヌケとどのツラ下げて——」
「よせ茂野！」

突然現れて、何も言わずに病室に入っていくギブソンに対し、茂野は殴りかかろうとするが管理部長に止められて舌打ちをする。

ギブソンは横たわっている茂治の顔を見るが、感情を押し殺しているのか無表情のままだ。

騒然とする廊下で日下部が全員に対し話し始める。

「皆さん……これはミスターギブソンからのお悔やみの言葉として申し上げます」

茂治へのデッドボールに対する謝罪、しかしそれはスポーツで起こりうる不慮の事故であり決して故意ではないということ。

今後は2度とこのようなことがないように茂治の分まで日本球界の発展のために尽くしていくことを伝えた。

大地や吾郎をはじめ、全員は黙って聞いているしかできなかった。

ギブソンが病室から出てきて日下部と一緒に帰ろうとしているところで、管理部長の声が廊下にポツリと響く。

「仕方あるまい……やはりあれは事故だったんだ。心から懺悔していなければ、葬儀より前に駆けつけるなんてなかなかできることじゃないよ」

誰も何も発することが出来ない。

分かつてはいたのだ。ギブソンが故意に茂治にぶつけたわけではないということに。

しかし、茂治を失ったという現実を受け入れることが出来ず、何かに当たらないと気持ちの整理ができなかった。

そこに、小さな影が走り出したのを全員が視界の端に捉える。

「バ、吾郎君!」

吾郎が突然走り出し、帰ろうと後ろを向いていたギブソンの足目掛けて体当たりをした。

しかし鍛え上げられたギブソンの身体に吾郎は跳ね返され、尻餅をついてしまう。

何かにぶつかつた衝撃を感じてギブソンは後ろを向くが、そこに一人の少年が倒れていて、自分を睨んでいるのが分かつた。

(本田の……息子か……?)

「か……返せ……」

ギブソンは吾郎が何を言っているのかが理解できていない。

しかし吾郎は泣きながら、さらに言葉を発する。

「返して……俺のおとさんを返してよぉ〜!!」

ギブソンは日本語を理解していなかったが、吾郎が何を言いたかつたのかを理解した。

だが、彼にはこの言葉しか出てこなかった。

『Sorry boy……』

いや、他にも言葉はあつたのだ。言葉を尽くして謝罪をしたかつた。

しかし、今の自身が何を言つてもそれは故人を冒瀆茂治してしまうのではないかという恐れから、言葉を飲み込んでいた。

泣き崩れる吾郎と立ち去るギブソンを見て、全員が何も言えずにその場に立ち尽くしていた。

「あの……私、大地君と吾郎君を引き取ります」

「えっ!？」

ギブソンと吾郎のやり取りを見ていた桃子が、突然大地と吾郎を引き取りたいと言いつ出す。

それを聞いて、全員がさらに困惑してしまうのであった。



ギブソンは日下部と一緒に車に戻ろうと歩いていた。

『ミスター……』

『日下部……何も言うな』

『……ですが』

『今の俺達が何を言っても、それは彼の家族を傷つけてしまうだけだ……それに……俺には彼らに対してどう償えばいいか分からない……』

ギブソンの言葉を聞いて、何も言えなくなってしまう日下部。

病院の外に出て、駐車場に向かおうとしたギブソンに一人の少年が立ち塞がる。

「坊や……何か用かい？　ギブソン選手へのサインなら……」

『日下部。彼は違う……本田の息子だ。……もう一人のな』

『……えっ!?!』

驚きながら、少年の顔を見る日下部。

そこには確かに先ほどギブソンにぶつかってきた少年と同じ顔をした男の子だった。

ギブソンと大地は目を合わせるが、言葉を発しない。

数分ほどそのまま立っていたが、大地が話し出す。

『ミスター……父の最後を見て来てくださってありがとうございます』

そう言つて頭を下げる大地。

ギブソンは年端もいかなない少年が英語を話したことに驚いたが、父を失ったばかりなのに、その原因となった自分に対してお礼を言ったことにさらに驚いた。

『父は……野球が本当に好きでした。あなたのような偉大な投手と勝負が出来て、本当に嬉しかったと思います』

ギブソンはその言葉を聞いて、今まで我慢していた感情が溢れ出してしまった。

吾郎のときは耐えられたのだ。ああやって——言葉は通じていないが——自分を罵ってくれた方がまだ心が軽くなったのだ。

しかし、大地の言葉を日下部を通さずに直接聞いてしまったことで、耐えきれなくなつてしまった。

『……なぜだ？　なぜ君は俺を罵ってくれない!?　俺は……俺は君の父親を奪つてしまったのだぞ!』

『……はい。父を失つたことはとても悲しいですし、今も許せません』

『ではなぜ!?!』

『……違うんです』

『え……!?!』

『許せないのは、助けられなかった“自分自身”です。原作知識知はあつても、防ぐことが出来なかつた自分自身が許せないのです』

ギブソンは混乱していた。大地が何を言っているのかが理解出来ないのだ。

(知識……だと……?　彼は何を言っているんだ?　このくらいの少年の年齢で助けられるわけがないだろう)

ギブソンは大地が原作知識を持っていることは知らない。

だから知識という言葉が何を指しているのかを分かっていないのだ。

ギブソンの混乱は構わずに大地は話し続ける。

『父を助けられなかった事実は変えられませんが。だから……俺はミスター、あなたにも背負っていただきたいのです』

『……』

『私は家族を助けられなかったです。でもあなたには家族がいますよね』

事実、ギブソンには妻と息子、そして娘がいた。

大地くらの年齢でまさか自分に家族がいることを知っているとは思わなかったが、何も言わずに続きを聞く。

『だから、あなたはご自身の家族を大切にしてあげてください。俺たち^{大地と吾郎}のために野球をするのではなく、あなたを見に来てくれるすべてのファンや、あなたの大切な家族のために野球を続けてください』

——いつか俺たちがあなたを倒しにいく、その日まで



次の日。茂治の葬式が兄の義治の家で行われようとしていた。

「ほら！ 早く朝ご飯食べて支度しなさい！ もうすぐお葬式が始まっちゃうわよ！」

義治の妻である良枝が、娘2人に対してご飯を食べるように促していた。

長女は新聞を見ながら茂治が有名人だったことに驚いていた。

「ねえ、お母さん。いとこの大地君と吾郎君はうちで引き取るの？」

次女の質問に良枝は桃子が引き取るから助かったと返事をする。

弟が欲しかったと次女は言うが、双子の男の子の面倒を見るのは面倒くさいと切り捨てる。

「へえ。遺族には球団から補償金4, 800万円出るんだってー。養子にしとけばこの家のローンも返せたのにねー」

長女その言葉聞いて良枝は驚き、少し考える。

そこに義治が弔問客の応対をしてくれとリビングにやってくる。

良枝はそんな義治を呼び出して、物陰で話をするのであった。



葬儀の後、茂治の遺骨を持った桃子に話があると良枝が家のリビングに呼び出した。

「え!? 大地君と吾郎君を引き取る!？」

「しっ! 二階の2人に聞こえるでしょ!」

「な……なんで……? 昨日は私が引き取っても良いって仰ったじゃないですか!」

困惑する桃子に良枝は血の繋がらない桃子に預けるのはどうかと思つたなどともつともらしい話をする。

桃子は責任感などではなく、大地と吾郎だから引き取りたいのだと一生懸命に熱意を伝える。

それでも良枝は大地と吾郎を引き取る権利は桃子にはないことを冷たく伝えて、さらに2人の将来を考えると言う。

（ふん、どうせあなたも大金背負しよっつたあの子達が目当てだったんでしょ! そうはいかないわよ!）

「そういうことですから、星野さん。仕方ありませんでしょ?」

「……わ……分かりました」

納得していないが、渋々了解する桃子。

そしてそのまま家を出ようとする桃子に義治は2人を呼んでくると伝えるが、

「いえ、2人はぐずるといけないので……このまま失礼します」

「そ、そうですか……」

「それと、あの……」

「は、はい？」

「大地君と吾郎君のことをよろしくお願いします……幸せに……してあげてください……」

泣きながら義治に訴え、走って家を飛び出す桃子。

その様子を良枝は「大金が入らなかつた悔し涙」と吐き捨てるが、

「ば、馬鹿野郎！ 金が目当てであんな若い子が他人の子を引き取るなんて言えるかい
!!!」

良枝にそう怒鳴り、2階に駆け上がる義治。

部屋に入り、長女とゲームをしている大地と吾郎の肩を掴んで質問する。

「大地君、吾郎君！ これは大事なことから、自分達で考えて決めるんだ」

「「え……？」」

「2人は誰と一緒に暮らしたい!? おじさんとおばさんかい？ それとも桃子先生かい!?」

急に質問をされて戸惑う大地と吾郎。

煮え切らない態度を取る2人——特に吾郎——に対して、厳しくもはっきりと伝える。

「男の子ならばつきりとしなさい！ 2人は桃子先生が一番好きなんだろ!? お母さんになつて欲しいんだろ!?!」

「……うん!」

「分かった!」

返事を聞いた義治は吾郎を抱え——自分で走れると大地は拒否した——家の外に出て走り出した。

そのときに義治も昔野球をやっていたこと、茂治にも野球を教えていたこと。茂治がプロ野球選手になったときは羨ましくて、自分にも息子ができたら野球をやらせたかったこと。結果は女の子2人になつてしまつたけど、大地と吾郎が養子になつてくれたらついに夢が叶うと思つていたことなどを話していた。

「でもいいんだ、そんなことは。それよりも君たちが一番幸せなことは桃子先生と一緒にいることなんだから……」

義治が走り出して数分で歩いている桃子の背中が見える。

大地も息を切らしていたが、一生懸命についていく。

「ほ、星野先生！」

「……ほ、本田さん」

突然現れた義治と大地、吾郎に困惑し、「お別れはいいって言ったのに」と泣きそうな顔をする。

吾郎を背中から下ろした義治は息を整えて桃子に話す。

「星野先生。もしよければ大地君と吾郎君を預かつてもらえませんか？」

「……え!? ど、どうして……だって奥さんは……」

「いいんです！ うちなんてどうでも！ 大切なのは……あなたが今、世界で一番大地君と吾郎君を愛しているってことです！」

そして、2人があなたを選んだ……もう我々には何もいう資格はない。きっと弟もそれを望んでいるはずだ」

その言葉を聞いて泣き出す桃子。

大地と吾郎は桃子のところへ行き、お互いに抱きしめる。

——大地君と吾郎君のこと、幸せにしてやってください。千秋さんと茂治のためにも

〈
幼
少
期
編
完
〉

第二章 リトルリーグ編 第十二話

ある晴れた日のこと。桃子はお墓の前で手を合わせていた。

（あれからもう3年……不思議なものです。悲しみは時が癒してくれるといいですが、最近やつとあなたのアルバムを懐かしく眺めることができるようになりました。）

大地君と吾郎君は元気です。仕草や目元が、日に日にあなたに似てきてドキッとさせられます）

「大地ー！　いくぞー！」

「おー！　……つてどこ投げてんだよ！」

「あー、わりー！」

「だ、大地！　吾郎！　こんなところでキャッチボールなんてしないの！　お墓に当たったらどうするの！」

「大丈夫、大丈夫！　大地ならなんでも捕ってくれるから！」

「そういう問題ではないの！」と桃子に叱られながらも、茂治の墓に手を合わせて挨拶

をする大地と吾郎。

（おとさん、おかさんと仲良くやってる？　俺ら、今日から四年生だよ。もちろんリトルリーグに入るつもりさ。

大地と一緒にトレーニングを積んできたけど、その成果を出していいこうと思ってるんだ。

見ててよ、おとさん。今日から俺たちで……おとさんに一歩ずつ近付いていくかんね！）

（おとさん、あれからもう3年が経ったんだね。おとさんが死んじゃったとき、母さんと吾郎がいなかったら俺はきつと潰れてた。

立ち直ってからは、家族に恩返しすることだけを考えて今までやってこれたんだ。

おとさん、見てて。絶対に吾郎を潰させはしないから。俺が……兄貴として絶対に守るよ！）



茂治の墓参りの後、学校まで車で送ってくれた桃子だが、門の手前で吾郎が降ろせとわがままを言う。

桃子は、子供とは成長すると母親をどんどん煙たがっていくのかと残念に思っていたが、

「あれ？ 大地は降りないの？」

「ん？ 当たり前じゃん。母さんがわざわざ送ってくれるのに、門までお願いしないでどうするのさ？」

「だ、大地……！ あんたはなんでそんなに素直なのに……双子の吾郎は性格似てないのかなあ〜」

「あはは。むしろ吾郎の態度の方が年相応なんじゃない？」

門まで送ってもらった大地は桃子に礼を言つて、門のそばで走ってくる吾郎を待つ。

「あ！ 大地ずるいぞ！ 一人だけ先に行くなんて！」

「そう思うなら、お前も母さんに門まで送ってもらえば良かったじゃないか」

正論を言う大地に吾郎は何も言えなくなる。

大地は軽く笑い、クラス替えを見にいこうと促す。

四年生用の下駄箱の先に“新年度四年生クラス替え発表”という張り紙が貼られている。

吾郎は新しいクラスに三年生まで仲良くしていた友達がいなく、その友達は全員同じクラスという己の不運さに絶望する。

「おっ！ また同じ組かー！ やっぱり俺たち離れられない運命にあるんだなー！」

「また3年間よろしく頼むぜ、小森くん！」

「い、痛いよ沢村君！ 100円あげるから手を離してよー！」

小森と呼ばれた少年は、同じ年の男の子にヘッドロックをされており、100円を支払って離してもらっていた。

しかしその後、ランドセルを3人分持たされて教室まで運ぶように強要されていた。

その様子を見ていた吾郎はバカらしいと一瞥していた。

「お、吾郎。俺ら同じ組じゃん！」

「……え！ そうなの!? やったー!! 大地と一緒にならもう大丈夫だ！」

大地とは低学年のときは違うクラスだったため、同じクラスになれた喜びで小森たち
のことはすでに忘れてしまっていた。

HRが始まるため、急いで教室に向かう2人。

「あー、今日から3年間、みんな仲良く勉強に運動に頑張っていこうな！」

クラスの担任の挨拶の後、学級委員を決めたいという話になる。

学級委員長をやりたい人がいるか立候補を募るも誰も手を上げない。

そんなとき沢村と呼ばれていた少年が手を上げる。

「おお！ 沢村が立候補するか！」

「いえ、僕は体力的に自信がないので……小森君を推薦したいと思いまーす！」

急に推薦されて困惑する小森。しかし沢村の取り巻きも賛成をして、担任が小森に決定しようとするが、

「先生！ 私やります！」

「おお！ 清水が立候補するか！」

担任は嬉しそうにし、小森はホツとして、沢村は邪魔をされて嫌そうな顔をする。

吾郎は隣の席に座っていた清水に「物好きだな」と言うが、

「うるせー！ 明らかなイジメを見て見ぬフリをして平気なあんたらよりマシだろー！」

その言葉を聞いて凶星をつかれた吾郎がカツとなつて立ち上がろうとするが、前の席に座っている大地に止められる。

そして大地が代わりに立ち上がる。

「だ、大地……」

「吾郎。言いたいこともあるかもしれないが、自分から嫌だつて言えない奴だつているんだ。自分基準で意見を押し付けるな」

「でもさ——」

「えつと、清水さんだっけ？ うちの弟がごめんね。結構カツとなりやすいやつなんだけど、悪いやつじゃないんだよ」

「い、いいよ。私も言い方悪かったし」

お互いに謝るように促して、仲直りする2人。

担任はその姿を見て、今年のクラスは仲良くなりそうだなと笑うが、

「先生。そりやないでしょ」

「な、なんだ？」

「いやいや。今の光景を見て、小森がイジメられてるなんて誰でも分かるのに、無視して学級委員長を押し付けようとした先生に問題があるって言ってるんですけど」

「なんだと!？」

「何か間違ったこと言っていますか？ 清水さんやうちの吾郎がイライラしてしまっ

たのも、それが原因でしょ」

「な、なんだその口の利き方は!？」

一旦騒動が収まったにも関わらず、火に油を注ぐ大地。

大地は原作時にも不思議に思っていた。この担任無能がいるから、清水が吾郎と変未来の妻に揉めることになったのだと。

優先すべきが吾郎の幸せのため、この担任にははつきりと言っておこうと思つていた。

そのせいで今後小学校にいる間、この担任に目をつけられることになってしまったの

はまた別の話である。

結局、立候補以外の学級委員はジャンケンで決めることになり、清水も吾郎も委員に入ることはなかった。

そして放課後。

「やめてよー！ 僕の靴返してよー！」

大地と吾郎は、校庭で小森がまた沢村達に虐められているのを目にする。

2人は目を合わせて、お互いに移動する。

沢村が、小森の靴を池の中に向かって思いつき蹴り、小森はジャンプするが靴に届かなかった。

「ああつと、キーパー取れません！ 入るかー!?」

靴が池に向かって飛んでいった時に、大地がジャンプをして靴をキャッチする。

そして沢村達に向かって睨みつける。

「て、てめー！ 何しやがる！」

「……は？ お前こそ何してんの？」

大地はHRのときの担任の態度のせいでキレる寸前だったため、いつもよりも強い口調で沢村達に話す。

今回吾郎が素直に従っているのも、こうなつたときの大地の恐ろしさを何回も味わっているからだ。

大地はもう一つの靴を拾い、小森のところへ行つて靴を履かせる。

「大丈夫？」

「……う、うん。ありがとう」

「お前、確か本田とか言つた……うわああ！」

沢村は大地のところへ歩いて行き、何かを言おうとしたところで派手に転ぶ。

吾郎が足を掛けて転ばせていたのだ。

「おいおい。俺のことも忘れないでくれよ」

「……く、くそ！ おい！ お前ら行くぞ！ このままで済むと思うなよ！」

そう言つて立ち去ろうとした沢村達の前に大地が立ち塞がる。

「……は？ お前、このまま帰れると思うなよ。……選べ」

「……え？ うわ！」

「小森に謝るか、俺らにゴコゴコにされるか好きな方を選べ」

そう言つて、沢村の足を引つ掛けて再度転ばせる。

上から見下ろす大地の顔が沢村にはとても恐ろしく感じたのか、小森に謝るとすぐに立ち去つていった。

「小森、大丈夫か？」

「う、うん。本田君たち、ありがとう」

「気にすんなよ！ まあほとんど大地がやったんだけどな！」

そう言つて笑う吾郎。小森もそれに釣られて笑う。

大地もようやく気分がスツとしたのか、同じようにみんなと笑い合っていた。

（ふーん。本田兄弟か。ちよつとは良さそうな感じじゃない。……でも兄貴の方は怖いわね）

清水が小森を助けた様子を見ていて、大地と吾郎のことを値踏みしていた。

その後、小森は大地達と一緒に帰り、明日からは俺らと一緒に遊ぼうと言う吾郎に頷き、別れた。

そして今週末からはリトルリーグに参加するので、家に帰つてからすぐに野球の練習に打ち込む2人であった。

『小森大介をいじめから助けたため、ボーナスポイントを付与します』

第十三話※

「吾郎、起きなさい！ もう10時よ！」

「起きないとリトルの練習、俺1人で行っちゃうからな！」

「ん……？ あ、そうだった！ 今起きるよ！」

吾郎は急いで準備をして、茂治と千秋の遺影に手を合わせる。

そして、朝食時に昨日いじめにあっている小森の件について桃子に報告する。

「やだ……四年生でもうそんないじめがあるの……う？」

「そうだね。大地と一緒に助けたんだけど、大地つてば先生にまで喧嘩売っちゃうからびつくりしたよ」

「え……！ 大地、そんなことしてたの!？」

吾郎が一部分だけしか話さないの、きちんと桃子に説明する。

それでも担任の先生には敬意を持って接しなさいと叱られてしまう。

（大地はたまに突拍子もないことをするわね……。吾郎以上に心配な時もあるわ）

桃子が心の中で不安に思っていると、テレビで海外のニュースがやっていた。

メジャーリーグは日本のプロ野球よりも一足先に開幕したという内容だった。

『ミツキーズ対ガンズの開幕戦。2年前まで日本で大活躍していたジョー・ギブソン投手が先発。』

なんと——いきなりノーヒットノーランで今季メジャー初勝利を飾りました」

ギブソンは茂治の事故の後、半年の契約のところをもう半年間延ばし、1年間で24勝1敗という輝かしい成績でアメリカに戻っていった。

アメリカに戻ってからパーフェクト2回、ノーヒットノーラン3回と他の追隨を許さない成績を叩き出している。

桃子はその様子をテレビで見て、複雑そうな顔をしていた。

「……すごいね、あの人。でもやっぱりこれくらいやってくれなきゃね」

「だな。そんな人からホームランを打ったおとさんは、やっぱりすごい人なんだって分かるからね」

吾郎の言葉に大地も同調する。桃子はそんな2人に「ギブソンを恨んでいないの？」と質問を投げかける。

「もう何年も前の話だしね」

「だな」

「次は俺らがギブソンからホームランを打ってやるんだよ。おとさんと同じくらいでつかいやつをね！」

桃子はそんな大地と吾郎を見て、微笑ましく思っていた。

双子なのに性格は違ふとよく言われていたが、やはり2人は茂治の息子なのだと実感できていたのだ。

◇◇◇◇◇

——三船リトル練習グラウンドにて

「あいたつー！」

「なんだ！ そのへっぴり腰は！ 下がったら捕れんだろー！」

キヤッチャーマスクをつけながらも硬球が怖いのか、ノックの球を下がりながら捕球しようとしたため、グラブではなく腕に当たってしまった少年。

それに対し、ノックをしている監督の安藤は激を飛ばす。

しかしながら、塾があるから帰っていいか確認する子や、練習中にずっと私語をしていたり、守備練習ではなく打撃練習バッティングをしたいと言いつ出す子達に安藤は困り果てていた。

(はあ……。この覇気のない少年達はなんなんだ……)

今、野球がサッカーの人気の陰に隠れてしまっている影響もあり、三船リトルは定員割れで大会に参加出来ない人数にまで減っていた。

現在練習しているグラウンドも、日曜の午前中以外は三船サッカー少年団の専有と

なつてしまつていた。

このままこのチーム三船リトルは無くなつてしまふのかと不安になつていたところに、

「おつ！ やつてるやつてる！ おーい！ 俺達も混ぜてくれよー！」

「おい！ 吾郎！ また勝手に行くなよ！」

土手の階段を駆け足で降りてくる2人大地と吾郎の少年を見た安藤は立ち上がる。

三船リトルのメンバーに囲まれて、「チームに入っていないよそ者はダメだ」と言われているところ_にに走つていく安藤。

「ま、待て！ ……もしかして大地君と吾郎君かい？」

「うん、そうだよ」

「おじさんが一緒にやりたいって言つてたから来ちやつたよ」

「そ、そうか！ そうか！ あの君達がもう四年生になつたのかー！」

喜びのあまり大地と吾郎に抱きつく安藤。

男性おっさんに抱きつかれても嬉しくもなんともない2人は微妙な顔をしていた。

三船リトルのメンバーが大地達は監督の知り合いなのかと質問し、安藤が茂治について熱く語るものの、当時1年生だった子達にとっては茂治は知らない人であり、大地と吾郎もそこら辺は気にしていなかった。

「それよりもすごい人数が少ないけど、どうしたの？ 今日_はは新入団テストの日でレ

ギョラーいないとか?」

「は……ははは。それならいいんだけど……実はこれでほぼ全員なんだよ」

安藤が気落ちしながらも吾郎の質問に答える。現在の三船リトルの人数は5人であり、試合も満足に出来ない状態なのであった。

それに軽く驚く吾郎だったが、それも大人数の子供達と1人の大人が来たことで吹き飛んでしまった。

「さ、沢村さん!? なんですか! まだここはうちの使用時間ですけど」

「どうも安藤さん。……悪いがね今日からここは三船サッカー少年団の専用グラウンドになったんですよ」

一体どういうことだと詰め寄る安藤に、昨日自治会で決まったことだからグラウンドから出ていくように伝える沢村。

大地と吾郎がサッカー少年達を見ると、そこには見覚えのある少年同ジクラスの沢村がいた。

人数が揃わない少年野球チームにいつまでもグラウンドを使わせるわけにはいかなないと、暗に三船リトルを解散するように言う三船サッカー少年団監督であり、いじめっ子の沢村の父親に対し、吾郎が待ったを掛ける。

「おじさん、今チームは何人いるの?」

「えっ……5人だけど……」

「じゃあ俺と大地を入れて7人か。あと2人ってことだね」

「9人集まれば、またグラウンドを使わせてくれるんだろ？」

吾郎と大地の言葉に沢村監督はダメだと言う。

「ただの寄せ集めで野球ごっこをするのであれば意味がない。少なくとも商店街の野球チームに勝てるくらいの実力があるなら使わせてくれるだろうね」と吾郎達を挑発する。

「本当だな！ 9人集めて商店街のチームに勝てばいいんだろ!? やってやるよ！」

「ふん、本気かよ」

「……まあご自由に」

吾郎が挑発に乗ってしまい、それに対して沢村親子は冷静に返し、その場を去っていく。

三船リトルのメンバーは大人に勝てるわけがないと言うが、吾郎は腹が出た親父達なんて大したことないと強気な発言をする。

「ご、吾郎……お前……知らずにこの話に乗ったのか……？」

「……え？」

「吾郎君……商店街の野球チーム三船アタックスは市の草野球チームで去年準優勝するくらい強いんだよ

……」

「え……！」

◇◇◇◇◇◇◇◇

諦め気味の安藤に対し、大地と吾郎は逆にやる気を見せていた。

週明けの朝、登校しながらまずは2人のメンバーを集めるためにどうするかを考える。

「張り紙とかどうかな?!」 “デザート1ヶ月分とかプレゼント!” “ってやってみるとか!”

「それはあんまり意味ないからやめとけ」

「じゃあどうするのさ!」

吾郎の案を一蹴した大地はどのようにしようか悩んでいた。

(小森は絶対に必要だし、今後のことを考えたら清水もいないとだからね…)

「お、おはよー」

「ん? ああ、小森か! おはよ!」

「おはよう、小森」

「何か悩んでいるようだったみたいだけど、どうしたの?」

小森が登校中に話し掛けてきてくれたので、一緒に行くことになった大地と吾郎。

先週末に起こったことを話して、あと2人メンバーが必要だということを伝える。

「そうだ！ 小森って野球やってたこととかある？」

「え……う、うん。小さい時からお父さんとキャッチボールはやってたよ。お父さん、昔横浜マリンスターズの選手だったんだ」

「えー！ そうなの!？」

大地が小森にさりげなく野球経験があるかを質問すると、父親が横浜の選手で2軍だったのがキャッチャーをやっていたことを語る。

吾郎は何も事情を知らないのです、とても驚いていた。

自分たちの父親も横浜でピッチャーをやっていたことを話すと、小森は父親に聞いてみると話していた。

「実はさ、今三船リトルって野球チームに入ったんだけど、今俺ら入れて7人しかいないけど……」

このままだとチーム自体が潰れてしまうから、良かったら小森も一緒に野球とかやってくれないかなって思ってた聞いてみたんだ」

「そうなんだ……。うん！ 親に聞いてみないと分からないけど、多分大丈夫だよ！ 僕も2人と野球をやってみよう！」

小森が快諾してくれたおかげで残りのメンバーは1人となった。

後日、大地が小森の家に遊びに行った際に、いじめから救ってしかも友達になってくれたのが本田茂治の息子だと知った父親にもものすごい気に入られ、父親は小森から「恥ずかしい」と怒られていた。

(よっしゃ。小森は思いがけず上手くいったな。次のメンバーどうするかも考えないんだけど、その前に一応能力のチェックをしておこう)

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：100 km

コントロール：E

スタミナ：E

変化球：

ナツクルカーブ：2

◇野手基礎能力一覧

弾道：2

ミート：E+

パワー：E

走力：E+

肩力：E

守備力：E+

捕球：E+

◇特殊能力

チャンスD+

ケガしにくさC-

送球D+

ムード○

◇◇◇◇◇◇

基礎能力のE-はリトルリーグで通用するかどうかといったレベルである。

Eだとレギュラークラス、E+になれば全国トップクラスの実力となる。

大地は今まで貯めたポイントをほぼ全て使って今の能力にしていた。

(まあ今後のことも考えてこんな感じにしていくのがいいかな。吾郎がピッチャーをす
るし、寿也はキャッチャーをするだろうからね。俺はピッチャーをしつつ、遊撃手ショートの二
刀流を目指してやっていこう)

リトルリーグに入るにあたって、自分がどのポジションがいいかを悩んだ結果、ピッチャーとショートの二刀流でやっていくことにした。

あまり聞かないポジション選びだが、吾郎がピッチャーをすることと、MAJORの世界はキャッチャーが充実しているため、センターラインを固められるようにショートを選んだ。

ピッチャーの能力は平均的に上げて、速球よりも“ナックルカーブ”を覚えるためにポイントを使った。

理由はパワプロの世界ではナックルカーブの評判が良かったためだ。

なかなか打ちづらいと当時ネットで調べたときも書いてあったが、吾郎のバッティングセンスでも当てるのが精一杯であった。

野手はミート、走力、守備力、捕球をE+にあげて全国レベルの能力を出せるようにした。

ポジションがショートなので、守備寄りにポイントを振った結果である。

特殊能力に関しては、チャンス、送球をD+に上げた。これらは基礎能力と違って、Dが標準の状態である。

それにあえてムード〇を習得している。これは念のためだ。

(それにしても……吾郎はすごいよな。俺が能力を上げるたびにすぐに追いついてく

る。
……才能は怖いなあ
)

第十四話

次の日、学校に到着した大地と吾郎は不思議な光景を目にしていた。

教室の後ろで沢村と取り巻きに囲まれている清水が、自らの身体を抱くようにしながら床に座り込んでいたのだ。

小森は席に座ってはいるが、清水をじっと見ている。

他の男子生徒も顔を赤くしながら清水の方を見ていたので、大地が聞いてみる。

「ねえ、何かあったの？」

「え、えつと……」

「今ね、小森君に宿題をやらせようとしていた沢村君達を清水さんが止めようとして……」

逆上した沢村が取り巻きに清水を取り押さええるように指示をして、全員の前でスカートをめくつたとのことだった。

清水はあまりのことに泣きそうになりながら蹲っていて、その直後に大地と吾郎が登校してきたということだった。

(あの野郎、前回で全く懲りていないみたいだな……)

原作でもあったシーンだったが、前回の件で流石にもうしなれないと思っていた大地は、清水を傷つけてしまったことに反省をした。

大地が向かおうとしたが、吾郎が先に小森のところへ向かって行った。

「小森、あんなクズ沢村達の宿題なんてやる必要ねーよ。もう俺らの仲間なんだから、これ以上勝手な真似はさせねーからよ」

「誰がクズだと、こらあー！」

「お前らだろ、クズが」

沢村は吾郎に食ってかかるうとしたところで、大地にもクズ呼ばわりされてたじろぐ。

吾郎1人だけであれば3人でなんとかなるかもしれないが、大地もいるのであれば話は変わってくるからだ。

「清水もだ。もう心配すんな。仲間に手を出すやつは俺らが許さねえ！」

「ああ、吾郎の言う通りだ」

「本田……」

小森と清水は吾郎の言葉に嬉しさで泣きそうな顔になる。

誰も味方をしてくれなかった教室で、ここまで啖呵を切ったのだ。嬉しくないはずがない。

「ああ!? 何勝手なこと言ってるんだあ!? 小森は俺たちの大事な仲間なんだよ! 勝手にお前らの仲間にしてんじゃねーよ! なあ小森!」

「えっ……」

「素直に答えればいいんだよ。友達は自分で選ぶもんだろ?」

沢村に脅されるようにして仲間を強要される小森に対して、吾郎は優しく「自分で決める」と促す。

小森は少し考えて「僕は大地君や吾郎君達とも友達でいたい」と素直に話す。

その言葉を聞いて沢村達は驚きのあまり、シヨックを隠せずにいた。

清水も小森に対して偉いと笑いながら褒める。

吾郎は「だってよ」と沢村に吐き捨てるが、その直後担任が教師に入ってきて席にくるように言う。

沢村達は舌打ちをしながら席につくが、小森と隣の席の沢村は机を離し、小森に話しかける。

「小森、上等だよ。俺達を裏切ってこのままで済むと思うなよ」

「……」

小森は恐怖のあまり何も言えなくなってしまうていた。

大地達も席につき、授業の準備をするが、清水が顔を赤くしながら吾郎に話しかける。

「なあ。本田って……結構良いやつなんだな」

「え？ ああ、大地は優しいからな」

「ちげーよ！ お前のことだよ！」

（吾郎……そこまで鈍いと将来本当に愛想尽かされちゃうぞ……兄ちゃん、心配だ）

清水と吾郎の会話をこっそりと聞いていた大地は、吾郎のあまりの鈍さに心の中で泣きながら将来の清水と吾郎を心配するのであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

お昼休み、大地と吾郎は小森を連れて屋上に行っていた。

小森にクラブを持ってきてもらって、キャッチボールをしようと思っていたからだ。

小森は案の定、キャッチャーミットも持ってきていた。

「なんでお前までついてきてんだよ」

「べ、別に良いじゃない！ 仲間だつて言ってくれたじゃん！ 何やるのか気になった

のよ！」

もう一人、清水がついてきていて、3人がこそこそと屋上に行ったのを見て跡をつけてきたのであった。

「野球をするんだけど、清水さんって知ってるの？」

「野球……? 聞いたことはあるけどルールとかはさっぱりかな」

「大地! 清水は放っておいてキャッチボールしようぜ!」

野球を全く知らない清水を放っておいてキャッチボールをしようと言う吾郎を大地は無視して、清水に今までの経緯を話す。

「へえ、そうなんだ。それで後1人メンバーが足りないってことなのね」

「そうそう。サッカー少年団には沢村もいるからさ、ここでグラウンドを譲ってしまうのは嫌なんだよね」

「沢村もいるのか! そうなんだ……」

清水は少し考えたように俯いたため、「つまんないかもだけど、ちよつと見ててよ」と言つて、吾郎達に加わる。

3人でキャッチボールをした後に、小森を座らせて吾郎が軽く投げる。

小森は良い音を鳴らしながらキャッチングをする。

「え……!?! こ、小森! もう1球いくぞ!」

「え? う、うん!」

吾郎は、今度は本気でボールを投げる。全力投球の吾郎のボールは現時点で115km/hは出ているが、小森は問題なく捕球する。

(す、すごい! これが吾郎君の球……!?)

清水は目に見えない速度のボールを難なく捕る小森に驚き、吾郎もまさか自身の全力投球を捕れると思っていなかったため、本気で驚く。

大地だけは小森が捕球できるのは分かっていたので、特に驚くこともなくその様子を見ていた。

結局お昼休みの時間を全て使って、投球練習をしていた吾郎はキャッチャーの問題を解決したことに喜んだ。

5時間目の授業も終わり、休み時間となる。

次の授業は体育でとび箱のため、着替えて体育館に行くように担任に促される。

着替えたクラスメイトが体育館に向かう中、沢村達はまだ教室に残っていた。

「おーい、沢村！ 早く行こーぜ！」

「遅れると怒られるぞ！ 何やってんだよー！」

取り巻き達に話しかけられたが、沢村は大地と吾郎の机を漁っていた。

そして2人のグローブを取り出していた。

「お、おい！ それって本田のグローブじゃねーか！ どうする気だよー！」

「まずいつて！ それはやめといた方が——」

「——うるせえ！ このままコケにされて黙つてられつかよー！」

取り巻き達は沢村の勢いに押されるが、「あいつらやばいから関わりたくない」と言つ

て、教室から出て行ってしまう。

沢村は「腰抜けが」と言いながらグローブを持って教室から出ていくのであった。

「あ！ 体育館シューズ忘れちゃった！ ちよつと取ってくるね！」

「かー、ドジだね」

「急げよー！」

小森が体育館シューズを忘れて教室に戻り、吾郎と清水は小森に話しかけていたが、大地の姿はそこにはなかった。

「あれ？ 本田兄は？」

「ん？ いないな？ トイレか？」

「……ほ、本田!!」

大地のことを話していると、沢村の取り巻き達が現れて吾郎に沢村とのことを話す。

吾郎は「あの野郎……」と言って走り出す。

「え！ 本田あ！ 今から行くのか！」

「当たり前だ！」

清水も追いかけてようとするが、吾郎の足が速く、追いつくことができない。

それでも懸命に追いかけるのであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

(授業に遅れちゃうから、急がなきゃ)

教室に体育館シューズを取りに戻った小森は、ちようど教室を出ていく沢村を発見する。

初めは沢村の姿に震えるが、小森に気付くことなく反対側に向かつていく。

小森は沢村の両手にある物を見るのであった。

(あー、あれは本田君達の……！)

大地と吾郎のグローブを持って階段を降りていく沢村を不審に思い、こつそりといつていく小森。

体育館とは反対側にある出口を出て外に行く沢村。

その先には煙突から煙をモクモクと出している焼却炉があった。

「ラツキー。ちようど燃え頃だな、こりゃあ」

焼却炉ではちようど火がついて燃やしている最中で、沢村は周りを見つつ慎重に焼却炉に近付いていく。

沢村の目的に気付いた小森だったが、焼却炉の蓋を開ける沢村を止めに入ることが出

来ずにいた。

そのとき大地と吾郎が話してくれた言葉が脳裏によぎった。

『もう何にも怖くないさ。これからは俺達がいつでも味方だからな!』

『一緒に野球をやってくれる大事な友達だもんな!』

(こんな僕を……大地君と吾郎君は友達って言ってくれたんだ……! そんな2人を裏切るなんて僕には出来ない!)

「やめろーっ!!」

「な、何?! こ、小森?!」

「そのグローブを返せえ! 2人のグローブに何かしたら、僕が許さないぞ!」

「何い? てめえ、誰に向かって口聞いてんだあ! 上等だ!」

小森の精一杯の言葉に沢村が逆上して殴りかかってくる。

それに対して小森は沢村の迫力に怖がってしまい、動けなくなっていた。

沢村が殴ろうとしたその瞬間。小さな石が沢村の頭に当たり、沢村の右手を誰かが押さえていた。

「ほ、本田!!」

「大地君! 吾郎君! ……どうしてここに!」

「^{沢村}そのクズの仲間がビビってチクって来たんだよ。まだあいつらは救いようがある

ぜ」

「ああ。でもな、お前は俺達を本気で怒らせちまったな」

大地は掴んでいた沢村の手を離し、吾郎は持っていた石を捨てて沢村に詰め寄る。

沢村は2人の迫力にビビり「冗談だから。返せば良いんだろ」と言つてグローブを渡してくるが、吾郎はそれに見向きもせず沢村の顔を左手で殴る。

一瞬、沢村は殴られたとは気付いていなかったが、グローブを落として顔を押しさえると、口が切れて血が出ていることに気付いた。

「いてえー！ 信じらんねえー！ 口の中切れたじゃねーか！ 俺だつて小森をこんな風に殴つたことねーぞー！」

「あ？ お前何言つてんだ？ そんなの関係ないだろ！」

「お前の傷はすぐに治つてもな、長い間虐められてた小森の心の傷は一生消えないかもしれないねえんだ！」

大地と吾郎はグローブを拾つて、小森に行こうと促す。

小森もついて行くが、沢村の様子を気にしているようであった。

沢村はそのまま立ち尽くしていたのであった。

「あ、ありがとう。大地君、吾郎君。2人が仲間を誘つてくれなかったら、ずっと沢村君

達に虐められていたと思う……」

「ん？　むしろお礼が言いたかったのは俺たちの方だよ」

「そうだよ。このグローブき、親父に貰った宝物なんだ。だから燃やされたら本当にショックだったんだよ……」

2人の様子を見た小森は勇気を出して本当に良かったと思ひ、2人が友達になつてくれてよかつたと感じていた。

そしてもう1人――

「あ、あのよ……」

「ん？　清水か？　本当についてきたんだな」

「そりゃあ小森達が心配だったんだから仕方ないだろ！」

「清水さん……何か言いたそうな感じだったけど、どうしたの？」

吾郎にからかわれて中断してしまつたが、大地に続きを促される。

清水は口ごもるが、勇気を出して話し出す。

「よ、よかつたら、私が野球のメンバーになつてもいいかな……？」

「え？　……ダメだろ」

「なんでだよ!!!」

「だって素人だろ？　無理だつて」

「そんなのやってみないとわからないだろ！」

吾郎に初めから無理だと言われてムキになる清水。

その漫才のような掛け合いを見て、大地と小森は笑つてしまう。

「なんで笑うんだよ！ 2人も私が無理だと思つてるの!？」

「あつはつは！ 違うよ！ 2人が面白くてね、つい。俺は賛成だけど、小森はどうかかな？」

「ははは！ そうだね。僕も賛成だよ！ よかつたら一緒にやろ！」

吾郎だけが反対に回つたのだが、仲間なんだからみんな野球をやろうという大地の説得もあり、渋々了承したのであった。

清水はとても嬉しそうな顔をしていたが、それが仲間として受け入れてもらえたからなのか、吾郎と一緒に野球ができるからなのかは本人にしか分からないのであった。

第十五話

メンバーが揃った放課後。

早速全員が集まり、グラウンドで練習を始めようとしていた。

吾郎と小森はキャッチボール。大地は清水に野球の基礎から教えることにしていた。
(でもな……できればあいつにも来て欲しいんだよね。教えるのが二度手間にならずに済むし)

大地は沢村にも参加して欲しいと思っていた。

いじめは悪いことだが、それでも人間変わることが出来ると前世の自分に教えてくれたのが、原作の彼だったからだ。

そう思いつつ、どうしたもんかと悩んでいると、清水が不安そうに尋ねてくる。

「ほ、本田兄。やっぱりに私に教えるのは大変なのか……う？」

「ん？ ああ、違うよ。ちよつと人を待っているんだ」

「……人？」

「そうそう。……あ、来たみたいだな。おい！ 沢村！ そんなところに隠れていないで、用があるならこっちに来い!!」

「さ、沢村ああ!？」

大地の声に清水は驚いて大地の向いている方向を見ると、確かに沢村が気まずそうに校舎の陰からこちらを覗いていた。

気付かれると思っていなかった沢村は、一瞬ビクツとなるが、少し考えて観念したのかゆつくりと歩いてきた。

沢村が歩いてきているのに気付いた小森は驚き、吾郎は怒りを滲ませる。

「て、てめえ！ 何しにきやがった！ これ以上俺らの周りをうろつ——」

「——吾郎、黙って」

「え……!? で、でもよ……」

「いいから。沢村、俺ら……というか小森に話があつて来たんだろ?」

吾郎が突つかかろうとしたが、大地が冷静に止める。

そして沢村に優しく声を掛けると、吾郎の迫力に押されていた沢村が深呼吸をして小森の前に歩いていった。

「小森……俺のこと、恨んでいるよな」

「え……?」

「そりやそうだよな。2年間もお前を虐めていたんだから……。こんなこと言ったら、また本田弟に殴られそうだけど……」

俺……お前が虐められて恨んでいることに気が付いてなかったんだ。抵抗もしねし、一緒に笑い合っている時もあつたから……。

ただ、友達同士のゲームのようにしか思っていなかったんだ……」

項垂れながら、ポツポツと語り出す沢村。小森は突然のことに困惑して黙っている。

「それっていつも鬼の決まっている鬼ごっこってことだろ……？ 楽しいのはお前らだけじゃねーか」

清水が沢村に対し、辛辣な言葉で返す。

沢村はそれに対して何も言うことが出来なかった。

「今さら許してくれなんて言えねえけど……ごめん、小森……」

頭を下げて小森に謝る沢村。小森は何も言えずに黙っている。

沢村は言いたいことを言つて帰ろうとするが、大地達の方を向いて、

「そうだ。もし野球の人数が足りなかったら……俺で良ければいつでも力になるぜ」

「何?!」で、でもお前サッカーチームに……」

「いいんだよ……それくらいしねーと、お前らにや迷惑掛けたからな。……でも小森はもう俺の顔なんて見たくねーか……」

そう言つて去つていく沢村に、泣きそうな顔になっている小森が勇気を出して声を上げる。

「そ、そんなことないよ！　一緒に野球をやるうよ！」

「こ、小森……」

「だつてもうさつきまでの沢村君じゃないもん！　それに、僕は」大地君達とも友達になりたい」つて言つたけど、沢村君と友達にならないつて言つてないもん！」

「僕達はこれから本当の友達だよね！」と手を差し伸べる小森に、泣きながらありがとうと言つて手を握り返す沢村。

大地や吾郎、清水はその光景を見て感動しつつ、嬉しそうな顔をしていたのであつた。

「……あれ？　てことは清水が補欠で試合出れなくなるんじゃないかね？」

「……………おいこら」

◇◇◇◇◇◇◇◇

「と、いうわけでせっかくメンバーが揃つてきたから野球の基礎を俺が教えていくね」

「ああ！」

「分かつた！」

吾郎と小森には先ほどと同じようにピッチングをしてもらい、大地が沢村と清水に野球の基礎を教えることになった。

まずは簡単なルールを地面に書きながら説明していく。

「野球つて9回あつて、チームごとに攻撃と守備で分かれて競い合うスポーツなんだ。1回ごとに“表”と“裏”があつて、表に攻撃したチームは裏に守備をするつて感じかな？　ここまでは大丈夫？」

「大丈夫」

「続きを説明するね。ちなみにリトルリーグは6回でおしまいだつてことは覚えておいて。じゃあどうやつて攻撃と守備を交代していくかつてことなただけ……攻撃陣が3回失敗すると守備側と交代するんだ。その失敗のことを“アウト”つて呼んでいるんだ」

「失敗？　……アウト？」

「えっと、例えばね……」

大地はアウトになる例をいくつか紹介していった。フライをノーバウンドで捕られた場合、ランナーに直接タッチした場合、ランナー無しでボールを持ってファーストベースを踏んだ場合など。

もちろんいくつか例外はあるが、簡単に話すことであるべくシンプルルールだけ覚えてもらうようにしていた。

「色んなパターンがあるから、これは徐々に覚えていけばいいよ。それでここから今日1番大切なことなただけ、野球には3つの必要なことがあるんだ」

「3つの必要なこと？」

「そう。それは、“投げる”、“捕る”、“打つ”ことだね」

「あ、それなら私にも分かる！」

「これは野球の基礎なんだけど、かなり奥が深いんだ。基礎が出来ないと応用をしても無駄になってしまうから、今日は投げると捕るってことを簡単に教えるね」

まず、大地は吾郎と小森のピッチングを見てもらうことにした。

清水はお昼休みに見ていたが、沢村は初めて見る吾郎の速球、そしてそれを簡単に捕る小森に驚いていた。

（本田の弟って……こんな球を投げられるやつなのかよ。しかも小森はこんな球を簡単に捕れるなんて……）

「これが四年生の投げると捕るのトップレベルの例だと思っただけだよ。でも初めからこんな出来なくても問題無いし、ここまでやる必要ないよ」

「え、そうなの!? 良かったあ! 私には到底無理だと思っただけから」

「あはは。でもね練習を積み重ねれば、誰でもあれくらいは出来るようになるよ」

そう言っただけで清水と沢村を壁のところまで連れて行き、投げる基礎を教える。

初めは悪戦苦闘していた清水と沢村だったが、清水は余計な力を抜くように伝えると、初めは5mくらいで最終的には10mくらいならストライク返球が出来るように

なっていた。

沢村は元々の運動神経の良さもあり、すぐに15 mほどであればストライク返球が出るようになったので、次にボールの捕り方を説明する。

「ボールを捕る時に重要なのは、*“なるべく正面で捕ること”*なんだ。ボールを弾いたとしても、身体で止められる場合も多いからね」

「でも、ボールって身体に当たったら痛いよ……ね?」

「ああ、確かに痛いね。でも痛いのを怖がって正面で捕ろうとしないと、余計に身体に当たっちゃうから、今のうちに正面で捕る癖をつけておいた方がいいよ」

清水はボールが当たったら痛いのが怖い様子だったが、沢村はサッカーボールで慣れているのかそこまで動揺はなかった。

まずは大地が軽く投げたボールを捕ってもらうことから始めた。

キャッチボールの基礎を教えるためだ。

(このために毎日古いグローブも持って来ていて良かった。……でも2個は流石に重かったなあ)

大地は清水と沢村のために古いグローブも持って来ており、2人に貸し出して捕ってもらう。

最初は下投げで大地が投げて、それを清水と沢村に捕ってもらう。

「そうそう！ 2人とも上手じゃん！」

「え、そうか？」

「へへへ」

2人とも褒められたのが嬉しいのか、下投げを捕ることに関してはマスター出来ていた。

次に8mほど離れたところからの山なりのボールである。

これに関しては、沢村はすぐに捕れるようになったが、清水は苦戦していた。

「清水さん、目を瞑ると捕れないから、まずは目を開けるようにしてごらん。あとはボールが来そうなところにグローブを出すだけだから」

「わ、分かった」

清水は怖いのか、少し薄目になっていたが、きちんとボールを見てグローブを出したところ、上手い具合にキャッチすることが出来ていた。

実はこれは大地が上手くグローブに入りやすいようにボールを投げていたのだが、初めは楽しいということと、自信を持ってもらうことから入って欲しいので笑顔のまま何も言わなかった。

「おお！ 捕れたね！」

「え！ やった！ ボール捕れた！」

清水は喜んでいて、次を投げるように急かしてくる。

大地は何回も投げていたが、清水が完全に目を開いて捕れると確信してからはグロブに入りやすく投げることはせずに普通に投げていた。

清水は大地の配慮に気付かずに捕っていたので、大地は上手くいったなと嬉しそうな笑みを浮かべる。

「これのスピードを上げたバージョンがさつきの吾郎と小森のピッチングなんだよ。あれはスピードに慣れて、何回も練習すれば捕れるようになるからね」

「おおおおお！」

2人が初日で少しずつ上手くなっていることに嬉しさと楽しさを覚えていた。

（やっぱり野球は楽しんでやらないとね！ やってみないと楽しさなんて分からないからー！）

本日の最後として、ゴロの捕り方を教える。

ゴロも基本の正面で捕ること、腰をきちんと落とさないとトンネルしてしまうこと、バウンドを予測することを伝える。

初めはただ転がるだけのボールを捕ってもらうことから始まり、徐々にバウンドを大きくして捕る練習に移る。

ここでも沢村は運動神経の良さを発揮して、ゴロの捕り方をすぐにモノにしていた。

清水はバウンドゴロに苦戦していたが、大地が「バウンドはリズムを取りながら予測するといいよ」とアドバイスをすると、数回目に捕れるようになっていた。

「今日はここまでかな。暗くなってきたし、帰ろうか」

「へへへ。私達、今日ですごい上手くなったんじゃない？」

「そうだな。これなら吾郎と小森に追いつくのも時間の問題だな！」

大地は嬉しそうにしている清水と沢村を横目に少し焦っていた。

（多分商店街チームとの試合は今週末なんだよね。原作よりかは数日早いけど、それでも時間が足りなさすぎるな）

◇◇◇◇◇

次の日は休み時間を使って、投げる練習と捕る練習を中心に行っていた。

放課後になると、バットと新聞紙で作った紙ボールを使ってバットの振り方を教える。

「まずはバットを持って振ってみて」

持ち方だけ教えてまずは振ってもらうことから始める。

清水と沢村が5回ずつ振ってもらい、その後紙ボールを下投げで横から投げて打ってもらい、アドバイスをする。

「うん！ 2人とも力が入りすぎちゃっているね。バッティングに力はそこまでいらな
いよ」

「え、でも力を入れなきゃ飛んでいけないじゃん」

「そうだよ」

「んー、そうだね。最低限の力は必要だよ。でもね、2人は上半身の力だけで打とうとし
ているんだよ。それだと当たらないし、当たつても飛んでいけないんだよね」

バッティングのコツとして、上半身ではなく下半身をどう使うかの説明をする。

とはいえ、初心者に下半身の使い方を理解してもらうことはなかなか難しいので、簡
単に説明したあとはボールをバットに当てる際はどの位置で当てるのがいいのか、腰の
動かし方、足でのリズムの取り方などを教えた。

清水はリズムという言葉を使って説明をすると理解が早いことが分かった。沢村は
力を抜くことと、大地が振り方の説明を簡単にしただけでコツを掴んでいた。

「沢村は本当に運動神経がいいなー。少し説明するだけで出来るようになるなんてすご
いよ」

「え！ 本当か！」

「私は!?! 私は一?」

「清水はちよつと不器用だけど、別にダメじゃないし、コツを掴めば上手くなつていくと

思うよ」

「そっか！ 分かった！」

大地が褒めて育てる性格というのもあって、2人とも楽しみながら野球を学んでいた。

この日はトスバッティングだけをして、バットにボールを当てるという練習だけを反復して行った。

少し早めに終えたあとは、安藤スポーツ店に行き使い古したグローブを2つ安藤監督がくれたので、清水と沢村に渡して帰った。

その次の日も休み時間はキャッチボールをしつつ、ゴロと簡単なフライを捕る練習。捕った後に送球する練習をした。

放課後には守備練習をしつつ、今度は大地が紙ボールをある程度離れた距離から投げ、清水と沢村が打つといった練習に移行した。

本当であればトスバッティングをたくさんして基礎を固めていきたいのだが、どうしても時間がないのだ。

「あれ？ なんか昨日とは違うな。当たらない！」

「俺は……あれ？ あ、当たらない！」

「……2人とも力入りすぎだって」

大地は上半身の力が入っていることを伝えて、もう一度投げる。

そうすると今度はボールにかするようになる。

「あ、当たった！」

「だな！」

「次はボールをもつとよく見てごらん。当たる瞬間までちゃんと見ていると打ちやすくなるよ」

「よーし」と言つてバットを構える清水に大地は軽くボールを投げる。

しつかりボールを見て、清水がバットを振ったところ、パカッ！つと音が鳴り、紙ボールが飛んでいく。

「おおおお！ やった！ 当たった！ 当たった！」

「やったね！ ちゃんとボールを見てバットを振っていたよ！」

清水が先にきちんとボールを飛ばすことが出来ていたが、沢村はすぐに同じようにボールを飛ばすことが出来ていた。

少しスピードを上げると空振りが目立つようになったが、スピードに慣れると同じようにボールを飛ばせるようになっていたので、大地は笑みを浮かべた。

「おおー。素人連中が上手くなつてんじゃん」

「吾郎。そういう言い方しないの。俺らだって初めはもつと下手だっただろ」

吾郎なりの褒め方だったのだが、大地は一応言い方に気を付けるように言う。小森も清水と沢村を見て喜んでいた。

試合も頑張ろうと言つて、金曜日の放課後は過ぎていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「大地ー！ 安藤さんから電話よー」

「はーいー！」

（ついに来たか）

桃子から子機を受け取り、安藤監督からの電話に出ると原作と同じく明後日の日曜日に試合が行われると言われる。

試合までの練習時間が少ないが、商店街チームは来週からリーグ戦に参加するので、今週しか時間がないというのが理由だ。

電話を切った後に風呂から上がった吾郎にそのことを話すと、「練習する時間がないじゃんか！」と怒っていたが、試合日に関してはもう仕方ないと諦めるように言う。

「こうなったら俺と大地で試合を決めるしかないなー」

「ん？ 吾郎何言つてんの？」

「だってそうだろ!? 他の連中に期待なんてできないじゃんか！」

「吾郎……もしかして自分が全部三振取ればいいのか思ってたか？」

「え、そうだろ？ 俺が三振取って、俺と大地で打てば勝てるじゃんか」

大地は「はあ」とため息を吐いて、吾郎を見る。

吾郎は大地の目が真剣になっているのが分かり、このときの大地の話はちゃんと聞いた方がいいと思う吾郎。

「あのな、吾郎。おとさんはそんなことを言う人だったか？ 周りは使えないから、俺一人で十分だつて言う人だったか？」

「え……違う。おとさんはそんなこと言わない」

「だろ。野球ってなんで9人でやるのか考えたことあるか？」

「……ない」

「ピッチャーが三振取って、自分で打つだけだったら他の8人なんていらんじゃんか。それが本当に出来るならプロ野球なんてつまらないし、おとさんの活躍するプレイだつて見られなかったんだぞ」

「……………」

吾郎は大地が何を言おうとしているのか気付き始めていた。

「しかもな、そんな奴がエースで4番だったらどーよ？ お前らなんて役に立たないんだから邪魔すんな。そこに立ってる。つて言われて吾郎だったらどう思う？」

「……………」

「分かったら？ 別に勝とうとする気持ちは大切だから良いんだ。でも周りとは協力をしていないで一人でやろうとするやつに誰もついて来ないし、そんな野球はつままないだろ？ せつかく勝つつもりなんだから、楽しんでやろうぜ」

「う、うん。分かったよ」

大地と吾郎の姿を見た桃子は嬉しそうに微笑んでいた。

（大地だったら、ずいぶん大人になったのね。吾郎も大地の言うことならなぜかすんなり受け入れるのよね。……これがお兄ちゃんの強みってやつかしら？）

大地は吾郎のことをきちんと考えながら話してくれるので、吾郎も大地の言うことは基本聞くようにしていた。

吾郎の味方になりつつも、ダメな時は諫めてくれる兄を吾郎は心の底から信頼していたのだ。

そして土曜日。午前中だけ授業があるので、そのときに明日試合だと告げると小森、清水、沢村は驚いていた。

でも仕方ないので、自分たちで出来ることをやろうと言い、休み時間は同じく守備練習、放課後は全員でバッテリーングセンターに行き、実際にボールを打つてみることにした。

「小森！　ちゃんと打てるじゃん！」

「はは……お父さんとたまに来ていたからね」

小森が打つ横で清水と沢村は遅いボールを打つ練習をしていた。

「そうそう。当たるじゃん！　2人ともこのくらいのスピードなら問題なさそうだね」

「へへへ！　実は昨日素振りの練習をしていたのだ！」

「あ！　清水ずりーぞ！　俺なんて父さんがいるから家で野球出来ねーのに！」

2巡ほど試して、次は小森が打っていた普通のスピードを試す。

沢村は初めから良いあたりを連発していて、吾郎を驚かす。

「ほらな、吾郎。ちゃんと練習してるから、打とうと思えばいけるんだって」

「確かに……。沢村、すげーぞー！」

清水に「やるじゃん、いじめっ子」と言われて「それはやめろ」と突っ込む余裕があるくらい、しっかりと打っていた。

次は清水の番。初めはスピードに慣れていないのもあり、空振りばかりだった。

「清水！　ボールをよく見て、バットを振るまでのリズムを速くすれば良いだけぞ！」

「バットをよく見て……リズム……」

「いや、よく見るのはボールな」

ちよつと混乱していたが、自分の中で上手く落とし込めたのか、次の球でボールに当

てて、その次の球ではしつかり前に飛ばせていた。

その後も前に飛ばし続けて、最後の1球で沢村と同じくらいの良いあたりが出た。

「おおおおお！ やった！ ちゃんと飛んで行ったよ！」

「清水！ やったな！」

小森も沢村も一緒に喜んで今日は普通のスピードを確実に飛ばす練習をした。

途中からは学校に戻って、守備練習の続きをして明日に備えた。

そして、商店街チームとの練習試合の日になった。

第十六話

「行つてきまーす！」

「行つてらつしやい。頑張つてね」

大地と吾郎は商店街チームとの試合に向かつて行つた。

桃子は朝食の洗い物をして、応援に行く準備をする。

そして、ふと本棚に飾つてある茂治の写真に目が行き、「おとさんも……一緒に行く？」と独り言を漏らしていた。

三船グラウンドでは商店街チームがノックをしていた。

市の大会で準優勝するだけあり、動きは経験者のモノであった。

半分以上は高校野球の経験者とのことで、三船リトルのメンバーはほとんどやる気がなくなつていた。

「おい、アレのどこが商店街チームなんだよ……」

「あーあ、これじゃあ試合になんねーよなー」

「まーいいじゃん負けたつて。ドーセドルフィンは無くなつちやうんだからさ」

三船リトルメンバーに諦めムードが漂う中、三船リトル監督の安藤の車が到着した。そこには大地、吾郎、清水も同乗しており、中からはバットやユニフォームなどを取り出して持ってきたのであった。

「じゃあおじさんは車を置いてくるから」

「あ、ちよつと待つて！ 清水さん、着替えるところないでしょ？ ここで先に着替えなよ」

「え……あ！ そつか！ 本田兄、気が利くじゃん！」

原作で着替える場所がなく、男子に囲まれながら着替えたシーンを見ていた大地は、流石に現実でそれをやるのはまずいだろうと車の中で着替えるように勧める。

安藤も清水の着替えまでは考えてなかったようで、申し訳ないと謝っていた。

清水が着替えている間、三船リトルのメンバーに新しいユニフォームを渡していた。

「おお！ 新しいユニフォームじゃん！」

「うそお！ 解散するのに、なんで今さら……!?!」

「いや、実は前から作ってはいたんだけどね。試合する機会がなかったから、倉庫で眠っていたんだよ」

「今日でこのユニフォームを着るのは最初で最後になるだろうけど、最後は楽しんで良いお別れ会にしよう」と話す安藤に対し、大地と吾郎が反論する。

「何言つてんだよ、おじさん！」

「そうだよ！俺らは勝つつもりでこの試合に臨むんだから、お別れ会なんて縁起でもないこと言わないでよな！」

「大地君、吾郎君……」

商店街チームの実力がどれほどでも勝つつもりでいる大地と吾郎。

そこにサッカー少年団の監督である沢村父がやつてくる。

「やあ、どーも。今日はまあ楽しくやりましたよ。商店街チームにも手加減するように言つてありますから」

「……いい加減に——」

「——吾郎」

「……ちっ」

沢村父に突つかかろうとしようとしたところを大地に止められて、舌打ちをする吾郎。

その姿を見て戻つていこうとする沢村父。そこに大地が話しかける。

「あ、そうそう。沢村のお父さん。手加減するなら、中途半端なことはしないでつて伝えておいてもらえますか？」

「……なに？」

「俺らも必死にやるんで、そっちも最後まで“全員”に対して必死に手加減よろしく！」
笑いながらサムズアップで沢村父に言う大地。大地なりの反抗であり、明らかな挑発であつた。

三船リトル^ちがどれだけ勝っていたとしても、言い出したのは商店街チーム^ちなんだから、ちゃんと手加減し続けろということだ。

沢村父もその挑発に気づいたのか、明らかに表情が変わる。そしてもう一つ表情が変わる出来事があつた。

「ん？ 涼太!? 涼太じゃないかー！」

「あ、これはこれはお父さん……」

なぜ三船リトル側に沢村がいるかを問い詰める沢村父。

沢村はクラスメイトのために手伝っていると主張するが、沢村父はサッカー少年団の専用グラウンドになるかどうかがかかっている試合なんだぞと怒鳴る。

「第一、いくらクラスメイトでも友達を選ばなきゃダメだろ！ なんでこんな連中と——」

「——お、俺が誰を友達にしようと思手だろ！ 野球やってりやみんな悪者かよー！」

沢村が父に対して反抗する。その姿を見て大地達は嬉しそうな顔をするが、沢村父は「もうすぐ大会なんだから、くだらないプレーをして怪我するなよ」と渋々認めて去つて

いく。

沢村父と入れ替わりで来たのは、商店街チームの監督である。ジャンケンをして先行と後攻を決めたのだが、吾郎が勝手にジャンケンをして負けてしまった。

商店街チームは後攻を選び、まずは三船リトルチームからの攻撃となった。

◇◇◇◇◇

◇スターティングメンバー

1番：セカンド 長谷川

2番：ライト 前原

3番：キャッチャー 小森

4番：ピッチャー 吾郎

5番：シヨート 大地

6番：サード 夏目

7番：ファースト 田辺

8番：センター 沢村

9番：レフト 鶴田

控え：清水



「つて、やっぱり私がベンチなの!?!」

「まあ仕方ないだろ。お前下手なんだから」

「吾郎……大丈夫だよ。ちゃんと清水さんの出番も来るからね!」

1番の長谷川は相手ピッチャーの投球練習を見て明らかにビビっていた。小学生にはとても打てるようなボールではなかったからだ。

大地は緊張してガチガチになっている長谷川の隣に行き、耳元で話しかける。

「長谷川君、大丈夫だよ。相手は手加減してくれるって言ってたんだから、かなりスローボールで来ると思うよ!」

「え……でも……」

「この中で足が速いから1番になってるんだし、どうせなら初球を思いきり叩きつけて全力で走ってみようよ! 大丈夫! 長谷川君ならできるって!」

「……分かった! やってみる!」

長谷川は意気込んでバッテリーボックスに入る。

商店街チームのバッテリーはマウンドで「相手は子供だから、ちゃんと手加減しよう」と話し合っていた。

そして試合が始まる。

「プレイボール！」

ピッチャーが明らかに手加減しているとわかるフォームからスローボールを投げる。

長谷川は初球を思い切り叩くという大地のアドバイスだけを頭の中に入れていたため、来たボールに対しタイミングを合わせて思い切り叩きつける。

すると、ボールはワンバウンドして高く上がっていく。

サードはキャッチして、急いでファーストに投げるもギリギリのところまでセーフになる。

「いやあ、最近のポーズは足が速いんだねえ」

「本当だよ。しかもアレ、多分狙ってたぜ」

「ああ。ま、なんとかなるだろ」

続いて2番の前原が「よし、俺も！」と気合を入れてバッターボックスに向かうが、そこでも大地がまた声を掛ける。

「前原君、最近バツティング練習ってしてた？」

「……そういえばあまりしてなかったかも」

「だったらさ、“バント”を試してみない？」

「バント?!？」

「そうそう！ おじさんがわざわざ2番にするくらいだから、バント得意なのかなって思ってたんだけど……違った？」

「ふふふ、よく分かったな！ 俺は三船リトル1のバントの名手なんだよ！」

前原の性格上、ちよつと褒めてやる気にさせれば実力を発揮できると思っていたので、送りバントをしてもらうように誘導する。

「よっしゃー！」と言って気合を入れつつ、バッターボックスに入っていく。

（無死、ランナー一塁か。まあ相手は子供なんだし、気楽に行きましょ）

ピッチャーがまたしても軽く投げたところに、前原がバントの構えをして三塁方面に転がす。

サードが前進をしてボールを取り、二塁を見るが間に合わない判断し一塁に投げて一死にする。

「おー！ 前原、ナイスバント！」

「ふふふ。さすがだろ！」

チームメイトに褒められて嬉しそうな前原。

そんな様子を笑いながら見ていた大地は、小森にはなにも言わずに見守ることにした。

小森はスローボールを上手くセンター返しして、一死、ランナー一塁、三塁。

「やったああ！ さすが小森！ ナイスバッティング！」

「よし！ いけ本田弟おお！」

「頼むぞ！ 吾郎君！」

吾郎は「任せろ」と言つてバッテリーボックスに入る。

(いーねえ、子供相手はほのぼのとして。やつぱ草野球はお互いに楽しくやんなきやな)

まだまだ三船リトルを舐めている商店街チームのピッチャーは、ニヤニヤしながら軽く投げる。

そこに吾郎がキャッチャーに話しかける。

「いいの？ こつちの実力を確かめずにこんなことしてて……」

「え？」

「子供に負けてから悔しがつても——知らないよ」

スローボールを思い切り振り、大きな音を立ててボールはレフトのフェンスを越えていく。

さすがの光景に三船リトル、商店街チームの両方が驚きを隠せない。

「「「やったー!!! いいぞ本田弟おお!!!」」」

ホームに帰ってきた吾郎は、沢村父に「早くボードに3つて書いてよ。スリーラン

ホームランでしょ？」と言って挑発する。

沢村父も呆然としていたが、すぐに「分かっているよ！」と言ってボードに3の数字を書き入れる。

「すごいね、吾郎君。いきなり場外ホームランなんてびつくりしたよ」

「ハハハ、スローボールだろ？ 打つても嬉しくねーよ。……多分次の大地も打つだろうしね。まあこれでひとまず安心だ。あとは俺らのチームで逃げ切れるように頑張ろうぜ！」

大地の言葉が頭に残っているのか、「俺」ではなく、「俺らのチーム」とはつきり言った吾郎。

その言葉を聞いていた大地は、嬉しそうな顔をして打席に向かうのであった。

「なんだよ。あんな小学生がいるなんて聞いてねーぞ！」

「まあまあ落ち着けよ。あの小学生くらいだろ、上手い子なんて。次抑えて、逆転すればいいのさ。そもそも俺らは全力でやってないんだから」

「……そうだな。いつでも追いつけるか」

商店街チームのバッテリーは落ち着きを取り戻して、次のバッターをアウトに取るこ
とだけを考えていた。

そして、大地の打席である。

ピッチャーは先ほどと同じくスローボールを放ってくる。ど真ん中にしか投げてこないのです、大地は笑いながらバットを振り、吾郎と同じくレフトのフェンスを越えてホームランにする。

「俺らに手加減してくれるって聞いてるんで、本当に助かってます。沢村さんにも言っただんですけど、最後まで手加減よろしく！」

大地はキャッチャーにそう言って、ベースを一周する。

吾郎に続いての連続ホームランに、商店街チームは絶句し、三船リトルは大歓声で盛り上がった。

ホームに帰ってきた大地は、ベンチに戻るとみんなにもみくちやにされていた。

そして1回表で4点を獲得して、裏の守備に移るのであった。

第十七話

(や、やはりこの子達はただものじゃない。そこそこの速い球であれば、当たれば反発力で遠くに飛ばすことはまぐれでも可能だ。

しかしスローボールでは完璧に芯でとらえて、理想的なフォームによる体重移動がなくてはともあそこまでは飛ばない。

体重や腕力のある大人ならともかく、この子達はまだ9歳だ。なのに場外ホームランにできるということは、この子達はすでに9歳にして完璧なバットコントロールとバッシングフォームを身に付けているんだ。

これで身体が出来てきたら……この子は父をも超えるプレイヤーになるかもしれない！)

安藤は、大地と吾郎の才能にかなり驚いていた。

それもそのはずだ。ここまでの資質を持った小学四年生を見たことがないからだ。

茂治の遺伝子を確実に受け継いでいるであろう2人に対して、この試合を勝利に導いてくれるのではと期待してしまうのであった。

「いやあ、まいったまいった。あんな小さい子供達にホームランを打たれるとは思わなかったよ。ちよつと手加減しすぎたかな？」

「て……手加減しすぎだ！ グラウンドがかかかってるんだぞ！ 万一負けたら承知せんぞー！」

「沢村さん、焦りなさんな。すぐに逆転しますよ。第一、あのシヨートの子に最後まで手加減しろつて言われちやつてるんで、なかなか本気は出しづらいですよね」

笑いながらベンチに戻る商店街チームに檄を飛ばす沢村父。

沢村父本人から手加減をしろと言つた手前、なかなか言いづらいと思つていたのだが、そうではなかったようだ。

「遅い球だと逆に打てないかもな」と笑う監督に対し、商店街チームも「いつも速い球しか打つてないからなあ」と話に乗ってくる。

しかし、キャッチャーミットに収まる大きな音が聞こえたので、マウンドを見ると吾郎が投球練習をしていたのであった。

「お、あの坊や、エースで4番か！ かっくいーねえ！」

「でも今、結構いい音がしなかったか？」

「え？ そうだっけ？」

ヘラヘラしながら吾郎が振りかぶっている姿を見ている商店街チーム。

吾郎が投げて、ボールがミットに入った瞬間、大人達だけでなく三船リトルのメンバーも全員黙ってしまった。

小森は「ナイスボール!」と言って投げ返す。

「確か……小学生……だよな?」

「いや……背の低い高校生……だろ? ……多分!」

苦笑いで現実が受け止めきれない商店街チームのメンバーはふざけたことを言うが、実際に何度見ても変わらない光景に口数も少なくなっていた。

そして投球練習も終わり、1番打者がバッターボックスに入る。

(おとさん……俺達にもやつとこの日が来たよ。おとさんに憧れて今まではずっと大地と野球をやってきたけど、これからは本当の俺達の力を試していけるんだ!)

吾郎は振りかぶって第一球を投げる。

ボールは内角真ん中を通り、ストライクとなる。

安藤はその姿を見て、これが本当に四年生の投げる球なのかと驚いている。

「こういうのを天才野球少年っていうのか?」

「こりやあちよつとはやりがいがありそうだな」

吾郎は2球目を外角低めに投げ、バッターは見逃してツーストライクとなる。

球が速いだけでなく、コントロールも良い吾郎にバッターは警戒し、元々いた三船リ

トルのメンバーは自分達とのレベルの差を痛感していた。

第3球もストレートを投げるが、バッターにカットされてファールとなる。

(1番打者だもんな……さすがにそう簡単に三振はしねーか)

ベンチでは追い込まれているバッターに対してからかうような発言が多く、本人も苦笑いで「うるせーな」と話していた。

吾郎は自分のボールに自信があるのか、強気に攻めようとする。

しかし小森が1球外すようにサインを出した。

(え? ここので1球外すの? ……仕方ないか)

事前に大地から小森のサインは絶対に無視するなど強く言われていたため、吾郎は渋々1球外す。

カウントはワンツー。ここで小森がスローボールのサインを出す。

実は変化球を覚えてこなかった吾郎に、大地がフォームを崩さずにそのまま投げられるように教えた球種であった。

(このくらいのスピードなら、俺らは普段から打っているん……だあ?)

ストレートのタイミングでバットを出していたバッターは、急に投げられたスローボールにタイミングが合わず空振り三振となる。

吾郎は「よっしゃあ!」と言ってガッツポーズを取り、大地も「ナイス吾郎!」と褒

める。

「なんだ？ あんな遅い球に引っかけりやがって！」

「あ……ああ」

「どうしたんだ？ あれが何か変化でもしたのか？」

「いや……本当にただの遅いストレートだったんだが、速球との球速差で全くタイムイングが合わなかったんだよ」

吾郎を見つめながら話す一審バッター。

そのことを聞いた二審バッターが、たかがストレートしかないんだったら簡単に打てるだろと鼻で笑ってバッターボックスに入る。

吾郎は二審打者に対して初めからストレートを投げる。

初球から狙っていたため、ボールはライトに飛んでいき前原が捕球してヒットとなる。

（ほら見ろ！ 速い球だけ狙っていれば簡単に打てるんだよ！）

商店街チームもヒットが出て盛り上がり、続いて三審バッターが打席に入る。

ヒットを打たれて舌打ちをした吾郎に、小森が声を掛ける。

「吾郎君、どんまい！ 次の打者集中しよう！」

「……だね！ 分かった！」

深呼吸をした吾郎に小森は1球外す指示を出す。
ウエスト

吾郎も理由が分からなかったが、小森の指示に従いボールを高めに投げたところでランナーが走る。

だが、小森がすぐにセカンドに投げ、矢のような送球——小学生にしてはだが——を大地が捕り盗塁を阻止する。

「アウト！」

「……くそ！ バレていたか！」

「おじさん達、もつと手加減してよ。本気でやられて点をたくさん取られたら、試合にならなくなっちゃうじゃん」

大地はランナーを挑発した言葉を言い、そのまま吾郎にボールを渡す。

小森はその光景を見て、驚きを隠せないでいた。

（大地君の指示通りにしてるけど、三振取ったときも今の盗塁も狙ったかのようにアウトを取ってくるなんて……）

実は試合前に大地は色々と動いていた。吾郎に小森のサインに絶対に従うように言ったこともそうだが、小森にもサインを出すのでその時は絶対に指示に従ってくれとお願ひしていたのである。

この時期の吾郎はヒットを打たれたりすると崩れてしまう傾向にあったため、チーム

の全員に頼ることが出来るようになるまではなるべくフォローをしようとしていたのであった。

「あら……もう始まつてるのかしら?」

自転車に乗つて桃子が土手までやってきて、三船リトル側のベンチに向かう。

そして安藤と目が合い、軽く挨拶を交わす。安藤とは茂治の葬儀以来だったが、お互いに顔は覚えていた。

「あら? あなたはもしかして清水さん?」

「あ、はい!」

「はじめまして。大地と吾郎の母です。いつも2人がお世話になってありがとうございます」

「い、いえ! こちらこそです!」

清水と初対面の挨拶をした桃子は、安藤に試合の様子を伺う。

4対0で勝つていて、ツーアウトでランナー無しの状況ではあったが、安藤は心配そうな顔をしていた。

「あら? 安藤さん、何か心配事でもあるのですか?」

「いえ、あの……吾郎君は本当にすごい球を投げます。あの歳で中学生並みのストレートが投げられるのは本当にすごいです」

「……もしかしてそれだと相手チームには通用しなかったりするのですか?」

「……おそらくですが。相手は市の大会で準優勝するくらい強いチームなので、吾郎君のストレートは打ちごろの速さなんです。

今のところは上手い具合に抑えています。これも長続きはしないでしょう。できれば彼にはリトルのちゃんとした環境で、ちゃんとしたデビューをさせてあげたかったです……」

桃子はその言葉を聞いて少し考え込むが、すぐに「多分大丈夫だと思いますよ」と安藤に話す。

安藤は理由が分からなかったもので、なぜかを問い掛けると、
「あの子には優秀な兄吾郎がいますからね。それに今の吾郎を見てもチームの一員として動こうと頑張っているの、周りがきつと助けてくれます」

「は、はあ……確かに大地君も吾郎君に劣らずの実力を持っていますよ——」
「——大地の良さは周りに良いムードを与えることなんです。吾郎だけなら孤立してもおかしくなかったでしょうけど、大地がいれば問題ないですよ」

笑顔で話す桃子に半分納得していない様子の安藤だったが、その話をしているうちに1回裏の守備が終わっていた。

3番打者は三塁にライナーを打ち、サードの夏目は驚いてグラブで弾いてしまいが、カバーに入っていた大地がすぐにボールを拾ってファーストに投げてアウトになる。

「本田兄、ごめん……」

「え？ 今のアウトは夏目君がボールを逸らさないでいてくれたからだよ！ ナイス！」

「う、うん！」

夏目は大地に気まずそうに謝罪したが、夏目を褒めることによつてエラーした罪悪感を帳消しにした。

前原含めたメンバーも夏目と大地のところに集まつて、プレーを褒める。

「みんなありがと。でもね、今日はみんな活躍してるよ！ 長谷川君や前原君だつて最初の回でちゃんと打者として仕事したし、吾郎のピッチングや小森の盗塁を刺したボールだつてすごいよね！ チーム全員の活躍だよ！」

「……そつか！ たしかに！ 本田弟と小森もナイス！」

吾郎や小森も褒められて満更でもない顔をしながらみんなでベンチに戻つていく。

桃子はそんな様子を見ながら、安藤に「ほら！ ああいう良いムードになると勢いが出るんですよ」と言い、その光景を見て安藤も笑みを浮かべて納得していた。

「じゃあ2回表だ！ でも始まる前にみんなに言いたいことがある！」

大地が円陣の真ん中に立つて、なぜかキャプテンみたいなことをすることになったが、それならばと今のうちに全員に言いたいことがあると言ひ出す。

吾郎も含めて何事か分からなかったので、全員が首を傾げていると、

「ずっと俺と吾郎のことを本田兄、弟って呼んでるけど、これからは大地と吾郎って呼んで！　せつかくチームメイトになれたんだからさ！」

自分達のことを名前で呼んで欲しいという大地に対してみんながポカンとしていたが、すぐに清水と沢村が笑い出して「分かったよ、大地！　吾郎！」と呼びはじめたのをきっかけにして、全員が名前で呼び出す。

こうしてチームが盛り上がりながら、次の回に向けて気合いを入れるのであった。

第十八話

2 回表。バッターは7番の田辺。癖毛とたらこ唇が特徴の子である。

大地はやはり声を掛けにいき、「どうせなら思いっきり振ってこよう！」とアドバイスをする。

田辺も大地のアドバイスで長谷川や前原が上手くいったのを見ていたので、「分かった！」と気合を入れてバッターボックスに入る。

(ちっ……まさか初回が0点だったとはね。これ以上は点をやれねーぞ)

しかしまだ打者一巡もしていない状況で本気を出すわけにもいかず、初回と同じようにスローボールを投げる。

田辺は初球を思い切り振り、バットの芯に当てる。

しかし、ピッチャーライナーとなってアウトになる。

「くそー!!」

「どんまい、大丈夫！ 今のは少しズレていたらヒットになってた当たりだから！ ナイスバッティングだよ！」

「う、うん！ ありがとう、大地！」

田辺は悔しそうな顔をするが、大地に慰められて嬉しそうな顔をする。

次は沢村の打席だ。人生で初めての試合で初打席なので、緊張してガチガチになっている。

その後ろから、田辺と話し終えた大地が「わっ！」と驚かす。

「わああああ!! びつくりしたあ！」

「あははっ！ 何ガチガチになってるのさ？」

「だ、だって仕方ないだろ！ 初めての打席なんだから！」

「だったらさ、思いつきり三振してきなよ！」

「……え？ 三振はダメだろ」

「大丈夫だよ。でももしバットに当たったら、それがどんなにボテボテの当たりでも全力で走ることね！」

大地の言っていることがよく分からなかったが、三振して良いのであれば別に緊張する必要もないと思えたのか、沢村は肩から力が抜ける。

打席に入り、思いつきり3回振る。3球目も空振りで終わるかと思いきや、バットにボールがかすり一塁側にボテボテと転がっていく。

「当たった！ 走れ、沢村！」

「触るな！ ファールになるぞ！」

バットにボールが当たったのを見て、すぐに全力で走る。

キャッチャーの指示でファーストが捕球を見送るが、ボールはライン上で止まってフェアとなる。

そして、沢村が一塁を駆け抜けてヒットとなった。

「うおおおおおおお！ ナイス沢村！」

ボテボテだったが、人生初ヒットを打つことができ、沢村はとても喜んでいた。野球の楽しさを肌で感じる事が出来て、とても嬉しそうであった。

次の9番の鶴田がバントで沢村をセカンドに送り、2^{アウト}死でランナー一塁。

「おい！ 4対0だぞ！ いつまでのらりくらり遊んでいるんだ！」

沢村父がピッチャーに怒鳴る。さすがにやばいと思つたのと、打者がちょうど一巡したところだったので、ピッチャーが全力で投げようと決心する。

そして1番の長谷川は一切バットを振ることが出来ずに三振となり、チェンジとなる。

「き、汚え……あんなの打てっこねーぞ！」

「卑怯だぞ！ あのヒゲオヤジー！ くそピッチャー！」

（わりーね。こつちとしても子供相手に負けるわけにはいかないのよ）

文句を言いながら守備につく三船リトルメンバー。

そして2回裏。4番打者に対して不用意にストリートから入ってしまった。

「もらいー！」

「あー！」

打球はレフトのフェンスを越えてホームランとなってしまう。

これで4対1となる。吾郎は信じられないような顔をしてレフトに飛んで行ったボールを見る。

「「よっしゃー！ ナイスホームラン！」」

「ま、大人がちよいと本気出せばこんなもんよ」

ベースを一周回ってベンチに戻ったバッターが、ほっとしたような顔で軽口を叩く。

小森は大地の指示で一旦タイムを取って、内野手全員がマウンドに行く。

「吾郎君、大丈夫？」

「お、俺の球がホームラン打たれたのか……？」

あまりのショックに放心している吾郎に声を掛けることが出来ない。

しかし、大地は「そうだよ」と軽い感じで吾郎に話しかける。

「今のは盛大に飛んだね！ 特大だったよ！」

「なっ!?!」

「大地君！ それは言いすぎだよ！」

「でもさ……相手は元高校球児ばかりなのに、俺らが今勝ってるんだぜ？ そっちの方がすごいでしょ。」

しかも俺と吾郎の方が絶対に飛距離上だったし！」

おどけた調子で話す大地に吾郎や他の内野手も啞然としていた。

「吾郎のこんな速い球を打つやつがいるってだけでも、俺はわくわくするけどね！ てかさ、どうせ打たせるんならホームランじゃなくて、低めに集めて俺らの方に打たせてくれよ。ちゃんと捕るからさ！」

「そ、そうだよ！ 吾郎の球なら大して飛んでこないと思うけど、どうせなら俺らにも守備のチャンスをくれよ！」

「だね！ みんなでカバーし合えばなんとかなるよ！」

「……そうだね。自分一人で野球するなって大地に言われていたのに、忘れるところだったよ！ みんなに打たせていくから、よろしくな！」

「「おう!!」」

そう言つて定位置に戻つていく野手。だが、大地だけは戻らずに吾郎のそばにいた。

「ん？ 大地どうしたの？」

「もうちよいだよ。今は低めに投げていけば良いけど、お前の全力で投げた球はあんなおっさんに簡単に打たれるわけではないんだからな！」

「……分かったー!」

大地の言葉を受けて、吾郎は自信を取り戻す。

低めを中心に投げていき、そのあとの5番、6番をショートゴロとファーストゴロに打ち取る。

7番は四球フオアボールで出塁させてしまうが、次の8番をワンツースで追い込んだ最後のストレート。

それは誰が見ても明らかに初回とはスピードと球威が違っていた。

「あらら、三振しちゃったか」

「なんだよ。この回は俺のホームランだけかよ」

「お前ら。気付かないのか? あの坊や、最後の1球でもすごい球が伸びていたよ」

「「えっ!」」

「おそらく初回はまだ肩が出来ていなかったんだらうよ。もしかしたら……まだまだ速くなるかもしれないぞ」

◇◇◇◇◇

3 回表。2番の前原は打つことが出来ず、三振となる。

3番の小森もバットに当てるが、キャッチャーフライでアウトになる。

「あちやー。小森でも打てないのか」

ベンチでメンバーは残念がるが、次は吾郎の打席である。

吾郎と大地なら打つてくれると信じ、そしてその期待に応えるべくバッターボックスに入っていく。

初球はストレートを見送りワンストライク。

（くそ。確かに速いな。こりや俺と大地くらいしか打てないぞ）

2球目は外角低めに決まり、ツーストライク。

（ふふ……さすがの坊やも俺の速球には手が出ねえか）

1球外して、第4球目のストレートを吾郎は真芯で捉えてボールがレフト方面に飛んでいく。

ピッチャーは思わず右後ろを向くが、ボールは切れていきファールとなる。

「ああ！ おっしーい！」

（うひゃく。なんてガキだ……）

（この球をジャストミートか……こうなったら）

（まあ仕方ないな）

キャッチャーのサインを頷き、ピッチャーが第5球を投げる。

吾郎はしっかりボールを見てバットを思い切り振るが、当たる瞬間にボールが曲がり

キャッチャーミットに吸い込まれていった。

「ストライク！ バッターアウト！」

（カ、カーブ!?!）

吾郎はカーブが来ると思っていなかったため、悔しそうな顔をしてベンチに戻っていき。

全員から今のは仕方ないと慰められながら、マウンドに向かう吾郎。

そして3回裏。 投球練習中に雨が降り出してくる。

「雨ですか……このまま強くなってワールドで我々の負けつてのだけは勘弁してくださいよ」

「……」

沢村父が商店街チームの監督に話しかけるが、監督は黙ったままだった。

3回裏は9番と1番を三振に取り、ツーアウトランナー無しで2番バッターが打席に立つ。

ここで小森がタイムを取る。

「どうした小森？」

「えつと……大地君が……」

「え？ 大地？」

「ああ、俺がタイムを取るように小森に言ったんだ」

ここで今までのタイムのタイミングなどが大地の指示であったことを小森から聞き、吾郎は納得する。

あまりにも良いタイミングだったからだ。

「吾郎。雨で手が滑ってくるから、これを使って」

「これは……ロージンバック？」

「そう。後ろポケットに入れておいて、適度に付けるのを忘れるなよ。あと小森はボールを拭いたり、審判に言っつてボールを変えてもらうとかもしてもらって」

「うん、分かった！」

全員が守備位置に戻り、試合が再開される。

吾郎はロージンを手に付けてからボールを投げる。ボールをきちんと拭いたのもあり、滑ることもなくキャッチャーミットの位置に投げ込むことができた。

(おいおい、初回はこんなに球速くなかったぞ。こりややべーな)

その後も吾郎が投げたボールを振るが2球続けて空振りしてしまい、三振でチェンジとなった。

大地は次の回が自分の打席から始まるので、相手ピッチャーの本気を出したストロークを打つことにわくわくしながらベンチに戻ったのであった。

第十九話

雨が強くなってくる。そんな中、大地は笑顔でバッターボックスの横で素振りをす
る。

追い込まれたらカーブが来るのが分かっている大地は、吾郎とは違いカーブが来るま
で待とうといった考えは一切なかった。

（初球だ。初球のストレートと勝負する！）

4 回表。大地にとつてはもしかしたら最後の打席になるかもしれないので、悔いの残
らない打席にしようと思っていた。

投球練習が終わったのでバッターボックスに入り、構える。

（ちっ。さっきのガキの次はこいつか。こいつにも打たれてんだよな）

ピッチャーは吾郎と同じく警戒をしていたが、先ほどと同じく追い込んでからカーブ
を投げれば三振が取れるだろうと高を括っていた。

そして、初球。ストライク先行しようと内角に甘く入ったストレートを大地が逃すは
ずは無かった。

大きな音を立てて飛んでいくボールは、本試合最長の飛距離を出して左中間にある

フェンスを軽々と越えていった。

「おおお!! 大地がやったぜー!!!」

「さすが兄貴だ!!」

みんなが喜ぶ中、大地はゆっくりとベースを一周してベンチに戻ってくる。

そしてみんなに揉みくちやにされたあとに、吾郎の前に立つ。

「大地が打っちゃうと俺がダメなやつに見えちゃうじゃんか」

「へっ。吾郎には最後に回ってくるだろ? カープを打つのは任せたからよろしくな」

「大地も今打ったんだから、回ってくるじゃんか!」

「……………あ、そうか」

2人は笑いながらハイタッチをする。

その後は三者凡退となり、4回裏が始まる。

しかし4回の裏も吾郎の球を打てる打者はおらず、三者三振で終わるが、吾郎は明らかに疲れが見え始めていた。

そして5回表の攻撃。

9番の鶴田の打席で代打を送ることとなった。

「え!? わ、私!」

「うん、そうだよ。清水さんも試合に出すって言ったでしょ?」

「え、で、でも私へタツピだから打てないよ……」

急な代打で自信なく下を向いてしまう清水。

そこに大地と吾郎が声を掛ける。

「何言ってるんだよ、清水！　へタツピなのは分かっているんだから、一生懸命振ってくれば良いんだよ！」

「ふふふ。吾郎はああ言ってるけど、清水さんの頑張りを分かっているんだよ。昨日も練習終わったあととバッティングセンターで打っていたでしょ？」

「な、なんで知っているの!？」

「俺らもいたからね。声掛けようと思ったんだけど、内緒にしたいんだなと思っていたから何も言わなかったんだ。せっかくだからさ、ダメ元でやってみない？」

雨の中疲れながらも必死に投げる吾郎の励ましと大地の説得により、清水は「やってみる!」と言ってバットを持って打席に向かおうとする。

そこで大地が駆け寄って、恒例のアドバイスをしていた。

「清水さん。あの球は正直に言うともにもやっても打つのは難しいと思う」

「え……じゃあどうすれば良いのさ？」

「リズムさ。清水さんには無駄球投げずに、3球ストレートで三振を狙ってくると思うよ。だから初めの2球は打つためのリズムを取ることに集中するんだ。そして3

球目にそのリズム通りにバットを振るだけで良いからね」
「……分かった！」

清水は少し緊張しながらもバッターボックスに入る。

そして初球、2球目と足でリズムを取りながら、タイミングを取る練習をしていた。
(出てきたばかりのお嬢ちゃんじゃ、俺のストレートは打てねえよ。これで三振だ！)
(ひい〜！ ボール速すぎるよ！ もうやぶれかぶれだ！)

清水は2球目までで確認したリズムのまま、ボールが来るであろう場所にバットを持っていた。

少し詰まったような音が鳴り、大地の「清水さん！ 走れ！」と言う声に反応して全力で一塁に向かって走った。

一塁を駆け抜けたあとにボールがどこに行ったかを確認したら、セカンドとライトの間に上手く落ちて、ポテンヒットとなっていた。

「「えー！？」 清水が打った!!」」
「「らー！ 失礼な！」」

三船リトルほぼ全員の声に突っ込む清水。

だがみんなは笑い、清水もガッツポーズをしていた。

しかし、結局この回は3番の小森まで三振になってしまい、追加点は無かったが清水

のヒットは全員の気持ちを盛り上げるのに十分だった。

5 回裏。吾郎はかなりの疲労を感じていた。

雨の中を1人でここまで投げただけでなく、大地ほどでないにしろ周りに気を使ったりもしていたので、相当疲れていたのであった。

「吾郎。大丈夫か？」

「え？ 何が？」

息が上がっているのに無理をしている吾郎を笑い、「なんでもねーよ」と言つてショートの守備位置に戻る大地。

「大地……ありがとな」

「ばーか。フォームが崩れたら即交代だからな」

吾郎と大地は目を合わせて微笑み合う。

2人は同じ顔をしているが、性格はそこまで似ているようには見えない。

だが、2人の気持ちは確かに通じ合っているのが双子の証拠であった。

6番バッターが打席に入り、吾郎がボールを投げるがスピードが落ちてきたのもあり
ファールで粘られてしまう。

結局10球使つて四^{フォアボール}球にしてしまう。

7番打者はバントを吾郎の前にするが、雨でぬかるんだ地面に吾郎の疲労も重なり、

一塁に暴投をしてしまう。

無死でランナー二塁、三塁。
ノリアウト

ここで小森がタイムを取り、内野手がマウンドに集まる。

「吾郎君、大丈夫?」

「はあ……はあ……だ、大丈夫だ……」

「相当疲れてんな」

「でも今吾郎が投げられなくなったら、代わりに投げる奴いないだろ?」

「どうするよ?」

各々吾郎を心配するが、大地だけは黙っていた。

吾郎がどうするかを見ようと思っただの。

そして、本人は続投を希望する。

「分かった。じゃあこのまま行こうか。次打たれたら俺と交代な」

「え? 大地もピッチャー出来るの!?!」

「まあ……これでも吾郎の兄貴だからね。でもエースが投げるって言ってるんだから、

そこは頑張ってもらおうぜ」

そう言つて、各自のポジションに戻る。

だが、スクイズ対策でファーストとサードは前進守備をしている。

吾郎は8番バッターに対してセットポジションからストレートを投げる。

バットがボールに当たるが、ファールとなる。

第2球。またしてもファールとなり、ツーストライク。

追い込んだのでスクイズは無いと思い、ファーストとサードは前進守備をやめて定位置に戻る。

吾郎は息を切らしたまま3球目を投げたところで、三塁ランナーが走る。

(ツーストライクからスクイズ!?)

三船リトル全員が予測していなかったことで驚くが、バッターはピッチャーの前に転がして再度暴投を狙う。

吾郎は走る体力も無くなってきているのに、無理してダッシュをして右手でボールを掴み、そのまま小森にトスをして倒れ込む。

小森はボールを受け取って、突っ込んでくるランナーを身体で受け止めるが、体格差で吹き飛ぶ。

しかしキャッチャーミットの中にボールが収まっていたことで、アウトになるのであった。

「吾郎君! 大丈夫!?!」

「へ……へーきへーき……」

小森はすぐにタイムを取って吾郎の元へ行き声を掛ける。

吾郎は大丈夫と言うが、すぐに立ち上がることは難しそうだった。

そこに大地が来て、吾郎に肩を貸す。

「ここまでだな。……あとは俺に任せろ」

「まだ……大丈夫………だつて」

「お前はその後、あのピッチャーひげのおっさんからカーブを打つて仕事があるだろうが。ライトでゆつくり休んでな」

大地はライトにいた前原にシヨートを守ってもらい、ライトに吾郎を連れて行った。

吾郎をライトに連れて行った大地はマウンドに行くと、投球練習を始める。吾郎はその場で膝に手をつけて息を切らしていた。

「なんだなんだ？ あのシヨート、ピッチャーも出来るのかよ」

「さっきのピッチャーと顔似てるけど、兄弟か何かか？」

「まあ球はさつきほど速くなさそうだし、余裕か」

商店街チームは余裕の表情で大地の投球練習を見ていた。

そして、9番バッターが打席に立つのであった。

第二十話

5 回裏。ワンアウト 一死、ランナー一塁、三塁。

5 対 1 で三船リトルが勝っている状況で、ピッチャーが吾郎に代わり大地が投げるこ
とになった。

吾郎は市の大会で準優勝した商店街チーム相手に、5 回 1 / 3 までで 1 失点という好
投を見せた。

(よし。吾郎、今までよくやったな。後は俺に任せろ)

ライトで雨に濡れながらも疲れ切っている吾郎を軽く見たあとに、マウンドから 9 番
バッターを見る。

大地はなるべく時間を取って、吾郎の体力を少しでも回復しようとは考えていた。

ただ、雨が降っているのあまり長引くと、それはそれで吾郎の負担になるので時間
の調整はきつちりしないといけない。

内野陣がマウンドに集まってきてくれているので、大地から全員に話す。

「みんな。俺は打たせて取るタイプの投手だから、結構頼ってしまうことあると思うけ
どよろしくな」

「おう！　大丈夫だ！」

「だな！　任せろ！」

「吾郎ばかりに良いとこ譲りたくないからな！」

「みんなでフォローして行こう！」

「じゃあ……大地君。1点はあげてもいいから、確実にアウトを1つずつ取って行こう！」

全員がポジションに戻っていき、大地は笑顔で外野の全員を見た。

ライトの吾郎、センターの沢村、レフトの清水。全員と目を合わせて、なんとか抑えたいと感じる。

「プレイー！」

プレイが再開して、第1球。大地は低めにボールを意識してオーバースローで投げる。

真ん中低めに決まり、ワンストライクとなる。

（ふむ。さっきのピッチャーと違って、スピードは無いな。100km前後つとところか）

バッターは完全に油断していた。2球目もストレートで、今度は内角低めに投げ込む。

バットにボールが当たるが、ファールとなる。

そして次のボール。大地は同じフォームでストレートを投げた——と見せかけて、大地の手から放たれたのはスローボールだった。

「くっそ!!! またこれか!」

吾郎にスローボールを教えたのは大地なので、同じ以上の精度で出来ないわけがなかった。

重要なのは同じフォームからどれだけ遅いボールを投げられるかなので、吾郎と一緒に何回も練習をした。

これであればストレート投げるときと同じく、肘にも肩にもあまり負担はないので極めれば相当重宝する。

二死ツニアウトになり、あとは打たせて取っていくだけだと思いが、油断はしないように気を引きしめる。

小森からボールを受け取り、自分でもボールを拭く。そしてロージンバックを手に付けて滑らないようにした。

「よっし! 二死ツニアウトね! あと一人、油断せずに行こう!」

「「「おー!」」」

大地の号令に全員が応え、次の一番バッターをみる。

特にやることは変わらないので、低めに制球をして打ちづらいようにしていく。
(くそ。球はそこまで速くないのに、打ちづらいな)

初球を見逃しストライク、2球目は外してボール。

そして3球目、4球目と外角低めに投げてファールとなり、ワンツーとなる。

丁寧投じているため、バッターにとってはとても打ちづらいボールになっていた。

そして第5球目。大地はスローボールを投げる。

バッターは待つていましたとばかりにきちんと溜めてから打とうとするが、それでも待ちきれずにバットを振ってしまう。

ボールは大地の前に転がっていき、大地は捕球をしてファーストに投げてチェンジとなる。

「大地！ ナイスピッチング！」

みんなの声を聞きつつも、ライトに走っていき吾郎を支える大地。

ゆつくりベンチに戻っていき、吾郎を座らせる。

「お、吾郎。大丈夫？」

「はあ……はあ……」

「母さん、一応ギリギリまでここで休ませてから、打席に立つてもらおうつもりだよ。あのピッチャーのカーブを最初に打つのは吾郎だからね」

「はあ……当たり、前……だろ……」

息を整えながらも、大地の言葉に返事をする吾郎。

少しずつ落ち着いてきたところで、投球練習が終わり、審判から次の打者吾郎を呼ぶ声が聞こえる。

吾郎は息を整えてからヘルメットを被ってバットを持ち、ゆっくりと歩いて行つた。

(あんなボロボロに疲れて……あの坊やはそれでもまだ打席に立つつていいのかいな。

ふっ。それなら俺も全力で相手をしないと失礼だな)

ピッチャーは軽く笑い、吾郎を見つめる目が真剣そのものになる。

途中の回からはピッチングに関しては本気で投げていたが、気持ちまで真剣にやっつていなかつたのだ。

ピッチャーの雰囲気が変わつたことで、残りの野手も空気を感じ取り真剣な顔つきに変わる。

吾郎がバットを構えてボールを待つ。

ピッチャーが初球を投げるが外角高めに大きく外れる。

「あ、あぶねーな！ どこに投げてんだよ！」

「わ、わりーわりー。ちよつとタイムね」

キャッチャーに怒られたピッチャーがタイムを取つてベンチに一回戻る。

監督が「どこかを痛めたのか？」と聞くが、タオルで手とボールを拭きに來ただけだと答えていた。

「なんだ。このまま終わらせるつもりはないのか？」

「ええ。あんなに野球に真剣なガキに対して、大人の俺らがきちんと受け止めてやらな
いかんでしよう。ですよね、沢村さん？」

「ん……、あ、ああ。そ、そうだな」

ロージンバックも持っていく、マウンドで軽く付けてからプレイが再開する。

第2球にカーブを投げ、吾郎は手を出せずに見送る。

「ストライク！」

「す……すげーカーブだ……」

「ちくしよー！ あんなの本当に打てんのかよ！」

「俺の弟は必ず打つよ！ だからみんなも吾郎を信じて応援しよう！」

（あのバカ……あんなに真剣に投げやがって。ここまで来たらもう終わりにしてもいい
だろうが）

（……つて監督は思っているんだろうね。でもな、自分の夢を掴むために向かって来る
やつには手加減は無用なんだぜ！ なあ坊や！）

ピッチャーの第3球のストレートを見逃し、第4球のストレートを吾郎はカットす

る。

カーブが来るかもしれないと思うだけで、ただのストレートでも緩急をつけたボールはなかなか打ちづらいのだが、吾郎は必死に食らいついていく。

そして第5球のストレートをカットされたところで、カーブを待っていることに気付く。

（へえ。この坊やはさつき打てなかつたカーブを要求してんのかい……いいだろう。俺のカーブを打てるもんなら、打ってみやがれ！）

（……くる!!）

ピッチャーが大きく振りかぶり、カーブを投げる。

吾郎はカーブが来ると予測し、きちんとボールを引きつけてから曲がつた先に合わせ
て思いっきりバットを振る。

カアンと大きな音を立ててボールはセンターに飛んでいく。

「センター!! 走れ! 捕れるぞ!」

センターも必死になって追い続け、最後フェンスにぶつかりながらもジャンプをして
手を伸ばす。

しかし、ボールはその上を越えていき、ホームランとなった。

「よおおおおし!!」

「やったああ！ 吾郎がカーブを打ちやがった！」

「「うおおおお！」」

大地、沢村、他のメンバーと次々に声を上げていくが、吾郎はその歓声に応える余裕はなく、ゆつくりとベースを1周して帰って来た。

ベンチに戻って椅子に座りながら、全員から祝福を受ける吾郎。

ヘルメットを被った大地が現れると2人とも笑い合う。

「次は大地の番だぞ」

「へっ！ 任せろ！」

そう言つて打席に向かつていく大地。

商店街チームのピッチャーは呆然としていたが、キャッチャーに話しかけると帽子を深く被り直し、軽く笑いながら「次のやつは絶対に抑えるぞ！」と気合いを入れ直す。

（まさか……俺のカーブが打たれるとはね。だが、次のお前だけには絶対に打たせないからな）

大地に対して、初球のサインはまさか先ほど打たれたばかりのカーブであった。

ストリートが打たれているので、初球からは投げられなかったのである。

しかし、それは大地に読まれていた。初球を狙い大地はカーブを思いつき振り、レ

フトフェンスを越えてホームランにしたのであった。

「……だ、大丈夫か？」

「……まさか俺のカーブが小学生のちびっ子2人にも打たれるなんてな。才能とは恐ろしいもんだねえ」

大地と吾郎の才能と実力は、この場にいる全員が認めるものとなり、ここまで打たれたらもはや笑うしかなかったのである。

この回はそのあと凡退に終わり、最終回の守備が始まる。

◇◇◇◇◇◇

大地は投球練習を終えて、2番バッターからである。

スローボールを交えた配球に手も足も出せず、2番、3番と三振となり、最後の4番バッターがバッターボックスに入った。

(あと1人か……それならアレ使つても大丈夫かな。今はあまり負担掛けたくないからね)

初球、インコース低めにストレートを投げるがファールとなり、ワンストライク。

2球目は外角低めに一旦外して、ボール。3球目にスローボールを投げ、意表を突かれたバッターは空振りをする。

(ここでスローボールだと……? 追い込んだ方がいいが、もう俺にはストレートはどちらも通用しないぞ!)

バッターは両方のスピードに合わせられる自信があつたため、確実に打てると思つていた。

そして第4球目。大地は初めて自分から小森にサインを出した。

(え……アレを投げるの!? 捕れるか自信ないけど……でも必ず捕つてみせる!!)

小森はより真剣な目になり、ミットを構える。

大地は笑いながらも、自分がこれから投げるボールを見て周りが驚いてくれたら嬉しいと思つていた。

振りかぶり、大地はボールを投げた。

(スローボールか……いい、いや違う! カーブか……!? なんだこの変化は!!)

バッターは初めて投げられた変化球、しかもカーブの軌道とも少し違った曲がり方をするボールに当てる事が出来ず空振りする。

小森は必死にボールを見て、上手くキャッチャーミットに収めたのであつた。

「ストライク! バッターアウト! ゲームセット!!」

その瞬間、三船リトル全員が喜び、大地のところへ駆け寄る。

大地もマウンドで大きく両手を上に上げてガッツポーズをするのであつた。

『初打席、初ホームラン達成によりボーナスポイントを付与します』
『3打席連続ホームラン達成によりボーナスポイントを付与します』
『初球○の取得条件が緩和されました』

第二十一話

三船リトルと商店街チームは7対1で三船リトルの勝利に終わった。

全員が礼をして挨拶したあと、最後のバッターをしていた人が大地のところに来ていた。

「君、1つ聞きたいことがあるんだけど、いいかい？」

「はい、なんででしょうか？」

「最後の球……あれはなんだったんだい？ ただのカーブじゃないだろ？」

「ああ、あれは“ナックルカーブ”ですよ。まだ不安定だったので、本当ならこの試合では使うつもりなかったんですけど……」

「そうか……あんな球を小学生に投げられちゃ、俺らも打てねーわ！」

笑いながら大地の背中をバンバン叩く。

大地は痛いと思いつつも悪気がないのはわかっているので我慢していた。

「……というわけで、三船リトルは存続決定だな」

「そりゃそうだろ。市の大会準優勝の俺らに勝ったんだから。こんな熱いガキ達からまだグラウンドを取り上げようなんてするなら、自治会の年寄りはどうかしてるぜ」

「沢村さんが反対しても、この話は俺達が味方するから安心しな」

商店街チームの全員が三船リトルの存続に賛成し、盛り上がっているところに沢村父が現れる。

「やれやれ……あんたら、私一人を悪者にする気かい？ ……まあいい。グラウンドの件は自治会に掛け合って私が必ずなんとかしよう」

「と、とーさん！」

「沢村さん！」

沢村父の言葉に沢村と安藤が喜びの声を最初に上げ、そして全員が喜び合ったのであった。

◇◇◇◇◇◇

商店街チームとの試合が終わった日の夜。

桃子がお祝いにと少しだけ豪華な食事を用意してくれたので、大地と吾郎は喜んで食べていた。

「……え？俺達が横浜リトルに？」

「うん、安藤監督がね、あなた達は三船リトルにいいような器じゃないって。2人くらい実力がある子達は、今のうちから一流のチームでちゃんとやるべきだって言った

わよ」

吾郎が桃子の言葉に対して、「せっかく三船リトルが生き残ったのに、今さらチームを
変えるのはおかしい」と言う。

大地も桃子に聞いてみる。

「俺も吾郎の意見に賛成なんだけど、母さんとしてはどっちがいいの？」

「んー、母さんとしても同じ意見かな。おとさんみたいなプロ野球選手になるって夢は
大切だけど、助けてくれた友達を見捨ててまで行かなきゃいけないようなチームなの
は疑問に思うからね」

「そうだよー！ これからみんなで三船リトルを一流のチームにすればいいんだからー！」

3人の意見が一致したので、その日の夜は美味しい料理をたくさん堪能出来た吾郎と
大地。

しかし、明日までの宿題が終わっていない吾郎は、桃子に急かさながら必死にやる
のであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

次の日。大地と吾郎が教室に入ると、清水が机に身体を預けて辛そうにしていた。

「あれ？ 清水、朝からどうしたんだよ？」

「いやさ、昨日の試合で筋肉痛になっちゃって……」

「まあ仕方ないよね。いきなり試合をやるってなったら緊張もするし、清水さんも一生懸命にやっていたもんね」

昨日の試合について3人で話していると、沢村と小森が一緒に登校してきて大地達のところへやってくる。

沢村父が掛け合ってくれたおかげで、日曜の午前中はそのまま三船リトルが使っても良いということになったと沢村から聞く。

沢村は午後にはサッカーの練習があつて少しハードにはなるが、野球の楽しさも分かつてくれたのか早く試合に出れるように頑張ろうと盛り上がる。

「まあ大地君と吾郎君がいれば、リトルリーグ復帰もそう遠くないよー」
「あとは全員で上手になるために練習しようか！」

大地の呼びかけで、今まで通り休み時間は守備練習、放課後は守備練習を軽くした後に打撃練習をするという流れになっていた。

吾郎と小森はピッチングもしつつ、沢村と清水の練習を見て教えたりもしていた。

大地は商店街チームの時のように急に登板もあるかもしれないため、小森と投げ込みも増やすことにしており、その間の吾郎はスタミナをつけるためにランニングをして、沢村と清水はお互いにボールを転がして捕ってから送球するといった練習をしていた。

そして、待ちに待った日曜日。新生三船リトルの初練習の日である。

「えー、今日より新生三船リトルがスタートする。みんなのおかげで解散の危機を逃れてこんな日がまた来るなんて、とても幸せだ。このよき日に……」

「おじさん、話が長いから早く練習しようよ」

「う、うむ。そうだな。ではまず全員でベースランニングを5周だ！」

「……えー……!!!!」

安藤の話が長くなりそうだったため、吾郎が話を遮り、練習をするように促す。

そして初めからランニングをすることになり、メンバーの一部は不満を漏らす、大地と吾郎、小森はとても楽しそうだった。

準備運動をした段階で、元々いた三船リトルのメンバーは疲れ果てていたが、大地と吾郎は息一つ切らしていなかった。

(それにしてもこの^{大地と吾郎}子達は……一切疲れた様子すら見せないとは……)

キャッチボールやノックをしている時も安藤は大地と吾郎を観察していたが、指摘するところが一切見当たらずレベルの違いが明らかになっていた。

外野ノックでは全員がフライのボールを捕ることに苦戦していたため、大地と一緒に混じって教えていた。

「えっとね、外野フライの基本はボールの落下点を予測することなんだ」

「落下点の予測？」

「そうそう。初めは難しいんだけどね。ほら、ボールがどっちに行つたとかは分かるでしょ？」

その精度を上げていくとこんな感じに……よつと。ボールが前に落ちるのか後ろに落ちるのかとも打つた瞬間に分かるようになるんだよ」

「えー！ そんなの無理だよ！」

「うん、初めは難しいからそこまでしなくて大丈夫だよ！ まずはボールをよく見て、どの方向に行つたかを予測する。次に今いる位置から前なのか、後ろなのかを見て判断出来るようになっていけばいいからさ」

大地のアドバイスでも、初めは一切出来ていなかったが、大地が1人ずつ手を繋いで誘導してあげるにより徐々にコツを掴んできたようであった。

最初に捕れるようになったのは沢村。誘導をするようになってからすぐに捕れるようになっていた。

清水は苦戦して捕れるようになったのは最後の1球だけだったが、1人で出来るようになっていたのでとても喜んでいた。

「よーし！ 今日はいこまで！ みんなお疲れ様！」

「あー、疲れた」

「やっぱまだ硬球は怖いよな」

まだまだ硬球に慣れていないため、恐怖感から抜け出せていないメンバーもいたが、ようやくチームとして動き始めたことに嬉しそうな顔をしていた。

そしてみんなが帰ったあと、大地と吾郎は安藤に呼ばれていた。

「どうしたの？」

「あのね、この話はみんなの前ではしにくいんだけど……やっぱり今日の練習を見て思ったんだ……」

「横浜リトルのこと？」

「え……」

安藤は先に吾郎に言いたいことを当てられて驚くが、桃子から聞いたと聞いて納得した。

しかし横浜リトルには行くつもりがないと言った吾郎に対して、安藤は説得を続ける。

「じゃ、じゃあさ！ 電車賃上げるから、これから練習だけでも見てきなよ。全国レベルの練習がどんなもんなのかを見るだけでも違ってくるから」

「まあいいけどさ……それでも俺らの気持ちは変わらないと思うよ？」

「それでもいいさ。でもおじさんはさ、大地君と吾郎君はもつと自分を磨ける場所を求めて行くべきだと思うんだ。

そこには、2人のようにプロを目指している子供達がゴロゴロしているからさ！」

「んー、大地はどうしたい？」

「えつとね、見るだけなら見てもいいんじゃない？ 強豪チームは見てみたいし、おとさんのいたチームなら尚更どれくらい強いのか気になるしね」

吾郎は大地の言葉に驚く。安藤も知らなかったのか、同じように驚いていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「吾郎って本当に知らなかったの？ おとさんのアルバムって一緒に見てたじゃん」

「い、いやー、チームのことまでは気にしてなかったから」

電車内で大地と吾郎は先ほどの話の続きをしていた。

吾郎と一緒に茂治のアルバムを整理していたが、小さい頃の茂治を見てはいても、どのリトルリーグにいたかまでは把握していなかったのだ。

「まあでもおとさんがいたチームでも関係ないけどね」

「え……大地はおとさんのいたチームに行きたいとは思わないの？」

「うん、興味無いよ」

「なんでさ？ おとさんと同じユニフォームで野球出来るんだよ！」

「ご、吾郎、落ち着けて！ 俺はむしろ燃えてきたんだけど……吾郎は違ったの？」

「……え？」

「だってさ、三船リトルならおとさんがいたチームと戦えるんだよ？ そこに完勝したら気持ちいいって思わない？」

吾郎は大地の言葉を聞いてハツとしていた。

茂治がいたチームで野球をやってみたいという気持ちが強くなりすぎてしまつて、野球本来の楽しみ方を忘れていたのだ。

「初めに自分で決めて、友達まで集めたチームを辞めてまで、おとさんは自分のいたチーム横浜リトルに行つて欲しいとは思わないだろうし」

「……そっか。そうだよね……うん、俺どうかしてたわ。むしろ強豪チームを倒せた時の喜びの方が楽しいもんな！」

「そうそう！ 今日敵情視察つてやつだよ。どれだけ強いのか分かれば、これからの目標も分かりやすくなるからさ！」

「……だな！」

吾郎がこのあと迷わないように説得できたことに安心した大地は、寿也と会うのを楽しみにしていた。

第二十二話

横浜リトルの練習場に着いた大地と吾郎はフェンス越しに練習風景を観察していた。どうやら守備側と攻撃側に分かれての実戦練習をしているようであった。

「馬鹿野郎、ショート！ スリーワンでゲッツー体制取るな！ エンドランの高い可能性を考えたら、前進守備に切り替えてバックホームだろ！ ぼんやりやってんじゃねーよ！」

「は、はい！ すみません！」

横浜リトルの練習でサングラスをかけた監督らしき大人が怒鳴っているのを見て、吾郎は少し嫌な顔をしていた。

「確かにレベル高そうだね。吾郎はどう思った？」

「うん、同じ意見かな。でも俺、あの監督みたいな偉そうな人好きじゃないんだよね」

「あはは、吾郎らしいね。それなら尚更横浜リトルに行かなくてよかったじゃん」

「まーね」

2人が見ている中、少年がピッチャーからヒットを打ち、監督から褒められていた。「ナイスバッティングだ！ お前、今年から入った新四年生か？ 名前は!？」

「はい、ありがとうございます！ 佐藤寿也です！」

佐藤寿也と名乗った少年を見ていたボーツと吾郎であったが、徐々にどこかで聞いたことある名前だと思ひ出す。

「え、え……もしかして……佐藤、寿也って……」

「うん、多分寿くんだね」

「寿也————っ！！！！」

◇◇◇◇◇◇◇◇

『寿くん……俺たちね、明日、隣町の三船町つてところに引つ越すんだ』

『え!? じゃあもう大地君や吾郎君とキャッチボール出来ないの!?』

『わかんない……でも会いにくくなると思う。隣町でもきつと遠いし。……今は野球から離れたいんだ』

大地と吾郎はそのまま寿也の家から自分の家に帰ろうとする。

それを寿也は追いかけてきて、2人を呼び止める。

『ま、待つて！ 会うのが最後になるなら、2人の球を1球だけ捕らせてよ！』

それにダメだよ……野球をやめたら！ 会えなくなっても僕は2人から教わった野球はやめない！

だから大地君も吾郎君も！ おとさんにもう会えなくなっても……おとさんに教わった野球をやめちやダメだよ！』

そう言つて、吾郎にボールを渡す寿也。その言葉に心を動かされる大地と吾郎。

そして互いに一球ずつ寿也にボールを投げる。

『今は会えなくても……きつと一緒にまた野球やろうね！』

『うん!!』



茂治の死から一切会つていなかった吾郎は、寿也に久々に会えたことにとても驚いていた。

眼鏡をしていないが、面影は確かにあった。

横浜リトルの練習が終わつて、全員がグラウンド整備をしようとしたときに吾郎が寿也を大声で呼んだ。

「とつ、寿くーん!!」

「……え？」

「俺だよ！ オレオレ！ 俺だよ！ 本田茂治の息子の本田吾郎だよ！」

「何っ？ 本田茂治の息子だっけ!？」

「ご、吾郎君!？」

急に呼ばれた寿也はびっくりしながら近付いてきて、茂治の息子だと聞いた監督も驚いていた。

グラウンド整備が終わって、全員が帰り支度をしているとき、大地と吾郎、そして寿也はグラウンドにあるベンチの椅子に座って話していた。

「びっくりしたなあ。まさかこんな風に寿くんに会えるなんて思っていなかったよ！」

しかも横浜リトルでやってるなんてびっくりじゃん！」

「そうだね。僕もびっくりしたよ。吾郎君とはあの日以来、会っていなかったからさ。あ、大地君も数週間ぶりだね」

「うん、元氣してた？」

「うん、相変わらずだよ。大地く——」

「——え、待って！ 大地は寿くんと会ってたの!？」

「そうだよ。俺からたまに会いに行ってた」

「な、なに——!？」

寿也との再会だけでなく、大地がたまに寿也に会いに行っていた事実を知り、さらに驚く吾郎。

「な、なんで一人で行ってるんだよ！俺にも声掛けてくれたっていいだろう！」

「え、何回か声掛けたじゃん。その度に眠いからとか、観たいテレビあるからとか言っただけだから、そこからは声掛けてないんだよ」

「……………え？ ……あ、そうだっけ……………」

「吾郎君……………」

さすがに寿也もそのことを聞いて苦笑いをしたが、吾郎が笑って誤魔化す。

とはいえ、久しぶりに会ったので話は尽きない。

「そういえば三船リトルに入ったんだね。人数が足りないって聞いたけど、集まったんだ？」

「まあね。俺と吾郎で友達集めて再結成したよ。今から猛特訓して強くなるとだけどね」

「そうなんだ。けどもつたいないなあ……………大地君達なら横浜リトルでも十分に通用するのにな」

「おい、佐藤。その子達、あの本田選手の息子ってのは本当か？」

話の途中で、監督が割って入ってきて茂治の息子が本当か尋ねてきた。

吾郎は茂治のことを覚えていてくれる人がいたことに喜ぶ。

「その格好を見ると、君達も野球をやっているみたいだな。得意なポジションはどこだ

「？」

「え……そうだね、どこでも出来るけど。まあ一応ピッチャーかな」

「俺はショートかな。ピッチャーも少しだけやりますけど」

「そうだ！ せっかくだから大地君と吾郎君のピッチングを監督に見てもらいなよ！

監督！ ぜひ見てあげてください！ 2人ともすごいですから！」

「うむ……ぜひ見たいね」

「ハハ……そりやどーも」

「あつと、俺は遠慮しておきますね。今日はもう疲れたので」

疲れたことを理由に大地は監督に見てもらうことを断る。

吾郎は断り切ることが出来ずにマウンドに行くことになり、寿也がキャッチャーをしてくれることになった。

（大地、ずるいなー！ 1人だけ逃げやがった。まあ寿君と久々にキャッチボール出来るって思えばいいのかな）

まだ残っていた小学生や監督が見ている中、吾郎は振りかぶってストレートを投げる。

あまりのスピードに、寿也は思わず目を瞑ってしまいが、大きな音を立ててミットにボールが収まる。

(は……速いよ！ やっぱり吾郎君はすごい！)

「ナイスボール！ 吾郎君！」

「……もういい。実力は分かった。合格だ。来週からうちのユニフォームを着ろ。プロへの階段を登らせてやる」

「え……？ 何が？」

「す、すごいよ、吾郎君！ たった一球投げただけで入団テストに受かったんだよ！」

三船リトルをやめて一緒にまた野球をやるうという寿也に対して、吾郎が冷たく話す。

「わりーけど、俺そんな気は全然ないんだよね……別に合格しようとか思っただけで見てたわけじゃないし」

監督も寿也も入団テストに合格しないと入ることが出来ない名門チームを断った吾郎に対して驚く。

だが、吾郎も仲間を裏切れないなどの事情を話して、入るつもりはないと言う。

そのことに対して監督は、

「お前はどうかんだ？」

「え……？」

「仲間とか親の考えとか、そんなクソにもならん事情はどうでもいい。」

問題はお前自身が将来野球で飯を食っていききたいかどうかだ」

「それって横浜リトルに入らなきゃ、将来プロになれないっていうわけ？」

「確率の高さを言っているまでだ。どうせやるなら、環境や設備の充実した中でプロを目指すのが自然だろう」

監督が理路整然と話そうとするが、吾郎はそれでも断る。

そこに大地も入ってくる。

「まあ……まで吾郎が入らないと言っているんですから、仕方ないですよ」

「む……お前はどうかんだ？」

「え？　俺ですか？　もちろん入りませんよ」

「……なぜだ？　お前もこいつと同じくらいの才能があるのだろうか？」

「んー、どうせなら吾郎と楽しく野球をやりたいので。その中で横浜リトルに勝てたりしたら面白いじゃないですか？」

監督は単純に野球を軽く楽しむものとしていたのではなく、先を見据えて話していることに気付き、これ以上の勧誘をするのを諦める。

「……分かった。だが、うちに簡単に勝てるとは思わないことだな」

「もちろん！　だからたくさん練習をするさ！」

サングラスを外し、お互いに笑顔で話す監督と本田兄弟。

大地と吾郎

後日寿也から監督——名前は樫本というらしい——が元プロ野球選手で茂治と同世代でプロを目指していたと聞き、なおさら負けられないと闘志を燃やす2人であった。

第二十三話※

家に帰った大地と吾郎は、夕食時に桃子に今日あつたことを話した。

「え、2人で横浜まで行つてたの!? ずるいじゃない! 私も行きたかつた!」

「……母さん、そつちじゃないよ」

「あ、ごめんごめん。それでおとさんが横浜リトルに所属していたんだ?」

「そうなんだよ! 設備とかも凄かつたんだよ! しかも寿くんもいてびつくりしたよ

! 覚えてる? 佐藤寿也つて」

「あ! 覚えてるわよ! 前の家の近所に住んでいた子よね?」

桃子は横浜リトルに見学行つたことよりも、横浜中華街で美味しいご飯が食べたかつたと言ひ出していた。

大地がさすがにツツコミを入れて、桃子はテヘペロをして誤魔化していた。

今日あつた話をしていると、桃子が真面目な顔をして質問してきた。

「それで……2人は横浜リトルに行きたくなつたの?」

「ん? 違うよ。むしろ三船リトルのメンバーで横浜リトルに勝つのが楽しみになつてきたよ!」

「だね！ 大地なんて横浜リトルの監督にタンカ切っちゃってたんだよ！」
「ちよつ！ 吾郎、それ言わないで！」

吾郎が出した話に全員が笑っていた。そして桃子は心の底から安心した。

もしかしたら大地達が横浜リトルに行きたいと言いつつも出すかもしれないと思っていたのだ。

（茂治さん……やはりこの子達はとても良い子ですね。タイミングが違っていたら横浜リトルに行きたいって言ってもおかしくなかったでしょうに。

友達を裏切らない選択が取れたことは、私がこの子達をきちんと導いていたのではない、茂治さんと千秋さんのお陰なんだと思います）

次の日、下駄箱のところで沢村と小森に会う。

「おーっす！ 大地、吾郎！」

「おはよー！」

「おはよー！」

「おう！」

朝の挨拶もそこに沢村が「良いもんを見せてやろうか」と言つて、新品のグローブを見せてくれた。

最新式のタイプで父にねだつて買ってもらったと嬉しそうに話していた。

「じゃあ今日からそれを使って練習していこう！ 型付けしたり、手入れとかも結構あるから教えてあげるよ」

「おう！ サンキューな、大地！」

4人で沢村の新しいグローブについて話しながら教室に入ると、清水が1人席に座って何か本を読んでいた。

清水は吾郎達に気付くと、挨拶をして話しかけてきた。

「おう！ おはよ！ ちようど良いところに来た！ ちよつとこれ教えてくれよ！ここでランナーがいる場合のルールがわかんねーんだよ！」

清水が読んでいたのは野球入門書で、細かい部分でまだわからないことがあるため質問をしてきたのであった。

吾郎は清水から入門書を受け取り、その部分の解説をし始める。

「……つてことなんだ。分かった？」

「あー！ なるほどね！ 分かったよ！」

「……おい、吾郎。……お前もしかして気付いてないのか？」

「え……？」

「清水さん、髪切ったんだね」

「あ、そうなんだよ！ これから暑くなるし、野球すんに長いとうつとーしいからな

！」

「え……清水、髪切ったの？」

（おい、吾郎よ……本当に気付いてなかったのか？ このままじゃ未来の線薫に逃げられるぞ！）
 清水が髪を切ったことに気付いてすらいない鈍感な吾郎に対し、大地は本気で将来の心配をする。

沢村と小森はすぐに気付いて、「気合入ってんなー！」「似合っているよ！」と褒めたりしていたが、吾郎は特にコメントしていなかった。

そもそも褒め方自体を分かっている様子であった。

休み時間も放課後も野球漬けの毎日を送っている大地、吾郎、清水、小森、沢村の5人は秋の大会に向けて少しずつ腕を上げていた。

そして、大地は前回の試合で貯まったポイントを使って能力を上げておくことにした。

◆◆◆◆◆

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覽

球速：111km

コントロール：E

スタミナ：E+

変化球：

ナツクルカーブ：2

◇野手基礎能力一覧

弾道：2

ミート：E+

パワー：E

走力：E+

肩力：E+

守備力：E+

捕球：E+

◇特殊能力

チャンスD+

ケガしにくさC-

送球D+

ムード○

◇
◇
◇
◇
◇

今回上げたのが球速とスタミナである。商店街チームとの試合では上手く誤魔化せていたが、強豪と当たった際に100km前後のストレートでは簡単に打たれてしまうであろうと思っただからである。

そして110kmを超えたとき、肩力がE十へと上がっていた。球速と肩力もある程度連動しているため、肩力に関してはそこまで注力しなくても自然と上がっていくのであった。

(んー、それにしてもDに上がるまでのポイントが凄まじく高いな。これもきつと中学生になったら変わるんだろうけど)

基礎能力はE十まで上げたあとは、特殊能力を取得したり中学生になるまでポイントは取っておこうと心に決める大地。

今欲しい能力としては初球○だ。前回に試合で取得条件が緩和されたとアナウンスがあったので調べてみると、もう少しでコツを取得出来そうだったのだ。

条件の緩和とはコツよりもややポイントの軽減量が低いということがわかった。条件の緩和を繰り返していくことでコツを取得できるようであった。

(じゃあ初球○に関してはコツが取れ次第、習得しようか。あとはケガしにくさは早めにカンストしておきたい。吾郎にも付けてやりたいくらいだし)

能力を上げ終えた大地は布団に入り就寝する。

そして次の日もいつもと同じように生活を送り、家に帰って夕ご飯を作ろうと思つていたのだが、家の前に誰かがいてチャイムを鳴らしていた。

「ん？ な、何だい、おじさん！ セールスに来たつてうちは何も買わないよ！」

「もしかして……君は本田大地君ですか？」

「ん？ 大地ならこつちだよ」

「あ、失礼しました。じゃあ君は吾郎君ですかね？」

「そ、そうだけど……おじさん誰!？」

急に自分の名前を当てられて困惑する吾郎。

その目は明らかに不審な人を見たときの顔をしていた。

「え、吾郎覚えてないの？」

「覚えて……つて会ったことあるの？」

「……まあね。お久しぶりです。日下部さん」

「あれ？ 大地君は覚えてくれていたんですね。私は東京シャイアーズの通訳の日下部という者です。大リーガー、ジョー・ギブソンの使いで来ました」

「ギ……ギブソンの……!？」

ギブソンの名前が出た途端、吾郎の頭の中は茂治がデッドボールを受けたとき、そし

て死んでしまったときの出来事を思い出してしまった。

大地も同じようにあの出来事が頭の中で浮かんでしまって、苦虫を噛んだ顔をしていた。

第二十四話

日下部を家の中に招き入れることにした大地と吾郎。

「すみません、いきなりお邪魔して。昼からお電話入れていたのですが、どなたもお出にならなかつたので……」

「いや、俺ら学校ありますし、母さんは仕事なんですから出るわけないじゃないですか」
「あ……確かにそうでした」

「はははと苦笑いしながら納得する日下部。

「何飲む？ インスタントのコーヒーか紅茶しかないけど……」

「あ、いいですよ。お構いなく」

「良いよ、遠慮しなくて。それよりその喋り方なんとかしてよ。俺らは子供なんだからタメ口でいいよ」

「あ、そうかい……じゃあコーヒーを頼むよ」

「へー」

吾郎はそう言って手際良くコーヒーを作る。

とはいってもインスタントなので、お湯を沸かして注ぐだけなのだが。

「お母さんは何時ごろ帰ってくるの？」

「んー、多分もう少しで帰ってくるとは思うんですけど」

「それよりさ、ギブソンがうちに何の用なの？」

「あ、ああ……これを渡してくれと」

用件を急かす吾郎に対して、日下部は一枚の封筒を手渡す。

そこにはアメリカにある航空会社の名前が書いてあった。

「……何これ？」

「アメリカ行きの航空チケットと今年のメジャーリーグオールスターゲームの招待券です」

「ア、アメリカの……オールスター!？」

「ええ……もちろんギブソンも出ます。夏休みにぜひお母さんと一緒に来てくれと」

「もし3人で心細ければ、私も同行してサポートするように言われています」

吾郎は封筒をテーブルに置くと、日下部に真意を聞く。

「何のため？」

「え？」

「なんで俺らが今更あいつにこんな真似されなきゃいけないわけ？ 別にもう何の関係

もないじゃんか」

「……吾郎」

大地に相談することもなく招待状を返すと言う吾郎に対し、日下部も困ると返答をする。

確かにギブソンは茂治の命を奪ったので恨まれても仕方がないが、そのお詫びとして招待状を送ってきたのだと話した。

「日下部さん、それはおかしくないですか？」

「ど、どういふことだい？」

「なんか……それだけ聞いてると、招待状を送るから水に流せよって風に聞こえるんですけど」

「そ、そんなつもりじゃ——」

「——別に恨んじやいなんだよ、俺も大地も。けど、葬式にも来なかった奴が、いまさらこんなモノでご機嫌取ろうとしないですよ。」

どーせおとさんを殺したことなんて、運が悪かったぐらいにしか思っていないにせよ。

ほとぼりが冷めた頃にアメリカ旅行でもさせてやれば、お人好しのバカな日本人は喜んで許してくれるとも思ったら大間違いだよ！」

「そ、そんなんじゃない!!」

「「……」」

「彼は……ギブソンはそんな男じゃない！」

吾郎の言葉に日下部は強い口調で反論した。ギブソンの内面をどの日本人よりもよく分かっている彼だからこそ言える言葉であった。

そして茂治の葬式の日について話し始めた。

◇◇◇◇◇

葬式の当日。関係者や報道陣が全員集まっている中、巨仁の首脳陣は陰でコソコソと話をしていた。

『何!? ギブソンがいないだど!?』

『は、はい。今、日下部から連絡があつたんですけど……彼のマンションにも、行きつけの六本木の店にもいないらしくて……一体どこへ行ったのか……』

『馬鹿野郎!! 手当たり次第に探させろ! 本田君を死なせてしまった本人が葬儀に来なかつたら大問題だぞ!』

『は、はい!』

ギブソンのマンション、六本木の行きつけの店にもいなかったもので、日下部は球場で選手から話を聞いていた。

しかし誰もギブソンの居場所を知らず、どうしようか途方に暮れていたところで助つ

人外国人のマークがギブソンを見かけたと情報をくれた。

『ああ……やつなら30分ほど前に水道橋の駅前を歩いてたぞ。こっちは車だったから声を掛けそびれちゃったけど』

『それは本当かい!? ありがとう! そっちを探してみるよ!』

急いで水道橋の駅に行くが、ギブソンらしき人はいなかった。

そして近くにある喫茶店をしらみつぶしに探そうと思った時であった。

(そういえば……以前しゃぶしゃぶを食べに行つたとき……パチンコに行きたいと言つていたな。ま、まさかね……)

そう思いながらも不安を隠しきれず、駅前にあるパチンコ店を回る日下部。

3店舗探すがやはりいるわけがなく、諦めつつも4店舗目に入った時であった。

そこには黒服で髪の毛を後ろで束ねている大柄の男性が席に座っていた。

そして大当たりを連発しているのを周りの人が褒めているのであった。

『ミスター』

『おう、日下部か! これはとても面白い遊びだな! お前もやれよ、面白いぞ!』

『ど、どういうつもりですか!? 今日には本田選手の葬儀ですよ! 冗談はやめて今すぐ

一緒に来てください!』

『……代わりに行っておいてくれ。本田の亡骸には昨日会ってきているだろう』

『いい加減にしてください！ 怒りますよ！ 本田を死なせてしまったのは間違いないくあなたの方ファストボールなのですよ！』

その言葉を聞いた瞬間、ギブソンは目を見開き、そして思い切り利き腕である左の拳でパチンコ台を殴りつけた。

パチンコ台のガラスが割れ、釘がギブソンの拳に刺さり血が滴っていた。

『ミ、ミスター！ 利き腕を——』

『——分かつてるよ……。分かつてるよ！ そうさ、本田の家族から父親を奪ったのは俺のこの左腕だよ！』

『……』

『だが葬式に行つて、何を言えばいい……。あの泣きじやくる本田の息子と……。泣きたいのに恨みごとを言いたいだろうに、俺の家族の心配をしてくるもう一人の息子に……。俺はなんて言葉で詫びたらいいんだ！』

『教えてくれ……。教えてくれ、日下部！』

◇◇◇◇◇

「それからすぐに式には駆けつけたけど……。間に合わなかった。ギブソンはそのあと1ヶ月、背筋痛を理由に登板をしなかったけど……。本当はその時ガラスで切った左手の

怪我のせいだったんだ」

「……」

「本当は半年の契約だった彼が、そのシーズン全てを日本でプレーしたのは、本田選手を失った日本球界と遺族の人達への彼なりの精一杯の償いだったんだ……」

日本人に、日本の子供達にメジャーのピッチングを見せることだけしか、今の俺にはできないと言ってね。

そして、今年。大きくなった本田の息子達にメジャーリーグのプレーをぜひ見に来て欲しいと言ってきた」

そして日下部は封筒を裏返し、そこに書かれていた文字を読む。

「ここに彼の直筆でこう書いてあります。

私の野球人生で出会った中で最も偉大なるスラッガー、本田茂治の息子達へ贈る。」

そう言うと言下部は立ち上がり、帰ろうとする。

「これで彼を許せとか、そういうことは言いません……しかしぜひ見に行つてあげてください。」

きつと彼はその歓迎の気持ちをオールスターのマウンドで表現してくれるはずです」

「……」

吾郎は黙ったままだったので、「これで失礼しますね」と言つて玄関に行き、外に出ようとする。

その時、大地が日下部に話しかける。

「あ、あの……」

「ん？ どうしたんだい？」

「ギブソンのご家族は……ご健在でいらつしやいますか？」

「……いや、昨年奥さんと娘さんが交通事故に遭つてしまつてね……今は息子と2人暮らしたよ」

「そう……でしたか。分かりました。わざわざ来てくださつてありがとうございます……」

頭を下げた日下部を見送る。

吾郎は封筒を見たまま、俯いてその場から動かなかつた。

第二十五話

「え……?!」 ギブソンからメジャーリーグオールスターゲームの招待状……!」

その日の夕食時、桃子に日下部が来たこと、そしてギブソンからオールスターゲームの招待状を貰ったことを告げた。

桃子はとても驚き、こんなのを貰えないと言う。

「まあ……ギブソンは年俸何億も貰っているお金持ちだからね」

「そうそう。だから気にする必要もないよ」

「で、でもパスポートの申請だってあるし……」

「行くのは夏休みだから、それまでに申請すれば問題ないでしょ。仕事だって幼稚園から夏休み取れると思うし」

桃子は行かない理由を探しているような気がしていたが、大地と吾郎は説得していた。

さつきまで俯いていた吾郎が桃子を説得するのに少し違和感を覚えた大地だが、おそらくギブソンからのメッセージを見て行ってみようとなったのかも知れないと頭を切り替える。

「でも、アメリカって怖いイメージあるし……」

「母さん、俺達行きたいんだ」

「え……」

「行つてこの目でメジャーリーグを見てみたい！」

「野球を生んだ国の世界一のバッティングやピッチングをこの目で確かめてきたいんだ！」

大地と吾郎の言葉に桃子は説得が無理だと思つたのか、笑顔で「じゃあ早速パスポートを取りに行かないとね」と許可を出してくれた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「なににい!!アメリカ旅行ー!?!」

「はっはっは、羨ましいだろう!君たち庶民には20年後のハワイ旅行がいいとこだからね」

清水に「やなやつ」と言われた吾郎は気にせず笑い飛ばす。

ギブソンからチケット貰つて、ただでアメリカに行けることを疑問に思う3人に、
「ああ、そいつが俺たちの親父を殺したんだよ」

あつけらかんと言つた吾郎の言葉に、その場の空気が凍つた。

「吾郎、その言い方は誤解を与えるって！ ……事故だよ。俺らもそこまで気にしないから大丈夫」

「な、何だよ。びつくりさせんなよ！」

「オールスターゲームってことは夏休みに行くの？」

「そうだよ。だからそれまでは今まで通り野球の練習をして行こうぜ！」

夏休みが始まるまでは野球の練習をどんどん進めていく5人。

日曜日の午前中しか全員が集まって練習ができないため、そのときに連携プレーを中心に行い、平日や土曜の午後は各自の実力を上げる練習をした。

吾郎は投げ込みとランニング、そしてバッティングセンターで打撃練習。小森は吾郎と一緒に練習メニューをこなしていた。

沢村と清水は、大地が特別メニューを作り、守備と打撃、そしてバント練習をする。

大地は沢村と清水を教えつつ、陰で吾郎と同じメニューをこなすというハードな日常を過ごしていたが、練習好きな大地にはそこまで苦ではなかった。

そして心配していた吾郎のハードワークも大地がうまく調整することで、少しでも肩や肘に負担が無いようにもしていた。



夏が始まり、セミが元氣よく鳴く季節がやってきた。

「じゃあお世話になります」

「はい、安心して任せてください。私がいれば大体は問題ありませんので」

タクシーに乗って空港に向かう一行。

空港に着き、人生初めての飛行機に乗る大地達は気持ちを高揚させながら出発時刻を待っていた。

「アメリカとか行くの初めてなのよー!」

「え、母さんも初めてなんだ?」

「そうよ! というか、海外自体が初めてなんだけど……」

「ああ、だからあんなに不安になっていたんだね」

桃子はこの日のためにアメリカのガイドブックを何冊も買って読み込んでいた。

その様子を見ていた大地達は、「観光に行くわけじゃないんだって」と苦笑いしつつ桃子を見ていた。

そして、話をしていると搭乗時刻が近づいていた。

「ほらみんな。搭乗時刻になったから行くよ。はぐれないようについてきてね」

「はいー、ほら行くよ大地、吾郎!」

日下部についていく桃子。2人が仲良く話しているのを見て、吾郎が怪しげな顔をす

る。

「え……もしかしてあの人が俺らの新しい父親になったりしないよね？」

「いやいや、それはないって……た、たぶん」

「ほら、早く行くよ！」

（おお！ 椅子がでかい！ しかもフカフカだ！）

ギブソンから貰ったのはスタジアムに入るチケットだけでなく、飛行機のファーストクラスのチケットも入っていた。

桃子がとてもはしゃいでおり、吾郎が日下部に「ねえ、このおばさんを次の駅で下ろそうか？」と話していたが、なんだかんだでサンフランシスコまでのフライトを楽しむのであった。



サンフランシスコに着いた一行は、オープンカーを借りた日下部の運転でドライブを満喫していた。

「うわあ！ 着いた！！ 右も左もアメリカよ！ ねえ大地！ 吾郎！」

「うるせーなあ、俺は時差ボケで眠いんだよ」

「ほら、だから寝とけつて言ったじゃんよ。母さんもあまりはしやぎ過ぎると車から落ちるよ?」

桃子はアメリカに着いてとてもはしゃいでおり、吾郎は時差ボケでとても眠そうな顔をしていた。

「日下部さん、今日はどんな感じの予定ですか?」

「えつとね、試合は明日だから、今日はシスコ市内を軽く観光しようか。案内するよ」
大地の質問に日下部は優しく答えてくれる。

雑談をしながら車を走らせていると、右手にスタジアムのような建物が見えてきた。

「おじさん、あの建物って何? 照明みたいなのが立ってるけど」

「え? ああ、あれはキャンドルステイックパーク・スタジアムだよ。ギブソンのいるサンフランシスコ・ガنزのホームスタジアムさ」

「ギブソンのホームスタジアム!」

「まあ明日のオールスターはあそこじゃないけどね」

「……じゃあギブソンの家もこの近くなの?」

「そうだよ、行ってみるかい?」

「いや、いいよ……別に俺、ギブソンに会いにきたわけじゃないから……。俺はメジャー

リーグを見にきただけさ」

「え、俺は会いに行つてもいいんだけど……」

「おま！ 大地！ 裏切るのかよ！」

大地の何気ない一言に場が和む。

その後、サンフランシスコの市街を観光する一行。

「あれが有名なゴールデンブリッジかあ！」

「凄いでかいねー！」

「あれはアルカトラズ島っていつて、昔に凶悪犯を収容していて、脱獄不可能と言われた刑務所だよ」

「まさに島流しだったんだ……」

「あそこから脱獄する映画なんかを観たことあるよ、俺」

桃子は明日の野球の試合よりも、サンフランシスコで蟹を食べたり、観光する方が楽しみだったようで、とても満喫していた。

そしてチエックインするためにホテルに向かった。

「えー！ すごい！ 超高級ホテルじゃない！」

「まあ超一流の大リーガーの招待だからね」

『お客様、背中のお荷物をお持ちいたします』

ホテルのスタッフがいきなり英語で話しかけてきたため、驚く桃子と吾郎。

「な、なんだ!? なんて言ったんだ!？」

「え、私も分からないわよお！」

「アハハハハ、マイマザー イズ ドッグ! ノープロブレム サンキュー!」

『……………』

「いやいや、お母さんが犬なのに問題ないって、結構ひどいこと言うわね、吾郎」

「と、とりあえず知っている単語を並べてみました」

『荷物、お願いします。ただ、今代表者がチェックインしているので、それからでもいいですか?』

『かしこまりました。また後でお声掛けしますね』

大地の返事を聞いたスタッフはすぐに下がっていった。

アメリカに行くのが清水ではなく、桃子になった場合のこの会話がどうしても聞きたくて、最後まで何も言わずに待っていた大地だったが、とても面白い漫才が見れたと心の中で笑っていた。

ホテルの部屋に案内された一行は、景色やウエルカムフルーツなどを堪能していた。

日下部は仕事があるとのことで、食事は3人で行くことになった。

初めは日下部も心配していたが、大地が英語をちゃんと話せることが分かったこと

と、ここが一流ホテルということで危険も少ないと判断したようだ。

それであれば家族の時間を取ってあげたいという日下部の配慮でもあった。

食事も終わり、先にお風呂に入っている大地。

吾郎と桃子は分からない英語の番組をじつと眺めていた。

そして、そのとき一本の電話が鳴った。

「で、電話!？」

「ご、吾郎、出てよ!」

「え……そんなの無理だよ! てか大地はどこにいるのさ!？」

「ま、まだお風呂に入ってる! 呼んできて……つて切れちゃった」

あわあわしているところは血が繋がっていなくても家族なのだと思わせていた。

大地は電話の音にも気付いていたが、気にせずに湯船で鼻歌を口ずさんでいた。

『チェックインはされているのですが、どなたもお出にならないようです。レストラン

かどこかへ出られているのでは……?』

『そうか……では、あとでこれを部屋に届けておいてくれ』

ホテルのフロントが電話を切った後に、目の前にいる男に話す。

その男は少し残念そうな顔をしたが、フロントにある物を預けると、そのまま帰って

行った。

全員がお風呂から出てまったりしていた頃、テレビをみていた桃子が偶然ギブソンのスポーツニュースをやっているのを発見する。

「だ、大地、吾郎！ ギブソンがテレビに出てるわよ！」

「えー！ 大地！ 通訳して！」

「オッケー！」

そう言つて大地の通訳でギブソンのインタビューを聞く。

『ギブソン投手、明日先発が予想されていますが、オールスターゲーム出場の気分はいかがですか!』

『オールスターゲームに選ばれて光栄だ……。私が先発するかどうかは分からないが、出場したらとにかく全力を尽くすだけだ。』

全米のベースボールファンと、遙々日本から来てくれた私の友人達のために』

インタビュー中に部屋のチャイムが鳴り、大地が対応する。

『はい?』

『1時間ほど前にミスターギブソンがこれを渡して欲しいと言つてお預かりしました』

『ああ、どうもありがとう』

そう言つてチップを渡して部屋のドアを閉める大地。

吾郎達のところに向かい、ギブソンから預かつたものを渡す。

そこには—— “ようこそアメリカへ” と書かれた硬球があつた。

第二十六話

『皆さん、こんばんは！ こちらカリフォルニア州のオークランドスタジアム。

いよいよ世界中のベースボールファンが待ちに待った夢の球宴、メジャーリーグオールスターが間もなく始まります』

「ホテルから何から何までVIP待遇じゃん。でも遠くてあんまり選手の表情まで見れないね」

「どうだい？ メジャーリーグスタジアムに来た感想は？」

「……別にどうってことないよ。内野まである天然芝は綺麗だけど、初めて東京ドームに行つたときの方が感動したよ」

「あ……そ、そうかい」

日下部に感想を聞かれた吾郎は率直に答えた。

少し素っ気なく答えたりするのは小学生の男の子らしい部分でもあった。

国歌斉唱の後に始球式も終わり、これから試合が始まる。

吾郎と大地はギブソンの方を見て、『全力を尽くすだけだ。日本から来てくれた私の友人達のために』という言葉を思い出していた。

『さあ、始球式も終わって、いよいよ試合が始まります！』

マウンドにはア・リーグの奪三振王であるランディ・ジョンソンが上がります。迎え撃つは年棒5億、フィリップスのスーパースターであるダイカストラ』

ギブソン率いるナ・リーグは先行のため1番打者のダイカストラが打席に立つ。

プレイボールがかかり、ランディがファストボールを内角に投げる。

その初球を狙っていたのかダイカストラが打ち、センター方面へ強い打球が飛んでいく。

このままヒットになるかと思つたが、ショートのリブキンがダイビングキャッチをし、膝をついたまま一塁へ送球をする。

ダイカストラも全力で走るが、間一髪間に合わずアウトになってしまう。

『アウトー!! いきなり素晴らしいプレーが出ました! 名手、鉄人リブキンのスーパープレー!!』

「……」

「さすがだね。なかなか日本人には真似できないプレーだ」

驚く大地と吾郎に対し、冷静に解説する日下部。

2番のグインが三振となり、次はバリー・ボーンズの打順である。

サンフランシスコ・ガンズの強打者で足も速いバリーも初球を打ち、ライトの横を抜ける。

バリーは俊足を活かし一塁を蹴って二塁へ向かう。

(す、すげえ。あんな身体をしてなんて足が速いんだ！)

吾郎はメジャーの選手の凄さに驚いている。

しかし、ライトのビケットがボールを捕ってそのまま二塁に向かってダイレクトで送球をする。

矢のような送球がショートのリブキンに届き、バリーもヘッドスライディングをするも間に合わずにアウトになった。

『アウト！ 刺した！ 刺しました！ これがメジャーだ！ 打ちも打ったり、守りも守ったり！ いきなり魅せますメジャーリーグベースボール！』

「どうだい、2人とも。これがメジャーリーグだよ」

「……さすがメジャーだね」

「ああ。やるね……連中。これで俺もようやくアメリカに来たって気がしてきたよ……」

『さあ1回の裏、ナ・リーグのマウンドに登るのは、現在10勝1敗。防御率0.98とナ・リーグの大スターであるサンフランシスコ・ガンズの弾丸ジョーこと、ジョー・ギブソン！ 果たしてどんなピッチングを見せてくれるのか！』

(よくアメリカまで来たなBOYS^{少年達}よ。今から最高のおもてなしをしよう!)
大地と吾郎を見ながら不敵に笑うギブソン。

2人も見られているのが分かったのか、同じように笑い返す。
そしてギブソンは1番打者であるロプトンを見る。

プレイがかかり、ギブソンはいつもの変則フォームから外角真ん中へファストボールを投げ込む。

94マイル^{150km}がミットに入り、ワンストライクとなる。

2球目も同じくファストボールだが、今度は154kmとスピードが上がっていく。

(よし、次はスプリットフィンガーで1球目と同じコースだ)

キャッチャーのマイクがサインを出すもギブソンは首を振る。

カーブが良いのかと思い、サインを出すもギブソンはさらに首を振り、
『N o! Hey, Mike! In this game,
I will pitch the fastball only!』
他はファストボール投げるつもりはな

ギブソンの言葉にロプトンもマイクも驚きの表情を見せる。

『な、何でしょう? 今、ギブソンがキャッチャーに何か言ったようですが……』

(こ、この野郎! なめやがって! ナ・リーグの速球王とか言われて調子乗ってんじゃねーぞ!)

ファストボールだけで抑えられるほど、ア・リーグのバッターは甘くねえんだよ!!」
ギブソンの言葉を聞いていたロプトンは、怒りで少し冷静さを欠いてしまい高めのボール球に手を出して三振になってしまった。

まさか三振するとは思っていなかったロプトンだったが、ベンチに戻る前に2番打者のカルロスにギブソンが話していたことを伝える。

「ス、ストレートだ。ギブソンはさっき、ストリートだけで勝負するって言ったんだ」
「……おそらくね」

「うん、俺もそんな気がするよ」

吾郎の言葉に日下部が返事をして、大地も頷く。

そのまま2番のカルロス、3番のマルチネスも三振に仕留める。

解説もファストボールだけで抑えられるほど甘くはないと言っていたのだが、三者三振に言葉を失っていた。

「君たちのお父さんの時と一緒だ!」

「え……!?!」

「ギブソンは相手が一流の打者であればあるほど、直球勝負にこだわるんだよ。」

そして君達のお父さんは彼の160kmの真っ直ぐをホームランにした。もしかしたらだが……ア・リーグのスーパースター達を直球だけで抑えることで、彼は君達のお

父さんの偉大さをこの舞台で君達だけに証明しようとしているんじゃないのかな?!

『なんと初回のギブソン、強力ア・リーグ打線を三者連続三球三振!しかも全部予告したファストボールのみ! 驚きました! どよめく、オー克蘭ドアスリーツ・スタジアム!』

「ふん、そんなデモンストレーションで俺が許すとも思ってたのかね」

「……」

吾郎は複雑そうな顔をして呟き、大地は黙っていた。

2回の表、ナ・リーグは三者凡退となり、ギブソンが再度マウンドに登ってくる。

(あいつはおとさんを殺したんだ。そんなことでためのイメージを変えようだったってそうはいかねえぞ……そんな……ことで……)

『空振り三振ー! 2年連続MVPの主砲であるトマスも三振! これでギブソン、4連続奪三振! あと一つでメジャーリーグのタイ記録です!』

続く5番のビルも三振に仕留め、メジャーリーグオールスターの連続奪三振タイ記録に並ぶ。

三振にした際の最後のボールが160kmを記録したため、会場の興奮もどんどん高まっていく。

『さあ、あと一つでオールスター新記録! 今日のギブソンは恐ろしく気合が入ってい

ます！ 打席には鉄人リブキン！』

ギブソンはいつものように大きく足を上げ、直球を全力で投げ込む。

リブソンはかすることも出来ずに空振りする。

2球目は外角低めに投げ、リブソンは見逃すもギリギリ入っており、ツーストライクとなる。

大地と吾郎はギブソンの投げる姿を見て、自然と握り拳に力が入っていた。

そして最後に160kmのファストボールを投げて、空振り三振にしてオールスターの奪三振新記録を達成したのであった。

鳴り止まぬ拍スタンディングオベーション手の中、ギブソンは静かに微笑んでそれに応えていた。

そして、その男の大きさに、大地と吾郎は生まれて初めて、寒くもないのに鳥肌が立ったのであった。

◇◇◇◇◇

『ライトフライ！ マンデシー捕って試合終了！ 3対2、今年のメジャーリーグオールスターはナシヨナルリーグが勝ちました！』

メジャーの素晴らしいプレーが随所に見られました。しかし、今日のMVPはやはり

圧巻の6連続奪三振を取ったこの人、ジョー・ギブソン投手に贈られるようです。

ちようど今、現地のインタビューを受けています。しかし素晴らしいピッチングでしたね、ポンチョさん』

『はい。なんせア・リーグの強者達をファストボールだけで6連続でしょう。私も長いことメジャーリーグを見ていますけど、こんなすごいピッチングを見たことがありません。

とにかくこの試合を現地で観ることが出来たことを幸せに思いますよ!』

「良い試合だったね」

「そうですね」

「……まあね」

大地も吾郎も日下部の質問にこの時は素直に答えていた。

そして、声を揃えて日下部に話す。

「ねえ、ギブソンに会う時間ってあるかな……?」

第二十七話

「じゃあちよつとこの辺で待っててよ。交渉してくるから」

「分かった」

日下部がギブソンに会えるか交渉をしてきている間に、友達や同僚へ買うお土産を見ていた。

吾郎は小森だけにTシャツを買う予定だったようだが、大地に言われて沢村と清水にもお土産をちやんと買う。

桃子はスタジアムではしっくりくるものが無かったようで、ホテルか帰りにでも買うとのことだった。

買い物を済ませた頃、周りが騒がしいのに気付く。

大人や子供、それこそ老若男女問わず一方向に走っていくのが見えた。

「な、なんだなんだ?」

「誰か有名人でも来てるの?」

「有名人って……今日ここにはスーパースターしかないでしょ」

桃子の天然に大地が突っ込む。

そして色んな人たちに囲まれている一人のアメリカ人を見つけた。

『OK! 慌てないで!』

「あれって……」

「ああ、ギブソンだ」

ギブソンは観客に囲まれながらも、子供を優先して握手やサインに嫌な顔ひとつしないで応じている。

その姿を大地と吾郎はただ見ていた。

「僕が大地君達を呼んでくるって言っただけどね……」。

こんな一般通路に現れたら、ああなるのに決まっているのに……彼はたった2イニングじゃまだ全然疲れていないよって言って来てくれたんだ」

日下部の声に大地と吾郎はハツとする。

彼が近付いてきたのに気付かなかったようだ。

その間も丁寧にサインなどに対応するギブソン。

一通り終わった段階で、こちらに向かつて歩いてくる。

そして観客席に向かう階段の下でギブソンと大地、吾郎は対峙した。

桃子は後ろでその様子をただ見守っていた。

『大きくなったな、本田ジュニア達』

「別に、あんたに会うつもりはなかったんだけどさ……まあとりあえずアメリカ旅行させてもらった礼くらい言っておこうと思つてね……ありがとよ」

日下部がギブソンと吾郎の間に立つて通訳をしてきている。

大地はそのやり取りを見て何も言わない。

「それとさ、あんたに会つたらどうしても確かめようと思つていたことがある……。あれは……本当に事故だったんだよな？」

「あ、当たり前じゃないか、吾郎君！あれは手が滑つて——」

「——おじさんには聞いてないよ」

吾郎とギブソンが睨み合う。

それもほんの一瞬のことだったが、ギブソンはすぐに『ついて来てくれ』と言つて先ほどギブソンが来た通路を戻つていく。

全員、何も言わずについていく。



着いた先は今日オールスターゲームが行われたグラウンドだった。

大地達はベンチから出たところで立っていたが、ギブソンと日下部はホームベースのところでは何かを話していた。

そして日下部だけが大地達のところに戻ってきた。

「何？　なんでグラウンドに……!?!」

「君の質問に対する彼の答えはこうだよ……。例えあれが事故だとしても……。それは結局私の精神的、技術的な未熟さが産んでしまった悲劇に他ならない。どんな言い訳をしても、君達のお父さんを死なせてしまった十字架を私は一生背負っていくしかないのだ」

日下部は持っていたボールを吾郎に渡す。

そして続きを話し出す。

「しかし……。もしこれで君の気持ち少しでも収まるのであれば……。マウンドからこのボールを私目掛けて思い切り投げしてくれ。

頭でもどこでも、気が済むまでぶつけてくれて良い。茶番だと思うかもしれないが、これくらいしか今の私は君の気持ちに応えられない」

ボールを持って少し考えた吾郎は「いいね、これでついにこの手で恨みを晴らせるわけだ……。」と言ってマウンドに向かつていく。

桃子と日下部が止めようとするが、大地がそれをさせない。

「母さん、日下部さん。ちよつと見ていて。……。吾郎なら大丈夫だから」

「で、でも……」

不安になりながらも桃子は走ろうとした足を止める。

日下部も桃子が止めないのであれば、自分にその資格はないと思ったのか同じように立ち止まる。

そして、吾郎が振りかぶり、バットを持って打席で構えているギブソンに向かって思いきりボールを投げた。

と、大地を除く全員が思っていたが、ボールはホームベースを通過した。

ど真ん中に投げられたボールを見て、大地は微かに笑い、ギブソンと桃子、そして日下部は驚いた。

そしてギブソンのところに歩いていく。

「ずるいね。小学生の球じゃいくらぶつけてもダメージは与えられないじゃん！」

『……』

「この罰ゲームはまた今度にするよ。いつか俺があんたと同じくらいすごい球が投げられるようになったときにね！」

『……そうか、分かったよ』

笑いながら吾郎が差し出した右手に、ギブソンも笑いながら握手で応える。

そして、そのあと大地の方を見て話し出す。

『君は……いいのかい？』

『ん？ 俺ですか？ ……吾郎が許しているのに、それ以上何も言うことはないですよ。ただ……』

『ただ……？』

『せっかくここまで来たんだから、メジャーの大スターとキャッチボールがしたいですかね』

大地の言葉に日下部とギブソンは呆気にとられた。

そしてギブソンは大きく笑いながら、「分かった！ ちょっと待っていてくれ！」と言つてベンチに下がっていく。

「え、え……？ 大地、今何言つたんだよ？」

「……ギブソンが戻ってくるまでの秘密」

「なんだよそれー！」

その後戻ってきたギブソンとキャッチボールをしている大地を見て、羨ましそうな顔をする吾郎であった。

もちろん少し放置した後は、吾郎も一緒に加えて3人でキャッチボールをしたのは言

うまでもない。

桃子はそんな様子を見て、とても嬉しそうな顔をしていたのであった。

(ギブソンさん……あのときお墓で話したことをきちんと覚えてくださっていたんですね。……ありがとうございます)

第二十八話

「わあ！ オールスターのTシャツだ！」

「本当だ！ やったぜ！」

「大地、吾郎ありがとう！」

「いーなあー！」

アメリカから戻ってきた大地と吾郎は、三船リトルの練習日にお土産を小森、沢村、清水にあげていた。

他のメンバーは羨ましがっていた。

そして2人にとつて、夏休み最初の練習が始まる。

（あれは、現実だったんだよなあ……。あの体つきから生まれるパワーとスピード……。昨日帰ってきてみた日本のプロ野球がまるで高校野球のように見えたもんなあ……。）

吾郎はメジャーと日本のプロ野球を比べて、日本人がああいったプレーが出来るのか疑問に思っていた。

そして、いつか自分自身もあの舞台でプレーをしてみたいと思うのであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「え!? 合宿!?」

「うん! せっかく夏休みなんだから、合宿で朝から晩まで野球やろうよ! 今のペー
スだと秋の大会に間に合わないよ、おじさん! みんな、もっと集中的にやればどんど
ん上手くなると思うんだ」

「何の話?」

「吾郎君が強化合宿やろうってさ!」

「へえ……面白そうじゃん!」

突然の吾郎の提案に同級生^{小森、沢村、清水}3人が興味を示す。

監督の安藤は昔強かった頃に合宿を行っていたと話す。

「そうなんだ! そこ遠いの!?!」

「いや、場所は山梨なんだけど……」

場所はそこまで遠くないが、安藤の話によるとその合宿場所は毎年全国の強豪が揃っ
て顔を出す合同合宿所であるということだった。

そこでは練習こそ別々に行うが、連日のようにレベルの高いチーム同士での練習試合
が持ち回りで行われる。

吾郎は興奮するが、安藤は今の三船リトルでは力の差が大きすぎて場違いになってし

まうことを心配していた。

「場違いは結構だね！ それこそ一気にレベルアップするチャンスじゃねーか！」

「そ、それはどうかな吾郎くん……」

「そんなところ行ったら、自信無くしてかえってやる気が……」

「あれ？ お前らに無くすような自信なんてあったっけ？」

さりげなく反対する沢村と清水に冷たい対応を取る吾郎。

小森はその話を聞いても賛成のようであった。

「じゃあさ、せっかくだしみんなで行こうよ！ 吾郎が言ってるのも一理あるし！」

「そうだな！ 家でゴロゴロしててもしょうがねえもんな！」

「うん！ 行こう！」

大地の言葉に他のメンバーも賛成したので、沢村も「ま……いっか、旅の恥はかき捨てていうし」とよく分からないことを言って、清水に「それはちよつと違うだろ」と突っ込まれていた。

安藤はメンバーのやる気に感動して、「それなら行こう！」と最終決定をしてくれたのであった。

かくして弱小三船リトルは、燃える吾郎に後押しされ、強豪の集う5泊6日の強化合

宿へ旅立ったのである。



「あちやー！ そりやあんまし期待はしていなかったけどさ〜」

「こんな幽霊ビルに5泊もするのかよ」

ボロボロの旅館に対して、不満を漏らす清水と沢村。

吾郎が「贅沢言うなよ、食事込みで1泊2,000円なんだから上等だろ！」と言うが、それでも士気が下がるメンバー達。

全員が寝泊りする松の間と書かれた部屋に入るとそこにはいびきをかいて寝ている男の人がいた。

「あれ？ 誰か寝てるぞ？」

「おじさん、部屋間違えてるんじゃないの？」

「いや、ここに間違いないよ」

部屋は合っているという安藤の話を聞いて、吾郎が蹴って起こそうと近付くが大地に止められるのであった。

大地は寝ている男性に向かって肩を揺らして起こす。

「すみません、ここに俺らの部屋みたいなんですけど……。一旦起きてもらえますか？」

「ん……？ なあに？」

「おはようございます。ここ、俺らのチームの部屋なんですよ。多分間違えてると思うので、起こしました」

「あ、そうなの？ てかさろそろ練習終わったかな？今日の夕食が何かなあ？」

そう言つて部屋を出ていく男。

立ち上がったときの身長がとても高いのと、横幅も大きいので一瞬大人の男性かと間違えるほどであった。

ポカンとしている一同が廊下を走る音で正気に戻る。

「あー！ この野郎！ こんなところにいやがったのか！ 上河内！^{かみがうち} また練習サボつて昼

寝していやがったなあー！」

「やだなあ、コンちゃん。ちよつとお腹痛くて休んでいただけだよお」

「いいからちよつと来い！ うちが最終回でピンチなんだよ！」

上河内^{かみがうち}を連れていくコンちゃんと呼ばれた少年。

「最終回」という言葉に合宿に来ているチーム同士の練習試合なのだとして、何人かで観に行くことになった。

大地達がグラウンドに着くと、浦安リトルと久喜リトルというチームが練習試合をし

ていた。

6 回裏で浦安リトルが1対0で勝っていた。

そして先ほどの上河内かみがうちが、久喜リトルの最後の攻撃でちょうど代打交代したところだった。

2死、ランナー一塁でカウントはツーストライクと追い込まれた状況での代打である。

プレイが再開され、ピッチャーがカーブを投げるが、上河内かみがうちはピクリともせずに見送る。

ストリート狙いだと判断したキャッチャーが再度カーブを投げるように要求し、投げたところでセンターのフェンスを越えてツーランホームランでサヨナラになった。

「な、なんてパワーだ」

「アウトコースのカーブをあそこまで飛ばすなんて……」

上河内かみがうちのホームランに対して、安藤と小森かみがうちが驚く。

そして、勝利した久喜リトル監督が全員を上河内かみがうちを褒めているところに安藤が向かっていくのであった。

第二十九話

「村上さん！」

安藤が久喜リトルの監督をしている村上に声をかけると、村上も少し嬉しそうに近づいて来て握手を交わした。

上河内かみがうちのバッテリーングを褒める安藤に、「あわやノーヒットノーランをやられるところでした」と村上は苦笑いで返すのであった。

「安藤さんがいるということは、今年は三船リトルもこの合宿所へ？ 2〜3年は顔を出されていなかったようでしたが……」

「え……ええ。ここんところすつかりサッカーに子供達を取られてしまつて……。久喜リトルさんは昨年も全国大会に出ていましたよね」

「いやいや、ベスト4止まりでお恥ずかしい」

社交辞令を交わす大人2人に大地、吾郎、小森が近付いていく。

「あれ？ おじさんの知り合いだったんだ？」

「あ……ああ」

「それなら明日って練習試合出来たりしないんですか？」

「あ、明日!?!」

突然の大地の提案に驚く安藤。

吾郎も同じことを言おうとしていたらしく、嬉しそうな顔をしていた。

安藤は仕方がないという顔で村上を見ると、「ええ、大丈夫ですよ」と笑って了承してくれた。

「おお! ありがとうございます! では朝の10時からでよろしいですか?」

「ええ、大丈夫ですよ」

合宿所に来てすぐに練習試合が決まり、4人とも嬉しそうな顔をするのであった。

「え!?! あのデブ選手だったの!?!」

「いやいや、沢村。突っ込むところはそこじゃないでしょ。……って明日すぐに練習試合なの!?!」

「うん、去年の北関東代表チームだよ」

「「なんだつてえ!!」」

いきなり強豪と戦うことになったメンバーは驚きのあまり叫ぶ。

しかし大地と吾郎は問題なさそうな顔をしていた。

「いきなりそんなこと試合して大丈夫なのかよ……」

「まあ大丈夫じゃないかな? それにせっかく強いチームから色々学びに来たんだか

ら、試合しないと意味ないじゃん！」

「む……そ、そうだよなあ」

大地の言葉に納得はした一同。

それでも不安は隠せないとところで吾郎が立ち上がる。

「大丈夫だつて！ 商店街チームの時だつてみんな協力して勝ったじゃん！ あれか

らみんなもだいたい上手くなっているし！」

「そうかー。まあ大地と吾郎がいるからね。やってみるかあ！」

「……つてさりげなく俺と吾郎に任せないでよ！ みんなで頑張ろう！」

大地の言葉に全員が笑う。

安藤もチームのムードが良くなっていることに気付く。

（これは大地君の力なんだな。周りの雰囲気をよくする力だ。吾郎君は周りの不安を吹き飛ばす力を持っているし……本当に良い兄弟なんだねえ）



◇スターティングメンバー

1番：セカンド 長谷川

2 番：レフト 前原

3 番：キャッチャー 小森

4 番：ピッチャー 吾郎

5 番：シヨート 大地

6 番：サード 夏目

7 番：ファースト 田辺

8 番：センター 沢村

9 番：ライト 清水

控え：鶴田

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あれ？ 今日俺、ベンチなの？」

「ああ、この合宿は色々試したいからね。ちゃんとみんなで交代してやっていくから

大丈夫だよ」

鶴田が清水と交代でベンチにいることに疑問を伝える。

安藤が色々試すと言ったため、特に気にすることなくベンチに座る。

先攻の久喜リトルのメンバーはベンチ前で集まり村上の話を聞いていた。

「いいか！ 序盤はとりあえずボールをよく見ていけ！ まだどういいう球を投げるか分かっていないからな！」

「はい！」

そして1番バッターが打席に立つ。

「プレイボール！」

「よっしゃー！ こーいー！」

吾郎のリトルリーグでの初めての練習試合が始まった。

1球目を吾郎が投げる。外角真ん中に投げられたストレートを見て、相手チームが驚く。

「な、なんだよあの球」

「め、めちやくちや速いじゃんか！」

（む、むう……なんだあの球は……安藤さん、どこであんな逸材を拾ってきたんだ……？）

（は……速い。速すぎるぞ！ こんな球、どうやって打てばいいんだよ！）

すぐに追い込まれて動揺してしまったバッターは、高めのボール球を振ってしまい三振となる。

「バ、バカ！ ボール、よく見ていけて、い、言っただろ！」

「すいません」

監督の村上も動揺していて呂律が回っていなかった。

そして2番、3番とすぐに三振となる。

「ナイスピッチング！ 完璧だよ！」

「まーな！」

「えーかつこするなよ！これじゃ練習にならねーよ！」

沢村にもつと打たせろと言われたが無視をする吾郎。

それよりも吾郎は全国ベスト4がこのレベルだったことに疑問を持った。

このレベルならガツカリだよと思っていたら、大地が吾郎のところに来た。

「吾郎、ナイスピッチング」

「お、おう」

「でもな、まだ油断するなよ。試合終わるまでは大したことないかどうかは分からないからね」

「え……あはははは！ わ、分かってるよ！ ……やっぱ俺が何考えてるか分かるもんなの？」

「お前の兄貴だぞ、俺は。とりあえず一巡を全力で抑えることができたなら、守備練習兼ねて打たせるピッチングの練習もしてみようか」

「えー！俺が抑えちゃえばいいじゃん！」

「ばーか。リトルリーグの公式戦は長いんだぞ。毎回全力で投げたいたらどうなるか分かるだろ？」

「う……体力のペース配分を考えろってやつか」

「そう、それだよ。これからおとさんと同じプロ野球を目指しているなら、尚更肩や肘に負担を増やさないようにしていこう」

吾郎は大地の言葉にハツとする。

目指すべきは茂治と同じプロの世界なのだから、きちんとペースを考えてやっていかないといけないと改めて気付く。

（なーんか毎回大地にいいように言われて騙されている気もするんだけど……でも言っていることは間違っていないし、俺のことを思ってくれてるのは分かるからなあ）

そして1回の裏の攻撃が始まる。

第三十話

「やつぱはえーな！」

相手ピッチャーが投げるボールを見て、清水は困惑する。

吾郎は上河内かみがうちがキャッチャーしているのを見て、「イメージまんまのポジションじゃねーか」と言っていた。

1番の長谷川の打順。ピッチャーの初球を見逃す。

（あれ……？　なんか吾郎の球を見慣れているせいかな？　あんまり早く感じないぞ？　これくらいなら俺だつて……）

2球目を当てて、レフト前にヒットを打つ。

同学年との試合では久しぶりのヒットだったため、少し嬉しそうに一塁で立っている長谷川。

安藤はすかさず前原に送りバントの指示を出す。

「いけえ！　前原！」

「かつ飛ばせー！」

（んなこ）と言われても……すでに送りバントのサイン出てるんですけど……）

前原は堅実にバントを決めて、1死ランナー二塁で3番の小森の打順となる。

ピッチャーが投げたボールを小森は積極的に振っていき、センター前ヒットとなる。そしてランナー一塁、三塁で4番の吾郎に打席が回ってくる。

「タイム」

上河内かみがうちがタイムを取り、ピッチャーのところに行く。

「コンちゃん。次のバッター、歩かせよう。満塁にしてゲツツ狙いの方が確率高いし」
「わ、分かった」

その指示だけ出して戻って行く上河内かみがうち。

そして吾郎を敬遠して1死ランナー満塁で大地の打順が回ってくる。

大地は打席に入りながら初球を狙う。

（おー、吾郎を敬遠するのは、まあ定石だけど……ね！）

ピッチャーが投げた初球を思いつきり振る。

大きな金属音が鳴り、ボールはレフトのフェンスを越えてホームランとなる。

（まあ……俺と吾郎のどっちが打ってもホームランにするのは変わらないんだよね！）

「じよ……場外ホームリャン……」

「ピ、ピッチャー以外にもあんな逸材を隠してたなんて……安藤さん酷いぞー！」

ピッチャーは打ち込まれてしまい、軽く自信喪失気味になり、監督の村上は吾郎だけ

ではなく大地の存在に三船リトルに対して警戒心を強める。

「やったあー！ いきなり満塁ホームランで先制だぜー！」

「いいぞー！ 大地ー!!」

全員がホームベースを踏んでベンチに戻り、祝福を受ける。

前原だけ「俺のバント、意味なかったんじゃない？」と言っていたが、それでも嬉しそうな顔をしていた。

（い、行ける！ この子達がいれば、本当に名門・三船リトルの復活も夢じゃない！）

安藤が過去の栄光が現実に戻ってくるかもしれないと思っていたところで、6番の夏目、7番の田辺が連続三振でチェンジとなる。

三船リトルは勢いに乗り、「このまま勝つぞー」と意気込んで守備につく。

「むむ……うちがいきなり4点差をつけられるとは……。なんて奴らだ……。頼みは上河内だけか……。！」
かみがうち

4番で打席に立つ上河内。素振りには確かに強打者のソレであった。

吾郎と小森は警戒しつつも、上河内を抑える気満々だった。

（1回を見るかぎり、彼は変化球を使っていなかった。ストレートだけで僕を抑えるなんて……。甘いんだな！）

上河内は吾郎のことをストレートしか投げられないただの4年生だと侮っていた。

しかし今の吾郎には油断は一切無いため、的確にコーナーを突いていく。ワンボール、ツーストライクから3球続けてファールとなる。これで上河内は打てる確信を持った。

「君……変化球覚えた方がいいよ。どんな偉大なピッチャーもストレートだけじゃ必ず打たれるからね」

かみがうち
上河内の言葉に、吾郎は軽く苛立ちを覚えた。

それは偉大なるピッチャー達に対する侮辱とも受け取れたからだ。

「なんだよお前……この前のアメリカのオールスターゲームを観なかつたのかよ……」
「……………え？」

「本当に偉大なピッチャーってのはな……分かつてても、打てないウイニング・ショットを持つてんだよ!!!」

吾郎がコーナーを突くのをやめ、真ん中高めに全力でストレートを投げる。

かみがうち
上河内はバットを思いっきり振るが、かすることも出来ずに三振してしまう。

「分かつたか、太つちよ!! 偉大なピッチャーを語る前にもつとバットを振つてこい!

……………いてー!」

「アホたれ。相手バッターを侮辱すんな」

「だつてさー!」

「……気持ちには分かるよ。それなら野球だけでねじ伏せなきやだろ。男なら言葉じゃなくて、今みたいな結果だけで示そうぜ！」

「……だな。分かった！」

「うむ、分かればよろしい！ ナイスピッチング！」

自身の暴言を大地に窘められて、反省する吾郎。

確実にスピードが上がっているボールを投げられているし、全国ベスト4の4番を三振に出来て、吾郎としても嬉しかったのもあり調子に乗って出てしまった暴言だった。

大地がいると自身が間違っているも訂正してくれるし、すぐにフォローもしてくれるので吾郎にとってはかけがえのない兄なのである。

「見たかよ、あいつ上河内かみがうちを三振に取ったぞ」

「驚いたな。あのユニフォーム、どこのリトルだ？」

「よ……横浜リトル！」

急に現れた横浜リトルのレギュラー陣に驚く安藤。

そこには寿也もいて、あのユニフォームは同じ神奈川の三船リトルだとレギュラー陣に伝える。

「彼の名前は本田吾郎……以前うちの二軍の練習に来たとき、榎本監督がスカウトしたほどの速球投手ですよ」

「ほお……」

「なるほど。うちの監督がスカウトしただけのことはあるな」

「上河内かみがうちを三振に取れるやつはそうザラにいないからな」

感嘆の声を上げる横浜リトルのメンバーに対し、吾郎はまさか日本一のチームが合宿に来ていたとは思っていなかったため、ラッキーだと思っていたのであった。

そして6番までのバッターも三振にとり、これで6連続三振にするのであった。

「ナイスピッチング！」

小森達に褒められながらベンチに下がって行く吾郎。

——と思いきや、横浜リトルのメンバーのところに行き出す。

「どうすか、お客さん？ 明日にでもこの僕の球を——むぐぐぐー！」

「はい、そこまで！ 横浜リトルの皆さんですよね！ 寿くんももしかして一軍に上

がったの？」

「え、あ、うん。まだ控えただけだね」

「そうなんだ！ おめでどう！ 多分練習あると思うんで、邪魔しないようにしますね

！ 失礼しました！」

吾郎の口を塞ぎ、引きずってベンチに戻る大地。

「な、何すんだよ！ せっかく横浜リトルと試合が出来るチャンスだったじゃんか！」

「アホ！ 今の状態で出来るわけないだろ！」

「なんでだよ！ 分からないじゃんか！」

「はあ……お兄ちゃんは悲しいよ……。まずな、試合は子供達だけで決めちゃいけないだよ。」

監督のような大人がスケジュールを調整して試合を組むんだから、勝手なことをしたら逆に試合してもらえなくなっちゃうんだよ」

「……？ よく分かんない」

「じゃあもう一個の理由なら分かるか。吾郎ならさ、こんな強豪チームがたくさんいる中で、弱小までになったうちのチームと試合をするメリットってあると思う？」

「……！」

「分かっただろ？ 今の状態で試合を申し込んでOKなんて貰えないんだよ。今回だって安藤監督が向こうのチームの監督と知り合いだったから、安藤監督経由での申し込みでOK貰っただけなの！」

「じゃあどうすんのさ？」

「逆に考えてごらんよ。うちが強いと証明出来ればいいんですよ？ 例えば、全国ベスト4に完勝するとかね。それなら安藤監督も他のチームに依頼しやすくなりますよね？」

「あ、ああ。確かに久喜リトルに勝てるほどのチームなら、色んなチームからやりたいと言ってくれるはずだよ」

大地はその言葉を聞いて、吾郎の顔を見た。

吾郎も理解したらしく、「じゃあまずはこのチームに完勝すればいいんだな！」とさらにやる気を出した。

そして、結果は1ー1対0のワールド勝ちだった。

吾郎はアウト全てを三振にするという結果を出し、チームとしても全員ヒットを達成することが出来たのであった。

第三十一話

「やったぜー!! 久喜リトルに勝った!」

「私もヒット打ったんだよ!」

沢村と清水が喜んでいる中、吾郎はこれで横浜リトルと試合が出来るのではないかと淡い期待を持っていた。

安藤はまさか全国ベスト4の久喜リトルに勝つことが出来ると思っていなかったため、心が踊っていた。

そんな安藤のところに久喜リトルの村上はやってきて話しかける。

「む、村上さん」

「いや、負けましたよ! うちの上河内かみがうちを抑えられてしまったら、手も足も出ないですわ!」

「いやいや、うちもまだまだで……」

「ところであのピッチャーとショートの子はどこから見つけてきたんですか? 内緒にしているなんてひどいですよ!」

「大地君と吾郎君は、元々うちの地元の子なんですよ。ほら、あの本田茂治選手の双子な

んです」

「え!? あの本田選手の!? だからあんなにセンスが良かったんですね。いやはや羨ましい!」

大地と吾郎を褒められたのは、安藤も悪い気がしないので嬉しそうな顔をする。

そして試合中にも思っていた三船リトル再建も現実的になってきていることに喜びを感じていた。

試合後のミーティングで、吾郎が「次は横浜リトルとやりたい!」と言い出した。

安藤が打診をしてみると言い、他のチームにも聞いてみることにすると話していた。

初日から勝つことが出来たことに全員が喜び、これなら全国に行けるのではと可能性を見出していた。



「な! なにいいいい!!」 横浜リトルに練習試合を断られたああああ!!」

その日の夜。吾郎は夕食中に安藤から横浜リトルの監督の榎本から練習試合を断れられたと言われた。

大地を含めて全員が驚いていた。

「そうなんだよ……すまん」

「お、おじさん！　なんでなの!?　理由はなに!?」

「勝負が見えているからだと言ってたんだよ」

「な……なんだとお?」

吾郎が怒りに震える中、安藤だけが冷静に分析をしていた。

「でもね、それは私も感じているよ。樫本監督とは違う理由かもしれないけどね……」

「な、なんでさ!?!」

「変なことを聞くようだが、吾郎君は本気で横浜リトルに勝ちたいのかい?」

「な……なに言ってるんだよ、おじさん！　当たり前じゃないか！　誰だって強いところに勝ちたくて野球をやってるに決まってるじゃないか!」

「……それはどうか……みんな吾郎君のように野球に人生を賭けている子ばかりじゃないからね」

その言葉に全員が黙ってしまふ。

「横浜リトルに勝って日本一になりたいのであれば、全員が同じ気持ちにまで合わさらないと意味がないんだよ」

「そ、そんなのみんな同じ気持ちに決まってるじゃんか！　なあみんな!」

「……………」

「ほら、みんなが吾郎君や大地君と同じくらい気持ちを持っているかと言ったら……そうじゃないんだ。」

だからおじさんもやるからには真剣にやりたいと思っている。そのために明日テストを行いたい」

「……ア、テスト!?」

「そう。別に受けなくてもいいし、合格しなくてもいい。……でもね、もう二度とグラウンドに顔を出す必要はない。」

野球をやるのは君達だ。いくら私が勝つための練習をしたとしても、君らにやる気と根性がなければ厳しい練習について来れないだろう。

そのために、このテストはかつての三船リトルで入団テストに使っていた方法だ。

これに耐えて帰って来れたら、これからどんな厳しい練習だつてその子について来れるはずだ！」

夕食後、三船リトル元々いた5年生達が集まっていた。

「なあ……明日どうする?」

「え……」

「なにが日本一だよ！ 勝手にやってくれってんだ！」

前原が先に脱落宣言をする。本人としても本田兄弟に合わせて辛い練習なんてしたくないし、日本一になれるわけがないと思っていた。

根性ややる気だけでどうにかなるもんじやないと思っっているのだ。

「で、でも帰ったら三船リトルを辞めるってことだぞ!? それでいいのかよ！」

「し、仕方ないだろ!! 俺らはいつらとは違うんだよ！」

5年生の中で沈黙だけが残る。

「……でもさ、今日の試合楽しかったよな」

「そうだな。まさか全員が全国ベスト4のチームからヒット打てるなんて思っっていなかったもんな」

「これもさ、大地がいつも教えてくれたからだよな」

「吾郎も嫌がらずバツティングピッチャーしてくれるし」

「な、なんだよ！ お前ら裏切るのかよ！」

前原だけは頑なに辞めると言っていた。

だが、長谷川に「お前は楽しくなかったのかよ?」と聞かれ、

「……初回だつて意味のないバントさせられたし、守備は一切必要なかったし。そりゃ

ヒット打てたのは嬉しかったけどさ」

「じゃあテスト受けてみるだけやってみるのはいいんじゃないか？」

「前原だって大地達に色々教わってただろ？」

「……わ、分かったよ！ 受けるだけだからな！ 辛かったら辞めるからな！」

「……はいはい」

前原はひねくっていて、天邪鬼なことを言い出すのを分かっている他の4人は、声を揃えて前原の話を流した。

「流すなよ！」と少し怒っていたが、その表情は少し笑ってる前原を見て、全員は安心していった。

（みんな、良かった。これで辞められたら後味悪いもんな。絶対に全員でクリアして横浜リトルにも勝つぞ！）

大地は5年生達がはしゃいでいるところからバレないように去っていくのであった。

第三十二話

「二「ええっ!? マ、マラソンー!?」二」

「そうだ。あの若尾山にグリーンラインが通っている。山頂の休憩所までおそらく10kmはあるだろう。」

往復で20kmだ。歩いても構わない。日のあるうちに帰ってこい! これがテストだ!」

20kmという距離に対して、ほぼ全員が絶望的な顔をする。

そんな中、大地と吾郎だけは笑顔だった。

「へへ……いいーね! おじさんの本気が伝わってくるよ!」

「だな! よーしやるぞ! 20kmくらい走れなくて、横浜リトルが倒せるかよ!」

「よし行け! 健闘を祈る!」

大地と吾郎の言葉に他の全員が頭おかしいんじゃないかと思っていたが、口に出す前に安藤にスタートと言われてしまい、素直に走り出す三船リトルメンバー。

清水が「あたし長距離苦手なのー!」という言葉に、沢村が「長距離だけじゃねーだろ」というボケとツツコミはもはや定番になっていた。

(頑張れよ……。叶うなら全員帰ってきてくれ！)



グリーンラインという道路をひたすらに走る一同。

まだ5キロ地点だが、すでに前列と後列にかなりの差が出てきてしまっていた。

これは体力差もあるが、身体能力の差でスピードが違っていたのもあった。

「はあ……はあ……」

先頭集団は大地、吾郎、沢村、そして少し遅れて小森だった。

沢村が後ろを振り返ると小森が膝の上に手を置いて、息を切らしていた。

「どうした小森!? もうギブアップか!？」

沢村が優しく声を掛けるが、小森はかなり辛そうであった。

「はあ……さ……先に……行って良いよ! 僕……3人のペースには……ついて……行けないから!」

「おう! 無理することはねーよ! 時間はあるんだ。自分のペースで登ってこい!」

「分かった! ありがとう!」

小森は一息つくくとゆっくり走り出す。

大地達は小森を心配するが、自分たちのペースを守ることにした。

「なんだかんだ言いながらちやんと走ってんじやねーか沢村」

「バーカ、なめんなよ！ これでも俺は学校のマラソン大会で1位2位を争う韋駄天だぜ？」

「じゃあ、もう少しスピード上げようか？ そろそろ身体もあつたまつてきたし！」

「え、いや！ てかお前走ってなんでこんな早く走れるのにマラソン大会で真面目に走ってねーんだよ！」

吾郎の挑発に対して、強がる沢村。それに気付いた大地がからかうようにスピードを上げるとを伝えるが、流石にキツイのか話を誤魔化す。

実際に大地達はいつも学校のマラソン大会は10位前後くらいで走っていた。

理由は単純に疲れるからだ。それならばトレーニングだと思つてほどよいペースで走れることを心掛けていたのだ。

「しっかしこの山道の20kmはきついな。小森は根性あるから心配ないにしても……清水や他の連中は大丈夫かな？」

「さーな、でもおじさんが言つてたようにこれくらいで根を上げていたら日本一なんか目指せないだろ。結局はあいつらのやる気次第さ……」

「だな。まずは俺達で出来ることをしよーぜ！」

スタートから3キロ地点。5年生達は全員一緒に走っていた。

だが少しずつ遅れ始めた前原が突然足を止める。

「あーあ、バカバカしい！ やめたやめた！」

息を切らしながら地面に座り、「何が日本一だよ！ 勝手にやってくれてんだ！」とギブアップ宣言をする。

「ま、前原……」

「行きたいやつは行けよ！ こんな俺はやつてらんねー！ そのバス停で今度来たバスに乗って俺は帰るぞ！」

前原は目の前にあるバス停を指差し、疲れたから帰ると言い出す。

それにたらしこ唇が特徴的な田辺も「お、俺も……」とギブアップをする。

「ちよつと待てよ！ まだ5kmも走っていないぞ、お前ら！」

「5kmも20kmも関係ねーよ！ どーせやめるなら早いうちにやめた方が得だったの！」

「そーそー！」

「で、でもバスで帰ったら三船リトルを辞めるってことだぞ！ お前ら本当にそれで良いってのかよ！」

夏目が前原と田辺を説得するが、頑なに拒否をする2人。

「だから行きたいやつは行けって言つてんだろ！俺はこんなハードな練習がこれからも続くなら、リトルなんかやつてらんねー。」

大地達に合わせて日本一目指すなんてどうかしてるぜ。

根性とかやる気とかいくらあつても俺達なんか日本一になれるわけねーだろ！」

「でもよ……昨日話したじゃんか……。大地達に教わったことが試合で出来てよかつたつて……俺はその気持ちにも正直でいたいし、お前達とも一緒に野球をしたいんだよ！」

「夏目……」

夏目が熱い気持ちを伝えているところに、ヘトヘトになりながら走ってくる清水がいた。

前原は良い仲間が来たとばかりに清水を脱落組に誘おうとする。

「あれ？何やつてんの、あんた達？」

「お……おい清水！お前も一緒にバスに乗って帰らねーか？」

「……え？」

「お前だつて日本一なんてバカらしいと思つてんだろ？みんなで一緒にポイコットしようぜ！」

「前原！ 本当に辞めるのかよ！」

「おい！ バスが来たぞ！」

清水は脱走組の前原と田辺を一瞥すると、全員を無視して走り出す。

「な……なんだよ本気かよ！」

「やめとけよ！ 運動苦手なお前が完走できるわけねーだろ！」

清水は話しかけてきた前原と田辺に振り向き、息を切らしながらも返事をした。

「そんなもんやってみなきやわかんないだろ！ 早々に何くだらない相談してんだよ！」

お前らそれでも男かよ！」

そしてそのまま走っていく清水。

夏目と鶴田と長谷川は、黙って清水を追いかけていく。

バスの運転手が「僕達、バスに乗るの？」と前原と田辺に聞くが、返事をしなかった

ためそのままバスを走らせてしまう。

「俺も……もうちよつと行けるとこまで頑張ってみるよ。あの清水が頑張ってたもん
な」

「あ、あれ？ ……う、裏切り者！ 俺は次のバスが来たら帰るからなあ！ 日本一なんて目指さねえぞ！」

田辺はもう少しやってみると走っていき、それに対して前原が裏切り者と叫ぶが返事

は返ってこなかった。

そして、前原の心の中には清水が言っていた「そんなもんやってみなきやわかんないだろ！」という言葉が繰り返し胸を打つ。

自然と動き出す足。「次のバス停までだかな！」と誰にも聞こえないのを分かつていて叫びながら、前原も走り出すのであった。

そこからは全員が必死に走り続けた。途中、立ち止まったり歩いたりしている者もいたが、決して諦めようとしていない様子を見て、折り返してきた大地は嬉しそうな顔をするのであった。

全員が大地の笑顔と「もう少しだから頑張ろう！」という言葉に励まされ、また足を動かし始める。

彼はもはや三船リトルのキャプテンにふさわしい器を得ていたのであった。



「はあ……はあ。や、やった！ ようやくゴールだ！」

「よーし！ 〴〵苦労さん！ よく頑張ったな！」

長谷川が帰ってきて、安藤が^{ねむらひ}いいの言葉をかける。

もうすぐ日が暮れるところで、残りは清水と前原だった。

「2人とも大丈夫かな？ 折り返しで見たとき、足引きずってたから……」

「うゝむ。体力的な個人差も考慮してあげるべきだったかな……？」

「なーに、大丈夫さ！」

「そう！ あいつらなら大丈夫！ あれで負けん気だけは人一倍強いから！」

そしてその数分後、2人は一緒に走って帰ってくるのであった。

この日、子供達の中で確かに何かが変わったのであった。

第三十三話

「おい、小森。起きれ！ 朝焼けがとつてもきれいだぞ！」

「ん。なに？ 今、何時？」

「もうすぐ5時、小鳥さんも牛さんもみーんなおはようございますだ」

「5時!？」

「気持ちいいぞお！ 君も朝日を浴びて、俺の球を捕つてみたかないかい？」

「じよ、冗談じゃないよ！ こっちは昨日のマラソンで体中が痛いつてのに！ もう

ちよつと寝かせてよ！」

小森のそつけない態度に吾郎は無理やり起こそうとするが、清水に怒鳴られて渋々部屋を出る。

「吾郎、だから言つただろ？ こんな時間だと誰も起きねーよ」

「みんなも気持ち変わったんだから起きてくれると思つたんだよ！」

「それよりさ、今日はお前に教えたいボールがあるんだ」

「え!？ もしかして変化球とか!？」

「んー、それはあとでのおたのしみ！」

「ケチかよ！ 教えてくれよ！」

20 kmのマラソンを走りきった三船リトルのメンバーは、練習に対する意識が変わっていた。

だがさすがに次の日の早朝から練習ができる体力が残っているのは大地と吾郎だけだったのだ。

大地はこの合宿で吾郎にある球を教えようとしていた。

2人で宿を出て、軽くランニングをしようと走ったところで女性の叫び声が聞こえた。

大地と吾郎は朝から事件があるような気がして、声がある方向に向かっていくと、そこにはワンピースを着た三つ編みの女の子が尻もちをついて痛がっていた。

目が合うとスカートを抑えて立ち上がる女の子。大地たちより年上そうだった。

「何かあったの？ 今の悲鳴おねーちゃんでしょ？」

「み……見た!?」

「え、見たって何を？」

「あ……いいの！ 見てなかったらそれでいいの！」

「ああ、パンツのこ——いて！」

「お前な……こういうときはたとえ見なくても見てないふりをするのが男つてもんだろ

「！」

「え？ そうなの？ 別にまだそういうのに興味ないし、どうでもいいんだよね」

「そうじゃねえ！ 相手が気にするから——」

「も、もういいから！ 分かったから、この話はもうおしまいにして！」

「……だつてさ。それよりも何してんのさ、こんなところで」

大地が話を掘り下げたため、女の子は恥ずかしがって止めに入る。

吾郎はもうこの話を早く終わりにしたかったので、何をしているのか聞いたところ、

女の子が木の上にいる子猫を指差した。

子猫は震えながら、ずっと鳴いていた。

「朝の散歩してたら猫の鳴き声がし……きつと降りれなくなつて一晩中震えていたんじゃないかな……。枝も折れそうだし、早く助けてあげないと……」

女の子が心配しているところに、大地と吾郎は目を合わせて移動する。

吾郎がボールを持ち、大地が木の下に行く。

そして吾郎がボールを投げると枝に命中して折り、子猫が落ちていく。

女の子が危ないと思いい目を瞑るが、それ以降音が何もしないので恐る恐る目を開けてみると、大地が子猫を両腕で抱き上げていた。

「え？ あー！ 助けてくれたの!？」

「まあね。ほら、もう変なところ行くんじゃないぞ」

大地は子猫を離してあげると、子猫は急いで走って行ってしまった。

その様子を大地と吾郎が微笑んで見ていると、女の子が吾郎に話しかける。

「ね、ねえ。あの枝に……最初から狙って投げたの……？」

「まあね。あんなに上手くいくとは思っていなかったけど……」

「野球……やってるんだ？」

「うん、夏休みでリトルリーグの強化合宿に来てんだ。一応ピッチャーやってっから出来た荒業だけどね」

「ピッチャー……！」

「じゃあ俺ら朝練の途中だから！ 大地、行くぞ！」

「おう！ じゃあね！ ……って待てよ、吾郎！」

「あ、ちよつ……！」

女の子が引き留めようとするが、大地と吾郎は走って行ってしまった。

引き留めるために出した左手を唇に持っていき、「大地君……と吾郎君……かあ」と女の子は呟いていた。

「球のキレ……？」

「そう。回転数を増すことで、変化球はより曲がるし、真つ直ぐはより伸びるようになるんだ。吾郎にはそのための投げ方を教えようと思つて」

「えー！ それ知りたい知りたい！」

「えつとな……」

グラウンドに着きキャッチボールを終えた大地は、吾郎に投げ方を教える。

勉強でもそうだが、大地は人に何かを教えるのが得意なようで、それは物覚えが悪い吾郎に対しても有効であつた。

「んー、こんな感じかな？」

「お、そうそう！ それで大丈夫だよ！」

「でもなんかボールのスピード遅くなつてね？」

「当たり前でしょ。やり始めから今までのマックススピード以上出せたら苦労しないでしょ。でもね……これを完璧に身につけることができれば、どんなバッターだつて簡単には打てなくなるよ」

そう言つて吾郎をその気にさせることで、どんどん習得率を上げていく。

大地の目標としては、合宿中に基礎だけ叩き込んで秋大会にはある程度の形にして間に合わせるのだ。

そのために合宿中の練習試合はすべてコレで投げてもらふことにしていた。



朝練を終えて、本練習に入る。

安藤は先日までのような生ぬるい指導をしておらず、ノック1つ取ってもかなり厳しかった。

「うはあ！」

「バカヤロオ！ 足がついていつてない！ そんなことで日本一になれると思ってんのか！ 立てえ！」

あまりの厳しさに前原は「昨日のマラソン、完走するんじゃないかな……」とぼやいているが、ノックが始まると真剣に取り組むあたり意識が本当変わったのだろう。

大地に関しては安藤がどれほど強い打球を打つても、ギリギリのラインにボールを打つてもなんなく処理するので指摘箇所が見当たらなかった。

（やはり彼は別格だな。しかも吾郎君1人だけにピッチャーを任せなくていいのがとても助かる）

安藤は心配しなくても良い選手が1人でも多くいることに安堵していた。

しかも他の選手に対し、アドバースも丁寧にかつ的確に行ってくれるので、口には出していないがキャプテン扱いしていたのであった。

それに関しては全員が何も言わずに認めている状態だったので、安藤としてはその雰囲気も助かっていた。

吾郎は小森と新しい投げ方でのピッチング練習をしていた。

突然吾郎が投げ方を変えるときはとても驚いていたが、今はすんなりと受け入れている。

(確かに……この投げ方は球の回転数が上がっている気がする。スピードはまだ前のほうが速かったけど、徐々にスピードは上がってくるだろうし制球も少しずつ付けていけばいいからね)

練習前に安藤や他のチームメイトにも話していた。

これからの練習試合に関しても新しい投げ方でやっていくから、初めのうちはボールが今まで以上にみんなに飛んでいくかもしれないと大地と吾郎が話したところ、全員が問題ないと言って受け入れてくれたのだ。

だからこそ今日のノックが厳しくても誰も本気で不満を持つたりしなかったのであつた。

「む……そろそろか……。よーし！ 練習やめ！ せつかくノツてきたところだが、10

時から隣のグラウンドで横浜リトルと南部リトルが試合をやるそうだ。昨年秋大会の1位と2位の対戦だ。勉強のためぜひ見学しておこう」

安藤がそう言つて全員を引き連れて隣のグラウンドに向かう。

隣のグラウンドに着いた安藤たちは、横浜リトルの監督である榎本に許可をもらい、練習試合を見学させてもらえることになった。

横浜リトルの練習風景を見た5年生メンバーは身のこなしや体格の違いに少しネガティブになつていたが、沢村の言葉で話題がすぐに別のものになつた。

「あれ？　なんだあいつ、髪の毛が三つ編みだぞ？」

「え………てことはまさか………」

そこには今朝大地達が会った女の子がマウンドに上つていったところであつた。

第三十四話

「お……女だ！　なんで横浜リトルに女のピッチャーが……」

三船リトルのメンバーが三つ編みの女の子を見て驚く。

そこで清水がグラビアアイドルが取りそうなポーズをしてボケる。

「ちよつとちよつと、女ぐらいでなに驚いてんのよ。ここにも野球をやるこんなにかわゆい女の子がいるじゃない」

「バカヤロー！　横浜リトルでピッチャーやつてるつてことは、相当野球が上手いってことなんだよ！　ド下手で素人同然のお前とはわけが違うだろ！」

沢村の厳し目のツツコミにやや落ち込むが、いつもどおりの漫才なので他の人達はスルーした。

「なあ大地。あの子って……」

「ああ。今朝いた子だな」

大地と吾郎は漫才コンビの隣で冷静に話しているが、頭の中はどんなピッチングをすのかと試合がどうなるのかでいっぱいだった。

「練習試合とはいえ、見たこともない新人の女の子が先発ですか……」

「この南武リトルもなめられたものだな」

横浜リトルの対戦相手である南武リトルの監督とコーチが新人の女の子が先発することに不快感を示していた。

横浜リトル側のベンチでは横浜リトルを運営している会長が樫本に同じような質問をする。

「大丈夫かね、樫本君。新人でしかもあんな女の子をうちに入れたなんて話、私は聞いてなかったがね」

「心配いりませんよ、会長。新人といってもこの前まで本場のリトルでやっていたそうですから」

「本場?!」

「ええ。彼女は数日前にアメリカから帰ってきた帰国子女です。うちのユニフォームを着るのも日本で投げるのも、もちろん今日が初めてですよ。いわばこれは……彼女の入団テストを兼ねた試合です」

プレイボールの掛け声とともに女の子が帽子を取り挨拶をする。

三船リトルのメンバーは「どんなボールを投げるんだろう」と注目していた。

そして初球。彼女は振りかぶったあと、左足を大きく胸元まで上げる独特なフォーム

でボールを投げた。

「ストライーク！」

「うわ！ は……はえー!!」

見学していた三船リトルはほぼ全員が球のスピードに驚き、大地と吾郎はギブソンと同じフォームで投げる女の子に驚いていた。

横浜リトルの会長も「とても女の子の球とは思えん！素晴らしい！」と絶賛していた。

「貴史！ 油断するな！ 女でも球はきてるぞ！」

「見りや分かりますよ」

南武リトルの監督はバッターに警戒するように促す。

2 球目。内角の球をカットしてファールにするバッター。

三船リトルの5年生達は即座に女の子の速球を当ててくるバッターに対し、「この人達とはやってられませう」と青ざめていた。

3 球目を外角にカーブで外した女の子に対し、バッターはオーソドックスなスタイルだと判断する。

（女にしちや確かにいいピッチャーだが、この程度のやつなら全国にはゴロゴロいるぜ！）

4 球目のピッチャーの投げたストレートをきちんとミートして当てるが、結果はサー

ドゴロとなつてしまう。

ちやんとボールに当てたつもりだったのだがボテボテになつてしまつたことにバツターは頭をかしげていた。

安藤と大地はそのボールに対して分析をする。

「ふむ……どうやら少し変化しているようだな……」

「はい。ムービングファストボールつてやつですね」

「ああ。フオークボールほど落ちないが、速球のように見えてわずかに落ちるから内野ゴロになる。」

大リーガーのギブソンも得意とするボールだよ」

結局残りの2人も内野ゴロに打ち取り、三者凡退でチェンジとなつた。

「やれやれ、可愛い顔してやることが憎いね」

「顔は関係ないんじゃないの……？」

「けど見ろよ、近くで見たらめっちゃいけるぜ、あの子！」

「え……いけるってどこに？」

沢村と小森の少しずれた会話を聞いて、それを聞いた清水が沢村に対して「この口リコン！」と罵るが、小森に「それは違うと思うよ」と突っ込まれていた。

榎本は女の子に対して入団テストの結果を伝えていた。

「よかろう。合格だ」

「え!? 本当ですか!？」

「うむ、今日はもう上がってよろしい」

「え……で、でもまだ一回しか投げてないですけど…」

「時差ボケでまだ本調子じゃないだろう。君の実力はよく分かった。十分うちでやっていけるだろう。あとは、ベンチでみんなの顔と名前を覚えてなさい」

「は、はい…」

樫本の言葉に喜ぶ女の子。

そして皆に合格を祝福されてベンチの椅子で座って試合を見ていた。

横浜リトルの攻撃はランナーが2人出ると4番打者がスリーランを放ち、点差を広げる。

南武リトルのピッチャーも相当球が速いのだが、軽々と打っている横浜リトルの打者に対して沢村や小森も顔を青くさせていた。

安藤はレベルの高い野球を勉強させるつもりだったのだが、レベルが違いすぎて逆効果だったかと心配する。

試合は進み、横浜リトルのバッターがファールボールを打つと、三船リトルのところにボールが飛んでくる。

小森が拾うと、先程までピッチャーをしていた女の子がボールを取りに来る。

そして大地と吾郎と目が合うと嬉しそうな顔をするのであった。

「あら？　まあ……あなた達は今朝の!？」

「ああ、こんにちは」

「え!?!　何!?!　お前からこの子と知り合いなの!?!」

「朝練していたときに会っただけだよ」

沢村は、大地と吾郎が女の子と知り合いだったのを知って驚く。

清水は黙ったままだったが、吾郎を見て少し不安そうな顔をしていた。

小森がボールを渡すと、先程のバッターがまたファールボールを打ち大地達の方にまた飛んできた。

「うわ!　こっち飛んできた!」

三船リトルのメンバーは気付いて避けようとするが、女の子は気付かずに立っていたままだった。

大地と吾郎がすぐに飛び出していき、大地は女の子の前行きファールボールをキャッチした。

そして後ろを振り返ると、

倒れた女の子の上に吾郎がまたがっている状態になっていたのであった。

第三十五話

「だ、大丈夫……?」

「う、うん……ありがと……」

吾郎と女の子は見つめ合いながら、顔を赤くしていた。

「何? その大げさな助け方……いいおい、なんか怪しいぞ、この2人!」

「この雰囲気……一体……」

「……」

沢村と小森が女の子にまたがっている吾郎を見て、冷やかすように話していた。

その横で清水はずつと黙ったままだった。その顔は衝撃的なことが起こりすぎて、脳がショートしているようであった。

「吾郎……お前……」

「え……? あ、あははははは! ごめん! つまらずいちゃってさ!」

すぐに女の子からどき、右手を頭の後ろにやりながら笑って誤魔化したのであった。

大地は女の子に手を差し伸べ、起き上がらせようとする。

女の子はその手を見て顔を赤くして、手を取るか悩んでいたが最終的に恐る恐る手を

取って起き上がるのであった。

(やばい……このままだと清水が野球やりたくないとか言い出しかねないぞ……)

原作知識を覚えていた大地は、これがきっかけて面倒なことになるのを恐れていた。



その夜。大地と吾郎は自動販売機でジュースを買って、旅館にある卓球台の横のソファーに座っていた。

「吾郎……あの女の子に謝るの忘れてただろ？」

「え？　なんで謝るの？」

「おま……！　押し倒しておいてそのままはまずいでしょ！」

「え……！　へ、変なこと言うなよ！　あれは転んだだけだつて！」

「ふーん、ま！　いいけどね」

「てか、別にあの子のこと好きだったんならまだしも、そういうのよく分かんねーから」

「あれ？　好きになつたわけじゃなかったの？」

「うん。別にまだそういうの興味ないからさ」

大地はわざとらしく納得したような感じの声を出して、部屋がある方向をチラツと見

た。

すぐに誰かが隠れるような気配がしたので、ちよつとトイレ行つてくると吾郎にジューズを渡してその場を離れる。

「……やつぱり清水さんだったか」

「……げつ！ いや、あの、その……覗いていたわけじゃなくて……えつと……」

「今の話聞いてたでしょ？ 吾郎にはその気ないみたいだから安心して大丈夫だよ」

「え！ な、なんで私がアイツのことで安心するのさ！」

「ふふふ。まあ今日はそろそろ寝なよ。明日からも練習厳しそうだからさ」

「わ、分かったよ！」

そう言つて少し嬉しそうな清水を部屋に戻す大地。

トイレに行き、吾郎のいたところに戻ると浴衣姿で風呂桶を持った女の子が吾郎と一緒にいたのであった。

「あれ？ こんな時間にお風呂に行つてたの？」

「え、あ、うん！ 寝れなくなつて……実は私、一昨日アメリカから帰つてきたばかりなの。

お父さんの仕事の都合で」

「アメリカから……!?!」

「ええ。だからまだ時差ボケが直つてなくて……今朝早くにあそこにも散歩して

いたの」

「そうなんだね。そういえば自己紹介していなかったね。俺の名前は本田大地。こっちは弟の吾郎」

「本田……大地君と吾郎君……。あ！ わ、私は川瀬涼子！」

お互いに自己紹介をしたあとに、涼子はそろそろ寝ようと部屋に戻ろうとする大地達を引き止め、なぜか涼子の提案で卓球をすることになった。

「でも風呂上がりで卓球って大丈夫？」

「うん、まだ帰っても寝れそうになくて……。だめかな？」

「大地、本人が言ってるんだし別にいいでしょ！ でも手加減しないよ？」

「もちろんよ！ 私は女だからってこういので手加減されるの嫌いだからー」

それから卓球を始めた3人だったが、涼子は大地と吾郎に一切歯が立たなかった。

そして双子だが、卓球は大地の方が才能あるらしく、その吾郎も大地には勝てなかった。

「ふっふー！ 俺の勝ちね！ どうする？ 今度は2対1で勝負する？」

「ム力つく！ 涼子ちゃん！ コイツぶっ倒そうぜ！」

「え……ええ！ そ、そうね！」

「じゃあ罰ゲーム用意しようか」

「罰ゲーム？」

「うん。負けた人が勝った人の言うことをできる限り1つだけ聞くこと！」

「え……ええ!!？」

「……なに？ 2人とも俺に勝てる自信無いの？」

挑発してくる大地に対して、吾郎と涼子はムキになって勝負を受けるのであった。

（大地……何だコイツ！ 卓球選手にでもなったほうがいいくらい強いんじゃないかねーの!?!）

序盤の攻防は一進一退で、2人对1人なのに大地は全く互角の勝負を繰り広げていた。

大地がポイントを取れば、吾郎達も負けじとポイントを奪い返す。

「まだまだだね」

ドライブショットを決めた大地のこの言葉が非常に腹立つのか、どんどんヒートアップしていく2人。吾郎と涼子

「さあ……リズムに乗るぜ！」

途中から今まで手加減していたかのように、大地のスピードが上がる。

吾郎と涼子も必死に喰らいつくが、結果は大地の圧勝だった。

息が上がっている吾郎と涼子の前に、ニヤニヤと笑いながら歩いてくる大地。

「さ、俺の勝ちだね！ 何をしてもらおうかなあ……」

（え……私……大地君に何されちゃうの……？）

身の危険を感じた涼子は自分の身体を抱くようにして後ずさりするが、大地はすぐに満面の笑みになった。

「じゃあ今度また遊ぼうよ！ 野球とかもしたいし！」

「え？ や……野球!？」

「うん。……あれ？ もしかして嫌だったかな？」

「あ、いや、ううん！ ぜひお願いします！」

「吾郎はまだ保留にしとくわ！」

「え!? マジかよ！ てか卓球やってるときの大地のセリフがウザすぎるんだけど！」

大地なりに盛り上げようと某漫画のセリフを使ってみたのだが、かなり不評だったので思わず苦笑いをした。

このあと、連絡先を交換した3人はもう寝るので別れた。

（大地君と吾郎君と卓球したの楽しかったなあ……連絡先も交換出来たし、あの時間にお風呂に入っていて良かった！）

凄い嬉しそうな顔をして部屋に戻っていく涼子。

合宿所から家に戻ってから、本田家に毎日電話が鳴り、1時間以上話につき合わされることになるのだが、それはまた別のお話。

第三十六話※

夏休みを利用した三船リトルの合宿も今日と明日で終わりである。

今日から練習試合をたくさん組んでいるため、全員にとつては試合経験を積む絶好のチャンスであった。

「なにいい!? タベ、あの女の子と卓球したのか!?!」

「ああ、俺と大地が誘われてね」

「なんでそんな時間に卓球なんかやってんだ? なんかもちやくちや怪しいな!」

「え……? なんで? 別に何かあるわけでもないし、俺も大地も別に恋愛感情とかもないからなあ……」

「え! あんなに可愛いのものもつたいなくね!?!」

沢村と吾郎が朝食時に昨夜の話をしていた。

大地は吾郎が余計なことを言わないかひやひやししながらも、黙々と食べることにした。

そして清水が席を立つ。

「ごはん、おかわりついでくるけど……みんなはいる?」

「あ、俺いる！ 山盛りな！」

「俺も」

「あ……じゃあ僕も半分もらおうかな」

「俺も手伝つてくるよ」

茶碗を受け取つて、ごはんをよそう清水を手伝いに行く大地。

「ね。昨日言つたとおり、吾郎は興味なさそうでしょ？」

「な、な……！」

「てかあいつつてまだ恋愛とか興味無さそうだし、めっちゃ鈍感だからさ、清水さんにはヤキモキさせちゃうかもしれないけど……ごめんね」

「……大地つてあいつと違つて大人だよね」

「そう？ まあ一応〃兄〃だからね。でも吾郎みたいに自分の気持ちに素直なやつつていいなつて思うよ。格好いいじゃん」

「そ、そうだよな……！ ……あ」

「ぶっ！ 大丈夫！ 俺は誰にも言わないし、応援してるから」

そう言つて席に戻る大地。清水はそんな大地を見て、ああいう兄がいたらいいのになと思うのであった。



ユニフォームに着替えてグラウンドに向かっているときに、ちょうど横浜リトルの選手たちが合宿所から出て帰るところだった。

「あ、横浜リトルは今日帰るのか」

「そうみたいだな」

沢村と清水が話していると、涼子が大地と吾郎の方に走っていくのが見えた。

清水は一瞬戸惑った顔をする。

ただ清水からは、涼子は吾郎ではなく、大地に向かって話しかけているように見えた。

「あれ、涼子ちゃんは今帰るんだ？」

「うん！ だから最後に話しておきたくって」

「わざわざありがとうね！ あつちに戻っても一緒に遊べたらいいね！」

「う、うん……あの戻るのっていつ頃なの？」

「えっと、明日まで練習で明後日に帰る予定だよ」

「そうなんだ……明後日の夜って電話してもいい……？」

「え、大丈夫だけど……俺と吾郎に何か用なら今聞くよ？」

「ううん、明後日話したいの！ じゃあ電話するね！」

大地にそう言つて、バスが出る時間だからと去つていく涼子。

沢村は唾然としていたが、すぐに正気を取り戻し、大地をからかい出す。

「だいちい〜！ 何だアレは！ お前全然興味ない素振り見せていたくせに、いつあんなに仲良くなつたんだよ！ このラブラブファイヤーめ！」

「なんのことだよ？ 別に俺のこと好きつて言つていたわけでもないんだから、ただの友達でしょ」

「お前……鈍感つて吾郎のことを何も言えないぞ……」

沢村がからかう様子を冷静に返す大地を見て、やはり兄弟だつたと思う。

清水は、大地の肩に手を乗せて可哀想な人を見る目で大地を見ていた。

大地は、「あいつと一緒になよ」と言つていたが、転生して経験が豊富だつたとしても血は争えないのである。

そこから2日間で6試合とハードスケジュールをこなす。

1日に1試合ずつ吾郎と大地が投げて、3試合目は半分ずつ投げることをやつていた。

結果としては6試合で5勝1分と悪くない成績で終了した。

吾郎は新しい球のスピードもまだ遅いのと、制球が定まらず、ピンチになる場面も

多々あったがなんとか抑える。

大地はあえて打たせて取るピッチングをして、全体の守備練習も出来るようにしていた。

お陰で全員が良い緊張感の中で打球を落ち着いて処理することに慣れてきていたのであつた。

「よし！ 今回の合宿はいい感じだったぞ！ この調子で秋大会に向けて頑張つていこう！」

「はい！」

合宿も終わり、全員がかなりの成長をしたのを確認した安藤は、秋大会に向けて手応えを感じているのであつた。

そして大地は帰ったら大会に向けて先に能力アップをしておこうと考えていた。

◇◇◇◇◇

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覽

球速：118 km

コントロール：E+

スタミナ：E+

変化球：

ナツクルカーブ：2

◇野手基礎能力一覧

弾道：3

ミート：E+

パワー：E

走力：E+

肩力：E+

守備力：E+

捕球：E+

◇特殊能力

チャンスD+

ケガしにくさC-

送球D+

ノビD+

ムード○

初球○

キレ○

◇◇◇◇◇◇◇◇

秋大会に向けて合宿で貯まったポイントを使って、球速とコントロールを上げていた。

野手基本能力は弾道を3に上げて、長打が出やすいようにしている。

特殊能力についてはノビをD+に、今回の合宿でコツLVIを掴んでいた初球○を習得し、少しポイントは高かったがキレ○を習得しておくことにした。

(これで秋大会に向けて身体を慣らしていくだけで大丈夫だな。大体の相手には負けなはずだ)

「大地ー！ー！ 電話よー！」

「え？ こんな時間に？ はーい！」

桃子に呼ばれて電話を代わりに行く大地。

そこにはニヤニヤしている桃子がいた。

「大地つたら、隅に置けないわね！」

「え……？ なんのこと？ てか電話って誰から？」

「あれ？ 彼女じゃないの？ 川瀬さんって女の子からよ」

「川瀬……？ あ！ そういえばなんか電話するとか言ってたな……」

そう言つて電話を代わる大地。

本当に電話をしてくるとは思つていなかったため、大地も驚いていたのだ。

「はい、代わりました」

「あ、大地君？」

「うん、涼子ちゃん。3日ぶり？ でいいのかな？」

「うん、そうだね！ 電話出てくれてよかった……」

「そりゃあ、うちんちだし。それで何かあったの？」

「ううん、ちよつと話したかっただけだけど……だめかな？」

そう言われてダメとは言えない大地だったが、その性格のせいで1時間以上も電話に付き合わされるのであった。

問話 テーブルテニスの王子様

「……なに？ 2人とも俺に勝てる自信無いの？」

大地が笑いながら吾郎と涼子を見る。

2人はムツとしてお互いに目を合わせる。頷きあった後、「上等だよ！」と言ってラケットを持つのであった。

11点先取、1セットマッチ。サーブは3回交代で大地サーブからスタート。ボールを数回台に軽く弾ませたあと、少し高く上げてボールを打つ。

対角線上に飛んでいったボールは横回転されており、相手コートについた瞬間、逆回転をして吾郎の顔めがけて飛んでいく。

「うおー！」

「ふふ。ツイストサーブだよ」

間一髪で避けた吾郎だったが、急なことだったので返すことが出来ず、大地のポイントとなる。

ニヤリと笑う大地の顔が、このときはとても憎く感じる吾郎であった。ポイントは1-0。

同じく数回台にボールを弾ませた後、大地はボールを高く上げ打つ。

今度はスライス回転することなく、涼子めがけて飛んでいく。

涼子はなんとかボールを打ち返すが高く上げてしまい、大地にとつてチャンスボールとなった。

すると大地は軽く助走をつけ、ジャンプした。

身体全体を使って思い切り叩き落とすようにボールを打ち込む。

ものすごいスピードで相手コートに飛んだボールは台に付いたあと、吾郎と涼子の間を抜けていった。

「どーーーーんー！」

「ぐっー！」

「な、なんなの!？」

ポイントは2-0。

あまりの実力差に2人はまったく太刀打ちできていなかった。

すると先程まで調子に乗っていた大地が、いきなり静かになった。

吾郎達は警戒していたが、大地はボールを上げると、今度は優しく打ち始めた。

(も、もしかして……私達が弱すぎて……手加減でもしようっていうの!?)

涼子側に飛んでいったボールを手加減されたと感じた涼子が怒りに任せて打とうと、

ラケットを思い切り振る。

「……そのボール、消えるよ」

「えっ……!?!」

確実に当てたと思ったが、ラケットにボールが当たった感触がなく、見渡すとボールは明後日の方角に転がっていた。

涼子は何が起こったのか全く分かっていなかった。

「これで……3—0だね」

上から見下ろすように大地が話す。

その屈辱は、2人にとって一生忘れることが出来ないものであった。

しかし、これでサーブ交代である。

吾郎は絶対追いついてみせると回転を掛けたサーブを打つが、大地には簡単に返されてしまう。

涼子も返そうとしたが、またチャンスボールを上げてしまう。

(ま、またさっきのスマッシュが来る!?)

警戒する2人。しかし先程よりは威力が無さそうなスマッシュ——それでもかなり速いのだが——が飛んできた。

ボールは涼子のラケットに当たると、涼子のラケットを弾く。

そして再度大地コートへ山なりのボールが飛んでいき、大地は思い切りジャンプする。

「……俺様の美技に酔いな」

大地はそのまま叩きつけるようなスマッシュを涼子側に打ち、ラケットを持っていない涼子は取ることが出来ず、大地にポイントが入る。

ポイントは4—0。

もはや絶望的な実力差に吾郎達は青褪めるが、試合を中断することは出来ない。

涼子がラケットを拾い、今度はスピードのあるサーブを打つ。

大地は難なくボールを返す。

吾郎はボールを更に返すが、大して回転を掛けていないのに大地の方にボールが引き寄せられていく。

大地はそのボールをさらに普通に返す。

今度は涼子が打ち返すが、同じく大地の方に吸い寄せられるかのようにボールが飛んでいく。

「な！ だ、大地……！」

「あの場所から一步も動いていないわ……!!」

隙を付いた大地がボールを2人の真ん中に打ち付けて5—0となる。

悔しそうな顔をする2人だったが、どうしても一矢報いたいと思い吾郎がボールを打つ。

偶然大地コートの方の端っこにボール向かっていき、これでポイントが取れると2人が笑顔を見せた。

「ふしゅ〜」

奇妙な声が聞こえ、大地が両腕をブラブラとさせたかと思うと、ボールに向かつていき、肘を畳みながらラケットを内側から外側に向かつて半円を描くように振り切る。

ボールはネットの横を飛んでいき、吾郎が「アウトになるぞ!」と言った瞬間、急にボールが台の方に曲がっていき、吾郎達のコートに入って大地のポイントとなる。

「ず、するいぞ! なんだよ、今の!」

「何もずるくはないさ。ボール回し——今のは別名ブーメランスネイクと呼ばれている技だ」

「ブーメランスネイク……だと……!?」

「これで6—0だな……このままリズムに乗るぜっ♪」

大地のサーブになる。サーブ自体はそこまで大したものではなかったのだが、大地の移動速度が急に上がり、2人対1人なのにもまるで付いていくことが出来ない。

このまま9—0まで追い込まれるのであった。

(な、なんとかして1ポイントだけでも取らないと……。)

相手の言うことを1つなんでも聞かなくてはならないという過酷な罰ゲームをどうしても避けたい涼子は、泣きそうになりながらも勝負を諦めてはいなかった。

ボールを思い切り打ち、なんとかサーブエースを取ろうとする。

大地はその時低く構えながらボールを待っていた。

「ドライブB——」

一言だけ話すと、来たボールに対して下から上に向かって思い切り回転をかけるようにシヨットを放つ。

ボールはまるでアルファベットのBのような弧を描きながら、吾郎達のコートへ吸い込まれていったのであった。

「く、くそおおお!!!」

吾郎は半分泣きながら、ボールを拾ってきてすぐにサーブを打ち始める。

大地は吾郎のボールを無難に返す。

涼子がすぐにボールを打ち返すが、また山なりのボールを打ってしまう。

「し、しまったわ!」

「大丈夫! 今度こそ取る!!」

「くすつ。じゃあ取ってみなよ。——クールドライブ」

大地は思い切りジャンプをして、回転をいつも以上に掛けながらボールを打ち返す。吾郎は絶対に取ってみせると、ボールに食らいつき当てることが出来た。しかし、球の威力に押されてそれ以上返すことができなくなっていた。

「な、なん——」

ボールは回転数を更に上げ、弾かれたと思つたら吾郎に襲いかかる。

そのまま吾郎の顔面に当たり、吾郎を弾き飛ばす。

そこで試合終了となるのであつた。

「ふふ……これで終わりだ。……まだまだだね」

倒れた吾郎を起き上がらせようと近付いた涼子も含めて、大地が見下ろすように言い放つ。

吾郎はボールの威力が強すぎたのか気絶しているのであつた。

「さ、俺の勝ちだね！ 何をしてもらおうかなあ……」

ニヤニヤしながら涼子に近づく大地。

涼子は自分の身体を抱きしめて後ろに下がっていく。

「逃げてても無駄だよ……ちゃんと罰ゲームは受けてもらわないとだからね」

「や……いや……」

そして、大地が涼子の上に覆いかぶさ——

「涼子！　いつまで寝てるの！　いい加減起きなさい！」

「はっ！　……え？　あれ？」

母親の声で目が覚める涼子。

目の前にはまだ見慣れない天井があった。

（そういえば私、昨日まで合宿に行っていたんだ……）

涼子は自分が見た夢を思い出して、恥ずかしさで顔を真っ赤にしていた。

夢とは基本すぐ忘れるのに、たまにはつきりと覚えている夢がある。

この夢は当分忘れそうにないと思った涼子であった。

(私、なんて夢を見たんだろう……あのままお母さんが起こしてくれていなかったら……)

一体どうなっていたのであろうか。

思春期真っ盛りの小学六年生、川瀬涼子。

その先がどうなるのかは口には絶対に出せない、出さない、出しません。

「涼子！ 起きたの!?!」

「あ、はい！ 今行く！」

そうして自分の部屋からダイニングへ向かう涼子であった。

第三十七話

「吾郎、宿題やった？」

「……………え？」

「夏休みの宿題だよ！　もうすぐ夏休み終わるだろう？」

「……………え？」

大地はため息をついて吾郎を見る。

毎年のことなのでもう慣れっこののだが、いい加減にして欲しいと思う気持ちは変わらない。

「やるぞ。今からすぐに」

「う…………。だ、大地のを見せてくれれば早いじゃんか！」

「お前なあ…………好きなことしか出来るようにならなくてどうするよ」

桃子も呆れているが、毎年このやり取りをしているのもう大地に任せるようにしていた。

「じゃあまずは算数のドリルからだよ」

「わあ、大地！　外はあんなにいい天気だよ！　一緒にキャッチボールでもしないかい

？」

「うっせ！ 早くしろ！」

大地は宿題を早めに終わらせるタイプなので、さっさとやって残りを自分の時間に費やしていた。

吾郎はその間、野球を観たりゲームをしたりと好き勝手に遊び回っていたのだ。

「この問題が分かんねー」

「ん？ えつとね、これは……」

毎年大地が丁寧に教えているため、小学校3年生までの内容はある程度出来てはい

た。
あくまである程度ではある。

人には向き不向きというものがあるのだと思いき知らされる日々であった。

◇◇◇◇◇

「よーし！ じゃあ夏休みの宿題を提出しろー！」

「やべー！ コレやんの忘れてた！」

「あー！ 持ってくるの忘れてたー！」

各々が夏休みの宿題を提出する中、吾郎は余裕であった。その余裕そうな吾郎を見て、清水が意外そうな顔をする。

「ん？　なんだ吾郎は宿題ちゃんとやってきたのか？」

「ふっふっふ。当たり前だろ！　俺にかかればこの程度の宿題なんて大したことないね！」

「ふーん……どうせ大地のを見せてもらったか、教えてもらうとかして手伝ってもらったんでしょ？」

「な………　なんでお前がそれを知ってるんだよ!？」

「え、だって大地つて頭いいじゃん。しかも運動神経もいいから、結構女子にモテたりするんだよ？」

「な！　なん………だと………!」

清水の衝撃発言に吾郎は固まる。

吾郎が思い返してみると、たしかに大地は女子生徒から話しかけられる頻度が吾郎よりも多かつたような気がしていた。

気がしていたというのは、吾郎がそこまで興味を持っていないので覚えていないのだ。

「しかも顔もイケメンだもんな。性格もいいし、モテるのも分かるよね」

「か、顔って俺だつて大地と双子なんだから一緒の顔だぞ！」

「顔だけはね！ 女子はそれだけで判断しないってこと！」

恋愛などにはまだ興味が無いとはいえ、清水にそこまで言われてしまうと負けず嫌いの性格が出てしまう。

休み時間になると、大地に宣戦布告をする。

「大地！ 俺と勝負だ！」

「いいけど……何で勝負するの？」

「えつと……野球はどうだ!？」

「いや、俺ら結構頻繁に勝負してるじゃんか。それとは違う意味なんだろ？ なら違う

内容でやらないとじゃん」

沢村と小森も大地と吾郎の話を聞いて集まってくる。

「なんだなんだ！ 兄弟喧嘩か!？」

「ちよつと沢村君……本当に喧嘩だったらまずいよ……」

そこに清水も加わり、状況を説明する。

沢村と小森は双子の勝負と聞いて面白そうな顔をした。

「じゃあさ、単純に人気投票とかどうだ?」

「んー、それだと大地君の圧勝じゃないかな? 勉強とかは?」

「いや、それも大地の圧勝でしょ」

沢村、小森、清水の3人がガヤガヤと話しているが、吾郎はその横で何なら大地に勝てるかを考えていた。

（うーん、身長は同じだし、野球はいつもやっているし、運動系はほぼ同じくらいなんだよな。

勉強は絶対に負けるし……あれ？俺って大地に勝てる要素……無いのか？）

衝撃の事実に気付いた吾郎は、驚きの表情で大地を見る。

大地も急に勝負と言われて戸惑っていたのだが、コロコロ変わる吾郎の顔にさらに戸惑っていた。

「なあ吾郎……勝負はいいんだけど、俺らがそんなことして何か得つてあるのか？」

「だ、だって大地に勝てる要素がないって清水が……！」

「……はあ。清水さん」

「や、やあ！大地君！どうしたのかな!？」

「あんまり吾郎をからかわないの。こいつ単純なんだから、ちよつとしたことでも本気にしちゃうって」

「あ、あははははは！ごめんごめん！まさかここまで本気にするとは思ってなくて！」

清水は大地に優しくたしなめられるが、笑いながら反省していた。

「吾郎もそんなことでいちいち本気に受け取らないの。俺らはたつた2人の兄弟なんだから争つても仕方ないでしょ」

「そ、そうだよな……」

「じゃあこの話は終わり！ もうすぐ授業始まるから準備しないとだよ！」

そう言つて席に戻るように伝える大地。

沢村は「なんだ、つまんねー」と言つていて、それに対して小森は苦笑いをしていたが素直に席に戻る。

清水と吾郎も同じように席に戻るが、清水から話しかけていた。

「吾郎、からかつてごめん……」

「ん？ もう別に気にしてねーよ」

「大地もいいところあるけど……ご、吾郎もいいところ……た、たくさん……あるから……な」

最後らへんは声が小さくなりすぎて、隣の席の吾郎も届かない声だった。

しかし清水は顔を少し赤らめて勇気を出していたのであった。

そして大地と吾郎の話は、実は教室にいたクラスメイトのほとんどが聞いていた。

吾郎の声がでかいのもあつたが、基本大地は女子生徒から見られていることが多いのだ。

(((大地君つてやつぱりかつこいいなあ！　なんか……大人だよね！)))
前世の精神年齢もあるからか、基本的には落ち着いている大地に大人の魅力を感じるのは無理もない。

大地自身は見られている感覚はあつたが、別に害がないので気にしていなかった。それがまた余裕がある雰囲気を出してしまい、さらに女子生徒から人気になつていたのであつた。

第三十八話

「よし、ちよつと皆集合！」

安藤の呼びかけで全員が集まる。

内容は来週から秋大会が始まるので、それに対して横浜のバッティングセンターに行つて特打ちを行うといったものだった。

バスで移動する三船リトルメンバー。

「一回戦の本牧リトルほんもくつて強いのかな？ 監督よく知らないっていつてたけど」

「別にどこだつて関係ねーよ。全国行くには全部倒さないといけないんだからな」

「横浜リトルとは3回戦になりそうだね」

トーナメント表を見ながら、小森、吾郎、大地の3人が話している。

大地としては偵察行かなくていいのかと思つていたのだが、安藤が行こうと言わないということはまだ必要なのかとひとまず置いておくことにした。

「そうそう、ボールがあつてもなくても、素振り通り腰を使って振つたほうが当たるし、飛ぶよ」

「あ、清水さんはボールから目を離さないで。リズムを大事にして」

「沢村も手だけで振り過ぎだよ。下半身を意識して」

安藤と大地でメンバーのバツティング練習を見ていく。

吾郎は早々に速球や変化球の投げるゲージに移動していった。

「大地君はやらなくていいのかい？」

「んー、まあやるのはいいんですけど、俺が打つよりもみんなで打って勝ったほうが楽しいじゃないですか？」

最悪吾郎がいるし、とりあえずみんなのフォローをするってことで」

（んー、やっぱり大地君はキャプテンの素質があるみたいだな。これを機会に正式に話してみるか）

「大地君、あのさ——」

「——ねえ、ちよつとあんた！　いつまで一人で独占してんのさ！　人が待つてんのに

3打席も4打席も一人でやらないでよ！」

吾郎の大声が聞こえて、声のする方を見る大地と安藤。

そこではゲージの中にいるであろう人に向かって話している吾郎の姿があった。

一旦安藤に選手を任せて、大地が吾郎を見に行く。

「何言いがかり付けてんだよ！　独占なんかしてねーよ。俺は今さつき金入れたんだぜ」

「吾郎。どうしたんだよ」

「なんもかんも、こいつが1人で何打席もここのゲージを独占してるんだよ!」

「え……失礼ですが、そうなのですか?」

「ちげーよ」

「違うってさ」

「い、いやいや! なんで向こうの言い分を信じてんのさ!」

「もういいから行くぞ。……失礼しました」

吾郎を引きずって戻っていく大地。

離せと言つて暴れるが、大地が睨むと大人しくなつたのであつた。

「つたく、周りに迷惑かけんなつて」

「だつてあいつが……!」

「ほら、よく見てみろよ」

「え? ……あれ? 同じ顔が3人!」

「大方三つ子とかそんなんだろ? 俺らみたいな双子だつているんだから、三つ子だつて
いるだろ」

大地が指を指した方向を吾郎が見ると、そこには先程ゲージで打っていた人と同じ顔をした人が合計3人いたのであつた。

原作知識を持っていた大地は、吾郎が恥をかかないように早めに対処して問題を起こさないようにしていたのであった。

(たしか……ブラックトライアングルだっけ？ きつと彼らのユニフォームからブラックって取ってるんだらうけど……中学になってユニフォームが変わったらどうするんだろ？)

くだらないことを考えながら、文句を言っている吾郎をなだめつつ指導を再開するのであった。



そして秋大会一回戦の日を迎えた。

大地達の家では、朝から慌てている吾郎がいた。

「おはようございまーす！」

呼び鈴が鳴り、大地が出るとそこには小森、沢村、清水の3人が迎えに来てくれた。

「おはよ。ちよつと待ってね。吾郎がまだ支度中だから」

「ほら吾郎！ 友達来たわよ！」

「え？ もうそんな時間？」

「だから早く起きなさいって言ったでしょ！」

「仕方ないじゃん。夕べ興奮して寝れなかったんだよ！」

吾郎が支度を終えて玄関で靴を履いていると、桃子が呼び止める。

そして大地達に一枚の写真を渡すのであった。

「これ、バッグでいいから入れていってあげて」

「……おとさん」

「母さんも応援に行くけど、スタンドからだどちよつと遠いでしょ？ 息子達のデ

ビュー戦の晴れ姿、きつとおとさんもベンチで見たいはずだから……」

桃子の配慮に嬉しそうな顔をする大地と吾郎。

写真は大地が丁寧にバッグの中に入れて、家を出る。

そして集合場所に向かう途中、桃子のことをずっと綺麗だと言っている沢村を無視し続けるのであった。

リトルリーグ秋季大会。

場所は横浜マリンスターズの2軍球場で行われる。

開会式の行進の後、吾郎がキョロキョロと何かを探していた。

「吾郎、どうしたの？」

「ん？ 横浜リトルがいないと思って」

「ああ、たしか別ブロックだったから球場が違うんだよ。寿くんに会いたかったよね」

「だなー。合宿以降会えてないからさあ」

「俺は会ってるけどね。寿くん家行つたし」

「え、だから誘つてつて言ってるじゃん！」

「だから声掛けても寝てるのお前だろ。しかも勉強メインだぞ？」

「…あ！ 宣誓の挨拶するみたい！」

勉強というフレーズを聞いて、大地の話を流す吾郎。

宣誓の挨拶をしているのが先週揉めたブラックトライアングルの一人であることはもう忘れていたため、特に何も感じずに見ている吾郎であった。

そしてついに吾郎と大地の公式戦デビューが始まるのであった。

第三十九話

「いくぞお！ サードお！」

安藤が試合前の守備練習でサードにボールを打つ。

夏目は緊張で動けず、グラブにボールを当てて逸らしてしまう。

「あつー！」

「こらー！ イージーバウンドだぞ！ 次、ショートー！」

「はいっー！」

今度はショートに先ほどよりも強いボールを打つが、大地は難なく捕球し、ファーストへ好返球をする。

「よし！ いいぞ！ 次！」

大地の落ち着いたボール捌きを見て、次第に全員が落ち着いてきたのかエラーも減ってきていき、いつも通りのプレイができるようになってきていた。

吾郎も初めは自分が頑張らないといけなかつたかと思つていたが、全員が落ち着いてきたのを見て安心していた。

「なんだ？ あのチーム。こんなへボ相手じゃ、俺達ブラククトライアングルの見せ場

が作れねーじゃねーか！」

「ま、今日は楽しくフリーバッティングでもさせてもらうかな」

「だな」

本牧リトルの岡村三兄弟は、三船リトルの守備練習を軽く見て大したことないと思つたのか、そのままベンチの裏に入つていつてしまった。

その直後に吾郎のピッチング練習が始まったのだが、それを試合まで見る事がなかった岡村三兄弟の失敗の1つでもあった。

「この辺で大丈夫ですかね。そろそろ試合が始まりそうです」

「はい」

桃子は茂治の兄であり、大地と吾郎の伯父でもある義治と一緒にベンチに座つていた。

大地と吾郎のデビュー戦ということと、義治自身も野球をやつていたという過去からぜひ見たいということと一緒に来ていた。

「大地君と吾郎君は大丈夫ですかね？　どれくらいの球を投げられるんですか？」

「私は素人なので……」

大地と吾郎が、どれくらい上手いのか分かっていないので正直に答える。

こんなやりとりをしているうちに試合も始まったのであった。

◇◇◇◇◇◇

◇スターティングメンバー

1番：セカンド 長谷川

2番：レフト 前原

3番：キャッチャー 小森

4番：ピッチャー 吾郎

5番：シヨート 大地

6番：サード 夏目

7番：ファースト 田辺

8番：センター 沢村

9番：ライト 清水

控え：鶴田

◇◇◇◇◇◇

『これよりAブロック一回戦、三船リトル対本牧リトルの試合を始めます』
「プレイボール！」

全員が緊張する中、ついに大地と吾郎のデビュー戦が始まった。

何度も経験している監督の安藤ですらも、この試合はワクワクが止められなかった。

吾郎が主審の合図に合わせて振りかぶる。

(おとさん……最近どうだい？ 3年も天国そっちにいたら少し退屈してきた頃だろ？ でも

今日は俺達のデビュー戦だからさ。久しぶりに——手に汗握ってドキドキしていつて

よ！)

「ストライーク！」

デビュー戦第一球目がインコースに決まり、ワンストライクとなる。

応援に来ていた観客は吾郎のボールを見て、スピードに驚いていた。

「は、はええー！ あのカギ！」

「あ……あれが吾郎君の球ですか……!?!」

「……やっぱり吾郎の球はすごいのですか？」

「すごいなんてもんじゃありませんよ！ 小学四年生であそこまで速いボールが投げられる子はほとんどいないですよ！」

桃子はピンと来ていなかったようだが、義治は吾郎の才能の凄さに驚いていた。

そのまま一番打者の岡村一郎は手を出さずに三振して、ベンチに戻っていった。

「どうだ、何か分かったか？」

「ああ。まず今日の主審、低めとアウトコース甘いな。インハイは捨てていつでも大丈夫だろ」

「で、ピッチャーはどうだ？」

「なかなか厄介だな。あの速さでコントロールは抜群だ。やつからは大量点は取れないだろ」

「1点勝負か……」

「多分な」

2番打者の岡村二郎も三振になり、3番の三郎の打順になる。

しかし3番打者も打つ気がないのか、手を出さずに三振となった。

「ストライク！ バッターアウト！ チェンジ！」

「ナイスピッチ！」

「いきなり三者三振かよお！」

ベンチに戻った三船ナインは吾郎を褒め称えていた。

その中で小森が「吾郎のピッチングを観察するような見送り方だったのが不気味だった」と話していた。

「……それは俺も思った。多分審判のコースの見極めや吾郎の球種を探っていたんだと思うぞ」

「なるほどな。まあ打たせなきやいいだけの話だから、ここから全員で点をとっていきましょう！」

こうして1回の裏の攻撃が始まった。

大地は1番打者の長谷川に駆け寄り、アドバイスをする。

「長谷川、サードに思いつきり引つ張つてみて。ゴロ転がせばいいから、打ったら全力で走つて」

「分かった！」

長谷川は大地のアドバイスを聞いて、バッターボックスに立つ。

初球。そこまで速くないスピードが外角低めに決まり、ストライクとなる。

「ボール自体は速くないな。あれなら私でも打てるかも！」

「油断は禁物だよ。実は調べてみたら、去年横浜リトルはあのピッチャーから2点しか取れなかったらしいんだ」

「「横浜リトルが……!?!」」

「ああ、きつと何かカラクリがあるはずだから油断はダメだよ」

ベンチで三船リトルのメンバーが話している間に長谷川が2球目を思い切り引つ張り、サードベース上を抜けていきツーベースヒットとなった。

長谷川のヒットで全員が喜ぶ。

そんな中、セカンドを守っていた岡村一郎がピッチャーに話しかける。

「北浦！ 一塁を埋めろ。あとは俺フックトライアングル達でなんとかする！」

「は、はい！」

ピッチャーは指示通り敬遠をして、ランナーが一、二塁となった。

バッターは小森。安藤は送りバントではなく、右狙いのヒッティングのサインを出すのが、大地に止められる。

「監督。ここは素直にバントの指示が良いと思います。それもサードが捕るようにバントを指示してみてください」

「う、うむ。そうか……まずは確実にいった方がよいな」

安藤はヒッティングのサインをやめて、サードにバントをするようにサインを出す。

小森は指示通り、サードにバントする。

サードは前進して捕球しようとするが、

「あっ！」

慌ててしまったのか、ボールをこぼしてしまい満塁となってしまった。

「ご、ごめん……」

「大丈夫だ。とりあえず一点もやれないから、サードとファーストは前進守備でセカンドの俺とショートの二郎がフォローに入る」

「わ、分かった」

岡村一郎の指示通り、スクイズ対策でファーストとサードが前進する。

その様子を見た吾郎は気にすることもなく打席に入る。

(さつき大地に言われたからな。お前はホームラン狙って来いって！)

大地に言われたアドバイスを思い出しながら、ピッチャーの投げたボールを思い切り振る。

ボールはそのままレフトに設置してあった、ホームラン用のフェンスを軽く超えていった。

「「お、おおおおおお！ 満塁本塁打!!」」
ホームラン

三船リトルのベンチだけでなく、観客席にいた大人達も驚いていた。

そして岡村三兄弟や本牧リトルのメンバーも同じだった。

続く5番の大地にもホームランを打たれてしまう。

(な……こんな下手くそどもに俺達岡村三兄弟が負けるわけが……)
フラットライオン

(……って思っている時点で君達の負けだよ。君達以外がそこまで上手じゃないの分かっているんだから、そこを攻めるに決まっているでしょ)

「ストライク！ バッターアウト！ ゲームセット！」

「よっしゃー!! 1回戦突破だ!!」

結果、14対0で三船リトルのワールド勝ちとなった。
ブラックトライアングル
岡村三兄弟は2回目の打席が回ってくることもなく、吾郎と大地に敗退するのであつた。

第四十話

（おめでとう。大地、吾郎）

桃子は大地達が喜んでいられるのをスタンドから拍手していた。

義治も一緒になって喜んでいた。

そして、その近くでは2人の親子が座りながら今の試合を分析していた。

「次のうちの相手は三船リトルか……」

「はい」

「よし、球太。お前なりの分析をしてみろ」

「はい。まず監督の指示がハマった試合だと思います。相手の弱点を的確に突く分析力と実行力は見事です。全体的には弱くはないですが、ピッチャーとショートの2人で持っているチームだと思います」

「エースの本田はどうだ？ 投げて打って華々しい活躍だったぞ」

「はい……いい選手ですが、別に大したことないと思います。あのレベルのストレートだけなら打ち崩せるでしょう」

「よろしい。だが、油断は禁物だ。では家に帰って1人1人対戦データを練っていこう」

「はい」



「さあ食え！ よし食え！ 何食ってもいいぞお!! 5年ぶりの一回戦突破のご褒美だーっ！」

試合の帰り、一回戦突破を祝ってファミレス『チョーサン』に来た三船リトル一行は安藤の奢りで食べ放題になっていた。

よし来た！ とばかりに三船メンバーが高いメニューの商品ばかり頼むので、安藤は少し涙目になっていた。

「……………とところでおじさん。来週当たる戸塚西って強いのか？」

「う……………うむ。シードされているから、それなりに強いんじゃないかな？ 去年の秋大会は準決勝まで進んでるし……………」

「準決勝!? それってベスト4ってことじゃん!」

「きつつー」

安藤の言葉に沢村と清水が終わったとばかりに落ち込んでいた。

そこまで野球に熱心になってくれたのかと安藤が喜ぶが、「来週勝つたら寿司屋に連

れて行ってもらおうとおもっていたのになあ」という言葉にずっこけていた安藤であった。

「んー、一応調べただけど、ピッチャーのワンマンチームって感じかな。その選手だけはストリートがめつちや速くて、フォークをウイニングショットにしてたよ」

「だ、大地君、いつの間に調べてたの!？」

大地は原作知識もあつたのだが、念の為事前に練習を偵察してきていた。

ほとんど原作と誤差のない戦力だったため、ほぼ確実に勝てるつもりでいた。

「一応勝つ方法としては3つあるかなって思ってる。まずはフォークを捨てて、全てストリートだと思って打つ。」

次に凡打でもいいからとりあえず当てて、ピッチャー以外に処理させる。

最後はフォークを完全攻略して、完膚なきまでに勝つて方法かな」

最初の方法のメリットは、フォークしか投げられなくなるようにすれば、いずれ握力がなくなつて甘い球が来るので、そこを確実に打ち崩せる可能性高いということ。

デメリットは序盤全く点が入らない可能性があるのと、延長も覚悟しなくてはいけないということ。

2つ目の方法のメリットは、ピッチャー以外があまり上手ではないので本牧リトルのときのようにエラーでの出塁や得点が期待できるということ。

デメリットは出塁できるかは相手頼みになってしまふということ。

3つ目の方法のメリットは、単純に大地自身の好みであること。その方が野球として面白い。

デメリットは1番目の方法以上に点が入らない可能性があるということ。

このことを伝えたところ、安藤は吾郎と大地には3番目の方法を使つてほしいと伝えた。

その言葉に吾郎と大地は、嬉しそうな顔をして「分かった!」と言う。

安藤は人を限定して勝つための方法を変えていこうと提案していた。

(そうか……全員が同じ方法じゃないといけないと思つていたけど、そんなこともないんだな)

大地も視野が狭くなつていたことを反省していた。

結果として、吾郎と大地はフォークを完璧に打つこと。他のメンバーは各自得意な技術を使って攻めていこうということになった。

基本はストレート狙いのため、吾郎と大地のストレートを打つことが目標である。

「そうだ! 言うのを忘れていたんだけど、これを機に大地君に三船リトルのキャプテンをやつてもらおうのはどうかかな?」

「……………え!」

「ほら、今回もだけど色々みんなをまとめてくれるし、いつもムードを良くしてくれるのも大地君な気がするんだよ。みんなはどう思う？」

安藤の突然の提案に大地は戸惑ったが、三船リトルメンバーは全員賛成していた。

一部に至っては、すでにキャプテンだと思っていたと言っている人もいたのであった。

「ま、まあみんながそういうならやつてみようかな……。でもみんなもフォローしてね！」

ファミレス内で拍手が起こり、大地が三船リトルのキャプテンに就任する。

吾郎はその様子を嬉しそうに見ていた。もちろん桃子や義治でもある。

（大地ならキャプテン向いてるもんな！ さすが兄貴だ！）

そして、安藤の財布が空になったところで、本日の祝勝会は解散となった。

大地と吾郎は桃子と一緒に車で来ていた義治に家まで送ってもらっていた。

車の中では自分のことのように喜ぶ義治を見て、大地は微笑んでいた。



「吾郎！ 昨日から野球ばかりで宿題やってないでしょ！ テレビばかり観て――

「——母さん。吾郎、もう寝ちやつてるよ」

「……え？」

「デビュー戦だったからね。疲れちやつたんだよ。明日朝早くから起こして宿題させるから、今日は寝かせてあげて」

大地が洗い物をしながら声を上げていた桃子に対して、吾郎を休ませてあげるように伝えて自身はバットを持って外に出ていった。

その様子を見て、「もうっ！」と言っていた桃子だったが、吾郎がソファで寝ている姿を見て怒る気が失せてしまった。

（ま、いつか！ 今日頑張ったもんね……！）

大地は外に出てから近くの公園で素振りをしていた。

毎日の習慣になっているため、やらないと寝れないのである。

もちろん吾郎と違って、宿題も終わらせている。別で英語の勉強も順調で会話だけでなく、読み書きもほとんど問題なく出来るようになっていた。

（来週の戸塚西戦でも負けられないようにしないとな）

そして戸塚西戦の日を迎えるのであった。

第四十一話

「じゃあ行つてくるね」

「行つてきます」

「いつてらつしやーい！ 母さんも後で応援に行くから、頑張るのよー！」

本牧リトルとの対戦から1週間が経ち、大地と吾郎は2回戦の対戦相手である戸塚西リトルとの試合のために球場へ向かつていた。

前回と同じように集合場所で全員が集まり、バスに乗つて安藤の運転で向かうのである。

バス内は和やかな雰囲気であつた。

球場に到着してからはアップをして、試合に備える。

そして戸塚西リトルの守備練習を見て、全員が驚くのであつた。

「え、戸塚西つてベスト4じゃなかつたの？ ポロポロこぼしてばかりじゃん！」

「これならうちも勝てるかもしれないなー！」

五年生達が侮つているところに大地が声を掛ける。

大地が指をさし、その方向で投球練習をしているピッチャーを全員で見ると、落差の

あるフオークボールが投げられていた。

「あのピッチャー相手に打てれば勝てるとは思っただけどね……」

「そっか……あのボールが打てないから守備がダメでも勝っていたのか」

「やべえ、急に自信無くなってきた……」

吾郎はその様子を見て、見下したり自信無くなったり忙しい五年生だなど心の中で思っていた。

だが、それを見てみんなが和むから悪くないよなと考え直し、どうやってフオークを打つかを考えていた。

「あのピッチャーからはそう簡単に点が取れないかもしれない。そうなったら三船^{こっ}リトル^ちも守り抜くしか勝ち目はなし！ だからこそ、作戦通りにやってみるぞ！」

「……はいっ!!!」

安藤の号令で全員が気合を入れたところで、先行が戸塚西リトルで試合が始まる。

◇◇◇◇◇

◇スターティングメンバー

1番：セカンド 長谷川

2番：ショート 前原

3番：キャッチャー 小森

4番：レフト 吾郎

5番：ピッチャー 大地

6番：サード 夏目

7番：ファースト 田辺

8番：センター 沢村

9番：ライト 清水

控え：鶴田

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『只今より、Aブロック二回戦、三船リトル対戸塚西リトルの試合を行います』

大地がマウンドに上がり、投球練習を始める。

「な！ 今日は一回戦のピッチャーじゃないのか!？」

「しかもボールがすごい速いぞ!!」

「う、打てるのかな……あんな球……?」

戸塚西リトルは吾郎が投げると思っていたので、同じ以上の球速で投げってくる大地を見て不安になっていた。

しかし戸塚西リトルの監督である宇沙美は、見下しながらも優しく話しかける。

「ははは、打てるわけがないだろう、君たちが」

「「……!?!」」

「いいんだよ、君達はいつも通り気楽にやれば。球太一人でうちは十分に勝てるからな」

「「は、はい……」」

宇沙美の言葉を聞いて落ち込むように俯く戸塚西リトルのメンバー。

そんなことを気にもせず、宇沙美は息子の球太に声を掛ける。

「球太！ ピッチャーは変わったが、お前なら打てるはずだ！」

「はい」

そして、球太がバッターボックスに向かっていく。

『一番ピッチャー宇沙美君』

「プレイボール！」

大地は戸塚西リトルのベンチの雰囲気を見て苦々しい顔をしたが、まずは試合に集中しないといけないと思いつく。

そして振りかぶって初球を投げる。

「ストライク！」

左打ちである球太のインハイにストレートが入り、ワンストライクとなった。

小森からボールを受け取り、足でマウンドを均す大地。

そこで、監督の宇沙美が帽子のつばに指先をつける仕草をし、球太はそれを確認すると頷く。

(ふふふ……確かにこいつもいい球を投げる。その速さでコースに決められたら、どんないい打者もそうは打てまい。

……だが、ピッチャーは変わってもキャッチャーがサインを出していることは変わらないんだよ。

インハイのあと、キャッチャーが次に要求するストライクは——87%の確率で
アウトロー
 外角低めだ！)

「……なっ！」

「ストライク！」

ボールはど真ん中に投げ込まれていた。

小森は大地にボールを投げながら、心の中で笑っていた。

(ふふ。大地君の言ったとおりだったね。相手は僕の配球の癖を掴んでいる可能性が高い)

実際に宇沙美親子は小森の配球の癖を分析して知り尽くしていた。

だからこそ確実に打てると踏んでいたのだ。

しかしそれは大地によって見抜かれており、対球太に関してだけは大地がどこに投げるか、何を投げるかを決めていたのであった。

(な、なんだとおお!! 私の分析が間違っていたというのか……!?)

宇沙美は自身の分析が外れたことに動揺を隠せないでいた。

それは球太も同じであり、すぐに宇沙美を見る。

「球太! いちいちこつちを見るな! お前の力なら打てるはずだ!」

「……はい」

しかし大地の低めに制球されたボールを打つことができずに、球太は三振してしまふ。

トボトボと歩いてベンチに戻ってきた球太の顔を宇沙美は思い切り叩く。

「球太! あの程度の球を打てないとはどういうことだ!」

「ご、ごめんなさい」

戸塚西リトルのベンチだけでなく、三船リトルのベンチも審判もその光景を見て黙ってしまっていた。

そして大地はこのやり取りを見て不快に思っていた。

それは吾郎も同じであった。

(原作で見ていたときも不愉快だったけど、実際に見るとこんなに胸糞悪くなるんだね)

大地は若干の苛つきを覚えながらも2番、3番打者を三振に仕留める。球場内の空気が悪くなりつつも、三船リトルの攻撃が始まるのであった。

第四十二話

「ストライク！ バッターアウト！ チェンジ！」

三船リトルも3番の小森まで打つことができず、1回の裏はチェンジとなる。

球太は三者三振を取っていたが、無表情でベンチに戻っていくのであった。

（やっぱり誰も声すら掛けないのか……。つまらないチームだなあ。それよりも小森が怪我しないようにだけはしておかないとね）

原作では小森が1回の攻撃の際に無理にフォークを打とうとして手首を捻挫してしまふということがあった。

大地はそれを防ぐため、あえてフォークを打ちに行くのは大地と吾郎だけにしてもらい、他のメンバーに負担を掛けないようにしていた。

2回表。もちろん誰も大地のボールを打てるはずがなく、三者三振であった。そして、ここから三船リトルの本格的な攻めが始まる。

「吾郎ー！ 打てよー！」

「お前なら打てるぞー！」

「フォーク打ちの手本見せろー！」

「……前原、お前真似出来んのかよ」

周りの応援と沢村のツツコミを背に受けて、吾郎が打席に入る。

大地と一緒にフォークボールを打つとは言ったが、実は陰ではストレートも積極的に狙おうと話していた。

フォークも打ちたいが、試合に勝つほうが大切なのである。

球太が初球を投げる。ストレートかと思いきや、ホームベースの手前でボールがカクンと落ちる。

「ストライーク！」

(な……なんだこりやあ。思っていた以上に球が落ちるな)

2球目。今度はフォークと分かっている吾郎がバットを振るも空を切った。

吾郎でも空振りするレベルの球を見て、三船メンバーが動揺する。

「ああつ！ 吾郎でも打てないのかよ！」

(よし、良い調子だ。これなら球太に完全試合を狙わせてみていいな)

3球目。球太が三振を取れると思いき、投げたフォークボールを吾郎が当ててファールにした。

まさか当てられると思っていなかった球太は少し動揺するが、まぐれだと思い直し、間を空けずに振りかぶってフォークを投げる。

しかし次も吾郎のバットに当たり、ファールとなる。

(な、なぜだ!!) なぜ球太のフォークに当てられる!?)

5球目。再度フォークを投げる球太に対し、吾郎はきちんと引きつけてバットに当てる。

ボールはレフト前に転がっていき、ヒットとなった。

球太はヒットを打たれたことに対して焦り、大量の脂汗を流した。

「球太! なんだその球は! お前がちゃんと投げれば打たれるわけがないだろう!」

宇沙美が球太を叱責する光景を見て、さらに球場内の空気が悪くなる。

大地は苛つきながらも打席に入っただけだった。

「球太! 次打たれたら分かってるだろうな!」

「は、はい。父さん」

大地は初球を狙うことに決めていた。

あれだけ吾郎にフォークを粘られて、しかも宇沙美に怒鳴られた状態でフォークを投げるのは勇気がいる。

(ボール気味のストレートが来るはずだ! ……よし! ビンゴ!)

外角高めに外れたストレートを無理やり流し打ちする。

ボールは右中間を突き破り、転がっていく。

「よっしやー!! タイムリーツーベースだー!」

吾郎がホームに帰ってきて、1対0となった。

宇沙美はベンチに座りながらイライラしたように腕を組んでいた。

その様子を見て、球太は更に動揺してしまう。

ノーアウト二塁でバッターは6番の夏目である。

球太は動揺から抜け出せず、フォアボールにしてしまう。

続く7番の田辺もフォアボールにしてしまい、さらに動揺してしまう。

「何をやってるんだ球太! こんな相手に動揺するなんて恥を知れ!」

(ちっ。やっぱり気に入らねーな、あのおっさん)

吾郎と大地は同じことを同じタイミングで思っていた。

野球を楽しむみたいと思っている2人にとって、自分の思う通りにしようとする大人が

嫌いなのだ。

2人の考えはこうであれ、試合は進んでいく。

ノーアウト満塁の状態で、8番の沢村が打席に入る。

(フォークボールか……たしかにあれだけ縦に変化する球をまともに振ったところで当

たるわけないよな……)

球太が振りかぶって、フォークボールを投げる。

大地と吾郎以外には打たれないという絶対的な自信があったからだ。

しかし、球太がボールを投げた瞬間、沢村はバットを縦にしながらバントの構えをした。

「な……なんだあの構えは!？」

(理屈なら縦に変化するものには——縦で受けたほうが絶対当たりやすいはずだ!)

ボールはバットに当たり、ピッチャーとファーストの間に転がる。

球太とファーストが追っていくが、そこで宇沙美が声を上げる。

「邪魔をするなファースト! 球太に任せろ!」

「えっ!？」

自分自身で捕球しようと突っ込んでいたファースト。

宇沙美の声で立ち止まろうとしたが、上手く止まれずに球太とぶつかってしまった。

ボールは球太のグラブに当たったあと、ファースト側にある戸塚西リトルのベンチの方へ転がっていく。

「よっしゃ! 走れ走れ!」

大地がホームに帰ってきたあと、夏目も帰ってきて3対0と点差が広がる。

田辺は三塁へ行き、沢村は二塁へ行った。

戸塚西リトルのベンチでは、控えの選手がぼそつと言った言葉に宇沙美がさらに機嫌

を悪くする。

「……ファーストに任せてりやアウトだったのかもしれないのにな」

「ぬううう！ 球太！ 何というたるんだプレーだ！ このバカモノが!!」

ノーアウト二、三塁で9番の清水の打席に回っていくる。

そこで大地ではなく、吾郎が清水に駆け寄る。

「清水！ 真似だけでいいから、さつき沢村がやった縦のバントをもう一回やってみろ」

「ええ!? 私にもあれをやれって言うの!?!」

「真似だけだよ！ 追い込まれるまではバットを引いて揺さぶるんだ！ あれだけ動揺してればフォアボールも期待できる！」

清水は吾郎の言葉を聞いたあとに大地をちらつと見る。

大地は清水と目が合うと軽く頷き、口パクで「頑張れ！」と言う。

それであればと吾郎の言葉を信じて打席に向かうのであった。

案の定、球太は動揺しており、縦のバントの構えをする清水に対してストライクゾーンにボールを投げる事ができない。

そしてフォアボールにしてしまい、再度満塁となるのであった。

1番長谷川も同様の戦法（無バント）でフォアボールとなり、押し出して4対0となる。

「球太！ あんな子供だましのバント攻めで動揺するなんて二流のピッチャーだぞ！」

しっかりしろ！」

「……俺たちや子供だつての」

宇沙美の叱責に対して、沢村が独り言のようにツツコミを入れる。

球太は深呼吸をするが、動揺を隠せてはいなかった。

そして2番の前原の打順となる。

「よっしやーい！」

前原は最初からバントの構えをしていて、球太を挑発する。

球太は惑わされないようにボールを握るが、この回ずつとフォークを投げていたため、フォークを投げるだけの握力が無くなっていた。

我慢をして無理やり投げるが、やはり上手くボールを握ることができず、前原の頭に当ててデッドボールとなる。

そしてまたしても押し出しで5対0となった。

「前原、大丈夫か!？」

「うーん……はっ! ……僕は誰? ……ここはどこ?」

「大丈夫だ。ちゃんといつもものつまらんギャグが出てる」

心配して控えの鶴田がベンチから出てきたが、前原がギャグで返したため、押し出しで帰ってきた沢村がツツコミを入れる。

しかしその和やかな空気は、1つの大きな音によつて吹き飛ばされるのであった。

第四十三話

パアンと大きな音が響き、全員がマウンドを見て絶句した。

宇沙美が球太の頬を思い切り叩いていたのであった。

「なんだそのザマは！ そんなピッチングをしてて、来年の横浜シニアに合格すると思っているのか！ ……もういい！ ピッチャー交代だ！」

その言葉に球太が必死になって追いつがる。

「ま……待つて父さん！ つ、次は必ず抑えるから……僕を見放さないで！」

「本当だな？ ……これ以上がっかりさせたらもう知らんからな」

「は…… はい！」

宇沙美が交代させないという判断をしたことに球太は安心した顔をする。

しかし、その光景を周りは苦々しい顔で見ている。

吾郎もその1人であった。

（ふーん、どうりで笑顔の1つも見せないはずだ…親父の言いなりで野球やらされて、楽しいわけ無いじゃん）

吾郎はネクストバッターズサークルで球太と宇沙美を観察していた。

そして、打席には3番の小森が入る。

「小森い！ ホームランで突き放せー！」

「かっとばせー！ こっもつり！」

応援を背に受けて小森が構える。

球太は改めて深呼吸をしたあと、振りかぶって投げる。

フォークボールが決まり、ワンストライクとなる。

「ストライク！」

「ああ！ 殴られてあいつ立ち直った！ こりや、だめだあ〜！」

（そうだ！ それでいい！）

前原が一塁で頭を抱えているときに、宇沙美は球太のピッチングを見て頷いていた。

球太はフォークボールが落ちたことで宇沙美の期待に答えられると思い、薄く笑う。

（見ててよ、父さん！ 僕は負けない！ 父さんに教わったこのフォークボールで……

一緒に未来を掴むんだ！）

2球目もフォークボールを投げたところで、狙っていたかのように小森がバットを振り切る。

ボールは三塁線を強い打球で転がっていき、清水、長谷川、前原とホームに帰ってくる。

小森は二塁で止まり、走者一掃のタイムリーツーベースとなった。

「よっしゃー！ これで8点目！」

「すげーぞ小森い！ あのフォークを小森が打ちやがった！」

三船リトルが盛り上がる中、球太はマウンドで膝をついてうなだれていた。

「う……打たれた。僕のフォークが落ちなかった」

「宇沙美……」

球太のベストのフォークボールが打てたのではなく、変化量があまりなかったため小森も打つことが出来たというのが正確だった。

しかし結果として打てているので、そのことに気付いていた安藤、大地、吾郎は何も言わなかった。

「ええい！ みつともない！ 立たんか球太！」

球太は宇沙美の怒鳴り声に顔を上げる。

「交代なんかさせんぞ！ 自分で蒔いた種は自分で刈り取れ！」

「は……はい……」

そして4番の吾郎が打席に入る。

ここで宇沙美が指示を出す。

「こいつは敬遠だ、球太！ こいつと5番を敬遠して、6番の雑魚を打ち取ればいい！」

「なにいい!？」

「8点差で敬遠……? そんなことをする意味はあるのか?」

安藤は疑問を持つていたが、ほぼ勝利は揺るがないので何も言わなかった。

球太は指示に従って敬遠をする。

吾郎はその様子を見て、イライラがピークに達した。

「けっ! 超つまんねー野郎だぜ! そんなに親父の言いなりで野球やっっておもしれーのか!？」

「な……何……!？」

「ムカつくんだよ! 親のご機嫌取るために野球やりやがって! お前一体誰のために

野球やっつてんだよ!」

突然の吾郎の暴言に三船リトルだけではなく、戸塚西リトルのメンバーも困惑する。

宇沙美はすぐに反論する。

「お、おい審判! 注意しろ! 選手としてあるまじき中傷、挑発だ!」

「こ、こら! やめなさい! スポーツマンシップに反する言動だぞ!」

「……そうかなあ? 試合中に点を取られた息子を殴るヤツのほうが、俺はよっぽどスポーツマンシップに反していると思うけどね」

吾郎が審判に注意されても声の音量を抑えることなく反論する。

大地は止めようか悩んだが、笑って見守ることにした。

これは必要なことだと思つたのと、大地自身が思つているのと全く同じだったからだ。

「うるさい！ 貴様に何が分かる！ たとえ才能に恵まれていても、お前のような夢も計画性もないやつは結局くだらん人生を送るんだ！」

「……まあいいや。あんたら親子の人生なんかどーだつて。そうやっていつまでも親父の野球ロボットをやつてりゃいいさ。」

でもどんなに高性能なプロ野球ロボットになれたとしても……仲間と励まし合つたり喜びあえたりできないなら——俺はその方が百万倍くだらない人生だと思うね」

吾郎の言葉に球太はハンマーで叩かれたかのような衝撃を受けた。

宇沙美が吾郎を退場にしろと言つているが、審判は無視をしてプレイ続行を指示する。

「い、言いなり……ご機嫌を取るため……」

「どうした球太！ 早く敬遠をしろ！ わしの言う通りにやつていればお前は勝てるんだ！」

（ち……違う。ぼ、僕は父さんの野球ロボットなんかじゃない!!）

球太は振りかぶり、渾身のストレートを投げ込む。

吾郎は待つていたとばかりにバットを振るが、ボールの勢いが勝つていたのか前に飛ばすことが出来ずファールとなる。

手のしびれを感じ、嬉しそうな顔をする吾郎。その様子を見て球太も嬉しそうな顔をする。

「ぬぐぐ…… ピッチャー交代だ！ 失せろ球太！ わしの言うことを聞けんやつに用はない！」

宇沙美がピッチャー交代を進言しながらマウンドに歩いてくる。

球太は宇沙美の怒り顔に怯えながらも何かを言おうとするが、

「何も聞く必要はない。下がれ！ お前にもう用はない！」

「ぼ、僕抑えるよ！ フォークはダメだけど、真っ直ぐでも十分あいつを抑えられるよ！」

「そんなことはどうでもいい！ わしはやつを敬遠しろと言ったはずだ！」

監督の指示に従えんやつを使うわけにはいかんね！ おい審判……ピッチャーとサードを交代だ！ 松岡！ サードに入れ！」

「は、はい！」

「と、父さん！」

球太の声を無視してベンチの戻ろうとする宇沙美。

サードが呆然としている球太に声を掛ける。

「う……………宇沙美……………」

「い……………嫌だ」

「何？」

球太の反抗的な声に後ろを振り返る宇沙美。

球太が宇沙美のところまで歩いていく。

「ぼ、僕はずっと父さんの言うとおりにしてきた……………サッカーもダメ。ゲームや漫画も野球のものだけ……………」

学校の友達と仲良くするのも禁じられて、いつも僕は父さんと野球するだけ。

リトルですら一人だけ^{ひいき}贖^{ひいき}されて、僕はチームの誰とも親しくなかなれない……………」

「ふん、それがどうした！ そんな犠牲は当たり前だ！ それらと引き換えにお前はもっと大きな勝利を手にするんだ!!」

「でも僕だつてもっと楽しく野球をやりたいんだ！ 一人ぼっちじゃなく、チームのみんなと泣いたり笑ったりしながらみんな勝利を手にしたんだよ！」

泣きながら宇沙美に必死に訴える球太。

その言葉を反抗と受け取ったのか、宇沙美の顔はどんどん険しくなる。

しかし、球太の言葉は止まらない。

「僕は本田君と三船リトルの人達に教えられたんだ！」

そして……今の本田君の打席で、僕は野球をやって初めて心の通った素晴らしい真剣勝負が出来ると思ってたんだ！

変化球なんか使わないでも……。だから代えないで！

敬遠する作戦も分かるけど……。僕に野球の本当の楽しさを体験させてよ!!」

精一杯の球太の叫び。これは心から出た、初めて父親へ伝える本心でもあった。

しかし、その言葉は宇沙美へは届かない。

全員の前で恥をかかされたと思った宇沙美は真つ赤になりながら球太に迫る。

「た、たわけたことを……。!! 何がみんなと楽しくだ！ 何が心の通った勝負だ！」

マウンドでは誰しも孤独なんだよ！ その恐怖に打ち勝てる精神力を身につけるために、わしは友情ごっこを否定しているんだ！

まだわしが甘かったよ！ その辺をもっと厳しく叩き込まなきゃ分からんらしいな、このバカ息子は!!」

宇沙美は右手を振りかざし、球太を殴ろうとする。球太はまた殴られると思い、目を瞑る。

しかし、いつまでも殴られないので目を薄つすらと開くと、そこには右腕を2本のバットに抑えられて動けなくなっている宇沙美がいた。

そして、バットで宇沙美の腕を抑えている吾郎と大地の姿があった。

「よせよ、もういいだろ！ その辺にしとかねーと、しまいにや俺もみんなもブチ切れるぞー！」

「な……何!?!」

「あなたは怒りで周りが見えていないようですね。全体を見回してみてください！」

吾郎と大地の言葉で周りを見渡す宇沙美。

そこには呆れた顔をした審判、今にも飛びかかりそうな三船リトルと戸塚西リトルの子ども達。

そして、立ち上がりながらヤジを飛ばし続けて、全体の雰囲気が悪くなっている観客席の姿があった。

宇沙美はその様子を見て、困惑し始めた。

審判はため息をつく、宇沙美に交代は認められないのでベンチに戻るよう促す。

「何だあんた……! 審判が自分勝手にそんなジャツジをして良いのか!?! それで負けたらどうしてくれるんだ!」

「勝ち負けではない! リトルリーグの理念は、健全で礼儀正しい子供を育て、野球を通じてチームワークとフェアプレーの精神を授けることを基本としているんです!」

あなたの言動がそれにふさわしいですか!?! スパルタは自由ですが、あなたのはただ

の恐怖政治でしょう！」

何も言い返せずに立ち尽くす宇沙美。

審判が選手にこの状態のまま試合再開するので元の守備位置に戻るよう促す。

宇沙美はずっとその場にいるわけにもいかないの、うつむきながらベンチに戻る。

「へえ……リトルってそんな目的があつたんだ……なーんかおじさんにかっこいいところ持っていかれちゃったな」

「他人事じゃないよ。君は少し礼儀を学びなさい！」

審判に軽口を叩く吾郎を注意する審判。

大地はその様子を見て、苦笑いするのであった。

第四十四話

(父さん……)

試合は再開されたが、ベンチの椅子に座ったまま、うなだれている宇沙美を見る球太。すると、野手から球太に声が掛かる。

「宇沙美！ 大丈夫だ！ お前なら抑えられるぞ！」

「頑張れ宇沙美！ 俺たちは上手くないけど、どんな打球も身体で止めてみせるさ！」

「み……みんな……」

ノーアウト二塁、カウントがワンボール、ワンストライクで試合が再開される。

(こんな……こんな気持ち初めてだ……)

球太は涙が流れるのをうつむきながら隠す。

三船リトルのベンチでは、安藤が椅子に立ってかけられた茂治の写真を見ていた。

(私自身、苦い経験があるが、あなたのような素晴らしい父親を持った彼らにしてみれば……きつと球太君のことが放っておけなかつたんでしような……)

宇沙美は球太の言葉をベンチで座りながら思い出していた。

あそこまで明確な反抗をされたことがなく、自分の意志をそこまで主張されたことは

なかつたからだ。

(違う……違うんだ球太！ 楽しく野球をやりたい そんな平凡な欲求は今のうちに捨てておかなきゃいかなのだ！)

これから先、その優しさはいつか必ず仇になる！ 情を捨て、もつとシビアに冷静に、自分をコントロール出来た者だけが人生の勝者となるのだ！)

「ストライクツー！」

「「な、なにい!?!」」

審判と三船リトルのメンバーの声で顔を上げる宇沙美。

そこには吾郎をストレートで空振りに行っている球太の姿があった。

(速いな……それ以上にストレートに強い吾郎を空振りにするなんて、なんて気持ちがかもつた球を投げるんだよ……)

「……まいったね、こりや。下手に挑発なんかしないで、大人しく敬遠されておきや良かったかなあ？」

大地は吾郎が空振りしたことに驚き、吾郎自身もまさかここまで吹っ切れた状態のストレートを球太が投げてくるとは思っていなかったため、挑発したことを後悔していた。

逆に戸塚西リトル側は非常に盛り上がった。野手が球太に声を掛け、励まし、

チーム一丸となろうとしていた。

(父さん……僕は負けないよ！ 何も犠牲にしなくても勝てるんだ！ 誰からも祝福されない栄光なんて、本物の栄光じゃない！)

球太の球は更に勢いを増していた。

吾郎はバットを振るが三船リトルベンチ側に打ち上げてしまい、あわやサードフライになりそうだった。

「うひ〜！ あぶねえ〜！」と顔を青くしている吾郎を見て、宇沙美は不思議な気持ちでいっぱいだった。

(なぜだ……データ上ではストレートに強い本田なのに、完全に押されている……)

こんなに力のある球を投げる球太は今まで見たことがない！ 一体どういうわけなんだ!?)

宇沙美は今まで理解が出来ていなかった。データ以上の結果を出す子供たちの潜在能力に。

そして、一試合ごとに成長していく子供たちの可能性に。

だが、チームメイトに声を掛けられて力を増している球太を見て、ようやく気付き始めていた。

(ま……まさかそんなものが……？ あの子の眠っていた力をも引き出したというのか

!?)

(みんなが僕に力を与えてくれる……！ もう父さんを喜ばせるためだけじゃない！

僕は僕自身のために——この勝負に勝つ!!!)

球太は自身の持つ全てを賭けて、全力のストレートを投げた。

それは真ん中高めの絶好球ではあったが、野球を始めてから自身最高のストレートだった。

これなら誰にも打てないとそう確信した球太。

しかし——

大きな打球音とともに、吾郎はそのストレートをバックスクリーンに叩き込んだ。

それはリトルリーグ用に作られたホームラン用のフェンス越えただけではなく、得点ボードに当てたのだ。

吾郎はバットを置いて、静かにベースを回っていく。そして、ホームベースを踏んだ先で、

「ナイスバツティング、吾郎」

「……おう」

吾郎と大地はハイタッチを交わしたのであった。

その瞬間、球場全体が最高潮に盛り上がり、歓声が舞い上がった。

三船リトル側のベンチからも選手が出てきて、吾郎を出迎える。

「う……宇沙美……」

バックスクリーンを見て呆然としている球太に、サードを守っている松岡が後ろから声を掛ける。

すると球太は後ろを振り返り、舌を軽く出して笑った。

「ごめん……打たれちゃった……」

その様子を見て、他のチームメイトも声を掛ける。

10対0でもまだ試合が終わったわけではない。これから逆転してやろうという気持ちが高まっていく。

そして、ノーアウトランナー無しで大地の打席が回ってくる。

（そうだ。まだ終わっていない！ これから3人を抑えて、逆転すればいいだけの話だ！）

球太に力がみなぎっていく。

決してフオークボールを投げられるようなベストの状態ではないが、ストレートでの勝負なら今度は勝つと言わんばかりの顔つきをしていた。

大地は警戒しながらも、バットを構える。

そして球太が再度投げた渾身のストレートを————大地は一振りでもレフトスタンドに運んでいった。

吾郎と同じく静かにベースを一周回って、ホームに帰ってくる。

ベンチ前には吾郎が待っていた。

「あの球をあんな打ち方されたら、手こずっていた俺が格好悪いじゃんかよ。……ナイ
スバツティング」

「……ああ」

2人は笑顔でハイタッチをした。

そして先程の吾郎のときと負けなくらい大きな歓声が球場内を包んだ。

「な、なんだあいつら!？」

「三船リトル……ついに強豪チームとして復活だな！」

さすがの球太も2連発でホームランを打たれるとは思っていなかったが、自然と笑みが溢れていた。

吾郎と大地のホームランを引きずることなく、6番以降をストレートでねじ伏せる球太。

しかし——

「ストライク！ バッターアウト！ ゲームセット！」

大地が打者3人を抑え、試合終了となった。

結果は1ー1対0で三船リトルのコールド勝ちであった。

試合終了の挨拶の後に宇沙美と球太が会話をしていた。

「自業自得だ」

「……ごめんなさい」

「……もういい。早く着替えろ。風邪を引くぞ」

「……と、父さん！ 僕、本当に野球をやっていてよかったよ！ ありがとう、父さん

……。僕に野球を教えてくれて……」

宇沙美は球太の言葉にハツとした。

そして目に涙を浮かべたが、誰にもバレないように拭い去る。

「持ち上げてもダメだぞ！ 監督命令に逆らったんだからな！ これから……みんな飯でも食いながら大反省会だ！ ……わしも含めてな……」

「……はいっ!!」

大地達は次対戦するときにはもつと手強くなっているであろう戸塚西リトルに負けなように、もつと練習しようとして心に誓うのであった。

◇◇◇◇◇

「今日もやったわね！ 2試合連続でワールド勝ちだなんてすごいじゃない！ しかも2人ともノーヒットで抑えたんでしょ!？」

「とりあえずもう疲れたから先に風呂入りたいよー。大地、俺先に入るね」

「あ、吾郎、ずりーぞー!」

その時、電話が鳴り、桃子が電話に出る。

「大地ー！ 安藤さんからお電話よー!」

「え、分かったー！ 吾郎！ 俺も入るから、先に身体とか洗っておけよ！」

大地がユニフォームのまま、電話に出る。

「はい、大地です」

「あ、大地君かい？」

「はい、どうしましたか？」

「じ、実はね……3回戦の相手が決まったんだよ！」

「もしかして……横浜リトルですか……？」

「え、な、なんで分かったんだい!？」

「あまりにも慌てていたので、多分そうかなと」

大地は原作知識があったので、次の対戦相手が横浜リトルであるそうなるであろうことは分かっていた。

だから慌てずに受け入れることが出来ていた。

電話後に風呂に先に入っていた吾郎に横浜リトルが次の対戦相手だということを伝えたところ、初めは驚いていたがすぐに笑いながら話を受け入れていた。

「へっ！ ちようどいいじゃん！ こつちも全力全開で戦えるし、相手にとって不足はないぜ！」

「だな！ 次の先発は吾郎だからね。……まあ打たれても俺が点を取るから安心してよ」

「よし！ 絶対に勝とうぜ！」

2人はお風呂に入りながら、桃子に怒られるまで横浜リトル対策について話し合っていたのであった。

第四十五話

大地と吾郎が風呂を出て、夕食を食べたあとに電話が鳴る。

桃子は少し気分を弾ませながら電話を取る。

大地はその姿を見て、バットとグローブを持って吾郎に声を掛ける。

「ご、吾郎。これから外で野球でもしないかい？」

「はあ!? 何言ってるんだよ。今外だとボール見えないうら! やるなら素振りだけだ、素振りだけ!」

決して暗いから野球の練習をしたくないとは言わない吾郎。

その言葉に感謝しつつ、桃子に気付かれないようにそつと部屋を出ようとしたところで、大地の肩に手が乗る感触があった。

「だ・い・ちゅ 彼女から電話なのにごどこに行こうっていうのかしらあ?」

「あ、いや、その……素振りに行きたいなって思ってた……」

「何言ってるのよ。涼子ちゃんから電話きてるんだから、ちゃんと出ないとダメでしょ!」

満面の笑みで大地の顔を見ている桃子。

大地はため息を吐くと、「分かったよ……」と言って電話に出る。

「はい。大地です」

「あ、大地君？ 涼子です」

「うん。涼子ちゃん、どうしたの？」

「えつとね……今日の試合お疲れさま！ そしておめでとう！」

「ああ、ありがとね。涼子ちゃん達はシードの初戦で勝つたみたいだね」

「うん……それでね——」

涼子は大地と今日の試合についての内容についてお互いに話していた。

大地が先発で勝利したことを伝えると、自分のことのように喜んでくれたことは大地にとって少し恥ずかしさもあつた。

涼子も最終回だけ投げたということだった。

「そうなんだね……次は……俺達の対戦だね」

「うん……お互いに負けないように死力を尽くしましょうね！」

「そうだね！」

涼子がいいつも野球関係のこういつた電話を掛けてきてくれるのであれば、大地としてもやぶさかではないだ。

だが、それだけでは終わらない——というよりも、いつも野球の話はあまり出ない——

―のが涼子との電話だった。

「あの……それでね……」

「うん、どうしたの?」

「来週の水曜日、祝日で学校休みでしょ? ……よかつたらどこかに遊びに行かないかなあ〜って」

野球漬けの毎日で、しかも来週横浜リトルと対戦があるからこそその貴重な祝日練習時間なのが、涼子は練習後でいいから遊びに行きたいと大地を誘ってきた。

大地は断ろうかなと思っていた。来週の対戦相手と遊ぶというのは、あまり良いとは思えなく、なるべく練習の時間を取りたいとも思っている。

少しの間があつたため、断られると思つた涼子が慌てて言葉を追加してきた。

「あ、あの、えつと……そう! バッティングセンターとかキャッチボールとか野球するなら……来週の対戦相手でもまだ大丈夫でしょ? ……だめ……かなあ?」

（まあ……それなら断る理由もないか。バッティングセンターにもちようど行こうと思つてたし）

大地は涼子に了承の返事をする。

電話越しに大きな声で「え!? 本当に!? やつたあああ!!」と聞こえ、思わず受話器を耳から離す大地。

そして待ち合わせ時間と場所を決めたところで、桃子から爆弾発言が飛んできた。

「あら、涼子ちゃんと遊びに行くなら、うちに誘ってもいいからね♪」

「えっ!?!」

その場にいた大地はびっくりして振り向き、受話器越しの涼子も驚きの声を上げる。

桃子の声は涼子に聞こえており、まさかそうなると思っていなかったのでも驚いていたのであった。

「ちよ、か、母さん！ 勝手なこと言わないでってー!」

「別に良いじゃないのよ。私も大地の彼女に会ってみたかったしー!」

「だ、大地君の……か、彼女……」

涼子は同じ言葉を繰り返したままそのまま固まってしまい、大地が声を掛けても反応を全くしなかった。

5分ほど声を掛け続けて、ようやく正気に戻った涼子。

大地は心の中でため息を吐きつつ、涼子との電話を終えたのであった。



そして水曜日の祝日。

三船リトルは午前中だけグラウンドを使って練習したあと、解散した。

そのときに今週末の三回戦が横浜リトルだと聞いて、五年生は初めだけ落胆していたが、そのあとすぐに勝つ気満々の発言が出たので大地は安心していた。

大地は一旦家に帰り、お昼を食べて待ち合わせ場所に向かう。

「大地君！ お待たせ！」

「ううん、俺も今来たところだよ」

涼子小学六年生の女の子相手にデートで使うフリーズベスト10に入りそうなセリフを使ったことに、大地は少し落ち込む。

だが、今は自分も小学生なんだと言い聞かせて、頭を切り替えることにした。

バッティングセンターではお互いを見つても自由に打つ。

ただ、涼子はピッチングを中心にやってきたせいか、あまり打つほうが得意ではなさそうだったのでアドバイスをする大地。

「そうそう。コンパクトにスイングすればボールは打ちやすくなると思うよ」

「あ、本当だ！」

涼子は筋がとても良く、大地も教えていて楽しかった。

あとで、次の対戦相手だということを思い出して反省するが、野球好きな人に教えたことに後悔はしていない大地だった。

そしてバッティングセンターのあとは、近くのファストフードのお店に入ってポテトやハンバーガーを食べながら話をする。

「やっぱりバッティングセンターは気持ちいいね！ ストレス発散にもなるし！」
「そうだね。やっぱり野球って楽しいなあ……」

お互いに楽しく野球談義をしていると、時間が経つのは早い。

夕方になってきたので、そろそろ帰ろうかなと大地が思っていると、

「あの……今日って大地君の家に行ってもいいの……？」

思わず飲んでいたコーラを吹き出しそうになるが、必死に我慢した大地。

桃子のいたずらを本気にしていた涼子は期待を込めた顔をしている。

「えっと……ほら！ 涼子ちゃんのご両親も心配するし！」

「うちの両親は大丈夫よ。……むしろ大地君を連れてこいって言ってたくらいだし」

小さな声だったため、後半の言葉が聞こえていなかったが、向涼こ子うの親も許可出しているというところに更に慌てる大地。

「……ねえ……だめ？」と上目遣いで言われてしまったら、さすがの大地も断ることが出来なかった。

そして2人でお店を出て、大地の家に行くのであった。



「ただいま」

「お、お邪魔します……」

少し緊張した涼子の声を聞いた途端、奥の方から2つの足音が響いてきた。

さすがに本当に家に来るとは思っていなかったので、桃子も吾郎も驚いていた。

「り、涼子ちゃん!?! 本当に来たんだ!?!」

「あなたが涼子ちゃんね! 大地と吾郎の母です。よろしくね♪」

「ささ、上がって!」と言いつつ、涼子を部屋に通す桃子。

その勢いに涼子も驚きながらも、大人しくついて行く。

リビングに座ると、すぐにお茶が出てきたため、涼子は緊張を紛らわせるために一口

飲む。

そして部屋の周りを見渡すと、野球用品などがたくさん置いてあった。

「す、すごいね……」

「ああ、俺らで使う物もあるんだけど、おとさん……父親が使っていたものとかも置いて

あるんだよね」

「お父さんが……使っていたの?」

「そう。3年前までプロの選手だったんだけどね。ほら、そつちでも話題になつてたと思うんだ。ギブソンのデッドボールで死んじやつた日本人選手がいたつて……それうちの父親なんだよ」

「……え？」

涼子は大地のカミングアウトに驚いて言葉を失う。

自分が尊敬していた選手がデッドボールで日本人選手を死に追いやつたということは知っていた。

ただ、それに対して涼子は避けられなかつた相手が悪いと思つていたので。

その選手の子供がまさか大地だとは思つておらず、今回の件を聞いて驚く。

更に桃子は血の繋がつた母親ではなく、実の母親も大地達が小さい頃に亡くなつてたことを聞き、更にショックを受けた。

（わ、私……何も知らないのに……大地君のお父さんが亡くなつたのは本人が悪いつて一方的に思つていたなんて……）

涼子は自分でも気付かずに涙を流していた。

その泣いている姿を見て、その場にいた大地と吾郎は混乱し、大慌てになる。

2人の声で桃子もすぐにやってきて、涼子が泣き止むまで背中をさすつてあげてた。

少しの間泣いていた涼子だったが、落ち着くと桃子達に「ごめんなさい」と謝り、先程まで思っていたことを語りだした。

話を真剣に聞いていた三人だったが、涼子が話し終わると口々に話し出す。

「涼子ちゃん……話してくれてありがとう。あなたは本当に優しい子なのね」

「気にしなくて大丈夫だよ！俺らだって初めはギブソンに対して思うところはあったけど……あれは事故なんだからもう分かっていることだからさ」

「そうだね」

吾郎が話したいことを話してくれたので、大地は同調するだけだった。

そして涼子がここで素直に話してくれると思っていなかったのが、大地としてもとても嬉しかった。

「怒って……ないんですか……？」

「私も大地も吾郎も怒ったりはしないわよ。むしろこれからも大地と仲良くしてあげてほしいわ」

「……って母さん！なんでそこに俺の名前がないのさ！」

「え、だって涼子ちゃんは大地の彼女でしょ？……もしかして吾郎も好きになっちゃったのお？」

「何でそんな話になるんだよ！」

「そうだよ！ 彼女じゃな……い……じゃん……」

吾郎は桃子にからかわれてムキになり涼子は笑っていた。

しかし大地が彼女じゃないと強く否定しようとしてところで、涼子が泣きそうな顔に戻ったので小さな声でしか最後まで言えなかった。

桃子は意地悪な顔をしつつ、「あ、そうだ！ 今日夜ご飯食べていきなさいよ！」と涼子を誘う。

そして女同士の話があるからと、強引に涼子を夕飯の手伝いに連れて行ってしまった。

「……なんか……大変なことになってるな……」

「お、おう。どうしようか……」

気まずい状況になった吾郎と大地だったが、なんとか夕食を乗り切り、桃子の指示で家まで大地が送っていくことになった。

帰りは大地のフォローもあり、そこまで気まずくならず自然に話すことが出来た2人。

それでもお互いに意識せずにはいられなかった日でもあったので、ぎこちなさはあった。

涼子の家に着き、「お礼に家に上がって行って」と大地を家に招待しようとする涼子

だったが、さすがに明日は学校があるからと断る大地。

少し残念そうだったが、涼子は納得して諦めることにした。

帰ろうとした大地が駅に向かって歩き始めたとき、涼子に名前を呼ばれる。

振り向いた瞬間、左の頬に何か当たった感触があった。

そしてすぐそばには涼子の顔があり、大地は何があったかを察する。

「今日はありがとう」

そう言いながら家に入っていく涼子。

大地は左頬に手を当てて、しばらく佇んでいたのであった。

第四十六話

「さてと……みんな忘れ物はないな？」

「ないない。早く行こーよ」

横浜リトル戦当日。全員はバスに乗り込み、安藤スポーツ用品店の前にいた。

日曜日の集客できる日に、本日休業”の張り紙を貼り、シャッターを閉める安藤。

そして、安藤が大きな籠2個分に入った硬球を持つようとして――

「監督、それ重いからみんなで持ちますよ」

大地は安藤が持つようとするのを止めた。

「元高校球児のわしにとつたらなんてことない」と強がっていたのだが、原作でぎつくり腰になってしまうというハプニングがあったのでそこだけは防ごう動いていた。

そして防ぐ理由の1つとして、桃子に子供用のユニフォームを着てほしくないというのもあったのだ。

（前世ならともかく、誰が好んで母親にピチピチの服なんて着せたがるんだよ……てか誰得だよ）

結果、誰も怪我することなく試合会場に向かうことが出来ていた。



『準々決勝第一試合は、8対4で江ノ島リトルが勝ちました。このあと第二試合、横浜リトル対三船リトルの試合を行います』

アナウンスが流れ、横浜リトルの選手が守備練習のため先にグラウンドに出てくる。大地達もベンチに入って荷物を置き、グラウンドに足を踏み出す。

「で……でけえ」

「ここが……あの横浜スタジアムかあ……」

「人工芝じゃーんー！」

初めて入る横浜スタジアムのグラウンドに圧倒される三船メンバー。

そこで大地と吾郎は懐かしむように過去を思い出していた。

（おとさんとの思い出は……）

（いつも……ここだったな）

茂治の野手復帰ホームランを見たとき。

誕生日にキャッチボールしたこと。

ジョー・ギブソンとの対戦。

すべての思い出が2人の中に蘇ってくる。

その思い出の地で、茂治の出身チームである横浜リトルと対戦できる喜びを噛み締め
ていたのであった。

「よし、みんな！ 最っ高の1日にしよーぜ!!」

「!!おうつ!!」

大地の合図で全員が守備練習に入る。

全員がもう緊張することもなく、楽しみにプレーをする様子を見て、安藤も嬉しきで
いっぱいだった。

ノックが終わり、試合開始の挨拶をするために、ホームベースのところまでチームごと
に一列に並んで向き合う。

「それではこれから横浜リトルと三船リトルの試合を始めます。礼!」

「!!よろしくお願いします!!」

礼が終わると横浜リトルメンバーは先攻のためベンチに戻り、後攻の三船リトルメン
バーは守備位置に向かう。

◇◇◇◇◇

◇スターティングメンバー

1番：セカンド 長谷川

2番：レフト 前原

3番：キャッチャー 小森

4番：ピッチャー 吾郎

5番：シヨート 大地

6番：サード 夏目

7番：ファースト 田辺

8番：センター 沢村

9番：ライト 清水

控え：鶴田

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「もう大地君達と戦うとは思わなかったね。寿也君」

「うん……いい勝負が出来ると良いんだけど……そうもいかなんだろうなあ」

「……そうね。気の毒だけど。大地君と吾郎君だけだと私達には勝てないわね」

横浜リトルのベンチで涼子と寿也が話していた。

要注意人物は大地と吾郎のみで、あとは取るに足らないメンバーだと思っている。

他の横浜リトルのメンバーも、三船リトルのことを見下した発言を繰り返して笑っていた。

「おい！ 見下すのは勝つてからにしろ！ 間違つても手を抜くなよ。初回から全力で叩きのめせ！」

「「は……はい!!」」

横浜リトル監督の檉本に注意され返事をするが、内心では不満があるようだ。

監督に聞こえない声で何人かが話していた。

「まだまだ信用無いようだね、俺たち」

「オツケー。じゃあコールドゲームでもやっときゃ満足してくれるだろ」

全力で叩きのめして、力の差を檉本と三船リトルに見せつけようと意気込む横浜リトルメンバー。

そしてプレイボールの合図とともに1回の表が始まったのであった。

吾郎が振りかぶり、初球を投げる。

内角真ん中に決まり、ワンストライクとなる。

「伊達！ 見なくていいぞ！ どーせそいつにはまつすぐしかねーんだ！」

「オツケー！」

伊達は軽く返事しながら、吾郎が投げるボールを叩きつけるように振る。

しかし、ボールは伊達のバットに当たらずにキャッチャーミットに吸い込まれる。

「ストライクツー！」

「なっ……!?!」

伊達は信じられないような顔をするが、吾郎はボールを受け取りながら「へっ!」と笑い、3球目を投げる準備をする。

(ようやく形になってきたストレートを簡単に打たれて……たまるかよっ!)

吾郎は夏の合宿から練習し始めて、ようやくある程度形になってきたジャイロボールを投げ込む。

伊達はバットを振るが、ボールの下を振ってしまい空振り三振してしまう。

「だ……伊達が当てられない……だと……!?!」

「何の変哲もないストレートじゃねーか!」

伊達が三振してしまったことを信じられない様子の横浜リトルのメンバー。

樫本だけが黙って腕を組んで吾郎を見つめていた。

2番の村井、3番の江角も同じくボールに触れることもなく三振してしまう。

「な……なんなんだ……? 別に打てないスピードじゃないだろう……!?!」

「江角! どういうことだ!」

ベンチに戻ってきた江角に真島が詰め寄る。

江角は不思議そうな顔をしていた。

「い、いや……分からないんだ。ちゃんと当てたと思つて振つたんだが……ボールに当

たらないんだ……」

「ボールに当たらないだど？」

「ああ……」

少し動揺している江角だったが、守備があるため急いでグローブを持って真島を置いてグラウンドに向かっていた。

その様子を見た真島は微かに笑っていた。

（江角が……よく分からないというレベルの球か……面白いじゃねーか。次の回が楽しみだぜ）

第四十七話

「ナイスピッチ、吾郎！」

「吾郎君、ナイスボール！」

ベンチに戻った三船メンバーは、横浜リトルの守備練習を見る。

ピッチャーの江角の投球練習を見た安藤は「あゝあれが小学生の投げるカーブなのか……？」と驚いていた。

しかし三船選手全員は真剣な顔でカーブを観察しているのであった。

『一番、セカンド長谷川君』

ウグイス嬢の声とともに長谷川がバッターボックスに入る。

ピッチャーの江角が初球を投げる。

「ストライク！」

ストレートがど真ん中に入り、ワンストライク。

続いて内角低めのストレートを空振りして追い込まれる長谷川。

（ふん、お前らは所詮この程度なんだよ。コレで三振だ！）

キャッチャーの後藤がカーブを要求し、江角も頷く。

そして振りかぶってカーブを投げる――

――キイイインという音が鳴り、ライト前ヒットとなる。

「な……なにいいい!?!」

「おいおい。クリーンヒットじゃねえか」

まさかカーブを打たれるとは思っていたなかつた江角は驚き、ライトの松原もボールを捕りながら驚いていた。

長谷川は一塁ベースでガッツポーズをして喜んでいた。

「ナイスバツティング! 長谷川!」

「練習の成果が出たな!」

喜ぶ三船リトルメンバー。

実は江角のカーブ対策のために、近くにあるバツティングセンターの店長に頭を下げて左投手用のカーブの変化に変えてもらっていた。

初めはやる気がなさそうな店長だったのだが、大地の説得と全員の素振りでもろもろになつて、ワンアウト「分かったよ!」と言つて乗り気になつていたのであつた。

続く前原は無難にバントをして、1死、ランナー二塁にるい。

3番の小森が打席に入る。

「小森ー!! 続けー!!」

江角はイライラを抑えつつも初球カーブを投げる。

小森はそれを待っていたかのように引きつけてバットを振る。

ボールはセンター前に転がっていき、ランナー一、三塁いち、さんるいとなった。

「絶好のチャンスだぞ! 吾郎! 打てよ!!!」

「タイムお願いします」

後藤がタイムを取り、江角のところに向かう。

「だ、大丈夫か!」

「あつ? いちいち来るんじゃないよ! この程度大丈夫だ!」

江角に凄まれてビビってしまった後藤はそのままホームベースに戻っていく。

(……ちつ。俺のカーブが打たれるはずなんだ!)

江角はカーブを打たれたことをまぐれだと思っており、自分の得意球カーブは絶対に打たれるはずがないんだと吾郎への初球もカーブを投げる。

吾郎はあまり力を入れずにカーブを流し打ちする。

「ライト!」

ライトにボールが飛んでいき、三塁ランナーの長谷川はタッチアップの準備をする。

松原が必死にボールを追いかけていき、捕れると思った瞬間、ホームラン用のフェンスにぶつかってしまふ。

そしてボールはそのままフェンスを越えていくのであった。

「松原!!」

「大丈夫か!?!」

センターの関とセカンドの村井が声を掛ける。

松原はその声に応えるかのように立ち上がる。

関と村井は松原が大丈夫そうなのを見て安心するが、これで3点先制されてしまったことに悔しげな顔をする。

「そ、そんな……俺の……俺のカーブが……。30イニング連続無失点のこの俺が……」
江角はライト方面を見ながらがつくりと膝をつく。

吾郎はゆっくりとベースを一周して、ホームベースのところまで大地とハイタッチを交わすのであった。

『5番、ショート本田大地君』

続いて大地が打席に入る。

ここで通常ならキャッチャーである後藤が江角に声を掛けなくてはいけない場面だ。しかし、先程怒鳴られたことで萎縮してしまい、タイムを取り損ねてしまった。

それは動揺している江角にとっても致命的であり、サインを見ずに得意球^{カーブ}を投げてしまふ。

大地はその初球を思いつき振り切る。

カキインと大きな音とともに左中間を真つ二つに割るツーベースヒットとなった。

「よっしやー！！」

「ナイスバツティングー！！」

大地が二塁ベース上に着いたところで、樫本が動き出す。

「お前らの出番だ。用意しろ」

「っスー！」

「は、はいっ！」

『横浜リトル、選手の交代をお知らせします。ピッチャー江角君に代わりまして菊地君。キャッチャー後藤君に代わりまして佐藤君』

「なっ！！」

江角と後藤はここで代えられると思っていなかったのか、驚きの表情で樫本の方を見る。

特に後藤に関しては、なぜ自分が代えられなくてはいけないのか分からずに不満を顔

に出していた。

ベンチに戻った2人は江角と後藤榎本に詰め寄っていた。

「か、監督!! なぜ交代なんですか!? 俺はまだやれます!」

「そうです! しかも4年の佐藤を公式戦に出すなんてまだ早すぎます!」

榎本はサングラス越しでも分かるくらい冷たい目をしていた。

そして、更に冷たい口調で話していく。

「お前ら。本気で言っているのか? 江角。俺は全力で叩きのめせと言ったんだ。何だ

あのボールは?」

「だ、だから俺は得意のカーブで……」

「カーブしか投げないピッチャーなんぞ、いくらキレが良くても使い物にはならん。キャッチャーの指示に従えないようならいる意味がない。」

後藤、お前もだ。なぜ本田吾郎にホームランを打たれたときに江角のところへ行かなかった?」

「そ、それは……」

「適切なときに適切な判断ができないようなやつはキャッチャー失格だ。俺は年齢問わず、使えるやつを使っていく。」

榎本の言葉を聞いて、2人は何も言えずにうつむ俯いてしまったのであった。

第四十八話

「よっし!! これからまだまだ追加点狙えるぞ!!」

「夏目! 積極的に狙っていけー!!」

1死、ランナー二塁にるいで6番の夏目の打席。

マウンドでは菊地と寿也が話していた。

「ここはランナー気にせずに勝負で行きましょう」

「……ああ」

（……ちっ。年下四年生のくせに生意気なこと言いやがって）

寿也はホームベースの方に戻っていき、試合が再開される。

寿也がサインを出したとき、菊地の顔が僅かにゆがむ。

（この野郎、この俺にサインなんか出しやがって……年下のリードで投げられつかよ!!!）

菊地が寿也のサインを無視してボールを投げ込む。

夏目は反射的にバットを振るが、サードベースの左側をライナーで飛ばしファールとなる。

（え……!!? う、打てる……!!? 大地や吾郎の球をいつも見てるからなのか、めっちゃく

「ちや打ちやすいぞ！」

夏目はバットを見つめながら、菊地の球を打てるかと確信する。

寿也はその様子を見て、タイムを要求してマウンドに向かう。

「あれ？ コントロールミスですか？ 要求した球と違うんですけど……。うーん、困ったなあ……。要求したコースに投げるコントロールがないんじゃないか……。うーん、じゃあ僕監督に相談してきます。今日の菊地さんは調子が悪くてまともに投げられそうにないみたいですから」

菊地はその言葉を聞いて、「ま……。待て！」と焦って寿也を呼び止める。

「わ……。分かった。つ、次は大丈夫だ。お前のリード通り投げるから……」

「……。そうですか。じゃあちゃんと頼みますよ」

菊地の言葉にシンプルに返してホームベースに戻っていく寿也。

それをマウンドで見送る菊地は、寿也のしたたかさに対して、恐怖を感じていた。
(「………」) 可愛い顔してやるのがえげつないぜ……)

改めて試合が再開される。

菊地が第2球目をインハイに投げ込む。

夏目は急に目の前に来たボールに対して、仰け反ぞつて後ろに倒れてしまう。

「ストライク！」

「ナイスボール!!」

(え……いい、今のが入ってるの!?)

夏目はインハイギリギリに決まったボールがストライクだったことに少し混乱するが、すぐに立ち上がり構える。

寿也はその様子を見て、菊地にサインを出す。

菊地は頷くと、振りかぶり真ん中やや外角にボールを投げ込む。

夏目は思わぬ絶好級にバットを振るが、ボールが曲がり、バットが空を切る。

「ストライク! バッターアウト!!」

三振になってしまった夏目。

実はインハイに投げられたあと、腰が引けてしまい外角に対してバットがいつもよりも若干届かなくなっていたため、当てることすら出来なかった。

寿也はそこまで読んで、サインを出していたのだった。

結局7番の田辺も三振にされてしまい、チェンジとなった。

3対0で、二塁に残塁となった大地は、ベンチに戻りながら寿也のリードに対して警戒をしていた。

(寿くんにあのリードをされたら、あのレベルのピッチャー相手には何点も取れないぞ……。3点取っておいてよかった……)

2回の表。バッターは4番の真島。

3点取った三船リトルは、ただ1人を除いて盛り上がっていた。

「よっしゃー！ この回も3人で仕留めるぞー！」

沢村の声に皆が応え、声を出していく。

吾郎も勝てそうな雰囲気と同じように気持ちが高揚していた。

真島が打席に入り、構える。

吾郎がワインドアップからボールを投げ込む。

「ストライーク！」

内角に入ったボールを真島は見送る。

小森からボールを受け取った吾郎は、「へっ！」と笑いながら構える。

「そんなボールと見たままだと、打てるボールも打てねえぞ!!」

吾郎は外角にストレートを投げ込み、真島がバットを振るが空振りとなり追い込まれる。

そして、「これで止めだ！」と言いながら吾郎が投げた球を、真島がバットに当ててファールにする。

「当てやがったよ……でもな、当てるだけなら誰だって出来るんだよ!!!」

吾郎が当てられたことにムキになって、4球目を内角に投げ込む。

真島は冷静にバットを振り抜くと、大きな音が鳴りライトにボールが飛んでいく。

「ラ、ライト!!」

吾郎がライトフライだと思つて、左後ろを振り向くがボールはホームラン用のフェンスを越えていつてしまった。

静かにベースを一周する真島。

ホームベースに戻ってきたとき、吾郎の方を向いて声を掛ける。

「……確かに速い球だがな。ストレートだけしかないなら、俺だって打てるんだよ」

そしてベンチに戻っていく真島。

吾郎は真島の声を聞いて、「な、なんだとおお!」と怒りをあらわにした。

そこで小森がタイムを取り、吾郎を落ち着かせに行く。

「バ、吾郎君……落ち着いて!」

「……くそ!」

マウンドの砂を蹴り上げたところで、吾郎は誰かに頭を叩かれた。

頭を押えて後ろを向くと、そこには大地がいたのであった。

「おい、吾郎」

「な、なんだよ!!」

「何だ今のピッチングは?」

「俺だって渾身の決め球ジャイロボールが打たれてショックを受けてるんだよ!」

「……なんでスローボールを投げなかつた?」

「あ……」

大地の指摘に対して、吾郎だけではなく小森も頭になかつたような声を上げる。

いつの間にか内野手全員がマウンドに来ていた。

「お前のジャイロボールはまだ未完成だ。これから何年も掛けて習得していくものなんだから、それだけを頼る必要はないんだよ。

だつたらなおさら、スローボールと投げ分けることでソレは生きてくるんじゃないのか?」

「……………」

「小森もだ。不用意にストライクを取りに行きすぎだ。ボールを混ぜてこそキャッチャーのリードが最大限に効果を發揮するんだろ? バッテリーがそんな状態だつたら、打たれて当然だろ!!」

大地の叱責に対して、黙り込む吾郎と小森。

「みんなもだ! 相手はあの横浜リトルだぞ! 3点リードしてたくらいで勝てるな

ら苦勞はしないよ！

今は点差が無いものだと思って、気を引き締めていかなきゃだ！」

周りにも気を引き締めるように言った大地は、吾郎の胸に拳を置いて笑う。

「吾郎。みんなお前を頼りにしてるんだぜ。こんな程度で崩れたりしないよな？」

「……ああ！」

吾郎も真面目な顔をして大地を見つめる。

他の選手も大地の声を聞いて、顔つきを変えてポジションに戻っていく。

外野手もその空気を感じ取ったのか、雰囲気^{ノイアット}が少しだけ変わっていた。

「よし！ 無死^{ノーアウト}、ランナー無しだよ！ しまつていこう！」

「……おう！」

小森の掛け声で全員が声を揃えて応えて、試合が再開される。

（大地……あんがとよ。俺はどつかで横浜リトルを舐めていた……。そうだよな、全国トップのチームがそんな簡単に抑えられないよな）

真面目な顔になった吾郎は、小森のリードもありその後の5番羽生^{はぶ}を三振に抑える。

そして更に警戒すべきバッターが現れた。

第四十九話

『6番、キャッチャー佐藤君』

寿也の公式戦初打席は、吾郎との対戦となった。

大地は先程の寿也のリードを見ていたので、打席でも油断してはいけなと警戒する。

(吾郎君……悪いけど、あのストレートなら多分僕も打てるからね)

寿也が打席に入り構える。

明らかに初球を狙ってきているのが分かるので、吾郎と小森バッテリーとしては選択肢が一つしかなかった。

吾郎がワインドアップからボールを投げる。

寿也はネクストバッターズサークルでストレートのタイミングを見ていたので、そのタイミングに合わせてバットを振るが――

「ストライク!!」

バットは空を切り、その後にボールが小森のキャッチャーミットに入ってしまった。

(ス、スローボール……!?)

吾郎がスローボールを投げるといふデータは入っていなかったため、寿也は空振りしてしまふ。

驚いたのは寿也だけではない。樫本含めて横浜リトルベッチの選手全員が驚いていた。

「あ、あんなボールを投げるなんて聞いてないぞ！」

「ストリートとの速度差がありすぎてタイミングが取れないだろ！」

（スローボールか……しかもストリートとの投げ方の差も一切ない。アレは何年も磨き上げてきたもののような……）

樫本ですら、ただのスローボールなのに、その完成度に驚いていた。

大地との特訓は実を結んでおり、肩や肘に負担を掛けない球種として完成されていた。

「ストライク！ バッターアウト！」

結局、吾郎と寿也の初めての対決は、吾郎に軍配が上がった。

7番の関も三振に仕留めて、2回表が終わる。

2回裏、3回表と寿也のリード、吾郎の力押しで抑え、3回の裏になる。

2番前原と3番小森が打ち取られ、4番の吾郎の打席が回ってくる。

——しかし、ここで寿也が立ち上がる。

「け、敬遠……!?!」

2死で吾郎を敬遠したのである。

それだけ吾郎のバツティングを警戒したのではあつたが——

「また敬遠!?!」

続く大地も敬遠され、2死、ランナー一、一二塁となるのであつた。

寿也の警戒策は見事に当たり、6番の夏目を三振にしてチェンジとなつた。

(ここで吾郎と俺を敬遠してくるなんて……寿くんには油断は一切ないってことか……)

守備位置に向かいながら、寿也の方を見ていると不意に目が合ってしまった。目が合うとお互いに微妙に笑いあつたのであつた。

4回表。吾郎は2番村井と3番菊地を三振に仕留め、4番の真島の打席が回ってくる。

小森は先程の打席や、前の回の寿也の方法を考えて敬遠のサインを出す。

しかし、吾郎はそれを領かなかった。

「夕、タイム！」

小森はなかなか敬遠のサインを領かない吾郎に対して、こらえきれずマウンドに向かつていく。

「ご、吾郎君！ここはさっきの寿也君みたいに敬遠を——」

「——やだね」

「……え？」

「俺は敬遠なんてしたくない」

「で、でもまた打たれたら——」

「——いいんじゃない？」

ここで口を挟んできたのが大地であった。

小森は味方になってくれるはずだと思っていた大地が、吾郎の味方についたことに困

惑する。

「え……大地君……なんで……？」

「さっきは油断していたから怒ったけどさ。ピッチャーが勝負したいって言ってるんだし、吾郎ここは信頼してもいいと思うよ。もし打たれたらこいつのせいにしてやろうぜ」

笑いながら吾郎の肩に手を置く大地。

他の内野手も、「大丈夫だよ！ 打たれても俺らが捕るし、攻撃で俺たちが援護するさ！」と勝負に賛成した。

小森はそこまでみんなの決意が固まっているのであれば文句無いと思い、吾郎にボールを渡す。

「分かった！ こころは勝負していこう！」

「ああー！」

笑顔になった吾郎を見て、全員守備位置に戻っていく。

同じく守備位置に戻っている小森に吾郎が声を掛ける。

「小森！ ……信頼してくれてありがとうな」

「……大丈夫だよ。でもね……打たれたら僕らの責任だからね！」

「……ああ!!」

吾郎と小森は笑みを浮かべて目を合わせたあと、お互いに守備位置に戻る。

そして真島が打席に入り、試合が再開された。

(確かにあのストレートとスローボールは脅威だ……それならどちらかに絞ればいいだけの話だ！)

真島は先程ホームランを打てたストレートに的を絞って打つことに決めた。

その様子を知る由もない吾郎は、振りかぶって初球を投げる。

「ストライーク！」

初球はスローボール。真島は見逃してワンストライクとなる。

2球目。同じくスローボールで真島は追い込まれる。

（くっ！　こいつ、俺がストレイトに絞っているのに気付いたか！）

続く3球目、4球目とスローボールを投げられ、真島はなんとかカットをしてファールにする。

そして5球目。吾郎が投げた球は――

「ストライーク！　バッターアウト！　チェンジ！」

真ん中高めの渾身のストレイトジャイロボールだった。

ボール球だったのだが、真島は思わず振ってしまい、空振り三振となった。

「く、くそ!!!」

悔しがりながらバットを地面に叩きつけている真島に対し、吾郎は仲間にも囲まれながらベンチに戻っていくのであった。

第五十話

4回の裏。三船リトルの攻撃は三者凡退となりチェンジとなった。

大地はキャッチャーが寿也になってから、誰一人としてヒットを打つことが出来ていない現状に危機感を抱いていた。

そんな中——

「ボール！ フォアボール！」

吾郎は5回表の先頭打者である羽生はぶをフォアボールで出塁させてしまった。

横浜リトル相手にここまで全力投球を続けており、体力をかなり失っていたのだ。

「吾郎……大丈夫か？」

「あ、ああ！ まだまだやれるさー！」

大地は吾郎を心配して声を掛けたが、元気そうな声を上げた吾郎を見てまだ大丈夫だと判断する。

最悪自分が交代も出来るが、今後のことも考えると出来れば吾郎で乗り切りたいと考えているのであった。

そしてここで打席に入るのが、

『6番、キャッチャー佐藤君』

寿也はこれがラストチャンスだと考えていた。

ここで追いつかないのであれば絶対に勝てないと思っていた。

(このチャンス、絶対に打つてみせる！)

吾郎はセットポジションから初球ストレートを投げて寿也を空振りさせる。

疲れているが、まだまだやれるつもりで吾郎も寿也を絶対に抑えようと力が入る。

そして2球目、小森のサインを見ている吾郎の右手に汗が落ちていくのを大地は見

しまった。

(……あっ!!)

大地は吾郎に声を掛けようとしたが、投げる体勢に入ってしまったため声を掛けそびれてしまう。

そして吾郎がボールをリリースした瞬間。

「なっ!!」

吾郎の手が汗で滑り、ど真ん中に絶好球が投げられた。

寿也がそれを見逃すはずがなく――

寿也によって打たれたボールはレフトのホームラン用のフェンスを越えていき、2ランホームランとなってしまおうのであった。

寿也と横浜リトルの選手は土壇場で3対3と追いついたことに大きな声を上げて喜ぶ。

逆に三船リトルの選手は追いつかれてしまったことに対して、深く落ち込んでしまっていた。

「ど、どうする?」

「どうするって、まだ逆転されたわけじゃないし……」

「……ご、ごめん。こんな打たれちゃいけないときに打たれちゃうなんて……」

吾郎は、明らかに自身の失投で打たれたことに落ち込んでいた。

その様子を見て、大地が話し出す。

「いや、今のは俺も悪かった。実は投げる直前に吾郎の指に汗が流れていくのが見えたんだ。俺がなんとしてでも声を掛けておくべきだったんだ。」

……でもまだ同点だ! しかも俺達にはまだ2回も攻撃するチャンスがある!」

「……そうだな! 最終回には吾郎と大地にも打席が回ってくるし、その前に俺たちで

逆転して勝つぞ！」

「「おお!!」」

大地の声に選手の雰囲気は良くなっていく。

吾郎も自分だけのせいだと落ち込んでいたところに、大地が声を掛けてくれたおかげで気持ちが軽くなっていった。

その勢いのまま、9番までを打ち取り、チェンジにする。

5回裏。なんとか逆転したいと1番の長谷川は気合を入れたが、

「ストライク! バッターアウト! チェンジ!」

3番の小森まで三者連続三振でチェンジとなってしまう。

吾郎は5回のピッチングで体力の限界になってきていたが、気力を振り絞って6回のマウンドに上がる。

1番の伊達、2番の村井を気迫のピッチングで抑えると、3番で代打が送られる。

『3番、ピッチャー菊地君に代わりまして、代打矢部君』

「矢部! なんとかして出てくれよ!」

「真島に回すんだ!」

「分かったでやんす! ここはオイラに任せるでやんす!」

メガネが特徴の矢部が代打として打席に入る。

どんな打者なのか分からない吾郎と小森は、ジャイロボールストレートで攻めることにした。
 (や……や……矢部君……!?)

大地はあまりの光景に口を開けてしまっていたが、その間に吾郎が振りかぶってボールを投げる。

矢部はその瞬間、バントの構えをしてサードにボールを転がす。

「セ、セーフティーバント!?!」

「サ、サード!」

急いで夏目が前進するも、矢部の足が速く、間に合うか微妙である。

夏目がボールを捕り、ファーストに投げたが、慌てたせいもあり暴投してしまう。

「よっしゃ! 矢部! 二塁へ行け!」

このチャンス逃さずに矢部は二塁に進塁し、ツィアウト2死、ランナー二塁となった。

吾郎は膝に手をつけて、息を切らしていた。

「夕、タイム!」

小森がタイムを取り、内野手全員が集まってくる。

吾郎を少しでも休ませたいのと、対策を練るためだ。

「ご、吾郎君……大丈夫?」

「はあ……はあ……」

「げ、限界なら大地に代わるって手もあるぞ！」

「そうだな！ それも手だ——」

「——ダメだ」

田辺と長谷川が話しているのを大地がNOと言う。

「吾郎。まだイケるだろ？ ……こんなところで交代するようじゃ、俺達は全国にも行けないさ」

「はあ……はあ……ああ、ま、まだ大丈夫だ」

「で、でもピンチなのに！」

「あ、そうか。俺たちもアイツを敬遠しちゃえば良いんだ！」

「……やめてくれ」

今度は敬遠ムードになるが、それを吾郎が止める。

「……俺は敬遠をしたくない」

「そんなこと言っちゃって！」

「吾郎……勝てるんだな……？」

「……ああ！ 絶対抑える！」

「……って言ってるんだ。みんなもううちのエースを信じてくれ！ 頼む！」

大地が全員に頭を下げて、吾郎が真島と勝負出来る様をお願いをする。

みんなも大地がここまでしたことに驚くが、これで反対が出来る人は誰もいなかった。

「……分かったよ！ 勝負してみようか！」

「だね！ ピンチだけど、吾郎ならやってくれるさ！」

もうここまで来たら勢いでやっていくしかないと全員が腹をくくった。

そして、審判に促されて全員がポジションに戻っていく。

大地だけがマウンドに残り、吾郎に声を掛ける。

「吾郎」

「……どうした？」

「ピンチにスマイルだ！ 俺たちで勝利を掴むぞ！」

大きく笑った大地に乗せられて、吾郎も笑顔になる。

その笑顔を見た大地もショート守備位置に戻っていくのであった。

第五十一話

6 回表、ツニアウト 2 死、ランナー二塁にるい

打席には 4 番の真島が入る。

『4 番、サード真島君』

真島は疲れているとはいえ、先程三振に取られたことで吾郎を警戒していた。

ただ、自分に来れることは打つしかないと思っていた。

(絶対に打つ！ 外野に転がせば、矢部の足ならホームイン出来る！)

吾郎はセットポジションから球を投げるが、まだ慣れていないのと、疲れもありコン
トロールが定まらず 2 球連続でボールを出してしまう。

汗を拭う吾郎に大地が大きな声で話しかける。

「吾郎！ ワインドアップで投げろ！ お前なら絶対に抑えられる！ 打たれても俺た
ちに任せろ!!」

吾郎は大地の方を向いたあとに、大地の声に合わせて声を掛けてくる三船メンバーを
見渡す。

そして微かに笑い、帽子を深くかぶる。

吾郎の目に迷いがなくなり、ワインドアップからストレートを投げ込む。「ストライク！」

矢部はその隙に三塁まで進んでしまい、これでシングルヒットがあれば逆転になる。

だが、吾郎達は気にせず真島にストレートを投げ込む。

真島はど真ん中に投げられた球を思い切り振るが、空振りしてしまう。

(な、なんだと！ ど真ん中を俺が振り遅れるなんて……)

そして、少し考えた真島はバットを握り直す。

拳一個分、バットを短く持つ真島であった。

小森が気付いたのは吾郎がワインドアップから足を上げた直後だった。

(この^{真島}人……バットを短く持つてる!!)

しかし、吾郎を止める方法が無く、ストレートが投げられ、真島はストレートに合わ

せてバットをコンパクトに振った。

カアアンとボールを打つ音が鳴り、ボールは吾郎の足元を通っていき、センター前ヒットになり逆転になってしまう——

——はずだった。

セカンドベースに到達する前に、飛び込んだ大地のグローブにボールが収まる。

「真島！ 走れ！ 内野安打いけるぞ！」

真島は懸命に走る。

大地は飛び込んでいたので、ここから立ち上がって投げても間に合わないと判断した。

そして真島が一塁ベースを踏む直前で、

「ア、アウト！ スリーアウトチェンジ！」

ボールはファーストのグラブの中に入っていた。

真島がショートの大地を見ると、大地は膝を立てたまま上半身の力だけで投げているのであった。

(な、なん……だと……!?)

大地はメジャーリーグのオールスターゲームで見た光景をセカンドベースの位置からなら自分でもきつと出来ると信じて投げた。

まだまだ使い物になるわけではなかったが、それでも今回アウトを取れるだけの実力はついていたのであった。

「う、うおおおお！　なんだあのショートは!?!」

「プロ選手のプレーを見てるかと思っただぞ!」

観客も盛り上がり、三船メンバーも大地を囲みながらベンチに戻る。

「大地、ナイスプレー!」

「吾郎こそ。ナイスピッチング!」

ヘトヘトになっている吾郎の手にハイタッチで応える大地であった。

そして6回裏。ここで三船リトルが点を入れられなければ延長戦である。

『選手の交代をお知らせします。矢部君に代わり、ピッチャー川瀬さん』

ここで涼子がマウンドに上がる。

まだチームに入つたばかりだが、ピッチングに関してはチームで一番と樫本からお墨付きをもらっている涼子だ。

(やつぱりここで涼子ちゃんが来るよな……)

「吾郎、お前はこの打席振らなくていい。延長戦に入ったときのことも考えて、体力を回復させることに集中しておけよ」

大地が吾郎に話しかけるが、吾郎は疲れて返事ができないのか、背中越しに左手を上げるだけだった。

少しふらつきながらも吾郎が打席に向かっていく。

「涼子ちゃん、吾郎君は——」

「勝負よ。私は敬遠なんてしないから！」

「……分かったよ。じゃあ厳しいコースを突いていくから、コントロールドミスしないようにね！」

笑顔で涼子にボールを渡す。

涼子も寿也からボールを受け取り、笑顔を返す。

そして寿也が守備位置に戻り、吾郎が打席に入る。

「プレー！」

涼子は大きく足を上げる独特のフォームからストレートを投げる。

吾郎はそれを見送りワンストライクとなる。

(よし、さすがの吾郎もこの打席は大人しくしていてくれるか……)

今の様子を見た大地は安心して、涼子のボールを見極めるようにする。

しかし、2球目。涼子のストレートを吾郎がバットを振り、カットする。

大地は思わず立ち上がって、吾郎に声を掛けようとするが、吾郎は大地をちらつと見ると、すぐに打席に戻っていく。

(ご、吾郎……。お前ってやつは……。俺のために……)

吾郎は大地がボールを見極められるように、1球でも多くの球を涼子に投げさせようとしていた。

そのことに気付いた大地は、何も言えなくなってしまうていた。

それから涼子の球を何球もカットして粘っていく。

ストレートのムービングボールだけではなく、スライダー、カーブ、SFFと何回も投げさせる。

(しつこいわね……)

「これで……おしまいよー」

涼子がストリートを高めに投げたところで、吾郎が思い切り振り切る。

キーンと音が鳴り、鋭い打球が涼子を強襲する。

涼子は咄嗟にグラブを差し出し、間一髪のところできゃッチすることに成功する。

「アウトー！」

吾郎は打った後、そのまま膝をついていた。

大地はすぐに吾郎に近寄って、肩を貸す。

「……馬鹿野郎。無理すんなよな……」

「お前が打ってくれると信じてるから……俺はこうやって無茶できるんだよ……」

吾郎の言葉で思わず泣きそうになった大地だが、ぐつと堪えるとベンチの椅子に吾郎を下ろし背中越しに吾郎に告げる。

「吾郎。この回で終わらすから、ちゃんと見とけよ」

そして大地はバッターボックスに向かっていったのであった。

第五十二話

『5番、シヨート本田大地君』

大地がバッターボックスの外で素振りをしている。

寿也はタイムを取って涼子のところへと向かう。

「……敬遠は——」

「——嫌よ」

「……だよ。でも今回だけはどうしても譲れない。彼^{大地}だけはここでチャンスを与えちゃいけないんだ」

「それでも嫌なの！　大地君とは正々堂々戦いたいのに！　……きつと私がちゃんと勝負できるのは、今日このときだけかもしれないんだから……」

「え……？」

「これから男の子は成長して、私が身体能力で勝てなくなっちゃう……だから、今だから正々堂々ちゃんと戦いたいのに！」

（涼子ちゃん……）

涼子の思いを聞いて、寿也は一瞬戸惑う。

しかし、すぐに涼子の気持ちを理解して賛同する。

「……分かった！ 僕が責任取るよ！ 監督は後で——」

「後でなんとかする」と言おうとしたところで、後ろに気配を感じて振り向くと、そこには樫本が立っていた。

「か、監督!!」

「いい度胸だな、川瀬。女だからどうした!! そんな個人的な感情で、お前はチームを犠牲にするつもりか!」

「い……いえ、ただ私は……」

「もういい、勝手にしろ！ ただし、それで負けたら、責任はとってもらうぞ！ ……帰りのバスまで俺の荷物運びだ！ それが嫌なら必ず本田大地を打ち取れ！ いいな！」
樫本の言葉を聞いて涼子は笑顔で返事をする。

そして、寿也が座ったのを見て、スタジアム内は勝負をするのだと理解する。

「へっ」

「オツケー！」

「そうこなくっちゃな！」

横浜リトルの選手全員も涼子が勝負をするというのを理解して、気合が入る。
野球好きにはたまらない状況に、全員の気持ちが盛り上がっているのである。

大地は微かに笑いながら打席に入る。

(大地君……勝負よ！ この場では浮ついた気持ちなんて一切無しで勝ってみせる！)

涼子と大地はお互いに睨み合った。

そして涼子は寿也の方を向いて、サインを確認する。

頷いた後、振りかぶって、左足を大きく上げて全身を使って投げ込む。

「ストライーク!!!」

涼子のムービングファストボールが外角低めに決まり、ワンストライク。

審判もいっなくなき気合の入った声を上げている。

寿也からボールを受け取り、再度サインを見る。

そして2球目。外角へのスライダーを大地は見逃すが、ギリギリ外れておりボールとなる。

カウントは1-1。ボール1個分のコントロールが出来た涼子は寿也にとつとでもリードがしやすいピッチャーだった。

(よし、じゃあ次のカーブでファールを打たせて……)

寿也の狙い通り、外角低めのカーブを大地が打ち、ファールとする。

しかし、予想と違っていたのは、大地が打った打球があわやホームランになりそうなほどギリギリだったからだ。

(あ、危ない……でも次のSFFで引っ掛けておしまいだ！)

涼子が真ん中低めにSFFを投げて、大地がバット振る。

寿也が打ち取った！と思ったが、バットが大きな音を鳴らした。

そして、レフトのポール周辺に球が飛んでいったのであった。

「入ったぞ！」

「いや、ファールか!？」

「どっちだ!？」

観客、三船リトルメンバー、横浜リトルメンバー全員が声を上げるが、それを判断できるのは審判だけである。

そして三塁の塁審が判断を下す。

「ファール!!」

ボールは僅かに切れており、ファールボールとなっていた。

この判定にため息と安堵の息が同時に漏れる。

(い、今のは危なかった……大地君、どんなセンスをしてるんだよ……)

まさか涼子のSFFが打たれるとは思わず、寿也はかなり焦った。

涼子もこれで終わるのだけは嫌だった。

(負けられない！ 負けたくない！ あなたのことをどんなに好きでも、野球では負け

たかないの！)

涼子は大地に絶対に負けたくなかった。

だからこそ最後の球は一番自信のあるこの球にしたいと寿也に要求した。寿也も同じ球のサインを出そうとしていたので、受け入れて頷く。

涼子は大リーガーである尊敬するジョー・ギブソンのフォームで振りかぶる。

そして一番自信のあるムービングファストボールを投げ込んだ。

大地はこの一振りに、この試合の全てを掛けてバットを振り切った。

カキイイイン
!!!!

大きな音とともに、飛んでいった球は——

——レフトスタンドのポールに当たったのであった。

第五十三話

レフトのポールに当たった打球音を聞き、静まっていたスタジアム内が一気に大歓声に変わった。

大地はバットを静かに置くと、ゆっくりとベースを一周していく。

そしてホームベースを踏んだところで、三船リトルの選手全員に囲まれて叩かれていた。

涼子はマウンドで崩れ落ちていた。

泣きそうな顔をしていて、ところで寿也に声を掛けられた。

「参ったね。あそこまで完璧に打ち直しされちゃったら、そりゃ勝てないよ」

「……うん。でも……勝ちたかった」

「……そうだね」



「それでは4対3で三船リトルの勝利です。互いに礼！」

「……ありがとうございます!!」
握手をする選手たち。

だが、お互いに声を掛けることなく、ベンチに戻っていく。

三船リトルはベンチで馬鹿騒ぎをしているが、横浜リトルの選手たちは榎本の指示の下、すぐにベンチから退散していた。

スタジアムの外に用意されたバスの中で、横浜リトルの選手全員が無言で落ち込んでいた。

そして最後に榎本が乗り込んで声を掛ける。

「よし、全員乗ったか!? 出発するぞ!」

榎本の声に誰も返事をしない。

「どうした、返事は!? 真島! 全員いるのか!? 点呼はしたんだろうな!」

「あ……いい、いえ。でも、たぶん……」

「多分だとお!? ……ちっしょうがねえな!」

そうやって榎本は懐からノートを出して点呼を取っていく。

「佐藤!」

「……はい」

「佐藤！ 佐藤寿也！」

「は、はい!!」

寿也の声が小さいため、再度大きな声で呼び、寿也は大きな声で返事をした。それからどんどん点呼は進んでいく。

「川瀬！ ……川瀬涼子！」

涼子を呼んでも返事がないため、榎本は涼子の座席まで歩いていく。

そこには帽子を深く被り、俯いている涼子がいた。

「……どうした。このバスに川瀬涼子はいないのか？」

「い……いえ。すみません」

涼子が帽子を取って謝ったとき、目に涙が浮かんでおり、涼子はその涙を手で拭いていた。

榎本は手に持っていたノートを閉じて背中を向けて全員に話し掛かる。

「いい勝負だったな。……良かったよ。最高のゲームを見せてもらった……。恥じるな、胸を張れ！ 今日の悔しさを忘れずに、また明日から頑張ろうぜ！」

その言葉に今まで全員が堪えていた涙が溢れ出す。

そして、大きな声で榎本に返事をするのであった。



「ストライク！ バッターアウト！ ゲームセット！」

「よっしやー！！！！」

横浜リトルを破ったこの年、三船リトルは破竹の快進撃で全国に駒を進める。そして、その勢いのまま全国優勝をしまうのであった。

「吾郎ー！ 何やってんだよ！ 早く帰るぞ！」

「お、おう！ 分かっているよ！」

大地に促されて、全国大会の表彰式が終わった後の球場から外に出る。

そして、少し歩いた後に振り返り、球場を見る。

（おとさん……俺たち、やったよ。リトルリーグの全国大会で優勝できたよ）

「おい、吾郎！」

「……分かったって！」

「おとさんには家帰ってから報告すればいいだろ」

「……何で分かったの？」

「何年お前の兄貴やってると思ってるんだよ」

笑いながら吾郎とバスに乗り込む大地。

「よし！ 全員乗ったな！ これから帰るぞ！」

安藤の号令で神奈川県に帰っていく。

バスの中では優勝した興奮で全員が喜んでいて、安藤も途中で嬉し泣きをしてしまい、危うく優勝当日に事故に遭いかけるというハプニングに見舞われたが、なんとか無事に帰ることが出来たのであった。

前原が「あの監督おっさんの運転は二度と嫌だよ……」と話していたのはご愛嬌であろう。

家に着いた大地と吾郎は、桃子に出迎えられて家に入る。

そしてリビングに行ったところで、大地は驚くのであった。

「り……涼子ちゃん!？」

「お、おかえりなさい」

「ただいま……ってなんでここにいるの!？」

「試合の結果が気になっちゃって……だめ……かな？」

「いや、ダメじゃないんだけどさ……」

とりあえずシャワーを浴びたいと思っていた大地はすぐに風呂に入り、着替えて髪を

乾かしてリビングに向かった。

そこでは桃子と仲良く話している涼子がいて、なんとなく複雑な気持ちになっていたのであった。

「あら、大地戻ったのね。じゃあ、あとは大地に任せようかな。涼子ちゃん、ごゆっくりね」

「はい、ありがとうございます」

やけに仲良くなっている2人におかしいと思いつながら尋ねる。

すると「大地君が遠征している間、遊びに来させてもらっていたの」とカミングアウトされ、更に驚く大地であった。

「あ、そうだ。……全国大会優勝おめでとう」

「あ、うん。ありがとう」

「……あーあ。悔しいなあ！ 私も全国大会行きたかった！」

「え……」

「それと大地君と野球したかった！ 同じチームで！」

その言葉を聞いて、大地は軽く笑うと涼子に話しかける。

「まあこれからはいつでも一緒に野球できるからさ。それで許してよ」

「……だめ」

「……え？」

「デートもたまにはして！」

「わ、わかりました……」

女性には勝てないなと思う大地であった。

涼子はデートをしてもらえると聞いてとても喜び、どこに行くかを散々話し合ったあと、ようやく家に帰っていった。

第五十四話※

大地と吾郎が全国大会で優勝した四年生の秋から二年半が経った。

あれから三船リトルは3年連続で全国大会優勝という偉業を成し遂げた。

監督の安藤は喜び、三船リトルには多くの子供達が集まり、昔以上の強豪チームとして復活を遂げたのであった。

「吾郎ー！ そろそろ起きないと卒業式に遅れるわよ！」

「うーん……」

「吾郎ってば！ 大地も起こしてあげてよね！」

「あー、やっぱり母さんの作った朝ご飯は美味しいなあ！」

「もう！ 大地ったら調子いいことばかり言ってる！」

今日は大地と吾郎の卒業式である。

2人は並んで、学校に向かっていた。

「今日でこの学校ともお別れかあ……なんか寂しいなあ！」

「……別に思っていないでしょ？」

「あつはつは！ でも大地は良かったんじゃない？ ほら、あの担任のおっさんから離れ

られるし！」

「ああ……あの人か。いつまで根に持つてるんだらうね？」

新四年生に進級したばかりのとき、小森のいじめを見て見ぬ振りした担任に切れた大地。

それ以来、そのことを根に持ち続け、何かあるたびに大地に突つかかってくるようになっていた。

しかし、大地は成績優秀で運動神経もよく、性格も良いため、担任以外の生徒や先生が味方についてくれており、実害はゼロであった。

大地自身も無視していたので、実際は担任が1人で空回りしていただけというオチではあったのだが。

「中学でもほぼ全員メンバー変わらないんでしょ？」

「そうだなー。代わり映えしないとゴロちゃん、飽きちゃうー！」

吾郎がふざけたことを言うのを流しつつ、小森、沢村、清水と合流して学校へ向かう。そして卒業式では大地達よりも桃子が号泣してしまい、恥ずかしい思いをするのであった。



卒業式が終わったあと、桃子、大地、吾郎は茂治のお墓の前にいた。

(おとさん……今日で俺たち小学校を卒業するよ)

(家族みんなでこうやって暮らしていけるのも、母さんと吾郎のおかげだよ)

(茂治さん。こんなに大きくなった2人を見てどう思ってくれるかな。私達は3人で幸せです。どうかこれからも天国で見守っていてください)

お墓参りが終わり、家に帰る3人。

そして家の前では2人の女の子が待っていたのであった。

「あちやー。またいるよ。大地、ご愁傷様」

「お前！ 他人事ひとごとだと思つて！」

「だつてお前が中途半端なことしてつからだろ？ 自業自得だよ」

吾郎に言われて、大地がため息を吐きながら話しかける。

「えつと……どうしたの？ 涼子ちゃんと美穂ちゃん……」

「卒業おめでとう！ 大地君のお祝いに来たのよ！」

「わ、私もです！ 卒業おめでとうごぎいます！」

中学二年生の川瀬涼子と小学三年生の佐藤美穂がそこにはいた。

涼子とは大地が小学四年生の頃に知り合つて今もそのまま友達関係が続いているの

だが、実は美穂とは寿也と知り合った年齢から知っているのである。

茂治が亡くなったあと、大地だけはずっと寿也と交流があり、一緒に美穂の面倒を見ていたこともあった。

それがきっかけとなり、懐かれるようになったのである。

そして昨年の出来事であった。

寿也の父親が新事業を始めるといふのをどこで聞きつけたか分からない大地が、佐藤家で夕ご飯を食べさせてもらっているときに暴露したのである。

寿也の母親はそれを聞いていなかったようで、修羅場になり、結果として新事業自体がなくなってしまった。

これは後に佐藤家から感謝されることになるのだが、話を持ってきた人が別の会社の社長にその話を持っていき、そこで新事業を立ち上げたのだが、全て失敗に終わるといふ最悪な出来事があった。

不幸中の幸いとしてはその会社は規模がでかく、マイナス分を別の事業の黒字で吸収できたため倒産は免れたが、寿也の父親の会社でやっていたら確実に借金まみれで倒産してしまうことになったであろうということだった。

佐藤家の危機を大地の一言で救ったと感謝され、今まで以上に本田家と佐藤家の繋がりが深くなり、家族ぐるみの付き合いに広がっていった。

美穂はそのときくらいから大地に対して、異性として意識を持ち始めており、よく本田家に遊びに行くようになる。

そして、たまたま涼子と鉢合わせることがきっかけで、2人は知り合うことになったのであった。

「2人もありがとう……このために来てくれたんだ……よね……？」

「そうよ！」

「そうです！」

「あら、2人もいらっしやい！良かったらうちが上がって行ってよ♪」

「母さ——」

「はい！ ありがとうございます！」

2人は張り合いながらも、桃子と話しながら家の中に入っていく。

桃子はその様子を見て「可愛いじゃない」くらいにしか思っていないが、当事者と巻き込まれている大地と吾郎からすればたまったものではない。

2人は目を合わせて、ため息を吐いたあと、家の中に入っていくのであった。

くりトルリーグ編 完

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：120 km

コントロール：E+

スタミナ：E+

変化球：

ナックルカーブ：3

◇野手基礎能力一覧

弾道：3

ミート：E+

パワー：E+

走力：E+

肩力：E+

守備力：E+

捕球：E+

◇特殊能力

チャンスD+

ケガしにくきC-

送球D+

ノビD+

ムード○

初球○

キレ○

◇コツ

ジャイロボールLV3

パワーヒッターLV3

守備職人LV3

間話 海堂附属中学からのスカウト

それは三船リトルが3年連続の全国大会で優勝したあとのことだった。

「やったあー!!! 3年連続で全国大会優勝だ!」

「まさか俺たちがここまで出来るなんてな!」

「ほんとだよ! これも大地君と吾郎君がいてくれたからだよね!」

清水、沢村、小森が帰りのバスで喜んでいた。

今や三船リトルはかつて強豪と言われたチームではなく、リトルリーグをやっているのであれば誰しもが注目するチームとなっていた。

そして2年前には人数不足で存続すら危うかったチームが、40名を越えるチームにまで増えていた。

六年生である大地達が5人しかいないため、来年になれば更に人数は増えることであろう。

「そういえばみんな中学上がったらシニアに行くとか考えてるの?」

小森が何気なく全員に話を振る。

沢村は首を横に振って答える。

「俺は行かないかな。中学に入ったらサッカーをやるって決めてるからな」

「そっかあ……沢村君は今も三船サッカー少年団と掛け持ちしてるんだもんね」

「ああ。あっちも全国出場できるくらい強くなつたし、サッカーでジュニアユースチームのセレクションにも受かったからな」

沢村はプロサッカー選手の下部組織であるジュニアユースへの入団が決まっていた。

6月頃から10月頃に行われるセレクションに合格することで入ることが出来るため、三船リトルの傍ら色々と受けに行っていた。

「清水さんはどうするの?」

「私は三船東中でソフトボール部に入ろうかなって思ってるよ。女子の中で一番目指してやってみたいんだ!」

清水はソフトボールに興味を持っていた。

野球が嫌いになつたわけではなく、単純に面白そうというところから色々と調べていた。

「吾郎君は?」

「ん? 俺? 俺は……何でもいーよ。野球が出来ればそれでいいかな。シニアもありだし、三船東で野球部入るのも悪くねーな」

「え!!? そうなの!!? 僕も三船東で野球部入ろうと思つてたんだよ!」

「何だよ、小森はシニアに行かねーのか？」

「うーん……正直に悩んだんだけど、ここら辺だと横浜シニアだろうし……僕には荷が重いかんって……」

「そんなことねーと思うけどなあ。だって全国優勝チームの正捕手だぞ!!」

「うん……それでもお金的にも厳しいだろうし……それより吾郎君がもし三船東の野球部に入ってくれたら、一緒に出来るかもって思うと嬉しいよ!」

吾郎は特に何も考えているわけではなく、小森は金銭面の事情も有り、横浜シニアには行かないと決めていたようだった。

「大地君はどうするの?」

「んー、正直ちよつと悩んでる。シニアもいいなって思うし、中学で野球やるのも楽しそうだし」

「え?! そうなったら三船東中で本田兄弟と小森が野球やるのかよ! そんな豪華メンバーだと中学も全国制覇しそうだな」

沢村が「俺もジュニアユースと三船東の野球部を掛け持ちでやろうかな」と真面目な顔をしてぶつぶつと言い出したところで、安藤が話に入ってくる。

以前は安藤が運転も兼任していたのだが、三船リトルが全国大会で優勝をしたときから近所やチームの父兄のお手伝いなども増えたため、そういったことはしなくなってい

た。

「みんな、すまんね。うちも三船リトルシニアチームがあれば役に立てたんだと思うんだけど……」
安藤はがつくりしていたが、シニアチームを作るにはあまりにも人手や環境に不足がありすぎて難しかったのだ。

それでも安藤には全員が感謝をしていた。

家族との時間を割いてまで、三船リトルへの時間を増やしてくれ、初めは自分でお金も色々と負担してくれていたのだ。

そのことを知っている六年生達は安藤に対して不満など一切無かった。

「まー、まだまだ時間はあるし、これから悩みますかねー！」

そんな楽観的な大地と吾郎が家に帰ったとき、驚くべきことが待ち構えていたのであった。



「海堂附属中学!?!」

「ええ。我々はまだ数年前に開校したばかりの附属中学なのですが、ぜひ本田君達には特待生として入学をしていただきたいと思っております……」

高校野球の名門で知られている海堂高校。そこがさらに中学時点から環境を揃えて海堂高校へ送り出そうとするために創設したのが海堂附属中学であった。

まだ出来たばかりだが、既に全国大会への出場もしているくらいの強豪である。

今そのスカウトが大地達の家を訪問しており、桃子と一緒に話を聞いているのであった。

「特待生って……具体的にどういうことなのですか？」

「ええ、入学金・授業料は一切無料です。全寮制なのですが、寮費も一切かかりません。ただし、3年間野球部に在籍していただくというのが条件になります」

無料という言葉聞いて桃子が喜びの声を上げる。

吾郎も全国に行っているくらいのものであれば、環境に問題も無いようで行っても構わないくらいのレベルで考えていた。

その場で大地だけが難しい顔をしていたのであった。



「それでは、是非ご検討ください。本日はお邪魔しました」

スカウトの男性と女性が頭を下げてマンションから出ていく。

そして少し歩いたところで会話を始める。

「大貫チーフ。本田兄弟はいかがでしたか？」

「……申し分ないな。全国大会での結果を見てもだが、実際に見るとレベルが違う。さすがあの本田茂治の息子達だ」

「弟の吾郎君は乗り気でしたが……兄の大地君は終始難しい顔をしていましたね」

「ああ。弟もピッチャーとして是非欲しいが、なるべくなら兄弟一緒に獲りたいな。海堂高校への特待生枠を交渉材料に使ってでも獲りに行くぞ！」

「はい！」

（せっかくドツジボールチームからアイツをスカウト出来たんだ……これで本田兄弟が入学すれば、1年目で全国大会優勝も見えてくるぞ……！）

大貫と部下の女性はなんとしても本田兄弟を獲得するべく動いていたのであった。



スカウトの大貫が帰ったあと、桃子と大地と吾郎は先程の話について改めて話し合っていた。

「大地、吾郎。良いんじゃないかなって私は思うんだけど……どう？」

「俺も良いなって思ってるんだけど……大地が難しい顔をしているからさあ」
「……………」

大地は未だに難しい顔をしていた。

なかなか返事をしない大地に、吾郎が少し強めに話す。

「大地！ 何を悩んでるん——」

「……俺さ。やっぱり三船東中に行くよ。吾郎は海堂附属中学に行けばいいさ」

「え!？」

大地が顔を上げて、桃子と吾郎に返事をした。

急な返事に2人は驚き、吾郎は困惑もしていた。

「な、なんでだよ！ あんなに良い条件は他にはないじゃんか!」

条件について吾郎が話していたが、実際吾郎は大地と同じところに行くと思っ
ていたために、吾郎だけ海堂附属中学に行けばいいと言われたことに対して困惑してい
たのであった。

「ああ、確かに良い条件だよな。環境も良いだろうし。……でもな。俺は全寮制で母さ
んと離れるなんて出来ないよ。」

おとさんが死んじやったあと、血の繋がっていない俺達をここまで育ててくれた母さ
んを1人にするなんて絶対に出来ない……」

「だ、大地……」

そんなこと気にしなくていいと桃子は言いたかった。

だが、真剣に考えてくれる大地の気持ちをどうしても無下には出来なかつた。

「……るいよ」

「……え？」

「大地ばかりずるいつて言つてんだよ！ そんなこと言われたら、俺だつて同じだよ！ 母さんを見捨てるなんて出来るわけ無いだろ！」

「吾郎……」

吾郎は大地の言葉を聞いて、今までどれだけ自分のことしか考えていないのかを反省していた。

そして、実の両親である千秋、茂治と同じくらい大切に思っている桃子のことを考えて泣きそうな顔になっていた。

桃子は2人の話を聞いて嬉しそうに笑つた。

「大地……吾郎……。ありがとう。でも、あなた達はあなた達の道を進みなさい。母さんは確かに寂しいけど、あなた達が元気に野球をやってくれるのが嬉しいから。きつと、おとさんもおかさんも同じ気持ちよ」

「……いや、母さん。それだけじゃないよ。俺らはプロ野球選手を目指してるんだよ。」

そこで軟式野球をずっとやるわけにはいかないんだ。

だから、俺は三船東中に行つて、横浜シニアに入ろうと思う。少し負担を掛けちゃうかもしれないけど、お願いします」

大地がそう言つて桃子に頭を下げる。吾郎も慌てて一緒に頭を下げると、桃子はそんな2人を抱きしめる。

「そつかあ。じゃあ母さん、甘えちやおうかな。まだ一緒にいてくれるんだよね？」
「うん、そうだよ」

「……つて恥ずかしいから！」

素直な大地とツンデレな吾郎に囲まれて幸せな気分になる桃子であった。

(茂治さん……私、この子達のお母さんになれて本当に幸せです)

第三章 中学生編

第五十五話

「よし、じゃあ行つてきまーす!」

「行つてきまーす!」

大地と吾郎は入学式の日を迎え、制服に身を包み三船東中へ向かつていた。

今日から中学生になることで、少なからずワクワクした気持ちになっていたが、吾郎は表には出さずにあくびをしたりして誤魔化していた。

「おつす! おはよ!」

「清水さん、おはよう!」

「なんだ清水か。おはよ」

「なんだとはなんだよ! 私の制服姿を見てもっとドキドキしても良いんだぞ?」

清水は制服姿を吾郎に見せつけるようにポーズを取る。

吾郎は「はいはい」と言つて、彼女なりに頑張つたポーズを無視して通り過ぎる。

そのまま置いて行かれた清水は、少し泣きそうな顔をして吾郎達を追いかけるのであつた。



「クラス発表はどうなるかねえ？」

「ああ、また吾郎と一緒になるといいな」

「まあそれなら大地に勉強教えてもらいやすいし、いいかもなー」

「いい加減自分で勉強できるようになれよ……」

吾郎は小学生の間、大地につきっきりで勉強を教えてもらえたこともあり、成績が中
の下まで上がっていた。

(……いやいや！ あれだけ教えたのに中の下ってどういうこと!?)

大地は人に教える才能が無いのではないかと一時期落ち込んでいたが、寿也や他の人
に教えた時はきちんと成績が上がっていたので吾郎が悪いという結論に辿り着くこと
で、なんとか精神の安定を保っていた。

そしてくだらないことを話しつつ、校門のところに張り出された掲示板でクラスを確
認する。

【1—Bクラス氏名発表】

大林 雅彦

小森 大介

沢村 涼太

清水 薫

本田 吾郎

本田 大地

山根 義隆

「おお！ 元三船リトルは全員同じクラスじゃんか！」

「清水さん、良かったね」

「え！ ええつと……別に吾郎のことなんて言つてな……」

清水が全員同じクラスになって喜んでいたように見せかけて、吾郎の名前だけを見ていたのが分かった大地だが、とりあえず素直に「良かったね」と伝えていた。

すると清水は何を勘違いしたのか、自ら墓穴を掘り、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

その様子を見て、大地は微笑ましいと軽く笑い、何も聞こえていないふりをして話を流した。

入学式後、クラスに戻り自己紹介をしていく生徒達。

吾郎も大地も同じく自己紹介をしていく。

「本田吾郎です。よろしく！」

「本田大地です。吾郎とは双子なので初めは見分けづらいかもしれませんが、よかったです仲良くしてください」

本田兄弟の自己紹介で、クラスの女の子が注目してヒソヒソと話し出す。

付近の小学校の生徒が三船東中に集まっているので、実際に大地達を初めて見た女の子達は「格好良い」とか「イケメン兄弟で……つてのもいいわね！」などと話していたが、大地と吾郎は気にしないで席に着く。

沢村が「大丈夫！ 礼儀正しくないガサツなやつが吾郎で、女の子に優しいのが大地だからすぐ分かる！」と言ってクラスで笑いを誘っていた。



自己紹介やお知らせなども終わり、三船東中の初日が終了した大地達は家に帰ってのんびりすることにした。

家に帰って着替えた途端に、例のアナウンスが鳴る。

『三船東中に入学しましたので、EからDに上げる際の必要ポイントが減少しました』
『三船東中に入学しましたので、特殊能力を上げる際の必要ポイントが減少しました』

（おお！ ようやくか！ このためにポイントをずっと貯めていたから、何からしようか悩むな！）

パワプロのステータスを上げるにはポイントが必要であり、基礎能力をEからE+に上げるのと、E+からD-に上げるのでは必要ポイントがかなり違っていている。

小学校時代、E+までステータスを上げるのはある程度ポイントを貯めれば簡単に上

げることが出来ていた。

しかし、E+からD-に上げる際の必要ポイントが、EからE+に上げたときの10倍から15倍ほどになっており、明らかにこれ以上ステータスを伸ばさないほうが良いという神様の意思なのだろうと判断して、あえて上げていなかった。

(いきなり上げると……身体に負担が来るから、徐々に慣らしていかないとだよな)

ステータスを上げるにもいきなりE+からD+まで上げてしまうと、身体がつかず負担が大きくなって体調不良になってしまう。

過去に経験があった大地は、焦る必要はないので無理をせずに徐々に上げていこうと決めていた。

能力値を上げたり下げたりして色々調整しつつ、ポイントを消費していく。

「よし！ こんなもんかな！」

「……大地、急に大声出してどうしたんだよ？」

「え、あ、ごめん。なんでもない！」

「それよりもキャッチボールしに行こうぜ！」

「おお！ いくか！」

大地は吾郎に誘われるがまま、能力が上がってどう変わったのかを確かめるべく、グローブを持って外に出かけるのであった。

第五十六話※

三船東中の入学式が終わってから3ヶ月が経った。
クラスメイトとも馴染み、大地達は夏休み前の期末テストの結果の張り出しを見ていた。

【三船東中 一学期期末考査順位（5教科）】

1位：本田 大地 498点

12位：清水 薫 451点
13位：小森 大介 449点

56位：沢村 涼介 401点

61位：本田 吾郎 391点

「うわ、本田兄は中間テストに続いて学年トップだよ……」

「顔も良くて、スポーツも出来て、頭も良いって……なんなんだよ」

「ほら、2位の佐々木さんがずっと本田兄を睨んでるよ」

「……こわ！ あの子、勉強一筋だったもんねー！」

（……そうか。1問ミスったかー）

大地はテスト勉強をほとんどしなくても大丈夫だったので、テスト期間は吾郎につきつきりで勉強を教えていた。

それでもケアレスマスはあるようで、数学の簡単な計算を間違えてしまい、満点をとることが出来なかった。

吾郎は嫌々勉強をしていたが、自分がここまでの点数を取ることが出来ると思っていなかったのも、とても喜んでいた。

「だ、大地ー！ 俺、すげー点数取れたぞー!!」

「ああ、吾郎頑張ってたもんね。……とりあえず抱きつくのやめろ」

周りで一部の女子生徒が、本田兄弟が抱き合っているのを見て騒いでいる。

中学一年生
この年齢で、腐るのだけはやめてくれとうんざりした顔をして天井を見上げた大地であつた。

その大地と吾郎であるが、期末テストも終わり、夏休みに向けて本格的に野球も始めている。

横浜シニアに入った大地達は、環境にも慣れて夏の大会に向けてレギュラー争いをしていた。

そのために大地は能力を上げていたのであつた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：123 km

コントロール：D―

スタミナ：D―

変化球：

ナツクルカーブ：4

シュート：1

◇野手基礎能力一覧

弾道：4

ミート：D―

パワー：D―

走力：D―

肩力：D―

守備力：D―

捕球：D―

◇特殊能力

【共通】

ケガしにくさC

ムード○

【野手】

チャンスC―

送球C―

初球○

パワーヒッター

守備職人

【投手】

ノビCー

対ピンチD+

キレ○

ジャイロボール

◇コツ

◇◇◇◇◇◇

球速をやや上げて、投手と野手能力をDーに、新しい変化球としてシュート覚えていた。

弾道を4に上げ、特殊能力も全体的に一段階上げていた。

そしてパワーヒッター、守備職人、ジャイロボール、対ピンチを習得していたのである。

（出来れば尻上がりとか、クイックとか、緩急○とか覚えたいんだけどね。急に覚えても

使いこなせる気がしないんだよなあ……)

ポイントは余っているため、早めに能力は上げていきたいのであるが、どうしてもまだ身体がついていけないため、抑えめに上げていくしかなかった。

吾郎はというと、ジャイロボールを同じく習得し、球速は135 kmを出せるようになっていた。

変化球を投げていない分、不利かと思いきやスローボールとの球速差のせいで、そこまで不利になることもなかったのである。

横浜シニアでは、小学四年生時に対戦した横浜リトルのメンバーがほぼ揃っており、寿也とついに一緒のチームになれたことをお互いに喜び合っていた。

吾郎が真島以外の名前と顔を一切覚えておらず、大顰蹙だいひんしゆくを買っていたのはご愛嬌だったのかもしれない。

涼子は横浜シニアに入らず、女子中学生の軟式野球部がある学校に進学していた。女子で全国一位を目指すと思気込んでおり、大地も心から応援していたのであった。

そして中学一年生のシニアの夏の大会。横浜シニアは全国ベスト8という結果で幕

を閉じた。

吾郎はスポットで登板していたが、先発では起用されず文句を言っていた。

大地と寿也も代打のみでの出場であり、ある程度結果を出していたが、三年生中心のチームだったのでスタメン出場は無かった。

涼子は全国大会の決勝で惜しくも破れており、準優勝という結果で終わっていた。

応援に行っていた大地だったが、試合が終わって顔を見に行こうと思っただが、号泣している涼子やチームメイトを見て、そのまま引き返して家に戻った。

その後は美穂からも「今回は仕方ないですね。ちゃんと慰めてあげてください」と涼子のそばにいる許可が出るくらい目に見えて落ち込んでいたので、大地もオロオロしながらも涼子のそばにいることとなったのである。

そして秋大会を経て、大地達は中学二年生になっていた。

第五十七話

「え!? ぼ、僕がレギュラー!?!」

「うむ。お前は守備も上手いし、バッティングもクリーンアップレベルだ。まだ二年生になったばかりだが、お前の力なら十分スタメンライトくらい任せられる!」

「で、でもライトは高橋先輩が……」

「高橋には可哀想だが、控えに回ってもらった。地区予選の成績が打率一割で、エラーが3つもあつたくらいだ。仕方ないだろ。」

ま、お前が心配することではない。実力で掴んだレギュラーだ。精一杯県大会の大舞台で頑張ってくれ!」

吾郎達が中学二年生になった夏。三船東中の監督に呼び出された山根は、レギュラー昇格の話を受けていた。

今まで一生懸命練習していた山根は、先輩である高橋に申し訳ない気持ちもしていたが、それ以上に喜びが勝っていた。

「あ! 山根君!」

「小森……!」

「さつき聞いたよ！ 県大会からは山根君もスタメンライトだつてね！ 先輩達が話しているのを聞いてちゃつた！」

「……ああ、小森は1年生からレギュラーだったからな。俺もようやく追いついてきたよ」

「一緒に頑張ろうね！」

「僕はベンチにも入れないけど、こもりんと山根君のこと応援しているからね！」

「大林……ああ！ 頑張るよ！」

部室に戻った山根を出迎えてくれたのは、小森と大林だった。

小森はリトル時代の実績もあり、中学1年生からレギュラーになっており、その実力は誰もが認めていた。

山根は同級生で2番目のレギュラー獲得であり、それはとても喜ばしいことであつた。



小森達と別れた山根は1人で家に帰っていた。

レギュラーになれた嬉しさから、気持ちを弾ませて帰宅していたのだが、目の前に3

人の男が立っていた。

「よう、ちよつとツラ貸せや、山根」

「た、高橋先輩!？」

「いいからちよつと来いよ」

そう言つて、山根を囲み歩き出す先輩3人。

山根としても抵抗は出来ずついていくしか出来なかつた。

学校に戻り、裏手にある体育館の人氣がないところに連れて行かれた山根は、囲まれていた。

「山根、何の話かもちろん分かつてるだろ? お前、まさか先公に言われたとおり、ぬけぬけと試合に出る気じゃねえだろうな?」

「え……いや、でも……」

山根が言い返そうとしたところで、肩を掴まれて後ろに押さえつけられる。

その衝撃で山根は何も言えなくなってしまう。

「でももストライキもねーんだよ! これが最後の大会の先輩に対して、華を持たせて引退してもらおうつてのが先輩の思いやりつてもんだろ!？」

ちよつと腹がいてーとかなんとか言つてくれりや、それでいいんだよ! な! 頼む

よ、山根！ 県大会には、俺親とか呼んじやつてんだよ！ ベンチじゃ今さら格好つかねーだろ!？」

高橋が山根に対して、高圧的な態度でスタメンを辞退するように詰め寄る。

山根は俯いて少し考えたあと、すぐに「い……嫌です！」と断る。

「こんなことされなければ、まだ同情して辞退したかもしれないけど……後輩を脅して試合に出ようとするような先輩に、僕はポジションを譲る気はありません!!」

「……そうかい、じゃあ仕方ねえな」

「な、何をするんですか!？」

「それなら本当の怪我をしてもらうだけさ」

高橋の指示で一人の先輩が山根を抑える

山根の後ろは体育館に入るための金属製の大きな扉であり、そこを開けて山根の腕だけを体育館の中に入れる。

何をされるのかを察した山根は暴れるが、抑え込められて身動きを取ることが出来ない。

「よーし、閉めろ。思いつきりだぞ。中途半端に怪我をしても試合に出るかもしれねーからな」

「や、やめ……」

「よし！ 行け！！」

「やめろおおお！！！！」



「大地ー！ 早く帰って野球しようぜー！」

「ちよつと待つてろ。てか吾郎もついてきて」

「え、どこ行くんだよ？」

大地は吾郎を連れて、三船東中の野球部の部室に向かっていた。

しかしそこには誰もいなく、もぬけの殻になっていたのであった。

（ちつ。もう帰っちゃってるか……）

急がないとまずいと判断した大地は校門に急ぐ。

山根がこの時期に先輩によって一生の怪我を負わされるのを知っていたため、なんとか防ごうと動いていた。

そして校門が見えたところで、3人の生徒が山根を連れて体育館方面に向かっているのが見えたのであった。

「なあ大地ってば……って、あれって山根か？」

「ああ、多分先輩に呼び出されたんだらうな」

「え？　なんで？」

「山根が次の県大会でレギュラーになったんだよ……でもそれを面白いと思わない先輩もいるってことさ」

「……へえ。くだらないことするじゃん」

大地と吾郎は職員室を通って、体育館に急ぐ。

そして体育館の中に潜んで、山根達の話聞いていた。

「……そうかい、じゃあ仕方ねえな」

「な、何をするんですか!？」

「それなら本当の怪我をしてもらうだけさ」

体育館のドアが開き、そこから山根の腕を抑えた生徒が中に入ってくる。

「よし、閉めろ。思いつきりだぞ。中途半端に怪我をしても試合に出るかもしれねーからな」

「や、やめ……」

「よし！ 行け！！！！」
「やめろおおお！！！！」

しかし、扉が閉められることはなく、体育館側には大地が扉を右腕で抑え、山根の腕を抑えていた先輩を足で引つ掛けて転ばせている吾郎がいた。

「な……!!? なんだてめーらは!!?」

「ほ、本田……? どうしてここに……?」

「本田って……あの本田兄弟か!?!」

山根が大地達の名前を呼ぶと、高橋達が驚く。

野球をやっている同世代で、三船リトル時代に全国制覇の立役者となった本田兄弟の名前を知らない子供はいない。

三船東中にいることは知られていたが、先輩と交流していなかった大地達は顔をそこ

まで知られてはいなかった。

「先輩達……何してんの？」

「なかなか愉快なことをしてますね」

「くっ！ お、お前たちには関係ねーだろ！」

「……はあ!! もつかい言ってみろ!!」

大地と吾郎が高橋の言葉にブチ切れて、声を揃えて威圧する。

1個下ではあるが、あまりの迫力に高橋達は何も言えず、黙ってしまふ。

「お前ら、マジでだせーのな。レギュラー取られたくないなら、必死こいて練習しろや
！」

「……ちくしょうが！ お前ら！ こいつらやつちまうぞー！」

逆上した高橋が指示を出して、3人で大地と吾郎に襲いかかる。

しかし、運動神経や体力に明らかに差があり、すぐに取り押さえられてしまふ。

「……つたく。大人しくしとけよな！」

「ぐっ……くくく。お前ら手を出したな!？」

「なにい?」

「俺らはこのまま職員室と警察に行つて、お前らに殴られたと言つてきてやるぜ！
これでお前らの野球人生も終わったな！ くはははは!!」

「ほ、本田……!」

高橋は笑い出し、大地達を警察や教師に訴えると言い出す。

山根は大地達を心配するような声を出す。2人は笑っていたのであった。

「ああ、だから大地は寄り道なんかしたんだな?」

「……そうだよ。先生方、出てきてください」

「「……………え?」」

大地の合図で隠れていた教師が数人出てくる。

体育館に行く途中に大地達は職員室に寄って、教師を無理やり連れ出していったのだ。

証拠をきちんと押さえた上で声を掛けたら出てきてほしいと頼んだところ、了承して

くれていた。

「せ、先生! 違うんです! 俺ら脅されて…………!」

「一部始終を見ていたよ。今さらそれを言っても無駄だな」

教師の言葉に「そ、そんな……」と言つてうなだれる高橋達。

そして、高橋達は生徒指導室に連れて行かれるのであった。



「本田……すまない」

「ああ、気にしなくて大丈夫だよ。俺らも見かけたただけだし……なあ吾郎？」

「え、ああ！ 山根が無事で良かったよ」

「この恩をどう返せばいいのか……」

「んー、じゃあさ、県大会で勝ち上がったて行けよ！ 小森もいるんだし、支えてやってくれ」

大地の言葉に山根は泣きそうな顔をする。

しかし、涙を拭って笑い、「ああ！ 分かった！」と大きな声で返事をするのであった。

本当であれば吾郎と同じく、いや、それ以上に過酷な人生を歩む可能性があった山根。しかし大地達によって野球選手としての本来の実力を出したまま残りの中学校生活を送ることが出来たことは、彼にとつて幸運だった。

そして三船東中野球部の衰退も防ぐことが出来たため、大地が卒業するまで三船東中は強豪のまま県大会出場常連となっていたのであった。

第五十八話

山根の事件が終わってから約1年が経ち、大地達は中学三年生になっていた。

昨年の横浜シニアは全国優勝を果たし、ベストナインに大地、吾郎、寿也が選ばれていた。

そして、中学最後の大会の予選大会が始まる前日、練習が終わった3人は不意に後ろから話しかけられる。

「本田君と佐藤君。ちよつといいかな?」

後ろを振り返ると、そこには無精髭を生やした小太りの男性と、肩までの長さの髪をした20代そこそこの女性が立っていた。

「ん? 誰だ、このおっさん?」

「……吾郎。すみません、うちの弟が……」

「ああ、いいんだよ。覚えてないかな? 本田君達には3年前にも1度挨拶させてもらってるんだけどね」

苦笑いしながら懐からそれぞれ名刺を取り出して3人に渡す。そこには「大貫」と「名倉」と書かれた名前があった。

そして、大貫は海堂高校野球部 スカウト部 チーフマネージャーという肩書が書いてあった。

「か、海堂高校?!」

「ああ、そうだ。ぜひ大地君と吾郎君、寿也君にはうちに来てほしいと思つていてね」
「我々海堂高校野球部は、あなた方を第25期特待生として正式にスカウトさせていただきます。」

条件等はご両親とも話し合つてからだとは思いますが、先に皆様のご意思をお聞きしたく声を掛けさせていただきました」

吾郎が「そんなことあつたつけ……?」と首をかしげていたが、寿也はかなり驚いていた。

海堂高校とは神奈川県屈指の強豪校であり、甲子園でもほぼ必ずベスト4以上に入つている高校だからだ。

そんな名門高校からのスカウト、しかも特待生となれば誰しもが憧れるのであつた。

「えつと、とりあえず俺らは前回と同じく母親に相談をしてから決めたいです」

「あ、僕も両親に相談をしないと…」

「そうですか。ではまた今度具体的な話を聞かせてもらつてもいいかな?」

「はい、よろしくお願いします」

大地と吾郎、寿也は大貫達と別れて、帰り道を駅に向かって歩いていく。

大貫のことを大地は覚えていたが、吾郎は「そんなこともあったかな？」レベルの臍気な記憶であった。

寿也はまさか海堂高校からスカウトされるだけでなく、本田兄弟が小学校時代にスカウトされていたことにも——きちんと考えると納得はできるが——驚きを隠せなかった。

「大地君達、海堂付属中学からもスカウトが来ていたんだね。なんで行かなかったの？」
「んー、実は母さんを一人にしたくなかったんだよね……。だから全寮制の海堂は選択肢になかったんだよ」

「そうだったのか……え、でもそれじゃあ……」

「うん、今回も多分断るかな。母さんに心配掛けたくないし」

「そっか。そうだよね」

「寿くんはどうするの？」

「んー、大地君達が行かないなら、僕もやめようかなあ。せつかくなら一緒にチームで高校も野球やりたいからね」

寿也の言葉に嬉しそうな顔をする大地。一方の吾郎はその日、ずっと思い出そうとし

ていて、結局思い出したのは次の日の昼のことだった。



海堂高校のスカウトから半月が経過する。横浜シニアは順調に大会を勝ち上がっていった。

基本は吾郎と寿也のスタメンバッテリーで、大地は登板感覚を忘れないように途中から投げたりする程度で、基本はシヨートに専念していた。

そして準決勝を勝ち上がった日、大貫達がまた大地達の前に現れる。

「やあ。何度もすまないね。この前の返事はどうかかなと思つて」

「大貫さん……ごめんなさい。俺と吾郎は海堂高校に行くことは出来ません」

「……理由を聞いてもいいかい？」

大貫はなるべく明るい雰囲気崩さないようにしながら——顔は怖いのだが——大地に理由を問いかける。

大地は小学校時代のとくと同じく、桃子を一人にはしておけないということを通じて正直に伝える。

「……そうか。それなら仕方ないな。だが君達はプロを目指しているのではないのか？」

目指していないのであれば、どこの高校に行つて楽しく野球をやればいい。だが、もし少しでもプロになる気持ちがあるのであれば、最善手を取るべきではないのかなど、私は思うよ」

大貫は無理に引き止めたりせず、その場を立ち去つた。

海堂高校はここ数年、かなり強引な引き抜きを行っていることもある。本田兄弟や寿也にもそれをする事は出来たが、あえてそれはしなかつた。

それは大貫が小学校時代から彼らのいちファンだったからである。

（くそー。出来れば俺の手で海堂にスカウトをして、プロになるためのレールを用意してやりたかつた……）

大貫の相棒である名倉は、今までの大貫のスカウトのやり方とかなり違つており、困惑していた。

ここで簡単に引くような人ではないと分かつているからだ。

「お、大貫チーフ！ 本田兄弟と佐藤寿也を簡単に諦めてしまつてもいいんですか!? これでは上から何て言われるか——」

「——いいんだ。責任は俺が取る。彼らは強引に縛つたとしても、きっと無駄だ」
「ですが……いえ、チーフの判断に従います」

「名倉……すまないな」

「大丈夫です。チーフのこういった面を見れたのは役得だと思っておきます」
 からかうような口調で話す名倉を苦笑いで返した大貫は——タバコに火を付けながら——自分達を選ばなかった本田兄弟がどのような成長していくのを楽しみにしているのであった。



「はい、それではよろしくお願いいたします」

本田家を出ていく男が一人。駒大こまだい占小せんこまき牧のスカウトであつた。

桃子は笑顔でスカウトを見送ると、家のドアを閉めてため息をついた。

「これで何校目よ……もう数えるのも馬鹿らしくなつてきたわ……」

夏の大会で全国大会出場を決めた横浜シニア。そこからスカウトの人が毎日のように何校も挨拶に来るようになった。北は北海道から、南は沖繩まで。

それも仕方がない。大地と吾郎の進学先は高校野球界にとって——いや、日本の野球ファンにとって——注目の的になつていたからである。

リビングに戻つた桃子は大地達に声を掛ける。

「大地、吾郎。スカウトの人、帰つたわよ。それで……返事はどうするの?」

「ん？ 行かないよ？ 俺らは三船高校に行こうかなって思ってるから」

「んー、俺は大地や寿也と一緒にのところに行ければどこでもいいや」

「……その前に吾郎は三船にも落ちるかもしれないことを理解しておけよ」

「え!? そうなの!?!」

「あくまで可能性の問題だけだな。夏の大会が終わったら勉強尽くしになることを覚悟しろよな」

大地の言葉を聞いて吾郎は「げっ!」と物凄い嫌な顔をしたが、今更大地から逃られないことを分かっているのです、すぐに逃げることを諦めた。

桃子はそんな大地の言葉を聞いて、少し不安そうな顔をする。

「本当にいいの？ だってあなた達、プロ野球選手を目指しているんでしょ？」

それなら強豪校に行った方がいいんじゃない？……北海道とまではいなくても、例えば神奈川だと海堂高校とかあるじゃない」

桃子は海堂の発言を出した後、スカウトに来た高校の中に海堂が無いことに気付く。

「そういえば海堂って小学校のときに来てくれたけど……今回は来てないわね？」

「ああ、海堂なら大地がとつくに断ってたよ。母さんを一人にしたくないって——」

「——吾郎！ 余計なこと言うな……母さん、俺らは公立の三船に行くから大丈夫だって。ちよつと素振り行ってくるね」

そう言つて、大地はバツトを持つて外に出ていった。

吾郎は大地に怒鳴られて少し気まずい顔をしたが、桃子が本音を知りたがっている様子だったので、ため息をついたあとに話し出す。

「大地はね、つて俺もただけだよ……母さんを一人にしたくないんだよ。おとさんが死んじやつて、不安になつてた俺達を引き取つて一生懸命に育ててくれた母さんに、これ以上金銭的な負担も、精神的な負担も背負わせたくないんだよ」

「ま、これは大地の受け売りだけだね」と笑いながら寝転がる吾郎。

いつもと違う雰囲気の吾郎を見て、桃子は思わずシヨックを受けたような顔をする。

「それは……母さん一人だと頼りないからつてこと？ そのせいで……私のせいで大地と吾郎の選択肢を無くしてしまつていふことなの？」

「い、いや、そうじゃなくてさ……」

吾郎は慌てて起き上がつて桃子を見るが、桃子の目には涙が溢れていた。

茂治がいなくなつてから、一生懸命に大地達を育てていたのだが、それが2人の負担になつてしまつていふと気付キシヨックを受けていた。

そして、そのまま外に走つて出ていつてしまふ。一人取り残された吾郎は、「え、てかこれから夕飯じゃねーの……？」と、とぼけたことを呟きながらも桃子の後を追うのであつた。



「大地！」

「……母さん？」

息を切らしながら素振りをしている大地のところに来た桃子に対して、大地は素振りをやめて振り向く。

桃子は息を整えて、真剣な顔をして大地に話しかける。

「あなた達、好きな高校に行きなさい」

「え——」

「三船じゃなく、自分の夢を叶えるのに最大限活かせる場所で野球をしなさい。

あなたが母さんに気を遣っているのは分かるわ。でもね、私はそんなことをしてほしくてあなた達を引き取ったんじゃないわ！」

「……」

「あなた達を愛しているから。私の人生を使って、あなた達の全てを応援したいから。だから一緒に暮らしてきたのよ。」

……私は茂治おとしさんや千秋おかせんのように実の親ではないけれど——」

桃子が一生懸命訴えているところに、後ろから吾郎がやってくるのが大地の目に入る。

吾郎が大地に両手で謝るポーズをしているところで、全てを悟った。

初めは急に言われて、何がなんだか分かっていなかったのだが、自分達の気持ちを吾郎が話してしまったのだ。

「——母さん、分かったよ」

「だから………え？」

「分かったって。俺らは自分達で行きたいと思った、プロになるのに良い環境の高校を選ぶことにするよ」

大地は頭の後ろを掻きながら、桃子の意見を素直に受け入れる。

桃子は感情を出して訴えているところに、急に自身の発言の受け入れがあったので少し困惑していた。

「まあ………いずれは親離れしないといけないからね。だからさ………」

「え？」

「……………近所迷惑だから、ここで大声出さないでください」

桃子は俯きながら顔を真っ赤にして、大地と吾郎に寄り添われて自宅へと帰っていったのであった。

第五十九話

桃子と話をした翌日。

大地と吾郎——実際に動いているのは大地だけなのだが——は、スカウトしてくれた高校でなるべく桃子に負担がかからないところをピックアップし始めていた。

桃子には好きなどころに行きなさいと言われてはいたが、彼らにとつていちばん大切な人は桃子であり、桃子に負担を掛けすぎるところは極力排除したいと思つていた。

「んー、最低条件としては俺ら2人を“特待生”として入学させてくれる所が良いよね」
「その特待生つてのは、お金が掛からないの？」

「高校ごとに変わるね。入学金と授業料免除だけのところもあれば、寮生活の場所なんかだとそのお金やグローブやスパイクとかの道具とかも全て無料になるところもあるよ」

「え、じゃあそつちのほうがいいじゃん」

「そう。だからきちんと調べてどこがいいかを見極めないとね」

大地の様子を見ていた吾郎は、納得したような表情をした後、ニヤリとした顔をする。背後にいる吾郎の表情の変化に気付いたのか、大地は調べながら話し出す。

「そんな顔をニヤつかせてどうしたんだよ」

「いやさ、昨日の大地の照れっぷりは面白かったなって」

「……うるさい。黙れ」

昨日の夜、桃子が外で大地に叫んでいた言葉を聞いて、咄嗟に「近所迷惑だから」と言つて誤魔化していたが、実は照れ隠しであつた。

そのことを吾郎には気付かれており、今になつてからかわれていた。

少し不機嫌になつた大地に吾郎は「ごめんごめん」と謝ると、話の続きを促す。

「それで、大地としてはどの高校がいいと思つてるんだ？」

「うーんとね、今のところはこの5つかな」

そう言つて大地が見せてくれた高校は、全国でも強豪と言つてもおかしくない高校である。

東京の遅稲田実業、ちなだじつぎょう 王京や神奈川の慶南義塾、おうきょう 竹蔭学院、けいなんぎじゅく 縦浜などが挙げられていた。

吾郎はその高校を見て、疑問に思う。

「ん？なんで東京や神奈川しかないんだ？全国にはもつと強い高校とかもあるだろ？」

「いや、俺らの条件に当てはまる高校はこの5つだけだよ」

吾郎の疑問は最もだつた。なぜなら大地が選んだ高校は自宅から通学できる距離にある高校だつたからだ。

すぐに大地の考えていることを理解した吾郎は、鼻の下を人差し指でこすりながら大地に笑いかけた。

大地はその顔を見て、照れたようにそつぽを向く。

「と、とにかくこの高校からまた話を聞いてみようぜ」

「そうだな……つて俺は大地に全部丸投げなんだけどな」

「お前も少しは話を聞けよ……」

大地は吾郎の発言に苦笑いをしつつ、寿也にも話さないといけないと思っていた。

桃子と話した日にすぐに寿也に連絡をしたところ、寿也からは高校のピックアップについては寿也も一緒に考えてくれると伝えられていた。

そこでお互いに良さそうな高校を見繕って、会ったときに話し合おうと決めていたのであった。



「大地君、吾郎君。お待たせ」

「おお！寿也！待ってたぜ！」

「寿くん、急に呼び出してごめんね」

数日後、ファーストフード店にて3人は現状の共有を兼ねて集まっていた。

軽く雑談をしたあと、大地からピックアップアップしている高校についての話をし始める。

「一応、俺らが選んだ高校はここらへんとかどうかなって思ってるんだけど……」

「5つあるんだね……って、え!?!」

寿也は大地が選んだ高校を見て驚きの声を上げる。

何かおかしいところがあつたのか不安になった大地だったが、もう一度ピックアップアップした高校を見た寿也が笑い出す。

「いや、すごいね大地君。まさか僕が選んだ高校とほぼ同じところを選ぶなんて」

「あ、そういうことか。驚かせないでくれよ」

「ああ、ごめんごめん。でもさすが大地君だね。この高校を選んだってことは、君達と僕は高校側から同じ条件を提示されているってことかな?」

「多分そうだと思うよ。俺らは佐藤寿也君と同じ高校に行くって言うてるからね」

「……なるほど。実は僕も同じことを言ってたんだよね。本田兄弟と同じ高校に行くってね」

大地、吾郎、寿也は同じ高校に行きたいということとは話していたが、スカウトの前で同じ発言をしていたとはお互いに思っておらず、3人は嬉しさのあまり顔を見合わせて笑い合った。

そしてひとしきり笑いあつたあと、大地が寿也に質問をする。

「そういえばほぼ同じ高校を選んだって話していたけど、他に同条件の高校ってあつたっけ？」

「ああ、それね。たぶんここは抜けていたんじゃないかなと思つてたんだ」

そう言いながら寿也が高校案内のパンフレットを取り出す。

寿也は数日の間に高校のパンフレットまで読み込んで持つてきていた。

そして、表紙には海堂高校という名前が書いてあつたのだった。



「フン、全体的に小粒だな。頭数もまだまだ足りん」

海堂高校の一室で編成担当部長の北川とチーフスカウトの大貫が今年の中学三年生のスカウト状況について話し合っていた。

入学内定していた選手の資料をテーブルに置き、北川は大貫に現状に対しての不満を漏らす。

「困るね。チーフの君がこの程度の報告では。もう8月だというのに、もつとイキの良ささそうなのを内定取れるんだろうな？」

「はあ……色々当たってはいるんですが……」

「とにかく急ぎたまえ。他校よそに持っていかれる前になんとかしろ！」

「分かりました……失礼します」

人の苦勞も知らないでと大貫は思いつつも部屋を出ていこうとすると、中学校の県大会——シニアではない——の組み合わせがFAXにて届く。

北川は大貫を呼び止めて、コピーを持っていくように指示する。

コピーを受け取ると大貫は部屋を出て、ため息をつく。

(ちっ。こっちの苦勞も知らないで。……彼らあいつらが来てくれたらと思うが……)

上司と部下の関係のため、表立って言うことは出来ない大貫は心の中で北川に悪態をつきつつ、スカウトを諦めてしまった3人を思い出す。

そして部屋を出た直後、突然大貫の携帯が鳴り出す。

知らない番号だったので一瞬出るか迷ったが、大貫はすぐに電話に出る。

「はい。海堂高校の大貫です」

「あ、大貫さんですか？ 突然のお電話失礼いたします。本田大地と申します」

「え、本田君!？」

大貫は予期せぬ相手からの電話だったので、戸惑いながらも返事をする。

「どうしたんだい？」

「実は行く高校を再度検討することになったので、よかつたら大貫さんにももう一度話をさせてもらえないかなと思ひまして」

「そういうことか……分かつた。じゃあ今度の土曜はどうかかな？」

「はい、ではそれでお願ひします」

会う日時と場所の詳細を詰めたあと、電話を切つた大貫は無意識に左手の拳を握りしめていた。

電話の内容では、大地と吾郎だけでなく寿也も同席するということだったので、上手くいけば全員が海堂入りしてもおかしくない状況なのだ。

（これはどんな条件を出されても飲むしかないな。最悪白紙の小切手を渡してでも……）

「あれ、こんなところでどうされたのですか？」

良からぬことを考え始めた大貫に背後から声を掛ける男がいた。

突然声を掛けられたので驚いた大貫であつたが、見知つた顔だつたためすぐに落ち着いた。

「驚かさないでくださいよ、江頭さん」

「それはすみませんね。……なにやら喜んでいた様子でしたので、何があつたのかなと」

「ええ。驚かないでくださいよ。実は——」

大貫は断られていた本田兄弟と寿也が海堂に入るかもしれないということを、嬉々として海堂のチーフマネージャーの江頭に伝えていた。

そのことを冷静に聞いていた江頭は薄く笑う。

「……そうでしたか。それは良かったですね」

「ええ！ もし3人が入学するとなつたのであれば、眉村を入れて海堂の歴代最強チームを作る事が出来てもおかし——」

「——気に入りませんか」

「……え？」

「気に入らないと言つたのです。こちらからスカウトした際には即断したのに、自分達の都合で今度は海堂に入りたくなつた？」

大貫さん、まさか最初と同じ以上の条件で入学させるつもりはないですよ？」

「そ、それは……。ですが、あの本田兄弟と佐藤寿也ですよ！」

「だからどうしました？ 彼らは恵まれていてよく分かつていないんですよ。世の中がそんな甘くないということを教えてあげましょう」

江頭が悪い笑みを浮かべながらする話を聞いて、大貫は全身が冷や汗でびっしょりとなつていた。

そして全て話し終えて、「それではよろしくお願いしますね」と言つて去っていく江頭

をただただ見ることしかが出来なかつたのであつた。

第六十話

「すまない!!」

「え、ち、ちよつと……何があつたんですか?」

横浜シニアの練習後に近くのカフェで待ち合わせていた大地、吾郎、寿也と大貫の4人。

そして席に座つた途端に大貫が頭を下げて謝罪をしたため、3人は困惑していた。

大貫は頭を上げると理由を話し出す。

「実はな、君達の特待生枠なんだが……出すことができなくなつてしまった」

「……え!?!」

大貫は江頭から3人を特待生枠で入学させることを禁止されていた。

海堂のメンツを潰したと思われていたため、江頭からの意趣返しである。

その説明を聞いた3人は啞然とした表情をしていた。

(くそ、あのとつっあんボーヤが……!)

大地は江頭のことを原作知識で知っているため、相も変わらずの言動に対して怒りを覚えていた。

だが、もうこうなつては仕方がないのである。

「それでは……仕方がないですね。俺達は違う高校に——」

「——ちよつと待つてくれ！ 実はここからが本題なんだ」

大貫は真剣な表情をしながら大地達を見る。

その顔を見て、大地も言葉を続けることが出来ずに黙つてしまふ。

「うちのチーフマネージャーから伝言があつてね。『もしうちにどうしても入りたいたら、セレクションでダントツの成績を残してみなさい。そうすれば特待生での条件での入学を認めましょう。』』ということだ」

「……………気に入らないね」

吾郎がすぐに反応をする。江頭の上から目線の態度がどうしても気に入らないということである。

それについては大地も寿也も同意見だった。

大貫もここまで言われて海堂に入つてくるとは思つていなかったため、3人の海堂入りは絶望であると実感した。

「……もし、もしうちに入つてくれるのであれば、それ以降の特待生の条件は俺が決めていいと言われている。

君達の考えている限りの要望に最大限近付けるようにしたいと思つている。……こ

れが今俺に出来る精一杯の誠意だ。本当にすまない」

「……分かりました。大貫さんは悪くないです。ただ、もう少し考えさせてもらってもいいですか?」

「あ、ああ! この場で断られると思っていたから、それでも本当にありがたいよ。もし少しでも興味を持つてもらえるのであれば、10月に海堂うみどうでやるセレクションにぜひ来てほしい」

大貫は頭を下げたそう伝えるとそのまま帰っていった。

そして、3人はそのまま今の内容について話を続けることにした。

「……大地。なんであの場で断らなかつたんだよ。あんなふざけた条件で俺らが海堂になんか行くわけねーだろ!」

「僕も同意見だね。完全に舐められているじゃないか」

「まあ……ね」

「じゃあなんで——」

「——大貫さんのことも少しは考えてあげなよ」

「……あ?」

「上の人にあんなことを言われて、俺らにそれを伝えなきゃいけないやつだよ? それがどれだけ大変で心苦しいことなのか吾郎には分かる?」

「……………」

「それを一時の感情で断つてどうするんだよ。今回は大貫さんのことを考えて保留にしたんだ」

大地の言葉に吾郎と寿也は黙ってしまふ。

自分達のことしか考えていなかった——中学三年生では当たり前だと思ふが——これに對して、恥ずかしい気持ちになつていたので。

怒りの発散場所をなくした吾郎が大地に続きを促す。

「じゃあどうするんだよ」

「んー、とりあえずセレクションを受けてみてもいいとは思ふけどね」

「あ!?! それだと海堂に入ることに決めたつてことかよ!?!」

「違ふよ。てか一旦落ち着け」

大地に睨まれた吾郎はビクツとしたあとに、深呼吸をして落ち着く仕草をする。

寿也も吾郎の様子を見て、同じように深呼吸をして落ち着こうとしていた。

「大地君、どういふことか聞いてもいいかい?」

「あ、うん。一旦俺らの行動を整理するね。まず、海堂のセレクションは受ける。でもその後の特待生の条件が俺らの基準に満たない内容であれば、別の高校に行くでもいいと思ふんだ。」

海堂のチーフマネージャーとやらも、まさかここまで言われてセレクションを受けに来るとは思っていないだろうからね。……俺らをバカにしたことを後悔させてやろうぜ」

あくまで冷静に、だが最後は吾郎と寿也をワクワクさせるような言い方で締めくくる大地。

ここまで言われてようやく大地の思惑に気付いた吾郎と寿也の2人は、目を合わせたあと軽く笑って大地の提案に了承をしたのであった。



この年、シニアの全国大会で2年連続の全国優勝を決めた横浜シニア。ベストナインに選ばれた3人は、10月に行われる海堂のセレクションに参加するべく猛練習を重ねていく。

そんな中学生生活最後の夏休みのある日。大地達は海へ出掛けていた。

初めは涼子から誘われて2人で行く予定だったのだが、どこで聞いたのか美穂もついていくと言い出し、流れで寿也もついていくことになり、それであれば吾郎と清水も誘おうということなり、結局6人で出掛けることとなった。

「じゃあ大地君達は海堂のセレクションを受けるんだ？」

「そうだね。せっかくだし受けてみようかなって」

「そっかあー！ 私も大地君と同じ高校に行きたかったなあ」

「わ、私は大地さんがどの高校行ってもついていきますからー！」

電車の中で涼子と美穂が謎の張り合いをしているのを苦笑いで見ている大地。

寿也も妹の意外な一面を見て、同じく苦笑いをしていたのであった。

「吾郎。あんたも海堂のセレクション行くの？」

「ん？ああ、そうだよ。言ってなかったか？」

「うん、今初めて聞いたんだけど……。そっかあ、海堂かあ」

「と言っても、他の高校に行くかもしれないねーけどな」

清水は吾郎が海堂のセレクションに行くことを聞いて、海堂の偏差値がどれくらいだったのかを頭の中で思い浮かべる。

大地に勉強を教えてもらっている関係で、ある程度の高校であれば清水は問題なく行けるだけの学力はあったので、そこまで心配はしていなかった。

「美穂ちゃん、清水さん。もし俺らが海堂に入ることも、多分学校で会えることはないと思うよ」

「「え!?! そうなの!?!」」

「うん。だって野球部は一日中練習をしているし、全寮制なんだけど野球部は別の寮になるだろうからね」

大地の言葉を聞いて、あからさまに落ち込む2人。清水と美穂

一緒に海堂に行つて、楽しい高校生活を夢見ていた2人にとっては当たり前と言つても過言ではない。

そもそも美穂に関しては年齢差的に——3歳差のため——同じ高校に通うことは出来ないのだが、そこは誰も突つ込まなかつた。

「ま、とりあえず今を楽しみましょう！」

そう言つて大地はトラランプを取り出して目的地に着くまで全員で楽しむのであつた。

海に到着して、着替えを終えた男性陣。

海で訓練をするつもりでもあつたので、準備運動を行つてると後ろから「お待たせ」と声が掛かる。

そこにはそれぞれが選んだ水着に包まれた女性陣がいたのであつた。

大地は不覚にもその姿を見て顔を赤くする。

涼子は淡いピンク系を基調としたビキニで、胸は平均的に成長しているが全体的にスラリとしており、野球をしていて鍛えているとは思えないほどの細さだつた。

美穂はスカートにフリルの付いたホワイトカラーのビキニで、胸こそ慎ましいものの、あと数年もすれば確実に美人になるのが分かる見た目であった。

清水は原作のときに着ていた水着かと思いきや、表紙のカラーで出ていたような真っ赤なビキニだった。胸元の紐を結んで留めるタイプのもので、清水が着用するタイプの水着ではなかったが、3人の中では一番成長しているの——どこがとは言わないが——周りの男性陣も注目してしまうのであった。

「ちよ、ちよつとーいつまで見てんのよー」

大地は清水の声でハツとしたが、言われていたのはどうやら吾郎だったようで慌てて言い訳をしていた。

自分が3人に見とれていたので気付かれていないようだったのでほうつと息をついたところで、涼子と美穂に話しかけられる。

「ど、どうかな?」

「……似合ってますか?」

大地は改めて2人の姿を見て再度顔を赤くしたが、今度は落ち着いて「2人とも似合っているよ。可愛いね」と素直な気持ち伝えることが出来ていた。

その言葉を聞いた涼子と美穂は恥ずかしそうにしながらも、お互いに顔を見合わせて笑顔で喜びあつたのであった。

その後、大地達は海で訓練をしようとしていたのだが、目を離れた隙に女性陣が色々な男に声を掛けられていたので、訓練を中止して全員で遊ぶことに切り替えていた。

初めは吾郎も文句を言っていたが、清水が声を掛けられていたのを見て何かを感じたのか、訓練が中止になることにすぐに何も言わなくなった。

夕方になり、そろそろ全員で帰ろうかという話になる。

大地が着替えを済ませて、帰りの準備をしていると清水と吾郎の話す声が聞こえてくる。

なんだろうかと思ひ、声のする方向へ進んでいくと、2人は進学先の高校について話していたのであった。

「さつき大地から聞いたんだけど、海堂ってソフトボール部無いんだって……」

「そうなのか。まあそれならしゃーねーな。清水は行きたい高校あるんだろ？」

「まあね。聖秀つてところがソフトもそれなりに強くて無理せずに入れるかなって思ってる」

「……そつか。じゃあ俺らは高校からは別になるのか」

吾郎の言葉を聞いて、清水は泣きそうな顔で吾郎を見る。

しかし吾郎は後頭部を組みながら、優しく笑って話し続ける。
「お前清水ならどこに行っても上手くいくさ。俺らと一緒に最高三のチ船ームリを作り上げた一員トなんだからな。」

学校は違っても、俺らはずっと繋がってるから」
「……うん。ありがとう」

大地は2人の邪魔をしないように、そつとその場から立ち去るのであった。

第六十一話※

長かった夏休みも終わり、新学期が始まる。

部活から解放された三年生達は、いよいよ本格的な受験態勢に入ることになる。

大地と吾郎はセレクションに向けて詰めめの訓練を行っていた。

寿也も交えてなるべく3人で高いレベルの厳しい練習をすることにより、個々の能力を上げるようにしていたのである。

そして大地は、能力を少しずつ上げて調整を繰り返すことで、自身の能力をフルに使えるようにしていた。

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：146 km

コントロール：D+

スタミナ：D+

変化球：

ナックルカーブ：4

シュート：3

◇野手基礎能力一覽

弾道：4

ミート：D+

パワー：D+

走力：D+

肩力：D+

守備力：D+

捕球：D+

◇特殊能力

【共通】

ケガしにくさC

ムード○

【野手】

チャンスC+

送球C+

初球○

パワーヒッター

守備職人

【投手】

ノビC+

対ピンチC

キレ○

ジャイロボール

回またぎ○

◇コツ

クロスファイヤーLV2

闘志LV4

リリース○LV3

広角打法LV4

流し打ちLV3

二度の全国大会優勝の経験値は膨大な量であり、セレクション前に全てを使い切るの
は難しいと判断した大地は、現在の能力値で満足していた。

本職はショートのため、投手としては吾郎のサポートが出来るレベルになれば良いと考え、その値はクリアしているであろうと自信を持っていた。

大地は海堂で行われるセレクションの内容も把握しており、もし少し違つたとしても予測できるレベルなので合格するのは楽勝であつた。

問題は、ダントツの成績とはどれくらいなのか？ という点である。

ただ、大地はそこまで心配していなかつた。出来る限りのことをやるしかないという気持ちとダメだった場合や条件に合わない場合は、別のところを受ければ良いという樂觀的と言つてもいいくらいのポジティブさは持ち合わせていた。

他の学生よりも一足先に、海堂高校野球部のセレクションを受ける大地、吾郎、寿也の3人は、気負うことなく体力強化と技術強化を済ませ、いよいよその体一つで至高の名門、海堂高校に挑戦する。



「おお！ 結構な人数がいるな！」

「ああ、大体250人くらいつてところかな？」

「さすが海堂だな。このうち何人合格するのは分からないけど、競争率はかなり高そ

うだよ」

セレクション当日の朝、吾郎、大地、寿也は海堂高校のグラウンドに入るとすでに準備運動をしたり、用意している学生に対して口々に感想を述べた。

吾郎の「所詮、特待生になれなかつた奴らだろ？」の言葉どおり、全員そこまで心配していなかつたが、それでも特待生組や推薦組にも入れなかつた人がここまでいることには驚きを隠せなかつた。

「大地君、吾郎君！」

「……ん？ あれ、小森じゃん！ あと山根もいるのか！」

「ああ、俺達も海堂のセレクションをダメ元で受けてみようと思つてな」

「なんだよ！ それだつたら初めから言えよ！ 内緒にしてるなんて水くせーじゃねーか！」

海堂のセレクションには三船リトルからずっと付き合ひのある小森と、中学二年生のときに当時の三年生の先輩に再起不能にされかけたところを救つた山根も来ていた。

山根はあれから怪我もなく、グレルこともなく、野球選手として順調に成長をするこ
とが出来ていたのだ。

そして、三船東中は県大会常連校になり、今年は決勝で海堂付属中相手に3対4で惜敗するレベルにまでの強豪校になつていた。

もちろん小森も山根も他の高校からスカウトが来ていた。しかし、海堂高校のセレクションをどうしても受けてみたいという山根の説得により、小森も一緒に受けてみようとなったのであった。

大地達に話さなかったのは、単純にサプライズをしたかっただけであり、もちろん他意があるわけでもなかった。

「それじゃあお互いに悔いの残らないように頑張ろうぜ」

「ああ！　山根も小森も全員で受かろうぜ！」

山根の言葉に吾郎も返事をして別れたあとはウオーミングアップを始める。

ウオーミングアップを始めて少し経った後に、学校の放送のマイクから声がするのであった。

「みなさん、こんにちは。本日は我が海堂高校野球部のセレクションに、ようこそおいでくださいました。」

私、このセレクションにおける案内、進行役を務めさせていただきます、野球部編成担当部長の北川です」

マイクからの声に動揺する受験生達。大地達はすぐに最上階の一部屋に立っている複数名の大人達を発見する。

その中の眼鏡を掛けてマイクを持っている人が先程の北川であろうと当たりをつけ

た。

「テストに入る前に、一言みなさんに申し上げておきます。

こちらで確認したところ、今回の受験数は287名。今からその287名で五次テストまで戦っていただきます。

テストの内容はその都度説明いたしますが、最終的に我が校にセレクションで入学出来る人数は最大5名様までとさせていただきます」

北川の説明に困惑し、更に動揺する受験生達。

あくまで最大5名であり、実力次第では少なくなることや、昨年は0名の合格者だったことを伝えられると、ざわめきが止まらなくなる。

しかし、北川は——受験生の反応は毎年のことだと分かっているため——あくまで冷静に淡々と進行していく。

「では、早速一次テストに入らせていただきます。まずみなさんにはバックネット前に置いてあるゼツケンを付けていただきます。

これより後、みなさんはそのゼツケン番号で呼ばれることとなります。……といって番号を呼ばれたときは、大抵その人にはもう用はありませんが」

ゼツケン番号は大地が55、吾郎は56、寿也が57だった。

ゼツケンを付け終わったらグラウンド中央にあるトラックのスタートラインにつく

ように北川より指示が出る。

ここで大地が吾郎と寿也に話しかけたあとに急に走り出す。

「吾郎、寿くん。あそこまで走っていくよ」

「え!? 大地!?!」

「ちよ、ちよつと待ってよ!」

他の受験生がぞろぞろと歩いてスタートラインまで向かっていくのに対し、大地は駆け足で向かっていく。

吾郎と寿也は何がなんだか分からずに、ただついていけただけだった。

その様子を受験生たちは「何張り切っているんだよ」と笑っていたのだが、いきなりマイクから怒鳴り声があるのであった。

「チンタラするなあ!! 貴様ら全員失格にするぞ! 我が校はすでに推薦で何十人も一流選手の内定は取っているんだ!

やる気がないなら、セレクションなんかやめたっていいんだぞ! この二流どもめらが!」

北川の声に対し、受験生は慌てて走り出す。

大地達はすでにスタートラインについているため、その様子を冷めた表情で眺めていた。

「……大地、そういうことか」

「……大地君、よく分かったよ」

吾郎と寿也も今の北川の怒鳴り声を聞いて、どんなことでも油断してはいけないと納得した。

北川からも「今後はそういう当たり前のことが出来ない奴は、今後容赦なく失格とする」と伝えられる。

「では第一次テスト、ランニングサバイバルレースを行う！ルールは至って簡単明瞭だ——」

そう言つて北川がルールの説明を始める。

ルールはグラウンドのトラックを走るだけである。ただし、先頭に追いつかれて周回遅れになった受験生はその場で不合格となる。

足に自信があれば、このテストでどんどんライバルを蹴落とすことが可能であり、場合によっては一人で全員を抜き去ることも不可能ではない。

「レースの終了は状況に応じて我々が判断する。以上、諸君らの健闘を祈る。

では用意——」

——
始め
!!!!

第六十二話

海堂高校野球部編成担当部長の北川から開始の合図があり、セレクションがスタートする。

納得できる説明もなく、いきなり始まったことにほぼ全ての選手が困惑をしていたが、前の選手が走り出すと深く考えずについていこうと走り出すあたりは日本人によくある傾向といえよう。

そして、「今年は何人受かりますかな？」と笑いながら話している海堂高校のセレクション担当者達の横で、1人の男^大が双眼鏡越しにグラウンドを眺めていた。

(き、来たのか……!! あの様子だと来る確率は3割を切っていたと思っただが……と、とりあえず何でもいい!! この難関をダントツで突破してうちの分からず屋どもにお前達の凄さを見せつけてくれ!!)

開始から5分。大地達は先頭を走っていた。何人かは後ろについてきているが、それでも2番手集団とは10m以上突き放した状態であった。

そして更に差が生まれつつある中、受験生の殆どが大地達に対して疑問を持っている

た。

いつまで続くか分からないランニングで、そこまでペースを上げる必要はあるのか？
ということだ。

2番手集団以降に関しては全く差がなく——人数の関係上、最下位との距離の差はあるが——ほぼ全員が体力温存の様子見だった。

しかしそんな中、1人の受験生が2番手集団から抜け出した。

「うわっ！ あいつ、もうスパートかけやがった！」

先頭^{大地}集団を上回るスピードで走り出した男は、少しずつ大地達との距離を詰めていく。

（あの3人は最初から気に入らなかつたんだよな。さつきも全員が歩いている中、試験官の顔色伺って走っていったりしちゃってよー。

それに、平塚のタッキーこと、この多岐川^{たきがわ}様の前を走るなぞ、絶対に許せん!!）

「大地君！ 後ろからスピード上げてくる人がいるよ！」

多岐川がスピードをどんどん上げていくのに気付いた寿也。

このセレクションで誰かに負けることが許されない大地達は、たとえ1回でも多岐川に抜かれるわけにはいかない。

吾郎と目を合わせた大地は、寿也に告げる。

「じゃあ俺らもペースを上げようか。準備運動はこの辺にしておこう」

（よっしや！ もうすぐ追いついちやうよく！ ま、君達のような良い子ちゃんレベルじゃ、この俺様の足には勝てないのよ………って、あれ？）

大地達のところまであと2、3mといったところから、多岐川は全く追いつけなくなっていた。

それどころか、徐々に差が開いていったのである。

（な、なんで……?!? 多岐川様より足の速いやつなんぞいるわけが……!）

多岐川のペースが落ちたわけではない。むしろ多岐川は自身の最高速度トップスピードで走っていた。

先程までの2位集団との差はかなり開いているということからも、多岐川の足はセレクションの受験生の中でもトップレベルだということは分かる。

ではなぜ追いつけないのか？ これは、単純に大地達のスピードが多岐川以上だったからなのである。

「210、18、79、41、12、113、126、62、179、失格！」

大地達がスピードを上げたのもあり、最下位集団はどんどん抜かれて脱落していく。

その様子を見て、北川は淡々と失格者の番号のみを告げていく。

「111、51、92、205、141、17、失格！」

更に受験生が脱落していく中、多岐川は心の底から不愉快な気持ちになっていた。生まれてからの15年間、多岐川は同世代に足で負けたことはなかった。

陸上部やサッカー部といった足に自慢があるやつですら、多岐川の足には全くといっていいほど勝てなかったのである。

その事実にも多岐川の自尊心を存分に満たし、有頂天となり、彼の自信となっていた。自分に勝てるやつなんているはずがないと。

しかしながら、今現実を起こっているのは自分よりかなり先に3人の同い年の男がいるという事実。

（そ、そんなことがあつてはならねえ！ この俺様の前に誰かが走っているなんて……あ、あれ？）

焦りや緊張は、いつも以上に身体へ疲労を溜め込む。足は速いが体力が無い多岐川にとって、このことは致命的である。

徐々に太ももに違和感を覚えて、足が上がらなくなってくる。

そう、完全なスタミナ切れである。スタミナが切れた多岐川はスピードが目に見えて落ちていく。

大地達は更にスピードを上げて最下位グループを失格にしながらも、多岐川との差を広げていく。

そして、多岐川が疲労で走れなくなる直前で、笛の音が大きくなるのであった。

「それまで!!!」

笛の音と北川の声を聞いて、受験生がその場に倒れ込む。多岐川もそれに漏れず、大きく息をしながらへたり込む。

その中で大地、吾郎、寿也の3人は息一つ切らさずに立ったまま、全員の様子を伺っていたのであった。

（二次テストは問題なさそうだな。さすが横浜シニアを全国大会優勝に導いた3人ということか。推薦すらされなかった連中とはレベルが違うな）

大貫は一次テストの様子を見て、ほうつと息をつく。

その横では教頭が一次テストについて北川と話していた。

「二次テストの通過者は102名か。しかし北川君、こんな乱暴な一次テストでいいのかね？」

これじゃあ、中・長距離の苦手な者は全員失格になるじゃないか。陸上部のセレクションじゃあるまいし……」

「教頭、〃走り〃は運動能力の基本ですよ。この程度の中・長距離で周回遅れになるような基本の出来ていない奴は、海堂には必要ありません。」

ホームランしか打てないデブのスラッガーに商品価値はない——海堂ブランドが作

り上げる商品は、打って走って守れる本物のユーティリティープレイヤーなんですよ。

とはいえ、今年は一次テストでの失格者が、過去に類を見ないほど多いですがね。商品価値のない奴らの中に、最高級ダイヤモンドの原石が混じっていますから」

そう言つて北川は大貫を一瞥した後、大地達を見る。

もちろん江頭から大地達のことを知らされているため、もしセレクションに来た場合は——特別待遇はしないが——能力の調査をするように言われていた。

持久力、スピードともに特待生と比べても勝るとも劣らない能力の高さに軽く笑みを浮かべていた。

——海堂高校野球部セレクション一次テスト、287名中102名突破——



「二次テスト通過者102名。続いて第二次テストに入る。

第二次テストは基礎筋力テストだ！ その場で結構。腕立て、及びスクワットを合計

千回行ってもらう」

「「「ええっ!?」せ……千回……っ!?」」」

一次テストでヘトヘトになっている受験生に対し、非情とも思える回数が告げられる。

驚きの声を上げる受験生を無視して、北川は淡々と説明を始める。

二次テストの内容を聞いて吾郎と寿也は大地を見るが、大地は気付いていないフリをしてそっぽを向いていた。

「号令についてこられない者、こちらから見て正式な方法で続けられなかった者は当然不合格となる。」

腰を浮かして肘だけ軽く曲げただけの腕立てなど即失格だ。スクワットも両手を後頭部に付けた状態で背筋を伸ばし、膝をきちんと折っている状態でないと認められない」

その言葉に対して、ざわめく受験生たち。

そこに北川からの救済措置——とは一切思えないが——が与えられる。

それは腕立てとスクワットで合計千回行えば良いというものである。どちらかを千回行っても良いし、一定の回数ごとに腕立てとスクワットを切り替えても構わないという内容だ。

ただの嫌がらせにしか思えない回数に対し、不満の顔を見せる受験生達だが、そんなことはお構いなしとばかりに北川から開始の合図が告げられる。

「では用意！始め！」

北川とは別の試験官が数字を数えていく。

200回くらいまでは誰も脱落することなくこなしていたが、そこから先になると一次テストの疲労もあり徐々に遅れ始める者が出てくる。

「90番失格！………13番、175番失格！」

そんな中、大地達は遅れることもなくついていく。

それもそのはずだ。実は、大地達は事前にこの試験内容を訓練メニューとして何回も繰り返し行っていたのである。

吾郎と寿也は、なぜ大地がこんな練習メニューを行おうとするのか全く理解出来ていなかったのだが、今は大地の言うとおりにやっていて良かったと実感していた。

回数はどんどん進んでいき、終盤に差し掛かっていた。

「九百六十五………九百七十八………九百九十八、九百九十九………千！！」

笛の音とともに、二次テストの終了の合図が出る。

吐きそうになっている受験生がいるほどの過酷な内容にも関わらず、大地達3人は汗

をかいて息を切らしてはいるものの、座り込むこともなく余裕が感じられていた。

「はあ、はあ……ま、まだこれで二次テストかよ」

「もうダメだ、俺……」

弱音を吐いている者達がいるが、一次テスト終了時と同じく北川からそんなことは関係ないとばかりに三次テストについて告げられる。

「では引き続き三次テストを行う!! 全員後方の体育館に移動!」

「体育館?!」

「ええっ……もう動けねーぞお!」

なかなか立ち上がらない受験生達に対し、「駆け足!!」と非情な言葉を投げかけてすぐに移動するように話す北川。

受験生達はふらふらよろめきながらも体育館へと移動していくのであった。

(二次テストでは流石に厳しい顔を見せるかと思つたが……ここまで楽々クリアするとはね)

大貫は携帯を取り出し、一本電話を掛ける。

「ああ、お疲れ様です。大貫です。今、二次テストまで終わりました。

ええ、彼らも来ています。今のところ楽々クリア……というよりは次元が違うレベルでクリアしていますね」

「そうですが。最終テストからは私も見に行けそうなので、そこまでで合格基準に満たしているようであればまた連絡ください」

「分かりました。四次テストが終わる段階でご連絡します」

そうやって電話を切る大貫。

そして北川のみ体育館へ向かい、残りの試験官は昼食に出掛けるのであった。

——海堂高校野球部セレクション二次テスト、102名中71名突破——

第六十三話

二次テストを突破した71名は体育館の中に入り、異様な光景に目を疑っていた。そこには5段に積み重なった箱と等間隔に置かれているやかんがあった。

「な……なんだこれ!？」

「おい、弁当だよ！ 昼飯だ！」

何が入っているのか気になった受験生の1人が、箱を開けて中身を確認する。

そこにはごくごく一般的な弁当の中身が入っていた。

そして、三次テスト前にお昼休憩があるとほぼ全ての受験生が安心する中で、吾郎と寿也が大地を見て話しかける。

「おい、大地」

「ねえ、大地くん。もしかして……これも……?」

「ああ、これが三次テストだ」

明らかに不審がる目で大地を見る2人であったが、大地はその視線を無視して壇上を見る。

そこには北川が壇上におり、そのまま次のテストについて話し始めるのであった。

「みなさん、さすがは我が校のセレクションに挑戦するだけのことはある。よくこれだけの人数が残ったものだ。ご褒美に昼食を御馳走しましょう。」

ただし、時間は30分。そこにある仕出し弁当5人前、各自米粒一つ残さず平らげてください」

これが三次テストですと言われ、時計を見つつ位置につくように指示出す。

全員が駆け足で弁当の前に座り、「始め！」の合図で弁当の蓋を開ける。

——しかし、弁当に手をつける者は4人を除いていなかった。

それは仕方がないことでもある。トラックを何周も走らされた挙げ句、休憩無しで腕立てとスクワットを千回も行っているのだ。

更に休憩無しで30分以内に弁当を5人前食べるというのは過酷極まりない。食べようとしても箸が動かない状態になっていたのであった。

「ちよつと待つて下さい！」

そこに異議を申し立てるかのようになり立ち上がる受験生がいた。

原作では寿也がその役をやっていたので、一心不乱に弁当を平らげている寿也が横にいる今、他にいないかと思っただけだ——

立ち上がったのは山根であった。その横には山根を気にしつつも、弁当を食べ始めている小森もいた。

三船リトル時代に大地達と厳しいメニューをこなしていた小森は原作よりも数段実力が高くなっており、食べることに問題ないようであった。

しかし、山根からすると野球と全く関係がないこの三次テストに対して、疑問を持つのも不思議ではなかった。

「こんなことがどうして三次テストなんですか!? 30分で5人前食べたからどうだつていんです!？」

野球とは何の関係もないじゃないですか!!」

山根の声に同調するように他の受験生も声を上げる。

しかし、北川の「黙れ!」の一喝で静まり返るのであった。

「食うことは才能だ! スポーツ選手にとつて、内臓の強さは肉体の強さに比例する!

食べ盛り、伸び盛りの貴様らに、今この程度の食事が喉を通らんような奴は先が知れている。海堂の野球は、線の細い小粒なテクニシャンなど必要としないのだ。」

分かったら、さつさと食べ!! この程度のテストを気にせず食べている55番達は、すでに2個目に入っているぞ!」

北川の声で全員が大地達を見る。今までの様子を興味なさげに食べている大地達は2個目の半分近くを食べ終えていた。

山根含む他の受験生もその様子を見て、渋々ながらも急いで食べ始める。

「御馳走様でした」

「ごっそさん、楽勝」

「……ふう。ご馳走様でした」

開始から15分。大地、吾郎、寿也が同時に食べ終える。完食する時間のあまりの早さに、周りが響く。とよめ

小森も残り10分前に食べ終え、山根も5分前には食べ終えていた。

そして、時間になり北川が笛を鳴らす。

「それまで!! 全員箸を置け!」



「最近の若いのは食が細いんだな……さつきの三次テストで一気に46人まで絞られるとは情けない」

グラウンドに戻ってきた受験生達。北川の話聞いて少しだけ驚く者もいたが、ここまで来た以上、失格になった者たちの心配をしている余裕はない。

そして北川は三次試験までと変わらず、四次テストについての説明を淡々と始める。「ここまで君達のスピード、スタミナ、パワーの可能性をテストしてきた。四次テストは、いよいよ君達のテクニクを見せてもらう」

籠に入ったボールを持つてくる試験官の1人を見て、「やつと野球の実力で勝負できるぜ!」と喜びの声を上げる。

しかし、籠の中に入っていたのは軟球であった。

「テクニクといつても、後天的なものではない。我々が判断するのは先天的なテクニク——すなわち“運動神経”だ。」

四次テストは、そこにあるハンドボール用のゴールを使ってPK戦をやってもらう。四次テストは軟球を使った1対1のサドンデス方式でのPK戦——もちろん投げないので、キックではない——。

8 mの位置からお互い交互にボールを投げてゴールに入れば良いというシンプルなルールである。

対戦相手は公平に抽選——北川が箱の中にあるゼツケン番号がかいてある球を引く——を使って決め、四次テストで残るのは半分の23名のみである。

「それでは最初の対戦の組み合わせを決める……まずは56番！」

「……吾郎じゃん」

「うおっ！ 俺か！ いーね、これで俺が一抜けだぜ！」

そして、吾郎の対戦相手を決めるために北川が箱の中に手を入れて球を引き抜く。

大地もここに関しては運に頼るしか無いため、寿也と一緒に当たらないように祈るのであった。

「7番！」

吾郎の対戦相手は、原作と同じく多岐川であった。

しかし、特に揉め事を起こしていないため、吾郎の記憶には一切残っていない。

そして今の吾郎にとっては、全く相手にならないのであった。

「7番失格！ 56番通過！」

圧倒的な差を見せつけられた多岐川だったが、北川にもう一度チャンスを貰えるように懇願する。

北川は冷めた目で多岐川を見つつ、ため息をついたあとに返事をする。

「貴様ごときの実力では、何億回やっても56番相手に勝てるわけがない。

失せる。そんなことも分からないようなバカは海堂には必要ない」

多岐川はその言葉にショックを受けたように俯き、そのまま荷物を持ってグラウンドから立ち去っていった。

「次！ ……57番！」

「は、はい！」

次は寿也の番である。原作では小森が対戦相手だったのだが、小森と当たることはなく、寿也は危なげなく通過する。

その後も四次テストは進み、通過者と失格者に分かれていく。

山根と小森もお互いに対戦相手に勝ち、四次テストを通過する。

「それでは最後だな。残ったのは55番と261番だ。所定の位置につけ」

大地が先行になったため、軟球を持って位置につく。

北川の合図でボールを投げる。相手は一切反応が来ず、大地の投げた球はそのまま

ゴールに突き刺さる。

追い込まれた相手は泣きそうな顔になりながらボールを投げるが、大地にキャッチされてしまい、その時点で失格が決まった。

大地の通過が決まり、同時に四次テストも終了したのであった。

——海堂高校野球部セレクション四次テスト、46名中23名突破——

四次テストも終わり、ついに最終テストとなる。試験官の人数が1人増えていたが、もはやそれを気にする余裕は受験生にはなかった。

そして、5列に並んだ受験生を見ながら北川が少し満足そうな顔をする。

大地だけは首を傾げていたのだが、北川から最終テストの説明を聞いて驚愕の顔をするのであった。

第六十四話

「最終テストまで残った23名の諸君。いよいよ君らが海堂の一員となれるかどうかを決する五次テストを行う！」

グラブやバットを使わないここまでのテスト内容に内心納得していなかった者もいるだろう……。

だが安心したまえ。最終テストは思い切り野球の技術を競ってもらおう」

北川が最終テストの説明を始める。

今並んでいる列の受験生でチームを組み——AとEの5チーム編成である——トーナメント試合を行うこと。

そして、トーナメントに勝ち残ったチーム全員が晴れて海堂野球部セレクションの合格者になる。

そこまでの説明を聞き、その変則的な試合に対して、異議を唱える者が現れた。

「ちよ、ちよつと待ってください！ 5人でまともな試合なんて出来ないですよ！」

しかも個人の能力と関係ないじゃないですか！ もし下手な奴と組んで負けたりしたら——」

「——バカか、貴様らは」

異議に対して同調をして「運だ!」、「すごい良いピッチャーのいるチームが有利だ!」といった言葉を一蹴する。

「そんな下手くそや、そんな良いピッチャーがここにいますと思っているのか?」

ここまで残った奴らにそんな下手がいるわけがない。ましてや海堂のスカウトにも引つかからなかった程度の連中にそんな飛び抜けた天才がいるわけがないんだよ。

つまり大差ないってことだ………いつものセレクションならな」

北川は小馬鹿にしたように薄く笑っていたが、すぐに真顔になる。

大地の並んでいる列をちらつと見たあと、話し続ける。

「貴様らの何人が知っているかはどうでもいいが………そこにいる55番、56番、57番は貴様らとは才能が違う。」

シニアの全国大会で優勝した“横浜シニア”のメンバーだ。ベストナインにも選ばれている。

色々あつて今回のセレクションに参加しているが、今までを見ていて分かったであろう——貴様らとどれだけ能力の差があるのかを」

「だ、だったら余計に不利じゃないですか!! そんなメンバーがいるチームが有利に決まってる——」

「——何度も言わせるな。列に並んでいる人数をちゃんと見たのか？」

「そ、それは……」

他の受験生の並んでいる4列は5名でチームが出来ているのだが、大地のチームだけは大地、吾郎、寿也の3人だけだった。

大地達のEチームは3人だけで他のチームに勝たなくてはならないのだ。

「そして、ここから合格条件に追加をする。Eチームは残りの全チームと対戦してもらう。」

もしEチームに勝つことが出来れば、その場合はトーナメントで優勝してなかろうと、全員を合格にしてやろう。

そしてEチームが合格する条件は、4チームに完勝することだ。トーナメントに参加することは許さん」

Eチームに対して、明らかに不利な条件。ここまで特別扱いされているEチーム——もちろん悪い意味だが——を見て、誰も文句を言わなくなった。

大地は北川の後ろに並んでいる1人の男に対して睨んでいた。

その男は自分が睨まれていることに気付き、大地に向かって笑みを見せるのであった。

(あの野郎……ここまでやるのか。……上等じゃねーか)

大地は心の中で悪態を付き、なんとしても合格してやろうと意気込む。説明が終わり、チーム別のゼツケンが配られて付け替える。

ちなみにチームは原作とほぼ変わりがなく、吾郎と寿也がいたところに山根と小森が入っていた。

【チーム分け】

Aチーム：山根、小森、泉、寺門、三宅

Bチーム：高山、松宮、西沢、江口、矢部

Cチーム：香取、唐沢、宮本、佐々木、森本

Dチーム：新見、田中、高見、松本、小林

Eチーム：大地、吾郎、寿也

トーナメントの一回戦はAチーム対Dチーム、Bチーム対Cチームで始まった。

Aチームが後攻で試合が始まる。大地達は少しでも全員のデータを得ようと試合を観戦していた。

ポジションはほぼ変わらず、ピッチャーが寺門でキャッチャーが小森、一・二塁間に三宅が入り、二・三塁間に泉が入っていた。

ただし、ここからは大地が思っていたポジションと違っていた。山根が外野を守ると思っていたのだが、外野には誰もいなかった。

その代わり、サード側に前進守備をして山根が守っていたのであった。

もちろんこれは小森の作戦である。小森はリトル時代に全国優勝した実績を知られており、それが寺門達に意見を言える立場を獲得していた。

そして、寺門の球を受けて今回の作戦を考えついたのであった。

（寺門君の重い球は、簡単に外野には飛ばせないからね。もしバント作戦なんて来られたら、それだけでかき回されてしまうし）

今回の作戦。山根にバント処理を任せ、それ以外の打球を泉と三宅がフォローするというものだ。

寺門が低めに投げれば、今回の作戦は可能だと判断していた。

実際にこの作戦がハマリ、1回表をAチームは無失点で切り抜けるのであった。

「な、なんやあいつ……」

「中学の部活とは言え、伊達に県大会準優勝はしていないってことか」

「ああ、俺だつたらあの打球は絶対に処理できなかった」

1回表にあつたこと、それは山根による守備の上手きにあつた。

Dチームの1番打者が、シニアで寺門と同じチームだった新見のアドバイスで、寺門に打球処理をさせようと一塁側にバントでボールを転がすが、そのバットの角度を見た山根が一塁線へと猛ダッシュをする。

そのままボールを捕り、三宅に投げて1死とする。ワンアウト

それを見た2番打者は思い切りボールを引っ張り、山根の手前にボールを叩きつけることに成功する。

しかし山根は、最も捕りづらいハーフバウンドをした鋭い打球を難なく捕球し、ツーアウト2死とするのであった。

こうなると一塁側に流すかしかないと思われるが、内角低めに投げられる寺門の打球を流してもポテポテになるのは目に見えていた。

3番で入った新見はAチームが上手く考えたと思い、それならばと寺門に向かってピッチャー返しをした。

寺門はどうしても投球後のボールへの反応が遅い。それはシニア時代から指摘されていたことであり、海堂の推薦に選ばれなかった理由の1つでもあった。

(よし！ これで抜ければランニングホームラン——)

新見の思惑通り、ピッチャー返しに成功したのだが、寺門と小森の間に黒い影山根が現れたかと思うと、新見の打った球はそのまま山根のグラブの中に入っていった。

山根が打球に反応をして飛び込んでいたのだ。そしてこの回の全てのアウトを山根1人で処理をして、チェンジとなった。

1回裏。寺門からの情報で、新見はシュートとチェンジアップを武器にしていると分

かる。

特にシュートのキレは寺門から見てかなり鋭いとのことだった。

Dチーム自体もそれを意識して、三塁側へ守備を固めていた。

1番打者は本人の希望により、山根が入ることとなった。

1回表の守備を見せられた後では、誰も文句が言えないのも当然である。

そして、初球——

——大きな打球音とともに、ボールはそのままレフトのフェンスを越えていった。

「「おっしやあああつ!! サヨナラーっ!!」」

山根はゆつくりとベースを一周して戻ってくる。

新見は自身のシュートを柵越されたことに対して、青い顔をしていた。

周りのチームも山根の飛距離に対して驚きの声を上げるのであった。



試合は順調に進み、決勝はAチーム対Cチームの試合となる。

Cチームの先攻により、試合がスタートする。ここで、初戦でほとんど動いていなかった小森が動きを見せる。

おもむろに立ち上がると、1番の香取、2番の唐沢を敬遠したのだった。

「あ、あのキャッチャー、何考えてるんだ!?!」

サドンデス方式でなるべくならば1点も与えたくない状況なのであれば、わざわざチャンスを手にとる必要はない。

それをわざわざ無死、一・二塁にした小森の行動には誰しも首を傾げざるを得ない。

しかし、ここからの3人は初戦と同じく山根の守備で守りきり、3死スリーアウトでチェンジとした。

「あのキャッチャーと前進守備しているあの子……やるわね」

「ああ、まさかこの状況で敬遠とはな」

「セレクションに受かるのはあだし達に決まってると思ってたけど、最後の最後にちよつと面倒な邪魔が入ったわね」

香取と唐沢は真剣な表情に変えて、守備につく。

1番打者は小森。初戦でのデータはないため、香取達は勝負をする。

初球。香取の高速スライダーが外角低めいっぱいになり、ワンストライク。

小森はまるでボールの曲がる角度を見るように見逃す。

(……嫌な見逃し方をするな。コイツは歩かせるか?)

(何言ってるのよ。あたしの高速スライダーが打てるわけないじゃない!)

香取は唐沢の敬遠指示を断り、高速スライダーを続けて投げる。

小森はバットを振るが、空振りをしてツーストライクと追い込まれる。

(ふふふ。そんなスイングじゃあ……打てないわよボクウ!!)

小森の空振りに気を良くした香取は、3球続けて高速スライダーを投げる。

三振に仕留めたと思った香取だったが、小森はボールに当ててファールにする。

(粘るじゃない……これでどうかしら!)

またもや高速スライダーを投げるが、またもやファールボールにする小森。

そこから意地になった香取は唐沢の指示を無視して、高速スライダーを投げ続ける。

小森は冷静にバットにボールを当て続け、17球ほど続けたのちフォアボールとなっ

て一塁へと進む。

「「よっしやー!」」 続け続け!」

「……ちっ」

「アイツには粘られたな。初めから打つ気がなかったのか？」

「そうかもね。あたしの高速スライダーは一朝一夕で打てるようなものではないから」
「まあ次のバッターに集中すればいいさ」

唐沢は苛立つ香取に声を掛けて、守備位置に戻っていく。

次のバッターの山根が打席に入る。

(コイツは要注意人物だぞ！ 最悪歩かせろ)

(……分かったわ)

唐沢の指示に今度は従い、香取は初球ボール気味に高速スライダーを投げようと足を上げた——瞬間、香取の後ろから「走った！」という声が聞こえた。

しかし、香取は投球体勢に入ってしまったので、もう投げる以外は何もすることが出来ない。

コントロールを乱さないように気を付けるので精一杯だった。

(初球盗塁だと……?!?)

唐沢は油断していた。20球近く粘ってフォアボールを選んだ小森よりも、1試合目でホームランを打った山根に集中していたためだ。

結果、盗塁は成功し、無死、二塁となる。

続けて、2球目。小森は再度走り出し、ギリギリではあったが、3盗に成功するのである。

「……どうする？」

「どうもこうもないわよ。前進守備で固めるしかないわね」

Cチームはスクイズを警戒して1人を三塁側に置き、前進守備。

香取が一塁側のバントのカバーをして、残った選手がセカンドとショートはやや後ろに立って、強打への警戒を行った。

バントをされなかったとしても、香取は高速スライダーを外野まで打たれないという自信があったのだ。

香取が構えて、投球モーションに入った瞬間に山根がバントの構えをして、小森が走り出す。

三塁で前進守備をしていた宮本が走り、香取も投球後に一塁側寄りに前進する。

山根のバットにボールが当たり、香取と宮本が処理できると思っただが――

――ボールは前進してきた宮本の頭を越えて、三塁ベースの手前で止まったのだっ

た。

そして、小森がその間にホームを踏んでサヨナラとなる。

(プ、プッシュバンと……だと!?)

この試合、全ては小森の指示だった。

香取と唐沢は前の試合で連続ホームランを打っているため、無闇に勝負するのであれば歩かせたほうが被害は少ないと思ひ、敬遠した。

その後の守備に関しては、山根がいれば問題ないと判断。サヨナラにならない状況¹であれば、この選択は間違っていない。

1回裏の攻撃に関しては、小森の実力であれば高速スライダーからヒットを打つことは出来た。

しかし、高速スライダーの軌道をきちんと見極めたいということと、香取へプレッシャーを与えるため、そしてその後の盗塁を少しでもCチームの頭から排除するために粘ってフォアボールを選んだ。

そこで山根を次の打席に入れることにも意味があった。

山根は前の試合でサヨナラホームランを打っているため、香取と唐沢からすると警戒すべき打者である。

最悪歩かせても良いくらいの気持ちで、厳しいコースに投げてくると小森は読んでいた。

だからこそその初球スチールをして相手の意表を突き、その後の3盗にも成功することが出来ていた。

極めつけは山根のスクイズによるプッシュバントである。

これは1度しか成功しないであろう作戦だが、小森には十分勝算はあった。

ここまででCチームはかなり混乱していたため、バントされる可能性は考えても、プッシュバントでサードの頭を越えてくるとまでは考えられなかった。

香取が一塁側にバントカバーへ入るのは読めていたため、マウンドに向かってバントをすることも小森は考えていた。

しかし、万が一香取がマウンド側もカバーでできるように動いていた場合も考えると、サードの宮本の頭を越える方が確率は高かった。

そう。小森は確率が高い方を選ぶという、キャッチャーとして当たり前のことをしていただけたのだった。

賭けになる部分もあったが、山根の実力を考えると分が悪い賭けではなかった。

結果としてその作戦は全てハマリ、Aチームは優勝を果たしたのだった。

喜んでいるAチームを横目に、香取と唐沢はホームベースの横に立っていた。

「完璧にしてやられたわね」

「ああ。あそこまで小細工されて見事にハマると、逆に気持ちいいもんだ」

「あの2人………もしかしたらテスト入部で海堂のトップを脅かす存在になるかね」

第六十五話

「ではトーナメント戦が終わったところで、次はEチームとの試合を開始する！」

なお、初めに言った通り、Aチーム以外の3チームもEチームに勝てばセレクション合格とするので油断をすることはないように」

北川の話聞き、本当にもう一度チャンスが有ると確信したB、C、Dチームは安堵の表情をする。

ルールとしては、先程と変わらずサドンデス方式。

ただし、Eチームは3人のため、もし大地達が3人も塁に出た場合は、残りのチームから代走を選び3塁にいた人が次の打者となる。

「まずはDチームとだ！各自用意しろ！」

審判はトーナメント戦のときと同じく大貫が務める。

整列したときに一瞬だけ大地達を見て、声を掛けたい衝動に駆られるが、審判として公平にしなくてはいけないため、すぐに気持ちを入れ替える。

じゃんけんの結果、先攻はDチームとなった。

「それでは始めるぞ！プレイボール！」

大貫の合図で試合開始が告げられる。

ポジションはピッチャーが吾郎、キャッチャーが寿也、そして大地はファーストとセカンドの間に立っていた。

バント処理は吾郎が行い、大地がファーストに入るだけというシンプルな布陣である。

(何だよこれ……。こいつらがいくら全国優勝チームのメンバーだったとはいえ、5人対3人なんて野球になるのかよ……)

Dチームの新見は試合内容の不平等さに不満を持ちつつも、打席に立つ。

(いまいち納得出来ない部分はあるが、こいつらに勝てば海堂に入れるんだ……。遠慮はしないぜ)

新見が構えたのを確認した吾郎は、ワインドアップからボールを投げ放つ。

キャッチャーミットへ吸い込まれるボールと、ミットで受けた際に鳴った大きな音にその場にいた全員が静まり返った。

新見はボールが通ったことすら認識できず、いきなり後ろに大きな音が鳴ったことで驚きのあまりビクツと震えた。

「ス……ストライク……!」

寿也は「ナイスボール!」と何でもないような様子で吾郎へボールを返す。

大地は腕を組んで立っているだけだった。

(な……なんだ、あのスピードは……?)

大貫は真正面からボールを見ていたにも関わらず、自身の目を疑っていた。

吾郎のスピードは、夏の全国大会のときよりも確実に速くなっていたからだ。

(たしか夏の大会時にはMAXでも145km/hが限界だったはず……!　だが今の球は確実に……)

横で見えていた試験官達も驚きのあまり黙ってしまったが、その中の1人がなにかの指示を出すと、指示された男は校舎の方へと走っていったのであった。

その間も試合は進み、試験官の男が手に機械を持って校舎から戻ってきたときには、ちようど3スリーアクト死でチェンジとなったところだった。

「吾郎、ナイス!」

「吾郎君、ナイスピッチ!」

大地と寿也は、吾郎を褒めつつもベンチへと戻っていく。

Dチームは守備につこうとグラウンドへ向かうが、全員の顔が真っ青になっていた。

「お待たせしました、江頭チーフマネージャー。あれ?　もうチェンジになってしまったのですか?」

「……ええ。スピードガンを使うのは、次の試合の時になりそうですね」

江頭にスピードガンを渡した男は、周りの空気を察して黙って席に座った。そして1回裏の攻撃が始まる。打席には大地が向かっていた。

(な……なんだよ、あのスピード。あんなの打てっこないじゃんかよ……)

新見はマウンドで泣きそうになりながらピッチング練習をしていた。

新見だけではない。Dチーム全員が諦めたような顔で俯いてしまっていたのである。

大地が打席に入り、構える。新見は目に見えぬ大地の威圧感に恐怖を覚えながらボールを投げるのだが――

もはや敗色濃厚の雰囲気のあるボールでは大地を抑えることは出来ず、中途半端に投げられた新見のストレートをセンターのフェンス越えまで運ばれて、試合終了となった。

大地はゆつくりとベースを回り、ホームへ到着した後に吾郎、寿也とハイタッチを交わすのであった。

「1対0でEチームの勝ち!」

「「ありがとうございます!」」

「「「……………」」」

Eチームはきちんと挨拶をするが、Dチームはショックのあまりまともに声も出せな

いくらい落ち込んでしまっていた。

同じ中学三年生でここまで実力が違うと見せつけられては、そこまで落ち込むのも仕方がない部分もあった。

「よし！ 次はBチームとの試合だ！」

北川の声にBチーム全員がビクツとなる。北川から「どうしたBチーム！ さつさと準備しろ！」と言われて慌てて準備を始めるBチーム。

しかしDチームとの試合を見たあとのBチームは何もすることが出来ず、先程と同じく1対0で敗退するのであった。

この試合では、試験官達がスピードガンを見て、驚きの声を上げていた。

「まさか中学生……それもセレクションでこのスピードを見るとは」

「本田吾郎、やはり逸材だな！」

スピードガンで出た数字は151km/h。それはこのグラウンドにいる全員を驚かせるには十分なスピードであった。

そして、このセレクションに参加している全ての選手の戦意を喪失させるにも十分な数値であった。

「江頭さん、もうこの試合を行う必要はないんじゃないですか？ 本田兄弟と佐藤寿也は特待生での入学を認めていいのでは——」

試験官の1人が江頭に進言をするが、江頭に睨まれて黙ってしまふ。

「いえ、まだですよ。彼らへの特待生としての入学条件は、セレクションでダントツの成績を示すことです。」

まだトーナメント初戦で負けたクズどもに勝っただけです。これを勝ち上がった残りのチームに行つてこそ、彼らは資格を得るのですよ」

「し、しかし！ これでもし他の学校へ行つてしまつたらどうするんですか？ 多少は譲歩してでも——」

「——いえ、どうせならもう少し見ましよう。なに、わざわざ海堂うみどうのセレクションに参加してきているんです。」

1回特待生として断つた彼らが、どれだけ誠意を見せてくれるのかを見せてもらいましようよ」

江頭が悪い笑みを見せて、教頭や北川を含む試験官全員を黙らせる。何も言えない雰囲気の中、Cチームとの試合が始まるのであつた。



じゃんけんの結果、Eチームが先攻となり試合がスタートする。

1番打者は寿也。香取と唐沢はマウンドで作戦を練る。

「どうする?」

「……あたし達に出来ることは 高速スライダーしかないでしょ? いくら奴らでも簡

単には打てないはず……」

「Aチームのときみたいに粘ってきたら?」

「それこそあたし達の評価が上がるじゃない。シニア全国優勝メンバーでもあたしの高速スライダーは打てないってね」

「……そうだな。じゃあストレートと混ぜながら決めていこう」

「オツケー!」

唐沢は作戦を立てた後、ホームに戻っていき全員に声を掛けて座る。

寿也はその様子を見て、バッターボックスに入るのであった。

「プレイボール!」

試合が開始して、香取が構えて初球を投げる。

「ボール!」

初球は外角真ん中にストレートを投げるが、わずかに外れてワンボールとなる。

2球目。今度は外角低めに高速スライダーを投げて、ストライクとなる。

(よし! あたしの高速スライダーは初打席で打てる代物じゃあないわ!)

3球目。同じコースのボール1個分外側へ投げた高速スライダー。

これを寿也はバットを振る。香取も唐沢も引つ掛けたと喜びの顔をするが、寿也が打ったボールは右中間のフェンスを越えてホームランとなった。

「え……な、なんで……」

香取はショックのあまり、マウンドで膝をついてしまう。

今までの人生で高速スライダーを初打席でホームランはおろか、まともなヒットすらも打たれたことがなかったためである。

唐沢も一緒の中学でバッテリーを組んでいて、香取の高速スライダーがどれだけ凄いものかを知っている。だからこそ、自信を持つて最高のコースに投げこまれたボールを打たれてしまったことに同じくショックを隠せなかった。

しかし、ゲームはまだ始まったばかりのため、まだ続けなくてはいけない。

香取達はまだショックから立ち直れずにはいたが、次の打者へと気持ちを切り替える。

そしてここからは、彼らにとって地獄のような出来事が始まるのであった。

続く、大地、吾郎からも同じくホームランを打たれてしまい、3対0と更に点差が広がる。Eチームを止めることが一切できず、点差がどんどん広がっていくのであった。

「はあ……はあ……。な、なんでよ!!」

半ば泣きながら投げた高速スライダーを大地が打ち、フェンスを越えていく。香取はそのまま泣き崩れてしまい、立ち上がることが出来なくなっていた。

(……もうダメだな。ありやあ)

大貫は試合続行不可能と判断し、キャッチャーの唐沢に確認を取る。

唐沢は一瞬だけ香取を見て、残りのメンバーを見渡した後、大貫に頭を下げて試合終了をお願いするのであった。

「……分かった。まだ一回表だが、CチームとEチームの試合は続行不可能とし、Eチームの勝ちとする!」

試合結果は17対0。Cチームはアウトを1つも取れずに敗退するのであった。

その様子を江頭以外の試験官、A、B、Dチームの全員が可哀想な目で見ていたのであった。

(ふふふ……ふははははは! 素晴らしい! 素晴らしいぞ!)

江頭は大地達の活躍を見て、心の中で歓喜の声を上げていた。

海堂の特待生推薦を1回断ったことは気に食わないことではあるが、それでもわざわざ海堂のセレクションを受けに来るといふことは、他の高校の特待生の条件が納得できるものではないのだろうと考えていた。

それであれば最上級の条件を出せば、大地達は喜んで海堂に来るに違いないという認識を持っていたのだ。

（1年目から一軍に上げて、レギュラーとして使ってやろう。その実力はあるし、1年から海堂のレギュラーになるだけでも十分なニュースになる。

それに加えて、本田兄弟の商品価値はまだまだあるからな……）

「それでは最後の試合を始める！」

江頭が皮算用をしている間に最後の試合が始まろうとしていた。

最後は海堂入りを決めたAチームとの試合である。しかしここで小森から待ったが掛かる。

「すみません」

「……なんだ？」

「この試合、僕^{Aチーム}たちは棄権します」

「な、何を言っている！ そんなこと認められるはずがないだろうが！」

小森の突然の棄権宣言に対し、北川は認められないと一蹴する。

「ですが、正直に言ってAチームとEチームには明らかに大きな実力差があります。せめて僕達が9人で戦うのであれば、勝負にもなるかもしれないのですが」

「なんだと——」

「——いいじゃないですか。それでやりましょう。最後はAからDの選抜チーム対Eチームの試合で」

「で、ですが、それではあまりにも……!」

「……………何か意見があるのですか?」

小森の突拍子も無い提案に対し、江頭が賛成をしたことでまさかの選抜チーム対Eチームでの試合をすることになった。

特待生が掛かっているEチームは、反対をすることは出来ない。大地はため息をつき、小森を見る。

小森は大地と目を合わせると、リトル時代から変わらない笑顔で応えるのであった。

(小森め…………やるじゃんか!)

(ごめんね、大地くん。僕はどうしても君達に勝ちたいんだ!)

海堂高校野球部セレクション、その最後の試合が始まろうとしていた。

第六十六話

「それではもしEチームに勝つことが出来たら、今回参加したメンバーはセレクション合格としましょう」

その言葉にB、C、Dチームの受験生は期待を込めた顔で江頭を見る。

ただし、誰をメンバーに加えるかはAチームが決めることとなっていた。

小森が誰をメンバーに加えるか悩んでいたところ、失格したチームのうちの2人から不参加の申し出があった。

「俺は……止めておく」

「……あたしも。正直言つて、彼らには何人いても敵う気がしないわ」

それは新見と香取であった。2人は直接対決をして、完膚なきまでに叩き潰されてしまったせいで心が折れてしまっていた。

（まあ、仕方ないよね。唐沢君だけでも試合に出てもらえると嬉しいんだけど……）

小森は唐沢を見る。香取の相棒である唐沢も、もしかしたら出たくないと言いつつ可能性があった。

不安そうな顔で見る小森の視線に気付いた唐沢が小森に話しかける。

「俺も出ないぞ……と言いたいところだが、万が一にでもこの選抜チームがEチームに勝てたとしても海堂に入らなくてよいのであれば、出ても構わない」
「まああくまでセレクションは海堂野球部に入る権利を得るだけだからな。それは好きにするが良い」

北川の了承を得たため、唐沢の選抜チーム入りが決定する。
そして、小森が考えた結果、チームメンバーと打順が決定する。

◇セレクション選抜チーム スターティングメンバー

1 番：シヨート 泉

2 番：センター 山根

3 番：キャッチャー 小森

4 番：ファースト 唐沢

5 番：サード 三宅

6 番：ライト 矢部

7 番：セカンド 西沢

8 番：レフト 高見

9 番：ピッチャー 寺門

「よし！ それではこれからセレクション選抜チーム対Eチームの試合を開始する！

ルールは先程と同じサドンデス方式だが……Eチームの後攻で始めることとする。
またボコボコにされて途中で試合が終わるのも良くはないからな」

「……よろしくお願いします!!」

大貫の言葉に誰も反対すること無く、Eチームの後攻で試合が始まる。

1回表。セレクション選抜チームからの攻撃で、シヨートの泉がバッターボックスに入る。

(うわあ……本田吾郎の球なんて打てる気がしないんだけど。とりあえず、小森の言うとおりにやってみるか)

「プレイボール！」

吾郎が初球を投げる。ジャイロボールが外角低めに決まり、ワンストライクとなる。

泉は吾郎の球を打席で見て、外角のボールにも関わらず腰が引けてしまっていた。

しかし、初球は小森の指示で見逃すように言われていたため、泉にとって大切なのは次の球だった。

「バントだ!!」

吾郎が投げようとしたところで、バントの構えを見せる泉。

しかし、吾郎は気にせずいつものように腕を振り抜く。

内角低めに投げ込まれたボールに泉がバットを持つてくるが――

「ストライクツー！」

「泉がバットに当てられない!？」

「なんやて!？」

横須賀シニア時代から一番打者である泉は、バントが得意であった。

打つことは出来なくても、バントで前に転がすことは出来る。

そう自信を持っていたのだが、吾郎のボールに対してバットにかすらせることすら出来なかつた。

「ストライク! バッターアウト！」

「うっし! ワンアウト 1死！」

大地はセレクションの試験で変則野球――ここまでおかしくなるとは思っていなかったが――が行われることを知っていた。

その際にバント攻勢が取られる可能性も考えており、吾郎へはあることを伝えていた。

バント攻撃なんてものは、力づくでねじ伏せると。

原作での吾郎は、海堂の特待生との歓迎試合で野球に対しての自身の考えを述べていたのを大地は覚えていた。

確かにそれも一理あるとは思っていたが、そんな持論を伝える必要もなくバント攻撃程度をねじ伏せることが出来ないで、江頭が認めるレベルの成績でセレクションを通過することなど出来るわけがないと思っていた。

そのため、自身の気持ちや球の勢いに乗りやすい吾郎には、よりシンプルに伝えることで実践させようと考えていたのだ。結果、バントの構えをしていた泉にかすらせることなく三振に仕留めていた。

2番打者の打順になり、バッターボックスで構える山根。

山根には、小森から2つの指示が出ていた。

もし泉がバントで出塁したのであれば、同じくバント攻撃で攻めるということ。

しかし、泉がバントすら出来ない状況になるのであれば、真つ向勝負で打ち崩そうと。(小森……バント攻撃が通じない可能性が高いと思っていたんだな。それであれば、今後敵になるかもしれない本田吾郎の球を見極めようってことか?)

ここまで露骨な差別をされて大地達が海堂に入る可能性はかなり低いと小森は思っていたため、それであれば今のうちに吾郎達の実力を見極めて、高校で対戦するときの

参考にしようと考えていた。

しかし、それでも小森も山根も負けるつもりは一切なかった。9人対3人という人数差があれば、少なくとも守備の面では有利になりやすい。

あくまで確率論ではあるが、選抜チームは前に転がせば得点になる可能性がある。Eチームは前に飛ばすだけでは得点になりにくい。

その部分でも少なからずプレッシャーを与えられるというのも考えていたのだ。

(なににせよ、俺か小森おみが本田の球を打てないと厳しいな……)

吾郎がワインドアップからジャイロボールを投げ込む。

山根は全力でバットを振るが、大きなミット音とともにストライクのコールが告げられる。

(は……速い。外から見ているよりも数段速く感じるぞ……!)

山根は冷や汗をかきながら2球目のボールを待つ。

自分でも思っているよりボールの下を振っていることに気付き、次はボール1個分上を振るが、それでもボールの下をバットが通過し追い込まれる。

(ボール1個分上を振ってもまだ当たらないか……)

それならばと今度はボールの2個分上を振る山根。

吾郎の投げられたジャイロボールは山根のバットに当たるも、ファールチップとなり

寿也がそのままキャッチして三振となった。

「ストライク！ バッターアウト！」

「……くそっ！」

山根は悔しそうな顔をして、バットを地面に叩きつける。

そしてそのままベンチに戻るが、小森とすれ違う際に吾郎達にバレないようにアドバイスをする。

「小森……ボール一個と半分だけ上を振れ。それで本田の球を打てるはずだ」

その言葉を聞いた小森は山根の方を振り返りそうになったが、せっかく山根が持つてきてくれた情報チャンスを無駄にしたくない小森は黙ってバッテリーボックスに入る。

（山根君、ありがとう。絶対に打ってみせるよ！）

直接対決するのは、三船リトルでの練習以来となる吾郎と小森。

2人は笑顔でお互いを見ていた。

2死、ランナー無しツニアウトの状況だが、一打でランニングホームランとなる可能性が高いのでそこまでピンチという気持ちは小森にはなかった。

まずは吾郎の初球。ジャイロボールを真ん中低めに投げ込み、ワンストライクとなる。

そして、小森はボールの軌道を観察していた。

(……この低さでストライクになるのか。確かに山根君が言っていたことは間違いなさそうだね)

続いて第2球目。外角真ん中に投げられたジャイロボールを小森は振り、ボールに当たってファールとした。

「おいおい……さっきのやつもそうだけど、あのボールに当たってたよ」

「俺じゃあ掠る気もしないぜ」

選抜メンバーに選ばれなかったが、試合を観戦していた受験生達が口々に山根と小森に驚く。

しかし小森がボールに当てたのは、この2球目だけではなかった。

3球目、4球目、5球目とファールボールだったが、しっかりとボールに当てていた。しかも初めは振り遅れていたのだが、徐々にタイミングが合ってくる。

(よし！ 次こそ絶対に打つ!!)

そうして吾郎から投げられた第6球。

小森は確実に150km/hのジャイロボールに当てられるタイミングでバットを振るが――

小森がバットを振ってから少し経ったあと、ボールはゆつくりと寿也のミットに入っていたのだった。

「ストライク！ バッターアウト！ チエンジー！」

（ス……………スローボール……………!?!）

小森は本日初めて吾郎が投げたスローボールで三振になっていた。

それは小森だけでなく、江頭含めた試験官全員の頭の片隅にも無かった。

吾郎の150 km/h超えのジャイロボールが与えた衝撃は、そこまで大きかったのだ。

確かにこのまま同じジャイロボールだけ投げ続けていたら、いつか小森か山根に打たれている可能性もあったであろう。

そして、3人しかいないEチームにはその打球を止められる可能性はほとんど無かった。

だからこそ、あえてジャイロボールを見せ球にしたのであった。

小森としては悔しいであろう。なぜならそのスローボールとは、三船リトル時代に吾郎と小森が協力して最高の武器になるまで磨き続けてきた決め球だったからだ。

吾郎のジャイロボールによるストレートが150km/h超えるのに対し、スローボールは同じフォーム、同じ腕の振りにも関わらず80km/hを切るスピードしかない。

しかも吾郎のジャイロボールは——山根の判断通り——通常のストレートよりもボール1個半上を振らないといけないが、スローボールの軌道は通常のストレートの軌道と同じため、今までジャイロボールを見ていたバッターにとっては空振りになる可能性がかなり高かった。

結果として、小森が三振するのも仕方がなかったのだった。

そして1回裏の攻撃は呆気なく終わってしまった。

1番打者として入った大地がセンター前にヒットを放つと、2番の吾郎がレフト前にヒットを打つ。

最後には3番打者の寿也が左中間のフェンス越えとなるホームランを放ち、3対0で試合終了となった。

ここまで呆気なかったのは、セレクションのトーナメント戦でレベル違いの活躍を見

せていた小森と山根が連続三振をしてしまったという事実には、寺門含め全員の士気が下がってしまったのも原因である。

もしどちらかが打って得点に繋がるようなことになっていた場合、最後の結果は変わっていたのかもしれない。

しかし、結果は結果である。それを覆すことは誰にも出来ないものであった。



試合終了後、大地達3人は江頭、大貫、北川を含む試験官の前に呼ばれて横一列に並んで立っていた。

周りには帰り支度をしつつも、何が始まるのか気になって見ていた受験生たちが残っていた。

江頭が両手を広げて前に出ながら、大地達に話しかける。

「今日はとても素晴らしかったよ！ 3人とも文句なしの合格だ！ 初めに話していた通り、特待生として受け入れようじゃないか！

条件としてはそうだね……」

江頭の出した特待生としての条件は破格であった。

入学から一軍昇格でレギュラーが決定であること、入学金や授業料はもちろんのこと、もし寮に入る場合は寮費、そして練習中に使う道具の費用や遠征費なども全て無料。「あとは、本田君達だが……お母さんと一緒に海堂高校の近くに引っ越してきてはどうか？ 特別に自宅からの通学を認めよう。そして、その引越し料金だけでなく、住まいの賃料もすべて海堂こちらで持とうじゃないか！」

江頭は海堂附属中学のときに大地と吾郎がスカウトを断った理由を知っていた。そして今回も同じ理由であるであろうと予測を立てていたのだ。実際にその考えは正しく、大地達にとって本当に魅力的な条件となっていたことには違いなかった。

そう。これだけで終わっていれば、大地達は海堂に入学していたかもしれないのだ。

江頭はその顔を歪めるように笑いながら話をする。

「ただし……それには一つだけ条件がある」

「……条件、ですか？」

「ああ。それはね——」

江頭は右手を首の前まで持ってきてサムズアップの形を取ったあと、親指をそのまま

下に向けた。

「今、この場で、私達……いや、この私に！ 頭を下げて！ 謝罪をなさい！」

一瞬で全員が凍りつく。大地達だけではない、周りにいた受験生も江頭の後ろにいた試験官達も自身の目と耳を疑った。

「いや、江頭さん……さすがにそれは——」

「——何を言っているんですか？ こいつらは海堂のスカウトを蹴るなどといった恥知らずな行爲を行ったのですよ？」

その侮辱行爲に対して、あまつさえ最高級の待遇でもってこちらで受け入れてやるのです！ いくら子供とはいえ、頭を下げた謝罪をして当然でしょう！」

もはや江頭の行動を止められる者は試験官の中にはいなかった。

肩書はチーフマネージャーとはいえ、海堂高校でかなりの権力を持っている江頭は総監督である早乙女ですら何も言うことが出来ず、この場にいる中では一番高い役職である教頭クラスでも無闇に意見を言うことは出来なかった。

「さあ、3人が頭を下げて謝罪をするだけでいいんだよ。そうすれば今までの行爲に関しては、全て水に流してあげよう。」

そして、先程言った最高級の待遇で君達を海堂に受け入れようじゃないか」

その言葉に今まで我慢していた吾郎が「てめえ……！」と言いながら殴りかかろうと

するが、大地が右腕を横に差し出して吾郎を止める。

「大地！　なんで止めるんだよ！　この野郎は一発ぶん殴ってやらないと気が済ま—
—」

吾郎が大地に対して文句を言いながら横を向くが、大地の今までに見たことがない迫力にも言えずに黙ってしまった。

今の大地の顔は少し離れて見ると、一見では普段と何も変わらない顔をしているように見えるが、その怒りの威圧感は凄まじく、吾郎だけでなく反対側の隣にいた寿也も後ずさりするほどであった。

「江頭さん。あんたの言いたいことは分かったよ。それじゃあ俺らからの返事だけ—
—」

「—おお、そうか！　君なら分かってくれると思つたよ！　それならさっさと頭を下げて謝罪をしたまえ！—」

「……それで俺らの返事だけど、こんな高校、もし頭を下げられたとしても入るわけがないだろうが！—」

「……………なんだつて？—」

「あんたみたいな人間ケツがいるところは、どんなに条件が良くたつて入るわけがないって言つたんだよ！—」

甲子園常連、天下の海堂高校？　だからどうした！　あんたらは来年から俺達が卒業するまでの間は、一度も甲子園の土を踏めることはないと思え！」

大地の大声による怒りの宣言に対して、吾郎は「俺も同じだ！　ばーか！　ばーか！」と子供のようなことを言っていたが、それが江頭の怒りを更に煽ることになる。

大地の言葉の後、俯いていた江頭だったが、その顔を上げたとき——冷静を装ってはいたが——目が血走っていて怒りの表情を全く隠せていなかった。

「ほう？　本田兄弟はよほど海堂には入りたくないみたいだね？　佐藤君はどうだ——」

「あ、僕も大丈夫です。大地君達と同じ高校に行くので」

寿也が冷静に言い放ち、大地達3人はそのまま帰り支度をしてグラウンドから出ていこうとする。

その後ろ姿に対して、江頭が大声で叫ぶ。

「ははは……ふはははははは！　いい度胸じゃないか！　海堂が来年から甲子園に行けないだって？　その前にお前達が入れる野球部があればいいけどなあ!!」

江頭の声を大地達は無視して、海堂高校を出ていった。

こうして、大地達が参加した海堂高校野球部のセレクションは終了するのであった。

第六十七話※

海堂高校野球部セレクションから1週間後。大地達3人は本田家に集まっていた。

今後のことで、3人にとって重大な問題が起きてしまったためだった。

「くそ、あのインテリ眼鏡め！ あのとときは大地のお陰でスツとしたけど、ぶん殴つておけばよかつたぜ！」

「大地君、これからどうするの？」

「ん、それなんだけどさ……」

大地達は海堂への進学が出来なくなったことで、次の進学先を探していた。そう、文字通り探していたのだ。

理由としては、この数日間に候補としていた5つの高校全てから「推薦の話をなかつたことにしたい」と連絡があつたためだった。

タイミングとしても確実に江頭が関係しているのは明白だった。

（あのとつつあんポーヤがまさかここまで影響力があるとは……）

原作時、海堂を辞めた吾郎に対し、引き抜き工作と称して野球部がある高校へ転校するのを妨害していた江頭。

しかし、それはあくまで海堂にいた生徒を引き抜いた疑惑を持たせるといった大義名分があつて行われた妨害だった。

まさかすべての高校から推薦取り消しという判断をさせるだけの影響力があるとは思つていなかったのだ。

「正直に僕たちも油断していたね。あの人の妨害があつたとしても、シニア大会で全国優勝もしている僕らを獲つてくれるはずだという慢心があつたのは否定できないし」

「大地、どうするんだ？ あそこまで啖呵切つておいて、野球部に入れませんでしただと格好悪すぎだぜ？」

「まあ………ね」

大地は歯切れが悪い回答を繰り返していた。

自らの考えの甘さが招いたことだったので、今後の策に対しても自信が持てなかったのだ。

そこに1本の電話が鳴る。

「はい、本田です」

「おお、大地君かい？ ……大貫だ」

電話の相手は大貫だった。今回の件での責任を感じているようで、謝罪を含めた電話だった。

「今回のセレクションは本当に申し訳ない。我々もまさか江頭さんがあそこまでのことをするとは思っていませんでした」

「いえ……それは仕方がないことだと思います。むしろ俺達も大人げないことを言っていたと思いますし」

「それだけじゃないんだ……もう気付いていると思うんだが」

「ええ、5つの高校からは連絡が来ました」

「江頭さんは君達から暴行を受けそうになつたと触れ回っていてね。そういつた噂が少しでもある生徒を受け入れてしまうと、各高校の野球部側としては問題になりかねないため、敬遠してしまっているようなんだ」

大貫は申し訳なさそうに今回の詳細を大地達に教えていた。

実際にセレクションのときに、吾郎は江頭に殴りかかろうとしていた。大地が直前で止めたとはいえ、危険性が高い生徒を入学させる——しかも特待生で——ことは難しいという判断になってしまうのも無理はなかった。

もし、入学後に本当に暴力事件が起こってしまった場合、野球部の公式戦出場停止処分などもあり得るからだ。

「……そういうことでしたか」

「本当にすまない。今回のことで俺が出来ることがあるなら、何でもする。これは君達

を裏切るようなことになってしまった俺からの誠意だと思つてほしい」

「分かりました。まあそれなら仕方ないですよね」

「え……？　そ、そんな簡単に諦めてしまつても良いのか？」

「もちろん諦めてはいないですけど、今から訴え出たところで各高校側の判断が覆ると思えないですし。むしろ推薦を取り下げられた理由が分かつたことで逆に安心しましたよ」

大地が今後どうするべきなのかを悩んでいたのは、江頭が各高校に推薦を取り下げさせた名目が分からなかったからだだった。

それが判明したことで、大地としても次に取るべき手が見えてきたのであった。

大貫との電話を終えた後、内容を吾郎と寿也に話したところ、吾郎は気まずそうな顔をしたあと、2人に対して勢いよく頭を下げる。

「大地、寿也……本当にごめん！　俺のせいでまさか推薦が取り消されてしまうなんて……」

「ん？　ああ、それはもう仕方ないよ。それよりも次を見よう。その前に、寿くんは今でも俺達と同じ高校に行きたいって思つてくれるかな？」

「……ふふ。ああ、ごめん。まさか吾郎君がこんな謝り方をしてくれたのが驚きだね。大地君の質問だけど、もちろんだよ。」

あのとき海堂行きを断つたのは、君達と野球をしたいからなんだ。僕らは何も間違つたことはしていない。……だから正々堂々僕らの力で海堂を倒して甲子園に行こう！」
寿也は笑顔で大地達と野球がしたいと伝える。

その素直な言葉に大地と吾郎は胸を打たれ、嬉しそうに笑いながらも3人で頷き合う。

「ちよつとちよつと！ 男3人で青春するのも良いんだけど、こつちには美人が3人もいるのにいつまで放っておくわけ？」

実は急遽集まつたはずの本田家にはなぜか涼子、清水、美穂の3人も来ていた。

涼子と美穂は大地と仲良くなるために、休みの日は暇さえあれば本田家に来るようになっていたが、清水は今日初めて本田家の中へ入っていた。

初対面のときは涼子と美穂からライバルと疑われていたが、彼女の好きな相手が吾郎であると知ると——元々清水のさっぱりとした性格の良さもあり——少しずつ仲良くなつていき、今回も涼子に誘われて本田家に来ていたのであった。

とはいえ、もし清水の好きな相手が大地であったとしても、2人の性格からして清水と仲良くなつていたのであるうが。

「そういえば先週のセレクション、わざわざ見に来てくれてありがとね」

「大地さん、とつても格好良かったですよ！」

「美穂……僕と吾郎君は見てくれてなかったのかい？」

美穂の言葉に苦笑いを浮かべる寿也。

セレクション当日、涼子達3人は大地達の活躍を見たいと言って外から見学をしていた。

先程も桃子を含めてその活躍を録画したシーンをテレビに映して騒いでいたところであった。

「それで、大地達はどうするか決めたの？」

「んー、いくつか考えはあるんだけどね。どうしようかなって思っているんだよ」

清水の問いに大地は答える。吾郎も寿也もその先が気になっていたので、続きを待つ。

「まずは、来年出来る新設校に行くって選択。それか、野球部がない高校に行くって選択かな。」

どっちも一から野球部を作るってことには変わらない。でも新設校の方が野球部を立ち上げやすいという気もするよね」

もちろん推薦を貰っている高校は他にも山ほどあった。しかし、江頭は今回のように行こうとした高校へピンポイントで邪魔をしてくるため、既に野球部が出来ている高校に入ろうとしてもいたちごっこになる可能性が高い。

何回も繰り返して全員が精神的に疲弊するのであれば、自分達で作るしかないという結論だった。

実は今回の件があつてから、大地は選抜肢の1つとして考えてはいた。しかし、江頭の妨害の内容が分からなかつたため、すぐに言い出すことが出来なかつたのだ。

その内容によつては、例えば野球部を新しく作つたとしても試合への出場自体が出来なくなつてしまえば意味がなくなつてしまうからだ。

今回、大貫からの情報が齎もたらされたことにより、新しく野球部を作つても問題がないと大地は判断する。

相手の仕掛けてくる内容が分かつていれば、きちんと対処が出来る場合が多い。

しかし、吾郎はまだちゃんと分かつていないため、当然の疑問を大地に投げかけてくる。

「でも、もし江頭の野郎にさ、今回の俺の件を大げさに問題にされたらどうするんだよ？」

「大貫さんの言つている内容なのであれば大丈夫だよ。だつて、吾郎は実際に暴力を振るつてはいないんだからね」

「そりゃあそうだけだよ……アイツが嘘つくかもしねえじゃんか」

「そのときは高野連がきちんと調査を行った上で判断してくれるよ。幸いにも、あの場

には大勢の目撃者もいるし」

(まあ……他にも手はあるんだけどね。これはまだ黙っておこう)

表向きの理由で吾郎は納得していたようだった。ただ、実際に大地達をハメようと思えば、全員で口裏を合わせることも出来なくはない。

それを含めても、大地にはまだ手があるようであった。

「まあそこはちゃんと考えておくからさ。あとは、どこの高校に行くかだよね」

「条件としては、野球部がなくて大地君達が自宅から通えるところだよね？」

「そうだね。一応調べてみたんだけど、それなりにはあるんだ。ただ、家から通えるとなると……かなり少ないんだよね」

そう言いながら、大地は3つの高校を挙げた。それは全て私立高であり、なおかつ吾郎が少し無理をして勉強すればなんとか入れる可能性が高いところであった。

「なるほど……1つ目が新設校で、2つ目は元々野球部が無かった高校、3つ目は……あれ？ これって女子校じゃないの？」

「ああ、そこね。元々女子校なんだけど、来年度から共学になる予定なんだよ。しかも体育科であれば、試験も実技と小論文だけで済むんだよね」

「えー！ そーいいじゃんか！ 勉強しないで済むならそうしよう！」

「でもな、そもそもそこの高校に行こうとする男子生徒がどれくらいいるのかったのが

問題なんだよ。初年度から大会に出るのであれば、最低9人は必要だ」

今は10月になっており、そろそろ志望校が固まっていってもおかしくない時期である。

吾郎としても勉強をしたくない——大地のお陰で成績はそこまで悪くはないのだが——と思つてはいるが、人数のことを考えると流石に悩ましいところであった。

そこで大地が広げていたパンフレットを何気なく覗いた清水が声を上げる。

「あれ？　今話してた高校とこつて……聖秀学院じゃん！　私、そこ第一志望だよ！」

聖秀学院高校。それは原作でも清水が入学した高校である。

もちろん大地はそのことを知っており、吾郎は先日のプールで話を聞いていたはずなのだが、流石に高校名までは覚えていなかった。

「ああ、そういう清水はそんなこと言つてたっけな」

「いいじゃん！　聖秀つて学校見学とかも行ってきたけど、かなり雰囲気良いところだったよ！」

清水は吾郎と同じ高校に行ける可能性があるのか、熱心に聖秀を勧めてくる。

その様子を見ていた人たちは——吾郎以外——全員すぐに気付き、清水の顔を見てニヤついていた。

清水も周りの反応に気付いたのか、顔を赤くしてどもつたあと、俯いてしまった。

「まあどこにするかはまだ決められる猶予はあるから無理はしないで、まずは俺らでも学校見学に行こうか」

「だな」

「そうだね。それから決めても遅くはないだろうし」

こうして大地達は3つの高校に照準を絞って、まずは見学に行くのであった。

そして、吾郎はどこの高校を選んだとしてもきちんと入学出来るように、大地と寿也のスパルタ受験勉強に対して悲鳴を上げる日々になっていたのであった。



秋から冬に季節が変わり、年も明ける。今年はコートが手放せなくなるほど寒くなつており、受験生にとっては今後の進学先が試験で決まる時期になっていた。

海堂高校野球部長兼チーフマネージャーの江頭は、自身の部屋で1本の電話を取っていた。

「ええ、はい。分かりました。それならもう大丈夫でしょう。ありがとうございます」

電話を終えた江頭は、笑いを堪えるので必死だった。

今すぐにも大きな声で笑い出したい。自身の策が上手くハマるときほど優越感と

自尊心を満たせるものはないと思つてゐる彼は、今回の件に關しても最高の結果になつたことが嬉しくて仕方がない様子であつた。

しかし、これから人が来る予定だつたため、不審に思われないうちに我慢はしてしたが、どうしても口元が緩くなつてしまつていた。

(まつたく……油断すると笑いが止まらなくなりそうだよ)

そこに来訪を知らせるノックが部屋の入口の扉から聞こえる。

すぐに入室許可を告げると、入つてきたのは大貫であつた。

「大貫さん、待つていましたよ」

「はい。どうされたのですか？」

「いやね、本田兄弟と佐藤寿也の入学先が決まつたようなので、一応担当だつた君にも伝えておこうと思ひましてね」

「はあ……それで彼らはどこへ？」

江頭は大地達の進学先の高校を大貫に伝える。

すると大貫はある疑問を持ち、それをそのまま江頭へと質問するのであつた。

それは、野球部がない高校へ行こうとしてゐるといふことだつた。

「ふふふ。そうです。彼らは野球部のない高校へ行くつもりなのですよ。私に屈したのか、それともそこで新しく野球部を作ろうとしてゐるのか分からないですがね。」

だが、例え作ったところで創部1年目の野球部に人数が集まるはずがない。もし仮に集まったとしても、そんな寄せ集めのチームでは海堂うみどうに勝てるわけがないのですよ」

「はあ……そのために彼らの進学先に色々ときかれていましたからね」

「ああ、そうです。私に逆らうことがどういふことなのか身を持って理解してもらわないといけませんから。だから、暴力行為をする可能性があると疑心暗鬼を植え付けてまで名門校への入学の邪魔をしたのですよ。」

まあ野球部がない高校では、そのレベルの内容だと確固たる証拠がないと難しいですが、名門校になればなるほど暴力沙汰で出場停止になる危険性があるだけで拒否してしまえますからね」

江頭は大貫に自身の行った内容を嬉々として話していた。

大地達を応援していた大貫にとって、それは苦痛の時間ではなかったが、上司と部下の関係なので我慢して話を聞き続けることしか出来なかったのだ。

「それじゃあ私はこれで失礼します」

「はい。来年のスカウトもよろしく頼みますよ」

大貫は江頭の部屋を出た後、気分転換をするためにファミレスへと向かうのであった。



更に時は過ぎ、大地達は3月の卒業式の日を迎えていた。

無事、進学先も決まった大地は三船東中学の卒業式を終えて、女子生徒に囲まれていた。

見た目が良く、頭も良い、運動神経も抜群で性格も基本的には穏やかで優しい大地は、中学生活でも同級生だけでなく後輩の女子生徒からも人気があった。

「あら、うちの大地ったら本当に気ななのね。あの子はこういうこと家で話さないから」「そうですね。大地君は涼子ちゃんや美穂ちゃんだけじゃなくて、すごいモテますよ」

「それに比べて吾郎はあんまり人気がないの?」

「うっせーし! 俺だってそこそこ人気あるわ!」

「え……それ本気で言ってるの?」

「し、清水さくらん! しまいにや俺だって泣いちゃうかな!」

大地を遠巻きに見ていた桃子の隣で清水と吾郎が漫才を始める。

実際に吾郎はモテないわけではない。見た目は大地と同じで、運動神経も抜群である。大地のおかげもあって、頭もそこまで悪いわけではないし、少しワイルドな性格を好きだという女子生徒もいるからだ。

しかし、それでも大地が完璧すぎたというのがあったため、比較してしまうとモテ度に関しては大地に一步譲ってしまう。

大地は前世の記憶や経験から大人の余裕もあるため、実年齢15歳の吾郎では魅力に差が出るのは当たり前なのだった。

「それにしてもうちの大地は凄いわね。まさか勉強で特待生での入学を決めちゃうなんて」

正確には特待生ではなく、優秀者のみが受けられる給付型奨学金を受け取ることが出来ていた。

条件としては非常に厳しく、成績優秀、品行方正、健康状態良好などの応募条件が付けられているため誰もが応募出来るものではない。

吾郎の成績では流石に厳しかったため、貸与型の奨学金を使うこととなったが、桃子へ金銭的な負担をなるべく掛けないようにしているのが理由であった。

(大地も吾郎も……結局私に気を遣っちゃって)

桃子は目に涙を浮かべながら、昔を思い出していた。初めに思い出したのは、幼稚園のときの大地と吾郎。

小学生と喧嘩をしていた2人や、茂治が帰ってこないためカレーを作って一緒に食べたこと。

そして、短い間であったが、茂治と一緒に過ごした日々。そこに幼い大地と吾郎がいたことは、今思い出しても素敵で温かい日々だった。

茂治の突然の死は、桃子一人では絶対に乗り越えられなかっただろう。大切にしたいという気持ちももちろんあったが、茂治の忘れ形見である2人とならきつと乗り越えていけると思えたからこそ、彼らを引き取ったのかもしれない。

小学生になっても、いつも良い子な大地とやんちゃな吾郎は変わらずだった。そんな中、弱小になった三船リトルを全国優勝に導いたのは間違いなく彼らの功績だったに違いない。

大地達の試合を見に行くのは桃子の楽しみの一つであった。

海堂付属中学のスカウトのときに、「おとさんが死んじゃったあと、血の繋がっていない俺達をここまで育ててくれた母さんを一人にするなんて絶対に出来ない……」と言ってくれた大地と吾郎の言葉にどれだけ救われたことか分からなかった。

彼らとならきつと上手くやっていける。大地達を引き取ったときから常にそう思っ
ていても、子供を育てることに迷いを重ねる日々が続いていたのは否定できない。

しかし、彼らは徐々に成長していき、今回の海堂高校の件は、彼らは自分の力で乗り越えていってしまった。

(子供の成長は早いものね……茂治さん、私は大地と吾郎がいてくれてとても幸せです)

「……よかつたら使ってください」

「清水さん……ありがとう」

桃子は清水から差し出されたハンカチで涙が溢こぼれていたことに気付く。

「なんだ、母さん泣いてたのかよ」

「なんだとはなによ。あなた達のことを考えてたら涙が止まらなくなっちゃうのよ」

吾郎の言葉に少し照れたように返事をする桃子だったが、いつの間にかやってきた大地から手を差し伸べられる。

「母さん、これからおとさんのところに報告に行くんでしょ。いつまでも泣いていたら、おとさんに笑われちゃうよ」

「もう……大地まで……!」

大地はずっと家族みんなの笑顔を大切にしていきたいと思いつつも、茂治のお墓へと報告に向かうのであった

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：148 km

コントロール：D+

スタミナ：D+

変化球：

ナツクルカーブ：4

シュート：3

ウシケンスライダー：2

◇野手基礎能力一覧

弾道：4

ミート：D+

パワー：D+

走力：D+

肩力：D+

守備力：D+

捕球：D+

◇特殊能力

【共通】

ケガしにくさC 回復C ムード○

【野手】

チャンスC+ 対左投手D 盗塁D

走塁C― 送球C+

パワーヒッター 初球○ 守備職人

流し打ち

【投手】

対ピンチC 対左打者D+ 打たれ強さD+

ノビC+ クイックC―

ジャイロボール キレ○ 回またぎ○

リリース○

◇コツ

クロスファイヤーLV4 闘志LV4 広角打法LV4

勝ち運
LV2
低め
OLLV1

間話 オリジナル変化球の習得

これは海堂高校野球部のセレクションを終えて、2ヶ月後のことである。

12月に入り、世間ではクリスマスシーズンで盛り上がる中、涼子や美穂はどうやってお互いを出し抜こうかと必死に考えを巡らせていた。

「……………えっ? も、もう一回言ってもらってもいい!?」

「えつとね、お父さんが後田選手うしろだの高校時代の先輩でね、大地君達の話をしたら、ぜひ会ってみたいって言ってくれてるみたいんだけど……………会ってみ——」

「——会う会う!! 会うよ! 涼子ちゃんありがとう!!」

「……………え? ええっ!?!」

涼子の父は元E.L学園の野球部所属であり、NPBの広島大洋コープに所属している後田健太選手うしろだけんたと野球部のOBの集まりで会った際に、次の期待の選手として大地達の名前を出したところ興味を持っていた。

大地は後田選手うしろだのファンであり、涼子の提案に二つ返事でOKを出し、喜びのあまり涼子を抱きしめてしまっていた。

いきなり抱きしめられた涼子は、顔を真っ赤にして硬直する。

「だ……大地君……んんっ……」

「ちよ、ちよつと!! 私のないところで何をしてるんですか!」

「え? あ、ご、ごめん!!」

大地は美穂の指摘により、無意識に涼子を抱きしめてしまったことに気付いて、慌て離れる。

涼子は両腕で自身の身体を抱きしめながら、顔を赤くしていたが、それは嫌がるというよりも大地に抱きしめられたときの感触を確かめているようであった。

その様子を歯噛みしながら美穂は見ていたのであった。

「ず、ずるいです……私だつてまだ大地さんにしてもらったことないのに……」



1週間後、都内某所にある練習グラウンドで後田うしろたと大地、吾郎、寿也の3人は会っていた。

「ほ、本日は貴重な時間を作ってくださいって、本当にありがとうございます!」

「「ありがとうございませす!」」

「ああ、大丈夫だよ。こつちこそ時間を作ってくれてありがとうね」

(後田選手がこんな間近に……か、感激だ……！)

大地は目をキラキラさせて、後田のことを見ていた。

吾郎と寿也はプロの有名な選手ということで、少し緊張した様子である。

「川瀬先輩から君達の話聞いてね、興味があつたんで時間を作ってもらつたんだよ」

「こ、こ、光栄であります!!」

「……ははは。そんな緊張しなくても大丈夫だよ。じゃあ早速なんだけど、アップしてから君達の球を受けさせてもらってもいいかい？」

いつもとテンションが違う大地に後田は笑いながらも、優しく一緒に練習をするためにアップをしていた。

後田はアップ中、終始大地達に優しく話し掛けつつも、彼らのことを観察していた。

(ふむ……確かに先輩の言うとおり、基礎能力のレベルは高いな)

3人がシニアの全国大会で優勝したことも聞いていたため、西日本大会で優勝経験がある後田は当時の自身と比較してもレベルが高いと感じていたのだった。

そしてアップが終わり、肩が温まったあとに後田はグラウンドのキャッチャーの定位置まで行き、腰を下ろす。

「それじゃあ、そろそろピッチング練習といこうか！ 佐藤君はキャッチャーだったよね？」

「は、はい！」

「じゃあ君はこつちに来て、僕が彼らの球を何球か受けたあと交代してもらってもいいかな？」

寿也は後田うしろだのすぐ近くまで走っていき、まずマウンドに登ったのは吾郎だった。

自分の力をプロの選手に見てもらえるということのでんションが上がっており、全力でジャイロボールを投げ込む。

それはセレクションのときよりも速くなっているにも関わらず、後田うしろだは難なくキャッチする。

「ナイスボール！ もう何球か投げてみよう！」

「はい！」

その後も吾郎は何球か投げて、唯一投げられるスローボールも披露した。

全力投球との球速差には、後田うしろだも驚いた表情をしていた。

「じゃあ次は、大地君！ 投げてみようか！」

「はい！ お願いします！」

大地も同じようにジャイロボールを何球か投げ、変化球であるシユートとナツクルカーブも投げる。

吾郎のような驚きは見せられてはいなかったが、後田うしろだとキャッチボールが出来ている

ことが大地にとっては夢のようであった。

（この2人……中学生のレベルじゃないな。吾郎君は確実に150 km/h以上のボールを投げている。

変化球は投げられないようだが、スローボールとの球速差はプロでも簡単には打てないぞ。

大地君は全体的にまとまっていて良い。吾郎君と違って、何か決定的な武器があるわけではないが、そもそものレベルが中学生じゃないからね。

……これは川瀬先輩が逸材だというのも分かる)

ピッチングを何球か見たあと、後田は大地と吾郎うしろたに対して、現時点でのレベルが高いにも関わらずまだ成長の限界が見えない姿を見て未恐ろしさを感じていた。

しかし、それ以上に今後の野球界を背負って立つ次世代の成長を頼もしく思うのであった。

「じゃあ次は僕が投げるから見ていて。佐藤君！ 何球か投げるけど、捕るのが無理そうだったら言っつてね！」

さすがに中学生に自身の全力は捕れないだろうと思っっている後田うしろたは、最初はある程度セーブして投げていたが、寿也が難なく捕球するため面白くなり、徐々に力を込めて投げていく。

最終的に全力でストレートを投げるが、それすらも問題なく捕る寿也に対して、大地や吾郎と同じ評価で見えるようになっていた。

「佐藤君……すごいね。僕のストレートつて中学生では捕れないって思っていたんだけど……」

「い、いえ。普段から吾郎君達の球を受けているのもあるかもしれないです」

現時点で吾郎はMAXで152km/hのスピードで投げるようになっていた。

後田うしろだのMAXスピードは154km/hのため、寿也でもなんとか捕れるレベルではあつたのだ。

もちろんノビやキレなどは今の吾郎達とはレベルがまるで違うのだが。

「3人も良いね。特別にこれから僕のとつておきを見せてあげるよ」

後田うしろだは、3人全員が予想以上のレベルの高さだったことに気分が良くなり、自身の代名詞とも言えるボールを投げると告げる。

そして、後田うしろだはセットポジションからボールを投げる。

130km/h中盤くらいのスピードで投げられたボールは、斜め下へと変化をし、その変化量に寿也もミットでキャッチしきれず弾いてしまったのだった。

「これが僕の得意な球種——スライダーさー！」

大地達に振り返りながら笑顔で話す後田うしろだ。

本当はここまで見せるつもりはなかった。興味を持ったことは事実だが、一緒に練習をして顔合わせ程度になればという思いで会っていたのだ。

しかし、彼自身が自分から決め球を見せるくらいに大地達のことを気に入ったのだ。大地達は「す、すげえ……」というテンプレートのような驚きしか出来なかった。

「このスライダーを……覚えてみたくなかない？」

「……えっ？」

後田うしろだからの突然の提案に言葉を失う大地達。

「本当であれば中学生や高校生はもっとストレートを磨いたほうが良いんだけどね。

でももし覚えられるのであれば、それだけで相当な武器にはなると思うよ」

その魅力的な言葉を断るといふ選択肢は、大地と吾郎にはなかったのだ。



「……とまあ、こんな感じかな。これで何球か投げてみて」

「はい！」

後田うしろだの決め球——通称“ウシケンスライダー”——は通常のスライダーとは握りが

違う。

一般的にスライダーとはフォーシームの握りの位置を少し変えて、投げる際に中指でボールを引つ掛けるように投げる人が多いと言われている。

しかし、ウシケンスライダーはツーシームの握りで、投げる際に人差し指でボールを切るように投げるのだ。

そうすることによって、手首の捻り方を変えるだけでボールの軌道や変化量も変わっていく。

人差し指で切るようにして投げると、投げた瞬間のボールの軌道がストレートのように見えるため、バッターには変化球が来ることを早い段階で読まれないという長所があった。

しかし初めて投げる変化球のため、大地と吾郎は何球か投げてみてもどうしても上手くないかない。

後田は苦戦している2人に対し、「もう少し左肩を我慢して投げてごらん」と伝えた。

「左肩ですか？」

「そう。なるべく左肩を開かないように我慢して投げると曲がりやすくなるかな。

あと、もう1つ。2人とも腕の振りが速いから、もう少しゆっくり振るよう意識するといいいよ」

大地と吾郎は、腕の振りのアドバイスに疑問を持った。なぜなら腕の振りが遅くなれ

ば、それだけで変化球だとバレてしまふからだ。

正直にその疑問をぶつけると、「あくまで意識するだけなので、バッターから見ても腕の振りが遅くなっているか分からないギリギリのラインを見つけると良い」と詳しく教えてもらうことが出来ていた。

コツを改めて教えてもらい、交互に投げ続ける2人。

「おっ！ 今の良いね！」

「本当ですか!？」

吾郎がコツを掴んだのか、後田うしろだに褒められる。

そして、大地も吾郎に負けないようにコツを意識して何球か投げたとき、頭の中でア
ナウンスが鳴った。

『ウシケンスライダーのコツを得ました。ポイントを消費して習得が可能です』

全国大会を優勝したときなど、たまにアナウンスが鳴ることはあつたが、今回は特に集中していたので驚いて声を出しそうになる大地。

(い、いきなりアナウンスが聞こえらるとびっくりするじゃんか……！ で、でもせっかくだから覚えちゃおう！)

大地は周りに気付かれないようにステータスを表示させると、目線だけで変化球の項目に移動をし、ポイント消費してウシケンスライダーを習得する。

ポイントはある程度溜まっていたのだが、ウシケンスライダーは習得する際の消費ポイントが他の変化球と比べてかなり多いことに驚く。

しかし尊敬する後田うしろだに良いところを見せたいあまり、衝動買いのようにポイントを割り振るのであった。

(急に曲がるようになっても不自然だから……まずは変化量を1つにして、最後らへんにもう1つくらい増やそう)

パワプロ特典の恩恵は凄まじく、習得した瞬間からウシケンスライダーを投げることができ、最後には変化量をもう1つ増やすことで、さらに変化するようになっていた。

吾郎は変化するものの、大地には及ばないレベルで本日の練習を終えていた。

「じゃあ今日はこのくらいかな」

「「ありがとうございまして!!」」

後田うしろだと連絡先を交換し、家に帰宅する3人。

帰り道だけでなく、家に帰ってからも興奮する大地達だった。

そして、後田うしろだは帰り道で、今日の出来事を振り返っていた。

(本田兄弟と佐藤寿也か……まさかあそこまでの逸材だったとはね。これは来年の高校

野球が楽しみだ……！
)

問話 海堂高校野球部セレクションの裏側※

大地の江頭への啖呵で終わった海堂高校野球部のセレクション。

しかし、そこにはある男の子も参加していた。

「おおおー……ここでやんすかー！」

1人で海堂高校のグラウンドに入る男子中学生。

本日セレクションが行われると聞き、なんとしても通過するのだという意気込みで参加していた。

（海堂野球部に入れば……オイラも活躍して女の子にモテモテでやんすよー！）

頭の中はガンダールロボかアニメか女の子でいっぱい青春真っ盛りの男の子。

彼の名前は、矢部明雄という。眼鏡が特徴的なニヒルなナイスガイ——本人曰く——である。

1人でアップしながらセレクション開始を待っていると、学校の放送のマイクから声が聞こえてくる。

「みなさん、こんにちは。本日は我が海堂高校野球部のセレクションに、ようこそおいでくださいました。」

私、このセレクションにおける案内、進行役を務めさせていただきます、野球部編成担当部長の北川です」

その声に矢部だけでなく、他の受験生も注目する。

セレクションについて簡単に説明を受け、合格人数を最大5名と北川が話したとき、矢部は合格するのを諦めそうになる。

(ぎ)、5人って……そんなの無理でやんすよー！ どうせ落ちるなら、今から帰るとか？
……で、でもここまで来ちゃったでやんすし！

ゼツケンを付けながらもずっと考えていると、北川から怒号が飛び、慌てて走り出す矢部。

帰りたい気持ちを必死に抑えながらも、セレクションの第一次テストに参加するのであった。

「111、51、92、205、141、17、失格！」

「も、もう無理でやんすー！！！！」

どんどん失格者が出てい中、矢部は懸命に走っていた。

足の速さにはある程度自信があつたのだが、それでもセレクションを受けに来る受験生はシニアで全国クラスの選手も少なからずいる。

この場では自慢の足といつてもそこまで凄いわけではなく、事実として矢部の後ろには先頭集団が迫っていた。

(無理でやんす! 無理でやんす! 無理でやんす! 無理でやんす!)

矢部は泣きそうになりながらも懸命に走り続け、トップが間近にまで迫ったとき、一次テスト終了の合図が出されるのであった。

「はあ……はあ……はあ……」

矢部はその場で倒れ込み、一步も動けない状態だった。

しかし無情にも試験官から二次テスト開始の合図が出される。

(う、腕立て!? スクワット!? それもこれから千回なんて無理でやんすよ!!)

矢部が何を思おうが、試験官には何も届かないし、仮に届いたところで何かが変わるわけでもない。

もう帰りたいと思っているが、試験官が言う回数に合わせて必死に腕立てとスクワットを繰り返す。

(も、もう駄目でやんす……このまま諦めて帰りたい——)

「——90番失格! ……………13番、175番失格!」

「ひいひい! もう許して欲しいでやんす——!!!」

泣き言を繰り返しながら、失格者の番号が響く度にそれが恐怖で腕立て、スクワット

を止めることが出来ず、なんとか千回クリアすることが出来たのであった。

(だ……………だめでやん……………す……………もう……………)

「では引き続き三次テストを行う!! 全員後方の体育館に移動!」

「体育館!」

「ええっ……………もう動けねーぞお!」

なかなか立ち上がらない受験生達に対し、「駆け足!!」と非情な言葉を投げかけてすぐに移動するように話す試験官。

矢部はもはや考えることを放棄して、ふらふらよろめきながらも体育館へと移動していくのであった。



体育館に移動した矢部を待っていたのは、5段に積み重なった箱と等間隔に置かれているやかんであった。

別の受験生が中を弁当だと確認後、三次テスト前の昼休憩だという声で安心する矢部。

(やったでやんす! ……こんな)褒美が待ってるなんて、今まで頑張つてよかったでやん

す！)

しかし、それが三次テストであり、30分で食べきらないといけないと聞いた矢部は絶望に打ちひしがれるのであった。

「位置について！ 用意！」

試験官の声で慌てて空いている席に座るが、弁当を開き、匂いを嗅いだところで彼の胃袋から何かがこみ上げてくるのを感じていた。

(「……………こんなの食えないでやんすよ……………」 は、吐きそうでやんす……………)

その直後、異議を申し立てる受験生がおり、それを心の中で応援する矢部であったが、試験官の持論に誰も反応出来ず、結果予定通り食べることとなってしまふ。

30分で仕出し弁当5つ。矢部にとっては中身を見なくても食べきることが無理だと分かる量だったのだが、開き直った彼は一心不乱に弁当を掻き込み始める。

(もうヤケでやんす！ こうなったらヤケでやんすよ—————!!!)

「残り1分！」

残り時間が1分となったところで、矢部の目の前にある弁当はあと僅かとなっていた。

リスのように食べ物をお口に含んでもぐもぐさせている彼には、残りを口の中に入れることすら出来る気がしていなかった。

(は、吐きそうでやんす……もう無理でやんす……)

「残り30秒!」

「ん?! んぐつ!!」

試験官の声に驚き、口の中に含んでいた物を全て飲みこんでしまう矢部。

食べ物がお喉に詰まり、急いでお茶で流す。

(あ、危なかったでやんす……でもこれならイケるでやんす!!!)

運良く——かは分からないが——ギリギリのところまで食べ切ることが出来た矢部は、セレクション三次テストを通過するのであった。



なんとその後の四次テストPK戦をも無事に通過した矢部。

勘で飛び込んだところに偶然ボールが飛んできて止めることができ、彼が投げたボールがゴールポストに当たり、そのままゴールへと入っていったのであった。

そして5列に並ばされた際に、これが最後のテストであると聞いた矢部は歓喜に打ち

震えていた。

（や……やったでやんす！ これをクリアすればオイラもモテモテ道をまっしぐらでやんす!!）

しかし調子に乗った矢部には勝利の女神は微笑むことはなかった。

トーナメント一回戦でCチーム相手に完敗。打席に1度も立つことなくテストを終えてしまうのだった。

その後のCチーム対Eチームとの試合でも、選抜チームに選ばれた試合でも惨敗を喫してしまうのであった。

矢部は帰りの電車で落ち込んでいた。

海堂に入れば、女の子にモテモテになれると思いつけたのだが、最後の最後に入部のチャンスをものに出来ず、セレクションを失格となった。

チャンスに弱い矢部明雄15歳。彼が報われる日は来るのであろうか。

第四章 高校野球編

第六十八話

四月八日、早朝。本田家ではゆつくりとした朝食の時間が訪れていた。

「相変わらず母さんのご飯は美味しいね」

大地は母である桃子の作った朝食を食べながら、その料理を褒めていた。

「あら、ありがとう。大地がそうやって毎日褒めてくれるから、作りがいがあるわ」

桃子もまんざらではない様子で答える。その雰囲気は新婚夫婦のようではあるが、この二人は間違いなく親子であった。

「今日は高校の入学式よね。本当に私も行かなくていいの？」

「うん、大丈夫。入学式は生徒だけで保護者はいないんだってさ」

コーヒーを一口飲んだ大地は、桃子の質問に答える。今日は進学した高校の入学式であり、大地は新しい制服に身を包んでいたのだった。

「母さんは今日も仕事でしょ？ 主任になると忙しそうだよね」

「まあねー。でもそれだけやりがいがある仕事だし、何より子供たちが可愛いからやっていけているわね」

桃子は昨年、専任リーダーから主任保育士に昇格して、給与もアップしていた。実は桃子は、茂治の遺産には一切手を付けていない。

自身の稼いだ給料だけで、ここまで大地達を育ててきたのだ。しかしそれも高校進学の際にお金が足りなくなると思われていたのだが、大地達が奨学金を受け取ることが出来たため、その心配もなくなりホッとしていた。

「ところで……あなたの弟のお寝坊さんは、そろそろ起こさなくていいの？」

「ああ、そうだよね……でも起きるとうるさいから、もう少しだけ寝かせておこうよ」

大地は食後のコーヒーを啜ると、ほうつと一息つき、穏やかな春の朝を満喫していたのだった。

しかしその穏やかな時間もすぐに無くなるのが世の無常であろう。

「やっつべええ!! もうこんな時間じゃん!」

「あらあら。ついにお目覚めね♪」

桃子は、寝室から大声がするのを確認した後、朝食の用意に取り掛かろうとキッチンに入ってしまった。

それと同時に一人の青年がダイニングへと走り込んでくる。大地と違い、制服はとりあえず着たような様子であり、かなり乱れていた。

「おはよ、吾郎」

「お、おお！ 大地！ なんで起こしてくれなかったんだよ！ 朝飯を食う時間ほとんど無いじゃんか！」

本田吾郎——大地の双子の弟である——が大地に文句を言いながら席につく。そして、桃子が笑いながら朝食のプレートを運んできた。

「ふふつ、高校生になっても相変わらずなんだから。大地を少しは見習いなさいよ」「うっせえなあ！ 分かっているよ！ いったきまーす！」

桃子の苦言を右から左に流した吾郎は、朝食を味わうこともなく胃の中に流し込んでいく。現在の時刻は七時四十分。あと十分ほどで家を出ないと、遅刻しかねない時間帯である。

「せっかく母さんが作ってくれたんだから、ちゃんと味わって食べなよ」

「じゃって、むぐむぐ、じゃかんが！」

だつて時間が無いからと言いたかつたのだろうが、口の中に精一杯詰め込んでいるため、まったく話せない状態であった。麦茶を飲んで口の中を空にしたところで、吾郎はスクールバッグを持って家を出ようとする。

「よっしや！ 母さん、ご馳走様！ 大地、行くぞ！」

「いや……歯くらい磨きなよ……」

結局、吾郎が歯を磨くのを待っていたため、家を出たのが遅刻ギリギリの時間となつ

てしまっていたのであった。

「母さん、行つてきます」

「行つてきます！」

「はいはい、気を付けてね！ ……って私ももう行かないや！」

桃子に見送られて、バス停まで走つて行く本田兄弟なのであった。



「いやあー！ 間に合つてよかつたね、大地君！」

「……うるさいわ！ いい加減早く起きられるようになれよな」

全力で走つたところ、予定の一本前のバスに乗ることが出来た大地と吾郎。少し混んでいたが、それも次第に人が少なくなつていった。そして、止まったバス停から一人の女の子が乗車してきた。

その女の子はバスに乗るなり周りを伺っていたが、吾郎達を見つけると笑顔で近付いてくる。

「二人ともおはよう」

「おはよ、清水さん」

「おう、清水！ おはよ！」

清水の挨拶に二人も返事をする。清水がホツとしたような顔をしていたため、大地は何かあったのかと尋ねた。

「清水さん、何かあったの？」

「ん？ い、いや、なんでもないんだけどさ……今日、聖秀の入学式じゃん？ だから一人だと微妙に心細かったから、同じバスに大地と吾郎がいて良かったと思つて」

清水は素直に自分の気持ちを告げると、吾郎から「そんな緊張する性格じゃないだろ」とからかわれていた。

——聖秀学院高校。元々は女子校だったのだが、経営方針の転換で今年度から共学となっていた。男子生徒をより多く獲得するために、体育科に関しては実技と面接のみという破格の待遇で、大地と吾郎は楽々試験の通過をしていた。

「ああ、それは仕方ないよね。誰だつて緊張はするし……つて吾郎はいつまで清水さんのことからかつてんだよ」

「えつ、ああ。こいつ、からかうと反応が面白くてさ」

「誰がいじられキャラだツツ!!」

周りの迷惑を考えずに大声ではしゃいでいる——イチャついているともいう——二人にため息をつき、大地は無視してバスの窓から景色を眺めることにした。

道路沿いにある桜は満開の時期を過ぎていたが、それでもまだ綺麗に咲き誇っていた。



バスを降りて、高校の前に着いた三人。一本早いバスに乗ることが出来たため、余裕を持って到着していた。

「ようやく着いた〜!」

清水は伸びをしながら、中学校時代とは違う通学路に気持ちを高ぶらせていた。

「新入生は、クラス発表前に体育館へ集合だつてさ」

大地が校門前に大きく書いてある文字を吾郎と清水に話し、道順に書いてある通り体育館へ向かっていると、後ろから話し掛けられる。

「ようやく来たか……本田兄弟」

「……おはよ、薬師寺。俺らが来るのを待っていたのか?」

後ろを振り返ると、そこには聖秀の制服に身を包んだ薬師寺が立っていた。

「……別にそんなじゃねーよ」

凶星を指されて、少し照れたかのようにそっぽを向く薬師寺。その姿を見て、大地は

苦笑いをする。

「まあとりあえず体育館へ行こうぜ。寿くんや他の連中も来ているだろうし——」

「待てよ……」

大地が体育館へ行こうと促すと、薬師寺が大地達を呼び止める。

「何？」

「先に言っておこうと思つてな。俺達は海堂の特待生枠を蹴つてまで、わざわざ聖秀学院に来たんだ。お前の言つていたことが嘘だったら……許さねえからな」

大地や吾郎を睨みつつ、少し厳しい口調で話す薬師寺。その凄んだ言葉に大地は怯むどころか、軽く笑いながら返事をする。

「……ああ、それは心配しなくていいよ。これから三年間、甲子園に行くのは俺達だ。海堂は絶対に行くことはない」

その返答に薬師寺は「分かった」とだけ言い、体育館へと先に一人で向かつていった。薬師寺が去つていった後、清水が心配な顔をして大地に問いかける。

「だ、大地……何あの人？ めっちゃ怖くない？」

「シニア時代に対戦したことがある人だよ。見た目ちよつと怖いかもだけど、わざわざ聖秀学院に来てくれるんだし、いいヤツだと思ふよ？」

薬師寺はその実力の高さから、海堂高校の特待生の内定を受けていた。しかし、海堂

のセレクション後に大地達によるアプローチで聖秀学院高校への引き抜きに成功していたのであった。

「てかあんた達も物好きよね。わざわざ元女子校に野球部作るために男子を集めるなんて聞いたことないよ」

「あはは……つてヤバい！ そろそろ入学式始まるぞ！」

その場にずっと留まって話していたため、思った以上に時間が経過していた。三人は急いで体育館へと向かうのであった。



入学式も無事終わり、割り当てられた教室へと向かっていく大地達。聖秀学院高校初の男子生徒は一つのクラスに纏められているようで、クラスの四分の一ほどが男子生徒で埋まっていた。

「私も同じクラスで良かったよお！ 普通科と体育科で違うからクラスも違うのかと思ってた」

安心したように清水は、大地達と一緒に話しながら教室へと入った。

「科が違うけど、選択授業が違うだけで後は同じみたいだね」

「へえ、そうなのか？ ……お！ 寿也もいるじゃんか！」

吾郎は興味なさげに大地の説明を聞くと、早速寿也を見つけて、彼の座っている机に向かう。

「寿也！」

「ああ、吾郎君。大地君や清水さんもおはよ」

「おはよう〜」

「寿くん、おはよ」

寿也に挨拶をした大地達は、黒板に書かれた自身の席を見つけてバッグ置くと、再び寿也のところに集まる。

「今年の男子生徒の入学生は十人みたいだよ。ギリギリだったね」

「だなあ……全員が野球部に入ってくれば良いんだけど……」

「大丈夫だろ。野球の面白さを知れば、誰だってやりたくなるさ」

寿也と大地がホツとしている中、吾郎だけは樂觀的に話していた。周りには少しチャラそうな——いかにも高校生デビューしたような——生徒や、ふくよかな体型の生徒、逆にメガネを掛けた痩せすぎな生徒など様々いた。

全員が野球部に入ってくれば、公式戦に出ることが出来るのだが、最悪来年の生徒を待たなくてはいけないのである。

「それよりも……わざわざ聖秀学院を選んでくれた彼らに感謝しないとだね——」
「本当だよ。俺達に感謝しろよ」

寿也の話を遮り、三人の男子生徒が話し掛けてくる。その中には薬師寺も混じっていた。

「これで甲子園に行けなかったら、本気で許さないからね」

「……あれ？ 甲子園に行けないって本当に思ってるのか？ ……渡嘉敷」

先程から嫌味を混ぜつつ話し掛けてくるのは、八重歯が特徴的な渡嘉敷だった。彼もまた、海堂の特待生推薦を蹴って聖秀まで来ていた一人である。大地が渡嘉敷に挑発の意味を込めて返事をする、もう一人の身長が高く、切れ長の目が特徴の男子生徒が会話に加わる。

「渡嘉敷。俺達は、本田兄弟と佐藤がいるならと聖秀学院を選んだ。海堂を蹴るリスクはもちろんあったが、この三人がいるなら甲子園に行ける可能性は絶対に聖秀の方が高いだろう」

「そ、そうだけどさあ……」

「まあそうだな。そこに俺、大場、お前の三人が入ったんだ。俺達は可能性が高い方を選んだ自信はある……海堂には悪いことをしたかな」

中学三年生の十一月末。個別に大地と吾郎、寿也に呼び出された三人。その場で大地

達に、海堂の推薦を蹴って聖秀学院に入って欲しいと頭を下げられていた。

薬師寺達は初め、本田兄弟と寿也も海堂に行くと思っていたため、そのための挨拶程度にしか考えていなかった。

しかし実際はそうではなく、聖秀学院で作る野球部に一緒に入り、甲子園を目指して欲しいということだったのだ。それを聞いた薬師寺達は当たり前前の反応を取る。答えはNOだ。

それが当然だ。海堂高校という常勝の名門校に特待生での推薦を貰っているにも関わらず、それを蹴って聖秀学院に行くやつが正直におかしいと思っていた。

だがそれも吾郎達の球を見て気持ちが悪く百八十度変わる。この球なら、それに大地と寿也が加わるのであれば可能性はあるのではないかと。

「とりあえず来てくれて助かったよ。一応教頭先生には野球部作るのも許可貰っているから」

「……分かった。後で色々教えてくれ」

大地の言葉に薬師寺が答えたところで教師が教室に入って来たため、話は一旦中断する。担任の提案で、HRの時間を使って全員の自己紹介をすることとなった。

各自が次々に自己紹介をしていき、大地の番になる。

「本田大地です。吾郎とは双子の兄弟で……俺が兄です。吾郎とは初めは見分けづらい

かもしれないですけど、よかつたら仲良くしてください」

本田兄弟の自己紹介で、クラスの女の子が注目してヒソヒソと話し出す。女子生徒達は、「格好良い」とか「イケメン兄弟で……ってのもいいわね！」などと話していたが、大地と吾郎は気にしないで席に着く。

「みんな大丈夫だよ。礼儀正しくないガサツなやつが吾郎で、女の子に優しいのが大地だからすぐ分かるから！」

清水がそう言つてクラスで笑いを誘つていた。

(このやり取り……なんか三年前もあつたな……)

三船東中での入学式の時を思い出し、大地は少し懐かしい気持ちになるのであつた。そして、そこから数日で上級生含め、他のクラスの女子生徒達から休み時間ごとに教室を覗かれるようになるのはまた別のお話。

「……………これだけ沢山女の子がいるのも悪くないなあ〜」

これは渡嘉敷のお話。

第六十九話

聖秀学院高校の入学式よりも数ヶ月前のある日。

海堂高校の会議室で野球部首脳陣による緊急会議が行われていた。

「本日は、来年度入学予定だった特待生の内定辞退について話し合いたいと思います」
ファシリテーターのスタッフが、会議の開始を宣言する。

「今回内定辞退を申し出てきた者は、薬師寺、大場、渡嘉敷の三名です。理由は全員、一身上の都合によりとのことでした」

総監督の早乙女義治、一軍の現場監督である伊沢、二軍監督の早乙女静香、二軍トレーナーの早乙女泰造は黙って話を聞いていた。

「それで、彼らの進学先はどこが強豪校なのですか？ 引き抜き疑惑で、その高校を高野連に訴えることも考えなくてはいけないでしょう」

海堂の野球部長であり、チーフマネージャーの江頭は不機嫌さを隠さずにスタッフに質問をする。

「そ、それが……」

スタッフは言葉に詰まってしまふ。

「……なんですか？ まさか彼らの進学先を調べられていないとでも？」

江頭のひと睨みでスタツフは縮こまりそうになるが、必死に堪えて返事をする。

「い、いえ……高校は分かっているのです。ただ……」

勿体ぶつた言い方をするスタツフに、江頭の怒りメーターが更に上昇していく。

「彼らの進学先には野球部がないのです……」

「な、なんだと!？」

江頭は高校さえ分かれば、あとは高野連に訴えるなり、高校側を脅すなりして解決できると思っていたのだが、野球部がない場所を選ばれてしまつてはそれが出来ない状況になつてしまつていた。

スタツフの言葉に江頭は立ち上がったのだが、他の全員もまさかの出来事に目を見開いて驚いていた。

「……彼らの進学先の高校はどこなのですか？」

先に落ち着いた二軍監督の静香がスタツフに質問をする。

「は、はい。えつと……聖秀学院高校というところですか……」

「聖秀学院高校？」

静香と泰造は高校名に覚えがないため、本当に野球部がないところなのだろうと考える。

「……そんな高校聞いたことないわね」

泰造の言葉にほぼ全員が頷くが、江頭だけは違っていた。

「今、聖秀学院高校と言ったのか……？」

「は、はい……」

江頭の剣幕に対し、恐怖を感じながらも必死に頷くスタッフ。その様子を気になった伊沢が、江頭に声を掛ける。

「江頭さん、高校名に聞き覚えがあるのですか？」

「……ええ」

視線だけで人を射殺しそうな目をしながら、江頭は一言だけ答える。

「聖秀学院高校は、横浜シニアにいた本田兄弟と佐藤寿也が進学した高校ですよ……」

「……………!!」

その発言で全員が全てを察した。本田兄弟達と海堂はセレクションなどの件で揉めており、スカウトに失敗していた。

「ふふふ……良い度胸ですね。本田兄弟と佐藤が薬師寺達を引き抜いたのでしよう」

江頭は、この場にいる全員が思っていることを口にする。

「でも、所詮は新一年生でしょ？ 海堂のカリキュラムもない、野球部としての設備も整っていない場所でやったところで、海堂うちに勝てるとは到底思えないのだけれど……」

「？」

二軍トレーナーの泰造がごく当たり前のことを話す。特待生三人と、シニアで優勝経験がある三人。確かに驚異に見えなくもないが、それは中堅から強豪レベルの話である。

海堂のような名門校になると、同じような才能を持っている人間はどんどん集まってくる。それに最高のカリキュラムに最高の設備を用意しているからこそ、その才能は他校よりも伸ばせていると泰造は思っていたのだ。

「ええ……通常であればそうだと思います。ただ、本田兄弟と佐藤はそこらのレベルとは思わない方が良いでしょう」

「……………どういふこと？」

スタツフの返答に、泰造は理由を話すように促す。

「えっと、私は今年のセレクションを見学していたのですが、その時の最終テストの試合で……本田吾郎が151km/hを出したのを確認しています。そして、兄の本田大地と佐藤寿也も同じくらいの実力があると思ってもらって構いません」

まさかのスタツフの言葉に、再度江頭以外の全員が目を見開いて驚く。まだ伸び盛りの中学生で、そこまでのスピードを出す人を見たことがないからだ。

もちろん才能も大切であろう。しかし、それ以上に練習環境が良くなくては、伸びる

べき才能も伸びないのだ。

この事實は、本田兄弟と佐藤寿也の才能が凄いとということだけでなく、海堂にいてもその才能を伸ばせるだけの練習環境を作り出せるということを示していたのだ。た。

「……元々野球部がないところに進学されてしまったのは、引き抜き云々どこの話ではなくなつてしまふな」

総監督の早乙女義治は、冷静に状況判断をして話す。同時に静香も口を開く。

「そもそも本田兄弟達をスカウト出来なかつたのは、何が原因だったのですか？ 私のところには結果しか来ていないのですけど？」

「それはあたしのところもね」

泰造も静香の話に同意する。そして海堂高校野球部編成担当部長で、今回のセレクションの試験官長を務めていた北川を見る。

北川は責任追及されまいと影が薄くなるように会議室の端に座っていたのだが、全員から注目を浴びてしまい、冷や汗が顔からテーブルに滴り落ちるほどの動揺をしていた。

「えつと……そ、それはですね……」

ちらりと江頭を見るが、彼は冷静を装っている風に腕を組み、何も知らないといった

様子であった。北川は汗を拭いながら、静香の質問に答える。

「む、向こう側との条件が合わずでして……」

「向こうの条件って何だったのよ？」

静香の追及は止まらない。

「そ、それは……寮に住むことが出来ないといったことなど色々とありまして……」

「そんなのこつちの待遇次第でどうにでもなる条件でしょ？ そんな程度で彼らを逃し

てしまうことのほうが——」

「いえいえ、他にもありましたよ。海堂側にとつても、断らざるを得ない重大な内容がね」

北川が責められている中、静香の発言を江頭が遮った。

「重大な内容……？」

静香が江頭の言葉を繰り返す。

「ええ。彼らはマニュアルに従わないであろうというのが、スカウト陣の考えでした。

それで推薦を断ったのですが、セレクションにまで来ましてね。それで不合格にさせたということですよ……そうですね、北川さん？」

「え………は、はい！ その通りです！」

江頭にひと睨みされた北川は、すぐに江頭の話に合わせて相槌を打つ。海堂高校にお

いて、マニュアルは決して破ってはいけないものである。それを持ち出されると、静香も泰造も何も言えなくなるのだった。

「……分かりました」

静香があつさりとし引き下がったため、ホツとする北川。

「それでは現状は何も出来ないのです、様子を見るということで。次の議題ですが……」

議題が次の内容に変わっていたのだが、江頭は話を聞かずに大地達のことを考えていた。

(ここまで私に楯突いた人達がどうなったのか、彼らにも思い知らせてあげましょう……)



「で、どこで練習するの?」

入学式の次の日の放課後。渡嘉敷は、不機嫌そうに大地に話す。

「ああ。場所についてはもうちよつと待ってくれ。先に人数を確保して、部として承認させてもらわないといけないからさ」

「部としてって……まさか素人のあいづらを使うっていうのか?」

薬師寺は、席に座っている男子生徒をちらりと見る。自己紹介はもう済んでいるので名前は分かっているのだが、素人を使うということに納得していない様子であった。

「一人だけ経験者がいるよ。本牧シニアでキャッチャーをやっていたやつ」

大地はそう言いながら、一人の男子生徒を見る。そこには髪を短く切り、少し目つきが悪い生徒がいた。

「あいつ……たしか、田代って名前だったよな?」

「そうだな。結構上手いから、誘っておきたいんだよね」

大場が田代の名前を思い出し、大地も出来れば先に勧誘しておきたいと話す。

「お、じゃあさっさと声掛けようぜ! おーい、田代ー!」

「え……、吾郎君!」

吾郎が遠慮なしに田代に話し掛けに行く。寿也はそんな吾郎を止めようとするが、大地はその様子を見ているだけだった。

「……なんだよ?」

「お前、本牧シニアにいた田代で合ってるよな?」

「……………! そうだけど、何か用か?」

まさか吾郎に名前を覚えられているとは思っていなかった田代は驚くが、すぐに冷たい態度で吾郎に用件を聞く。

「今、聖秀に野球部作ろうと思つてんだけど、田代も入つてくんねえか？」

ストレートに吾郎が田代を勧誘する。吾郎としては、田代が断るとは思つていなかったのだ。

「……………」

「な？ いいだろ？ 一緒に甲子園目指そうぜ！」

「…………断る」

一言だけ伝えると、田代はそのまま席を立ち上がつて教室から去つていった。吾郎はぼかんとした表情のまま、立ち尽くしていたのだった。

その様子を見た渡嘉敷は肩をすくめ、辛辣な一言を吾郎に浴びせる。

「あーあ、断られちゃったよ。あんなストレートに勧誘して、入ってくれるヤツのほうが珍しいっての」

「なっ！ じゃ、じゃあお前がやってみろ——」

渡嘉敷の言葉に反発した吾郎が八つ当たりをしようとするが、大地が制した。

「吾郎、やめとけ。渡嘉敷も言い過ぎだ」

「…………ちっ」

「とりあえず吾郎は、人の気持ちを考えて話しかけるよな」

空気が若干悪くなつていたのだが、大地は吾郎に構わず話しかける。

「人の気持ちってなんだよ。中学まで野球やってたんだから、高校だって野球やるだろ！」

「俺らはそのために聖秀に来たんだけどな。じゃあ田代はなんで野球部のない聖秀に来たんだ？」

「え……？」

大地の言葉に、吾郎は言葉を詰まらせる。シニアまで野球をやっていたにも関わらず、わざわざ野球部のない高校に行く人間の理由はそこまで多くない。

野球自体を辞めたか、野球部を作ろうとしているかなどである。大地は田代が聖秀に来た理由を知っていたが、ここであえて言わずに吾郎に考えさせていた。

「誰にでも、何かしら事情はあるんだ。それを知らうとしないで、自分の都合だけで声を掛けても無理に決まってるだろ？」

「……………」

吾郎は黙っていた。今まで、そこまで考えていたことがなかったためだ。

「とりあえず、田代の件は吾郎に任せるから。相手の事情もちゃんと考えて誘ってみろ」
大地は、吾郎に田代の勧誘を任せると伝える。

「おい、本田兄。これでアイツを誘えなかつたら、どうするんだよ」

「大丈夫だよ。吾郎ならちゃんと出来るさ。それよりも薬師寺、他の人達をどうするか

考えようぜ」

残りの藤井、内山、宮崎をどうやって誘うか考えようと話し合いを始めることにした
吾郎以外のメンバー。

「……………」

吾郎が黙って考えているのを横目に見ながら、大地は嬉しそうな顔をしていた。これで吾郎が少しでも良い方向に成長してくれたらと兄として願っていたのだ。

「…………あれ？ てかよくよく考えたらさ、本田兄が俺達を誘ったのって自分の都合じゃね？」

渡嘉敷の指摘に全員が黙り、気まずい空気が流れるのであった。

第七十話

田代以外の勧誘を大地が中心に行うこととなった。まず大地が目をつけたのが内山だった。

放課後、帰り支度をしている内山に声を掛ける。

「えっと……内山君、ちょっといいかな？」

「君は本田君……だっけ？」

同じクラスメイトではあるが、まだ新入生として入学してから日も浅いため、全員の名前をフルネームで確実に覚えられているわけではない。

それでも大地の名字をきちんと覚えていてくれた内山に好感を持つ。

「そうそう。あそこにいる吾郎の兄で大地っていうんだ。よろしく」

「うん、それで……何か用？」

急に話しかけられたことに少し戸惑いながらも、大地に何用かを問う内山。

大地もなんと切り出していいか分からず、少しの間が空くが、意を決して率直に要件を話す。

「あのさ、内山君ってここで何か部活に入る予定はある？ 良かったら俺らと一緒に野

球でもやらないかな？つて」

「……あく、そういうことか。野球……ね……」

少し嬉しそうな顔をした内山だったが、すぐに顔を伏せる。

「……あ、いや、ごめん。やっぱり無理だわ。野球なんてやったことないし……そんなことをしている暇もないし……」

最後の言葉を誰にも聞こえないようにぼそつと呟く内山。だが、大地にははっきりと聞こえていた。

内山はある事情から部活をしたくても出来ない状況であった。そのことは大地も理解していて、残った藤井、宮崎、内山——田代は吾郎に任せている——の中で敢えて最初に声を掛けていたのだ。

「用はそれだけか？　じゃあ俺はもう帰るから……」

それだけを言つてバッグを手に帰っていく内山。

しかし残された大地は断られたにも関わらず、諦めたような顔をしていなかったのであつた。



「兄ちゃん、お帰りーっ!! ……あ、あれ?」

ある家のインターフォンを鳴らした大地。そこから出てきたのは二人の小さな子供であつた。

知らない人が目の前にいる状況に戸惑う子供達。兄だと思つていたのだから、それは当然だ。

「こんにちは。お兄ちゃんと同じクラスメイトなんだけど、まだお兄ちゃんは帰つてない?」

「う、うん……。買い物行つてるから」

「そつか。買い物なら、もうそろそろ帰ってくるか……。な?」

大地が帰ってくるまで玄関前で待たせてもらおうか悩んでいたとき、横から声を掛けられる。

「本田……。君? どうしてここに……」

「あ、内山君……。ごめん、急に来て」

「……。すぐそこの公園でちよつと待つて。今、荷物を置いてすぐに行くから。」

内山はそう言うのと弟と妹と一緒に家の中に入っていつてしまう。この場で何かを言うことは出来ないかと判断した大地は、指定された公園に向かって内山を待つことにした。

そして待つこと数分、ベンチに座って待っていた大地の前に内山が現れる。

「ごめん、待たせちゃったよね？」

「ああ、いや、大丈夫だよ。こつちこそ突然来ちゃってごめん……」

お互いに謝り合い、その場に少しだけ気まずい空気が流れる。

事情を分かっている大地ではあつたが、きちんと内山の口から聞きたいと思い、先に口を開くことにした。

「あのさ……さつき教室で話していたことなんだけど、そんなことをしている暇もないって言うていたのはもしかして——」

「……ああ、そう……なんだ。俺さ、片親なんだよ。それで母親が働いているから、弟と妹の面倒を見なきゃいけないくて……部活とかやっている暇ないんだよね……」

「……………」

「中学まではまだ良かったんだよ。バスケット部に入っていたし。でも、日増しに大変そうになっていく母さんを見て、俺にも出来ることを手伝いしなきゃって……」

「……そっか」

事情を聞けば聞くほど、内山を誘うことに対して罪悪感を覚えていく大地。片親で弟を支えなきゃいけない兄の気持ちを痛いほど分かっている大地は、無理に誘うことは出来なかった。

「かつこ悪いよな……こんな理由で部活が出来ないなんて……」

「……ううん、そんなことないよ。俺もさ、内山君の家と同じような環境だからね……」
「えっ……、それって……？」

大地は自身の境遇を話すことにした。もちろん同情を誘いたかつたわけではない。内山の気持ちを理解できた大地には、単純に自分のことも知ってほしかったのだ。

実の両親の他界。そこから親戚に利用されそうになったところを当時の保育園の先生が引き取ってくれたこと。

まだこれからいくらでも恋愛して幸せになれる年齢にも関わらず、大地と吾郎自分達のために一生懸命に働いてくれているという事。

だから応援してくれている母親のためにも、自分の夢を叶えたい。そして、いつも無茶をする弟にも夢を叶えて欲しいということ。

「……ほ、本田君……それってうちの環境なんて目じゃないくらい大変じゃなか！ なの……なんで……？」

内山は大地の話聞き、自分だけがそういった環境は無かつたことを知る。

そして、自分以上に過酷な環境にいた大地に対して信じられないといった顔をした。

「そんなことないさ。母親に感謝しているところとか、助けてあげたいところとか、兄弟を支えたいと思つているところとか一緒だろ？」

ベンチから立ち上がった大地。やはりこれ以上、内山を誘うことは出来ない判断した大地は家に帰ることにした。

「……ごめんな。大変なときなのに急に家まで来ちゃって……」

「ほ、本田君！ 俺のことを説得しに来たんじやないのか!？」

「……あはは。本当はそうだったんだけどね。大変だつて分かつている内山君をこれ以上誘えないよ。あの時期の子供つて親か兄貴が愛情を注いであげたほうがいいからね……」

大地は弟達によりしくとだけ伝えて家に帰ることにした。振り返ることなくそのまま駅に向かった大地。

内山はベンチに座つて項垂れながら、ずっと何かを考えているようであった。



「ただいま」

「おう、お帰り。内山はどうだったんだ?」

家に到着した大地は、吾郎に迎えられて家の中に入る。

吾郎は内山のところに行つた大地がどういふ結果だったのか気になつていたため、素

直に聞いた。

「えつと……………ダメだった……………」

「え……………はああ!？」

軽く笑いながら勧誘に失敗したと言う大地に対して、吾郎は驚きの声を上げる。

大地が勧誘に失敗したということも驚きだったのだ。今まで大地の失敗という失敗を見たことがない吾郎は本当に驚いていた。

「な、なんでダメだったんだよ……………?」

少し動揺しながらも理由を聞く吾郎。制服姿でソファ―に座った大地がポツポツと理由を話す。

「——というわけでさ。俺にはこれ以上誘うなんて、無理だったよ。多分逆の立場でも断っていたと思うし」

「……………そうか。まあそれなら仕方ねえな。後は藤井と宮崎を誘えば九人にはなるんだし、それでなんとかするか!」

ダメだったものは仕方がないとすぐに次を考えようとする吾郎。そういったポジティブさには本当に救われる大地ではあったが、大地は大地で気になることがあった。

「そういう吾郎は田代の勧誘はどうだったんだよ?」

「え、俺か? 田代なら人数が揃うなら野球部に入ってくれてよ」

「……え？ は、早くない？ 田代に何したの？」

「へっへっへっ！ それは秘密だ！」

どんなに聞いても、頑なに田代がOKしてくれた理由を話さない吾郎なのであった。



次の日の朝、学校に来た大地の前に現れたのは内山であった。

「お、おはよう」

「内山君、おはよう。どうしたの？」

少し様子がおかしい内山に、大地は問いかける。内山は少しモジモジした様子で俯いていた。

そして何かを決心したのか、両手を強く握りしめた内山は顔を上げて大地を見つめる。

「あ、あのさ……俺……」

「う……うん……」

そこで言葉が途切れる。吾郎や寿也はもちろん、渡嘉敷達も何事かと見つめている。

「俺も……野球部に……入ってもいいかな……？」

「……………え？」

「もちろん、妹の送り迎えや晩メシの支度があるから放課後に参加は出来ないんだ……でも、それでも本田君が迷惑じゃなかったらなんだけど、朝とか夜に俺だけでも野球のことを教えてくれないかな？」

大地としても予想外のことであった。内山は絶対に無理だと考えていたため、九人ギリギリで大会を勝ち抜く必要があると思っていた。

そこに内山が自分から野球部に入りたいと言ってくれたのだ。そのことにとっても驚き、そしてとても嬉しく感じていた。

「お、おう！ それなら歓迎、大歓迎だよ！ これからよろしくな、内山君！」

「内山………でいいよ。これから同じ野球部なんだし………」

「そっか、俺のことも大地って呼んでくれ！ じゃあ改めてこれからよろしく、内山！」
「ああ、よろしく。大地！」

こうして諦めていた内山が野球部に入部することとなった。現在の野球部員は吾郎が説得した田代を含めて八人となった。

吾郎は内山が野球部に入ってくれる様子を見て、笑みを浮かべていた。

（だよな………大地なら絶対に説得してくれると思ってたさ………あとは藤井と宮崎だけか………）

野球部を設立して甲子園に行くために、大地達は色々動いていくのであった。

第七十一話

「君、清水薫ちゃんでしょ？」

「……………そうだけど？ 誰？」

「俺さ、同じクラスの藤井だよ。覚えてくれないかなあ？」

内山の勧誘が成功した次の日の朝、聖秀学院高校へ向かうバスに乗っていた清水は少し幼いながらも軽薄そうな男に話し掛けられる。

同じ制服を着ていたので、聖秀学院生ということは分かる。そして、男子がいるのは清水と同じクラスの人間だけだということも理解していた。

しかし、彼女はほとんどの男——極端に言えば吾郎以外——に興味がないため、同じクラスの男子でも名前と顔を覚えてはいなかった。

なおかつ、清水の苦手な見た目と話し方をしているため、その男藤井に対して嫌悪感を抱いてすらいいた。

よって清水の回答は一つだけである。

「……………知らない」

「え、ちよ、ちよつと冷たいなあ！ じゃあお近付きの印に今度どつか遊びに行こうよ」

「行かない」

清水の周りがどんどん冷え込んでいく。しかし藤井はそれにめげずに清水を口説いていく。

どんなに話し掛けられていても無視し続けているため、周りからも冷ややかな視線を感じる藤井。

うざつたいと思いつつながら清水が窓から外を見ていたとき、少し離れたところから二人の話し声が聞こえてきた。

「ほら吾郎、早く助けてあげなよ」

「え、なんでだよ」

「なんでつて……清水さんが絡まれてるじゃん」

「清水あいつなら強えから大丈夫だろ」

「そういう問題じゃないつてば……」

清水が声のする方を見ると、そこには大地と吾郎が立っていた。

バスが混んでいてお互いにニアミスしていたため、同じバスに乗っていたことに気付いていなかったのだ。

停留所で人が降りて人数が少なくなったため、気付くことが出来たのだ。

「吾郎！ 大地！」

「え、ちよつと、薫ちや——」

清水は藤井を無視して、大地達の方へと歩いていく。

「清水さん、おはよ」

「おう、清水。朝からアツアツだな」

「おはよ、二人とも……つて違うわ!」

吾郎のボケに対し軽快なツツコミを入れる清水。朝から藤井に絡まれてウザいと感じていたため、吾郎のボケすらも温かく感じる事が出来ていた。

「朝から大変だったね」

「んー、まあ……ね」

大地が苦笑いをしながら清水を労うが、反応がいまいちだった。本当であれば吾郎に声を掛けてほしかっただろうし、助けてもらいたい気持ちもあったのかもしれない。

しかし、彼女の性格的にそういうことを直接口に出して言ったりはしないため、大地は更に苦笑いをするしか出来なかった。

「……か、薫ちゃん。」

そこに再度藤井が声を掛けてくる。

「……何?」

「そいつらつて同じクラスのやつでしょ? 仲良いの?」

(……うわ、メンタル強いな、藤井こいつ)

明らかに大地達と態度が違うのに、いつまでもめげない藤井にある種の尊敬の念を抱く大地。

吾郎は藤井の顔と制服を見て、同じクラスメイトであることを思い出す。

「お！ おめーはもしかして同じクラスの………？」

「藤井だよ！ 名前くらい覚えとけ！」

「あー！ そうそう、フジイ君！ ……本当におめでどう！」

「ああつ？ どういうことだよ？」

藤井は吾郎が目をキラキラさせながら自分の両手を握手するように包み込むのを不審に思う。

「君は現時点で聖秀学院高校野球部の一員に選ばれた——いてえ!!」

「お前は急に何を言ってるんだよ……」

突如藤井を強制的に入部させようとした吾郎の頭をはたく大地。

藤井はポカンとしながら、聖秀学院高校に着くまで本田兄弟の即興漫才を見せられていたのであった。



「だから入らねえって言ってるんだろが！」

「もういいじゃん。どうせそのうち野球をすることになるんだから」

「……………はあ」

聖秀に到着し、校舎へと向かっていく一同。

藤井は頑なに野球部の入部を固辞していたが、吾郎が最近では珍しく自分本位な態度を崩さない。

それに対し、散々ツツコミを入れていた大地も疲れてため息をつくだけだった。

（まさかとは思うけど……吾郎、清水さんが絡まれていたのを怒ってたのか……？）

吾郎の様子を伺うが、怒っている風には見えないため頭をかしげる大地。

バッグを左肩に担いで吾郎は校舎の中に入っていくのであった。

「なあ、いい加減諦めろよ」

「なんなんだよ、てめーは！ しつけーんだよ！ 肩組むな！」

「ちよつと、吾郎君。やめなよ……」

教室に入っても休み時間ごとに藤井に突っかかる吾郎。

寿也も明らかに吾郎の雰囲気がおかしいのを感じたのか、恐る恐る注意していた。

そんなやり取りを冷めた目で渡嘉敷が見ていた。

「もうやめとけば？ そいつもやる気ないだろうし、そんな奴がいたって邪魔なだけだよ」

「な、なんだとっ!!」

渡嘉敷の言葉に苛立ちを隠せない藤井。肩を組んでいる吾郎を振りほどき、睨みつけながら渡嘉敷のところまで歩いていく。

「てめえ、もう一度言ってみろ!」

「はあ……だからさ、君みたいにやる気もない奴がいたって邪魔なだけだって言ったんだよ。そんな格好して、どうせ運動だって出来ないんだろ?」

「ふ、ふざけんな! 俺だって小学校のときに野球やってたわっ!」

藤井は馬鹿にしたような渡嘉敷の言葉に反論する。

その言葉を聞いた渡嘉敷が目を細くしながらも更に言葉を続ける。

「へえ。でもどーせ途中で挫折した組だろ? 甲子園行こうとしている俺達にはついてこれないよ。だから来なくていいから、安心していーよ」

「……言うじゃねえか。小学生までしか野球をやっていないくたつてお前みたいなチビには負けねえよ!」

「……………へえ」

渡嘉敷はチビと言われたことに反応し、更に海堂特待生にまで推薦された自分をコケにした藤井に更に目を細くする。

「……じゃあそのチビに負けたらどうするよ?」

「おう、なんでも言うこと聞いてやろうじゃねえか!」

「……その言葉、確かに聞いたからな」

渡嘉敷は席を立ち、ちらつと大地の顔を見て笑うと、そのまま教室を出ていこうとする。

だが、そのやり取りを見ていない藤井からすると、突然渡嘉敷が教室から出ていくようにしか見えなかった。

「おい、どこ行くんだよ? 勝負するんじゃないのか?」

藤井はもはや頭に血が上っているため、自分で自分を追い詰めていることに気が付いていない。

渡嘉敷は振り返ると藤井に告げる。

「……今日の放課後、グラウンドでどう? まあ自信無かったら一週間くらいは時間あげるけど?」

「ばつ、馬鹿にすんじゃないねえ! 今日の放課後だな! 首洗って待つてろ!」

「おっけー」

渡嘉敷はそのまま教室を出ていく。

(ああ、そういうことか……。渡嘉敷もやり方が上手いな……)

大地も渡嘉敷の意図に気付く。大場と薬師寺も気付いたのか、目が合うと軽く笑って肩をすくめる。

寿也はまだ気付いてないようで、吾郎は面白いことになったと薬師寺たちとは違う意味で笑っていたのであった。

そして放課後、渡嘉敷と藤井の野球対決が始まる――

第七十二話

放課後、渡嘉敷と藤井はグラウンドの隅に来ていた。グラウンドの大部分を女子生徒が使っているため、彼らが対決するとしても端っこを使うしか出来なかつた。

二人以外には大地、吾郎、寿也、薬師寺に大場と、今回巻き込まれている清水も見学に来ていた。

「おーおー、たくさん来ちゃってるね。君、ここで恥かくことになるけど、大丈夫？」
「うっせえ！ 恥かくのはてめえだっつーの！」

(そんな格好して何言ってるんだか……)

今回勝負をするとなつたときに二人の服装にも差があつた。渡嘉敷がユニフォーム姿なのに対し、藤井は制服なのだ。

準備もあるはずだから渡嘉敷は後日でも良いと言つたのだが、藤井本人が当日の勝負で良いと言つたので、これは藤井にも悪い部分があつた。

せめて体操着のような動きやすい格好で来るのであれば、周りにやる気を示すことが出来たかもしれない。

「あー、まあいいや。勝負なんだけど、どうする？ こんな狭いところで出来て勝敗が分

かりやすいのは、お互いに十球ずつ投げてより多く打てたほうが勝ちってやつとかだと
思うけど」

「……ああ、それでいい」

渡嘉敷の提案に対し、藤井は拒否をせずに受け入れる。自分が負けるわけがないと思っているため、どういう勝負でも良いと思っていた。

（薫ちゃんも応援に来てくれてる！ これで俺のすげーところをアピールして、一気に彼氏の座をゲットするぜ！）

ユニフォームを着てきて、使い込まれたグラブなどを見れば、渡嘉敷が野球経験者だということが分かると思うのだが、藤井はそれよりもどれだけ清水に良いアピールが出るかだけが頭にあつたのだ。

「じゃあお前が先に打っていいぞ」

「え、俺が先で大丈夫なの？」

「フン、なめんなよ。こう見えても俺は小学生の時、子供会の野球チームでピッチャーやってたんだ。むしろ打てなくてビビんなよ」

藤井の言葉に渡嘉敷は啞然として、一気にやる気が無くなる。

小学生時代に野球をやっていたと豪語するからには、最低でもリトルリーグでやってきた経験があると思っていたのだ。

(……馬鹿らし。こいつ、余計にいらぬじゃん)

さつさと終わらせようとバットを構える渡嘉敷。素直な人間、やる気ある人間、きちんと野球をやったことがある人間。

そういう人材であれば、渡嘉敷としても入部に反対するつもりはない。だが、藤井はそのどれにも当てはまらないため、聖秀が甲子園行くのに足枷にしかならないと判断した。

「行くぜ！ おらアあああー！」

藤井が少し離れたところからボールを投げる。しかし、藤井から投げられたボールはストライクゾーンから外れるだけでなく、大暴投となってしまう。

そのボールを見た渡嘉敷は、冷めた目で藤井を見つめる。

「あれ？ あはははははっ！ 今のナシな！ ダメだな、まだ肩があつたまつてねーやー！」
(……バーカ。それ以前の問題だっつーの)

藤井の苦しい言い訳に対し、渡嘉敷は更にやる気が無くなつていった。野球経験者と言つても子供会レベルで経験者を名乗つたこと。

それだけならまだ許せる。しかし藤井は勝負をすると決まったのに、制服のまま現れ、しかも準備運動すらしていない状態であつた。

これでは何をどう勝負しても、渡嘉敷の負ける要素が見当たらなかつた。

「くおっ！」

藤井は何球も投げるが、ストライクに一切入らない。そして数球投げただけで息が上がつてしまっていた。

「あ、あれ？ おつかしーな？」

「……ねえ。もうやめる？ はつきし言つて時間の無駄なんですけど」

「うっせえ！ まだ身体自体があつたまつてねーんだよ！ だつたらお前から投げろや！」

（あんたが先に投げるつて言つたんだろうが……）

もはや言い合うのも面倒くさくなつた渡嘉敷は、何も言うことなく藤井と交代する。

藤井も自分が先に打てば問題ないと思ひ、渡嘉敷と交代してバットを持つ。

「おし来い！」

「………なああいつつて野球部に入れて本当に大丈夫なのか？」

「ああ、俺も不安なんだが」

「僕もさすがに……」

「……俺もだ」

藤井が構える姿を見て、薬師寺、大場、寿也、そしてあれだけ勧誘していた吾郎ですら不安に思つていた。

渡嘉敷が勝つのは誰の目から見ても確實であろう。しかし、それで野球部に入った際に確実に足を引つ張る人を入れるのであれば、九人ギリギリでもきちんとやる気がある人だけでやりたいと思うのは間違っていない。

そして、藤井は渡嘉敷の球をかするところか見えてすらいなかったのだった。

「はい、これで十球全部投げ終えたんだけど？ このまま交代してやる？」

渡嘉敷は構えたまま立ち尽くしている藤井に声を掛ける。しかし藤井は呆然としたまま、渡嘉敷の問いに答ええない。

「あれ？ 聞こえる？ お——」

「おい、もう止めてやれ。もう良いだろ、行くぞ」

渡嘉敷が藤井の心を抉ろうと呼びかけ続けるのを薬師寺が止める。

そしてそのまま立ち去っていく。

「本田兄、こんなメンバーを集めて本当に甲子園に行けるんだろうな？ お前に賭けて入ってきた俺達を失望させるなよ」

大場は大地にチクリと刺さる言葉を残して薬師寺達の方へ歩いて行った。

「……………」

「大地君、僕らもそろそろ帰ろうよ。彼は仕方がないよ」

寿也も大地に帰ろうと促したのだが、大地は藤井を見たまま黙ってしまった。

「……そうだな。さすがに俺も無理に勧誘しすぎたな。帰ろうぜ、清水」
「あ、え、う、うん」

吾郎は清水と一緒に先に教室へと帰り、その数分後、寿也に再度話し掛けられた大地も藤井を置いて教室へと戻っていったのであった。



帰り道のバスの中で大地達四人は藤井のことについて話していた。

「藤井君……大丈夫かな？」

「あー、別に大丈夫だろ。これで大人しくなるなら、それはそれで良いからな」

「まあさすがに今朝みたいな絡みはウザかったからなあ。それだけは無くなっほしいよね」

「……………」

寿也達が話している中、大地だけはずっと黙っていた。

「なんだよ、大地。ずっと黙ってばっかじゃねーかよ」

「え、ああ。ごめん」

「大地君、何かあったの？」

「いや、別に……大丈夫だよ」

大丈夫と伝える大地の様子は、明らかに大丈夫ではなかった。

そして、何事か考えていたと思つた大地は、バスが停まる直前になつて声を出した。

「ごめん、先帰つててくれ！俺はちよつと降りるわ！」

「え……おい、大地！」

吾郎の静止も聞かず、大地はバスを降りてしまう。

そして、そのままバスが走つてきたルートを戻つていくのであつた。



「く、くそーっ!!!」

大地が向かつたのは聖秀の近くにあるバッティングセンター。

恐らくここに来るであろう人物を待とうと思つていたのだが、声を聞いて既に来ていたのだと気付く。

バットにほとんどど当たらず、当たつてもファールチップにしかならないようなひどい振り方をしていた。

(……ふふっ。やっぱり性格は負けず嫌いなんだな)

大地がバッティングセンター内で見たのは、先程渡嘉敷に野球対決でボコボコにされた藤井の姿。

負けた直後は呆然としていたのだが、渡嘉敷に負けた悔しさからバッティングセンターで練習をしていたのだった。

「藤井」

「……え？ あ、お前は！」

藤井がネットから出てきたため、大地は自動販売機で買ったスポーツドリンクを手に持ち、藤井を呼んだ。

「さっきは大変だったな。ほれっ」

「う、うわつつとお！ な、なんだよ、これは……」

「いいから飲めよ。あっちのベンチ行こうぜ」

大地は強引に藤井にスポーツドリンクを投げ渡すと、誰も座っていないベンチに座ろうと先に向かう。

藤井も特に拒否する理由も無いため、ついていきベンチに座る。

ペットボトルの蓋を開けて一口飲んだ藤井は、息を切らせながら大地に話しかける。

「……なんだよ。あのチビに負けた俺を笑いに来たのかよ」

「あのチビって、渡嘉敷のことか？ ああ、アイツに勝とうなんてさすがに無理があるだ

ろ」

「なっ——!」

「だって渡嘉敷つて海堂高校の特待生にスカウトされるくらい上手いんだぜ?」

「か、海堂高校!?!」

大地の言葉に藤井は驚く。海堂高校といえば野球で名門と言ってもいいくらいの神奈川県甲子園常連校。そこまで野球経験がない藤井でも、その特待生としてスカウトされることがどれだけ凄いことなのか分かっていった。

「う、嘘だろ! そんなやつが男子のほとんどのいない聖秀うちに来るわけがないだろ!」

「……本当だよ。ついでに言うと、俺や吾郎、寿也に薬師寺、大場も同じだよ」

「……ほ、本当なのか?」

まだ疑心暗鬼状態の藤井に対し、頷いて答える大地。

ドリンクを飲んで口を湿らせた大地は続きを話す。

「なんでわざわざ聖秀うちについて思うだろ? 俺達は海堂を倒して甲子園に行くつもりなんだ」

「か、海堂を……」

詳しい内容を省いて、簡単に説明する大地。

なにがなんでも海堂を倒したい大地達にとって、メンバーが揃うのは必須事項。

だからこそ吾郎も藤井を熱心に誘ったのだと話す。

「だ、だけどよ……俺には無理さ……内山だって田代だって宮崎だって同じことを言うよ」

「宮崎はまだ声掛けてないけど、内山と田代は野球部に入ってくれてるって言ってくれたよ」

「内山と田代が……!?!」

「ああ。だからあと一人いれば俺らとしては問題ないから、藤井が無理だっていうなら、宮崎に声掛けるだけなんだけど……」

その言葉に藤井は声を詰まらせる。万が一、宮崎が野球部に入ると言った場合、藤井だけが男子の中で取り残されることになる。

しかし今の藤井からするとそのことはどうでも良かったのだった。

「お、俺は……野球部に入る入らないはどうでもいい！あのチビをギャフンと言わせたいだけだ！」

（ふむ……）

大地は少し考えたあと、藤井に提案するのであった。

「じゃあその復讐^{リベンジ}、俺が付き合ってやるよ」

第七十三話

渡嘉敷と藤井の対決から一週間。

この一週間、大地は吾郎達とは別行動を取り、藤井とマンツーマンで特訓していた。

「投げるときのコツは、まず的をきちんと『見る』ことだ。投げたい場所を見てないのにストライクを投げるなんて素人には到底出来ないからな」

「打つときも『見る』ことが大切だ。ボールを見て、打つために頭を動かさないほうがいい」

藤井は大地のアドバイスを真剣に聞き、そのとおり実践していた。子供会レベルとはいえ、小学生時代に野球に触れていたというのは意外と良かったのか、藤井は大地の予想以上に成長していた。

(出来ればきちんと基礎を叩き込むのに数ヶ月は時間が欲しいんだけどなあ……)

渡嘉敷とのリベンジに燃える藤井のためにきちんと時間を取ってやりたい。その気持ちはあるのだが、それをやっていると夏の予選が始まってしまい、甲子園を目指すどころではなくなってしまう。

そのため彼らに与えられた時間は一週間。これで渡嘉敷達に認めさせるだけのこと

ができないのであれば、藤井が野球部に参加することは事実上不可能ということになる。

「おお！ 本田、今のは上手く打てたんじゃねーか!？」

「ああ、ナイスバッティングだ」

「よし、この調子でえええい！」

数日で100km/hくらいのボールであればほぼ打てるようになった藤井。しかし120km/hを超えると極端に打てなくなる。

目がスピードに慣れていないのもあるが、純粹に練習量が足りなかったためである。

十球中、一球くらいは良い当たりが出来るのだが、あくまでバッティングセンターでの話なので、生きた球を打つとなるとほぼ打てないであろうことは大地も予想出来ていた。

(それでもなんとかしてやりたいんだよね。あの手を見ると余計に……)

藤井の手のひらを大地が見ると、豆が潰れてボロボロになっている。それは大地との練習だけでなく、家に帰ってからバットを振っている証拠だった。

バットを振つてできた豆を、更にバットを振り続けることによつて潰したときの痛みは尋常ではない。

大地達とは違い、その経験がほぼないであろう藤井にとつて、この激痛に耐えながら

バットを振り続けることは本当に苦痛だった。

しかしそれでも藤井がバットを振り続けたのは、負けたくないというただ一つの気持ちだけだった。

「よし、じゃあ今日はここまでにしよう。明日がりベンジの日だからな」

「はあ、はあ……ああ、分かった……」

息を切らした藤井は大地の様子を伺っていた。

「ん？ どうしたんだ？」

「いや、その……なんでお前が俺の練習に付き合ってくれたのかなと思ってよ……。だって本田は渡嘉敷達の味方じゃねえか。」

あ、でもそれが嫌とかではなくて、俺からしたらありがたいことなだけど……明日が本番だつて思ったら、つい気になってさ」

藤井は大地の気持ち的理解出来ていなかったため、少し照れながらだったが大地に率直に聞いていた。

その質問を聞いた大地は少し驚いた顔をしていたが、すぐに笑いながら答える。

「……ああ、そういうことか。まあ確かに渡嘉敷達は味方だけどさ、藤井お前のことだつて敵だとは思ってないよ」

「……ええ？」

「そりゃあ渡嘉敷と対決したときまでは、ちよつとなあ……とは思つたけど、そのあとバッティングセンターで泣きそうな顔しながらバットを振り続けていた藤井を見て、心の底から手助けしてやりたいって思つたんだよ」

「ほ、本田……」

「藤井がこの一週間どれだけ一生懸命やつてきたのかを俺は見てたからな。明日の結果がどうであれ、思いつきりぶつかつてやろうぜ！」

そう言いながら大地が藤井に拳を出す。藤井はその拳を見て少しだけ戸惑つたが、すぐに自分の拳を合わせて、「……ああー」と笑うのであつた。



次の日の放課後、聖秀高校グラウンドの端で前回と同じメンバーが揃つていた。

「……てかさ、一週間で何が変わるつてのさ？」

渡嘉敷はやや不機嫌な様子で腕を組んでいた。

それは吾郎や寿也、薬師寺達も渡嘉敷と同じ気持ちであつた。

野球を小さい頃からやってきて、海堂の特待生に選ばれたという肩書を持つている彼らからすると、大地からの今回の申し出は正直に野球を舐めているとしか思えなかつ

た。

これが数年みっちりやった上での提案ならまだしも——ただ、その頃には渡嘉敷も藤井のことなど忘れていいるであろうが——ほぼ素人がたった一週間で再戦をするなどあり得ないのである。

やる前から結果が決まっていることをやる意味はないのではないかと考えていても無理はなかった。

「いいからやるぞ。藤井も準備はいいな？」

「……ああ」

藤井は学校の体育着に身を包み、大地が以前使っていたお古のグラブを手にはめていた。

前回の制服姿で何も持っていなかったときと違う装いと、テーピングの巻かれた藤井の手を見た渡嘉敷は少しだけ感心したような顔をする。

（へえ。本田兄が教えたつてのは本当みたいだね。……それでも一週間で勝とうなんて無理だけどね）

「じゃあ勝負の方法とルールは前回と同じでいいか？」

「それでいいよ」

「俺も大丈夫だ」

大地が音頭を取り、勝負は前回と同じでお互いに十球ずつ投げてより多く打てたほうが勝ちというシンプルなもの。

打った回数と同じであれば、より当たりが良かった者が勝利となる。ヒットの当たり判定はここにいるメンバーであればほぼ同じ判定になるはずなので、特に揉めることもないと誰もが考えていた。

「じゃあ今回はそっちが先に打っていいよ」

前回は渡嘉敷が先行だったため、今回は藤井に先行を譲っていた。

藤井は無言で頷くと、打席に立って構える。

（へえ……少しはサマになってるじゃん）

前回の初心者丸出しの構えとは違い、初級者レベルには到達していると渡嘉敷は判断していた。

この時点で彼のこの勝負での意味合いは変わっていた。軽く笑った渡嘉敷は、ワインドアップからボールを投げ込む。

「——ッ！」

カアン！ という音に横で見ていた一同が驚く。なぜなら藤井が渡嘉敷のボールを打ったからであった。

それもバットを振り回した結果、たまたま当たったわけではない。彼はボールの軌道

をしつかり見て目を逸らすことなく、下半身を使って腰でバットを振っていたのだ。

バットの芯に当たったボールは渡嘉敷の横をライナーで飛んでいき、誰がどう見てもヒット性の当たりであった。

その出来事に一番驚いたのは藤井本人であった。たった一週間で前回かすることすら出来なかつた渡嘉敷からヒット性の当たりを打つことが出来たからである。

藤井は驚いた顔で大地を見た。目が合った大地は笑って頷く。

「よっしゃあー！ 来い!!」

大地に褒めてもらったのだと分かつた藤井は気合いを入れた声を出し、渡嘉敷に次のボールを投げるように言うのであった。

「じゃあ結果は俺の勝ちだね」

「……………くそっ!」

初めは調子が良かった藤井であったが、そこから徐々に渡嘉敷のボールが打てなくな

り、結果として渡嘉敷に惨敗した。

攻守を交代した藤井のボールを渡嘉敷はいとも簡単に全球打ち、誰がどう見ても渡嘉敷の勝利であった。

実は藤井の打席のとき、渡嘉敷は100km/h程度から投げて徐々にスピードを上げていたのだ。そのため、初めは藤井も打つことが出来ていたのだが、最後にはボールを目で追うことすら出来ていなかった。

「もうこれでいい？ 俺は帰るから——」

「ちよつと待ってくれ！」

「……………なに？」

渡嘉敷が帰ろうとしたところで、藤井が渡嘉敷を呼び止める。

これ以上藤井に付き合うつもりがなかった渡嘉敷は、振り向いて少し不機嫌そうに答える。

「……………」

「用がないならもう行くからね」

「……………ッ！ そ、その……………す、すまなかつた」

藤井は言葉に詰まるが、うなだれるようにして渡嘉敷に謝罪をする。

「正直に言つて、俺は野球を舐めていた……………。ボールを棒で打つだけのスポーツなんて

誰でも出来るって……でも渡嘉敷お前に負けて、本田に教えてもらいながら練習してようやく大変さが分かったんだ。

この一週間、俺はリベンジをするために一生懸命に練習をしたつもりだ。だがお前達はきつとそれ以上にハードな練習を何年もやってきていたんだろ。

野球がどれだけ大変なのか分からないやつにあんなこと言われたら、誰だって怒るよな……野球を馬鹿にして本当にすまなかった」

頭を下げて謝る藤井。その素直さに吾郎や清水、寿也達も驚いた顔を見せる。

しかし大地と渡嘉敷は特に驚いた顔を見せてはいなかった。頭を下げた藤井を見た渡嘉敷は、そのまま校舎に帰ろうとして立ち止まる。

「今のお前とはもう勝負はしないよ。絶対に勝つと分かっている勝負はつまらないからね」

「——ッ！」

「……でもまあ野球部で練習していれば、いずれまた勝負出来るかもね」

そのまま校舎に帰っていく渡嘉敷。薬師寺と大場は渡嘉敷の言葉に笑みを浮かべて一緒に校舎へと帰っていった。

藤井は頭を上げると、目に涙を溜めながら「……ああ！」と渡嘉敷に応える。

その様子を見た大地は藤井に近付き、「お疲れ」と声を掛けた。

「野球も悪いもんじゃないだろ？」

「そう……だな……」

涙を拭った藤井は、近付いてきた大地の方を向く。

「本田。この一週間、本当にありがとう。お前のお陰で初めて自分で納得するだけの努力が出来たと思う」

藤井は大地に感謝の言葉を伝える。藤井は記憶にある限り、今まで自分が納得するまで努力をしたことがなかった。

いつも中途半端で、少し辛くなると物事を投げ出していた。そしてそれが仕方のないことだと受け入れるようになってしまっていたのである。

しかし今回本気で悔しいと思えるくらいの挫折を味わった藤井。

いつもであればそのまま逃げてしまっていたのだが、短い期間ではあるが大地のお陰で最後までやり遂げることが出来た。

そのことが藤井の中で大きな出来事となっていたのである。

「……………でもまだ渡嘉敷あいかに勝てていないのが悔しいんだ！ だから俺も……………俺も野球部に入れてくれ！」

藤井は自分の気持ちを素直に出して野球部に入りたいと大地に頭を下げる。

大地は吾郎、寿也、清水の顔を見て、お互いに頷いたあと、「もちろん歓迎するよ」と

藤井に返事をする。

「よっしゃあ！ これで聖^{うち}秀の男子は全員野球部に入ったな！」

「……え？ まだ宮崎が入っていないだろ？」

吾郎の言葉を大地が訂正する。しかし吾郎は寿也と目を合わせ、「ふふん」と笑うと宮崎も野球部に入ると了承を貰っている旨を大地に伝える。

「吾郎、いつの間に……！」

「大地が藤井の面倒を見ているのが分かっていたからな！ 寿也と相談して、宮崎は俺達で勧誘しようって話をしたのさ」

「大地君だけに任せるのも悪いからね。僕達でも出来ることは手伝うよ」

大地が藤井の練習に付き合っていた一週間で宮崎の勧誘に成功していた吾郎達。

詳しい話を聞くと、吾郎が宮崎に付きまとって半ば強引に仲良くなったというのだが、大地の性格ではそういうことは出来ないため、宮崎の勧誘は吾郎がやって正解であった。

こうしてようやく野球部メンバーが集まった大地達。これから甲子園を目指して動き始めるのであった。

「……………私は絶対に認めないからね」

少し離れた場所で様子を見ていた女子生徒が一人いた。彼女は藤井達のやり取りを見て、不機嫌そうな顔をして去っていくのであった。

第七十四話

「今のままでは部として正式に承認するわけにはいきません」

理事長室に野球部の設立届を提出に來た大地達は、理事長より野球部の設立は出来ないと告げられる。

それに最初に反応したのは吾郎だった。

「なっ!?!」

「吾郎」

大地は突つかかろうとする吾郎を冷静に止め、彼が落ち着いたのを見計らつて理事長に理由を尋ねる。

「……理由をお聞きしても?」

「ええ。理由は簡単よ。この設立届……野球部顧問の欄が空白になっているからよ」

これには全員が盲点だったようで、声を揃えて「……………あ」と呟く。

吾郎だけならまだしも、大地や寿也、薬師寺、大場、渡嘉敷、田代といった面々が気付いていなかったため、各自内心で羞恥を覚えていた。

野球部メンバーが揃ったという喜びで、勢いそのまま来てしまつていたため気付かなかつ

たのだ。その様子に理事長はため息をつく。

「分かりました。それでは顧問はこちらで用意するわ」

「え……そこまでお任せしてもよろしいのですか?」

「まあせっつかく聖秀学院の男子一期生が積極的に活動しようとしているのだからね。私達としても応援するのはやぶさかではないのよ」

顧問を用意するという理事長の言葉に、寿也が遠慮がちにそこまで任せても良いのかと聞く。

それに対し、理事長は表向きのみ个回答をしたが、本音としては共学になった聖秀学院が一年目で甲子園に行ったという実績があれば、来年以降の男子生徒の入学希望も増えるだろうというところまで考えていた。

ただし、それはあくまで健全な学校生活を送るということが優先されるので、海堂高校の考えとは似ても似つかない。

結局、大地達は顧問の件を理事長に任せ、そのまま理事長室をあとにするのであった。一人残された理事長は、椅子に座りながら息を吐く。そして電話の受話器を取って、内線番号を打ち込む。

「あ、私です。一つお願いしたいことがあるのですが、今から理事長室に来ていただけますか?」

「今からですか……分かりました」

「よろしくお願ひします」

電話の相手に今から理事長室に来るように伝えた彼女は、受話器を置く。

(……海堂高校の特待生に選ばれたと言つても、あの子達はまだまだ子供。私達もそのことはきちんとしていかなきゃいけないわね)

お茶を口に含んだ彼女は、考え事をしながら先ほどの電話の相手が部屋に来るのを待つのであつた。



「これで聖秀に野球部が出来るな」

「ああ、ようやくだ」

教室に戻った大地達は男子だけで集まり、今後について話していた。

「顧問は大丈夫だとして、練習場所の確保が大切になってくるな」

「それに練習試合の相手も探さないとだよ？」

「聖秀うっちのような創部一年目を相手してくれるような高校だと……完全な弱小校になりそうだな」

薬師寺、渡嘉敷、大場がそれぞれ思いつく課題点を出す。

一から野球部を作るとなれば、これくらいのハンデは背負わなくてはいけないと理解していた。

だからこそ悲観的になることなく、冷静に話し合うことが出来るのであった。

「まずは顧問の先生に挨拶しないとだな」

「お昼休みにでも教員室に行ってみようぜ」

「そうだね」

大地、吾郎、寿也も自分の考えを出していたのだが、そこで藤井達が少し気まずそうな顔をしていた。

その様子に気付いた大地が声を掛ける。

「ん？ どうした？」

「え、いや、そのな……俺達は野球部が出来さえすれば、あとはお前達の実力があれば甲子園に簡単に行けると思ってたんだよ」

藤井の話に内山、宮崎、田代も話を続ける。

「俺も同じ考えだったよ。そんな簡単なことじゃないんだな」

「俺みたいな運動音痴の素人だと、マシな考えも浮かばないのが申し訳ない……」

「まあ俺はシニアまで経験しているし、ある程度やることは多いと思っていたけどな」

積極的に意見を出す者、考えが甘かったと反省する者などに分かれていたが、ゼロから作るという部分にワクワクした気持ちがあるのは全員が共通であった。

昼休み。全員で行くのは流石に迷惑になるのは分かっていたので、代表して大地と吾郎が教員室に向かった。

薬師寺からは「お前達が言い出したことなんだから、ちゃんと動け」と言われてしまっていたので、大地は何も反論できずに大人しく——吾郎は終始文句を言っていたが——行くことにしていた。

「失礼します」

大地がノックをして教員室に入る。辺りを見回すが、彼がいなかったため、念の為に近くにいた男性教諭に居場所を尋ねる。

「あの……」

「ん？ なんだね？」

「山田先生はいらっしゃいますか？」

「山田？ ああ、英語の山田君か」

男性教諭は教員室内の一つの席を見て、不在であることを確認する。

「ちよつと席を外しているみたいだね。ああ、そうだ……彼なら多分中庭で昼休みを

取っているんじゃないかな？」

「そうでしたか。ありがとうございます」

大地は男性教諭に頭を下げて、教員室から退室する。

そして、吾郎と一緒に中庭に向かおうとしたところで、吾郎から質問を受けた。

「なあ大地」

「ん？　なんだ？」

「顧問の先生は山田先生って名前なのか？」

吾郎は単純に質問をしただけだったのだが、その質問で大地は顧問になる教員の名前を聞いていなかったことに気付く。

(あ……し、しまった！　山田先生で確定だと思っていたから、名前を聞くの忘れていた……)

内心慌てている大地。そしてどうやって吾郎に誤魔化そうかと悩んでいたら、吾郎が続けて「山田みたいなよくある名前だと、沢山いたら分かんなくなるよな！」と笑っていたため、「ほ、本当だよな！」と勝手に話が流れたことに心の底からホツとするのであった。

そして中庭へと二人で歩いていくと、ワイシャツにネクタイ、ストラックスの出で立ちをした教員らしき人が、芝生のところで新聞を頭に乘せて寝ていた。

「ん？ あれか？」

「そうみたいだな」

“芝生内立入禁止”と書かれたところで堂々と寝ている人間が教師なのはどうか？と大地は思っていたが、なんにせよ話し掛けてみないことには始まらないと思ひ直す。しかし、声を掛けようと近付いたところで逆に話し掛けられてしまう。

「何か御用ですか？」

「え……あ、その山田先生が中庭にいらつしやるとお聞きして来たのですが……」

「いかにも私が山田一郎ですが？」

「うわっ!!」

顔に乗せられた新聞を取った山田が顔を見せると、その見た目に吾郎が驚きの声を上げる。

「が、が、が、外国人だア!？」

「外国人？ 私は外国人ではありません。にほんジンの山田一郎でえす」

流暢な日本語を話す山田一郎という男性は、日本人の女性と結婚して日本に帰化したのだと説明する。

元々はミネソタに生まれ育ったステイブ・テイモシーという白人であるということ吾郎に話していたが、それは彼の興味範疇外であった。

「ま、まあいや何人なにじんでも。それよか校長から野球部の顧問の話って聞いていないか？」
「ちよ、先生に言葉遣いしつかりしろって！ あと正しくは理事長だからな。……つとうちの弟が失礼しました。僕は本田——」

「OH!! 話は伺っていますよ。あなた達がベースボールクラブを作りたがっているというホン・ダイチ君と弟のダゴロー君ですね」

大地の話を遮り、どんどん話を進めようとする山田。

「がつてん承知しました。私で良ければ、喜んで野球部の顧問を引き受けましょう、ダイチ君、ダゴロー君」

「名前を切るところはそこじゃねーって！ てかなんで大地はそのまま、俺はダゴローなんだよ！」

吾郎のツツコミを無視して、山田は野球部を作るための現状の課題を大地に聞いていく。

大地はメンバーは正式に十人集まったこと、練習場所と練習試合の相手、そしてユニフォームが欲しいことも告げる。

「OK! 分かりました！ 練習場所ですが……私から教頭へ話をしてみます」

「あの、そのときは僕も連れて行ってくれませんか？」

「なにか問題でもあるのですか？」

「多分ですが、今の聖秀のグラウンドの使用状況では危険な硬球を使うような硬式野球部に貸すスペースは無いって言われる気がするんです。なので僕からも交渉をさせて欲しいなと思ひまして……」

「そうですか……OK！ それでは放課後に一緒に話に行きましょう！」

大地は山田を説得して、放課後に一緒に教頭へ話をすることの許可を貰うことが出来た。

吾郎だけは教室に戻ってから不満をずっと言っていたのだが、大地は自身が本田大地という名前で良かったと本当に思うのであった。

第七十五話

「よし！ もう一球！」

「吾郎君、ナイスピッチング！」

大地達が野球部を創設してから一ヶ月が経った。

この間、大地達は目まぐるしく動いていた。まず山田一郎を顧問に加えて正式に野球部として受理してもらった。

その日の放課後に教頭へ練習場所の交渉へと向かっていた。

その際、大地が予測していた通り——原作知識通りとも言える——聖秀のグラウンドを貸し出すことが出来ないということだった。

危険な硬球を使う野球部は、周りに人がいる場所で活動するには危険すぎている。

そのため、山田が屋上を使わせてほしいと提案しようとしたところで大地が間に入ってきた。

「それでは野球部が結果を出せることが分かれば、場所を用意していただくことは出来ますか？」

「む……それは私の一存ではなんとも言えないな」

教頭からの回答は理事長の許可が無いと出来ないということだった。

そのため教頭、山田、大地の三人はそのまま理事長室へ向かい、同じ交渉をしたところ結果を出すのであればと言う条件で、了承を貰うことが出来ていた。

「ただ……あなたは結果を出すというけれど、どうするつもりなの？」

「えっと、強豪高校と練習試合をして勝つことが出来れば認めて欲しいです。そのために練習試合を組んでもらえると助かるのですが……」

「練習試合ですか……？　まだ新設されたばかりの野球部の相手をしてくれる強豪高校など無いと思うのですか……」

大地の提案に理事長が現実的な意見を述べ、そこで一旦話が途切れる。

理事長も教頭も強豪高校と練習試合を確実に組めるだけの人脈が無いため、このままでは場所の確保が出来ないまま活動しなくてはいけなくなる。

「山田先生は何かいい案はありませんか？」

「いい案ですか……」

気まずい空気が流れる中、大地が山田に話を振る。

大地としては、原作にあった山田の人脈を使って強豪校である横浜帝仁高校との練習試合が出来ないか考えていた。

「そうですね……それでは私が以前赴任していた高校に当たってみましょうか。横浜帝

仁高校といつて、去年も夏大会でベスト四まで進んでいたもので、十分強豪と言えるのではないのでしょうか？」

「……そうね。それでは横浜帝仁高校に話をしてみただけですか？」

数日後、山田のツテを使い、横浜帝仁高校との練習試合が組まれることとなる。

時期は一ヶ月後に設定し、それまでは素人組に基礎を教えることと、残りのメンバーは連携を確かめる期間とした。

大地にとって意外だったのは、そのあとの理事長の行動であった。

「一ヶ月の間、練習が全く出来ないというのも辛いと思うので、こちらで場所を用意しておきました。練習試合が終わるまではそこを使ってください」

理事長は帝仁高校との試合までの間、近くにある市営グラウンドを聖秀高校野球部が出来る限り使えるように借りていた。

ただし市営グラウンドのため、なるべく一つの団体がずっと使うことはあまり好ましくない。なので、もし市営グラウンドを使いたいという希望者が出た場合はそちらを優先するということが条件であった。

これは大地達への期待の表れであり、原作と明らかに待遇が違う理由は吾郎一人だけではなく、他に大地や寿也、薬師寺、大場、渡嘉敷といったシニア全国優勝チームメンバーを含む海堂特待生のメンバーがいたからにほかならない。

（高校生になったばかりの子達が、神奈川県ベスト四に勝てるとは思わなけれど……勝てたときのことを考えてこちらもある程度動いておかないといけないわね）

理事長は受話器を取り、聖秀野球部専用グラウンドを用意するべく動くのであった。



練習場所が確保でき、練習試合も一ヶ月後に決まったので、それを目標に各自で練習に励むこととなる。

吾郎と寿也がピッチング練習。大地が内山、宮崎、藤井の初心者組の練習指導、薬師寺、大場、渡嘉敷、田代が守備練習や打撃練習に時間を割くというのが基本の流れであった。

内山が放課後に練習時間が取れないため、放課後の練習では宮崎と藤井を教えて、朝と夜を使って内山を教えるということをしていった。

「なあ大地。俺らに時間をここまで使っていて大丈夫なのか？ お前も自分の練習時間を取ったほうがいいんじゃない？」

「ん？ 気にしなくて大丈夫だよ。藤井達が少しずつでも上手くなってくれば、全員で練習できるようになるし、野球は皆でやったほうが面白いからね」

藤井は大地が自分の練習をせず、初心者組を教えることにほとんどの時間を使っていることに不安を覚えていた。

しかし大地にとって初心者組が上手になることは、今後の全体の練習効率UPにも繋がるため、自分の練習時間を削ってでもやるべきことだと思っていた。

そして一番大切なのは、初心者組全員が野球を好きになつてほしいということである。せつかく野球部に入ってくれたのであれば、全員が野球を好きになつて欲しい。

野球の楽しさを知るためには最初が肝心のため、大地は手厚くフォローしていた。

ちなみに初心者組が基礎を学んでいるこの一ヶ月で、藤井達だけでなく、薬師寺達も吾郎と大地のことを区別するためとはいえ下の名前前で呼ぶようになるほど距離は縮まっていた。

「じゃあ今日の練習はここまでだな。山田先生がユニフォームを配ってくれるから集まってくれ！」

帝仁高校との練習試合前日、いつものように市営グラウンドで最後の調整を行ったメンバーに山田が新しく作ったユニフォームを配っていく。

背番号も付いているが、今回のレギュラーは暫定であり、夏大会のレギュラーは直前にまた決めると伝えられる。

「それでは最後にキャプテンのダイチ君から一言貰えますか？」

「……………え？ 俺がキャプテンっていつ決まったんですか？」

山田がさも当然かのように大地にキャプテンとして挨拶するように促す。

しかし大地はそんなこと一言も聞いていなかったなので、思わず山田を見る。

「え……ダイチ君がキャプテンだと思っていたのですが、違うのですか？」

「ああ、俺もそう思ってた」

「俺も」

「俺も」

「僕も」

山田の言葉に他のメンバーも次々と同じことを思っていたと発言し、いつの間にかキャプテンになっていたのだった。

頭を掻きながら前に出る大地。

「えっと、急にキャプテンになったと聞いて、まだ少し混乱してるんですけど……とりあえず明日の試合は精一杯楽しんで勝とう！」

『おおー！』



「え！ 大地君がキャプテンになったの!？」

「さすがですね！」

家に帰った大地達は、週末になると遊びに来る涼子と美穂と一緒にリビングで話していた。

次の日に試合があるのは聞いていたので、応援に行くつもりではあった。しかし大地がキャプテンになったと聞いて、喜びつつも称賛していた。

「まあ実際に上手くいくか分からないけどね。出来る限りやってみるよ」

「大地さんなら大丈夫ですよ！ 絶対に！」

「私もそう思うよ！」

二人は大地なら必ず上手くいくと心から思っていた。精神的にも大人だと感じている——実際に精神年齢はかなり上——のもあるし、面倒見も良いため、今だけでなく後輩が入ってきてても大丈夫であると自信を持って言えるようであった。

「明日はお母さんと美穂ちゃんの三人で応援に行くからね！」

「頑張ってくださいね！」

大地の応援に行くのと張り切る二人。大地は「ありがとう」と笑いながら返し、夜も遅くなってきたため二人を家まで送り届けるのであった。

第七十六話※

「あつはつはつはつは!!」

「いや、しかしまったくかたじけのないごぎるですよ、峯岸先生」

「いやいや、君の頼みとあつちや、断るわけにもいかんだろ」

山田は帝仁高校の顧問である峯岸と帝仁高校グラウンドのベンチで話していた。

以前赴任していたという繋がりです。山田は練習試合を組むことが出来ており、久しぶりなのもあつて早く来て挨拶をしていた。

「ん? うちの生徒が来たようなので、じゃあまた後ほど」

「うむ」

大地達が来たため、席を立つ山田。

山田がいなくなったのを確認した帝仁高校の生徒が一人、峯岸に詰め寄る。

「監督」

「ん? どうした?」

「どういふことですか、急にこんな試合入れるなんて……困りますよ、今日は昼から川実とも試合入れてるんですよ!」

「まあそう言うな。仕方がないだろ、古い友人の頼みなんだから」

本気で困った顔をした生徒に、峯岸は笑いかける。だが、それで納得はしなかった。

「しかも聖秀ってまだ一度も公式戦にエントリーしたこともない学校じゃないですか……そんなレベルの野球部と帝仁ちが試合になるわけじゃないでしょう」

「……あそこにいるのが横浜シニアの本田兄弟と佐藤、それに海堂特待生に選ばれていた薬師寺、大場、渡嘉敷だとしてもか？」

「……あ、あの!? やつらは海堂に行ったんじゃ……!?」

「色々と事情があつたんだろうよ。ただ、これなら試合をやる価値はあるだろう?」

峯岸は何も言わなくなった生徒に、「それでも納得できないようであれば、川実の前のウォーミングアップだと思ってくれ」と言う。

生徒も少しは腑に落ちたのか、頭を下げて練習に戻っていった。

◇スターティングメンバー

1番：キャッチャー 佐藤寿也

2番：ショート 本田大地

3番：ピッチャー 本田吾郎

4番：サード 薬師寺

5番：ファースト 大場

6 番：セカンド 渡嘉敷

7 番：センター 田代

8 番：レフト 藤井

9 番：ライト 内山

控え：宮崎

スターティングメンバーは寿也、大地、吾郎が一番から三番に入るといふ超攻撃的布陣を敷いていた。

これは大地の発案であった。通常であればこの三人は誰が四番になってもおかしくない。しかし、薬師寺と大場という強打者が後ろに控えているため、それであれば一打席でも多く回ってくるように調整したほうが、点が入りやすいという考えからであった。

そしてスタートはベンチの宮崎も後で必ず出すと伝えているため、全員が緊張感を持った状態でスタートができそうであった。

「あのく、じゃあそろそろ始めますか？」

「あ、はい。よろしくお願いします」

人数の関係で帝仁側に審判をお願いすることとなっていた。先攻は帝仁高校。

挨拶の後、吾郎達はそれぞれの守備位置に行き、各自準備を始める。

「ほお？」

「おー、結構速い球投げんじゃん、あのピッチャー」

「打ちごろってやつか？」

「シニア大会全国優勝チームのピッチャーって聞いていたけど、所詮中坊上がりだからな」

帝仁の選手たちは吾郎のピッチング練習を見て、笑いながら話していた。

それをファーストにいる大場は冷めた目で見ていた。

（アレを本気の投球だと思っている時点で、自分達のレベルが低いと言っているようなものだな……）

それぞれの準備が終わり、審判によりプレイボールの合図が掛かる。

吾郎が構えてボールを投げ込む。

寿也のミットに大きな音を立てて吸い込まれていったボールを見て、帝仁側の時ときが一瞬だけ止まる。

「ス……ストライーク!!」

「——!」

「な………何イ!？」

続けて投げ込まれる吾郎のボールに、打者は黙って見送ることしか出来ない。

これには帝仁高校の選手だけでなく、監督の峯岸も口を開けてただただ驚いていた。

「ストラーイク！ バッターアウト！」

「こ、これが昨年全国大会を優勝した横浜シニアの優勝バッテリーなのか!？」

結局吾郎の投げるボールにかすることが出来るバッターはおらず、一回の表は三者連続三振となる。

「素晴らしー！ 素晴らしーですね、ノゴロー君!! ワタシ、こんな速い球を目の前で見たの初めてですよ！」

「いや、あんた練習で散々見てたじゃねーか」

山田のボケとも分からない言葉に律儀にツツコミを入れる吾郎。

なんだかんだで相性の良い二人のやり取りを大地は微笑みながら見ていた。

「まずは僕の打席からだね」

「おう、寿也！ ささっとカマしてやってくれ！」

調子の良いことを言っている吾郎に返事をしながら、寿也はバッターボックスへと向かう。

久しぶりの試合ということもあり、寿也も嬉しそうな表情をしていた。

「プレイー！」

ここから聖秀学院野球部の猛攻撃が始まる。

一番の寿也がセンター超えのツーベースを放つと、続く大地がレフトオーバーのツーベース。三番の吾郎が左中間の柵を超えるツーランホームランで3―0。

薬師寺、大場もソロホームランを打ち、一回表でアウトを一つも取れていない状況で5―0となっていた。

「はあ、はあ、はあ……」

「タ、タイム!!」

ピッチャーはまだ十球そこそこしか投げていないにも関わらず、青い顔をしながら息を切らしていた。

峯岸は流石にまずいと思ったのか、タイムを取りマウンドまで自ら行く。

「お、おい、どうしたんだ？ 調子でも悪いのか？」

「い、いえ……そ、そんなはずは……」

強豪横浜帝仁高校でエースを務めるだけあり、球速もあり変化球も優秀であるはずが、大場までのバッター全員に何も通じていなかった。

それもそのはずである。彼らが行っていた打撃練習では、大地がバッティングピッチャーをしていたのである。

大地は高校入学時点で今まで貯まっていたポイントを割り振り、この一ヶ月でその能力を使いこなすために全員のサポートに注力していた。

彼としては能力を使いこなすためにやっていただけだったが、それが全員からプラスの評価として受け取られた結果、キャプテンに推薦されたということに大地自身は気付いていなかった。

◇◇◇◇◇◇

【本田大地ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：151km

コントロール：C+

スタミナ：C

変化球：

ナツクルカーブ：4

シュート：3

ウシケンスライダー：3

◇野手基礎能力一覧

弾道：4

ミート：C+

パワー：C

走力：C+

肩力：C

守備力：C

捕球：C

◇特殊能力

【共通】

ケガしにくさC+ 回復C ムード○

【野手】

チャンスC+ 対左投手D 盗塁D

走塁C― 送球C+

パワーヒッター 初球○ 守備職人

流し打ち 広角打法 威圧感

【投手】

対ピンチC 対左打者D+ 打たれ強さD+

ノビC+ クイックC―

ジャイロボール キレ〇 回またぎ〇

リリース〇

◇コツ

クロスファイヤーLV4 闘志LV4 勝ち運LV4

低め〇LV3

◇◇◇◇◇

このステータスの大地がバッティングピッチャーをしているのである。生きた球を投げ込まれる分、初心者組以外の成長度合いも凄まじかった。

そしてそれは初心者組にももちろん適用される。

(あれ? これってもしかして……?)

(これは俺でも……?)

渡嘉敷と田代がヒットを打ち、藤井と内山が緊張した初打席で粘るくらいのことが出来ていた。

結果二人ともアウトになってしまったが、それは次の打席であれば打てるかもしれないと思わせるほどであった。

そして寿也が更にホームランを打ち込み、8―0とほぼ勝利が決定したくらいの点差となる。

「宮崎、次の俺の打席で行くぞ！」

「え……………！ 急にかよ!？」

まだ一回裏なのだが、大地が宮崎と代わると宣言し、突然の交代に困惑しながらも打席に向かおうとする宮崎。

そこに大地がアドバイスをする。

「宮崎」

「な、なんだよ……………」

「初球だ」

「え……………？」

「初球を思いっきり振ってこい。初心者組で誰よりも努力してきたお前なら絶対に打てるから」

過去のトラウマからスポーツに対して忌避感を持っていた宮崎。

本当であれば自分も皆と一緒にスポーツをしたかったのだが、自身の運動音痴のせいで馬鹿にされることが多く、それが彼をスポーツと疎遠にさせてしまっていた。

しかし吾郎に説得されて入部した宮崎は、自分の能力の無さを分かっているため、この一ヶ月は誰よりも努力してきた。

それは渡嘉敷達にも認められるぐらいである。だからこそ大地もそんな宮崎を徹底

的にサポートし続けていた。

そこまでしてくれた大地を宮崎は疑うことはなかった。

「……………分かった。初球だな」

大きく頷いた宮崎。打席に立ち、もう試合を止めたいと思っっているピッチャーを睨みつける。

（は、早くこんな試合終わってくれ……）

後ろ向きな思いで投げられたボールは、宮崎にとって絶好球でしかなかった。

（初球！ 初球……初球！）

どんな球でも振ろうと思っ、バットを思い切り振る宮崎。カキンと音が鳴り、彼は打球の行方を追わずに一塁目掛けて走り続ける。

そして一塁を駆け抜け、どうなったのかを知ろうと周りを見たとこ、聖秀ベンチから大きな歓声が上がった。

「うおおおお！ 宮崎、ナイスヒットだ！」

「宮崎が打ったぞ！」

「素人組初ヒットだ！」

打球はセンター前に転がるヒットであった。偶然でもなく、宮崎が今までの練習通り振り切ったからこそ出た結果だった。

「宮崎!!」

ベンチから宮崎を呼ぶ大地の声が聞こえる。

その方向を向くと、満面の笑みを浮かべた大地の顔があった。

「う……うおおおお!!」

そこで宮崎はガッツポーズをして、思い切り喜ぶ。

自分で努力した結果が結びついたことが心の底から嬉しかった。スポーツで周りに認めてもらえたことが本当に嬉しかったのだ。

(やったな……宮崎!)

大地も嬉しそうな顔をして宮崎を見るのであった。

その後も試合は進んでいき、三回が終わった時点で監督の峯岸より「ワールドゲームにしてほしい」というお願いもあり、練習試合は終了となった。

聖秀学院高校野球部の初めての試合は、神奈川県ベスト四の横浜帝仁高校を相手に16―0という大差での勝利だった。

第七十七話

「いや〜、まさにアン、ビリーバアブ〜！！ まさか神奈川県ベスト四にコールド勝ちするとはなあ！」

ファストフード店でハンバーガーを食べながら話す藤井の言葉に、素人組や田代は笑いながら頷く。

海堂組や吾郎、寿也は勝つのが当たり前だと思っていたため、話は聞いていたがそこまで喜んでいるということでもなかった。

大地だけは藤井の言葉で中学時代の牟田むたという男を思い出していた。

「まあとりあえずこれでグラウンドもなんとかしてくれるんだろ？」

「ああ、まあ理事長はそう言ってたけどな。まだ正式に決まるまでは油断できないよ」
理事長との約束は結果を出せるなら専用のグラウンドを用意しても良いということだった。

結果とは何を指しているのかは曖昧ではあるが、神奈川県ベスト四に大勝できるだけの実力があれば、甲子園も可能性としてあり得ると判断されても特におかしいことはない。

そのため全員が比較的安心しているのであった。

「それにしてもまさか全員がヒットを打つなんてな」

「それは俺も驚いたよ」

薬師寺と渡嘉敷は、素人組の三人でさえもヒットを打つことが出来たことに驚いていた。

いくら大地が鍛えたといっても、素人がたった一ヶ月で強豪校のピッチャーからヒットを打つなんて難しいと言わざるを得ない。

「大地が丁寧に教えてくれたからだよ」

「あ、それは俺も感じたな」

「そうだな。大地の教え方は分かりやすいから、俺でも上手くなっているって実感があつたよ」

内山、藤井、宮崎は口々に大地の教え方を褒めていく。

実際にリトル、シニアで素人や後輩に教える経験があつたため、大地はそれが生きていたのだろうと思っていた。

「まあ俺が教えたことなんて基礎だから、三人が真面目に努力した結果だと思っただけだな」
「答えが優等生！ ガサツな弟とはなんでこんなに違うかねえ——って、いてーって！」

冗談だよ！」

「……誰がガサツな弟じゃー！」

藤井が冗談で吾郎をからかった結果、後頭部を吾郎にはたかれてツツコまれることもあつたが、聖秀野球部の仲は良好であつた。

家に着いて風呂に入り、夕食を食べていたとき、本田家に一本の電話が鳴る。

「大地ー！ ちょっと出てくれない？」

「分かつた！ ……………はい、本田です。」

「私、聖秀学院高校野球部顧問の山田と申しますが、大地君ですか？」

「あ、はい。どうされましたか？」

「実は……………」

このあと話された山田からの提案に、大地も少しだけ驚くのであつた。



「合同練習?!」

「ああ」

次の日、朝から市営グラウンドに集まった全員に、山田からあつた電話の内容を話す。

「昨日、山田先生から電話があつてな。グラウンドに関しては、理事長が既に動いてくれていたから大丈夫みたいなんだ。」

ただ、グラウンドが完成するまでもう少し時間が掛かるから、それまでは帝仁高校で合同練習をしないか？ ということを言われたんだ」

練習試合のあと、聖秀野球部のグラウンドの件を山田が帝仁の監督である峯岸に世間話程度に話したところ、峯岸の方から提案があつたということだった。

帝仁高校は打倒海堂を掲げながら、いつも大敗を喫していたためこの状況をなんとかしたかった。

そこに一年生のみではあるが、海堂戦以上の点差で帝仁に勝った聖秀と合同練習をすれば、少しは何かが変わるかもしれないという一縷いちるの望みを頼りにしていた。

一方、聖秀側としても強豪帝仁高校のグラウンドを使用できるという点、強豪と一緒に練習するということで学べる点が多いということからメリツトは多いと山田は判断していた。

そして市営グラウンドを借りるにしてもお金が掛かっているため、専用グラウンドを作るのが決まった以上、なるべく節約をしてほしいという理事長の意向も汲んでいた。

「そういうことか……どうする？」

「どうするも選択肢は無いんじゃないの？」

「まあ強豪校の設備を使わせてもらえるのはありがたいな」

もう五月。七月から夏の予選が始まるため、薬師寺達からするとできるだけ良い環境
下で練習に励みたいという願望が見えていた。

「僕もそう思うよ」

「ああ、俺もそれでいいと思う」

「そうだな」

それは寿也や吾郎、田代も同じ意見であった。

「きよ、強豪校と混じって練習するのか……」

「俺は……ちよつと……な」

「どつちにしろ俺は出れないしなあ」

藤井は少し戸惑いを感じており、宮崎は過去のトラウマもあるので明確でないにしろ
反対していた。

内山は家庭の事情があるため、どちらにせよ参加は出来ないものであった。

「んー、じゃあこうするのはどうだ？ 藤井は強制参加。宮崎は自信がつくまで内山と
一緒にタイミングで練習をする。それまでは自主練をしてもらうことになるけど」

「それなら……まあいいか」

「練習相手が一人増えるのは俺としては嬉しいな」

「え……え？　俺は強制参加なの!？」

大地としては強制的に参加をさせたくないため、宮崎には内山と一緒に練習してある程度実力と自信がついてきた段階で合流するという提案をした。

宮崎もそれならばと了承し、内山は練習相手が増えたことを喜ぶ。そして藤井は強制参加。

「じゃあこれで山田先生には話しておくよ。他に質問とかはあるか？」

「ねえ！　無視するなって！　俺、本当に強制なの!？」

藤井の言葉が無視して、「じゃあ練習を始めようか！」と大地の号令で本日の練習がスタートする。

大地が返事をするまで、藤井は叫び続けるのであった。



帝仁高校との練習試合から更に一ヶ月半の時間が経過した。

この間、聖秀と帝仁は合同練習をすることでお互いの実力を高めていく。

聖秀側は全員一年生であったが、練習試合での圧倒的な実力差から三年生達からも一

目置かれており、下級生いじめやいやがらせのようなことは一切なく、むしろ積極的に交流を深めていた。

その様子に大地も嬉しくなり、帝仁の生徒達の練習も見erようになった。その結果、帝仁高校の実力はメキメキと上がっていき、一ヶ月半前とは比べられないほどレベルが高くなっていった。

聖秀側にとつても嬉しいことは多かった。練習場所の確保だけでなく、強豪高校の設備の使用許可。

そして一番は週末に帝仁が組んでいた練習試合に参加出来るようになったということである。

元々帝仁と練習試合に来た高校に、ダブルヘッダーとなるが聖秀も急遽参加させてもらうことが出来ていた。

三つの高校で各二試合ずつ、参加していない高校は試合の見学が出来るため、それが勉強になることも多かった。

帝仁の監督である峯岸も思っていた以上の相乗効果に、笑みを隠すことが出来ていなかった。

「それでは……今までありがとうございました」

「いやいや、こちらも凄い助かったよ。聖秀さんとはこれからも懇意にお付き合いさせ

てもらいたいね」

「ええ、こちらこそ」

六月下旬に聖秀学院高校野球部の専用グラウンドが出来たため、本日が最後の合同練習であった。

大地と峯岸は握手を交わしながら、夏の予選では頑張ろうと話をする。

「今の帝仁うちなら、海堂相手でも十二分にやっつけていける気がするよ」

「ええ、僕達もそう思います」

「とはいっても、その前にお互いに当たったら手加減はしないからね」

「はい、それはお互い様ですね」

世間話の流れから海堂にされたことを大地から聞いた峯岸は、そのことを信じてくれて「絶対にうちが海堂を倒す！」と息巻くようになっていた。

元々打倒海堂と言っただけだったが、心の奥底では諦めもあった。

良い選手は海堂に行ってしまった、残りの選手を他の強豪で取り合う形になっていけば必然的に海堂以外の高校のレベルは下がってしまう。

それが海堂一強という現状を生み出していたのは、否定できなかった。だからその現実を知っていた峯岸は表では海堂を倒すと言っただけでも、裏では諦めていたのであった。

それが聖秀との合同練習でどんどん実力を上げる選手達や、チームとしてのレベルも上がっていくのを見て、まだまだ諦めている場合ではないと思ひ直すことが出来た。そのことに気付かせてくれた大地に心から感謝をしていた。だからこそ海堂に当たる前に対戦したら、お互いに遠慮はなしでという話をしていたのであった。

六月下旬。これから本格的な夏が始まろうとしていた。

間話 期末テスト

聖秀野球部のグラウンドが完成し、横浜帝仁高校との合同練習を終えた数日後。大地達は聖秀学院高校の教室にいた。

《聖秀野球部 期末テスト対策勉強会》

黒板には期末テストの対策勉強会と書かれ、席には赤点組は当然として聖秀野球部員以外に清水となぜか他多数の女子生徒がいた。

定期テストで赤点を取ると、別日に補習授業が行われることになる。

中間テストはまだ良かったのだが、期末テストで赤点を取ると最悪夏大会の試合日に重なる恐れもある。

だからこそどの部活動も期末テストでは誰も赤点を取らないように、優秀者主導による期末テスト対策が行われるのがこの学校の伝統であった。

野球部には吾郎、藤井、渡嘉敷の中間赤点組の他に、ギリギリ赤点を免れた大場がいた。

藤井だけであればまだしも、吾郎達三人を欠いては戦力的に厳しくなるし、そもそも人数が足りなくて試合にすら出れなくなってしまう。

「……小学生のときから勉強は散々教えていたんだけどなあ」

「し、仕方ねーだろ。苦手なもんは苦手なんだから……」

小学生の頃から勉強が苦手だった吾郎は、ずっと大地から勉強を教わっていた。

一時期成績が良くなる調子に乗って勉強をしなくなるため、すぐに勉強が出来なくなるという繰り返しだった。

もつとも勉強が出来るようになったといっても、平均の枠を越えることはほとんどなかったのだが。

「とりあえず内山と薬師寺は自分でやってみらって、分からないことがあれば俺達に聞いてくれ」

「そうだね。僕達は吾郎君達を中心に教えるよ」

「勉強だけでも負けないって分かるだけで、俺としては安心するよ」

成績優秀者の大地と寿也、そして宮崎が教える側に回ることによって全員で赤点を回避しようという作戦である。

「それにしても大地と寿くん、スポーツも超優秀で勉強もトップってどういうことよ」

一緒に勉強していた清水が、大地と寿也に不満を漏らす。

この二人は運動神経抜群で勉強も出来る。そして顔も良くて性格も穏やかで優しいという超優良物件のため、同学年だけでなく上級生達からもマークされていた。

実際にこの教室にいる女子生徒達は、二人を目当てに集まった者が大半であった。

「大地君〜！ これってどうやってやるの〜？」

「寿也君〜！ 数Iが分からないの〜！」

終始二人を呼ぶ声が止まらず、しかし二人は邪険にすることもなかったため、それが更に彼らの人気に繋がっていく。

(……嘘つけ！ あんた達の成績ならそれくらい分かるでしょーが！ まあ大地と寿くんの二人に注目が集まるのはこっちとしても助かるんだけどさ)

清水は媚びを売る女子生徒達に心の中で悪態を付きつつ、ちらつと目線を移動させる。

そこには高校に入って更に難易度の増した勉強に奮闘する双子の弟の姿があった。

吾郎は決してモテないわけではない。大地と双子というだけあって、顔は良いし運動も凄い出来る。

ワイルドな男性が好き女子からすると、彼はどストライクであろう。

しかし彼が大地と比べてそこまで人気がないのには、二つの理由があった。

まず恋愛に興味を示していないということだ。これは単純にまだ恋愛というものが

どういふことか分かっていないのである。

そのため女子に話し掛けられても、大地と違ってあまり良い反応を見せない。

だからこそ女性に優しく対応してくれる大地と比較されて、大地がモテてしまうのであった。

次に特定の相手がいると周りから思われているということだ。

他の女子に対してと、その子に対しての反応が明らかに違うため、付き合っているのだと判断されていた。

それでも吾郎にアプローチを掛ける女子もいるが、その時に限ってその子がすぐ側で助け舟を出すため、次第に諦めざるを得なくなるのだった。

吾郎も本当はその子のことを意識しているはずなのだが、本人が気付いていないため、双子大の兄地以外は誰もそのことを知らない。

それでもその子にとっては吾郎の側にいることだけで幸せだったのである。

(仲の良い幼馴染でも仕方ないよね……今のこの関係が壊れちゃうくらいなら……)

そう思いつつも、デートに誘ったり、プールや海で大胆な水着姿を見せたりしている。

しかし最悪なのが、吾郎にとってはそれがデートだと気付いておらず、水着姿も健全な男子が持つ欲求を出す程度の効果しかなかった。

(もつと他にアプローチの仕方があるでしょうに……)

水着に關しては大地も苦笑いしていたが、吾郎の鈍感さを思えば仕方ないのかもしれない。

何度か吾郎の後頭部を無言でひっぱたいた大地は何も悪くないのである。

「ねえねえ……」

「あー！ 果歩も氣付いた!？」

「え、なにになに？」

教室の端で勉強をしていた女子生徒が何人かコソコソ話をしていた。

その視線の先には、薬師寺に勉強を教える寿也と、その隣で吾郎に勉強を教える大地の姿があつた。

「やっぱりダイトシかな!？」

「えー！ 私はヤクトシも良いと思う！ もちろん寿也君が受けね!？」

「いやいや、ここはやっぱりダイゴロでしょ！ 双子の兄弟で……じゆる」

どの学校に行つても腐っている人はいるのであつた。



「はい、そこまで！ じゃあ解答用紙を後ろから前に渡して!？」

ようやく期末テストが終わり、全員が安堵の顔をしていた。
いや、正確には一人を除いて。

「……もう気にするなよ」

「だ、だつでええ〜！」

大地は横で顔を机に伏せている吾郎に声を掛ける。

吾郎は泣きそうになりながら大地の方を向く。

「答え書くところを一つずつ間違えたのは不運でしょ。それにまだそう決まったわけじゃないし」

吾郎は初日の数学テストの解答欄に答えを一つずつ間違えて書いてしまったかもしれないと話していた。

最後まで埋めた段階で、解答欄が一つ余っていたのだ。

「……終わった。完全に終わった……」

ぶつぶつと嘆いている吾郎に大地は苦笑し、他のメンバーがどうだったのかを聞く。

「僕はいつもどおりかな」

「俺も問題ないね」

寿也と宮崎は問題ないと伝える。

「俺も大丈夫だよ」

「中学含めて今までで一番出来たかもしれない……」

内山も余裕そうで、薬師寺は過去で一番の出来だったと話していた。

田代と大場も問題なく赤点は免れそうだと言い、藤井はギリギリ大丈夫そうで、渡嘉敷は「た、たぶん……」と自信なさげであった。

「何が海堂を倒すだ……俺は大会にすら出られないじゃないか……」

「ま、まあ数学だけなら先生に頼んで補習授業日をズラしてもらえばいいし、それがダメでも全部の試合が出られないわけじゃないんだから……」

寿也もフォローをするが、吾郎には何も響いていなかった。

家に帰ってからも「終わった……」とずっと言っている吾郎が面倒になり、桃子に任せて素振りに行く大地。

（多分今回も大丈夫だと思っけど……吾郎がダメだったらマジでどうしよ……いや、いかんいかん！）

吾郎のネガティブが移りそうになっていたが、すぐに首を振って否定し、その不安を素振りで吹き飛ばすのであった。



【聖秀学院高校 一学年期末考查順位（上位100名）】

1位：本田（大） 996点

2位：佐藤（寿） 973点

3位：佐々木 972点

6位：宮崎 951点

28位：清水 901点

30位：内山 895点

51位：田代 821点

51位：薬師寺 821点

80位：本田（吾） 711点

「うわ、本田兄は中間テストに続いて学年トップだよ……」

「顔も良くて、スポーツも出来て、頭も良いって……なんなんだよ」

「ほら、3位の佐々木さんがずっと大地君と寿也君を睨んでるよ」

「……こわ！ あの子、進学科のトップで勉強一筋だったもんねー！」

（……そうか。2問ミスったかー）

大地はケアレスマミスで点数を落としていた。それでも体育科に所属している生徒が中間、期末と1位を連続で取ったことは、今までの聖秀の歴史の中で無いことであった。そしてその横では吾郎は呆然としていた。

「……吾郎？」

「だ、大地……お、俺……」

「ああ、よく頑張った——って抱きつくな！」

「うおおおおおお!!」

周りで一部の女子生徒が、本田兄弟が抱き合っているのを見て騒いでいる。

吾郎の数学のテストは、最後から二番目の問題の解答だけを飛ばしてしまったため、

最後の解答欄が空いていたというだけあった。

家に帰ってもギリギリまで大地が教えていたとはいえ、まさか上位100名に入るとは思っていなかったのです。がの大地も驚きを隠せない。

ちなみに大場はもちろん、渡嘉敷と藤井も赤点を免れ、野球部全員補習授業無しで夏の大会に挑むことが出来るようになった。

(三船東中のときから一度も勝てなくて……高校では絶対に負けなと思ってわざわざ同じ高校にまで来たのに……)

佐々木は涙が溢れるのを堪えながら、静かに教室へと戻っていくのであった。

第七十八話

全国高校野球選手権神奈川大会。出場校196校という激戦区である。

聖秀学院高校が甲子園に出場するためには八回勝つ必要があり、その中にはシードである横浜帝仁高校や海堂高校もちろん含まれていた。

トーナメント表を見る大地達。

「海堂は……反対のブロックか」

「当たっても決勝だね」

「どうせなら疲労が溜まる前に当たっておきたかったがな」

海堂特待生組である薬師寺、渡嘉敷、大場はすぐに海堂の位置を確かめる。

第一シードである海堂とは逆のブロックになったため、決勝以外で当たることはない。

そして、帝仁高校も逆のブロックであった。

「先に海堂とやるのは帝仁か！」

「順当にいけば、海堂と帝仁は準決勝で当たることになるね」

吾郎と寿也は帝仁が海堂と同じブロックにあることを確認し、聖秀と決勝で当たるの

はどちらかになるであろうと予測していた。

「それよか聖秀うっちの初戦の相手だけど……」

「平塚漁業？ どこだ？」

内山と藤井が初戦の相手の高校を知らないといった素振りを見せる。

田代は対戦相手を見て、ニヤける。

「よっしゃー！ こころなら楽勝だー！」

「え、知ってるのか？」

「ああ、昨年の夏大会で42―0の大敗をしてる高校だ。というか、組み合わせを見る限り三回戦までは初心者組を中心をやっても確実に残れそうだ！」

宮崎に平塚漁業高校を知っているか聞かれ、昨年の夏大会でかなりの点差で負けてしまったというのが記憶に残っていたのか、田代の中では確実に勝てるという印象があった。

そしてトーナメント運に恵まれたのは、選手層が薄い聖秀にとってありがたいことであつた。

なぜならピッチャーは吾郎を中心に回していく予定なのだが、吾郎一人でやっていくにしても体力面で無理が出てしまうからだ。

対戦相手が比較的弱いところであれば、渡嘉敷をピッチャーにすることも出来るの

で、大地を含めて三人でローテーションを組むことも可能だ。

そして初心者組の藤井、内山、宮崎にも試合の経験を沢山積んでもらう必要がある。練習試合と本番の試合では緊張感がまるで違う。空気がヒリつくのだ。だからこそなるべく早くその空気に吞まれないように慣れてもらう必要があった。

「じゃあ俺は一回戦のスターティングメンバーを山田先生と相談してくるから、先に練習行つてくれ」

「おお、分かったぜ！」

大地は吾郎達に先にグラウンドへ行くように伝え、教員室へと向かうのであった。



七月も中旬に差し掛かろうとしていた夏の日。聖秀学院高校野球部の初めての夏予選が始まった。

球場へ移動した聖秀メンバー。その中に足を震わせている者が三名いた。

「まだ緊張してんの？」

「うとうとううっせー！ お前にはこの気持ち分からねーだろ！」

「まあ俺は素人じゃないからねえ」

「ぐ、ぐぬぬ……」

渡嘉敷が緊張している藤井をからかい、それにムキになって反論する。

しかしそれは渡嘉敷が素人組の緊張を和らげようとしてやっていったことだった。

(ふふふ……なんだかんだで渡嘉敷は優しいね……)

寿也はその光景を微笑ましく見ていて、やり取りが終わった渡嘉敷と目が合う。

渡嘉敷は照れた様子でそっぽを向き、寿也は笑いを堪えるのに必死だった。

「はい、では皆さん。ここからは記念すべき聖秀野球部のスタートです！ 精一杯やっていますよ！」

山田が全員に向かつて声を掛け、スターティングメンバーを発表する。

◇スターティングメンバー

1番：レフト 藤井

2番：セカンド 内山

3番：ライト 宮崎

4番：センター 田代

5番：サード 薬師寺

6番：キャッチャー 佐藤寿也

7番：ファースト 大場

8 番：シヨート 本田吾郎

9 番：ピツチャー 渡嘉敷

控え：本田大地

大地は山田と相談し、元々想定していた打順を大幅に代えて初戦に臨もうとしていた。

相手が実力的に格下だと分かっているため、失礼ではあるが素人組の成長を優先させようとしていたのだった。

そして吾郎のことを考えるのであれば、控えは吾郎にした方が良いと思ったのだが、彼が絶対に文句を言うのが分かっていたため、下位打線として出すことで少しでも打席を回さずに体力を使わせないようにするしかなかった。

「聖秀高校か……今回は初出場とのことだが……」

平塚漁業の監督は聖秀の情報を知らないため、油断をしていた。

（人数も十人ってギリギリだし、元女子校つてのを考えると……この試合は貰ったな！）

人数も少なく、内山や宮崎を見た目で判断し、ただの寄せ集めであると確信する。

聖秀が相手であれば、去年の神奈川県歴史に残るであろう大敗という汚名を払拭出来るかと勘違いしているのであった。

「それではこれより、聖秀学院高校と平塚漁業高校の一回戦を始めます」

「よろしくお願いします!!」

全員が同時に頭を下げ、挨拶をする。先攻は聖秀からのため、一旦全員がベンチに戻る。

(お、俺が一番打者かよ……)

三塁コーチに向かおうとしていた大地は、藤井が再度緊張しているのが分かった。

バットを持ってガチガチに固まっている藤井の後ろから、両脇腹を指でつつく。

「わ、わあ! ……何すんだ! ……って大地?」

「何緊張してんだよ」

「だ、だって仕方ないだろ……」

初めての公式戦。しかも野球を始めてからまだ数ヶ月程度。緊張するなという方が難しかった。

そこで大地は藤井にアドバイスをしようと思いつく。

「内山、宮崎! バットを持ってちよつと来てくれ!」

ベンチにいた内山と宮崎を呼ぶ大地。何事かと思いつきながらバットを持って向かうと、大地が三人に構えるように言う。

「一回だ。一回だけ思いつき振り切って素振りしろ」

「振り切る?」

「ああ、そうだ。今までの練習を思い出して、縮こまらずに振り切ってみろ」

急に素振りをしろと言われた三人。しかし言われたとおり、今まで大地に教わった練習通りに思い切りバットを振り切る。

「うん、それで大丈夫」

「え、何がだよ?」

大丈夫という大地に、藤井は何がだと問いかける。

「今の振りを忘れずに、打席に立って振り切ってくればいいよ。今の振りが出来るなら三振して構わないから、どんどん振っていきこう!」

大地は笑顔で三人に三振をしても構わないと伝えて、そのまま三塁コーチャーボックスへと向かっていった。

藤井、内山、宮崎は目を合わせたあと、自分のバットを握りしめて小さく頷くのであった。

「プレイボール!」

審判の号令で試合が始まる。

平塚漁業のピッチャーは少し緊張した様子であったが、ウィンドアップからボールを

投げる。

「ボール」

外角を外れてワンボールとなる。

キャッチャーからボールを受け取ったピッチャーは、再度構える。

(……振り切るを意識だ！)

藤井は大地のアドバイス通りに思い切り振り切ろうと待ち構えていた。

闇雲に思い切り振るのではなく、下半身と腰を使い、投げられたボールから目を離さずにそのまま打ち返すイメージ。

そしてバットにボールが当たった瞬間に、最後まで振り切る。

「あッ……！」

ピッチャーは藤井に打たれ、ボールが飛んでいった方を向く。

ボールはサード真正面に飛んでいったが、思い切り振り切ったボールは勢いが強く、サードの股下を抜けてレフト前まで転がっていった。

「おおおお！ 藤井が打ったぞ！」

嬉しそうにガッツポーズする藤井に対し、田代や吾郎が声を上げる。

これが彼の公式戦初ヒットであった。

(思い切り……振り切る！)

(振り……切る！)

続く内山、宮崎にサインを特に出さずに自由に打たせる大地。

先程のアドバイスを意識していたのか、藤井と同じくバットを振り切り、センター前、レフト前と続けてヒットを打つ。

「よっし、満塁だ！」

「えっ、え？ ……え？」

田代が気合を入れて打席に入ったとき、平塚漁業の監督は混乱していた。

(初出場の寄せ集めだろ？ なんてあんなデブやヒョロガリ眼鏡にうちのピッチャーが打たれるんだ……?)

本人からするとあり得ない光景に、理解が追いついていかない。

そして戸惑っている間に、田代がレフトスタンドへ満塁ホームランを放っていたのだった。

(おっしやあ！ 俺だって大地から教わってかなり成長してんだぞ！)

喜びながらベースを回る田代。本牧リトルとシニアで四番を打っていた実力者だが、本人は中二の終わり頃から伸び悩んでいた。

父親に言われ野球をやめさせられたときは反発もしたが、ある意味助かったとも思っていた。

しかし吾郎に説得され再び野球を始めた田代。それから大地と一緒に練習をするようになって、この数ヶ月が自身の中で一番成長していると実感できていた。

野球をやるからには甲子園にも行きたいし、プロでもやってみたい。

本田兄弟たちと一緒にあれば、それも出来るかもしれないと心の底から思うようになっていた。

(ありがとよ……大地、吾郎……)

結果として、聖秀と平塚漁業の対戦は、12―0で聖秀が勝利した。

途中からは点数を取るのではなく、これからの聖秀のために色々と調整や試したいことを行っていたため、点数自体はそこまで伸びなかった。

しかし、試合内容としては満足できる内容で終るのであった。

第七十九話

そこから二回戦、三回戦と順調に勝ち進む聖秀野球部。

二回戦は吾郎が先発として投げ、三回戦は大地が先発をした。三回戦はシード校が相手であったが、素人組をメインにした打線は問題なく機能し、順調に勝ちを拾っていくことが出来た。

「俺達が三回戦まで勝つなんてな！」

「いや、当たり前でしょ？ このメンバーがいて三回戦程度で負けるなら、藤井が原因だよ」

「……………なんでだっ!？」

藤井が喜んでいるところを渡嘉敷が水を差す。そして藤井がツツコミを入れると、いった流れは聖秀野球部では鉄板ネタになっており、それがチームの雰囲気良くする一因となっていた。

その横で田代が試合結果を見ながら呟く。

「帝仁も海堂も順調に勝ち上がっているな」

「ああ、二校とも五回コールド勝ちってすげえな……」

「俺達、帝仁はともかく海堂が勝ち上がったときに勝てるのかな……？」

内山と宮崎が不安を漏らす。帝仁は何度も練習試合をした相手をしており、勝率も高かったため勝てる自信はあったのだが、海堂に関しては直接対戦していないため、どれくらい強いのが分かっていなかった。

「まあ帝仁と当たる時にも偵察に行くし、とりあえず今は目の前の勝利に集中しよう！」
「そうだな！ 藤井達もようやく試合に慣れてきたみたいだからな！」

寿也と吾郎は次の試合相手に集中するように促す。ここからはシード校か、シード校に勝った高校しか残っていないため、強敵になってくる。

大地も油断しないように偵察に行き、次の対戦相手の情報を集めたりもしていた。

「えっと、次の相手の瀬山総合なんだけど、シード校である横須賀西や布溝台を破つてるところだ」

「瀬山総合なんてところ、聞いたことあったか？」

「いや、去年は一回戦負けだったはずだ」

昨年一回戦負けだった瀬山総合。そこがシード校を二校も破るとなるとなにか理由があるはずだと全員が思い、大地を見る。

「ああ、試合の偵察に行ってみただけど、本牧シニアにいた『岡村三兄弟』と戸塚西シニアの『宇佐美球太』、久喜シニアの『上河内^{かみがうち}』がいたよ……」

「岡村さん!？」

「宇佐美って、あの宇佐美か!？」

試合を見に行っていた大地は、リトル時代に対戦したことがある名前の選手がいたと伝える。

同じ本牧シニアにいた田代と、対戦した選手で印象に残っている宇佐美の名前を聞いた吾郎は驚く。

「なんだ？ そいつらは有名なのか?」

「いや、俺は少なくとも聞いたことがないな」

薬師寺と大場は全国区ではない選手の名前を聞いても分からないため、特に興味は無さそうであった。

「岡村三兄弟はセカンド、ショート、センターのセンターラインを守っているんだけど、かなり守備範囲が広くて大体の打球はアウトにしてしまうかな。」

宇佐美はピッチャーなんだが、速球とフォークが自慢の投手で、かみがうち上河内は典型的な強打者だな」

「そこまで選手が揃っていれば、三回戦を突破してもおかしくなさそうだね」

「ああ、もしかしたら次はかなり苦戦するかもしれないぞ」

大地が各選手の特徴の説明をすると、寿也も聞いたことがある名前もいたため油断で

きないと話す。

田代も苦戦するかもしれないとネガティブになりかけるが、渡嘉敷は両手を後頭部で組み、のほほんとした顔で全員に問いかける。

「でもさ、結局そいつらつて大地達がいた横浜シニアに一度も勝てなかつたんでしょ？
なんでそこまで落ち込む必要があるの？」

「そ、そうなんだが……岡村先輩の実力を知っている側からすると——」
「大地達と比べてどうなの？」

所詮は大地達に負けたメンバーでしかなく、全国区になつていない選手にそこまで警戒する必要はないと渡嘉敷は吐き捨てる。

田代が反論するが、それに重ねて渡嘉敷が大地達と比べて上なのかと問いかけると、田代は「比べるまでもない」とすぐに断言した。

「でしょ？ それなら最低限の警戒と対策をして、いつもの調子でやっていけばいいじゃん。もう少ししてきたらピッチャーも大地と吾郎だけが投げるようになるんだし、瀬山総合くらい俺が抑えるよ」

渡嘉敷は下手に緊張してネガティブになると、全体のパフォーマンスが下がることを知っていた。

そのため敢えて格上である大地達がチームメイトにすることを思い出させて、いつも

どおりやれば負けないう空気を作り出そうとしていた。

「そ、そうだな！ 甲子園に行くならこんな相手程度に躓つまずいていても仕方ないしな！」

「ああ、そのために俺達素人組が足を引つ張らないようにしないと！」

藤井と内山が明るい表情になり、宮崎もそれに続けて頷く。

大地が渡嘉敷の方を見ると、目が合った渡嘉敷が微かに笑いながら軽く舌を出していった。

（渡嘉敷……助かったよ。そうだよな！ 俺達はどんな相手でも絶対に負けるわけにはいかないもんなー！）



「それではこれから聖秀学院高校と瀬山総合高校の四回戦の試合を始めます」
「よろしくお願ひします！」

◇スターティングメンバー

1番：キャッチャー 佐藤寿也

2番：シヨート 本田大地

3番：セカンド 本田吾郎

4 番：サード 薬師寺

5 番：ファースト 大場

6 番：ピッチャー 渡嘉敷

7 番：センター 田代

8 番：レフト 藤井

9 番：ライト 内山

控え：宮崎

全国高校野球選手権神奈川大会四回戦。聖秀学院は後攻のため、挨拶の後に全員が守備につく。

打順はベストの状態だが、ピッチャーの吾郎とセカンドの渡嘉敷が守備位置を交代する形となる。

「……………舐められてるな」

「ああ」

「なんで本田兄弟が投げてこねーんだ!？」

瀬山総合のベンチにいた岡村三兄弟は不満を全面に出していた。

聖秀からするとただのローテーションでしかないのだが、瀬山総合からすると舐めら

れていると受け取ってもおかしくはなかった。

ただ三回戦までは大地、吾郎、寿也のだけか一人が一切試合に出ず、素人組中心のメンバー構成になっていたので今までの高校のほう舐められていたのだが、それには一切気付いていなかった。

「球太、本田兄弟だよ」

「うん……なんで聖秀にいるのかは分からないけど、ようやくリベンジ出来るね」

宇佐美と上河内かみがうちは本田兄弟との再戦を待ち望んでいた。

本田兄弟が四年生の時に対戦して以降、一度も再戦の機会に恵まれず、人伝いや新聞などで二人の活躍を目にするだけであった。

それを歯がゆく思っており、高校こそはと機会を伺っていた。

「なににせよ、俺達〃恐怖のブラックトライアングル〃に球太と上河内かみがうちが加わったんだ。俺達に死角はない！」

「そうだ！ さっさとあそこのピッチャーを引きずり下ろしてやるぜ！」

「それで本田兄弟を打ち崩してやるぜ！」

大きく笑う岡村三兄弟。球太は心の中で高校生になってまで〃恐怖のブラックトライアングル〃は……と思っていたのだが、それを口に出すと怒るのでそれ以上は何も言うことはなかった。

「プレイボール！」

渡嘉敷がいつもどおり振りかぶって外角真ん中にストレートを投げ込む。

「ストライク！」

明らかに打つ気がない一番打者の岡村一郎。渡嘉敷は気にせずボールを投げ込んでいく。

再度ストライクとなり、追い込まれるが少しも慌てた様子はなかった。

（なんだ……？ 今の見送り方……）

寿也は警戒し、一球だけボールを外すが、一郎はそれも見送る。

それは見送るといふよりも観察しているようであった。

（あー、そういうえばあの三人って……）

大地はようやく岡村三兄弟の特徴を思い出していった。

一打席目はピッチャーの特徴と様子を観察しつつ、審判がどこをストライク取りやすいかなどを見極める戦術を取っていた。

勝負は二打席目以降からのため、この打席で警戒してもそこまで意味はない。

「ストライク！ バッターアウト！ チェンジ！」

「よっしゃー！ 三者三振！」

渡嘉敷は三者三振で一回表を終える。

全員が打つ気がなかったことに寿也は疑問を持ちつつも、ベンチに戻った大地から話を聞いて納得するのであった。

「ああ、そういうことか。それなら納得だね。あの見送り方は明らかに観察しているようだったからね」

「ま、次以降も打たせなきやどってことないよ」

渡嘉敷はベンチに座り、余裕の表情でドリンク補給をしていた。

（次は俺達の攻撃の番か……）

ピッチャーはリトル時代に対戦した宇佐美球太。偵察したときもストレートも変化球もかなり進化していたので、大地は油断しないように気を引き締めるのだった。

第八十話

一回裏、聖秀学院高校の攻撃。

一番打者は寿也。宇佐美のピッチング練習に合わせて素振りをしていた。

(……確かに速球派の良いピッチャーだね)

宇佐美は高校三年生で、今年が最後の年である。昨年までは上級生の出場が優先されていたため、試合に出る機会に恵まれていなかったが、上級生が一回戦で負けて引退してから頭角を現し出す。

現時点のスピードはMAX142km/hのストレートに、変化球はカーブとウイニングショットとして落差の激しいフォークを持っていた。

寿也は打席に入り、構える。

宇佐美はワインドアップから真ん中へストレートを投げ込む。

寿也はボールを見送り、ワンストライクとなる。続いて二球目を内角低めに投げ、寿也がカットし追い込まれる。

「ツーストライクで追い込まれたぞ……」

寿也が簡単に追い込まれたことに、藤井が不安の声を上げる。

そして藤井のその不安は的中する。

「ストライク！ バッターアウト！」

「球太、ナイスピッチング！」

宇佐美のフォークが決まり、寿也は三振となる。

その落差には、寿也もボールに触れることが出来なかった。

「ごめん、あのフォークは初見では難しかったよ……」

「ああ、確かにあれはキツいな」

寿也はバッターボックスに向かっている大地に謝り、ベンチに戻っていく。

（本田大地……来たな！）

宇佐美は大地を睨みつける。大地とこの後に続く吾郎にはリトル時代にはホームランを打たれており、彼としてはどうしても負けたくなかった。

大地は睨まれているのに気付いていたが、バッターボックスに入っても特に気にしたような素振りは見せない。

宇佐美は振りかぶり、初球を内角高めに投げ込む。

大地は軽く仰け反ってボールを避ける。

「ボール！」

二球目は真ん中低めに制球されたカーブ。大地はそれをカットし、ファールボールと

する。

カウントはワンストライク、ワンボール。続く三球目、四球目のストレートをファールにした大地であつたが――

「ストライク！ バッターアウト！」

五球目に投げられた宇佐美のフォークを空振りし、三振となつてしまふ。

三番の吾郎も前の二人と同じく、ツーストライクからのフォークを空振りし、一回は両チーム三者三振でチェンジとなつた。

宇佐美は喜びのあまり、マウンドでガッツポーズをしていた。

「おいおい、佐藤だけじゃなくて、大地や吾郎も打てないのかよ……」

「あのフォークをどうやって打つていうんだよ」

「……………」

大地達が打てなかつたことに藤井、内山、宮崎の三人は、宇佐美の球を“打つ”というイメージを持つことが出来なかつた。

藤井と内山は少し暗い表情で外野へと走っていく。

（まあ……俺が打たせなきゃいいだけの話なんだけどね！）

渡嘉敷は二回表もヒットを打たせることなく三者凡退で終える。

宇佐美は二回裏も三者三振で抑えようとしたが、渡嘉敷がバントでボールを転がすこ

とで連続三振だけは防いでいた。

「ちっ！ 今のを三振できていたら、九人連続三振も見えていたんだがな」

「そうだな。だがまずはずはうちが点を入れてからだ」

「ああ。四回からが楽しみだ」

三回も渡嘉敷と宇佐美によつて抑えられ、四回表の瀬山総合の攻撃が始まる。

打者は一番の岡村一郎。

(ここから俺達の攻撃を見せてやる！)

渡嘉敷は無表情のまま、振りかぶつて内角低めにストリートを投げ込む。

一郎はそれをカットしてファールになる。

「……………くくく、始まつたな」

「ああ、お得意の『地獄のバックファイアーピッチャー殺し』がな！」

ここから渡嘉敷が投げるボールを悉くカットしてファールにしていく。

二球目、三球目、四球目とストライクゾーンに入るボールをカットすることで、渡嘉

敷を疲労させていたのであつた。

「ボール！ フォアボール！」

十球以上投げさせられた渡嘉敷は、結局一郎を歩かせてしまう。

「ちっ！ くそ！」

渡嘉敷は地面を蹴って悔しそうにしていた。

寿也は「落ち着け！」と渡嘉敷を宥めていたが、渡嘉敷には効果がないようであった。

(ふふふ……瀬山総合の思うツボだぜ)

二番の岡村二郎は不敵な笑みを浮かべて打席に入る。

そして渡嘉敷の初球を狙っていたかのようにバントをする。

「バントだ！ サード……いや、見送れ！」

三塁線上に絶妙なボールの殺し方でバントをする二郎。

寿也はボールが切れると判断し、薬師寺に見送るように言うがファールにならず、途中で止まってしまふ。

「よっしゃああ！ これで一、二塁だぜ！」

「このあとの三郎と上河内かみがうちで点を取るぞ！」

四回表で、この大会初めてのピンチになる聖秀野球部であった。



「次は三番からだな。どうする？」

寿也がタイムを取り、内野手がマウンドに集まる。

薬師寺がこのあとどうするかを大地に尋ねる。

「んー、岡村三兄弟はここまで昔のときと全く同じ対応をしている。あり得るとしたら、ダブルスチール狙いをしつつ、盗塁対策に投げられる直球を狙って強打で得点を稼ぐといったパターンだな」

岡村三兄弟は一郎がカットで粘り、フオアボールで出塁。二郎がバントや盗塁などでかき回して、三郎が盗塁を警戒したストレートを打って点を取るということをしていた。

それはハマればとても強く、このあとの四番に控えている上河内かみがうちも強打者のため、更に追加点を許しかねない。

ピッチャーも宇佐美を加えて強化されているため、本牧リトルのときと比べて選手の質が上がっていてとてもやりづらい相手になっていた。

「ま、だけどそれもうちが相手でなかった場合だけだな」

「……ああ。相手にしているのがそこら辺の高校と違うところをみせてやろう」

「そうだね、渡嘉敷も大丈夫か？」

「問題ないよ。打たせるからよろしく」

大地の話聞いた吾郎がその程度であれば、問題ないと一蹴し、大場も追従する。

寿也が念の為渡嘉敷の様子を伺うが、既に落ち着いたようでもこちらも問題なさそうで

あった。

それぞれが守備位置に戻り、試合が再開される。

「プレイ！」

(何を話しても俺達、岡村三兄弟を相手にしたら無駄なんだよ！)

一郎と二郎は足でかき乱そうとリードを大きく取り、今にも盗塁しそうな雰囲気を出す。

いつもであればここで牽制などをして、ピッチャーの集中を削ぐことが出来るのだが、渡嘉敷は完全に無視していた。

(なんだと？ それなら走るまでだ！)

渡嘉敷がセツトポジションから足を上げた瞬間、一郎と二郎が走り出す。

「盗塁だー！」

田代が声を上げるが、内野手は全員警戒していないように見えた。

しかし、ただの盗塁だけでは終わらなかった。三郎は渡嘉敷が投げた球を打つたのだ。

「ヒットエンドラン!?!」

一郎が咄嗟にヒットエンドランのサインを出し、岡村三兄弟がそれを全員で実行した。

打たれたボールはセカンドの横を抜け、センターへライナーで飛んでいこうとする。「行かせるかよっ!!」

その時、セカンドの吾郎が飛び込んでライナーをキャッチ。そのままグラブトスで二塁に来ていた大地にボールを渡し、大地がその勢いのままファーストにボールを投げ

る。
一郎も二郎も飛び出していたため、吾郎がライナーをキャッチしても戻ることが出来ず全員がアウトになってしまうのであった。

「ト、トリプルプレーだど?」

「まさか岡村三兄弟が抑えられるなんて……!」

瀬山総合ベンチは驚きの声を上げていた。今までこのパターンで点を取れなかったことが無かったためだ。

大地は倒れている吾郎に手を差し伸べて起き上がらせると、ハイタッチをして聖秀ベンチへと戻っていくのであった。

第八十一話

「ストライク！ バッターアウト！」

「おっしやー!! ナイスピッチ！」

「球太！ ナイスフオークだ！」

四回、五回、六回と両チームとも点を取ることが出来ずに終わる。

特に聖秀は未だに宇佐美のフオークを打ち崩せないでいた。

「……………」

聖秀野球部は淡々と守備につき、淡々と攻撃を行う。

その様子は応援に来ている人達から見ても不思議だった。

「ねえ……涼子さん」

「美穂ちゃん、どうしたの？」

桃子の横で応援していた美穂は涼子に疑問に思っていることを話す。

「大地さん達の攻撃って簡単に抑えられている気がするんですけど、このままで大丈夫なんですか？」

「そうね。このままだとまずいわね」

「だったら何か対策をしないと……」

「それなら安心して大丈夫よ」

心配する美穂に笑顔を見せる涼子。

それは野球経験者が外から見ているから分かることでもあった。

「彼らはもう対策をしているからね♪」

笑いながらウインクをする涼子の言葉の意味が分からなかった美穂は、桃子と顔を合わせて首を傾げるのだった。



「はぁ……はぁ……」

瀬山総合野球部のベンチでは宇佐美が大量の汗を流して座り込んでいた。

「球太……大丈夫か？」

「……はぁ、はぁ……あ、ああ……」

息を切らしながらもチームメイトに返事をする宇佐美。

宇佐美はスタミナが無いわけではない。リトル時代から父親の指導で、一試合を完投出来るようにと走り込みを散々やらされていた。

そして今までの三試合も問題なく投げ切っていたのだ。

「アウト！ チェンジ！」

「……………くそっ！」

八回表の瀬山総合の攻撃が三者凡退で終わり、八回裏の守備のために瀬山総合の選手はそれぞれの守備位置につこうとしていた。

しかし、宇佐美だけはベンチで座り込んだまま、立とうとしていなかった。

「う、宇佐美。チェンジだぞ……………」

「……………ん？ あ、ああ……………そうか……………」

グラブを持って元気なく立ち上がり、疲労感を見せながらマウンドに向かう宇佐美。

瀬山総合の監督はそこでようやく気が付く。

（そ、そうか……………！ 聖秀の選手達がやけに淡々としているなと思っていたが、これが狙いだったのか！）

聖秀側は狙い球を絞っていた。正確には狙わない球を絞っていたのだ。

宇佐美の球種はストレート、カーブ、フォークの三つ。彼のフォークに関しては、一朝一夕で打ち崩せるものではない。

彼が小学生の頃から磨き上げてきた変化球のためだ。

しかし、フォークそれ以外に関する話が変わってくる。

140 km/h以上の速球を持つとはいえ、吾郎や大地のストレートに比べたら彼らにとつて打てない速さではない。

カーブに関してもフォークに比べてそこまで変化するわけでもないため、聖秀ナインからすると打ち頃の球種なのだ。

そう、彼らはフォークを捨てたのだった。フォークを捨て、それ以外のボールを確実に打ちに行く。

宇佐美にフォークだと抑えることが出来るが、それ以外では抑えることが出来ない。徐々に刷り込んでいく。

その結果、フォークを多用することとなり、それ以外の球種を投げる時に少なくなっていく。プレッシャーを感じるようになっていた。

それが宇佐美に余計な力を入れさせることとなり、普段以上にスタミナを削る結果となった。

精神からくる疲労は気付きにくく、気付いたときには今のように手遅れになっている場合が多い。

(このままではまずい……！　ピッチャーの交代……を……!?)

瀬山総合の監督はピッチャーの交代をしようとベンチを見るが、戸惑いの表情を見せる。

宇佐美レベルの実力でここまで追い詰められているのに、誰に交代すればいいのかと悩んでしまったため動くことが出来なかったのだ。

そこで悩み、戸惑い、動けなかったことが聖秀と瀬山総合の結果を大きく左右してしまふこととなった。

「おおおおお！ 聖秀が打ったぞ！ この試合初ヒットだ！」

「次の打者もヒットだ！ 聖秀が一気に得点のチャンスだぞ！」

「ああ〜！ フォアボールだ！ 瀬山総合は満塁のピンチだ！」

聖秀は八回裏でようやく宇佐美を捉えることに成功した。

連続ヒットでプレッシャーを与え、どこを投げればいいか分からなくなった宇佐美は

フォアボールでランナーを出して更にピンチにしてしまう。

ここからはもはや聖秀の独壇場だった。

ホームランこそ出なかったものの、八回裏で打者一巡以上の猛打。

七点目を聖秀が入れた時点でワールドゲームとなったのだった。

「7-0で聖秀学院高校の勝利です。互いに礼！」

「ありがとうございます！」

瀬山総合は四回戦で姿を消すこととなる。



「聖秀が……ベスト八……だと……?!」

海堂高校野球部長兼チーフマネージャーの江頭は、自身の部屋で新聞を読んでいた。

海堂が先程ベスト四に勝ち進んだという報告のついでに聖秀がベスト八に入ったと聞き、自身の目で確かめようと新聞で結果を確認していたのだ。結果は11―0のコールド勝ちと書いてあった。

今までの相手の高校と聞いたことがない相手であったため、トーナメント運に恵まれただけだと判断するが、彼にとって本田兄弟含む選手達がここまで残っていることが問題であった。

(……まあいいでしょう。決勝まで来るのであれば、海堂のマニユアル野球で叩き潰せばいいだけの話です)

江頭は心を落ち着かせようとコーヒを口に含み、海堂の今後の対戦相手を確認する。

(次は横浜帝仁高校ですか……)

横浜帝仁高校は神奈川の強豪でお互いに勝ち上がってくる関係上、対戦することが多い。

しかし江頭にとってはもはや敵として見てはいなかった。今までの対戦成績は海堂の全勝だったからだ。

「聖秀が準々決勝、準決勝と勝ち上がってくるようであれば、海堂との格の違いを見せてあげましょう。万が一勝ち上がってくるようであれば……ですがね」

新聞を置いた江頭は席を立ち、外の景色を眺めながら高笑いをするのであった。

第八十二話

「か……海堂が帝仁に負けたって本当か!？」

「ああ、昨日見に行ったから本当だよ」

藤井は教室に入るなり、大地達に近付いてくる。

先に決勝行きを決めた大地達は視察として海堂対帝仁の試合を見に行っており、その結果には驚いていた。

これに驚いていたのはもちろん大地達だけではない。

「テレビでも新聞でもかなり大きく取り上げられていたぞ」

スポーツ新聞を机の上に置き、全員が見出しを見ることが出来るように広げた。

そこには《常勝海堂、県大会準決勝にて散る!》という内容が一面に大きく書かれていたのであった。

「負けても一面に載るなんて、やっぱ海堂はすごいねえ」

「ああ。そんなところに俺達が入る予定だったと考えると、改めて驚くな」

渡嘉敷と大場は新聞を眺めながら、それぞれに感想を述べていた。

「試合内容はどうだったんだ?」

「ああ、それは——」

藤井の質問に大地が答える。

海堂対帝仁。その試合は途中まで投手戦となっていた。

動いたのは六回表。帝仁高校の攻撃だった。

九番から始まる攻撃だったのだが、海堂高校のピッチャーによる死球（クイアウト）で無死一塁となり、上位打線に打順が回ってくる。

一番打者が進塁打で一死二塁。

二番打者はバントで手堅く送る——とところで、サードの選手が一塁に暴投し、二塁ランナーがホームまで生還してしまう。

そこでピッチャーが動揺したのか、続く三番、四番にヒットを打たれてしまいもう一点追加。

ここで海堂のピッチャーが交代し、後続をきちんと抑える。

だが、この六回表の二点が返しきれず、結果2―0で帝仁高校が勝利したのだった。

「帝仁、たしかに聖秀（うけ）との練習試合でもかなり強くなっていたもんな」

あとで聖秀野球部の顧問の山田から聞いた話によると、海堂戦当日の夜に帝仁野球部の監督である峯岸より電話があつたとのことだった。

山田曰く、「興奮しているのか泣きながら叫んでいたの、何を言っていたのか分から

なかつたでござるですよ」とのことだが、宿敵を遂に打ち破ることが出来たということが相当嬉しかったということだけは伝わったようだった。

「まあこれでとりあえず海堂の甲子園行きは阻止したわけだが、決勝の相手は帝仁か」「ああ、お互いに手の内を知っているだけあって、厄介だな」

薬師寺と大場は相手が帝仁となつたことが、悲しいことなのか喜ばしいことなのか複雑な様子であつた。

海堂を打ち破つて甲子園行きを決めたいと思つていたのもあるが、帝仁とはずっと同じグラウンドで練習をした高校である。

内心どつちが良かったのかは深く考えないようにしているようだった。

「ま、なんにせよ俺達は誰が相手でも勝つて甲子園に行くことだけだからな」

「ああ、大地の言うとおりだ！ 帝仁にも勝つて甲子園行きを決めるぞ！」

大地の吾郎も気合を入れ直し、その言葉に周りの空気も引き締まるのだった。



「う………海堂が準決勝で負けた………だと………？」

「は、はい………申し訳ございませぬ………」

江頭は自身の部屋で現場監督である伊沢の報告を聞いていた。

常勝を掲げる海堂にとって、県大会の準決勝程度で負けるなどということはあつてはならない。

しかも、これで勝てば因縁の本田兄弟達がいる聖秀高校との直接対決が待っていたのだ。

(な……なんてことだ……。私が直接あいつらを潰してやろうと思つていたのに……)

さすがの江頭も動揺からか伊沢を叱責するほど頭が回つておらず、呆然とするのだった。

伊沢はいつ怒鳴られるのかと思い、全身に冷や汗をかいていた。

顔の汗を拭くハンカチはもはやぐちよりと濡れてしまつていた。

「わ、分かりました……。とりあえず理事長と総監督には私から報告をしておきます。伊沢現場監督は、至急新チームの編成をして秋大会ではこんなことがないようにしてください」

「……え？」

伊沢は江頭から叱責の言葉が一切ないことに驚く。

「……聞こえなかったのですか？」

「い、いえ」

「では下がってください」

江頭の言葉を聞いて、逃げるようにそそくさと部屋を出る伊沢。

部屋の前で伊沢は安堵の息を漏らす。

(と、とりあえず何事もなかったことは良かったが……あの様子だと次はないな)

もし秋大会で勝ち抜けず、センバツ出場を逃すようであれば自身の首も危ないと悟った伊沢は、至急現二年生のチームのところへ向かうのであった。

一方、伊沢が出ていき一人で部屋に残された江頭だったが、自身の机に手を置き、
項垂うなだれていた

(なんと報告をすればよいのか……いや、済んだことは仕方があるまい。次取り戻せばいいだけの話だ。今は原因が何だったのかを探る方が大切だ)

江頭は冷静になるように自身に言い聞かせ、頭をフル回転させる。

そして笑いながらゆっくり顔を上げる。

「ふふ……ふははは！　そうか、これもどれも全てはあいづらが原因に違いない！　いつも私の邪魔をしやがって！　潰してやる、潰してやるぞ!!」

笑い続ける江頭の声は、不気味に校舎内に響き渡るのであった。



全国高校野球選手権神奈川大会。出場校196校という激戦区を勝ち抜いた二校が、横浜スタジアムを舞台に甲子園を賭けて争う。

当日の朝、大地と吾郎はいつもの時間に目が覚め、桃子と三人で朝食を摂っていた。

「ついに決勝ねえ」

「まあここまで色々あつた気がするからねえ」

「色々どころじゃないだろ。こんな人生を過ごしてる双子が他にいたら会ってみたいわ
！」

大地のしみじみとした言葉に、珍しく吾郎がツツコミを入れる。

桃子は持っていたお茶碗と箸をテーブルに置き、茂治の遺影を見つめる。

「おとさんも喜んでくれてるよね。だって最愛の息子達があんなに立派になって甲子園
に行くんだもん」

「……いや、行けるかどうかはまだ決まってるから」

「あら？ 負けるつもりなの？」

「……勝つよ、絶対」

桃子の挑発じみた言葉に、大地も珍しく強めの言葉を使った。

吾郎だけではなく、大地も甲子園を賭けた決勝戦を前にして気持ちが高ぶっているよ

うであつた。

「ごちそうさん」

「ごちそうさま。じゃあ歯を磨いたら、準備して行つてくるよ」

大地達は食器を片付け、試合に向かう準備を始める。

「あ、今日は母さんも見に来れるんでしょう？」

「もちろんよ！ おとさんと……おかさんも一緒に応援に行くからね！」

「うん、三人がいてくれるなら、俺達は絶対に負けないよ」

大地の言葉に嬉しそうな顔をする桃子。この双子の兄は、いつも桃子に気を遣い、桃子を喜ばす言葉をはつきりと伝えてくれる。

弟はそういつたことはあまりしないのだが、態度で大事にしてくれているのは伝わっていた。

だが、二人とも鈍いのが玉に瑕である。

「いくら、三人じゃないでしょ？」

「……え？」

「涼子ちゃんに美穂ちゃん、あと清水さんも一緒に応援に行くから六人よ。家族みんなで応援に行くからね！」

そのことを聞いて、大地と吾郎は顔を見合わせて苦笑する。

まさかこの三人が桃子の中では家族の括りになってしまっているとは思っていなかったのだ。

吾郎は無意識とはいえ、好意を持っているのが清水だけというのは良いのだが、大地には二人いた。

しかも大地が何年も煮え切らない態度を取り続けているのに、一向に諦める素振りすら見せない涼子と美穂。

傍から見ると、一歩間違えれば大地は最低な男の部類に入ってもおかしくはない。

だが、桃子は二人とも大地のお嫁さんに来てもらっても構わないと本人達の前で言い出すため、正直に困っていた。

「は、早く行こうぜ吾郎」

「そ、そうだな。行つてきま——」

「あ、ちよつと待ちなさい！」

気まずい空気を誤魔化すため、そそくさと家を出ようとしたのだが桃子に止められる。

「今日来てくれるとはいえ、おとさんとおかさんにちゃんと『行つてきます』の挨拶くらいしていきなさい」

「……………あ……………」

大地達は大切なことを忘れていたと、茂治達の遺影の前まで行き、手を合わせる。

(おとさん、おかさん。ついに俺達も決勝まで来たよ。絶対に甲子園に行ってみせるから、母さんと一緒に応援してくれよ！)

大地が目を開けたのと同時に吾郎も目を開ける。

どうやら考えていることも同じだったようだ。二人は微笑むとバツグを担いで玄関で待つ桃子のもとへ向かう。

「……じゃあ、精一杯やっつきなさい」

「ああ」

「行ってくるよ」

大地と吾郎は玄関のドアを開け、甲子園へ向けての最後の戦いへと向かうのだった。

第八十三話

へさあ、夏真つ盛りのこの日に、神奈川県196校の頂点が決まるのです！
へなんといつても今大会はまさかあの海堂高校が準決勝で敗退するという出来事があり
ましたからね。やはり一発勝負の高校野球は何が起こるか分かりませんなあ
へええ、まさにそのとおりです！ それでは二校のスターティングメンバーと特徴の紹
介から始めましょう

◇聖秀高校スターティングメンバー

- 1番：キャッチャー 佐藤寿也
- 2番：ショート 本田大地
- 3番：ピッチャー 本田吾郎
- 4番：サード 薬師寺
- 5番：ファースト 大場
- 6番：セカンド 渡嘉敷
- 7番：センター 田代

8番：レフト 藤井

9番：ライト 内山

〈先攻は聖秀高校です！ 一番の注目はやはり横浜シニアで全国優勝をしている本田兄弟と佐藤寿也君の三人でしょう！〉

〈ええ、ホリホロス「聖秀三連弩」の三人は実力がずば抜けていますからね〉

〈情報によると、本田君は大リーガーであるジョー・ギブソンからホームランを唯一打った故本田茂治氏の息子さん達ということみたいですね〉

〈やはり才能を受け継いでいるのでしょう。もちろん本人達の努力も忘れてはいけません〉

〈ええ、ええ！ その通りですね！ 佐藤君もキャッチャーとしてだけでなく、バッターとしても才能に溢れている選手です！〉

〈はい、それに薬師寺君、大場君、渡嘉敷君と粒ぞろいのメンバーがなぜ創部一年目のこの高校に集まったのかも不思議でありません〉

〈そこは諸説ありそうですね！ 続いては帝仁高校の紹介です！〉

◇帝仁高校スターティングメンバー

1 番：セカンド 本間

2 番：センター 辻

3 番：ファースト 中井

4 番：サード 橘

5 番：レフト 大和田

6 番：キャッチャー 児玉

7 番：ライト 植木

8 番：シヨート 神崎

9 番：ピッチャー 石元

〈ここでの注目選手はやはり四番の橘君でしょう！〉

〈ええ、彼は大打者としての才能を持つていながら海堂に行かずに、あえて帝仁に行った選手ですね〉

〈そうなんです！ 昨年までは海堂高校に惜しくも破れてしまっていたのですが、三年目によくくりベンジを果たすことが出来たということでしょうか〉

〈そうですね。帝仁も昨年と比べてレベルがかなり上がっているので、どちらが優勝してもおかしくはないでしょうね〉

へありがとうございます！ それではこれから神奈川県の特長を賭けて、ここ横浜スタジアムで二校が激突します！ 皆さん、ご注目ください！



「それではこれから全国高校野球選手権神奈川大会決勝を始めます。二校とも悔いの無いように試合を行ってください」

「よろしくお願いします！」

二校の挨拶が終わり、後攻の帝仁はそれぞれ守備につく。

お互いに合同練習を行い、練習試合も何回も行っているだけあり、手の内は知り尽くしている。

だからこそ聖秀の新しいグラウンドが出来てからどれだけ成長したかによって、勝負は分かれてくるであろう。

へ一番キャッチャー、佐藤君

寿也が打席に入り、構える。

そしてこの大会からエースナンバーを付けるようになった投手を見ていた。

（石元選手……彼は今二年生だったか。練習試合のときは三年生がエースをしていたけ

ど、確かに合同練習のときからいい球を投げていたね)

石元は、球威のあるストレートを中心に投げてくる本格的な速球派投手である。

185cmを超える上背とガタイの良さから、これまでの対戦相手をことごとくねじ伏せてきた。

そのやり方は海堂戦でも変わらず、見事完封に抑えたほどである。

(それでも甲子園に行くのは聖秀僕たちだ！)

寿也は睨みつけてくる石元にたじろぐことなく、睨み返す。

そして主審のプレイボールのコールで試合が始まるのであった。

「ストライク！」

初球、真ん中低めのストレートを見逃す寿也。

唸るように迫ってくる剛球に腰が引けそうになったが、きちんとボールを観察していた。

寿也、大地、吾郎の三人は世間から「ボリ聖秀ボ三連ロス弩」と呼ばれるようになっており、その三人から始まる際の得点率が八割超えという結果を叩き出していた。

本人達はそのう風という風にテレビで勝手に呼ばれていることを知り、止めて欲しいと恥ずかしがっていたが、薬師寺、大場、渡嘉敷——敢えて言おう、渡嘉敷だけだ——の三人はなぜ自分達も入れて聖秀六連弩としないのだと憤っていた。

単純に大地だけがやたらと注目されているということが悔しいだけであろう。なんにせよ寿也が出塁できるかはこの試合の流れを大きく左右するのだが――。

「右中間だ!」

「センター、追いつけるぞ!」

石元が投げた二球目を捉え、右中間へとボールを運んでいた。

打たれた石元や観客は完璧に打たれたと思っていたが、寿也は苦虫を噛み潰したような顔をして走っていた。

(詰まらされた! 完璧に打ったと思ったのに……)

石元の球威に押され、スタンドまで運んだと思つたボールは途中で失速。

センターとライトの間にポテンと落ちただけのシングルヒットとなった。

この試合、油断はできないと寿也は気を締め直していた。

その寿也の様子を観察していたのが二番打者である大地である。

大地は「ホリ聖秀ボロス三連弩」の二番手として、器用に立ち回らないといけない位置にいた。

寿也が出たあと、送るのか、ピッチャーを攪乱するのか、長打を狙うのか、はたまた違う手を狙うのか。

単純な攻撃では読まれてしまうため、「ホリ聖秀ボロス三連弩」と言われるようになったのも大

地の戦略、戦術の豊富さからと言つても過言ではなかった。

〈二番ショート、本田大地君〉

大地は打席に入り、どうしようかと考えていた。

石元は九回を投げ切っても余力があるだけのスタミナを持っている。

それであれば球数を投げさせて体力を削ってもそこまで効果があるとは思えなかった。

(それなら調子づく前に点を取らせてもらいますかね)

大地は大きく構え、相手との真つ向勝負をするような素振りを見せた。

それは石元だけでなく、相手ベンチ、観客にまで伝わったようだった。

(真つ向勝負というなら受けて立つ！)

寿也が苦笑いしているのに誰も気付くことなく、大地に注目が集まる。

そして石元が振りかぶって投げた初球――。

「ファール！」

「おおおお〜〜！」

レフト方面への大ファールに、観客も思わず声を上げる。

石元はボールの行方を見て、冷や汗をかいていた。そしてそれは守っているメンバーも同じであつた。

大地はちらりとその様子を確認したあと、先程と同じく大きく構える。

「真つ向勝負を受けて立つと思つた以上、石元としては逃げるわけにはいかない。セツトから足を上げた瞬間——。」

「走つたぞー！」

ファーストの中井の声で盗塁を警戒していなかったことに石元は気付く。

しかしもう投球に入っているため、途中で止めるわけにはいかない。

シヨートとセカンドだけが動いたのを大地が確認し、バントの構えを取る。

「バ、バントエンドランだど!？」

ファーストの中井とサードの桶が走るが、先程の大地のファールのせいでもや後ろを守っていたため、虚を突かれてスタートが遅れてしまう。

三塁側に打球を上手く殺して転がし、大地は一塁へと駆け抜けていく。

「くそ、間に合わない! 見送れ!」

キャッチャー兎玉の指示で桶が転がったボールを見送るも、三塁線を切れることなく止まつてしまう。

だが、大地達の攻撃はこれだけではなかった。

「三塁! ランナー走つたぞー！」

「——なつ!？」

セカンド本間の声で桶が気付き、すぐにボールを持って三塁に投げようとするが、投

げることが出来ずに固まってしまった。

「さ、三塁に誰もいないだろ!？」

「桶も投げられず、これで無死一塁、三塁だ!」

ここまでは大地の作戦であった。

初めに真つ向勝負を促すような仕草を見せて、大地に注目を集める。その後、大ファールを打つことでそれが本当であったと思込ませ、守備陣に警戒心を植え付ける。

ここまでは長打が来る可能性を考え、全体的に後ろを守らせることが目的だった。

次に影を薄くしていた寿也が走ることで、ショートとセカンドを二塁に釘付けにする。

そこで大地がバントエンドランを仕掛けることで、まさかの出来事に一瞬守備陣が固まってしまった。

しかし、そこは強豪ということだけある帝仁はすぐにファースト、サードが打球処理に入り、ピッチャーがファーストのカバーへ入る。

ここで問題だったのが、セカンドとショートが二塁に入ってしまったことである。そのせいでサードがから空きとなっていた。

レフトが入ればよかったのだが、かなり後方に下がっていたため、それをすること

も叶わない。

そして寿也が二塁を蹴って誰もいない三塁へと走り、今の結果となったのだった。

これは何回も練習していないと絶対に出来ないことであり、なおかつピッチャーの性格を把握し、大地が大ファールを打つ、守備の位置を確認して実行するなどの様々な要因が重なってようやく出来ることなのだった。

「こ、こんなトリッキーなことをわざわざ練習していたというのか……ま、まさか……」
帝仁の監督である峯岸も呆気にとられていた。

それは聖秀ベンチも同じであった。

「アレ、本当に決まるんだ……」

渡嘉敷の声に全員が頷く。二人で練習していたのは知っていたが、本番でしかも一回で成功すると思っている者は吾郎を除いて誰もいなかったのだ。

「……へっ、やっぱりうちの兄貴はすげえな。俺もやるしかねえか!」

気持ちに乗った吾郎は帝仁側の動揺に付け込み、センター前にタイムリーヒットを打ち、薬師寺、大場、渡嘉敷もそれに続き、初回で三点を得ることが出来た。

なんとか持ち直した石元によって、それ以上点を取られることなくチェンジとなったのだが、帝仁側としては痛い失点となるのであった。

第八十四話

〈車さん、ここまでを見てどう思いましたか？〉

〈ええ、やはり初回の聖秀の攻撃が凄まじかったですね〉

〈確かにそうですね。ではこの試合は聖秀が有利な展開になりそうでしょうか？〉

〈いえ、初回は偶然が重なっただけなので、このままではおそらく帝仁が勝つでしょう〉

〈それは……なぜでしょうか？〉

〈単純な経験の差ですね。聖秀のメンバーがいくら優秀でも強豪校には勝てないですよ。十回やって一回勝てれば御の字といったところでしょう〉

〈……あ、今情報が入ってきました。聖秀と帝仁はつい最近まで何回も練習試合を行っていたようですね。勝率は聖秀がダントツで上だったようです〉

〈……………〉

〈以上、解説は車さんでした〉

一回裏は吾郎が三者凡退に、二回表は石元が無失点でなんとか抑え、吾郎が再びマウンドに立つ。

相手は練習試合でも手こずっていた強打者であった。

〈二回裏、帝仁高校の攻撃です。四番サード、橘君〉

吾郎は楽しみにしていた対決を前に嬉しそうな顔をしていた。逆に橘は真剣な表情で吾郎を見る。

橘は三年生。これが最後の大会なのだから無理もない。

三点リードしている自チームに、吾郎は少し気持ちが緩んでいるようだった。

しかし、兄の大地はそれを見ているだけで何もしない。

橘がバッターボックスに入り、構える。

寿也は甘い球を投げると打たれてしまうと確信させる橘の威圧感に、コーナーギリギリで攻めていこうと判断してサインを出す。

吾郎としては少し考え方が違っていたのだが、素直にサインに従おうと振りかぶって初球を投げる。

「——ッ!?!」

吾郎は振り返ってレフトスタンドを見た。

しかし、そこにはボールは飛んでいなかった。

「ストライク!」

主審のコールでハツとして前を向く吾郎。

橘は初球を空振りしていたのだが、彼のスイングスピードと威圧感にスタンドまで運ばれたと思つてしまつていたのだつた。

(……ちつ)

吾郎は心の中で舌打ちをしながら寿也からボールを受け取る。

大地はその様子を黙つて見ているだけだつた。

(打てるもんなら………打つてみやがれ！)

吾郎の二球目。真ん中低めに制球されたジャイロボールを橘は当てて、バックスタンドへファールとなつた。

タイミングが合つてきていることに寿也は気付いていた。

(このままだと打たれるか………どうすれば………)

ふと寿也はショートの大地を見る。

大地は吾郎を見ていたが、寿也の視線に気が付くと視線を寿也の方へとやる。

目が合った二人だが、大地は無表情のまますぐに吾郎の方へと視線を戻すのだつた。

(えつ、大地君も何も言つてくれないの?)

寿也は大地の今の対応に少しだけ不満を持ったが、寿也が座らないと試合が進まないため、対策も出来ていないまま座るしかなかった。

三球目、四球目とコーナーを突いて投げるのだが、全て橘によつてファールにされて

いた。

それもただ当てにいつているのではなく、フルスイングで当てられているのだ。

（くそ……どうすれば……）

そして寿也は対策を立てられぬまま、無情にもその時がやってきた。

それは七球目だった。ファールが続き、しびれを切らした吾郎が独断で真ん中高めにジャイロボールを投げ込んでしまった。

その球を待っていたとばかりに橘が思い切り振り切ると——ボールは横浜スタジアムのレフトスタンド中段へと運ばれていくのであった。

〈ホ……ホームラン！ ホームランです！ 橘英雄君が本田吾郎君からホームランを打ちました！ 横浜スタジアムのレフトスタンド中段まで鮮やかなアーチを描いてのホームランです！〉

〈ほら言ったでしょ。やはり帝仁が有利なんですよ。このまま逃げ切ってしまうそうですね〉

〈……これで3—1、依然として聖秀がリードしています〉

聖秀の内野手は、タイムを取ってマウンドに集まる。

吾郎は気まずそうな顔をしていた。

「あーあ、完璧に運ばれちゃったよ」

渡嘉敷の声で「うぐっ！」と痛いところを突かれた顔をする吾郎。

寿也がすかさずフオローに入る。

「い、いや、でも今のは打った彼を褒めるしかないよ。吾郎君も気にしないで！」

「と……寿くん……」

渡嘉敷に落とされたところに、救世主のように現れた寿也を見て、目を輝かせた吾郎。薬師寺は白けた顔でそのやり取りを見ていたが、ふと大地の様子がおかしいことに気付く。

「大地、どうした？」

「……いや、なんでもない」

「なんだよ、気になるじゃんか！ 言いたいことがあるならばつきり言えよ」

大地が何か含みを持たせた言い方をしたため、吾郎は気になったのか大地に言うように詰め寄る。

そう言われてしまっっては仕方がないとため息をついて口を開く。

「……はあ、それなら言うよ。今の橘との対戦、なんであんな勝負の仕方をしたんだ？」
「な、なんでって……」

寿也を見た大地は、攻めるような口調で話す。

急に自分に話を振られた寿也は困惑していた。

「吾郎をちゃんと見ていれば、三点先取できて明らかに浮ついていたのは分かっただろ？ それを一球も外すことなく全部ゾーン内に投げていたら、こうなるのは目に見えていただろ？」

「——ッ」

寿也は言葉に詰まっていた。実際には寿也はストライクゾーンだけに投げていない。

だが事前の帝仁対策ミーティングで言われていたことを思い出していた。

「橘英雄はボール一個分ストライクゾーンが広い。そう共有されていたはずだ。今の対決は全てゾーン内だったんだよ」

「あー、なるほどね。ストライクゾーンに来ると分かっていたら、ストレートしか投げられないピッチャーなんて彼からしたら打ってもおかしくないってことね」

渡嘉敷は納得したかのようにペラペラと話した。

まさにその通りだが、渡嘉敷の口調で改めて説明されると責められる側からすると傷口を槍で突かれたような気分になる。

「……………(ぐ)めん」

寿也が気まずそうに項垂れて全員に謝る。

そこで反省して次に活かそうと大地が口を開こうとしたところで、吾郎が寿也を庇い

始める。

「だ、だからって何もそこまで言わなくてもいいじゃねえか！　もうちよつと——」

「いや、お前がはつきりと言えって言ったんだからね」

「う……」

「てかお前もお前でなに簡単に打たれてるの？　あんな真ん中高めに投げられたら、俺でも打つての」

大地は存外にお前にも責任はあるのだと伝える。「まあ、俺なら上段まで運ぶけどな」と付け加えるのをもちろん忘れない。

「相手は帝仁高校。お互いの手の内は知っているはずだ。だが、彼らも海堂高校を破って決勝まで来ているんだから、油断していいはずがないだろ。」

練習試合での勝率は一切忘れろ。相手は名門帝仁高校。油断していたら、このままズルズルと取られ続けるぞ」

吾郎と寿也は責められ続けて項垂れていたが、薬師寺達三人はその通りだと頷いていた。

「ちよつと、いつまでタイムを取る気だね？　少し長いぞ」

「あ、もう終わりますので」

主審が注意をしに来たため、全員がそれぞれの守備位置へと戻ろうとする。

そこで吾郎が大地に問い掛ける。

「じゃ、じゃあどうすればいいんだよ？」

吾郎の自信なきげな問い掛けに対し、大地が振り返って答える。

「いつも通りやれ。油断せず、寿也と一緒に、試合に勝つために何が出来るかを考えろ。……それだけ」

この答えにハッとしたのは吾郎だけではなかった。

ホームベースへと戻っていく青少年も、自身が心のどこかで油断していたということに気付いたのだった。

（そうだよ。僕は何をやっていたんだ！ 相手は海堂に勝った強敵じゃないか！ 練習試合と本番で実力が変わるのにはシニアのときから散々経験してきただろ！）

寿也はマスクを被り、座るとミットを右手で思い切り殴りつける。

その音は横浜スタジアム中に響き渡るほど大きく、何が起こったのかと誰もが一瞬思っただけであった。

気合を入れ直した寿也は、これ以上は絶対に点を入れさせないと頭を切り替えて次の五番打者を迎えるのであった。

第八十五話

へさて、車さん。五回表の帝仁高校の攻撃が終わったところですが、どうでしょうか？
〈試合もどうなるか分からなくなってきましたね〜！〉

へ二回表に橘君が本田吾郎君からホームランを打ち、四回にも橘君を起点にして得点が入っていますからね！〜

へ石元君も良いですね〜。初回以降、「ホリホロス」を抑えていますからね。これはもはや彼らは高熱を出しているんじゃないかと思っっているんですよ

へ……えつと、高熱ですか？

へええ。39度9分で弓道休部！きゆうどきゆういぶ 39度9分で弓道休部！きゆうどきゆういぶ なんちて！〜

へ……以上、解説は車さんでした。引き続き、帝仁高校対聖秀高校の試合をお楽しみください

二回表に橘にホームランで得点を取られた後、吾郎は崩れることなく三人できつちりと抑える。

裏の攻撃で寿也と大地が出塁するも、吾郎が続くことが出来ずゲッツーとなり、薬師

寺がフオアボールで出塁したのだが、大場が石元に三振に仕留められてしまったため、追加点を獲得することが出来なかった。

そして四回表、二死で橘ツニアウトの打順が回ってくる。吾郎と寿也はリベンジとばかりに対決するが、セクターオーバーのツーベースヒットを打たれてしまう。

続く五番大和田がライトとセカンドの間にポテンヒットを打ち、ツニアウトのため走り込んでいた橘がそのままホームインして3―2となった。

四回裏、五回表と両者ともに無得点で終わり、五回裏の聖秀高校の攻撃となった。

〈五回裏の攻撃です。四番サード、薬師寺君〉

薬師寺は打席に入って、構える。これまで薬師寺は初回のヒット一本だけだった。それも前の三人が出てくれたお陰で点が取れているが、自分からチャンスを生み出したりは出来ていなかった。

〈くっ、海堂庵特待生組達は全く役に立ててねえじゃねえか〉

薬師寺は気付いていた。いつも「聖秀ホリ三連ホロス弩」の三人がチャンスメイクをして、得点を取り、自分達はそのお零れを頂戴しているに過ぎないと。

薬師寺は気付いていた。大地達の提案に乗って聖秀に来てから、彼らに偉そうなことを言う割には、それ以上の活躍が出来ていないことにも。

（このままじゃあ何のために海堂を蹴ってまで大地達に付いていったのか分かったもん

じゃねえ。甲子園に連れて行ってもらうなんぞ死んでもごめんだ！」

彼が色々と考えているが、ゲームは進んでいく。

ピッチャーの石元はワインドアップからストリートを投げ込む。

薬師寺は真ん中低めに投げられたボールを空振りしてしまう。

（くそつ。やつぱり石元^{ゴイツ}、前の回から球威が上がってねえか……？）

薬師寺は石元の投げる球が四回から変わってきていると大地達から共有を受けていた。

ボールのスピード、球の威力、変化球のキレなどが格段に上がってきていたのだった。
「ストライク！」

二球目もストリートを空振りしてしまい、もはや彼の中では石元の球を打てる気がしていなかった。

「タイム！」

ここで聖秀側からタイムが掛かり、薬師寺が俯いていた顔を上げると大地がベンチから出てきていた。

手招きをされたので、大地のところへ行く薬師寺。

「なんだよ」

「いやあ……なんか打てませんって顔してるなって思ってたさ」

「なっ!？」

「凶星であつた。そのため大地の言葉にすぐに反論が出来ず、俯くしか出来なかつた。

「……実際そうだよ。あの球は打てる気がしねえ」

「……………」

大地は黙つて薬師寺の言葉の続きを待つていた。

「情けねえつて思ふかもしれないが、何のためにお前の言葉に乗つて聖秀（こご）に来たのかも分からなくなつてきたよ……。こんな足を引つ張るぐらいなら、俺じゃなくて別の奴を

——」

「おい、お前本気で言つてんのか？」

大地は低い声を出し、薬師寺の胸ぐらを掴んだ。

「そうじゃないだろ。俺がお前を選んだのは、お前なら出来ると思つたからだ!」

「……………」

「俺は、俺達はお前達と一緒に甲子園に行きたいと思つたから声を掛けたんだ! 二度とそんなことを言うな!」

「——ッ!」

大地の言葉に薬師寺は何も言えなくなつてしまふ。

それは後ろに控えていた大場、渡嘉敷も同じであつた。

「……お前なら打てる。一球あれば十分だろ？　せつかくの決勝戦なんだから、余計なこと考えていないで楽しんでこいって」

手を離れた大地は薬師寺のユニフォームを直して、そのままベンチに下がっていつてしまう。

薬師寺は呆然としていたが、大場や渡嘉敷と目が合い、真剣な顔をしつつも苦笑いしている彼らを見て同じく苦笑してしまう。

観客達は大地の行動には驚いていたが、大声で叫んでいた大地の声は自分達の耳にも届いており、批判的な言葉を出すものはほとんどいなかった。

「そろそろいいかね？」

「あ、はい……」

主審が薬師寺に声を掛け、彼はそそくさとバッテリーボックスへと戻っていく。

「……あまりああいふことは良くないがね。チームメイトの信頼にきちんと応えてあげなさい」

打席に入る直前、主審が小さな声で薬師寺に話し掛ける。

大地が胸ぐらを掴んだところで、主審も問題行為として聖秀側に注意を促そうとしたのだが、大地の言葉を聞いて見守ることにしていた。

審判団はただ審判をするだけでなく、青少年の心を育むためにも存在していたの

だ。

(……………俺は……………俺は……………)

薬師寺はなんてことを言ってしまったのだと心の中で恥じていた。

せつかく自分を信頼してくれていたチームメイトに対して、失礼なことを言ってしまったのだと気付いた。

(そ·う·だ·……………俺達·が·活·躍·す·る·必·要·は·な·い·ん·だ·……………！ 俺達は、チ·ーム·全·員·の·力·で·甲·子·園·に·行·く·ん·だ·！)

大切なことによく気付いた薬師寺は、石元の投げたストレートを全力で振り切る。

大きな音を鳴らしながら、ボールはレフト方向へと飛んで行った。

「大きいぞ！ レフト、下がれ！」

「入るか!? 入るのか!？」

レフトがボールをキャッチしようと走り続ける。

薬師寺はボールの行方を追いながら、走り続ける。

「入れ……………入れ……………入っちゃまえーっ!!」

薬師寺が大声で叫ぶと、ボールはその勢いを吸収したかのように飛んでいく。

そして、横浜スタジアムのレフトスタンドへ入るのであった。

「入れた！ 入れやがった！」

「うおおおおおおお！」

聖秀ベンチが、観客が全員大声で盛り上がる。

薬師寺はダイヤモンドを回りながら、右手を上げてガッツポーズをする。

そして、ホームベースに戻ってきたところに待っていたのは、大地であった。

「……やれば出来るじゃん」

「……………ああ」

二人はハイタッチを交わし、一緒にベンチへと戻っていく。

ここでは聖秀のメンバーが薬師寺を揉みくちやにしていた。

（ああ、そうだ……！ 俺は、俺はこういう野球をやりたかったんだ……！）

ただ勝つだけではない。仲間を信頼して、信頼されて。そしてチームのために全力でプレーをする。

自分と戦って、仲間と戦って、そして相手と戦って勝つ。

そこで全員が苦しんで流した汗の分だけ、最高のチームが出来上がるのだ。

このことに気付いたのは薬師寺だけではなかった。

「……までされたならな」

「俺達もなんとかしなくちゃ駄目でしょ？」

そこには目の色を変えた二人がいたのだった。

「あれ?」

「アウト! チェンジ!」

その後、大場と渡嘉敷がヒットで出塁し、田代が送って一死二塁、三塁のチャンスとなったのだが、藤井がショートライナーを打ってしまい、渡嘉敷も戻りきれずゲッツーとなり、この回は一点止まりとなったのだった。

「す、すまん……」

「おい〜ふじい〜」

「うう……」

「……まああのピッチャーから真芯で当てたことだけは褒めておいてあげるけど」

渡嘉敷はいつまでも素直にはなれないのであった。

第八十六話

聖秀が五回裏に一点追加し、4―2と帝仁高校を突き放す。

石元はその後も大場と渡嘉敷が出塁するなどで一気にピンチとなるが、なんとか踏ん張り、流れを聖秀へと行かせないようにした。

(帝仁……一緒に練習したのは失敗だったかな?)

大地は帝仁と合同練習をして、教えたりしていたことを少しだけ後悔していた。

まさかここまで強くなるとは思っていなかったのだ。

(それにしても、まさか明和第一のベストメンバーが帝仁のメンバーと入れ替わっているなんて、誰も思わないでしょ……)

初めて練習試合をしたとき、実はメンバーの名前を見て薄々とは感じていた。

確信したのは、合同練習の最初に全員で自己紹介をしたときだった。

サードを守っている橘英雄、ピッチャーをやっている石元。原作^{H2}で史上最強の三番打者を目指していた中井など、記憶にある名前がどんどん出てきたため、安易に合同練習をしないほうが良かったと思ったりもしていたのだった。

そのせいで原作の明和第一に勝るとも劣らない実力を身に付けてしまい、聖秀は手こ

ずっていた。

それでも大地は海堂を倒してくれたことだけは感謝していた。

江頭は何をするか分からない。それは硬球を使った野球の試合という、最悪のことすらあり得るスポーツではなおさら対戦したくなかった。

原作で吾郎がやられた仕打ちを考えると、誰もがターゲットにされてしまおうし、聖秀を負かす方法は簡単なのである。

(俺らのうち、誰か二人を再起不能にすればいいだけだからね)

そう。それは別に大地や吾郎を狙う必要はない。

内山や藤井、宮崎のような素人組を狙えば、より簡単に試合を終わらせることが出来る。

野球は九人いなくてはならない。プロであつても八人しかいないのであれば、大会だったら小学生のチームにすら負けてしまうのが現実だ。

聖秀のこの一年の課題は上手くなることだけではない。いかに離脱者を出さないかというのが重要になってくる。

甲子園に出場し、更に勝ち進めば経験は積むことは出来るが、怪我のリスクも増すし、警戒される可能性も高くなる。

全国に山のようにある高校であれば、江頭のように邪魔者を排除する考えを持つてい

る人間がいてもおかしくはないのである。

その点、帝仁は信用が出来るといってもよかつた。

もし警戒しているのであれば、合同練習をしている時に狙えばいいし、そのタイミン
グはいくらでもあつたからだ。

(それにしてもこの大会中、江頭は一切動いてなかつたけど……つと、今は試合に集中し
なくちゃだ)

大地は飛んできたボールを捌いて、二塁にいる渡嘉敷にトスをする。

渡嘉敷はそれを利き手で受け取り、その流れで一塁に投げてアウトにする。

「アウト！ スリーアウト 三死、チェンジ！」

「よし！ ゲッツーだ！」

大地と渡嘉敷はお互いのグラブでハイタッチをしながらベンチへと戻っていく。

試合は既に終盤へと差し掛かっていた。



「……全くもって面白くありませんね」

江頭は自室に備え付けられたテレビで神奈川県大会の決勝を観ていた。

海堂野球部のチーフマネージャーになってからというもの、毎年この日はテレビで決勝を観ていたのだが、海堂が準決勝で敗退してしまったために他チームの試合を眺めているだけとなってしまっていた。

片^{かた}や準決勝で海堂を破って決勝に行ったチーム。片^{かた}や自身をコケにしてくれた因縁があるチーム。

どちらがより憎いかは分かりきっているのだが、それでもう片方のチームを応援する気には一切なれなかった。

江頭は椅子に座り、机に両肘を付いて口元で手を組みながら考え事をしていた。

(どうすればあいつらに一矢報いることが出来るか……あいつらに甲子園にだけは行かせるものか……)

海堂が負けてからというもの、江頭は頭をフル回転させていた。

睡眠時間を削り、法律に引っ掛かることはないレベルで彼らの邪魔をすることだけを考えていたのだ。

(アレも駄目だ、コレも駄目だ。あの方法なら……！ いや、それでは弱すぎる。あいつらには最大限の屈辱を与えてやらねば……)

そこでふと頭の中によぎるものがあった。

手で口元を隠していたのにも関わらず、明らかにニヤリとしたのが分かった。

「ふはは……ふははははっ！　そうか、これならば！」

江頭は誰も居ない部屋で大きな声で笑い続けていた。

（くひひ……潰してやる！　潰してやるぞ、本田兄弟と佐藤寿也あー！）



〈八回が終わり、遂に九回まで来ましたね。4―2で聖秀学院がリードしています〉

〈やはりこうなりましたね！　私は初めから聖秀が有利だと思っていたんですよ！〉

〈そ、そうでしたか？〉

〈当たり前じゃないですか！　シニア時代、全国大会を優勝したバッテリーにキャプテンの本田大地君もいるんですよ？　それに薬師寺君達もシニアで有名だった選手です。ここまで集まっていたら鬼に金棒ですよ！〉

〈……………〉

〈何よりも初回の攻撃が良かった！　さすが「ホリホロス聖秀三連弩」と呼ばれた三人ですね！

あれは偶然では絶対に起こせませんかからね！〉

〈えー、この番組を録画している皆様。決して巻き戻して最初から観ないようにお願いします。〉

以上、解説は車さんでした。それでは最終回の攻防をお楽しみください！
〈なっはっはっは！〉

九回表の帝仁の攻撃。五回に聖秀が追加点を取ってからは試合が動くことなく、石元と吾郎が完璧に抑えていた。

帝仁側からすると追い付くためのチャンスを一回でも欲しいが、聖秀側からしても二点差では何があるか分からないため追加点が欲しい状況だった。

追う側も追われる側も、お互いのチームが追い詰められていたのだった。

〈九回表の攻撃。帝仁高校の攻撃は一番セカンド、本間君〉

本間はゆつくりとバッターボックスへと向かっていく。

聖秀側は内野陣がマウンドへと集まっていた。

「吾郎君、最終回だけど大丈夫？」

「ん？ おお、大丈夫だ。心配いらねえよ」

寿也の言葉に吾郎は明るい声で返事をする。

それを聞いて安心したメンバーであったが、大地だけは吾郎のやせ我慢が分かっていた。
た。

(この炎天下を帝仁相手に全力投球で投げ続けていたんだ。無理もないな)

ペース配分が上手く出来る弱小校相手ならまだしも、真夏の炎天下を強豪相手に手加減など出来るわけがない。

吾郎はまだ高校一年生である。身体もまだ出来上がっていない彼には、この炎天下を全力で投げ切るにはまだまだ体力が足りていなかったのだ。

「ん？ 大地、どうしたんだ？」

また何か言われるのではないかと思っていたのか、恐る恐る大地に問い掛ける吾郎。大地は口を開きかけたが、吾郎の気持ちを考えてそれ以上は何も言うことはなかった。

「おお、なんでもないさ。そろそろ始まるだろ、全員気合い入れていこう！」

大地は全員の顔を見ながら鼓舞をした。メンバーも全員大地の顔を見て頷く。

そして各々のポジションに戻っていく。

「大地……ありがとな」

「……何言つてんだよ。下手なピッチングしやがったら、俺と交代だからな」

「……ああー！」

吾郎は大地が自分の限界を隠してくれていたことに気が付いていた。

そして、そのことを黙っていてくれていたことに素直に感謝の言葉を告げる。

二人は初めて試合をしたときにも同じやり取りをしていたことを思い出していた。

吾郎と大地は目を合わせて微笑み合う。

二人は同じ顔をしているが、性格はそこまで似ているようには見えない。だが、二人の気持ちは確かに通じ合っているのが双子の証拠であった。

(さあ、最終回だ！)

吾郎は手に持ったロージンバッグを地面に置き、ボールを握りしめる。

「ブレイ！」

そして大きく振りかぶり、ジャイロボールを投げ込むのだった。

第八十七話

へさあ！ 帝仁高校対聖秀学院高校の神奈川県大会決勝ですが、ついに大詰めを迎えております！ 車さん、どうなると思いますか？

へこれは……難しいところですね。本田君もスタミナ切れになってきているように見えますし、帝仁高校がやや有利といったところでしょうか

へ九回表、一死一、二塁で、バッターは橘君ですからね。四回にもホームランを打っていますので、最悪ここで逆転もありえます

へええ。聖秀に何か打つ手があればよいのですがね。まあ難しいでしょう！ やはり優勝は帝仁で決まりですね！ 私が初めに予想したとおりになりました！

へ………さて、決着が付いていませんのでどうなるかはまだ分かりませんが、最後まで目が離せない対決となりそうです！

九回表。吾郎は一番の本間を三振に仕留めて、一死とする。

この段階で、聖秀側も観客も帝仁の何人かも聖秀の優勝を確信していた。しかし、ここから事態が変わってくる。

吾郎が突然ガス欠したかのように球威が落ち、二番の辻にセンター前ヒットを打たれてしまう。

そして三番の中井を四球で出塁させてしまい、一死^{ワンアウト}一、二塁のピンチになってしまった。

ここで打席に立つのが、帝仁の主砲であった。

〈四番サード、橘君〉

橘は気合十分の表情で打席へと向かっていく。

寿也はこのままではまずいと思い、すかさずタイムを取る。

「げ、吾郎君……大丈夫!？」

「はあ……はあ……ああ、だ、大丈夫だ」

寿也は片目を瞑りながら汗を拭^{ぬぐ}う吾郎の姿を見て、限界が近いと判断した。

このままでは負けてしまうと思い、俯いて少し考えたのち、顔を上げて吾郎へ提案する。

「吾郎君、彼を——」

「敬遠ならしないぜ?」

吾郎は寿也の言葉を遮り、敬遠はしないと伝える。

まさか予想されていたのかということと、敬遠を拒否された両方に対し寿也は目を見

開いて驚いた。

「……なんだよ。まさか俺がそれくらい予想していなかったとでも言うのかよ？」

「……いい、いや、そうじゃないけど。でもじゃあどうするの？ このまま勝負しても打たれる可能性のほうが高いよ？」

「ああ、そうだな」

このままだと打たれてしまうと率直に伝えた寿也の言葉を、今度は肯定する吾郎。
ではどうするのかと吾郎に再度問いかけようとすると、吾郎が先に口を開く。

「……それでもな、俺は橘アイツと勝負してえんだ。一発打たれたら逆転ピンチ、抑えたら甲子園。こんなに燃える勝負はないだろ」

吾郎は疲労困憊にも関わらず、寿也へと笑いかける。

もう自分には説得できない。そう判断した寿也はショートにいる大地へと顔を向けるが、大地はただ肩をすくめるだけだった。

(なんだよ、自分この勝手兄弟達は！ これで甲子園に行けなくなったらどうするんだよ……)
「もし甲子園に行けなかったらさ……」

寿也の思っていたことに回答するかのように、タイミングよく吾郎が話す。

「行けなかったら……？」

「センバツ目指して、秋大会に向けて練習しようぜ」

吾郎のあつけらかんとした言葉に呆気にとられた寿也。

ポカンとした顔をしていたのだが、急に吹き出して笑い始める。

自分が何か言つたせいで壊れてしまったのかと心配した吾郎が、「と、寿也……？」と
 問い掛けるが、しばらく笑いつばなしだった。

「……ふう」

「だ、大丈夫か、寿也？」

「……もう仕方ないよね。本田兄弟君達に乗つかつて聖秀ごごに来たんだし、最後まで付き合うよ」

寿也はひとしきり笑つた後、吾郎の提案に乗つて橘と勝負する覚悟を決めた。

そして、ボールを渡してホームへ戻ろうとしたとき、吾郎に声を掛けられて立ち止まる。

「ん？ なに？」

「本当にいいのかよ？ 打たれたらどうするんだよ？」

「なに、初めから打たれるつもりなの？」

「いや、そうじゃねーけどよ……」

万が一だつてあり得るだろうと吾郎は言いたかつたようだが、寿也は最後まで言わせずに吾郎へと振り向く。

「——そのときはセンバツ目指して練習しようよ」

満面の笑みを吾郎へと向けた寿也は、吾郎の返事を聞くことなくホームへと戻っていった。

吾郎は寿也の笑顔を呆然とした様子で見っていたのだが、言葉の意味を理解すると「へっ」と笑いながら鼻をさするのであった。

寿也はキャッチャーグラブを構えたときの吾郎の顔は、この試合で一番集中しているようであった。

「感謝するよ」

「……何のことですか？ 僕達は一番勝てる方法を取っているだけですよ」

橘は寿也の返事にわずかに笑い、バットを構えるのであった。

「プレイー！」

吾郎はセツトポジションからジャイロボールを投げる。

真ん中低めに投げられた球を橘はカットする。

「フアーラー！」

ボールを受け取った吾郎は冷や汗をかいていた。脳裏に先程のホームランが残っていたからだ。

橘がバットを振るたびに、打たれたときのことを考えてしまうのだった。

（くそっ！ 寿也には強気に言ったが、橘ヤツには打たれる気しかしねえ……）

吾郎は孤独の中で投げているような感覚に陥っていた。

我儘を言った時点で、打たれたら誰が何を言っても自分のせいになるからである。

「フアール！」

「ボール！」

「ボール！」

二球目もカットされたあとは、恐怖心が勝まきつてきてしまったのか二球続けてボール球を投げてしまう。

（やべえ……う、打たれる……）

吾郎がわずかに俯いてしまう。これはほぼ誰も気付かないレベルのものであり、このスタジアムで気付いたのはたった二人だけだった。

「……吾郎」

もうだめだと思ったとき、後ろから声が聞こえる。

決して大きな声ではなかった。だが、彼の耳には誰よりも透き通って聞こえた声だった。

（だ、大地……！）

吾郎に声を掛けたのは兄である大地。それも吾郎が諦めかけてしまう絶妙なタイミ

ングだった。

大地は口パクで吾郎へと何かを伝える。

「……………」

吾郎は大地のメッセージを受け取ったのか、目を瞑って深呼吸をする。

そして目を開いたときの彼は何かを決心したような表情であった。

吾郎は腕を上げ、ワインドアップでボールを投げ込む。

ランナーは一瞬目を疑ったが、すぐに一斉に走り出す。

「ファール！」

橘は真ん中に投げられたボールをカットする。

彼はカットをしたのだが、驚いた顔をしていた。

(な…………… きゅ、球威が上がった……………だど……………!?)

吾郎は再度投げ込むが、橘は喰らいつきなんとかファールにする。

しかし、一球投げるたびに吾郎の球威と球速は上がり続けていた。

(な……………なんてやつだ……………)

橘は吾郎がこの打席で成長し続けていることに気付き、恐れを感じていた。

(だが、俺も帝仁の四番だ！ 簡単に負けるわけにはいかない!!)

バッターボックスの外で一度素振りをして、真剣な顔をして打席へと戻る橘。

お互いに睨み合う吾郎と橘。

そして吾郎の最後の一球が投げ込まれた――。

「シヨート！」

誰が発したか分からないその声に反応した大地は、ピッチャーライナーで二塁まで飛んできたボールに全力で飛び込む。

ダイビングキャッチした直後、立ち上がらずに上半身の力だけを使って、ファースト

へ投げる。

その流れるような動作から投げられたボールは、一塁ランナーが戻る前に大場のミットへと収められたのだった。

この日、聖秀学院高校は史上初となる創部一年目で夏の甲子園出場という快挙を達成した。

第八十八話

「う、うおおおおおおお!! こ、甲子園だああああ!!」

「おわっ! やめろよ、気持ち悪いな!」

「だ、だってよお〜! ま、まさか俺達が本当に甲子園に行けるだなんて……」

レフトの藤井が真つ先にマウンドへと走っていき吾郎へ抱きつこうとするが、吾郎がサラリと躲してしまい、藤井は勢い余って転んでしまう。

藤井の顔は嬉しさのあまり涙と鼻水、そして涎でベチャベチャになっていた。吾郎でなくとも避けるであろう。

それに追従する形で、他のメンバーもマウンドへと駆け出してくる。

大地はフラインプレーの余韻もあつて、ゆつくりと立ち上がった後にマウンドへと歩いていく。

「吾郎」

「……大地」

大地と吾郎は向き合いながら笑顔を見せて、ハイタッチを交わす。

その姿を見て、二人を囲むように全メンバーが抱き合うのだった。

「それでは4―2で聖秀学院高校の勝ちです。互いに礼！」

「ありがとうございます!!」

帝仁高校のほとんどの生徒は泣いていたが、橘だけは唯一泣いていなかった。

そして、吾郎ではなく、大地と握手をしていた。

「……参ったよ。あの球を捕られるんだったら、帝仁うちの勝ちは厳しかったな」

「いえ。たまたまグラブに入っただけです。次やったら捕れる自信なんてないですよ」

「そういうことしておくよ」

大地の言葉は謙遜と取られたようで、橘は苦笑いをしていた。

「甲子園……絶対に勝ち進め」

「……はい、必ず」

そう言葉を交わし、二人は背を向けて互いのベンチへと戻っていった。

「先輩……」

橘がベンチに戻ったとき、石元が待っていた。

声を震わせ——いや、声だけでなく、全身を震わせて橘の名前を呼んでいた。

「石元、すまない。お前が何点取られようとも、俺が絶対に取り返してやると思っていた」

「……………ううっ……………」

橘の言葉を聞いて、石元は泣き崩れてしまう。いつもの張り裂けるような大声ではなく、ただ静かに泣いていた。

そんな石元の方に手を置いて、「来年は勝てよ」と一声掛けて荷物を持ってベンチ裏へと去っていく。

そして、橘が荷物を置いていた場所には、ひとしずく一雫の涙の跡だけが残されていた。



「ふざけるなっ！　よりにもよって聖秀が甲子園出場だど!？」

本当であれば見るつもりもなかった神奈川県大会の決勝を、つい最後まで見てしまった江頭。

その結果に怒り狂ったのは、彼の性格を知っているなら当然のことだ。持っていたボールペンを力任せにへし折り、机の上に置いてあつた物をぶちまけていた。

「……はあはあ……はあはあ……」

その形相は親の仇を見たときのようなものであり、この場に誰かがいたら恐怖で身動き取れなかつたであろう。

（なんとしても……あいつらの甲子園出場だけは阻止してやる……！　しかしどうやって……？　このまま何も問題がなければ聖秀がある限り、あいつらは……）

そこでハツとした表情を見せる江頭。

「聖秀がある限り……。そうか聖秀が無くなれば、あいつらは甲子園に行けなくなるのか？」

歪んだ顔でニヤリとし、手帳を取り出した江頭は机の上に置いてあつた電話の受話器を持ち上げる。

そして、ダイヤルを回そうとしたところで何かに気付き、受話器を置く。

（この部屋の電話でやり取りするのはまずい……）

江頭はいくつか手荷物を持つと、そのまま車に乗って海堂高校から出ていった。

「今、高校から出ていったわ」

「分かったわ。あとは私に任せて」

その後ろを何者かにつけられているとも知らずに。



「なあ、ふと思ったんだけどさ」

「どうした？」

閉会式も終わり、帰りのバスではしゃいでいた聖秀学院高校メンバー。

渡嘉敷がふと疑問に思ったことを口にする。

「藤井ってレフトなのに、なんで優勝したとき内野の俺らよりも吾郎に飛びつくのが早かったんだ……？」

「あ……たしかに……」

優勝が決まった瞬間、数秒と掛からずに藤井はマウンドまで走ってきていた。

最後にフラインプレーを決めた大地は立ち上がっていない状態だったのだから遅くても仕方がないが、それ以外のメンバーよりも早いというのが非常に気になっていた。

「藤井、お前まさか……」

「いや、その……だ、だって仕方ないじゃんか！ まさか本当に甲子園に行けるって思っていないかったし……つい……」

それが理由になっていないことは誰から見ても明白であり、藤井を問い詰める聖秀メンバード同。

結果、藤井は吾郎が最後の一球を投げた瞬間に飛び出していたとのことだった。

「お前……飛んだ場所が大地のところだったから良かったものの、レフトに飛んでいたらどうしてたんだよ！」

本当に危なかったのである。これがレフトに飛んでいたら、最悪ランニングホームランになっていたかもしれない。

一点差になっていたいたら、万が一の可能性もあり得たのだ。

「す、すまねえってば！」

「ごめん、済んだら甲子園はいらねえんだよ！」

「吾郎、それはさすがに意味分からん」

大地のツツコミに全員が笑い、それで藤井の罪が許される。

実際は許されているわけではなく、これから夏が終わるまでの間、藤井は聖秀野球部カーストの最下位に君臨し続けるのだが。

それはまだ藤井本人だけが知らなかった。そして他のメンバーと一緒にのんきに笑い続けるのであった。

間話 テーブルテニスの王子様②

「それでは、甲子園出場を祝って！ 乾杯！」

「かんぱーい！」

聖秀学院高校の体育館を使って、野球部の甲子園出場を祝う食事が開かれていた。

そこには聖秀学院野球部のメンバーはもちろん、教師、家族、そして他校の友人すらも招かれて、それぞれが思い思いの時間を過ごしていた。

「おい、藤井！ 学生は酒ダメだからな！ もし飲酒がバレたら甲子園はおろか、対外試合も停止になるから気をつけろよ！」

「え……！ わ、分かってるよ！」

教師の一人が、どさくさにまぎれて酒を飲もうとしていた藤井を注意していた。

何人かでしんみりと端っこでジュースを飲んでいる者、可愛い女の子二人に囲まれている者、男女で仲良く話している者。

その中で、なぜか藤井だけが一人ぼっちでポツンと立っていた。

（え……お、俺だけなんで一人なんだよ！ 大地はめちゃくちゃ可愛い女の子に囲まれてるし、吾郎は薫ちゃんとイチチャツいてやがるしよ。お、俺だって女の子と……！）

辺りを見回すが、目ぼしい女の子はどこにもおらず、藤井はふてくされていた。

（ぐ、ぐぞーっ！ これも全ては大地のせいだ！ あんな可愛い女の子に囲まれやがってえ！ でもアイツに勝てる要素なんて俺には……ん？）

藤井はふと隅っこに置かれた物に気が付く。それは卓球台だった。

小・中学生のときに遊びでやっていたのを思い出す藤井。

（懐かしいなあ……あのときは卓球部のやつ以外には誰にも負けなかったからな！ 誰に……も……？ そ、そうか！ これだ！）

藤井は何かを思い付いたのか、すぐさまジュースが入ったコップを置いて走り出す。そして大地の目の前で止まる。

「ど、どうしたんだ、藤井？」

「ふっふっふ！ 大地！ 今から俺と勝負しろ！」

突然勝負を持ちかけられた大地は困惑する。

「勝負？ 急にどうした？」

「野球じゃお前に勝てないけどな、アレなら絶対に俺が勝つ！」

藤井が指した先には先程発見した卓球台が置いてあった。

それを見た大地の表情が変わる。

「……ひっ！」

「なっはっは！ こう見えても俺は中学校まで卓球部以外には誰にも負けたことがないからな！ 野球一筋のお前にだつてこれなら勝てるはずだ！」

卓球台と大地の顔を見て、何かを思い出した涼子。

寿也の妹である美穂は何のことか分からずにぼかんとしているが、涼子は次第に震えだす。

「あ、あなた！ 悪いことは言わないから、やめておきなさい！ 大地君にだけは挑んではダメ！」

「ふん、大地の彼女からすると大地が負けるのは嫌だろうけどな、俺だつて負けられないんだよ！」

「彼女……えへへ……じゃ、なくて、本当にやめなさいってば！」

「涼子さんは大地さんの彼女じゃありません！ でも涼子さんがここまで言うなら、本当にやめておいたほうがいいんじゃない？」

彼女扱いされて一瞬だけ現実逃避をしそうになった涼子だったが、すぐに我に返つて藤井を止める。

美穂は涼子だけが彼女扱いされたことに腹を立てるが、涼子がここまで止めるのは変なので一緒に止めに入る。

しかし、今の藤井を止めることは誰にも出来なかつた。

「……卓球、でいいのか?」

「ん? おおよ! 俺の強さを見せてやるぜ!」

「分かった。じゃあ準備をしようか」

大地は目つきが明らかに鋭くなっていたが、すでに勝ったつもりでいる藤井はそれに気付くことはない。

そしてその騒ぎによろやく吾郎達が気付き始める。

「ん?なんだ、どうしたんだ?」

「吾郎君! 藤井君を止めて! 彼、大地君に卓球で勝負を挑んだのよ!!」

「……………な、なんだとツ!」

涼子の言葉に驚く吾郎。だが他の聖秀メンバーには何が何だか分かっていない。分かってるのはトラウマを植え付けられた二人だけだった。

「だ、大地……藤井も悪気があったわけじゃないんだし、やめてやれよ……な?」

「え? ただ卓球勝負を持ちかけられたからやるだけだよ? おかしな奴だな、吾郎は」

「……ひつ! り、涼子ちゃん! ダメだ、あなつたら俺も止められねーよ!」

「どうしよう……もう、犠牲者を、増やしてはいけないというのに……」

吾郎は絶望の顔をして、涼子は泣きそうな顔をしていたが、もはや誰にも止めることは出来ない。

こうして準備が整ったところで大地対藤井による卓球対決が始まるのだった。



十一点先取、一セットマッチ。サーブは三回交代で大地サーブからスタート。

大地はボールを数回台に軽く弾ませたあと、少し高く上げてボールを打つ。

対角線上に飛んでいったボールは横回転されており、相手コートについた瞬間、逆回転をして藤井の顔めがけて飛んでいく。

「うおっ！」

「ふふ。ツイストサーブだよ」

避けきれずに顔面に当たってしまい、大地のポイントとなる。

ニヤリと笑う大地の顔が、周りの観客に恐怖を与える。

「も、もうダメだ。これ以上は……」

「や、やめてあげて……」

吾郎と涼子だけは過去のトラウマを呼び起こされたようで、ガタガタと震えだす。

ポイントは1—0。

先ほどと同じく数回台にボールを弾ませた後、大地はボールを高く上げ打つ。

今度はスライス回転することなく、通常通り弾んでいく。

「くそっ！」

藤井はなんとかボールを打ち返すが高く上げてしまい、大地にとってチャンスボールとなる。

すると後ろに事前に下がっていた大地は軽く助走をつけ、ジャンプした。

そのまま身体全体を使って思い切り叩き落とすようにボールを打ち込む。

ものすごいスピードで相手コートに飛んだボールは台に付いたあと、藤井の横を抜けていった。

「どーーーーん！」

「な、なんだよそれ……？」

ポイントは2-0。

あまりの実力差に藤井は冷や汗をかくが、勝負はまだ始まったばかりである。

彼は生来の負けず嫌いを出し、勝負を続けるが、難なくサーブが決まり3-0と点差が広がる。

（大地のサーブだから点が入っているだけだ！ 次の俺の番になれば！）

サーブチェンジとなり、藤井のサーブの順番となる。

藤井は回転を掛けてサーブを打つ。

「お！ 藤井やるじゃん」

「確かに手慣れてそうだな」

いつの間にか観戦に来ていた清水や薬師寺達が藤井のサーブを褒める。

（どうだ！ 卓球部直伝のサーブだぜ！ これで薫ちゃんも……！）

藤井は大地が変なところに打ってしまおうか、空振りするという妄想をしていたのだが。

ボールが卓球台を弾く大きな音になり、藤井の顔を何かが掠めていった。

「これで4—0だな」

無表情の大地は左腕を上に掲げ、ラケットを持った右手を正面に突き出していた。

「な……なにが起こったんだ？」

「見えてなかったの？ 今、大地が『レーザービーム』みたいなショットを打ったんだ」

「よ」

内山の言葉に渡嘉敷が冷静に答える。

正確には超高速。パッシングショットというのが正しいのだが、レーザービームと呼ぶにふさわしい技であり、そのスピードを追える目を持っている人はこの場には少なかった。

「ここからは——最初からだ——一方的な試合となつていった。」

藤井は為す術なく、大地から一ポイントを取ること出来ずに敗北した。

「プリッ♪」

「く、くそ……!」

大地の余裕そうな顔を見るたびにあの時の恐怖が蘇ってきてしまい、吾郎と涼子は動き出すことが出来なくなっていた。

息が上がってしまい、座り込んでいる藤井の前に立つ大地。

「さて、俺に卓球で勝つって言ってたのはどこのどいつかな?」

「……ひっ!」

大地の笑顔があまりにも恐ろしく、藤井は後退りしようとするが、腰が抜けてしまつて動くことが出来ない。

殺される——そう思ったときだった。

「ふん、藤井を倒したくらいで調子に乗るなよ」

「ああ、調子に乗るなら俺達に勝つてからにしろ」

「そうだね。あれくらいなら問題なく返せるし」

その場に現れたのは、薬師寺、大場、渡嘉敷の三人だった。

無表情で三人を見つめる大地。

「へえ、じゃあ早くやろうよ。何人でやる? 一対三でもいいよ?」

「……ちつ。本気で調子に乗ってるようだな！」
ここから海堂待生組による大逆襲が始まった。

「まだまだだね」

否、逆襲は始まることはなく、大地によってトラウマを植え付けられた人間が増えた
だけだった。

第八十九話

(おとさん、おかさん……俺達、甲子園に行つてくるよ)

本田家の墓の前には桃子、大地、吾郎の三人がいた。

桃子は座つて手を合わせ、大地と吾郎はその後ろに立ちながら、茂治と千秋に対して挨拶をしていた。

「……………それじゃ、帰ろっか」

「そうだね」

「……………ああ」

明日、大地達は甲子園球場へ向けて出発をする。

海堂高校——江頭のみ——に喧嘩を売った約一年前。絶対に甲子園へ行つてやるという気持ちで、その後薬師寺達を勧誘して聖秀学院高校へと入学した。

練習するグラウンドが無い。九人集まるかも分からない。

そんな状態で、たった四ヶ月。たった四ヶ月で甲子園へ行くことが出来たのだ。

これを快挙と言わずになんと言うことができるであろうか。

海堂高校が破れたことは大きなニュースとなっていた。そしてその海堂を破った帝

仁高校に勝った聖秀は更に大きなニュースとなるのだった。

——故本田茂治選手の遺児。父の遺志を継ぎ、甲子園デビュー！——

——亡き父に似た端正なルックスで、全国の野球女子を魅了！ 将来はプロへ行くのか!? ——

ここ数年、話題が無いわけではなかったが、大きな話題とならなかった高校野球において、本田兄弟の存在はスポーツ紙やスポーツニュースを大きく湧かせることとなった。

もちろんその影響を強く受けたのは大地と吾郎だったのだが、彼らがペースを崩すこともなく出発前日にお墓参りが出来たのも、桃子や涼子、美穂や周りの友人達のお陰であらう。

聖秀の他の野球部員は本田兄弟のことについて一切口を開くことはなく、それは小学

校、中学校で親しくしていた友人達も同じであった。

三船ドルフィンスズの元メンバーや横浜シニアのチームメイト達も、祝福の言葉は残したとしても、大地達のプライベートの話は一切口にすることはなかった。

全員で口裏を合わせたわけではない。それはひとえに大地と吾郎の人徳と言っても過言ではない。

「大地、吾郎。あなた達、本当に良い友達を持ったわね」

「……まあね」

「ああ」

帰りの車で口数が少ない大地達。

茂治が亡くなってからもう十年。すでに受け入れている出来事ではあるが、やはり帰りにはセンチメンタルな気持ちにもなるのだった。

「明日の準備はしてあるの?」

「大丈夫だよ」

「母さんも応援に行きたいんだけどね……」

「……仕事があるんだから仕方ねえだろ。決勝戦にまで行ったら応援に来てくれればいいよ」

この日、家に帰るまでは三人とも口を開くことはなかった。



「じゃあ行つてくるよ」

「なにも忘れ物ない？ 向こう着いたら連絡するのよ？ 変なもの食べちゃダメだからね。お腹出しっぱなしで寝るのもダメよ！ それからそれから……」

「だああああ！ 分かつてるよ！ いつまでもガキじゃねえんだから、自分の子供のこ
とくらい信用しろよ！」

「……だつてえ」

家を出る時間になつて、桃子は色々と言出し、それに我慢が出来なくなつた
吾郎がキレ出す。

大地はふふつと笑いながら、桃子と吾郎の仲裁に入る。

「まあまあ二人とも。母さんは一人で大丈夫？」

「……大丈夫じゃないわよお」

「……だろうね。吾郎、ちよつと荷物置いて」

「ん？ なんだよ？」

吾郎が荷物を置くと、大地は桃子と吾郎を抱きしめる。

「な——!」

「大丈夫だよ、二人とも。甲子園優勝したら帰ってくるから、母さんも少しだけ我慢してね」

「ううう……そんなことされたら、余計寂しくなっちゃうじゃないのよおお!!」

吾郎はいきなり抱きしめられたことを恥ずかしく思い、桃子は大地のぬくもりに堪えていたものが溢れて泣き出してしまった。

三人はしばらくそのまま動くことはなかった。

「それじゃあ行つてきます!」

「……いつてらっしやい」

ようやく泣き止んだ桃子を置いて家を出る二人。

これから聖秀学院高校は甲子園球場がある兵庫県へ向けて出発するのだ——

「吾郎っ!!」

—— たった一人を除いて。

「だ……だいち……？　おい、大地。うそ、だ……ろ……？」
そこには血だらけで倒れている大地君の姿があった。
突き飛ばされた吾郎は腰が抜けてしまったのか、座り込んだまま動くことが出来な
い。

「ぎゃあああああああ！　大地くん!!　大地くん!!」

「だ、大地さん！ しつかりしてください！ きゅ、救急車！ 早く救急車を!!」
「吾郎！ 何があつたんだよ!？」

その後、救急車が来て大地が病院に運ばれるまで、青ざめた表情をしたまま吾郎は一言も話すことが出来なくなっていたのだった。



「とりあえず命に別状はありません。倒れたときに頭を打ったせいで血が多く出てしまっていました。他に大きな怪我もなかったですよ」

手術室から出てきた医師が話した言葉である。

見送りに来ていた涼子、美穂、清水は本田家に向かっている途中で倒れている大地と座り込んでいる吾郎を見つけていた。

すぐに救急車を呼び、桃子にも連絡を入れた三人は呆然としている吾郎を無理やり救急車に押し込み、自分達も乗り込んだ。

その際に救急隊員に関係を問われた際、「（未来の）家族です!!」と声を揃えて言ったことを誰も責めることは出来ないであろう。

大地の手術中、病院へと青ざめた表情で桃子がやって来て、吾郎へ問い詰める。

「吾郎！ 一体何があつたの!？」

「……………だ、大地が……………死んで……………そんな、おとさん達も……………」

「吾郎!!」

「——ッ!」

桃子が吾郎の頬を思い切り叩く。

そこでようやく我に返つた吾郎は、周りを見回して今いる場所が病院だと気付く。

「こ、ここは……………そうだ! 大地は!! 大地はどうなつた!？」

「今、手術中よ! 一体何があつたの!？」

「大地が、俺を庇つて……………」

吾郎がポツポツとその時の状況を話し出す。

本田家を出た二人はいつもどおり野球の話ばかりしていた。

甲子園で優勝するだの、秋大会でも勝つて、選抜出場を決めるだのといった話だつた。

そう。いつもと同じだと思つていた彼らは後ろから迫つてくる車に気付いていなくなつた。

そして本当であれば、二人とも巻き込んだ車がそのまま立ち去り、病院へ運ばれた二人は確実に甲子園の試合に出場できなくなる。

その後、彼らがどういう状態になつたとしても、それは彼らの運がなかつたというだ

けであろう。

たまたま大地が茂治を思つて空を見上げなかつたら、そういう筋書きとなつていた。

しかし、何の偶然か大地は空を見上げる。快晴の空がとても心地よく、鳥の声や蝉の聲が聞こえるのがとても気分良かった。

その声を掻き消すように、何かが迫ってくる気配を感じた。

そこからの大地はもはや何も考えていなかった。

考えるより先に身体が動いていたのだ。

「吾郎っ!!」

吾郎を突き飛ばすと同時に、車に吹き飛ばされる大地。

そして、車が立ち去つたとほぼ同時に涼子達がやつて来たということだった。

「轢き逃げ……? な、なんで……なんで大地と吾郎が……?」

話を聞いた桃子はへたり込んでしまう。

吾郎も思い出ただけで吐き気を催してしまつていた。

二人は思い出してしまったのだ。十年前のあの日の出来事を。

茂治
家族を奪い去つた痛ましい出来事を。

そして、医師が手術室から出てくるまで、誰も一言も話すことはなかった。



「……ん？　ここは……？」

「だ、大地！」

その日の夜。大地が目を覚ましたとき、吾郎と桃子がすぐ横にいた。

涼子達もいると言い張ったのだが、せめて家族に事情を説明してくれることと、着替えやお風呂も行ってくるようにと桃子から諭されて一時間ほど前に帰っていた。

「吾郎……？　かあ……さん……？」

色々と混乱していたが、徐々に何があったのかを思い出した大地。

「怪我は、なかったか、吾郎？」

「……っ！　馬鹿、野郎！　お前が言うなよな……」

「ははっ……その様子なら大丈夫だったようだな。聖秀のみんなは？」

「先に甲子園向園こに行ってもらってる」

「そっか……」

大地は天井を見上げて薄く笑う。

(吾郎が無事で良かった。これで聖秀が試合を出来ないなんてことはない……から……)

ふと思ひ出したかのように吾郎の方を向く大地。

「お前はいつ向こうに行くんだ？」

「いつ行くって……大地がこんな状態で行けるわけがないだろ！」

吾郎の言葉を聞いて、大地はゆっくり起き上がる。

「……いててっ」

「お、おい！ 無理すんなって！」

「そうよ、まだ寝てなきや！」

「……そういうわけにはいかないんだって」

頭を押さえながら、大地は座っている吾郎は真剣な表情で見つめる。

「吾郎、お前は明日にでも甲子園向こうへ行け」

「だから——」

「お前がいなきや試合が出来ないだろうが……！ せっかくの甲子園なんだぞ、あいつらに観光と観戦だけして帰ってこいっていうのか？」

「でも——」

「甲子園で投げたくないのか？」

「……………」

大地の言葉に吾郎は黙ってしまった。

今まであれだけ甲子園に出ることを話していた吾郎にとって、甲子園のマウンドで投げたくないわけがない。

だが、それ以上に吾郎にとって大地は失いたくない存在なのだ。もちろん大地はその気持ちに気付いていた。

「いいから行つてこい。兄ちゃん命令だ。兄ちゃんの命令は絶対なんだぞ」

「……………」

「いいから行つてこい。兄ちゃん命令だ」

再度言葉を繰り返す大地。

ここまで意固地になってしまったら、誰が相手でも意見を変えるのは無理である。

吾郎はため息をつく、一言だけ答える。

「分かった」

次の日、吾郎は一日遅れで聖秀野球部に合流するのだった。

第九十話

へさあこの真夏の快晴の下、高校球児達が全国から甲子園球場に集まってきました！

八月某日。兵庫県にある甲子園球場では、全国から集まった各都道府県の代表校の生徒達が開会式に臨むべく、行進をしていた。

そこにはもちろん、神奈川県代表である聖秀学院高校野球部の姿もあった。

「お、始まったな」

入院中の大地は病室のテレビからその中継を見ていた。

そのそばには桃子、涼子、美穂の三人がいて、一緒にテレビを見ている。

「そういえば母さんの幼稚園ももう夏休みだっけ？」

「そうよ。だから毎日大地のところに来てあげるからね！」

「い、いや、それは……あ、はい。ありがとうございます……」

それは流石にやめてくれとお願いしようとした大地であったが、桃子の泣きそうな顔を見て何も言えなくなってしまう。

その横では涼子と美穂はこういうやり取りを見て、大地を落とす方法を学んでいた。

（やっぱり大地君には、年上の包容力的なものが必要よね）

（ああやって甘えるようにすれば大地さんも……あ、メモメモ！）

行進を終えて、開会式が始まる。

その間に各校の紹介をしているアナウンサー。

〈次は神奈川県代表の聖秀学院高校です！ 神奈川県はあの海堂高校が破れたということでも話題になっていましたね！〉

〈ええ、とはいえ聖秀学院高校が直接対決したわけではないので、海堂以上の实力を持っているかと言うと疑問ですけどね〉

〈ということとは、やはりそこまでもない？〉

〈ええ、そうでしょうね。高校野球は一発勝負。何十年もやっていればこうやって創部一年目の高校がラッキーで勝ち上がってくることもあるでしょう〉

解説の人は、聖秀がまぐれでここまで勝ち上がってきたと意気揚々と話していた。

挙句の果てには、「初戦でボロ負けするだろうから、早めに荷物をまとめて帰ったほうが良いのでは？」とまで言い出す始末。

それには大地ではなく、桃子達が憤慨していた。

「ちよつと！ 何よ、あの解説！」

「本当ですよ！ 何も知らないくせに！ ちよつと昔プロ野球で活躍したレベルで何でも知っているとか思ってるんじゃないわよ！」

「今は時代が違うんですーっ！」

「…………いや、その。廊下に声が響いてるから…………」

大地は叫ぶように怒りの気持ちをつちまけている三人を宥める。

彼がいるところは個室のため、同じ部屋に別の入院患者がいないのは幸いだったが、廊下まで聞こえるレベルの大声を出されるのも困りものだった。

(甲子園か…………出たかったなあ…………)

一歩引いた目線でテレビを見ていた大地は、本当であれば自分はあの場にいたはずだった。

それが幸か不幸か、自分ひとりだけが本田家近くの病院で過ごすこととなっていた。

(いや、でも吾郎を助けることが出来たんだ…………それだけでも良しと思わないとな！
贅沢を言うものじゃ…………ない…………)

「大地…………？」

「だ、大地君？」

「大地さん…………」

ふと大地の顔を見た桃子は思わず声を上げてしまう。

それに反応した涼子と美穂も大地の顔を見て驚いてしまっていた。

「…………え？」

大地も初めは何のことか分かっていなかった。

だが、自分の手に何か冷たい感触があつたのに気付いて下を向くと、自身の顔から水滴が落ちていたのだった。

(え……俺……泣いて、いるのか……?)

そこでようやく大地は自分が泣いているということを理解した。

なぜ泣いているのか分からず困惑していると、不意に抱きしめられる。

「大地……貴方は本当によく頑張つたわ。キャプテンとしても、お兄ちゃんとしても。だからってそんなに我慢しなくていいのよ。泣きたいときは泣きなさい」

「母さ——！」

桃子が優しく大地を抱きしめ、頭を撫でて慰めていた。

大地はついに堪えきれなくなり、自分の気持ち吐き出してしまふ。

「俺……俺……おかさんとおとさんが死んじゃってから、吾郎を精一杯助けようって……そのためなら別に自分なんてどうでもいいって思ってたつもりだった。

でも、でも……なんでかなあ? すごい悔しいんだよ。甲子園あの場に俺だけいられないんだよ……! なんて俺だけなんだよ……!

吾郎と、寿くんと、聖秀のみんなと一緒に甲子園で野球をしたかったんだ……!」

大地は桃子の胸に顔を埋めて、小学生のように泣いてしまつていた。

聖秀野球部の一員として、あの場に自分がいることが出来ないことが何よりも悔しかったのだ。

大地自身は今まで気付いていなかったのだが、吾郎を助けることが出来たことでその気持ちは更に高まっていたのだった。

「大地君……」

「大地さん……」

涼子と美穂も今まで見たことがない大地の様子にもらい泣きしてしまう。

そして、桃子と一緒に大地を抱きしめるのだった。



結局、聖秀学院高校野球部の初めての夏は、甲子園二回戦で姿を消すこととなった。相手は決して強くはなかった。しかし、彼らの精神状態は大地がいることでいつも以上に落ち着くことが出来ていたのだ。

その精神的支柱がいなくなってしまうことで、チームワーク自体にズレが生じてきてしまっていた。

それだけではない。精神的に最も追い詰められていたのは吾郎だった。自身を庇っ

たせいで甲子園に出ることが出来なくなった大地。

動揺で思ったところにボールは行かず、失投を重ねてしまい打ち込まれてしまう。そして、初めての甲子園に素人組は浮き足立ってしまった、エラーを重ねる。

その失点を取り返そうと他のメンバーも粘ったのだが、力及ばずだった。

彼らは帰りの新幹線でも終始暗い表情をしていた。

それもそのはずだ。実力で比べれば、決して負けていなかった。

そのことが彼らの頭の中で繰り返されていたのだ。

素人組は、自分達が浮き足立ってしまったせいで何も出来なかったことを悔やんでいた。

それはシニアで全国経験が無い田代も同じ。

動揺を見せていても、一定以上の実力を発揮出来ていたのは寿也、薬師寺、渡嘉敷、大場だけである。

その四人ですら、神奈川県大会ほどの力を出せていなかったのだ。

誰もが他の全員を責めることなど出来ない。だからこそ誰一人として口を開くことはなかったのだ。

それは顧問の山田一郎も同じであった。

(やはり私では力になれませんでしたか……こういうときに大地君がいてくれないとい

けないのですが、大地君ばかりに頼っていた弊害が出てきてしまったようです（山田は何か決心したような顔つきで新幹線の窓から外の景色を眺めるのだった）。



「はい、どうぞで」

聖秀が二回戦で敗北した日の夕方。もう少しで面会時間が終わろうとしていたときに大地の部屋のドアがノックされる。

桃子達は先程帰ったばかりだったので、何か忘れ物でもしたのかなと大地が思っていると、開けられたドアからは驚くべき人物が入ってきた。

「おや、元氣そうですね」

「……………何しに来たんですか?」

その人物は半袖のワイシャツにスラックスとクールビズの格好にいつもの眼鏡を掛けていた。

手にはビジネスバッグと紙袋を持っている。

「いえね、神奈川県代表の試合を今日見ていたら、大地君あなの姿がないものですからどうされたのかなと学校に問い合わせしてみたんですよ。そうしたらこちらに入院されている

ということじゃないですか。これは一大事だと思ひまして、帰りにお見舞いに來たのですよ」

「……………」

薄ら笑いを浮かべているその男は、お見舞いの品だと紙袋を近くの机の上に乗せると、大地の返事を聞くことなく本題に入る。

「車に轢かれたということでしたが、具合はどうなのですか？」

大地はその言葉で確信した。

(…………それが本命か。わざわざ自分で直接確かめないと気が済まないようだな)

心の中で舌打ちし、どう答えようか悩んでいたが、いつまでもその顔を見ているのもイライラすると思つたのか、素直に答えることにした。

「特に大した怪我でもなかつたですよ。避けたときに電柱に頭を打つて、切つただけですからね」

「…………ほう？ それだけですか？」

「ええ…………残念ながらね」

男は眼鏡の奥から鋭い眼光でベッドにいる大地を見下ろす。

大地も負けじとその男を睨み返していると、その時間が不毛だと思つたのか、男は再度薄ら笑いを浮かべる。

「ふふつ……大した怪我がないのであれば良かったです。秋大会は正々堂々と我々が勝たせてもらいますからね」

「……正々堂々と笑わせてくれますね」

誰がやったのかを分かっているぞというニュアンスで先程から話している大地。

しかし現時点で証拠は何一つない。それが分かっているからこそ、男は余裕の表情を崩すことはなかった。

「まあいいでしょう。では次は秋大会で」

そう言い残し、去っていくこうとする男を大地は呼び止める。

男は立ち止まるが、振り返ることはなかった。

「もう闇討ちは無意味ですよ。ケガしにくさをB・に上げといたので」
「……………」

男は大地が何を言っているのか一切分かっていなかったのだが、何も答えることなく病室を後にするのだった。

第九十一話

九月。神奈川県秋季大会。

結論から言えば、聖秀学院高校は準決勝で敗退した。相手は夏の大会決勝の相手だった帝仁高校。

大地はすでに退院をしていたが、大事を取って秋季大会は試合に出ることは許されなかった。

準々決勝までは渡嘉敷を中心に投手を回していたが、それも帝仁相手には通じず。攻撃も守備も中堅高校までであれば問題はなかったが、強豪校が相手では穴だらけであり、夏の決勝で敗戦投手となった石元相手に完璧に抑えられてしまった。

その勢いのまま、帝仁高校が決勝で海堂高校を破り、センバツ出場を決めたのだった。
(……帝仁に決まったか)

大地はテレビの電源を切り、ソファーに背中を預ける。

負けてしまったことに対しての悔しさはあったが、あの状態では勝つのは難しかっただろうと息を吐く。

そしてちらりと視線だけを横にズラす。

(あれから一ヶ月経つけど、ずっとあのままなんだよなあ……)

彼の視線の先には弟である本田吾郎が胡座をかいてうなだれていた。

吾郎は秋季大会一回戦で登板したものの、四球を連発して試合をぶち壊してしまうところであった。

このときは相手が弱小校だったため、逆転勝ちをすることが出来た。それからの試合は渡嘉敷が投手を務め、準決勝敗退という結果になっていた。

そんな吾郎に対し、誰も責めることはしなかった。

なぜなら甲子園でのときと同じく、全員が本来の力を発揮できていなかったからだ。た。

吾郎はそれが顕著になっているだけ。そのことで吾郎を責めるわけにはいかなかったたのである。

「吾郎、もうすぐ練習だぞ。そろそろ準備しないと」

「……………」

「……………おい、吾郎」

「ん？ あ、ああ。分かってる」

吾郎は覇気がない状態のまま、大地と一緒に用意を始める。

大地はまだ練習には参加できないが、全員の練習を見ることは出来るため、練習時間

には必ず顔を出していた。

(……動き出しているのはあの人だけなんだよなあ)

やはり大人は強しなのか、と大地は全員がより成長するためにはどうすればいいのか考えながら吾郎と一緒に家を出ていった。



「体調はどうですか、大地くん？」

「ええ、来月には練習に参加してもいいとのことでした」

「おお！ それは良かった！ ですが、来月ですと間に合うか微妙なところですね」

「何言ってるんですか。監督業は一生勉強ですよ、山田先生」

大地と顧問の山田は目を合わせて笑みを浮かべる。

だが、問題は目の前に山積みであった。

「差し当たり、彼らをどうするかが当面の課題でしょうかね？」

「ですね。まあそれに関しては俺に考えがあるので、今は山田先生が出来ることをゆつくり覚えていってください」

山田は大地に対して信頼をしているため、彼に考えがあると言うのであればそれを信

じて任せようと読みかけの本に視線を落とす。

今読んでいる本は、野球部の監督をするうえで学んでおくべき基礎的な知識の本であった。

夏の甲子園が終わり、神奈川に戻ってきた次の日。

山田は入院中の大地の病室を訪れ、謝罪とともに「顧問だけでなく、監督になるためにどうすればいいのかを教えてほしい」と頭を下げたのだった。

突然頭を下げられた大地は困惑したが、理由を聞き、それであればと了承する。それ以降、ずっと大地から野球の基礎はもちろん、監督業として覚えなくてはいけないことを必死に学んでいたのだった。

(この状況でチームの弱点に気付き、自分からすぐに動こうとできるのは大人だからというのもあるんだろうね)

大地は山田に対し、尊敬の念を込めて接していた。

原作では彼は顧問として動いていたものの、監督として何が出来たかという点、ほとんど何も出来ていなかった。

それは茂野をコーチとして招いていたことから明白である。

だが、現実の彼はそうではなく、自分自身で動こうとしていた。それは大地におんぶに抱つこの状態である今のチームが良くないと感じていたためだ。

大地がいなくてもここまで質が落ちてしまうのでは、聖秀野球部に未来はない。

そのため、少しでも大地の負担を減らすため、そして大地が卒業したあとの聖秀野球部が今よりも落ちることがないように精一杯サポートをしようとしたのだ。

甲子園とは選手にとつてだけでなく、顧問にとつても大きく成長させる場となつていった。

(元々生徒のために色々と考えてくれる人だつたけど、この人が一番に変わるとは思わなかつたよ)

山田に対しては微笑んでいた大地だったが、

(……本当に大丈夫かな?)

中学の部活動レベルにまで練習の質が落ちてきている光景を一ヶ月以上も見ている大地は、聖秀ナインに対して不安を抱かざるを得なかつた。

初めは誰かが気付いて、そこから変わっていくだろうと様子見をしていたのだが、全く変わる気配がない。

バッティング練習では大振りするだけで、先が見えない。守備練習ではポロポロとエラーして、お手玉を繰り返す。

そういう内容の練習を繰り返す彼らを単純に怒るだけなら誰でも出来るが、まだまだ

若い彼らを奮起させるには他の方法の方が良いと思つてゐる。

ため息を付きながらも、今は見守ることに決めて必要以上のことは言わないように努めるのだつた。



神奈川県厚木市。海堂高校二軍の拠点がある場所の一室にて。

部屋のドアをノックする音が聞こえる。

「はい」

「あたしよ」

「……どうぞ」

ドアを開けたのは海堂二軍トレーナーの早乙女泰造。そこで待ち構えていたのは、海堂二軍監督である早乙女静香である。

「兄さん、どうしたの？」

「あら、静香つたら。あたしのご事は姉さんって呼びなさいよ」

「……ふざけているなら出てつてくれる？ 私も暇じゃないのよ」

いつものやり取りではあるが、静香は立場的にも忙しいことが多い。

今年の一年生が夢島から二軍へと合流していたため、この時期は全体の調整でいつもより忙しくなっていたのだった。

その様子を察した泰造は「ただのお茶目じやないのよお」とふざけつつも、次には真面目な顔に戻った。

「……例のアレ、ようやく調べがついたわよ」

「——!? どうだったの!?!」

静香は椅子から立ち上がり、泰造へと迫る勢いで向かっていく。

「ちよつと落ち着きなさいよ。そんなに来なくても答えは変わらないんだから」

「……そうね。で、どうだったの?」

泰造に窘められて、落ち着きを取り戻した静香は冷静に泰造に尋ねる。

「本田兄弟の件、江頭は動いていなかったわ」

「……え? どういうこと!?!」

静香が泰造のまさかの回答に対し、詳細の説明を求める。

「そのままの意味よ。彼らのひき逃げに江頭は関与していなかったわ」

「じゃ、じゃあ一体誰が本田兄弟を襲ったというのよ?」

「近いうちにニュースになると思うけど、飲酒運転をした男が本田大地くんを轢いて、怖くなって逃げ出したというのが真相だったわ」

大地達が甲子園に向かう前日の夜。そこから朝まで浴びるようにお酒を飲んでいた男。

泥酔に近い状態で店を出た男は家に帰ろうと車に乗り、深酒をしていたことと朝まで寝ていなかったことから飲酒状態で居眠り運転をしまつていた。

そして大地を轢いたあとにその事実^{じじつ}に気付^{きづ}き、そのまま逃げてしまつたということだつた。

「そ、それじゃあ私達が江頭を尾行したときに会つていた人物は誰だつたのよ!」

「彼は全く関係ない人物だつたわ。……今回の件^{けん}に關してはね」

早乙女兄妹は、甲子園に向かう当日に大地がひき逃げされたと聞いて、すぐに江頭の仕業ではないかと当たりを付けていた。

そして密かに色々なルートへ独自に依頼をして、今回の件を調べてもらつていたのだつた。

その結果がこれであり、後日大地を轢いた男は逮捕されるのだが、それはまた別のお話である。

「とりあえず本田大地くんも無事復帰できそうだし、海堂^{うみどう}が關与してないと分かつただけでも不幸中の幸いだわね」

「……………兄さん、さつき今回の件に關してはと言つていたわよね?」

「……ええ」

「じゃあ何に関係があるというの？」

「江頭が秘密裏に会っていたあの男は——」

この話の後、静香と泰造は誰にもバレないように裏で動き続けようとする。

そして海堂内で信頼できる人物を仲間に引き入れるために少しずつ動き始めるのであった。

第九十二話

大地が練習に参加するようになってから一週間ほどが経過したある日。彼は夜中に一本の電話を掛けていた。

『もしもし』

『私です。本田大地です』

『——！ お、驚いたな。君がまさか電話を掛けてくるとは……』

『お久しぶりです。ちよつとお願いしたいことがあります——』

その電話の内容に、電話先の主は戸惑つたような様子であつたが、大地が理由を説明すると素直に了承する。

『では来週にでも向かわせますので、あとはお願いします』

『ああ、分かつた。だが、彼が素直に従ってくれるかね？』

『素直というには難しいとは思いますが、まあなんとかなりますよ』

大地は樂觀的な部分を見せつつ電話を切り、約束の来週に向けて準備をし始めた。



「ア、アメリカくく!?!」

本田家に朝から大きな声が響き渡る。

「うん。アメリカに行くんだよ、来週」

「誰が?」

「吾郎が」

「いつ?」

「来週」

「なんで?」

「なんでも」

吾郎と大地は一言の応酬を続ける。

吾郎にとつては寝耳に水なのだ。本当ならもつと混乱しても良いはずだ。

そしてもう一人、状況を把握できていない人物がいた。

「ちよつとちよつと! 私も何も聞いてないんだけど!?!」

「母さん、事後報告でごめん。吾郎が来週からアメリカに行くことになったから」

「なったから……じゃなくて! お金はどうするの!?! 向こうに行くお金は? 滞在の

お金は!?! というか、どれくらい向こうにいるの!?!」

「お金は大丈夫だから心配しないで。向こうにいる期間は……吾郎次第かな」

「お金は心配いらないうって……学校はどうするの!？」

「それも大丈夫。理事長に話して、留学にしてみたらから」

大地が全て対応は済んでいるから大丈夫と言いつ切る。

桃子と吾郎は明らかに狼狽していた。

なぜならここまで大地が強引に話を進めたことがなかったからだ。

たまに破天荒なことをするというのは分かっている——海堂や他の強豪校に行かず

に、元女子校の聖秀に行ったことから明らかである。

桃子は混乱していたが、大地の顔を真剣に見つめる。

大地もふざけているわけではないと言わんばかりに、桃子の目を見続ける。

「……はあ。分かったわよ。大地あなが言うのだから、吾郎には必要なことなんでしょ？」

「うん……ごめん……」

桃子はため息をつくくと、諦めたかのように吾郎のアメリカ行きを了承する。

「いや、俺は行くなんて言っていないからな!？」

「いや、お前はアメリカに行くんだよ」

「だからなんだよ!？」

「……………」

吾郎だけは納得しておらず、桃子が受け入れても反発していた。そのまま大地とにらみ合いが続く。

しばらくにらみ合いが続いたあと、「チツ」と舌打ちをした吾郎がポケットに両手を突っ込んだまま家を出ていった。

「……………ねえ、大地？」

「……………めん、母さん」

桃子に優しく話しかけられた大地は俯きながら謝罪の言葉を口にする。

彼女はそつと大地を後ろから抱きしめる。

「あなたが優しい人なのは分かってる。それも私や吾郎に対しては誰よりもね」

「……………」

「でもね、言わなきゃ、言葉に出さなきゃ伝わらないものもあるのよ。親子だって、双子の兄弟だってそれは同じ」

桃子の言葉を聞いてハツとした顔をする大地。

そして彼女は彼からそつと離れる。

「……………どうしても言いたくないのであればこれ以上は聞かないわ。でもどうしても言い

たくなつたらいつでも言いなさいよ」

そう言葉を残し、キッチンへと戻っていく桃子。

少しの間俯いていた大地は、両手を軽く握りしめると何かを決心した顔をしてそのまま家を出ていく。

冷蔵庫に背中を預けていた桃子は、大地が出ていくのが分かり、「……まったく仕方ない子達なんだから」と呟く。

「ね？ 茂治さん……」

桃子は両手を胸に置きながら、優しげな笑みを浮かべるのだった。



大地は家を出たあと、一直線に目的地へと走っていた。

彼には分かる。大切な弟がどこにいるのか。そこに向かっているだけだった。

（おかしな話だよな。どれだけ離れていたつてどこにいるか簡単に分かるほどの兄弟なのに、言葉が足りないだけでここまで分からなくなるんだもんな）

自宅から少し離れた公園。そこに吾郎はいた。

「……吾郎！」

「……………だ、大地!？」

息を切らした大地を見て驚きの表情を隠せない吾郎。

いつもであれば近付いてきただけで分かるのにも関わらず、大地が近付いていることに一切気付いていなかったからだ。

「な、なん——」

「——ごめん!」

「なんだよ」と言おうとしたところを大地の謝罪によつて遮られる。

「……………なんだよ……………なんでだよ……………」

吾郎は何度も同じ言葉を呟く。

「なんで俺が…………俺だけがアメリカに行かないといけないんだよ! 俺は、俺はもう必要ないってことなのか!？」

吾郎は不安を覚えていた。いきなりアメリカに行けと言われたことに。

お前に聖秀野球部の居場所はなくなくなったと、そう言われている気がしていた。

「秋大会……………だけじゃない。夏の甲子園も俺のせいで負けたのは分かっているさ。でも、それで、それだけで俺はもう聖秀野球部に必要ないって言うのか……………」

吾郎は誰よりも責任を感じていた。

自分を庇って怪我をした兄の分も絶対に活躍してやると思っていた、そのはずなのに

何も出来なかった一年目の夏。

そして新人戦。自分のせいで負けてしまった甲子園の借りをここで返すのだと意気込んでいた。

だが、彼の頭にいつも浮かぶのはあの光景。

兄と、大地と一緒に見た茂治むつじの最後の姿。

事故に遭った大地も自分を置いていってしまうのではないかと、そう考えると何も出来なくなってしまうていたのだった。

「……試合に負けたのはお前のせいじゃないさ」

大地は吾郎に優しく語りかける。

吾郎は俯いた顔を上げて大地を見る。

「前から言ってるだろ？ 試合に勝つのは全員のお陰。負けたら全員の責任だ」

「——でも俺が打たれなかったら……!」

「その時はお前が打たれた分を俺達が打てばいいだろ？」

「——ッ!」

二人は目を合わせたまま、だが先程のにらみ合いとは違う雰囲気を感じていた。

「……俺も吾郎になんて声を掛けていいか分からなかったんだ、逆の立場だったら俺も何も手に付かなくなるからさ。おとさんやおかさんのようにお前を失ってしまうん

じゃないかって」

「……………」

「でもそれじゃダメなんだよな。俺らは兄弟なんだから、そういうときこそお互いに声を掛けなきゃいけないんだよな」

「大地……………」

大地は右手を自分の胸に当てる。

「見てくれ、俺はもう大丈夫だ。もうなんともないんだ」

「……………」

「……………とは言っても、お前の心は簡単に受け入れられないよな。だからお前にはアメリカに行つてほしいんだ」

「え……………」

疑問の声を上げる吾郎に大地はゆっくりと訳を説明するのだった。



「じゃあアメリカに行くのね？」

「……………ああ、俺はアメリカに行つてくる」

家に戻った大地と吾郎は、椅子に座って桃子に事情を説明する。

二人の顔を見た桃子は安心した顔とともに笑顔になる。

「そっか。じゃあ気を付けて行ってきてね」

「……つてなんか母さん嬉しそうじゃねーか？」

「そんなことないわよ。吾郎がアメリカに行っちゃうのは寂しいわよ」

「じゃあなんでさつきより元氣なんだよ？」

「そんなの決まつてるじゃない……吾郎が元氣あなたそうな顔になったからよ」

満面の笑みでそう答える桃子に、恥ずかしそうな顔をする吾郎。

ようやく少しずつ以前の家族に戻ってきたと大地も嬉しそうな顔をする。

「さつきも言ったけど、向こうに着いてからの生活とかは心配しなくていいからな。空港でスリにだけは遭うなよ？」

「分かっているって！ それだけ言われりゃスリなんて遭うわけねーだろ！」

吾郎はムキになって答えるが、明らかかなフラグであると感じた大地はほとんどの荷物を直接送ることに決める。

そして大地のその選択は、アメリカに渡った吾郎にとって非常に助かるものとなったのだった。

第九十三話

「吾郎がアメリカに!? な、なんでよ!？」

登校中、清水は吾郎がアメリカに留学することを聞いて、バスの中で大声を張り上げた。

周りの視線に羞恥を覚え、声の音量を下げて再度理由を問う。

「……いきなり過ぎない? なんでか理由くらい教えてよ」

「ちよつと、な」

「ちよつとつてなによ?」

「あゝ! しつけれな! もうなんでもいいじゃねーか!」

あまりにもしつこく清水が聞いてくるため、先程の清水と同じくらいの音量で言い返す吾郎。

言いたくない理由は、単純に格好悪いと思ったからである。

その様子を大地と寿也はくすくすと笑いながら見ていた。

「大地もなによ! 教えてくれないの!？」

「まあ、吾郎が言いたくないって言っているんだから、俺から言うことはなにもないよ。

短期間の留学のようなものだから、そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「……なっ！　べ、別に心配なんてしてないし！」

もちろん寿也には説明済みであり、野球部のメンバーにも今日の部活開始時に簡単には説明するつもりである。

実際に寿也はもちろん、野球部メンバーの誰にも反対されることもなく、受け入れられるであろうと思っていた。

それはここ最近の吾郎の様子を心配していたからこそその予測である。

心配していたのは清水も同じだが、ここは吾郎が言いたくないと言いつ張っているので大地が無理に言う必要もないと決めていた。

（あくあ、拗ねちゃったじゃん。俺も薫に言わないことは反対しなかったけど、あとでちゃんと機嫌を取れるのかな？）

清水はバスの中で不貞腐れてしまい、そっぽを向いてしまう。

さすがにこれには大地も寿也も苦笑いを浮かべていたが、吾郎の頑固さも知っていたので、余計な口は挟まないようにしていた。



それから吾郎がアメリカに行くまでは早かった。

荷物を吾郎の代わりに送り、何度もスリや置き引きには気を付けろと言うが、彼の性格上、確実に合うことは分かっている。最悪が起きても大丈夫だと思っっている大地。

「ちゃんと着いたら連絡するのよ？」

「分かったってば」

「忘れ物はない？」

「ないよ」

「置き引きとかスリには——」

「だー！！ しつけれーっての！ 大地からも何度も言われてっから大丈夫だって言ってるんだろ！」

「だって、だって……ううううう」

空港で吾郎のアメリカ行きを心配する桃子。

あまりにもしつこく言ってくるため、少しうっとおしくなったのか雑な対応をしたところ、桃子は泣き出してしまった。

それに慌てた吾郎は、「き、気を付けちゃう！ 電話も毎日しちゃうって！」と良く分

からないことを言っつて桃子を慰めようとするが、桃子は吾郎としばらく離れ離れになる

のが寂しいだけなので、何を言っても無駄である。

「向こうでやっていけそうか？」

「……何言ってるんだよ。大地お前が行けって言ったんだろ」

その言葉に大地は「そうだったよな」と薄く笑う。

「俺が戻ってきたとき、腑抜けた実力をしてんなよ」

「それはこつちのセリフだよ。俺らの成長ぶりに度肝を抜かれんなよ」

大地と吾郎二人は拳を前に出して合わせながら笑う。

これはお互いのための一時的な別れなのだと分かっているからである。

「俺がいない間、母さんのこと頼んだ」

「ああ、お前も向こう行って迷惑掛けないようにしろよ」

「ああ……って滞在先がどこだかも聞いてねーっつーの」

大地はアメリカでの滞在先がどこなのかを吾郎に伝えていない。

少し考えれば分かることではあるのだが、それは向こうに着いてからのお楽しみだ
だけ伝えている。

(初めは良いんだけど、次の滞在先で揉めたりしないかな……？ 心配だ……)

一抹の不安を抱えている大地ではあるが、吾郎ならなんとかなるだろうと思っ
てる。

そして必ず完治させて聖秀に戻ってきてくれると信じていた。

「じゃあ……行ってくる」

「ああ」

「本当に気を付けてね」

搭乗手続きの時間も迫ってきたので、吾郎は最後の挨拶をして手続きに向かおうとしていた。

そのとき背後から吾郎を呼ぶ声が聞こえる。

「ん？ おお、清水か！ 来てくれたんだな」

「……………」

清水は吾郎の前まで来るが、顔を俯かせて何も言わない。

その後ろでは桃子がきやーきやー言いながらはしゃいでおり、そんな桃子を見て苦笑する大地。

「……………」

「……………来てくれてありがとな。もう時間がないから行くぞ」

その言葉を聞いて清水は少し赤らめた顔を上げるが、何も言えずまた俯いてしまう。

吾郎はそんな清水を見て、わずかに笑う。

「せっかくなんだから何か言ってくれよ」

「……う、うん。あのね、えっと——」

勇気を出して再度顔を上げたとき、目の前に吾郎の顔があり驚く清水。

吾郎は驚いた顔をした清水を見て口を開く。

「何も言わなくてごめん。戻ってきたら必ず話すから。……薫」

「——!?! う、うん。気を付けて行ってきてね。……吾郎」

少し照れくさそうに頬を掻く二人。

(これでまだ付き合っていないんだもんなあ。なんだかおかしな話だよ)

二人に言い寄られているお前が言うなということでもあるが、大地は吾郎と清水の甘酸っぱい微妙な距離に青春を感じていた。

実は登校中のバスの一件以来、一切話していなかった二人だが、吾郎がアメリカに行ってしまう前に仲直りが出来たようである。

その後、飛行機が出発したのを見届けた三人は桃子の運転で自宅まで帰ったのだが、途中でガソリン切れでエンスト起こしてしまったのは余談である。



吾郎がアメリカに旅立ってから、聖秀野球部の結束は以前より深まっていた。

そして、ポジションも吾郎がいなくなったことで若干の変更が入っていた。

ピッチャーは大地と渡嘉敷。登板しないときは、大地がショートで渡嘉敷がセカンドを守る。

ライトを守っていた内山が、大地と渡嘉敷の登板に合わせてショートとセカンドの守備につく。

これに関しては、素人の内山にとつてはそれなりに大変なのではという話にもなったのだが、本人が了承したこと、実際に練習試合で試してみたところ、内山の本来の器用さと大地、渡嘉敷のフォロワーもあり、問題なく機能できていた。

そして控えていた宮崎がライトの守備について、現メンバー九人全員である。

「ライト！ 行つたぞー！」

「お、おおー！」

吾郎がいなくなつたことでレギュラーとなつた宮崎がライトに飛んだフライをキャッチして、試合終了。

聖秀野球部メンバーの中では一番運動が苦手な宮崎。しかし、今までの吾郎の辛くても懸命な姿を見て、彼がいなくなつてからより一層練習に打ち込むようになっていた。

そのかいもあつてか、まだ野球を始め、一年も経っていないにも関わらず、中学レベルで野球が出来るくらいにまでは成長していた。

これが一年生最後の春休みでの練習試合の光景である。

もうすぐ新入生がやってくる。創部一年目にして甲子園出場を果たした聖秀野球部には注目度も高まっており、各シニアや軟式野球部での実力者達が見学にも来ていた。

(このメンバーなら俺も一年目からレギュラーになれるポジションはある！)

見学に来ていた中学生はほぼ全員がそう思っていたし、創部一年の野球部であればそこまで上下関係も厳しくないだろうという気持ちを持った男子生徒もいた。

(うーん、良い傾向ですね。大地君たちの世代のあとが心配だったのですが、今のメンバーに野球未経験者がいることで、即レギュラー入りを狙う実力派の新入生が入ってきてくれそうです)

監督で顧問の山田は見学者を見渡して笑みを浮かべる。

野球部を作って有名になれば、男子生徒の入学も見込める。共学になったばかりの聖秀学院にとって、野球部の甲子園出場というのはかなりの広告となっていた。

そして、野球部を作るからには、大地世代で終わるのではなく、そのあとも強豪と言われるだけの実力をキープするために、実力のある新入生の入学は大歓迎である。

吾郎がいつ戻ってくるか分からない状況のため、来年の夏大会がどうなるのか、その次の選抜は？ といったこともあるのだが、まずは地盤固めを行おうと考えている山田。

そのために大地が怪我から復帰した頃、大地にお願いをして監督業の勉強を始めていた。

今までは大地が代わりにサインを出していたのだが、それでは昨年の夏のように大地が離脱してしまったときに指示を出す人間がいなくなってしまうためである。

山田は秋から春にかけて勉強と実践を行い、今では大地のサポートは少しだけで、ほぼ全ての試合で指示出し等を行うようになっていた。

質に関してもメンバーから不満も出ることもなく、そのことからきちんと出来ているのだらうと自信を持ち始めている。

まだまだ学び、経験を積むことは必要ではあるのだが、そればかりは時間を掛けていく必要があるので仕方ないことである。

そして、聖秀野球部の二年目が始まる。

第九十四話

聖秀学院高校野球部二年目。春大会を大地と渡嘉敷の二枚看板で乗り切り優勝してシード権を獲得すると、その勢いで夏大会予選でも優勝し、二年連続夏の甲子園出場を決める。

秋大会で海堂を破った帝仁高校は、選抜高等学校野球大会で決勝まで進む快挙を見せ、夏大会予選でも再度海堂高校を破り春夏甲子園連続出場が期待されていたのだが、決勝で聖秀高校に破れ、秋のリベンジを果たされてしまった。

実は春大会でも破れていたため、公式戦では三勝一敗と聖秀が勝ち越していたのだった。

聖秀野球部二度目の夏の甲子園は準々決勝で敗退した。

しかしながら、彼らの顔つきは晴れていた。それもそのはずだ。去年は動揺したまま自身の力を存分に発揮できていなかったからだ。

負けてしまったことに関しては何しいが、来年こそは必ず優勝をすると心に誓うことでチームの結束力も上がっていた。

そして、今の聖秀に足りないものが浮き彫りとなる。

一年生が入学・入部してきたため、それなりに人数が集まっているので大地と寿也、元海堂特待生三人組を中心にチームとしてのレベルは上がっていた。

しかし、そんな彼らでも全国大会に出場すると優勝まであと一步足りない。

何が足りないか——それは投手力だった。

大地や渡嘉敷がピッチャーをしているとはいえ、それだけで勝ち抜けるほど甲子園は甘くない。

後半に行けば行くほど、どうしても疲れから安定感が落ちてしまうのだった。

あと一人。大地並みの実力者があと一人いるだけで、甲子園優勝に手が届くのに、と現二年生のメンバーは思っていた。

一年生も頑張つてはいるのだが、やはりまだ中学レベルから抜け出せておらず、成長には時間が掛かる。

そんな不安な中、二回目の秋大会が始まる。

秋大会の決勝も帝仁高校対聖秀高校で行われ、5対2で聖秀高校が秋大会を優勝し、初のセンバツ出場を決める。

昨年は吾郎が乱調してしまい、センバツ出場を逃していたため初出場に校内は喜びの声で溢れていた。

しかし秋大会後、吾郎がアメリカへと渡ってから丸一年が経っていたが、彼はまだ

戻つて来ていない。

たまに連絡があり、少しずつ良くなっていそうだったが、大地の予想以上に心にダメージを負っており、もう少し時間が掛かるといふ連絡が来ていた。

(二年前にアメリカへ行くことを強行していなかったと思うとゾツとするな……)

大地は心の中でそう思っていたが、口に出すことは決してなかった。

今の彼に出来ることは、吾郎が無事に戻つてくることを祈ることと、それまでチームを徹底的に鍛え上げることである。

幸いにも聖秀野球部顧問のステイブ・テイモシーこと山田一郎が監督として十分に育ってきたこともあり、大地の負担はかなり減っていた。

そして時は更に過ぎ、三月の選抜高等学校野球大会。

初出場を決めた聖秀野球部は夏の大会よりも良い結果を残すべく奮闘し、彼らは準決勝進出を果たした。

しかし、そこで投手力不足がまたも響いてしまい、敗退してしまう。

大地は焦っていた。

薬師寺、大場、渡嘉敷を海堂から引き抜き、元々野球に興味がなかった藤井、内山、宮崎、そして野球をやめていた田代を引っ張り込んでおいて、自身の投手力不足のせいで甲子園での優勝が出来ていないことを。

だが、それ以上に聖秀野球部を信じてもいた。

そしてみんなの力になるためにステータスをCからBランクへ上げようかと何回も思っていた——しかし、高校生時は基礎能力値をCからB以上に上げるときのポイントが大幅に増加する——が、必ず彼が間に合ってくれるであろうと信じてそのままにしていた。

そのヤキモキした状態のまま聖秀高校三年目の五月を迎え、ついに待望の時が訪れた。



それは一年生が二年生へと進学し、新一年生が入学、そして昨年度までの野球部の成績を見て入部した新一年生が部活に慣れてきた頃であった。

「そろそろかな!?!」

「んー……そうだね。もうすぐ到着予定の時間だね」

「一年半ぶりだもんねえ。大地はもう男性って感じになつてきたけど、あの子はきちんと成長しているかしら?」

「大丈夫だよ……たぶん……」

成田国際空港。そこに桃子と大地はある人物の到着を待っていた。

約一年半前に単身アメリカへと渡った人物――

「よお。久々だな」

「あ、吾郎よ！　ねえ大地、吾郎よ！」

「ああ、久しぶりだな」

大地の袖を引つ張りながら久しぶりの息子との再会に興奮する桃子を横に、大地と吾郎は同じような落ち着いたテンションで挨拶を交わしていた。

（身体付きは……大丈夫そうだな。あとは精神的に治ったのただけけど……）

そのとき吾郎が身体を両手で抱きながら少し引いた顔をした。

「だ、大地……久しぶりに会って俺の身体を弄まさぐるような目で見るなんて……まさか……！」

「……はあ。もう少し大人になったかと思つたら、全然成長してねえじゃんかよ」

苦笑いで返す大地に「じよ、冗談だよ！　アメリカンジョークだつて！」と意味が分からないことを言っていたが、これはこれで吾郎らしいかと大地は笑っていた。

「冗談はともかく、きちんと治してきたんだらうな？」

「……ああ。オリバー先生からはお墨付きを貰つてるよ。聖お秀野球部前こそ、ちゃんと練

習をして実力を上げてるんだらうな？」

「それはこつちのセリフだ。物足りないレベルのままだったら、夏大会でうちのベンチすら入れてやらねえからな」

「……へっ！ 任せろってんだ！」

大地と吾郎は笑いながら軽口を叩き合うと、話に入れてもらえなくて拗ねていた桃子を慰めつつ、自宅へと帰って行つた。

その日の夜は吾郎の帰国パーティーと称して、桃子の豪勢な手作り料理を振る舞い、吾郎も「やっぱり母さんの手料が一番だな！」と喜びながら何度もお代わりをして舌鼓を打っていた。

この日は金曜日で週末だったが、大地の勧めもあつて吾郎は土日を野球部の練習に参加せずに時差ボケを治すために自主練と休みに充て、週明けから学校へ復帰と同時に野球部への練習に参加することになった。



ここから三度目の夏の大会が始まるまで、吾郎にとってはひと悶着が起こる。

それは二年生以下、下級生たちのほとんどが吾郎の野球部復帰に疑問を持つていたた

めだ。

一部の生徒は違っていたが、もうすぐ夏の予選が始まる五月に三年生が急に野球部に
入部してきたようなものだ。

そして急に投手として一軍の練習に参加する——このときの聖秀は一軍と二軍に分
かれて練習が出来るだけの人数が集まっていた——ことに、良い顔をしない者が少な
からずいた。

下級生にとってエースはキャプテンでもある大地であり、二枚看板として渡嘉敷がい
たお陰でセンバツではベスト四に入れているのだ。

大地の双子の弟とはいえ、この時期に急に入ってきて背番号を一枚奪っていくのは許
せなかつたのだ。

二年生は今の三年生であればレギュラーを奪える者もいると思ひ入学しているし、一
年生も初めての夏大会でレギュラー、もしくはベンチ入りを狙えるのではとも思ってい
る実力者が入部しているので、想定外のライバル出現に戸惑っていたのもあるのだろ
う。

彼らは三年生素人組の藤井、内山、宮崎に対してですら敬意を持つて接しているのに
も関わらず、吾郎に対してはやや冷たい、もしくは完全に無視をする者ですら現れ、し
まいには大地や寿也、薬師寺達に吾郎のことについて疑問を訴え出るものさえいた。

三年生は全員吾郎の今までの実力を分かっているため、その訴えを一笑に付しており、「試合が始まれば分かる」と言って一切受け入れなかった。

吾郎も初めは無視されたり、冷たくされることに「あらく……僕ちゃん何かしたかな……？」と冷や汗をかいていたし、清水も話を聞きつけて吾郎のことを心配していたのだが、彼は大地の話を聞いて納得をした。

結局は実力で分からせるしかないのだと悟った吾郎は、直近で行われる練習試合で出場するための準備を淡々と進めることにしたのだった。

吾郎が復帰してから二週間後の土曜日。

この日は待ちに待った聖秀の練習試合である。対戦相手は去年の埼玉県夏大会ベスト八に残った高校。

吾郎が先発で出場をし、他のメンバーは吾郎の復帰を快く思っていなかった下級生で固められた。

「嘘だろ……？」

「化け物かよ……」

「あんな人相手に対抗心むき出しで喧嘩売ってたのかよ……」

吾郎は昨年地区予選ベスト八の高校相手に完全試合を達成。

それも吾郎のボールに触ることが出来た打者はただ一人としていなかった。

青い顔をしていたのは聖秀野球部の一、二年生だけではない。相手の高校の野球部員は泣きそうな顔をしていた。

「ふん、これであいつらも少しは大人しくなるだろう」

「そもそも大地つちがあれだけの選手なのに、吾郎あづまが大したことないわけないでしょ」

「……これでもようやく揃ったな」

薬師寺、渡嘉敷、大場の会話は誰にも届いていなかったが、これは三年生の誰しもが思っていたことだ。

練習試合までの二週間で紅白戦などをすれば早く吾郎の実力を認めてもらえたはずなのだが、吾郎の要望もあつて練習試合までは何もしないことになっていたので、少しだけ彼が認められるまで時間が掛かっていた。

「お疲れ。ナイスバツティングだったじゃねえか」

「あ……ありがとうございます」

試合後、吾郎は出場していた選手一人ひとりに声を掛けていた。

吾郎曰く、「一緒に試合をした方が仲良くなれただろ？」ということだった。

そして紅白戦より練習試合のほうが、緊張感があつてより良いという考えである。

結果として吾郎のことを認めるきっかけとなり、夏大会までの練習で問題が起こることもなかった。

甲子園優勝を目指すためのピースが揃い、聖秀野球部は万全の体制で創部三年目の夏大会に臨むのであった。

第九十五話

聖秀高校野球部三年目の夏の予選。吾郎にとっては二度目、そして最後の大会である。

そして聖秀高校はNPBスカウトにとって注目する高校であり、初戦から何球団か見に来ていた。

(なんだ、今日は大地くんが投げないのか……。ん？ 本田……。吾郎……。?)

本日先発する投手が大地でないことに落胆のため息をついたスカウトたちであったが、先発投手の名前を見て大地と同じ苗字であることを不思議に思う。

そして二年前——大地達が一年生のときのことを思い出していた。

(そういえば、本田大地には双子の弟がいたな……。確か二年前の夏の甲子園で投げて以降、登板しているのを見たことがないが……。故障か何かで今回復活したのか……。?)

大地のスペックについては疑いようもないほど注目しているスカウト達。

その弟である吾郎に関しては一年生の甲子園でのデータで止まっていたが、大地の弟なのであれば注目する価値があるのではないかと頭の片隅に置いて本日の試合を観戦することにしたのだが——

(な……なんてことだ……本田吾郎……彼は本田大地と同じスペックの持ち主だ)

(さすが双子といったところか！ わ、私達の球団に欲しいぞ！)

(これは帰ってすぐに首脳陣に知らせねば……！)

吾郎のピッチングを見たスカウト達はいそいそと帰り支度を始めて、本田吾郎という名前を各球団のトップに知らせるべく急ぎ帰路についた。

それもそのはずである。本日の吾郎は五回コールドで打者を一人も罫に出すことなく試合を終えていたのだ。

球速も大地のそれを超えており、二年間どこで何をしてきたのかだけは気になつていたのだがそのような些末なことはすぐに忘れられるほどに彼のピッチングは素晴らしい内容であつた。

本田吾郎——彼の公式戦復帰試合は各球団で知られることとなり、見に来ていなかった球団のスカウトは乗り遅れてしまったことに首脳陣たちより叱責を浴びることとな

る。

聖秀高校はシードだったため次は三回戦になるが、三回戦、準々決勝と渡嘉敷と大地が危なげなく抑える。

そしてローテーションとして吾郎が回ってくるであろう準決勝。

対戦相手はこの三年間で一番試合数が多く、野球部設立当初から聖秀高校がお世話になっている帝仁高校。

吾郎が復帰してからは接触がない両校であったが、ここ最近の海堂高校の落ち目具合を見るにこれが実質の決勝と言っても過言ではないと神奈川県在住の高校野球ファンは語っていた。

そして神奈川県大会決勝とも言える準決勝が今始まる。



「ストライク！ バッターアウト！ ゲームセット!!!」

吾郎のボールが寿世のミットに収まり、試合終了のコールが出される。

聖秀野球部はマウンドに集まり喜びつつ、大地に促されながら整列するためにホームへと向かう。

「15対0で聖秀高校のゴールド勝ちです」

「ありがとうございます!!」

「つした!」

結果は五回ゴールド勝ち。

吾郎は参考記録ながら、またしても完全試合をしてしまう。

春大会までは二校にそこまでの実力差はなかった。

聖秀高校が勝ち越していたとはいえ、ここまでの大差が付くことはなく、どっちが勝つてもおかしくはない試合であった。

しかし吾郎が戻ってきてからの聖秀高校はこれまでと全くと言っていいほど違っていた。

絶対的なエースの存在。それだけでここまで結果を変えてしまっていたのである。

内から見ても外から見ても明らかに聖秀高校の雰囲気はこれまでと異質であり、対戦しているとそれだけで勝てないと思わせるだけの迫力があつた。

そして、監督となつた山田の采配も春大会から芽を出しており、今大会までに更に磨きがかかつていた。

これまで指示は大地が出しており、山田に変わつてからも大地が指示を変えることもあつた。

しかし、春大会と今大会では一度も大地は口を出していない。

それは山田が成長し、大地がそれを信頼したこと、の証拠であり、そのことが山田の自信に繋がって今回の結果をもたらしていたのである。

「いやあ、あれだけ手こずっていた帝仁高校にまさかコールド勝ちするとはなあ！」

「本当だよな！ 本田先輩が復帰してから勢いと安定感が出たっていうか、聖秀うっちってこんなに強いんだなって思ったわ」

「あ、お前あれだけ『エースは大地先輩以外認めない！』とか言ってたくせによ」

下級生達が帰りのバスで口々に吾郎のことを褒めていた。

上級生はその話を聞きながら「当たり前だ」という顔をする者もいれば、大地や吾郎のように軽く笑って喜びを見せる者もいた。

「決勝は……ついに海堂だね」

「ああ、今までは戦う機会がなかったが、ようやくあいつにギャフンと言わせることができるかと思うとワクワクするぜ」

寿也と吾郎は決勝で当たる海堂高校の話をしていた。

しかし大地は気持ちが高ぶっている彼らをよそに、内心は不安でいっぱいであった。

（江頭のことだ……決勝だからとか気にせず俺らを潰しに掛かってくるはずだ……。一年生のとき、事故で俺がいなくなっただけで、甲子園の二回戦で惨敗するほど全員の

心に動揺が出てしまった。それから二年経っているとはいえ、三年生が動揺しないという保証はない)

大地は江頭の行動を警戒し、なんとしても彼の陰謀を止めなくてはいけないとバスの窓から景色を見ながらぼうつと考えていた。

薬師寺は大地の考えていることをなんとなく察してはいたが、あえて口を開くことはなかった。

そして次の日、決勝である海堂戦が始まる。

「え……？　江頭がい……だ……？」

海堂側のベンチには一軍監督の伊沢だけで、江頭の姿は確認出来なかった。



時は戻り、決勝戦前日。

海堂高校のエースである眉村は明日の決勝に登板するべく淡々と準備をしていた。

「眉村！ ナイスボール！ まだ続けるか？」

「ああ、あと十球だけ調整をして終えよう」

一年生から特待生としてバッテリーを組んでいる眉村と米倉はブルペンで最後の調整をしていた。

最後の十球を終えて、クールダウンをしていたときに米倉が口を開く。

「海堂野球部、このまま決勝に出場して大丈夫なのか？」

「……………さあな。俺は明日の決勝で勝つことしか考えていない」

眉村は一切動揺していないような冷静な返事をする。

海堂高校野球部の首脳陣は慌ただしく動いており、それが野球部の生徒達に少なからず動揺を与えていた。

「そうね、あなた達は気にせずに試合に集中しなさい」

「早乙女監督……………」

会話している二人の前に現れたのは、早乙女静香二軍監督であった。

後ろには兄である早乙女泰造と海堂高校スカウトの大貫もいた。

「で、でもあ、あんな動画が表沙汰になるとなったら、海堂野球部が公式戦に出て良いはずがないんじゃないか……………」

不安そうな米倉。

しかし静香は腕を組みながら冷静に返事をする。

「大丈夫よ。前も話したけれど、そこに関してはすでに確認済みだし、今後どのような報道がされてもあなた達には何か被害が来ないように細心の注意も払っているわ」

「そうだ、海堂も色々動いているんだから、気にするな」

「大貫さん……」

「おう、眉村。久しぶりだな。調子はどうだ？」

「ええ、いつも通りです」

眉村健と大貫は眉村が小学校時代からの付き合いであり、当時ドッジボールチームにいた彼の才能に気付き、海堂中学にスカウトしたという経緯がある。

そこからは大貫は眉村をそれとなく気にかけており、たまに顔を出しては様子を見ていた。

「そうか。明日は聖秀高校が相手だが、勝てそうか？」

「……大貫さん」

「ん？ なんだ？」

「勝てそうか、ではなく海堂は勝ちます。今までは対戦機会が無かっただけで、海堂を逃げて他の高校にいった奴らに負けるわけがありません」

「そ、そうか……それならいいんだが……」

周りからは冷静に分析しているように見えているのだろうが、大貫からするといつになく闘志を剥き出しにしているように見える彼にいつになく不安を覚えてしまう。

実際に海堂と聖秀が対戦するのは、聖秀が野球部発足してから初めてのことである。

いつもは帝仁高校が海堂の前に立ちふさがっていたのだが、今回はその帝仁を準決勝で聖秀が破っているため甲子園出場までは聖秀に勝つだけなのだ。

聖秀高校のメンバーはかつて眉村と同じ海堂高校特待生に選ばれたメンバーであることは三年生の野球部員であれば誰もが知っていた。

「奴らは逃げただけだ」という言葉を鵜呑みにしている部員も多く、二軍や一軍の設備で練習していると、この最高の環境を捨ててしまった彼らに対して軽蔑と見下す以外の選択肢は無かった。

しかし、今回海堂野球部内に公表された動画がきっかけで動揺している生徒も少なくない。

それは、三年前の海堂野球部セレクションの一部の内容であった。

すでに追放処分となったが、その問題の発端となった動画にはある男の、およそ当時の中学生男子に対して行うべきではない差別と内容であった。

いや、それはいち大人として行ってはいけない内容だった。

「^{江頭}当事者はもういないわ。あとはあなた達が今までの練習で培った実力を發揮して明日の決勝を勝ち抜くだけよ」

「^{ここ}数年遠のいている『常勝海堂』の名を改めて取り戻してくれ」
 そう言うと、練習場をあとにする静香達。

その場に残された眉村と米倉は明日の聖秀高校戦の不安を残しつつ、クールダウンをして寮の部屋へと戻っていった。



神奈川県大会決勝。

江頭がいよいよ始まった聖秀と海堂の試合は先発の本田大地と眉村健の投手対決になると思われていた。

両投手ともに実力としては拮抗しており、いかに投手を打ち崩すかが鍵となる——
 —はずだった。

「聖秀また打ったアアア!! 佐藤がガッツポーズしながらグラウンドを周っております
 ! 今日この眉村は一体どうしたのか、精彩を欠いております!」

バックスクリーンをちらりと見た眉村は右手で帽子の鍔つばを触り、うつむき加減で小さ

く笑っていた。

八回で七失点。反して海堂が入れた点数は眉村が三回裏に叩き込んだホームランの一点のみである。

帝仁高校との試合の結果を見れば、今までの聖秀とはレベルが違っていることは分かっていた。

しかし、それでも今の自分であれば必ず抑えられる自信があった。

150 km を超える速球に四つの変化球。特に高速シュートに関しては、プロの選手でもなかなか打てるものではないと思っていたくらいである。

(考えが甘かった……ということか……)

米倉や静香に対しては、あれだけ強気な発言をしていた。

不安もあった。いつものごとく試合前にトイレに籠り、ドヴォルザークの交響曲九番を聞いて集中力も高めていた。

実際は緊張でお腹がゆるくなるのを隠すためであるのは誰も知らないことである。

いつものルーティーンを淡々とこなす。

練習を含めて彼自身が出来ることがは全てやり、そのために最高の環境を選んだつもりであった。

その環境を捨てた本田兄弟や佐藤達に対して、眉村は他のチームメイトが抱く苛立ち

よりも、憐れみの感情を抱いていたというほうが正しかった。

その方がより見下していると言われてもおかしくはない。

しかしその見下していた聖秀高校野球部に完膚なきまでに打たれているのは眉村本人であった。

屈辱以上に諦めの気持ちで笑っていたのかもしれない。それは彼にしか分からないことである。

続いて打席に立つのは本田大地。

この試合で眉村に打たれたホームラン以外にはヒットを一本も許していないという眉村とは真逆の成績を残していた。

——諦める。俯いている眉村の脳裏にその言葉がよぎったとき、彼の目の前に誰かがいる気配を感じる。

「米倉か……俺なら大丈夫だからもど——」

顔を上げた眉村の前には、本田大地が立っていた。

「打球フォームが崩れてるぞ。そのまま投げたら怪我をするから気を付けろ」

それだけ言うと、バッターボックスに戻ろうとする本田大地。

その大地に眉村は「なぜ……？」と問いかける。

すると、振り返ることなく本田大地はその問いに対して口を開く。

「俺は将来好敵手になるであろう眉村と、今も悔いなく全力で戦いたい。その方が野球は楽しいだろ？」

最後の言葉を発した彼は振り返ると、笑顔を眉村に見せてそのまま打席へと戻っていった。

常識外れの行動を取った本田大地に対して、主審からは厳しい注意が入り、彼は平謝りをしていった。

(……フツ。その方が野球は楽しいだろ……か……)

眉村は彼なりの事情があつて野球をやつており、もちろん野球は好きだったが本心から楽しんでるかというところでそうではなかったのかもしれない。

そしてこれだけの点差を付けているのに、アドバイスマスまでするなど対戦相手を見下した本田大地の行動は失礼な行為だと捉えられても不思議ではない。

しかし、眉村は不思議と嫌悪感を抱くことはなかった。むしろ逆である。

小さく深呼吸をすると、後ろを向いて各ポジションにいる選手を見る。

今までそんなことをしたことがなかった眉村に対して海堂メンバーは驚くが、彼に励ましの声を送り始める。

「眉村！ 打たせていこーぜ！」

「むしろ三振とつても大丈夫だぞ！」

「そうだ！　ここで抑えてあと二回で逆転するぞ!!」

各選手の声を聞いて、眉村は右手で帽子の鍔つばを触り、うつむき加減で小さく笑う。その行動は先程とは全く違う意味だった。

(本田大地……不思議な男だな……)

打席で構えている本田大地を見て、眉村は軽く息を吐くとスイッチを切り替える。

その威圧感は二年半一緒に野球をやっていた米倉でも抱いたことがないものである。そしてワインドアップから渾身のジャイロボールを投げ込むのだった。



〈試合終了！　神奈川県大会決勝は7対1で聖秀高校が勝利し、三年連続で夏の甲子園出場を決めました!〉

本田大地が海堂の三番打者を三振に抑えて試合終了となった。彼の海堂戦の戦績は九回一失点の完投勝利である。

三回に眉村に打たれたホームラン以外はヒットを打たれることもなく、完璧に抑えていた。

(完敗……か……)

眉村は高校最後の公式試合を終えて、負けた悔しさもあつたが晴れやかな気持ちも抱いていた。

「眉村」

彼を呼ぶ声がして振り返ると、そこには本田大地がいて、彼はおもむろに左手を差し出していた。

数瞬の間の後、握手を求められていることに気付いた眉村はそれに応じることなく自身のチームのベンチへと向かおうとするが、立ち止まると振り返ることなく口を開く。

「次はプロの世界でリベンジだ。次こそは負けない」

「……そっか。プロで、か……」

誰にも握られることがなかった左手で後頭部を搔いた本田大地を見ることなく、眉村はベンチへと歩を進めるのであった。

第九十六話※

九月。海堂高校との決勝を終え、甲子園出場を決めてから一ヶ月半の月日が経とうと
していた。

大地達三年生は聖秀高校の野球部を引退し、それぞれがそれぞれの進路について悩み
始めていた。

薬師寺はプロ志望を出しており、いくつかの球団からアプローチは受けているもの
の、明確にどこへ行きたいというところまでは決まっていなかった。

「おい大地。お前はどこの球団に行きたいとかって希望はあるのか？」

「んー……そうだねえ……」

「この話題になるといつも話を逸らすな。お前ならどこの球団でも一位指名で行けるだ
ろ？」

「んー……そうだねえ……」

「……ちっ。お前とプロで対戦したいのは眉村だけじゃねえからな。それだけはちゃん
と覚えておけ」

まだ暑さが抜けきらない九月に、教室の窓際の席で肩ひじをつきながら外を眺めてい

る大地に薬師寺は「お前とプロの世界で対戦したい」と告げる。

しかし、大地は誰に聞かれても進路をどうするかに関しては一切明確にしていなかった。

その曖昧な態度に薬師寺は多少のイラつきはあれど、更に口を開く。

「なんにせよ、お前が聖秀（せいしゅう）に誘ってくれなかったら、プロになったとしてもクソつまらない野球人生を送っていただろうさ……それだけは感謝してる」

「……ん？　なんか言ったか？」

「——ッ!?　なんでもねえよ！　次は移動教室だろ、先に行くからな！」

少し照れくさそうな顔をして、薬師寺は教室から出ていった。

その様子を見ていた大地はボソツと口を開く。

「感謝してるのは俺の方だよ……俺達のわがままに付き合ってくれてありがとな」

大地は外へと視線を戻し、微かに笑っていた。



「なあ寿也、これ分らないんだけど」

「ん？　どれだい？」

「この微分の問題なんだけどき……」

渡嘉敷は二学期の中間試験で赤点を取らないように寿也に数学の質問をしていた。

三年間野球漬けになっていたとはいえ、彼は毎回赤点を免れるかどうかレベルでなんとか過ごしていたのだ。

野球部を引退してからは、勉強を怠っていないところを見るになんとかして進学を考えているということなのであろう。

「……なんだけど、分かった？」

「ああ！　そういうことか！　助かったよ！」

「どういたしまして。ところで渡嘉敷はプロに行かないっていうのは本当なの？」

「あー……まあね。大学で野球をやってみたっていうのがあってさ、プロはそのあとチャンスがあれば行こうかなって思ってる」

「なるほどね、というか僕たちなら推薦で大学行けるでしょ？」

寿也は推薦での進学を考えていないのかと問いかける。

少し考えたあとに、渡嘉敷は頭を掻きながら口を開く。

「大学は推薦で行こうとは思ってる。でも最低限の勉強はしておきたくてさ」

「……ふふつ。そっか」

「な、なんだよ！」

「なんでもないよ。僕で良かったらいつでも聞いてよ」

寿也が微笑みながら答えると、渡嘉敷は笑顔で「その時は頼む！」と言つて自分の席に戻つて参考書を解き始める。

彼は六大学のいくつから推薦の話が来ており、どこかに行く予定なのだが勉強でも入学できるくらいの学力は持っていたということであつた。

引退したばかりの現時点ではかなり厳しいのだが、この数ヶ月で彼がどこまで伸びるか寿也は楽しみに思つていた。

（大地くんと吾郎くんはどこに行くのか決めたのかな……？）

大地と吾郎は進路をまだ誰にも話していなかつた。

それは寿也も例外ではない。彼自身は薬師寺と同様にNPBのいくつかの球団から声が掛かつており、どれも悪くない感触だったため、プロ野球の世界に行くのも悪くないと思つている。

また、大学にも興味がないわけではない。幸いにも佐藤家は父親の事業も安定しているため裕福であり、寿也が進学を希望したところで問題はない家庭環境なのである。

「どうした佐藤？」

「大場」

最近少し悩んでいる様子を見ていた大場が寿也に声を掛ける。

「僕も進路をどうしようかと思ってね」

「ああ、それはそうだよな。佐藤なら選り取り見取りだからな」

「そんなことはないけど……」

大場はプロではなく、推薦で進学先も決めており、早いうちに大学の練習にも参加することになっていた。

周りよりも少し余裕があるためか、進路に悩んでいる生徒に声を掛けていることが多くなっていた。

勉強に関してはあまり得意ではないが、人の話を聞くのが好きなのか、性別に関わらず相談されることも増えている。

「……できれば本田兄弟と同じ進路が良い」

「——ッ！」

「だろ？」

大場は寿也の考えを見抜いているかのように口を開き、本心を当てられた寿也は驚きの表情をする。

「……降参。そうだよ。でも二人とも頑なにどうするかを教えてくれないんだよ」

「そりゃありトルから一緒なんだからな。お前にくらは言っても良いだろうに」

「……リトルじゃないよ」

「ん?」

「小学校に入る前から僕達は一緒に野球をしていたんだ。それこそ彼らの亡くなったお父さんも一緒にね」

寿也は懐かしそうに当時の光景を思い出していた。

初めてグローブを付けたとき、吾郎からのボールをキャッチしたときの感動。

「……うん、やつぱり決めた」

「進路か?」

「うん。大場、ありがとう。助かったよ」

「いや、手助け出来たなら良かったよ」

寿也は大きく伸びをすると、スツキリした顔で教室をあとにした。



田代、内山、宮崎、藤井は教室の隅で机を寄せ合って必死に勉強していた。

「やつべ、これ分かんね。宮崎教えてくれよ」

「無理! 俺も余裕ないんだよ! 本田兄弟、本当に野球漬けの三年間にしやがって!」

プロ志望を出しても指名されないと分かっている四人は大学進学のための勉強をし

ていた。

ずっと野球の厳しい練習をしていたせいで勉強する時間が減ってしまい、宮崎ですらも成績を落としていたのである。

「このままじゃ浪人するしかなくなっちゃう！ それだけはなんとしても避けなさい」と

「俺んちは貧乏だから浪人する余裕なんてないからな。ああ、もうすぐバイトの時間だ……」

田代は厳格な父親を説得して高校野球を三年間やらせてもらった関係で、浪人だけは決して許されてはいなかった。

しかし本当のところは甲子園まで内緒で応援に来ている父親であり、一浪くらいは見逃すつもりであったことは決して田代に言うつもりはない。

内山も家庭の事情でバイトと勉強を両立しなくてはいけなく、お金の関係で浪人は避けなくてはいいけない状態だった。

「まさか甲子園行くだけじゃなくて、優勝するなんて思っていなかったからなあ」
「一年の時は何言ってんだよって思ったもんな」

「本当な」

「そんなやつらに唆そそのかされて最後まで来ちまった俺達も馬鹿だよなあ」

ペンを走らせる手を止めて、数週間前の出来事を思い出す。

「優勝したとき、めっちゃ気持ち良かったよな」

「ああ、家族みんなまで応援に来てくれたし、格好悪いところ見せないで良かったわ」

「いや、藤井は何回かエラーしたり、暴投したりしてただろ？」

「そうそう！ あおときは焦ったわあ！ まさかあんなところでヘマやらかすなんてな」

「う……うつせえ！ 甲子園は何回行っても緊張しちまうんだよ、あそこは！」

藤井の言い訳に全員が納得しつつも、彼をからかい続ける。

ひとしきり笑ったあと、そこに声を掛ける男子生徒がいた。

「お！ お前からこんなところで勉強してたのか」

「吾郎じゃねえか、どうしたんだ？」

「いや、お前らに用事があったてな」

「ん？ なんだ？」

「キャッチボールしたいんだけど、誰もいなくてよ。お前ら一緒にやろうぜ」

吾郎の言葉に驚く四人。

「いや、俺これからバイトだし」

「しかも今勉強中だったの」

「てかグローブとか持ってないから」

「まあまあ。少しだけでいいからやろーぜ。グローブは俺が持ってきたから」

そう言うと、吾郎が担いでいた大きめの袋からグローブを取り出して四人に渡す。

嫌そうな顔をした四人だったが、吾郎の純真無垢な表情を見てため息をつくくと、全員が席を立つ。

「言つとくけどちよつとだけだからな」

「俺もバイトがあるし」

「分かつてるつて！ サンキューな！ さあ野球をしに行こうじゃないか！」

笑顔で先陣を切る吾郎に渋々ついていく四人であった。



「あれで本当に良かったのかしら？」

家のベッドで横になっている佐々木は自分のしたことが本当に正しいことだったのかを考えていた。

(三年前にこつそり撮っていたアレが欲しいと言われて、渡してしまつたけれど……)

高校三年生になった佐々木は、中学三年生のときのことを思い出していた。

敵情視察とばかりに本田大地のことを追っていた彼女は、海堂高校野球部のセレク

シヨンを密かに見学していた。

そこで衝撃的な出来事を見てしまい、シヨックを受けることになるのである。

(こつそりと録画していたのがバレた時は本当に焦ったわ……)

そして数年の月日が経ち、ある日アイドルとして活動していた彼女の前に一組の男女——かどうかは定かではない——が現れ、当時の話をしているうちに録画していたことを思わず口走ってしまっていた。

驚いた彼女達に頭を下げられながらお願いをされ、テープを渡すことになってしまったのは仕方がない。

彼女の中ではそれが聖秀野球部を助けることになると聞いて、渡さざるを得ない状況だったことも否めない。

(聖秀野球部のためであって……べ、別に本田^あ大地^いを助けるつもりはなかったんだからね！)

ベッドで寝返りを打ちながら少しの間悶えていたのだが、冷静になり頬を赤く染める。

そして、これは彼女の転機にもなっていたようだった。

(不思議なのはあの出来事以降、私への仕事が増えつつあったような気がするのよ) 最初はただの違和感であった。

録画テープを渡した数日後にグループでのイベントに呼ばれ、ローカル局の定番に呼ばれ……そこから小さい箱ながらライブの数も増えていった気がしていた。

そして、全国局の放送でのリポーターの仕事をこなしてから彼女の人気は爆発した。所属していたアイドルグループではない、彼女自身の人気が発見されたのだ。

彼女はなぜか野球に詳しく、今年も甲子園では解説補佐のアイドル枠としても呼ばれ自身の高校の試合で各選手についての詳細な解説を行ったりもしていた。

この説明や解説担当とのやり取りが野球ファンの心も掴んだようで、野球に関しての番組で彼女が呼ばれることが更に増えた。

秋には高校球児を集めて世界と戦う『高校選抜』の中継リポーターも行う予定で、たった数ヶ月で彼女は謎の人気急上昇を果たしていた。

(マネージャーさんは「そういうこともあるんだよ」って言うてくれていたけど、本当かなあ?)

佐々木はアイドルにスカウトされてからずっとレッスンを行っており、最初は「下積みで何年もやるのが当たり前だ。初めから人気が出ると思うな」とずっと言われていたのもあり、この数ヶ月でここまで忙しくなることがあるのかと不思議に思っていた。

アイドル活動を行いつつも彼女は勉強も怠っていないかったため、常に成績はトップ三

以内をキープしている。

正確には二位と三位を行き来していると云ったほうが正しいが。

そして彼女はアイドルを続けながら大学への進学を希望しており、マネージャーとしてはこの売り込み時に勉強で時間が取られてしまうのを危惧しつつも、有名大学に行つてもらつてインテリアイドルとして売り込んでいくというのも良いかと考え始めた。

売り込み時ということもあつて実際に彼女の今年の予定はほぼ埋まつており、土日に休みはなく、平日は授業後には収録やライブ、レッスンとなつていた。

嬉しいことにそれを嫌がつている素振りもなく、また、収録時に他の男性芸能人に声を掛けられてもサラツと躲しているというのもマネージャーとしては安心出来ることであつた。

(気を付けろつて言われていたけど、確かに結構声掛けられるよね……まあ私は芸能人とかあまり興味ないからどうでもいいんだけど)

元々好きな芸能人もおらず、芸能関係にはかなり疎かつた佐々木は有名な芸能人に声を掛けられてもマネージャーに教えられた情報以外は特に持つていない。

正直に彼女はまだ男性にそこまで興味がないのである。

その彼女がなぜ本田大地を執拗にマークしているのか、不思議なこともあるものであ

る。

（あーあ、結局聖秀が甲子園優勝しちゃうし、なんだかんだで本田大地はすごかったのよね。結局今だにアイツに定期テストで勝てないし!!）

甲子園優勝という嬉しい出来事もあったが、勉強に関しては思い出すとイライラが募る。

中学時代から大地に負け続けているので不満はどんどん溜まっていくのだ。

家族に八つ当たりしそうになったこともある。だが、それは意味がないと理性で抑えられる人間性も持ち合わせている。

（でもムカつく……!!　ムカつくムカつく!　なんで本田大地のことばっか考えなきやいけないのよ!）

そこで徐ろおもむに起き上がると、彼女は学習机に向かっっていく。

「次の中間テストは絶対に負けないからね!!　本田大地!!」

〈高校野球編　完〉

【本田大地高校卒業時ステータス】

◇投手基礎能力一覧

球速：158 km

コントロール：C+

スタミナ：C+

変化球：

ナックルカーブ：4

シュート：4

ウシケンスライダー：3

◇野手基礎能力一覧

弾道：4

ミート：C+

パワー：C+

走力：C+

肩力：C+

守備力：C+

捕球：C +

◇特殊能力

【共通】

ケガしにくさB + 回復C + 精神的支柱

【野手】

チャンスC + 対左投手C + 盗塁C +

走塁C + 送球C +

パワーヒッター 初球○ 守備職人

流し打ち 広角打法 威圧感

【投手】

対ピンチC + 対左打者C + 打たれ強さC +

ノビC + クイックC +

ジャイロボール キレ◎ 回またぎ○

リリース○ 勝ち運 低め○ クロスファイヤー

闘志